
再転の姫君

須磨彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再転の姫君

【Nコード】

N0443H

【作者名】

須磨彰

【あらすじ】

現世で一番、冥界に近い存在である主人公。男 女のTS要素物の転生物です。エンマ帳が間違っただけで記載されていたなんて知らない主人公、人生36回目の臨死体験であったのは霞という死神・・・これからどうなってしまうの？ボクの人生は大きな「転」換期を迎える。完璧・最強・天才の少女が愉快的仲間たちとおくる幸せな物語。

プロローグ（前書き）

初めての投稿なので文章が変だとかおもったらメッセージなどください。
誤字脱字報告もいただけると嬉しいです。

プロローグ

プロローグ

「13年間か、前回の第二次世界大戦対策会議よりは短いとはいえ、中央会議や鬼人をこれほど酷使する議題もこれで最後となってくればよいのだが・・・」

広い執務室の小さな机でその人物はひとつの黒い手帳のようなものを眺めながらつぶやいた。

手帳と呼ぶにはすこし大きく分厚すぎるそれは、何かが刻まれてあるが、それは文字のようにも見えるが、書かれている内容は分からない。

コンコン

「極東管理官様がおいでです。」

執務室をノックする音とともに、客人の来訪を告げる部下の声が耳に届く。

「そうか、中に入れ。」

そういうと、執務室の扉が開き、ひとりの男性が中に入ってきた。

「本当に、あの方には秘密になさるのですか？本当の目的とこの世界の危機について理解したうえでプロジェクトを進めた方がより安全なのでは？」

「よい、あれは何も知らない方が今回は計画がうまく進むのだ。不測の事態が起こった場合はお前の判断に任せる。わしは紫の準備を完璧にして待っていていよう。」

そういうと、椅子を引き立ち上がり、後に入ってきた男とともに執務室を出て行った。

机の上には黒い手帳がただひっそりとその役目が訪れるまで静かに存在を示していた。

プロローグ（後書き）

この再転の姫君は初めて投稿させていただいた作品です。

もしこんなのがいい、こんな風にして投稿してくれたら読みやすいなどありましたらメッセくださいませ。

初心者の稚拙な作品ではございますが、今後もよろしく願います。

元々読者として参加していたのでファンの作者様も多数存在しており、相互リンクをいくつかさせていたでいております。読者の皆様のお時間が許すならば、そちらの方にも足を運んでいただきたいと思えます。

チャプター 1

死神との会話

「ここは??？」

俺はあたりを見回し、今の自分の様子をゆっくりと確認した。

大通りの交差点上空、交差点の中は大きなトラックと泣きじゃくる男の子とそのすぐ隣にはぐったりとして横たわる青年がいた。

すぐに救急車が呼ばれたようでサイレンの音が近づいてくる。

「どいてください。」

救急隊員は男の子と青年を確認すると、男の子は軽傷を負っているものの、元気なようなのでそのまま乗せ、青年は意識がないようので心肺蘇生を始めた。俺は緊急事態にゆっくりと近づいていき絶句した。

「俺が倒れている?」

今、心肺蘇生を受けている青年は事故の影響で傷だらけになっているものの間違いなく俺だった。

21年間見てき俺の顔を、鏡を通してではなく、まるで他人のようにして外から眺めるのは嫌な気分だった。

心肺蘇生を一通り終えたのか隊員たちはタン力で救急車に乗せると病院に運んで行ってしまった。

「俺、死んじゃったんだ。」

ゆっくりとつぶやくと、後ろから声がかかった。

「大正解！！蟹津和也かにつかずやは12時24分をもちまして、死んでしまいました。」

交差点の上で浮遊していた俺の後ろからいきなり声がかかり、驚いて振り向く。

そこには和服姿に、赤い髪をポニーテールにして長く後ろに垂らし

ており、身長よりも長い杖をもった女性がこちらもまた空中にゆったりと立っていた。

「だれ？というか、人の死をそんなはっちゃけた雰囲気と言わないでもらえるかな？」

「あら、冷静ね。死んじゃうとパニックになる人が多くてカウンセリングも兼ねて訪れるから明るく登場するのはいつものことなのよ。」

「ああ、つまり死んだことを理解してもらったために話がしやすいように気さくなキャラを演出しているってことなんだ。」

「そうそう、だからこのキャラは営業用なのよ。」

「冥界の番人がうそついてもいいの？」

.....

「なんで出会って数秒で状況を認識するだけじゃなくて私の性格まで分析するかなあ。」

「まあ、これで鬼人の人に会うの三人目くらいだから仕方ないさ。」

「そうなのよね。なんであなた毎回鬼人と出会うほど死にかけるのに生き帰っちゃうのよ。」

「毎度偶然が重なって生き帰ただけで俺は何も特別なことはしてないぞ。」

ここで、女性は空中に手を伸ばすと何かをつかむような動作をしておもむろに手帳のようなものを取り出した。

これも毎度のことなので俺はさほど驚きもしない。

「エンマ帳によると、21年と8カ月で臨死体験36回で、初めては10歳の時に川で溺れた友人を助けるために溺死しかけ、引率していたの教師が心臓マッサージをしてくれたため友人と共に一命を取り留める。とあるわね。」

「ああ、あの時^{こいつ}浩太は泳げないのに深みにはまっちゃってさ。

パニックになって足が着く所まで来てもあばれてて、油断した時に一発もらっちゃって水の中に沈んだ時はもうむりかなあっておもっ

たね。」

このような会話も35回目ともなると自然になってくる。

鬼人の人たちは俺が臨死体験をすると毎回俺が蘇生するまでの間俺の身の上の話を聞いたり、自分たち鬼人の仕事の話をしたりして俺の相手をしてくれるのだ。

「ところで、あなたの名前は？」

「ああ、私は霞^{かすみ}よ。霞様でもカスミンでも自由に呼んでね。」

「わかった。霞さん。」

それで今回もこうして話してるってことは前の洋司^{ようじ}さんや未緒^{みお}さんみたいに蘇生の手続きをして臨死経験の記憶の抹消をして生き帰るの？」

鬼人の人たちはそれぞれ担当地域があり、洋司さんは初めて出会った鬼人で、見た目は30くらいのナイスミドルだ。

大学に進学して一人暮らしを始めるまで、旅行中の臨死体験などを除くとほとんどこの人にお世話になったし、とても優しい人で俺は結構したっている。

未緒さんはバリバリのキャリアウーマンといった様子で、大学に進学して都心にうつってしまったので担当地域がかわつたらしく、しかも人が多ければ仕事も多いらしくいつもテキパキと任務をこなしている人だった。

「いきなり、選択肢の斜めをいくとは……まあいいわ和也くん。

洋司様や未緒から聞いてると思うけど、あなたは特別だから臨死時の記憶を上手に調節してこうやって魂が肉体から離れたら記憶を取り戻す様にするのが普通ね。」

これには深いわけがある。初めのころは毎回記憶を全て消して現世に戻っていた俺のだが、その数があまりにも多くなってくると、洋司さんは毎回パニックを起こしている俺を憐れんで、俺を救う手を考えてくれた。

田舎の担当の鬼人とはいえかなりの権限をもっていたらしく、冥界に掛け合つてある程度の記憶を臨死体験と同時に回復できるようにして、できるだけ俺の負担をすくなくできるように処置してくれたのだ。

当時まだ幼かった俺は洋司さんの優しい心づかいに感謝し、生き帰るまでの時間を泣かずに過ごせるようになったのだ。

「洋司様の心優しい配慮のおかげで冥界ではあなたが臨死体験をするときは丁寧に扱うようにと命令が出たくらいなのよ。」

未緒さんと洋司さんの敬称の違いや明らかに語っているときの雰囲気がおかしいので尋ねてみた。

「霞さんって、洋司さんのこと好きなの？」

「ば・・・あなた、そ、それは・・・」

分かりやすい反応をありがとう。

鬼人の方々も人間とは全然違うが冥界で生きており、恋をしたり、家庭を築き子孫をのこしたりするのは同じだと洋司さんから昔おしえてもらっていた。

そして洋司さんは俺からみてもとてもいい人で、仕事もできることからモテるだろうことは察していたが、霞さんも洋司さんのナイスミドルな微笑みの虜の一人らしい。

「洋司さん、この前里帰りした時の臨死体験の時、俺につきそうところが減ったから仕事が暇になった。みたいだから今度デートにでも誘ったら？」

これは事実で、通常の死亡と違いいろいろな報告書が必要となる臨死体験者の発生はそれだけで激務と呼べる状況だ。

俺の場合は特別な記憶操作が必要でしかも実家周辺で臨死体験をした時はいつも洋司さんだったことを考えてもかなり広い範囲を担当している様子なので洋司さんの実力のすごさが分かるというものだ。

「そうなのよ。あなたが思っている以上に洋司さんって仕事が忙しくってデートに誘ってもほとんど都合がつかなかったのよね。」

「それは悪いことをしたね。じゃあこれからは少しは仲良くできるね。」

「ところが、そうでもないのよ。」

「え？だって洋司さんも未緒さんもこんな臨死体験をするのは俺の他には2000年も前に一人いたくらいだって……」

「そうなのよね。でもイエスの場合は特殊な理由があったから鬼人はあんまり関与しないで自分の力で死んだり生き帰ったりしていたから冥界の仕事が増えることはなかったのよ。」

あなたの場合は本当に偶然だけで臨死体験をしまくるんだからどうしても鬼人の仕事は増えちゃうし、今後大学をでたらあなたは実家の方にもどっちゃうじゃない。」

「そっか、ここでの記憶は無いからどうしても大学卒業後も通常の生活をしちゃうと実家にもどっちゃうってまた洋司さん激務になっちゃうんだね。」

「あんだね・・・一生のうちでも臨死体験なんて1回もしないのが普通なのに半年に一回は必ず、短いときには週に二回も臨死体験する生活のどこが通常の生活なのよ。」

「しょうがないじゃん、エンマ帳に全部書いてあるんでしょ？入院費は保険にはいつているから大丈夫だし、というかむしろ収入の方が多いし、洋司さんに聞いた話だとどんな理由であれ記載後のエンマ帳の改ざんは最高レベルの大罪であり冥界のトップですらできないんでしょ？」

「はぁ・・・こんなに冥界について詳しい人間なんてあなたくらいなものよ。」

確かにエンマ帳の改ざんは大罪だし特に寿命などの命にかかわることとはたとえ冥界のトップであっても改ざんは大罪以前の問題で不可

能よ。」

「うん、ということで今後も霞さんの担当地域で臨死体験した時はよろしくおねがいします。」

「ああ、私担当地域なんてないわよ。」

「え？どついつと？」

今日は大学のサークルの用事で少し遠くまできていたので、あまり距離が離れていないとはいえ末緒さんの担当地域から外れてしまったのだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

霞さんの様子をつかがうと、少し言い出しにくそう、でも何かをいわなければと思いをめぐらせているのがわかる。

「これは、まだ決定事項じゃないから落ち着いて聞いてほしいの。」

前置きをいれるあたりが逆に緊張を誘うが、一生懸命なので俺はゆっくりうなずく。

「順序だてて説明するわね。あなた、和也くんは250歳近くまで

生きて、その間に臨死体験を約700回もすることが決まっているわ。」

「おい、エンマ帳の内容は門外不出でたとえ記憶がなくなるとしても一般人の俺には教えちゃいけないことになってるんじゃないの？」

そうなのである。

俺もさすがに何度も臨死体験をするので洋司さんや他の鬼人の人にエンマ帳の内容を質問したことがあるが、その都度“教えられない”の一点張りだったのに、霞さんはそれをいきなり暴露した。

「本当に今回は特別だから、いいのよ。」

要領を得ない説明だが、それについてもきつと後々説明してくれるだろうとおもいとりあえず先を促しておく。

「ええ、本来エンマ帳は自我をもつ人間にしかなく、その他の生物は死ぬと冥界に迷うことなく迎えるシステムが存在しているのは知っているわね？」

俺はまたうなづく、幼いころから洋司さんが会話の種として鬼人の

仕事について色々おしえてくれたので機密事項でもなければ俺の鬼人や冥界に対する知識は人間で一番なのは間違いないだろう。

本来の臨死体験者は鬼人によって夢を見せられ、その夢はその地域によっておおむね決まっているため三途の川などの伝承の真相だったり、臨死の時間が短い場合は夢を見せないため幽体離脱なんて話があったりすることなど、本来は知らないであろうことまで俺はかなりの知識をもっている。

「それで人間のために必要とされたエンマ帳はおおむね良好に作用してくれて、自我をもつ人間が冥界に行かないで現世に、留まつたり、冥界を認知した人によって不要な混乱が起きることを防いでくれているわ。」

「まあ多少の情報漏れはあるけど、基本みんな冥界なんて信じていないもんな。」

「エンマ帳ができて1000年近くなるけど、昔ほど冥界を知る人が減ったことよってスムーズな輪廻が可能になって鬼人は現世におりなくても冥界だけで過ごせるようになったわ。人間の作った紙とか印刷技術ってのは、本当にいいものね。」

「ペンは剣よりも強いからね。兵士ひきつれて無理やり連れていくんじゃないって記憶操作や結界による情報保護だけで争いが無くなつて本当によかったね。」

「.....」

「あんだ、詳しすぎるから。まあいいわそれよりもエンマ帳のことよ。本来人間にしか必要のないエンマ帳なんだけど、あまりにも利便性が高く、しかも最近はデータ化が進んで仕事が各段に楽になったために暇を持て余した鬼人がいたのよ。」

エンマ帳もITの時代に突入したらしい。

「それで、今までエンマ帳を必要としなかった種族もこの際だからエンマ帳による管理をしても良いのではないかということになって、まず初めにもっとも現世において重要となっている植物からエンマ帳の作成をしようとしたのよ。」

自我をもっていそうな生物がもっといそうなのに植物を先にはじめたのには少し驚いた。

「まあ実際、植物はほとんど必要なくて、もっと先にエンマ帳が必要な種族は多いんだけどね。暇を持て余した神々の遊びよ。」

「おいおい、そんなことまで俺に話したら、霞さん鬼人最高裁判にかけられるんじゃないか？かなりの重要機密が一般人である俺にもれてるぞ？」

「大丈夫よ。私はエンマの娘だし、今回はそれらの中央の権力満場一致の依頼でもあるんだから。」

中央会議に一般人の対処が議題としてあがったのも、あなたがはじめてなんだから光栄なことなんだからね。」

サラリと冥界で一番偉い人の称号とか、冥界でもっとも偉い人の集まる会議などが出てきて、俺の頭はパンクしてしまいそうだ。

「それはおいといて、その植物のエンマ帳がひとつ手違いで人間のエンマ帳に混ざってしまったのよ。」

おかげで寿命は長いし人ではありえない様な情報が記載されてしかも人としての効果をもったエンマ帳が出来上がっちゃったってわけ。

「

「ということ、俺は植物人間ってことか？」

「……」

「どんまい」

優しく肩を叩かれた。

違うんだ、けしてシリアスな雰囲気やあまりにもすごい話にしり込みしてパニックになってこんなことを口走ったのではいけない。無いはずさ……

「まあとにかくよ。冥界の研究者や偉人たちが洋司様の報告のおかげであなたのエンマ帳の不備を認知しているのよ。」

それで冥界のほぼ全ての機関が対応について話し合った結果あなたの今後の身の振り方の方針が決まったから、エンマの娘である私が直接あなたに接触してきたわけよ。」

「え？じゃあ対処方法が見つかったってわけ？」

「ええ、あなたが8歳の時に会議が招集されてからだから13年もかかってしまったけどね。」

二種類の選択肢から最後にはあなた自身に選んでもらうことに決まったわ。」

「13年という不吉な数字は置いておくとして、その二種類っていののは？」

「まず、一つは簡単よ。今までと同じように生活するだけね。ただし、さつきも言ったように、あなたは今後250歳まで生きるし、700回も臨死体験をすることになるわ。」

だから冥界は250年間ほぼフル稼働で働いてやつと基本業務だけが回るといふエンマ帳ができる以前よりも過酷な状況に陥ることになるし、その間は洋司様のような素敵な方が灰色の生活をおくることになって、鬼人の女性の約70%を敵に回すことになるわね。」

鬼人の女性の70%は言いすぎだと思うが、エンマの娘で割と権力とかもっていきそうな霞さんににらまれるだけで、すでにかなりの絶体絶命の状況になるのは間違いないだろう。この案はあまりよろしくないようだ。

「じゃあ、もう一つの見逃しは？」

「もう一つは、冥界の再転の宝玉お宝玉を使ってもう一度女の子として生まれなおすことよ。」

「へ………?」

あまりにも簡素な説明に間抜けな声が出てしまった。

再転の宝玉とは、世界にかかわるような出来事があったときに、鍵となる生物などを転生し直して世界をやり直す宝玉で、洋司さんの話では、ヒトラーの身長が低かったのは再転の宝玉を使って世界そのものをやり直したおかげらしい。

もし再転の宝玉を使わなかったら、地球は焦土と化し生命のいない星になっていたらしい。寿命などは書き換えることはできないが、どうしてもという場合は再転の宝玉を使い、最も世界の理に反しない方法を取られ、それによって本来の寿命が変化することがあるがそれは寿命そのものを書き換えたわけではないので許されるという。

法の目をかいくぐる悪徳政治家のようなことができるのがこの宝玉なのである。

「驚くのも無理はないから説明するわね。再転の宝玉の使用条件は、知っているわね？」

世界の危機となるときで、かつ再転の宝玉を利用して世界が救われる状況にあり、前回の再転の宝玉の使用から少なくとも20年は経過していること。

そして最後に世界の理を壊すような行為を行わないこと、以上よ。」

「再転の宝玉については知っているよ。一番最近つかわれたのが50年以上前だったことも。」

でも、他の条件は全部だめなんじゃないのか？」

「そうでもないのよ。さつきも言ったけど250年も冥界の業務が凍結するのは十分な世界の危機よ。」

女の子に生まれ変わってくれるとシミュレーターによると臨死体験がなんと人生で、36回で済むのよ、そのかわり寿命が400年に伸びちゃうけど、400年なら鬼人とそんなに変わらないから、36回目の臨死体験をする45歳の時に冥界で保護することができるのよ。」

つまり今回の臨死体験と同じ時ってこと。」

「いや、確かに世界の危機ってところはわかった、さらになんで今提案されたかとかその他諸々の事情もなんとなくつかめた。」

ただ、俺が女で生まれるのって世界の理からかなり反しているんじゃないのか？たしか雌雄の決定ってかなりの重要事項にはいつていたはずだよな？」

「ほんと、無駄に詳しいわね。まあ洋司さんの説明が丁寧で覚えやすいのもあるでしょうけど。」

霞さんの洋司さん鼻肩はかなりのようだ、これは本格的に第一の選択肢は選びにくいぞ。

「あなたの場合は、どちらでもよかったのよ。というか正確に言うならば植物のエンマ帳がまわってきたんだから本来どちらも持つていて、人間に生まれるために便宜上男にただけだから。」

あなたが望むなら両性具有なんてのもできるけどそうすると寿命が少し伸びるし臨死体験回数もそこまで減らないから今回の場合は女性になるのがベストね。

決められたものを変える必要がないため世界の理を最も守った形が“女性として生まれ変わる”となるわけよ。理解したかしら？」

第一の選択肢を利用することの弊害もわかった。

再転の宝玉のことにしてもある程度理解している。冥界の事情や今後のことを考えると俺が女として生まれなおす方が今の説明を聞いた限りでは周囲に迷惑をかけないことも理解できた。

しかし、

5分ほど時間をかけてじっくり考えてやはり変わらない答えを口に

した。

「俺さ。今の人生確かに臨死体験しまくりで波乱万丈だけど気に入ってるんだよね。男だからこそ仲良くなれた友人もたくさんいるだろうし、21年間で36回も死にかけててもすげえ大事におもってくれてる親友、いや、心に友って心友と言った方がしっくりくるよ。うなやつもいる。そいつと別の出会い方をする勇気が俺にはないから・・・」

「まって、その先はまだ言わなくていいわ。」

今回私が来たのは36回というシミュレーターで出された最後の臨死体験と同じ時に来たのと議決が多数の賛成から満場一致に変わったの以外にも、現世でのあなたの立場の変化にもあるの。」

「ん？冥界の理由以外にも、俺の立場の変化？」

「ええ、今回の事故は偶然病院の近くでの事故だったため応急処置が早く一命は取り留めるとはいえ、いろいろと変化があるし、蘇生までに14時間もかかるのよ。」

事故にあってから5時間くらいがすぎたからあと9時間くらいはあるから、その間にゆっくり考えられるから蘇生のための処置もあるから、明日の朝の4時までもう一度身の回りのことを確認してから答えてちょうだい。」

私も他に仕事があるから明日の朝4時にあなたの体の枕元にきてね。」

意味深な言葉を残して霞さんは自分の身長よりも明らかに長すぎる杖をくるりと回すと穴のようなものを作りそこに入っっていつてしまった。

俺は、基本的にそばに洋司さんとか未緒さんとか他の鬼人さんたちがいるものの臨死体験なれしているため魂だけでも自由にうごけるため、まず病院に行っって自分の体を確認にしに向かうことにした。

チャプター2

大切な人たち

「和也は大丈夫なんですか？」

和也が病院につくと、知らせを聞いて駆け付けたのか母の好美よしみが手術室の前で医者の一人に声をかけていた。

「御子息は、偶然病院の近くで事故にあったことで処置も早かったため今夜の峠をこえれば何とか持ち直すことでしょう。」

しかし、事故で全身を打撲しているので、息を吹き返したとしても、これまでのような生活を送るのは難しいかもしれません。」

今までもたくさんさんの事故などに巻き込まれてきた和也の体、それにより生命力は高まっていたので命を取り留めることはできるようだが、あまりにも酷使されたからだは今回の事故に耐えきれず、身体的なハンデを負うことになったようである。

「俺の立場の変化ってこれのことか、確かにこれは生活が変わるかもしれないな。」

まあ今後まだ600回近く臨死体験するんだから動けなくなるほどのものではないだろう。』

和也の読みは正しく今回は（・・・）左腕の骨折がひどく少し動かしにくくなるだけなのだが、
エンマ帳には今後の身体で動かなくなる個所がまだまだ記載されていた。

「母さん。」

好美の肩を抱くように立ったのは和也の父、利也だ。

「和也は何度も死にそうになりながらも生きてきた。きっと今回だって大丈夫さ。」

それに少年を助けるために飛びだしたなんて和也らしいじゃないか。和也を信じて待っていよう。」

このやり取りはもう何度も聞いたやりとりなのだろう。

和也も、その通りだとばかりにうなずいている。

それでも息子のことが心配なのだろう、好美はその場から動こうとはしなかった。

「少し、電話をかけてくる。家へ帰れとは今さら言わないが、座って気を落ち着けてまっているんだよ。」

最近では実家にいないからと母さんの方が心配しすぎてまいった。まっているんだから。」

そう言うと利也は、公衆電話の置いてあるロビーの方へ歩いて行った。

しばらく、好美の側にいた和也だったが、帰ってこない利也が気になり、ロビーの方へ向かった。

「ああ、それじゃあこんばんはこちらに泊って行くから、家のことは任せたよ。」

和也が利也を見つけるとちようど電話をかけ終わったところのようだった。

内容から家で待機している兄の武満たけみつだろう。

受話器を置いてすぐ戻るのかと思ったら、利也はもう一度受話器を持ちどこかに電話を始めた。

「あ、いつもお世話になっています。蟹津です。保険のことで相談したいことがあります。また息子が事故にあいまして、ええ、はい。え？どうということですか？」

毎回入院や手術というわけでもないが、今回のように大きな事故の場合負担は大きく、それらを毎回払うことはできないので、利也はこうして保険会社に連絡をいれているのだ。

「うちの息子が当たり屋のような、そんなことするわけがないですよー!」

いつもは温厚な利也が珍しく病院にも関わらずどなり声を上げている。

どうやら、あまりにも事故などの件数が重なったため保険のグレードをあげて収入の入るようなものに変更していたのだが、それが実は保険会社の思惑だった。

毎回保険金を払うのをやめる口実として多額の保険金を狙った当たり屋の詐欺だと訴えることによって契約の解消を迫っているようだった。

「はい、わかりました。では今回限りの契約ということで、できれば別の保険会社を紹介していただきたいのですが。」

これは意外と簡単なことで、訴訟内容など保険会社の間で連絡を取り合うことも多く、実はこうして紹介してもらったのもこれで3度目だったりする。しかし、

「そうですね、取引先でうわさに……」

当たり屋のまねごとなど噂がたてばどこの保険会社も厭うわけで、

全額補償ではなく、部分保証のところなら断られることはないだろうなどといったわかりきったアドバイスを残し、電話が終わったようである。

「はあ、とりあえず今後こんなことがあるとは限らないのだし、今回の保険が下りただけでもよしとしよう。」

前向きに考える利也だが、側で聞いていた和也はそのままには考えられない。

『今36回目だから今後664回も臨死体験するんだろ、そのうち今回みたいな入院費とかが掛かるのは今まで6回あったんだから六回に一回としても110回以上、それを全部負担するなんて絶対にむりだよな。』

お金という面でも和也の生活は今後大きく変化してしまうようだ。実際エンマ帳でたしかめたところ、元々蟹津家はかなりの資産をもっていたためなんとか捻出可能な額ではあるが、やはり法律改正と日本1長寿となつて国からの援助をうけられるようになるまでに、かなりの金額が必要となり、財政を圧迫することは避けられないようだ。

ロビーで和也が考え込んでいると、ずいぶん遅い時間になってい

た。
夜の10時を回ろうという時間に靴音がコツコツとなり、誰かがこんな時間に病院を訪れたようである。

和也が音のした方を振り返るとそこにはよく知った三人がいた。大学で知り合った彼女の恵美えみとそれを両脇から支えるように立っている竜りゅうと司しかただった。

恵美が彼女になつてから親友である竜や司とはよく遊ぶし、正直こ
ういう時に絶対にはち合わせてしまうので、お互いかなりの交流
が出来上がっていた。

もう36回目ともなると昔からしっている二人は比較のおちついて
いるものの、大学から知り合った恵美は眼を赤くし、今も二人に支
えられてやっとといった状態でロビーに着くと椅子に体をあずけま
た泣きだした。

「飲み物かってくるわあ。なにがえええ？」

司が言うと、竜は答え、泣いている恵美の分は司が選ぶ様子で自動
販売機の方に歩いて行った。

「そんなに泣かないで恵美ちゃん。和也は何度もこんなん乗り越え
てきてるやん、絶対大丈夫やって、また4人でカラオケでも行こな」

竜が声をかけると、いくらか落ち着いたのか少ししゃくりあげるのが減った。

「わた・・・し・グズ・もう・・・むりかも・・・」

嗚咽をあげながらもゆっくりと話したす恵美に竜と魂だけの和也が耳をそばだてた。

「こん・・・かいだ・・・って・・・ヒック・・・」

大学に入ってから臨死体験の絶えなかった和也は何度も恵美がこうして泣いているのだ。

和也は泣かせている自分になさけなくなりながらも、こんなに思ってくれる皆に感謝の気持をこめてお辞儀をしている。

「恵美ちゃん、俺と司は、なれとるんやわ、困ってる人見て巻き込まれて死にそうになっても結局また同じように元気になって繰り返し、馬鹿なやつやけどさ。」

そんな和也やから俺らはずっと心友やし、これからも心友なんや。」

「私は・・・そんな・ヒック・ふうには・・・なれない。」

実際2年近く付き合ってきたが、恵美は頑張ってくれた方だと思う。

この2年で6回も臨死体験を経験していて、そのたびに泣いている
恵美、自分の彼氏がこう何度も死にそんな体験をして平気でいられ
るはずがない。

もう、精神的にも限界だったのだろう。

「買ってきたよお。恵美ちゃんはお茶でいいやんねえ。」

三人分の飲み物をもって司が現れ、飲み物を渡されると恵美も少し
落ち着いたようである。

竜は司に礼を言うとおもむろに語りだした。

「これで俺らのしつとるだけで何回目やっけ？」

「30回は超えてるかなあ。」

「そやな。毎回人をかばったりばっかで、自分の過失みたい片手で
かぞえられるけどな。」

「うん、和也らしいよお。」

しばらく、和也の話で二人が盛り上がっていると、お茶と話で落ち
着いたのか恵美が話しかけてきた。

「二人は、怖くないんですか？和也さんいつ死んじゃうかわからないんですよ？」

「怖いよ。でも心友をやめたいと思ったことはないな。」

「竜の言つとおりだねえ。何度もこんなになるんは勘弁してほしいけどお、和也だしい。」

「そうですね・・・私、今日は帰りますね。」

いつもは和也が起きるまで三人で残っていくのに恵美は珍しく一人立ち上がった。

「恵美ちゃん、無理やったらええと思うよ。和也には俺からいつとくわな。」

和也も大事な心友やけど、今はもう恵美ちゃんも俺らの仲間やから、無理して彼女してなくてもええとおもっさ。」

「俺らこついつのなれてるからねえ。きにしんといてえ。」

和也は理解した。

恵美にはもう耐えきれなくなっていたことを、そしてそんな風に離れていく人たちを竜や司がうまくフォローして俺のために苦労してくれていたこと、三人にもう一度深く深く頭を下げる和也だった。

夜も遅いこともあつて結局恵美を車でおくつていくことになり、ロビーにはまた和也一人になった。

チャプター3

決断と記憶

『和くん、大丈夫かい？』

そんな和也に声をかけたのは、洋司だった。
隣には末緒さんも立っていた。

『二人ともどうしたんですか？』

『質問に質問で返しちゃだめだよ。まあ、今現世で一番の仕事は和くんの処置だからこうして和くんに会いに来るぶんには鬼人としては問題ないんだよ。』

『そう、ですか。』

ますます落ち込む和也に二人はそつと溜息を吐く。

『和也さん、私たち二人はとても大きな任務を抱えてここに来ています。』

未緒さんの改まったような真剣な声に和也はまなざしを向ける。

『霞様はまだ和也さんに伝えていないことが二つあります。それらを伝えること、そしてその補助のために私たちは来しました。』

『和くんは僕の裁量で冥界や鬼人たちの知識をたくさんもっているよね。そして今回は本来知ってはいけないことを伝えてしまった。この意味和くんならわかるね。』

『ええ、今度生き帰る時は記憶を消すんですね。』

『そうだ、もう十分大人になった和くんにこれ以上これまでのような処置を施すことはできないんだよ。』

もし万が一記憶の消去が失敗して冥界の情報が現世に流れては困るからね。』

和也は、こんな日があるのが何となくわかっていた。幼少である自分を守るためにとられた処置、そして本来知ってはいけないはずのことを教えられる。

そして今回のようにあからさまに冥界の権力者たちの姿が示された

ことで確信に変わっていたのだ。

『10年前に初めて鬼人のことを話してくれたときからこれは決まっていたんですか？』

しばらく、話し相手や遊び相手にはなってくれても、自分たちにとっては話さなかった洋司が鬼人についてや、特に再転の宝玉について話すようになったときのことを和也はおもいだしていた。

『正確には違うが、まあこのような事態を考慮していたのは事実だ。』

『そうですか。まあ仕方ありませんね。』

予想できていたこともあり、受け入れる体制の和也だった。先ほどの補助というのは記憶を消す作業のことだった。

普段と違う方法をとることなどから鬼人一人では怪しいので、三人で協力して行うのだ。

しかし、伝言はもう一つある。

『もう一つの伝言は、記憶を消去することが決定したため可能となっています。』

未緒は事務的に告げると、空間から霞がやったのと同じように一冊のエンマ帳を取り出した。

『あれ？それいつものと違いますよね？もっと分厚いのでは？』

『霞様から説明があつた通り、和也さんのエンマ帳は特別なものですので、普通の方のエンマ帳はこれくらいのサイズです。』

『こうしてみると、なんで間違えたのかわかりませんね。それで、そのエンマ帳は？』

『和くんのお母さんのエンマ帳だよ。』

驚きと疑問の顔を浮かべる和也に、洋司はゆっくりとしかし、しっかりとした口調で話します。

『寿命が短い分コンパクトなものもあるんだよ。寿命が長い人は項目が増えるからページ数を増やして分厚くなるんだ。そして和くんのお母さんは、もうすぐ死ぬ。』

ショックで固まる和也、何故このタイミングでこのような内容を伝

えられるのか、なんとなくわかってしまったために余計にパニックに陥る。

『そう、たぶん和くんが今考えている通りだよ。今までの心労が原因でお母さんは死んでしまっ。そしてシュミレーターの結果、女の子として生まれ変わればお母さんは30年は長生きをする。』

『そのシュミレーターの信憑性はどうなってるんですか？』

『もちろん誤差はあります。しかし、研究鬼人500名を投入しての今回の様な大規模なシュミレーションの場合誤差は0.1%ほどでしょう。』

特に前回までと違い研究考察だけでなくスーパーコンピューターの導入の結果も考慮しているためより確実性が高まっているので、今までのものよりもはるかに誤差は減り0.001%未満と推測されております。』

未緒さんの丁寧な説明により、和也の中でシュミレーターがどのように行われ、今現在のシュミレーターの正確さを実感させられた。ここまで言われると、和也も信じざるをえない状況になった。

今時刻は深夜の2時をまわったところである。和也は二人から離れ、手術室の前へと移動した。

そこには、恵美を送って戻ってきたのであろう竜と司が毛布にくる

まりながら、昼間の仕事で疲れているのだろう。利也が好美と寄り添うようにして眠っていた。

そんな中、好美は疲れた顔をしているものの、心配で眠れないのだろう。手術室の扉をぼんやりとだがしっかりと見つめていた。扉の上にある手術中のランプが変更され、利也が無事であることを確認できるまで眠れないのはよくあることで、そんな姿を和也はこれまで何度も見てきた。

しばらくその様子を見ていた和也だったが、魂だけの体を利用してそっと手術室にはいつていった。

『やあ、来たね。まだ霞は来ていないから何か話でもしようか。』

『はい、できれば教えてほしいのですが、転生後も臨死体験をするはずなのになぜ母の寿命は30年も伸びるのでしょうか？36回の臨死体験をするのは同じのはずですよ？』

『和くんならわかってるのだろう？簡単なことだよ。君は21年の間に36回もの臨死体験をしてきたが、今度の転生後は45歳の時に最後の36回の臨死体験をする予定なんだよつまり周期が開くからその分お母さんも心労を回復させられるんだろうね。』

特別サービスで教えてあげると、女の子になった君は今の君のような大事故で臨死体験することは少なく、臨死体験をしても結構す

ぐに回復するような軽いものになるようだよ。

まあそれでも普通の人なんかと比べたら冥界と最も近い人間であることには変わらないけどね。』

『そうですか。臨死体験36回はやっぱり普通じゃないのですね。ではもう一つ、俺は転生後も今外で待っていてくれる大切な人たちと同じように接していけるのでしょうか。』

『それは転生後の君次第だろう。君が大切に思うからこそ彼らも君のことを大切に感じているのだから。』

『ずるいですよ。俺がきいているのは、シミュレーターの話ですよ。』

『まったく、本当に特別にヒントだけだからね。男の子であっても女の子であっても君自身は変わらないものを持っているよ。』

ヒントと言いながらもほとんど答えのような話をきけて和也は安堵しているようだ。

和也自身の本質が変わらないのであれば、これまでのような関係が築けると言ったのは洋司自身であるのに、あえてそんなことを言うのだからこの人は憎めない。

『洋司様、確かシュミレーターの結果では……』

『それ以上は言っちゃダメだよ。楽しみが減ってしまうじゃないか。あ、でもそんな悲観的な結果にはならないから心配しないでいいよ。』

横から未緒さんが言った言葉がやけに気になるが良いことが起こるといふのだから和也は特に追及しなかった。

『さて、これ以上時間を使っても結果は変わらないだろうから答えを聞くわね。』

いきなり頭の上で声がしたので、和也はびっくりする。

『ふふ、驚いた？実はずっと和也くんの側にいたのよ。』

『ああ、エンマの娘がストーカーだったことに心底驚いたな。』

『再転の宝玉は冥界の中でもとても大事な宝だからね。今日は本当に使うべきか最終確認のために霞ちゃんはずっと和くんの側で監視していたんだよ。』

『洋司様、私のことを理解してくださっているんですね。』

『じゃあ結果は？』

『そうね、合格かしら、というか宝玉を使ってもよいというよりも宝玉をつかって幸せになってほしいような人物だと判断したわ。』

『そっか、ありがとうございます、ところで……髪の毛ぼさぼさになってるぞ？』

『きゃー！！どうして先にそれを言わないの。』

霞の洋司へ対するラブラブ光線もここまでくると引いてしまう。
手鏡を出して一生懸命髪を直すと、落着きを取り戻してひとつ咳を
する。

『ゴホン、というか和也くんのその最初からきになっていたんです
が、なぜか洋司さんと私と態度が違いすぎじゃないかしら？』

『私もそう思いました。私と初めて会った時も慣れているのかフラ
ンクな雰囲気だったのに今日洋司様と話されているときは、なんと
いうか、親しいのに礼儀正しいというか・・・』

『ずっと、俺のことを守ってくれた鬼人だからね。尊敬しているん
だ。でも未緒さんがないがしろにしているとかじゃないから心配しな
いでね。』

『ちよっと、私はどうなのよ。』

『』
『』
『』
『』

『洋司様あ、和也くんがいじめるう・・・シクシク』

『まあ再転したら、記憶も消えるんだし、あんまりきにしないでお
しうぜ。』

『あなたが言っても嬉しくないわよ。』

『あれ？そういうえば、俺の記憶が消えるのはわかってるんだけど、他の人はどうなるの？』

『はい、再転の宝玉はすべてのものの時間をもどしてしまうのでこの場合私たちの記憶も戻った時間分だけなくなると考えてよろしいかと思います。』

『あと、再転の宝玉を使う時は対象者の誕生前に変更届けを出すために力のある鬼人が一人は特別な空間にはいつて今のまま時間をもどすんだが、本来時のエンマかその子息がする任務なんだが、今回はエンマ帳の管理をしている僕が可能だから僕がすることになるんだ。』

『そっか、記憶云々というより時間がもどっちゃうんだね。じゃあ今度は未緒さんの幼い姿が見れるかもしれないね。』

『残念ながら私たち鬼人は寿命が長く成人すると一定期間姿が変化いたしませんので、和也さんの生まれる頃にはすでにこの姿です。』

『そうだったな。洋司さんも初めてあったときからあんまり変わっ

てないもんな。』

『鬼人は力量が高いほど寿命が長く成人期間が長いって教えてた。俺はもう300年近くもこの姿なんだぞ。』

『そっか、寿命が全然違うんだっただね。あれ？でも俺って寿命長いんだよね？』

『そうです。だからこそ転生後の世界では45歳の最後の臨死体験の時に記録上は死亡したことにして、冥界で保護するのです。いつまでも20代の女性がいたら現世での混乱を招きかねませんから。』

『ところで、再転の宝玉を使うような話の流れだが俺は、まだ一度もそっちを選ばないぞ？』

『え？そっかえば……』

『俺さ。今の人生確かに臨死体験しまくりに波乱万丈だけど気に入ってるんだよね。男だからこそ仲良くなれた友人もたくさんいるだろうし、21年間で36回も死にかけててもすげえ大事におもってくれてる親友、いや、心友っていったほうがしっくりくるようなやつもいる。』

『え？ちよつとまっつてよ。』

先ほどと同じセリフに焦って遮ろうとする霞。

『だから、再転の宝玉使っわ。』

その言葉に安堵する三人だった。

霞さんを先頭にして、俺と洋司さんが次に後ろから未緒さんと順番に再転の宝玉のおいてある広間へとはいっていく。

冥界で最も貴重な宝が置いてあるというだけあって扉なども嚴重に鍵がかかっていたが、今回は利用することを前提としていたため面倒な手続きなどは事前にすませてあったようで意外とすんなり中にはいることができた。

中に入ると、大きな透明で紫色の光がちりばめられた球体が中央にどっしりと構えて置いてあった。

俺はさっそくそちらに向かおうとすると、

『なにやってるの、あなたはこっち、あっちは洋司様が使う保存の珠玉よ。』

そついうと霞さんは続きになっている奥の部屋の隅の方にある台座の前に立った。

『え？じゃあ再転の宝玉は？』

『これよ。』

霞さんがおもむろに差し出したのは古くてボロボロになった木箱の中に綿を詰め込みその綿の中に大事そうに乗っかっている野球のボール大の黄色い石ころだった。

『あの・・・これはこれでとても綺麗なんだけど、あの紫のをみたあとでこれは・・・』

『ああ、本当は保存の珠玉なんかより大きかったらしいんだけど、過去に何度も使われて力を使った分だけ小さくなってしまっただけになっただけなのよ。』

『え？それじゃあ使わない方がいいんじゃないの？』

『心配しなくても大丈夫よ。過去に何度も使ったのは今みたいにシユミレーター技術が発達してなかったからだから、今の世の中じゃそうそう使うこともないし戻すっても20年そこらじゃそれほど力はいらないわよ。』

再転の宝玉は昔はかなり酷使してきたのであろう、まあエンマ帳ができるまではかなりの回数やり直さなければならなかっただろうし、世界の理を壊さない条件での再転はかなりの条件が必要だったに違いない。

そう考えると、20年という期間は宝玉を再生させるための期間なのかもしれない。

『たぶん、正解よ、宝玉は5年の再転までなら回復とほぼ同じにな

るわ、でもどうしても5年戻すだけでは済まないことが多いから酷使してしまうし、第二次世界大戦の時なんてヒトラーの身長を少し削るなんて方法洋司様以外誰も思いつかなくて何度も何十年も再転をくりかえしたからそれに比べたらほぼ確実に一回の再転で済む20年なんて大したことないのよ。』

『どうせ、俺の再転のついでに色々再構成したいものとかもあってそれらのついでだから20年ちよつとの再転気にしないんだろ?』

『相変わらず鋭いわね。その通りよ。洋司様はそのために再転後も忙しくなるんだから。』

『あれ?じゃあ俺を構う必要が減って暇になってデートに行く計画はどうすんだよ?』

『フッフ、本当は保存の珠玉を使う洋司様しかシミュレーターの内容は教えてもらえないはずなのだけど、こつそりお父様に教えてもらったのは再転後の洋司様の仕事は大変だからってことで、補佐にエンマの娘であり、麗しの乙女である私が抜擢されるのよ。』

『自分で麗しの乙女って・・・まあそれなら霞さんも大賛成なわけだ。色々不自然な洋司さんが選ばれた理由なんかがわかったぜ。』

『じゃあ始めましょうか、というかあなたがここにいる意味はあま

りないはずなのよね。なんでお父様たちはあなたをここに呼んだのかしら?』

『さあ? やっぱエンマ帳がおかしいから現世にできるだけいさせないようにとかじゃないか? でもそれならわざわざ宝玉のある部屋まで来る必要はないか。』

『まあいいわ。はじめるわね』

そういうと、霞さんは宝玉の側にある黒い四角いトランシーバーのようなものを手に取り各箇所安全確認と保存の珠玉にいる洋司さんの状態の確認をした。

俺はなんとなしに洋司さんの入っている紫色に光る保存の珠玉の方を見ると、そこには全裸の洋司さんの姿があった。

保存の珠玉は中に入れるようになっていて、紫色の液体の中にいる洋司は服を着ているときもナイスマイルだったが、脱ぐとすごいとはこのことで、引き締まった筋肉や体のラインは一種の芸術のようであった。

霞さんが鬼人の70%を敵に回すといっていたのもこの姿をみると納得出来るようなきがしてくるのである。

『洋司さん、今までごめんね。俺のためにたくさん話をしてくれ

てありがとう。』

『和也くん、最後に少しだけ伝えておくわね。再転後のあなたは冥界からの監視がつくことになっているわ。』

エンマ帳をいじるってことは今回の場合でもやっぱり世界にひずみが生まれる原因になりかねないとても大きなことなの。あなたがどのようにして生きていくか、どうしても冥界の鬼人たちにとっても重要なことになるとおもうわ。

だから今回多少今までの記憶を残したり、本来はあり得ない処置がなされてるの。中央会議での決定だから間違いはないとは思うけど、再転後の世界が幸せなものになるかはすべてあなたにかかっているから、気をしっかりもつのよ。』

霞さんは洋司さんラブがひどい所はあるものの、本当によくしてくれたし、選択の時ももっと俺を脅して無理やりという方法だっただけで、つたはずなのに、考える時間をくれ、そして導いてくれた。

俺は感謝の気持ちを含めて深くうなずいた。

『霞さん、俺もう一度生き帰ったらいい女になるぜ、再転なんて大がかりなこと実感わかないけど、たくさんの人たちが支えてくれたことは何となくわかる。きつと幸せになってみせる。』

『馬鹿ね。鬼人たちが過ごし易くするために決定された処置だっ

何度言わせたらわかるの？

でも、そうね、あなたもきつと幸せになってね。

たとえ男の記憶がある男女になっちゃっても。』

え？霞さん？それどういう意味ですか？

問いたださそうとすると、いきなり部屋の照明がおち、ふたつの宝玉だけが光りだした。

「ただいまより、再転の儀式を行使いたします。各鬼人はそれぞれの配置において祈りを始めてください。」

世界規模の大事業なのだろう、それでも過去に何度も再転の儀式とやらはなされてきたからか、鬼人たちも落ち着いた様子で目を閉じ心臓の前で手を組みだした。俺の目の前でも霞さんは再転の宝玉に向かって目を閉じていた。

こうしてみるとエンマの娘で冥界の中でもかなり力を持った鬼人であることが何となくわかる。

本来エンマがここで祈るであろうこともなんとなくわかったが霞さんなら大丈夫だと思わせる神々しさを感ぜさせた。

ピカピカ

再転の宝玉が光りだし、それが一気にあふれだすと俺は目がくらみ、あたり一面が真っ白の世界になった。

『めが、めがぁ。』

光の本流の中で俺は何かの声を聞いた気がした。

チャプター3（後書き）

キャプチャー3投稿させていただきました。

今日の朝、アクセス数を見てびっくりしました。あ、アクセスが1000件を超えている？

AKIは狂気乱舞しそうでした。

さて、前回までシリアス志向ではありませんでしたが、今回のキャプチャー3をもちまして、終了しようと思います。そして、投稿をもう少しペースをおとしたいとおもいます。

というか、現在13話くらいまでストックしているのですが、ほのぼのというか、コメディ風味というか・・・

まあ、基本がハッピーエンドをめざしているし、あまり重くならないようにとかんがえているわけで、”辛い人生を送ってきた人でも、頑張っていたら救いの手がさしのべられるんだよ”
”って感じがこれまでの三話で伝わったらうれしいです。

それでは本当にここまで読んでいただきまして、ありがとうございました。

チャプター4 (前書き)

第二部の開始です。

やっと主人公が転生しました。

チャプター4

産声と共に

「おめでとつございます。女の子ですよ。」

俺は気付くと、真っ白な布に包まれて誰かに抱かれていた。ゆつくり眼をあげると、そこには少し疲れたような顔をしているものの、何か満足したようなとても良いことがあったような顔をした女性がこちらにむかって微笑んでいた。

「はじめまして、私がおあなたのお母さんですよ。」

俺は何となく当り前のようにして聞いていた。この人物以外に自分の母親がいないことをまるで前から知っていたような、生まれてきてよかったと思えるような、そんな安心感がそこには存在していた。しばらくすると、俺は看護婦さんらしき人に連れられてベットに寝かされ、俺のことを見ようと大勢の人が現れた。

その人たちを見ても先ほどの女性が母親だとわかったような既視感のようなものを感じるものは数名しかいなかった。なんだろう、さつき母親の顔を見た時はあんなに当然のように受け入れることができたのに、他の人たちをみても、この人たちが俺の家族なんだといわれるまで実感がわかなかった。でも、皆の顔は笑顔であり、俺が生まれたことを喜んでくれていることがわかりなんだか温かいきもちにさせられた。

しばらく病院にいたが、母親も二人目の子どもということもあり、落ち着いた様子で結構すぐに退院した。車に揺られてついた家は、どこか古めかしく、でも「ここが我が家だよ」と言ってくれているような気がする場所だった。やっぱり、俺はどこか前世かなにかの記憶を少し残した状態で生まれてきたようだ。それは鮮明なものではなく、どちらかというと第六感的な雰囲気で心の奥底から糸を紡ぎだすようなものだった。

「秋ちゃんはよく寝るいい子ね。」

「ああ、武満の時は俺たちも苦労したが、二人目ともなると案外気楽なもんなんだな。」

両親は俺が狸寝入りしているとは気付かず俺のことを話しているようだ。

「でも、夜泣きなんかも武の時よりも少ないのよ。オムツの交換もそれほど多くないし、なんだか秋ちゃんの方から育児しやすいように動いてくれてるような、そんな気が時々するのよ。」

俺はドキっとした。お母さんを助けようとできる限りのことをしていたのだがそれが他の子とは違っていて変な子だと思われてしまったら大変だ。

「こんな赤ん坊のころから気を使うなんて、これじゃあ親の立場がないな。秋、お前は俺たちの子どもなんだ。思いつきり甘えていいんだぞ。」

「もう、お父さんつたら、それこそこんな赤ん坊の秋ちゃんにわかるわけないじゃない。」

俺は二人の会話を聞いているうちに何だか胸の中に暖かいものが流れ込むような気持ちになり、今度は本当にゆっくりとまどろみの中に意識が沈んでいった。

俺はスクスクと成長していった。両親の会話からいつくらいに立てるようになって、いつ頃に話せるようになっていったらいいのかわかっていく俺はやはり少し周りよりも早かったようだがおおむね普通の子どもと同じようにして育っていったようだ。少しくらい周りと違ってそんなことくらいのことには頭を悩ませる家族ではないのか元気に育ったことそれ自体をまわりは喜んでくれているようだった。

「お母さん、秋をだっこしていい？」

お母さんに声を掛けたのは武兄ちゃんだ。武兄ちゃんは俺が生まれてから兄としての自覚ができたのかすごくお兄ちゃんらしくなるとお母さんが喜んでいた。しかし、

「エエエエェン！！エェン！！」

俺は、ここで嘔泣きをしておいた。なぜかというところ、武兄ちゃんは俺が軽い時はよかったが最近重くなってきた俺をだっこすると落としたり引きずったりと結構痛いのだ。結構年の離れた兄妹なので大事にしてくれるのは嬉しいのだが、痛いのはあまり好きじゃない。

「秋が泣いちゃったから、また今度ね。もうずいぶん言葉が分かるみたいだからきつと前に抱っこして落とすのが嫌でないちゃったのよ。」

正解ですよ。お母さん。

「ええ？じゃあ絶対今度は落とさないから泣かないで。」

武兄ちゃんも困ってしまったようで、でもあきらめがつかないのかこちらを覗きながらも抱っこしたくてうずうずしているようだ。

「じゃあ、今からお母さんは晩御飯の準備をするから、その間秋ちゃんだけがをしないように一緒に遊んであげて、それなら武もいいでしょ？」

そういうと、武兄ちゃんはパツと輝いたように笑顔になって、俺の手をぎゅっと握っておもちゃのある方に引っ張っていった。少し手が痛かったけど、俺は武兄ちゃんのひかれるままそっちにヨチヨチあるいていった。

「フフ、本当にお兄ちゃんになっちゃって。」

好美もそんな二人の様子を笑顔で見ながら台所の方へと向かっていた。

「秋はこっちな、俺はこっちの怪獣つかうから。」

武兄ちゃんはおもちゃをもつてくるとお気に入りのヒーローのおもちゃを俺の手に渡すと怪獣のおもちゃを手に持った。前に同じようにおもちゃで遊ぼうとしてヒーローの必殺技が俺の顔面に直撃して、

泣かせたことがあり、それからというものの武兄ちゃんはいつも怪獣を使って俺に攻撃されてやられる役をする。

本当は自分も正義の味方をやりたいのに、俺に譲る優しい武兄ちゃんに俺は笑顔になる。武兄ちゃんは正義の味方ができて喜んでいんだろうと思ったのか悪役になりきっていた。

「がおお！！この蟹津家は怪獣バングラ様がのつとつたああ。がおおお！！」

微妙にハイクオリティだ。武兄ちゃんがこんなのだったから俺がちょっと変でも家族はみな気にしなかつたんだろうな。なんて考えていると、武兄ちゃんが怪獣の口から炎がでてきたのを手で表現していたので、俺は応戦することにした。

「俺は、正義の味方、キャラバンだあ。必殺ビューム。」

あまりしゃべりすぎるとボロが出るので、テレビでやっていたように真似をしてよくわからないビームを出した振りをして怪獣のおもちやに向けて、ヒーローのおもちやについているライトがつくボタンを押す。そうすると普段は「やられたあ！」とか言いながら武兄ちゃんが怪獣といっしょに倒れ込んで俺は蟹津家の平和を守ることができのだが、今日はアレンジを加えてきた。

「ふっふっふ、そんな攻撃はキカン！！俺の体は超合金でできているのだ。」

武兄ちゃんはテレビの影響かはたまた小学校の友達から教えられたのか、今までの必殺技は効かないちょっと強い怪獣を演出して、俺を困らせてきた。

「そんなあ。卑怯だよお。必殺ビームがきかないなんてえ。」

俺は新しい新必殺技なんてわからないし、パンチやキックをするとモメアイになっつていつも泣かされるのがわかっていたので抗議をあげた。

「そこは新必殺技、デストロイカッターを使わなきゃ。」

どうやらテレビの影響のようだ、今度からお母さんに許されているテレビを見れる2時間は、俺の好きなペット番組のチャンネルを死守しようと心に誓いながら答える。

「そんなの知らないもん。」

そうすると、武兄ちゃんはテレビでやってた、デストロイカッターなるものを、身振り手振りを加えながら俺にレクチャーしてきた。それによると新しいおもちゃでは肩のところを外れるようになってそれを投げて敵を倒す必殺技がデストロイカッターなのだそうだ。しかし、両親は新しいおもちゃを買い与えるのではなく、今あるおもちゃで工夫をして遊べる子どもに育てたいらしくデストロイカッターは今後使われることはないだろう。

「そうだ、あそこにあるブロックでデストロイカッターが出せるやつを作ろう。」

武兄ちゃんはそういうと、おもちゃ箱の中からブロックを出してきて、「肩の部分がこうだとか、体はこんなだった」なんていいながらブロックでニューヒーロー製作に取り掛かりだした。俺は晩御飯ができた後にブロックやおもちゃが散乱しているとお母さんに怒ら

れるので、武兄ちゃんがぶちまけたおもちゃ箱の中身から武兄ちゃんが使わなさそうなものから箱に戻していくのだった。

「武え〜秋い〜ご飯にするわよ。」

「はあ〜い。」

武兄ちゃんは作りかけのブロックたちを放り出してご飯の前に手を洗うべく流し台の方へと歩いて行った。俺はそれらを片づけようか迷ったが、どうせ怒られるのは武兄ちゃんだし、これくらいならお母さんもそれほど怒らないだろうと放置して、武兄ちゃんのあとをおいかけて、ヨチヨチと歩きだした。

子どもたちの手が届くようにと置かれた台に乗って手をあらい食卓の方へ向かうとお母さんが武兄ちゃんに片づけを先に済ませてくるように言っていた。

「お母さん、俺も??」

武兄ちゃんが片付けに行くのだから当然俺も行くんだと思ってそう言うところ、

「秋はちゃんと自分が使った分は片づけてきたんでしょ?」

さすがはお母さんだ、武兄ちゃんが片付けをしないことも、俺がそれをすることもきちんと理解しているようだ。それじゃあと俺は食卓の椅子に手をかけると、

「うん、お片付けしてきたよ。」

とって椅子に座った。すると、食卓の席にはすでに父がおり、

「偉いな、でも自分のことを俺って言うのはだめだ。」

すでに、食卓についていた父がたしなめてくる。このやり取りは俺がしゃべれるようになってからずっと続いているやりとりだ。俺は前世の記憶の影響が男っぽいところが多々あり、一人称は俺だし、他にも男みたいところがたくさんあるので毎回それをとがめられている。

子どもらしからない行動をとがめられることはないが、女の子らしくないことに関しては結構古い考え方をする父は良しとはしないようだ。

「まあまあ、せめて僕とかならまだかわいいんだけどねえ。」

「うん、じゃあボクにする。」

俺というのはさすがに男勝りすぎるということで、だめなようだったが、ボクなら男の記憶に引っ張られる感覚も抵抗がないからすぐになれるだろう。

「はあ、俺の口真似をして覚えたんだろうが、もう少し女の子らしく育ててあげないとな。」

お父さんは、まだ納得していないようだがそれでも俺というよりも良いだろうと考えたのか今日のところは承知したようだ。

「お兄ちゃんっ子だし、少し男の子っぽいところがあるのは仕方ないわよ。幼稚園にはいたりして、女の子の友達ができればきつと

気にならなくなるようになっていくわよ。」

お母さんがお父さんを慰めていると、武兄ちゃんがもどってきた。家族四人が食卓につくと、お父さんの掛声を合図に晩御飯が始まる。

お母さんの料理はおいしいし、まだ歯がはえそろってはいないので少しみんなとは違うメニューだけど、両親の会話や武兄ちゃんがさっきのデストロイカッターのおもちゃをおねだりする様子をききながら、楽しい晩御飯を僕はすごした。この暖かい家庭が、こんな生活がずっと続くとおもうと、なんだか幸せな気分だ。

晩御飯が済むと、四人で一緒にお風呂にはいり、パジャマに着替えると寝室にむかった。祖父母が残してくれた結構大きな家に住んでいるので子ども部屋をつくってそこでねかせることもできるようなのだが、ボクがまだ小さいこともあって四人で布団を引いてそこで一緒にねる。ボクの布団のとなりにはお母さんがいて、逆側には武兄ちゃんが、僕ら兄妹を挟むようにしてお父さんが布団にはいつている。寝る前のお父さんのお話やお母さんの子守歌を聞きながら僕は夢の世界へとはいつていく。

チャプター4（後書き）

まずは先にお礼を、たくさんの方々がこの作品をよんでくださっているらしく、アクセス数がすでに三千に届こうかとしております。

このような作品に付き合っていたいただき本当にありがとうございます。

前回までのお話で不幸ながらも周りの人たちに愛されて過ごした和也を描いてきたつもりですが、転生をして女の子になってもそれは変わらないというところを表現したつもりです。

優しく理解もあるお母さん。少し頑固だけど家族想いのお父さん。
妹想いのお兄ちゃん。

そんな家族の温かい風景を目指してみました。

AKIも今は大学で一人暮らしをしています。秋ちゃんの小説を書いていると実家が懐かしくなったり、あの頃に戻りたくなったりします。

ブログにも掲載しておきましたがブログを作ってみました。まだつくりたてで何もありませんが、よろしかったら遊びに来てください。

<http://tommodoragonn.blog46.fc2.com/blog-entry-4.html>

まだ駆け出しのため至らぬところはありますが、これから
もどっかよろしくお願いいたします。

それではご愛読本当にありがとうございました。

チャプター5

再会？運命の出会い？

ボクも幼稚園に通いだす年齢になった。

ボクのすんでいる町はコンビニもない田舎町なので、町の中に幼稚園は三つありそこから小学校まで同じ仲間を通い、三つの小学校があつまって中学に、高校からは少し遠めのところに通うしかなく、大学に行こうと思うと県外にでる子が多くいる。

車で移動しないと娯楽施設がないそんな町だからみなすこしのんびりとした人が多いのが特徴といえるかもしれない。

入園式、制服のない幼稚園なので一回しか着ない晴着に身を包み、お母さんにポニーテールにしてもらい、遊技場に入っていくボク、今まで家族としか接していなかったからちよつと緊張している。

「痛い!!」

緊張して立っていると、ポニテを後ろからひっぱられた。

「なにすんだよ!!」

振り返って睨みつけると、そこには無邪気な笑顔の少年がいた。

「なんかさあ。ひよこひよこしてたんやもん。」

「ひよこひよこってなんだよ!!」

「ごめんねえ。僕は司って言うんだあ。よろしくう。」

何とも気が抜ける挨拶だが、何となく前にもこんなことがあったような、なかったような、この感覚はきつと前世の記憶に関係するものだ。

これまでも何度かあった感覚なので、前世で仲が良かった人や大切にしていたものなどに出会うと胸の奥の方から湧き出てくるようなこの感覚にはなれてきた。

「司っていうんだ。よろしくね。」

そう言って笑うと、さっきまで臨戦態勢だったのを、柔らかいものに変えた。

この感覚があったということは、きつと前世の恋人とかなのかな？いやいや、ボクの前世はおそらく男なんだから親友だろう。まさか、同性愛者ではないだろう。

「どうしたのお？怒ったり、笑ったり、考え込んだり。なんか変なものでもたべたあ？」

「いや、気にしないで、ボクは秋だよ。これから仲良くしてね。」

極上スマイルというやつを送っておいた。

司も笑顔になるともう既に友達ができていたのだろう、別の子の方に声をかけにいつていた。

ボクは緊張してお母さんのそばを離れられないというのに社交的な性格らしく司の回りには人があつまっているようだった。

「あらあ、好美さん。こんにちは、この子が秋ちゃんかしらあ？」
司の方を見ていると、なんだかお母さんに話しかけているお婆さんがいた。

田舎町のことなので親たちはほとんど知り合いなのだろうから、お母さんはよくいろんな人と話している。

「あらあらあ。こゝんな可愛かったなんてえ、将来秋ちゃんが司のお嫁さんになってあげてねえ。お婆さんもこゝんな可愛い子なら大歓迎よお。」

どうやら司のお母さんらしい。

間延びする話し方などは確かにそっくりだ、しかし、ボクは司のお嫁とかいきなり言われて

「お嫁になんかいかないから、司くんがボクのお嫁にきてくれるならいいよ。」

うーん、自分でも何を言っているのかわからない。

そういえばボクは女の子で司が男の子なんだから、お嫁はボクでお婿になるのは司なのだろう。

しかし、なぜかお嫁という単語だけに反論したくてへんなことを言ってしまった。

「ふふふ、からかってごめんなさいねえ。でも秋ちゃんは本当にいい子ねえ。将来旦那様がみつからなかったら本当に司のお嫁さんに欲しいわあ。」

まあ鏡でみて容姿が結構整っているのは知っていたが、まだ幼稚園

に入ったばかりの女の子をお嫁さんにもらおうなんて気が早すぎるにもほどがある。

お母さんも冗談だとわかっているの、なごやかな様子でおばさんたちとの井戸端会議に話の花をさかせていた。

「おおおい。秋ちゃん！」

遠くの方で間延びした声で司が呼んでいるので、ボクはそっちを見ると、友達を紹介してくれるようだった。

司のことは何となく信頼できるとおもっていたので、そっちに向かい、友達の輪の中にはいつていった。

幼稚園の友達はなぜかほとんどの人に即視感をおぼえたが、司ほど強く印象づいたのがいなかった。おそらくみんな前世で仲が良かったのだと思い、その中でも司は特に仲が良かったのだらうと、勝手に解釈した。

実際幼稚園が始まると、結構広い通学路区分がされており、一緒に幼稚園に通うのは司と、麻美ちゃんという女の子の三人おらず、武兄ちゃんが通学団をひっぱっていつてくれたので、いつもこの三人でいることが多かった。

麻美ちゃんは女の子らしい女の子だったので、たぶん前世の時には男友達である司との仲の方が良かったのだろう。

実際男勝りなボクは幼稚園から小学校にあがるまでずっと司と遊んでいたし、偶然女の子が少ないクラスだったので、司とばかり仲が良いボクも特に周りから意識されずに、過ごすことができた。

「おおい。秋ちゃん、ドッチボールしようよ。」

「いいよ。他のやつらは？」

「ボールを先生に借りにいったるよお。」

こんな風に女の子の中でも活発な性格なボクを男友達の中に引き込むのも司だったりするのだが、正直武兄ちゃんと遊んだりしていたし、いろいろな事情もあって男友達と遊ぶ方が好きだから結構感謝していた。

前世でも、司はこんな風にボクのことを友達の輪の中にひっぱってくれていたのかな。そう思うと、嬉しいような、懐かしいような気分がした。

「よおしい。今日こそは絶対秋ちゃんに負けないぞお。」

「ボクに勝つならもうちょっと練習しておいで。」

これも原因かもしれない。

ボクは幼稚園にきて初めて気づいたのだが、運動神経はかなり同年代と比べて良いらしい。

それに頭もどうやら良いらしく、ドッチボールでも、ちょっとしたフェイントなんかを入れてボールをなげるとみんな当たってしまうことから、ボクは同年代では負けなしだし、負けん気の強い司は、毎回こうしてボクにいろいろなことでチャレンジしてきてはあとちよつとのところまで負けている。

そんな司といて楽しいのでわざとギリギリの勝負にしたり、完全に突き放したりすることで結局遊び相手としてはなかなかいいらしく二人は仲良しだ。

「た〜だ〜いまあ〜。」

一応声をかけるが、誰かいるわけではない。

父は仕事で当然ながら、出産後しばらくは家にいたお母さんも、ボクが大きくなってきたのでパートに出かけている。

小学校に通ってる武兄ちゃんもボクよりは遅く帰ってくるので、勝手口のげた箱の中にある鍵でみんな自由に出入りできるようになっているのだ。

幼稚園から帰るとリュックサックを置いて勝手口のかぎをさつき開けたばかりなのにまた閉めて、全速力で自転車にまたがり飛び出す。

「司、おまたせ！！」

「今日は何して遊ぶう？」

これがいつものボクの日常だ、田舎なので祖父母がいる家庭が多いなかボクの家は誰もいないので、司の家に毎日行って、家族が集まる晩御飯の時までに帰ってくるのが日課になっている。

雨が降りそうだったり家の用事があるときはそれを済ませるまで司に家に入ってもらうこともある。

今日は武兄ちゃんが帰ってくるまで雨も降りそうもないのでこのまま司の家について遊ぶつもりだ。

「今日は司も自転車乗れるようになるうよ。いつもボクしか乗れないから遠くにいけないじゃん。」

補助輪つきのものなら乗ることも可能だが、司はまだ自転車に乗れない。

というかボクが乗れるようになったのが早すぎるらしいのだが、前世の記憶の影響だろうから気にしない。

しかし、司も自転車にのれたらちよつと遠い友達の家にいったりできるのでは非とも司には自転車に乗れるようになってもらいたい。

「えええ？秋ちゃん怖いからいやだあ。」

「なんだよそれ、ボクがわざわざ教えてやるんだから感謝しろよな。」

「やっぱかわいい。」

こんな会話をしているわりに司の顔は笑顔だ。

ボクのほうも司が本気で嫌がっていないのをしっているので容赦がない。

二人でこれからのことを話しながら、ちよつと舗装のはがれた田舎道をボクは自転車を押しながら、司は幼稚園のリュックサックを背負ったまま仲良くあるいていく。

『そうか、今度は秋ちゃんって言うんだね。本当に女の子になっても根っこの部分は和くんのままだね。これからも幸せな未来がまっているといいね。秋ちゃん。』

秋と司のことを上空から見ている鬼人がいた。

その顔には心底からの安堵が感じられた。

その鬼人に向かって飛んでくる鬼人がいた。

『洋司様』

『霞か、再転の儀式以降初めての休暇なんだ、ゆっくりさせてくれよ。』

『申し訳ありません。しかし、再転から5年たちましたし、落ち着

いてきたとはいえ保存の珠玉を任された洋司様にはあと15年はまだこれからもお忙しい毎日が続くものと思われれます。』

『そうだったな。再転した年の一年前までは世界の安定のために仕事山ほどあるんだったな。しかし故郷くらいゆっくり見させてくれよ。』

『故郷をですか？私にはさっきの秋とかいう人物ばかり見ているように思われたのですが。』

『ははは、確かにね。再転前はずっと彼女の面倒をみていたからね。あと三年後またここに来るまでしばらくお別れだね。秋ちゃん。』

優しく、どこか懐かしそうに微笑む洋司の横顔を霞は黙ってみていた。

今回の再転は今までのものよりも安定しておりそれがシュミレーションできたからか、エンマや閻魔の縁者である自分ではなく洋司が保存の珠玉を使って記憶の保存をしたことは知っていたが、それでもなんとなく不安にならずにはおれない霞だった。

保存の珠玉を使うと一瞬とはいえ人格が二つ重なってしまうそればかりの実力をもつ鬼人であつても苦痛をとまなう。

洋司はそれに耐えるだけの実力をもつとはいえ志願してやりたいものではない。

それでも保存の珠玉を使った洋司の背中に何かが見えた気がした。

『以前の私は保存の珠玉の影響を知らなかったそうですね。』

『そうだね、しばらく安定した時代が続いたのもあるし、以前の再転の儀式で多くの犠牲が出たため志願者がすくなかったからね。』

『第二次世界大戦ですか。あの時私のお父様と洋司様が世界を救ったと聞きました。』

『みなは英雄だというが、あんなにたくさんの犠牲がでるまで止められなかった世界の破滅をしってるものは、悔しいだけさ。あんな悲劇は二度と起こしてはいけない。それを防ぐためにも今回の再転はシュミレーターの最終確認の意味も大きいからね。失敗はしたくないんだよ。』

『シュミレーターシステムが安定して再転の回数が減ればそれだけで世界は平和になります。是非成功させてください。』

チャプター5（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

AKIは本当に皆様に感謝しております。

今回の話で秋のキャラクターと周囲の反応がある程度伝わったらしいという目標があります。

勝ち気で男勝りな秋は照れ屋だけど、友達をとっても大事にします。のんびりとした口調の司はその口調とは裏腹に活発で社交的な性格で秋を今後も助けてくれることでしょう。

また、司のお母さんという完全な第三者をつかって秋の魅力を少しでも表現したつもりです。

小説を読んでくださった皆様に少しでも小説の中の世界が伝わればと、今後も努力していくつもりですので再転の姫君をこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

チャプター6 (前書き)

ユニークアクセスが五千を突破いたしました。
本当にありがとうございます。

チャプター6

乙女の秘め事と男たちの友情

今日は小学校の入学式だ。

幼稚園と同じで私服で過ごせる小学校なのでこの晴着も一生に一回しか着ないだろうが、両親も思い出にのこるからと可愛いふりふりの服を用意してくれた。

ボクはあまりこんな服は着たくないが式の日くらいはとお母さんの説得もあって今日は大人しく着せられている。

「今日からみんなは小学生になります。」

校長などの長いだけで実のない話は適当に流して聞いていたボクに式を終える挨拶が聞こえてくる。

「それでは、新入生のみんなは教室にはいってください。」

二列にならんで教室に向かっていくみんな。

「はじめまして、僕は竜って言います。よろしくお願いします。」

あれ？

隣を歩いている子が良くみたらボクの知らない子だった。

前世の記憶の影響だな。

とすぐにわかった。

司かそれ以上に懐かしい感覚がしてあんまりにも自然に横にいたた

め気づくことができなかった。

「よろしくね。ボクは秋だよ。」

そういつて笑顔を送ると先ほど竜となのつた少年は顔を真っ赤にして俯くと、

小さな声で「うん」とだけ答えた。

いきなりなれなれしくしすぎたかな？

ちよつと失敗したらしいがまあこれからどうせ仲良くなるんだろうからあんまり気にしないでいた。

そんなやりとりをしていると教室についた。

田舎のことなので同じ地区には親戚が集まっていることが多く、司とボクもその例にもれず同じ苗字の蟹津なので席は前後になった。

そこでふと隣をみるとさっきの竜が右隣りに座っていた。

初めて話しかけたのがボクだったらしく誰とも話せずにいるようだったので

「竜！この後ろでぼけえとしてるのが司だ。仲良くしような。」

いきなり話しかけたのがいけなかったのか、それとも今日はふりふりのワンピースなんてきていつものポニーテールなのでその容姿と話し方のギャップに驚いたのかもしれない。

啞然としている竜にとりあえずクラスのムードメーカーで自分にとつても一番の友達である司を紹介した。

「今日はこんなかわいい服着てるのいい。秋ちゃんは変わらないねえ。」

「入学式だからってお母さんに着せられたんだ。しゃあないさ。」

「あ、さつき名前いってたけど、司ね。司でもつつちゃんでも自由に呼んでね。」

「うん、司くんだね。わかったよ。」

僕と話してたときよりも二人目だから緊張していない様子で竜と司は話している。

二人はすぐに仲良くなれそうだ。

ふとそこで三人で遊んでいる風景がよぎった。

何をしてるわけでもないが、三人とも笑顔で小突きあって馬鹿な話に花を咲かせ、なんとなくこれから当然のように起こりそうな風景に微笑む。

「なにニヤニヤしてるのぉ。また違う世界にいつてるよぉ。」

ガラガラ

司がはやし立てたところで教室のドアが開いた。

先生の登場と同時に教室の後ろで世間話をしていた親たちも静かになる。

「入学おめでとう。これからは小学生になって一つお姉さん、お兄さんになります………」

担任になった先生の話が終わると全体写真をとって今日はもう解散らしく、みんな親のもとに向かっていく。

蟹津家もお母さんがカメラを構えており、もう一度このふりふりの格好をフィルムにのこそうとしていた。

校門の前で全体写真をとると自然にボクと司は竜の方へと足を向け

た。

竜は今までみたことがないおばさんと一緒にいたのでたぶんあれが竜のお母さんなのだろう。

「竜！これからもう帰るの？」

「いや、お母さんがみんなのお母さんやお父さんに挨拶してるからしばらく帰れそうにないよ。」

「それはみんな一緒だよ。大人の話は長いから一緒に遊ぼうよ。」

「うん、僕もせっかく竜くんとなかよくなりたい。」

「じゃあ裏山にしゅっぱつ！！」

「ええ？秋ちゃんは小学校詳しいの？」

「僕らは小学校の近くにすんでるからあ。それに武ちゃんがいつもつれていってくれるしい。」

「ああ、武ちゃんってボクのお兄ちゃんね。今もう中学校にいつちやったけど去年までここで勉強していたからさ。」

「そうなんだ、“俺”は弟しかいないからうらやましいな。」

「あれ？竜って俺だったっけ？さっき僕って言ってなかった？」

「そ、ちよつと緊張してて」

照れたようにはにかなだ竜に逆に今はもうそんなに緊張しなくなっ

たんだろうなどと、仲良くなれたことに嬉しく思った秋は笑顔で返した。

「あれえ？今度は二人で見つめあって、今日の秋ちゃんは服装もだけどなんか変だよ。」

「変ってなんだよ。うら若き乙女に変とかいうな。」

「うん、秋ちゃんはこうでなくっちゃあ、相変わらずの男女っぷりだねえ。」

「まあしゃあないじゃん。さっき思い出したけど昔はボクも俺っていつてたらしいし。」

「秋ちゃんって最初はこんな可愛いからもっと違うとおもってたけど、すっごい話しやすいんだな。引っ越してきて友達できるか不安だったけど、安心した。」

「そっか、どこから引っ越してきたの？」

「東京の方からね。みんな微妙になまってるから移りそうだよ。」

「いいんじゃない？ボクらの言葉になれたらもつとなかよくなるかもよ。」

「でもお、東京の言葉も興味あるかもお。」

そんなことを話しながら学校の裏に行こうとしたら、そこに般若のごとく怒ったお母さんが現れた。

「秋！！今日は綺麗な服きてるんだからやんちゃしちゃだめって言ったでしょ。」

「ええ？三人で少し話してただけだよ。ね？司？」

「うん。新しく友達になった竜くんに小学校を紹介してただけだよ。」

「ここら辺は幼稚園で二年間もつるんできただけあって二人の呼吸は完璧だ。今回も難を逃れたと思っっていると。」

「そうです。裏山とかいうのを教えてもらおうとおもって。」

「あちゃあ。」

「今日は竜がいたのだった。」

「これはあきらめて素直に謝った方がいいな。」

「秋ちゃん？」

「取り返し不可能なようです。顔は笑顔なのに目がわらっていませんでした。」

「竜くんって言うのね。お母さんがさっきあつちで探していたからいってらっしゃい。」

「「「はい。」」」

「どさくさにまぎれてボクと司も逃亡を図ろうとしたが、無駄だった。」

「秋ちゃんと司くんはちょっとお話ししようねえ。」

お母さんのちょっとつて何分ですか？いや何時間なんでしょうか？
これから先の長い長い説教を覚悟して首をすくめるボクと司だった。
しかし、今回は5分ほどすると救世主が現れた。

「あの、秋ちゃんのお母さんですか？」

竜が自分のお母さんを連れて戻ってきたのだ。

「秋ちゃんには入学早々仲良くしてもらって、本当にありがとう
ございます。」

ボクと司はお互いに説教から解放されてふうと溜息をつく。と竜の方
を見る。

ボクたちの気持がわかったのか軽く手をあげてごめんなさいの合図。
ボクらにはにっこり笑ってグツと親指を突き立てた。

あそこで話を合わせられなかったのはダメだったが、窮地を救った
ので許してやることにする。

「結局井戸端会議がまた始まっちゃったねえ。」

「まあしゃあないじゃん。どうせ逃亡しても見つかるしおとなしく
しとくか。」

「二人とも、結構こんなことあるの？」

「ああ、秋ちゃんが無茶して怒られるのはいつものことだからあ。」

「なんだよ。全部ボクが悪いみたいじゃないか。」

「でも本当にい、秋ちゃんって運わるいよねえ。」

「そんなことねえよ。ちよつと木から落ちたり川で流されたりするだけじゃん。」

「それで無傷なのが不思議だよお。」

二人の会話に少し引いている竜がおずおずと尋ねる。

「そんなに危険なことが起こっているの？海良町ってそんなに怖い場所なんだ。」

「違うよお。秋ちゃんの周りが危険なだけだよお。本人は運動神経も頭もいいから何にもきけんじゃないんだけどねえ。周りが巻き込まれると結構危険だよお。」

「すげえ、なんかそれかつこいい。俺も見てみたいなあ。」

ああ、これでわかった。

こいつは絶対に前世で親友だったんだ。

幼稚園に入ってからボクは何度も危険な目にあってきた。

理由は様々だが基本的にボクの周りにいると危険が付きまとい、奇跡的な運動神経で自分自身は無事にすんでいるが、巻き込まれた子たちは怪我をしたりする。

特別な場所に行かなければ普段は大丈夫なのだが、ちよつと冒険なんでしたらそういう不幸があるので、今では司以外のみんなは一步引いた関係ができています。

「まあ、ボクと仲良くしたかったら、体を鍛えておくことだね。」

「ああ、それなら大丈夫、俺柔道習う予定だから。」

「柔道？ボクもできるかな？やってみたい。」

注）和也の時は柔道を始めるのはあんまりにも臨死体験が重なるのでと護身術を学ぶために中学の途中から少しやっています。

「一緒にやろうよ。秋ちゃんと司くんが一緒なら俺も嬉しいよ。」

「僕はだめえ。武兄ちゃんと野球やるって約束しちゃったからあ。」

「いいよな司は男の子だから、少年団入れるから。ボクも野球したかったよ。」

「それを言ったらおじさんがめっちゃおこってたねえ。」

「そうなんだよな。女友達ができたら女の子らしくなるだろうと思ってたから一緒に遊ぶのは司ばかりだし、以前にも増して男っぽくなっただって嘆いてたぜ。」

「そんなに言うならあ、少しは女の子らしくしたらいいのに。」

「は？そんなのボクらしくねえじゃん？」

「確かにい。」

そんな風にして三人で話していると井戸端会議もやっと終わったらしく、司のお母さんもいつの間にか現われてそれぞれの家へと帰るところになった。

ボクは竜との出会いによって気づいたことがいくつもあった。

それは記憶の奥底にあって、色で表わすなら紫色だろう。

なんとなく自分がなんでこんなに人と違うのかが分かってきたような気がした。

そして、ここで柔道をするのが、とても大事なことのような気がして、今度はやはりお父さんが反対しても絶対に譲らないでおうと心に決めた。

チャプター6（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

ここでAKIの執筆方法の変化を少し報告させていただきます。

今まで投稿と執筆作品のコピペは投稿と同時にやってきたのであとがきは投稿寸前に書き込んでいたのですが、新しいファイルを作り、先にあとがきも作成してしまう方法に変更したいと思います。

そこで今後の変化としては、今まで思いつきで書いていたあとがきに、本文のコメントをしつかりと残せるということです。

今までも本文について色々書いてきましたがこれによってテーマをしつかりと作成できるようになりました。

もしここに書いてあるテーマがきちんと伝わっていると感じたら感想などで十分伝わったよ。

とか、ここはこんな風にした方がいいなど教えていただきたいと思っています。

今後の作品にそれらが反映されることも多いかと思っています。

さて、長々と書きましたが、今回みなさんに一番伝えたかったことは、ずばり、“竜との出会いと秋との関係”であります。

安易すぎますね。竜との出会いは今後秋に大きな影響をあたえていく予定なのでここで竜と秋の出会いをしつかりと表現しておきたかったのです。

それではここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

チャプター7（前書き）

ご愛読と評価本当にありがとうございます。

チャプター7

セクハラおやじ？に一本背負い

「こんばん・・・ええ？」

ボクは妹攻撃で武兄ちゃんを説得すると女の子の夜道は物騒だとかいろいろ難癖をつけて無理やりお父さんを説得した。

基本的に子ども意見を尊重してくれるお母さんの協力のもと今日は初めての道場見学にきた。
そこでみたのは、

「なんで裸なんだよ!!！」

道場主の人が説明をするために先に開けてくれているというので一時間も前に来たのだが、それが早すぎたらしくちょうど誰もいないからと、ズボンを下ろしている途中なのか、パンツいっちょの変態オヤジを見てしまった。

「変態いいい!!！」

家ではお父さんや武兄ちゃんがいるとはいえ、他人の裸はさすがに我慢できなかつたらしく、相手の右腕を取ると思いつきり背負って投げ飛ばした。

その時道着を着ていなかったのどつかみ損なって思いつきり手が滑り2Mほどなげてしまう。

変態オヤジは受け身もとれず地面で気絶してしまった。

30分後

「あの・・・大丈夫ですか？」

「いたた、まさか小学1年生でしかもこんな弱い女の子に投げ飛ばされるとはおもわなかったから、受け身も取れなかったよ。」

一部始終を見ていたお母さんの話では先ほどボクが投げ飛ばしたのはこの道場の道場主で、田舎の道場なので道場の管理から指導まで全部一人でやっているらしい。結構強い人らしい。

しかし、投げ飛ばされたあとお母さんが畳の上に運んで介抱しても30分近く気絶したままだったことから相当なダメージがあったのだろう。

「とりあえず、先に着替えてくるよ。また投げ飛ばされてはいつまでたっても道場がひらけないからね。」

そういつて笑った道場主は最初の印象のせいで格好良くは見えなかったが人好きのしそうな人柄であった。

今更ながら投げ飛ばしたことを申し訳なく思い、ボクはうつむいて

しまった。

ガラガラ

すると道場主さんと入れ替わりに人が入ってきた。

「竜！？どうしたの？」

「“どうしたの？”じゃねえだろが。今日は秋がくるって言うってだからお前の時間にあわせてきたんやないか。」

そうなのだ。

この道場、ボクの家からは少し遠いが、竜の家からは歩いて5分くらいで昼間にボクが今日から行くと言っていたのを覚えていてわざわざ様子を見るために早くきてくれたようだ。

「まあ早い人は15分くらい前からくるからそんなに早くもないんやけどな。」

「うん、でもありがと、いきなり失敗しちゃったみたいだから竜が来てくれて助かったかも。」

「ん？失敗ってなにしたん？」

ガラリ

ちょうどよく道場主さんが来たようだ。

「おまたせしました。お、竜くん早いね。」

「はい、秋が来るって聞いてたんで。」

「そうか友達だったんだね。私はこの道場で柔道を教えている林勝はやし矢だかつや。よろしくね。秋ちゃん。」

「よろしくお願いします。」

どうやら林さんは怒ってはいないようでもっとした。

それからお母さんとボクに道場のことや道着などの準備するものを説明するとおもむろにボクの方をみてこういった。

「秋ちゃんは前にどこかで柔道を習っていたのかい？」

「え？ボクは完全な初心者ですよ。テレビで見たこともないので今日初めて柔道をしました。」

「いや、さつき君が私を投げ飛ばしたのは、一本背負いといって柔道の技の一つなんだ。それにさつきから話をしているととても小学一年生には見えないから。」

「そう言われても、本当に初めてです。」

「うん、確かに嘘をついているようにも見えないし、まあ今日はお母さんと一緒に稽古の風景を見くといいいよ。あんなにきれいな一本背負いができるなら是非とも入ってほしいけど、様子をみて決めてくれたらいいから。」

「はい。」

話している間に時間になっていったのだろう。

林先生が何か指示をする前に大人の入門性や上級生らしい人たちが中心になってストレッツチなどの準備運動を終えていた。

ふと見ると同い年の子も結構いるみたいで女の子もいる。

思っていた以上に敷居は高くないようだ。

一か月もかけてお父さんを説得したのはボクだけのようで、みんな入学からすぐには始めているのだろう練習もさまになっている。

思っていたような血なまぐさい稽古ではなく受け身をとることを大事にした稽古内容だったが、普段から危険が多いボクにとってはこれでも十分やりたいと思えた。

「お母さん、ボク柔道するよ。」

「ええ、あれだけ頑張ってお父さんを説得したんだもの、今さらやめると言わないとは思っていたわ。がんばりなさい。」

そう言ってお母さんはあまり長くはない道のりをゆっくりと車をはしらせていった。

明日は竜に一番に報告してやろう。

ついでに一本背負いのことは誰にも言わないように口止めをしよう
と、考えながら車にゆられていた。

「おはよう……」

「おはよう。」

通学団で登校するのでみんなが学校につく順番は決まっている。
竜は学校から少し遠いのでバスで通学しておりボクや司よりも先に
学校についていた。

「竜、昨日の道場での話誰にもいっちゃだめだからだぞ。」

「ああ、それはもうおそいわ。昨日のうちにいっといてくれんと。」

「ええ？もう誰かに言っちゃったの？」

「まず道場ではほとんどみんなしっとるし、通学の途中とか学校つ
いてからもその話でいまもちきりだからな。しゃあないやん。」

「ふざけんな！えせ関西弁！！」

そういうと竜の鳩尾にボクのこぶしがクリティカルヒットした。
教室にいた友達から

「あれ？投げ飛ばしたんじゃないやなかったん？殴り飛ばしたの間違えや
った？」

うう・・・お母さん、秋はお嫁に行けないようです。

全部目の前で悶絶している竜が原因なので、恨むならボクじゃなく
てこいつをうつらんでください。

「秋ちゃん。もう既にお嫁のもらい手はこの学校にはないから心配
ないよお。」

口に出ていたようだ。

まあそんなことは自分でもわかっていたので溜息をひとつはくと普

段通りに席につく。

「おい、俺のことは無視か？」

「ん？とりあえず口チャックしとこうか？」

笑顔でこぶしを握ると竜も言いふらした負い目があるので口を閉じた。

しかし、小学一年生でこの会話はハイクオリティすぎないか？

元々都心で過ごしていた竜はませたところがあるし、前世の記憶なんてもののせいで普通の小学生よりも大人びたボクとそれと一緒に過ごした司ならではの会話といえれば納得がいくが、ちょっと変な気分だ。

「まあ、竜の部屋のお菓子は全部秋ちゃんのおなかに入ることがきまったねえ。」

「マジかよ。わるかったって。」

「しょうがないな、じゃあ道場いり決まったから稽古の時相手してくれたらゆるしてあげる。」

「おお、マジか、それくらい任しとき。一か月も説得にかかったんやしホンマよかったな。」

「よくあのおじさんを説得したよねえ。」

「えへへ。でも昨日女の子もたくさんいたって言ったら手のひら返してがんばってくるんだぞっていつてたんだよ。」

「おじさん、まだ秋ちゃんが女の子らしくなるの諦めてないんだねえ。」

「無理無理。いきなり先生を一本背負いするような奴が女の子らしくなるわけないやん。」

「竜は本当に自殺したいんだねえ。」

「そうだな。その願い友達としてはかなえてやらないとな。」

「ちよま、ぐはあ!!」

本日二度目の悶絶は秋の黄金の左足が脇腹に突き刺さることによって完遂された。

三人の様子をみていたクラスメイトから、

「やっぱり蹴り飛ばした。のまちがいじゃない?」

なんて声が聞こえてきた気がしたがこちらは放置だ。

キーンコーン

学校が終わると竜と別れて司と一緒に下校した。

普段なら最終下校時間まで三人で遊んでから帰るのだが、竜も早く帰るといふし、今日は何となく久しぶりに司と二人で遊びたくなつたのだ。

「小学校に入ってから遊びに来るのは初めてだねえ。」

「確かにそうかも、なんか今日は竜が早く帰る用事があるっていつてたからな。」

「入学式で秋ちゃんの隣に座っちゃった時から竜の運命はきまっていたんだねえ。」

「どういう意味だ？まるでボクのせいで不幸になっているみたいじゃないか？」

「そういう意味じゃないけどお、あれからでしょお？三人でいつつも遊ぶようになったのはあ？」

「そんなこと言ったら入園式でポニテを引っ張らなかつたら司とも

仲良くなかったかもしれんぞ？友達なんてそんなもんじゃないか？」

「まあそうなんだけどお、僕はいいの、どうせあそこで仲良くなつてなくても仲良くなつてたからあ。」

「まあそうだな。それを言ったら竜だつて同じなんだがな。」

「そう？竜の場合は先に他の友達ができていたらこんなに仲良くないかもよ？」

「いや、たとえ竜が先に違う友達ができていても、絶対にボクらと仲良くなつていたさ。」

「そうなんだあ。じゃあしようがないねえ。」

「おいおい、少しは疑わないのか？」

「うん。秋ちゃんのそういうのって外れたことないからあ。」

そんな話をしているともう家の前までついていた。

道場は週に二回しかないが、お父さんの奨めでピアノやらいろいろ習い事をしているので小学校にはいったことと、道場が増えたことであまり長くは遊べないがそれでも習い事の間まで家で司とトランプをしたり司が好きなアニメを見たりしていた。

「お疲れ様でした。」

今日は道場の日だった。

初日の一本背負いが逆にみんなとの話題になったおかげですぐにうちとけることもできた。

やっぱり前世の記憶の影響だろう、さりげなく道場に通う生徒の中で一番強いのが発覚した。

さすがにそれはまずいのでパニックになっていて無我夢中だったと真実と多少のごまかしを入れて皆に説明すると実力を隠して稽古に参加していった。

竜あたりには、バレてるかもしれないが、あれ以来誰にも言っていないし、約束を守ってくれるのもわかったから竜にはしばらくたつたらきちんと説明してやるう。

「竜、一本背負いのことで話があるんだが。」

「え？もう俺は誰にもあのこと言ってへんよ？」

「違う。口が堅いのはわかったからそんなに身構えるな。」

また鉄拳制裁があると思ったのか柔道の構えをとった竜に訂正をいれる。

「実はな、これもまた誰にも言わないでほしいのだが、どうやらボクは柔道をしていたらしい。というか一本背負いもまぐれではなくリアルに林先生よりも強いやもしれん。」

「やっぱりか。林先生よりもっていうのはオーバーだけど、この前できてたはずの型がなぜかみんなができひんってわかったら次の時からできなくなってたから変だとおもったわ。」

「あいかわらず変な関西弁だな。」

「ほっとけ、自分らのがうつったんやろが!!」

「まあ、そんなわけでボクは力を隠すから、さっさと強くなれ。」

「は？なんでそうなるん？」

「竜相手なら何かあってもごまかせるだろうが、入門が決まった時に稽古相手になると約束しただろ？わすれたわけじゃないよな？」

「いや、あの時は秋がめっちゃくちゃ強いなんてしらなかつたからみんなよりも一か月も遅れて入ってくるんやから俺が相手をしてやるよって意味やし。」

「あの時の言葉をそのまま言おうか？」

「しょうがないな、じゃあ道場いり決まったから稽古の時相手して

くれたらゆるしてあげる。」そして、竜は「任せとき」と言ったわけだ。
どこにも慣れるまでとか、ボクが強かったらやめる。なんて文章はないわけだ。」

「相変わらずの天才児だな。そんな言葉普通おぼえてないぞ。」

「しかし、引き受けた記憶くらいは竜もあるだろ？約束をやぶるのか？」

「ああ、もうわかったわ。俺が秋の稽古相手になったる。でもしばらくはまだ猫かぶつとけよ。俺も始めたばっかで全然わからへんのやから。」

「うむ、それはわかっている。早くボクを守れるナイトになつてくれ。」

「バカ！！そういうことを平気でいうな。」

そういうと竜は真赤になった。

マセガキだとは思っていたが小学一年生のくせに意識しだすなんて、まったく最近の……ボクはまあ、前世の記憶とかあるし??

「指きりげんまんな。」

そういつて小指をたててきたのでここだからかっても面白いが、竜が約束してくれる気持ちがあつたので茶化さずに指切りをした。

「あらら、将来を誓いあう二人の場面をみちゃったかしら。」

「お母さん!!」

迎えにきてるんだったら先に声をかけてくださいよ、お母さん・・・司の時もそうだったが、男勝りな性格ではあるものの、男の子と仲良くしているボクにお母さんは将来については心配ないと考えているようだ。

こうして竜や司のことをたきつけたり、からかったりは日常茶飯事だ。

司はそれこそもう慣れてしまったから平気だが、竜はまだ免疫がついていないようだ。

さっきよりも真っ赤になっている。

「そんなんじゃないよ。まあ約束をしたのは事実だけど、あと二人の秘密だからおしえてあげないよ。」

「ふふふ、いいのよ内容なんて、でも本当に竜くんありがとうね。いつも迎えに来るまで一緒にいてくれて。」

道場に通いだしてもうずいぶん経つが、竜は家が近いので歩いて帰るが、家の遠いボクの迎えが来るまで道場で一緒にまってくれる。お母さんも竜がいることを知ってからはこうしてちよくちよく遅刻するので結構帰る前に二人で話すのはよくあることだ。

「じゃあ、また学校でな。」

「お、おう。」

まだ少し恥ずかしがりながら挨拶して、竜は家の方に向かって歩いていった。

「さあ帰りましょ。今日は先生と話していて遅くなっちゃったから。」

「どうやら今日は時間を忘れたのではなく、先生と話をしていたようだ。」

何を話していたのか気になったボクはお母さんにたずねると。

「お母さんも秘密よ。お互い秘密なんだからおあいこね。」

「どうやら今回もお母さんの方が一枚上手のようで、上手に丸めこまれてしまった。」

この時お母さんを追及しなかったことが後で後悔するとは思ってもいなかった。

それから、3年ちょっともすると竜は本当に実力をめきめきと伸ばし、小学五年生とはおもえないほど強くなった。

ボク相手に稽古していたのもあるが、約束を守ろうと頑張ってくれたのがわかってちょっと嬉しかった。

中学生になると部活で忙しくなると道場も辞める人も多いので、ボクと竜は道場で一番強い二人になっており、男子では竜、女子ではボクという感じになっていた。

チャプター7（後書き）

秋の性格、すごさ、かなりのものですね。しかし、一応ちょっと周
りよりも強い、普通の女の子ですよ。お母さんの秘密も気になりま
すが、AKI的には二人の今後の展開がすごく気になります。

今回のテーマは”成長”です。だいぶ男勝りな秋ではありましたが、
竜と一緒になって成長の兆しが見える秋が皆さんに伝わればうれし
いです。

それではここまで読んでいただきまして本当にありがとうございます。
しました。

次回はちょっと秘密が解消されます。ちょっとだけネタばれ、今の
秋が好きな人は、ちょっと悲しいことがあるかもしれませぬ。

チャプター 8

初体験は少し痛みをともなつて

ボクらはこの春に小学校5年生になった。

幼稚園から一緒のクラスメイトは当然嫌いではないし、どちらかといえは仲が良いが、その中でも、やっぱり竜と司は別格だった。

ボクの男勝りはお母さんの言葉通りずいぶんと減ってきて、一人称こそまだボクのままだが、体も心も女の子っぽくなってきた。

「なんてことはないわな。秋は今でも男女やん。」

「だまれ!!!」

「ぐ……」

「柔道よりもキックボクシングはじめたらあ?」

余計なことをいって悶絶しているのは竜、今日は破滅(の右足)【竜命名】によつて脇腹をえぐられている。

「柔道技なんてつかつたらアスファルトにたたきつけられてこんなんじゃすまないわよ。」

「まあ、多少手加減してるのはしってるよお。でも、手が出る時点で秋ちゃんだよねえ。」

そう言われるとぐうの音もでない。

というか言ったのが竜ならこれでもきつと手がでるのだろうが、なぜか司は攻撃する気が起こらない。

軽く小突くくらいで悶絶させるのはいつも竜だ。

これがキヤラというやつなのだろうか？

「キヤラとかで攻撃すんな。というかさっきから思ってること口にでてんぞ？」

「わざとよ、どうせ二人に隠し事ないしね。」

「まあ、でも柔道始めたあたりから、言葉づかいは女の子っぽくなつたよねえ。」

「そういえば、前は言葉づかいても男っぽかったのにかわったな。」

「まあ、ボクも少しは成長するんだよ。女性の魅力ってやつ？」

「……」

「二人してそこでだまるんじゃない!!」

「だってえ、怒ってる時とか男の言葉にもどってるあたりい、地が出るって男ってことでしょお？秋はいつまでたっても秋だし。」

「ほう、司もたまには痛い目をみたいらしいな。」

そういうと残酷（の右手）を構える。ついでに黄金（の左足）、暗

黒（の左手）それぞれ名前から命名の意味まですべて竜がつけた。

「そんなところが男勝りなんとちゃう？」

司は琴線ぎりぎりの発言をしたが、まだNGワードは言っていないしボクを認めるような発言でカバーしていたが、竜はこういう時に失言をもらす。

「というか失言キングである。」

「ぐはあ！！」

「さすが暗黒の左手。竜くんが見えないところから攻撃するなんて神技だね。」

ん？

三人で話していたのに、現れたのはだれだ？

声のした方をみると、浩太だった。こいつはインドアなやつで、いつもゲームばかりしているオタクくんだ。

クラスの中でもちよつと浮いていて、三人でじゃれあっているところに時々こうして現われてはボクの攻撃に名前をつけようとしている。

ゲームと現実の区別が怪しいところのある変なやつである。

まあそれに対抗して両手足全部に名前をつけた竜も変な奴だが、こいつの場合は実体験からつけているので許してやる。

「その四人！！早く始めなさい。」

今日は学校の行事で川にきている。

なんでも水質の調査をするのがこの学校の伝統らしく、毎年五年生になると温かくなって川に入れるようになってこうして全員でやつ

てきて班ごとにそれぞれ調査してそれを秋に発表するのだ。

「先生に怒られないうちにさっさとやるわよ。」

「秋が竜を攻撃するのを我慢するかあ、竜が失言を控えればすぐおわるよお。」

「じゃあ、しばらく黙っていてね。」

「えええ？攻撃を我慢しろよ。」

文句を言うものの、また失言をして攻撃されるのが嫌だったのか竜も調査をはじめ浩太もいれた四人はテキパキと動き、始めるのが遅かったわりに結構はやく終わった。それでも春の川なので水は冷たく、冷え切った体を温めるべく岸に上がって座り込む。

「班別行動は秋がいると早く終わるからいいねえ。」

「確かに、それは言えとるわ。勉強も運動もなんでもよつできるでな。」

「あんたらね・・・人を便利屋みたいな言い方しないでよ。」

「ええやん。頼りにしとるわ。」

「まったく・・・あれ？浩太は？」

「さつきい、川下の方に歩いていったよ。他の班でもみにいったんじゃない？」

「そんなはずないわ。私たちよりも川下の班はあそこに見える麻美たちの班だけのはずよ。あれ以上行くと深いところがあるから危ないはずだもの。」

そう言うと、ボクは立ちあがって、川下の方を覗いた。立ち上がると遠目に浩太の姿があり川の深くなっている近くの岸でしゃがんでいるのが見えた。

「ちょっと見てくるね。浩太って確か泳げないはずだし。」

そう言うとボクは数歩川下の方に足を進めた。

その時、浩太の側に大きなバツタのような虫が飛び出し、それに驚いた浩太は足を滑らせて川の中に落ちて行った。

「浩太!!!」

ボクは叫ぶと岸を駆け出し、川に飛び込むと溺れている浩太を救出しようとして近づいていった。

「先生!!!浩太がおぼれました。」

「た、うつぶ、けて!!!」

誰かが先生を呼ぶ声と、浩太がおぼれながらも必死に助けを呼ぶ声をききながらボクは浩太の側まで泳いで行った。

浩太はいきなり落ちたことと、泳げないことからパニックになって

おり、手足をばたつかせ、ボクが後ろから支えても手足を止めようとしなかった。

うまく流れにのせて深みになっているところから抜け出そうとボクは必死になって足を動かしていると、まだ少し深いが十分足が届く所までたどり着いた。

そこで安心したのがいけなかったのだろう。

「ぐ……」

ずっと手足を動かしていた浩太の肘が安心して油断したボクの顎に直撃した。

どれだけ鍛えていても急所とはあるもので、ボクは気を失い、頭から川に突っ込んでいった。

『あれ？どうなってるの？』

『君はいま、臨死体験をしてるんだよ。秋ちゃん。』

『え？ってかあなたは誰ですか？』

ボクはなぜか川の上でふわふわ浮きながら川の流れに流されていく様子を上から見ていた。

そして独り言のつもりでつぶやいた言葉に応える。ナイスミドルな男性がそこにはいた。

『今回は蘇生までそんなに時間がないから自己紹介だけしておくね。僕の名前は洋司だよ。またこれからも何度も会うと思うから覚えておいてね。』

そういつて微笑むとナイスミドルは手を差し出した。

『なぜか名前をしっているみたいですが、ボクの名前は蟹津秋です。それで、さっきの話なんですが、臨死体験ってことは生きかえられるんですか？』

『そうだよ。秋ちゃんはすぐに駆け付けた先生が心臓マッサージをしてくれてそれで助かるんだ。』

『え？ということとは人工呼吸されちゃうんですか？』

『気になるかい？大丈夫だよ。見ていればわかるが今回は気絶していたのがよかったのか水を飲んでいないから呼吸はしている。心臓マッサージをしだすとすぐに意識をとりもどしてぎりぎりではある』

がファーストキスは免れる。でも今回はだけどね。』

そんな話をしていると、足がつくことに気づいた浩太は当然だが、流されていったボクの体も竜と司が岸に引き上げてくれて先生が心臓マッサージを始めようとしていた。

『それじゃあ、秋ちゃんまたね。』

洋司さんは、二度と起こってほしくない体験のはずなのに次がある
と示唆した別れ文句を言うと、手をボクの頭の上においた。

「ぶは。やめてください。」

ボクは目を覚ますと担任の先生の顔がすぐ近くにあったので顔をそ

むけ、もう一度大きく息を吸い込んで抗議の声をあげた。

「大丈夫か？秋？」

「秋い。大丈夫う？」

竜と司が心配そうな、でも司はなぜかちよつと間の抜けた声をあげていたので答えた。

「うん、大丈夫。ボクのファーストキスはまだ守られたよ。」

「そつちかよ。ってか心臓とまつてたはずなのに、起きぬけに先にファーストキスの心配なんて余裕だな。」

あれ？

何でボクファーストキスの心配なんてしてるんだろう？

なにか心臓が止まつてる間にあつた気がするけど、よくわからないや。

「ええつと、秋ちゃんは大丈夫なようですね。心臓マッサージもひよつとしたら必要なかつたかもしれませんが、とにかく無事でよかつたです。」

「そんなことありませんよ。内臓が圧迫されて心臓の鼓動の開始と同時に気管にはいった水が一気にでてきたので息を吹き返したのですから。本当に助かりました。」

「えつと・・・先生も初めて心臓マッサージしたけど、そんな風に分かるものなの？」

「いえ、起きた状況から判断しましたので、実際のところはわかりません。」

「そう、それだけ意識がはっきりしていればとりあえず大丈夫ですね。」

心臓がとまった生徒を初めてみた先生は先ほど自分で安全を確認したはずなのにまた確認をしてから、他の生徒たちを集めた。学校に着くと浩太がボクの机にやってきた。

「あの・・・ごめんなさい。」

自分の失敗で川に落ち、助けてもらったのに自分で攻撃をして命の危険にまでさらしたので謝ることしかできなかったようだ。

「いいわよ。とりあえず誰も怪我もないし、無事だったんだから。」

「バカ、秋はあご怪我してんだろっが、あかくなっとなるやん。」

「これは柔道でやったときのよ。浩太の肘くらいで私が怪我するわけないでしょ。」

「まあ、確かにい。秋が浩太の攻撃で怪我なんてしないよあ。」

阿吽の呼吸というやつだろう。

司はボクが浩太をかばっていることを理解してフォローしてくれた。司のことはをきいてやっと落ち着いたので、涙目だった浩太もぎりぎり涙をこらえながら、もう一度「ごめん」といって自分の席の方へもどっていった。

「まったく、お人よしやな。」

「うるさいわね。というか余計なこと言いすぎよ。」

「当たり前だろ？俺も司もすごい心配したんやから。」

「う・・・」

久々にまともな竜の発言に反論が思いつかない。

馬鹿なことしている三人だが、お互いに大切におもっているのは本当なのだ。

こういうことがあるといつも心配をしてくれているのであまり強気で返せない。

「でもあ、今回のことでわかったことがあるよあ。」

「ん？なにがわかったのよ？」

「秋はねえ。ピンチになる時は運動神経と頭脳で乗り切れる力をもっているけど、誰かを助けようとしたりするときは不測の事態がおきることがあるねえ。」

「ああ、たしかに、俺たち以外の奴だと慣れてないから緊急事態に対処しきれなくて怪我したりすることよくあるもんな。」

「そんでもってその緊急事態が命にかかわることだところなっちゃうわけか。」

「ちよつとまっつて、それだとまるでボクが不幸少女みたいじゃない？」

「不幸少女とまでは言わないけどお、秋の周りにいても安全なのは今のところ僕と竜だけなのは本当だねえ。」

「そんな……ばかな……」

「なにいつてんだ？俺がであった時からお前はずっと不幸少年じゃないか？」

「ねえ、竜？久しぶりに殺戮さつりくの頭突きくらつとく？」

「不幸“少年”ってなによ！！」

「ドガッ」

「相変わらずだねえ。竜は秋の不幸には対処できるけどお、秋から

の攻撃はどうしようもないみたいだねえ。」

先ほど臨死体験をしたとは思えないほど元気な秋の様子に、クラスもあまり落ち込んだ雰囲気にはなっていない。

むしろ、突然起こったハプニングに興奮気味だ。

それでも事故があつたため報告をしているのであろう担任は帰ってこないで教室は保険の先生が代わりに来ており、最初のうちは溺れた浩太や秋の心配そうに様子を見ていた。

あんまりにも元気な様子に、大丈夫だとわかると担任がくるまでのんびり椅子にすわっていた。

ガラガラガラ

教室のドアが開くと担任の先生が入って来た。

先生の説明によると、元気で一応溺れた浩太とボクは病院に行つた方が良くということになった。

授業も終わりなのでこのまま先生の車で隣町の総合病院に向かうよ
うだ。

海良町には個人の小さい内科しかないのでこの病院に行くのは遠い
けど仕方がない。

今日はたまたま道場の日だったので竜にいけないかもせぬいと伝
言を依頼すると、病院に向かった。

検査結果は異常無し、しかも担任の先生がテンパっていたため、心臓マッサージの圧迫箇所もずれていたため肋骨も一本も折れていないようだ。

普通心臓マッサージをすると肋骨がボキボキになるようだが、腹部を押されて呼吸が再開されるともともと脈をとらえ間違えていて動いていたらしい心臓にも影響を与えることなく蘇生したらしい。

男の先生が心臓に耳を当てるのをためらって手くびなんてつかんだのだから仕方がない。

慣れた人でないと手首で脈を測るのは意外と難しいし、逆にそれでボクのファーストキスが守られたのだから先生の失敗もありがたいというものだ。

呼吸だけがとまっていることがわかっていたら腹部圧迫なんてしなかっただろうから、本当にボクのファーストキスはぎりぎりのこと

ろで難を逃れたらしい。

「秋！！大丈夫だったの？」

お母さんは知らせをきいて、病院まで駆けつけたようだ。

まあ普通娘が臨死体験をしたんで聞いたら心配するものだし、本当ならパートはまだ終わらない時間だが、職場の方でも優遇してくれたのだろう。

「お母さん、本当に申し訳ありませんでした。私が引率していたのにこのようなことになってしまい。」

先生はお母さんに頭をさげた。

先生の横で浩太も「ごめんなさい」と頭をさげた。

電話ではあまり状況が説明されていなかったお母さんに先生とボクと浩太で今日おこったことを説明していると浩太のお母さんも現れ、もう一度きちんと説明された。

話を聞いた浩太のお母さんはボクに何度も頭をさげてたくさん感謝の言葉をくれた。

もう学校にもどる必要はないので、それぞれの母親の乗ってきた車に乗り込むと、帰りの車のなか、

「秋、浩太くんを助けたのは本当にいいことをしたとおもうわ。お母さんも鼻が高いわ。でもね、もうこんなに危険なことはいらないで、あなたは女の子なんだから。」

もしボクが男の子だったら最後の一言はなかったのだろう。

自慢の息子だと誉めて家に着くまでの間、人助けがどんなにいいこ

とか、延々と語りつくしたことだろう。

しかし、ボクは女の子なのだ。

たとえ男勝りなところがあるうと、前世の男としての記憶があるうと、お母さんにはそのことはいってないので、ちょっとやんちゃな女の子にしか見えないのだ。

「うん、大丈夫。ボクには竜と司がいるから。二人が守ってくれるから平気だよ。」

「あら、もつと抗議するかと思ったけど、ふふふ、本当に二人には感謝しなくちゃね。今回も川から引き上げてくれたのはあのふたりなんですってね。」

「うん、ボクが危ない目に逢った時にはいつも二人が助けてくれるから。だからお母さんは心配しないで。」

実はもう二度とこんなことはしないとはいっていない。

というかまた誰かが危険な目に逢っているときに助けなくて傍観なんて絶対できないことがわかってるので、二人のことを話題にだしてごまかしてしまったのだ。

「うん。そうね。二人が代わりに助けてくれるんだったから。」

お母さん今度から二人がいる方に足を向けて寝れないわね。秋の命の恩人ですもの。」

「ところでさ、お母さんってファーストキスっていつした？」

このまま話をしているといつ秋が実を呈したことに話かもどるかわからなかったので多少強引だが話題を変えた。

「あら、そつか今回心肺蘇生されかけたっていったものね。秋ちゃんもそんな年頃になったのね。」

普段秋と呼ぶのにちゃん付になるのはお母さんがからかいモードに入ったことを意味する。

まあ今回はそれでいいのだが、少し藪蛇だったかと後悔しながらも続ける。

「ボクだつて女の子だからね。やっぱり好きな人と初めてのキスはしたいもん。」

「ふふふ、じゃあ竜くんか司くんにお願ひしたらどうかしら？二人ならきつと秋ちゃんのファーストキスもらつてくれるわ。」

「ええ？なんであの二人になるの？」

「あら？秋ちゃんの周りで一番親しいのつてあの二人でしょ？それにこれからも守ってもらうんだつたらご褒美のキスくらいあげないと、」

お姫様を守るナイトへのご褒美はキスつて昔から決まっているのよ。

「

お母さん、いつそんなことが決まっただんですか、しかもナイトつて・

・

確かに昔竜に私を守るナイトになってなんて言ったことがあるけど、それはその場ののりで、冗談でいったのであって・・・

しかもさっきの話題のせいで守ってもらう気なんてないなんていえないじゃないですか。

八方塞がりとか四面楚歌とかいう状況なんでしょうか？

呉越同舟でないのだけがこの車の中で唯一の救いかもしれないです。

結局危険に飛び込むこともファーストキスのこともあいまいなまま家につき、いろいろあって疲れてしまったので
(特に精神的に)今日は道場にはいかずにご飯を食べてお風呂には
いってねることにした。

「ファーストキスかぁ。やっぱり甘いのかな？」

「秋？ファーストキスってなんのことだい？」

中学のころなつてから部屋を与えられていた武兄ちゃんだったが、ボクも女の子ということでもう一人部屋である。

誰もいないと思つてつぶやいた言葉だったがばっちり武兄ちゃんに聞かれてしまった。

「なんでもないわよ。今日の話はしたでしょ？危なく30過ぎの既

婚者のおじさん先生とファーストキスをしかけたからちょっと考えちゃっただけ。」

「おじさんって・・・まあ今回は何もなくてよかったな。」

「どうせだったら、お兄ちゃんがしておく？」

「ぶっ・・・バカ！！ちゃんと好きな人ができるまで大事にとっておけ。」

そう言うと、武兄ちゃんは自分の部屋へと帰って行った。

あからさまにからかったボクだったが、武兄ちゃんだったら別に悪くないか、とおもって頭をブンブンふる。

「今日はおかしいわ。童やら司やらお兄ちゃんやらおじさまやらファーストキスを考えるなんてまだ先のことよ。」

そこでおじさまというのに妙にひっかかった。

今日人工呼吸をされかかった担任となんて絶対にいやだが、それがもしナイスミドルなおじさまだったら、それもまた良いのではないかと考えてしまう。

「今日は本当に変だわ。さっさと寝よ。」

秋はベットのの中に潜る。

春になって最近あったかくなってきたのにまだ掛け布団をかえてなかったので暑すぎ、頭の中では色々なことがこびりついて離れず結局なかなか寝付けなくて寝不足のまま朝をむかえることになるのだった。

チャプター8（後書き）

秋にとって初めての臨死体験

これには海より深いわけがありません。

それは今後の展開であきらかにするつもりなのですが、簡単に説明するなら。今までの秋は、和也とちょっと記憶の奥底でつながっている勝ち気な女の子で、これからの秋は全く違うということですよ。

今回のテーマは、死神洋司との出会いと変化です。

この出会いによって秋はかなりの変化をしていきます。それらが伝わったらいいと思っています。

では、皆さんのご訪問に感謝の言葉を持ってあとがきを締めくくりたいと思います。

本当にありがとうございます。

チャプター9（前書き）

キャプチャー8の誤字修正と、キャプチャー3も発見いたしましたので修正をさせていただきます。

PVが気づいたら2万を超えていることにびっくりしております。本当にありがとうございます。

チャプター9

日本で一番強いのは小学六年生（ ）????

「はあ・・・いやだなあ。」

溜息をつき憂鬱な顔をしているのは蟹津秋（11歳）だ。今年の春に小学六年生になった秋は、いつもなら道着を着ると元気になるのだが、今日だけはそうもいかなかった。

「こんなことなら小学生の部でも手加減して負けておくんだっただけだ。」

道場で一番強かった秋だが、あまりにも強いので小学六年生になったのを期に一般の部門の大会に出されることになった。これも思いつきなどではなく、入門の時に一本背負いを決めてからお母さんと先生の中でいつかは全国大会にだそうと画策されていたようである。

中学にはいったら部活もあるので柔道をやめると知った二人が最後まででも秋の実力をたしかめる場所をつくろうと考えたらしい。そんなわけで、柔道連盟に掛け合い、小学生の部においては完全無

敵で、時々出された地方の一般の部でも優勝していたことから、全国大会への出場が特例的に認められたのである。さすがの竜もこの大会には参加できず、司と三人の家族と一緒に応援席である。

「せめて、負けてもいいんだったらなあ。」

道場で手を抜いていたのは実は林先生には結構すぐにはばれてしまい、それでも秋の意見を尊重してみんなには黙っていてくれていた。しかし、手を抜けばばれるのは確実であり、この大会には有名な選手なども特別ゲストできているのでこんな大会で手抜きをしたら真剣にこの大会に向けて稽古してきた人に顔向けできない。そして一番の理由は。

「もし秋ちゃんが手を抜いて負けたら、お母さんが素敵な男性を見つけて秋ちゃんのそのファーストキスを奪ってもらえるようにお願いしてあ・げ・る。」

とのことで、全部の試合を本気で戦うことが義務付けられた。しかも、この大会、なぜか階級の設定がなく、さらに男子と女子の優勝者で最後に試合をするという。

本当の意味での日本柔道の最強を決める大会らしく、手を抜けないだけでなく、下手をしたら不幸少女にさらに最強少女とかいう、あまり欲しくない称号まで付けてきそう怖い。

しかも、ウォーミングアップをしながら参加者の人たちを確認したが、正直ただ体がでかいただけだったり、技ばかりみがいていたのか動きがとろかったりする人ばかりであり強そうではない。

注) 実際は日本の指折りの選手が集まっており、実力も経験もかな

りハイレベルな大会である。

「まあ、適当に優勝して男子はさすがに強いだろうから、そこで負けて終わりかな。」

秋がそうつぶやくと近くでアップをしていた選手が睨みつけてきた。この人は確か一回戦であたるはずだ。

身長もそこそこだし、見た目はポニテのかわいらしい小学生の言葉に反応するあたり実力のほどが知れるというものだ。

そうしていると、開会式が始まり、一日目は参加人数が多いこともあって二回戦までしかされないうんたらかんたら、諸注意をすませると試合が開始された。

「はああ!!」

バタン

「一本それまで!!」

「とりゃあ!!」

バダン

「一本それまで!!」

たったの六行で一日目の試合がおわってしまった。

確かに日本でも指折りの選手が集められた大会ではあったものの、秋のレベルはそれ以上だったらしい。

普段全力を出せるような相手がいないため本人もそして周りも気付かなかつたが、本当に軽く女子の部門では優勝してしまいそうである。

「お疲れ様。」

「疲れてないわよ。試合時間二試合を合わせて一分未満よ?」

「まあ相手の選手がかわいそうだったねえ。あれでも結構有名な選手で二人目なんか前回のベストエイトらしいよお。」

「まあくじ運もあるし、優勝とかしているような人だったら本物の実力者だから今日みたいな試合にはならないわよきつと。」

「いやいや、この大会でベストエイトなら地方大会とか階級別では優勝してるような人やから、しかも秋の階級は一番軽い階級やる?」

柔道やスポーツのこととなると竜はまともなことをいうのでこれには秋も返答できないようだ。

実際本当の実力を知らない両親や林先生などは、この大会に出すこ

とよつて上には上がいることを教えて人生の教訓にしようなどと考えていたのだが、このままでは誤算もいいところだ。

まあ優勝したらしたで嬉しい誤算なのだからそれも良いのだろう。

「やけに大きなことをいつているが、今回は手を抜かないか私もバツチリ監視しているし、知り合いの選手にもよく見ておくように頼んでいるから穴はないぞ。真剣に取り組みなさい。」

「はい、先生。今回は私のファーストキスがかかっているので絶対に負けません。」

竜と司はチラリと好美の方を見る。

そろそろ付き合いの長い二人なので、どんな取引がされて秋が本気をだしているかなどはお見通しなのだ。

「それに優勝したら、ワンちゃん飼って良いつて約束したので」

小さい時から動物好きの秋は前からペットを飼いたいと言っていたのだが、家族の誰も家にいないので世話ができないからと許可が下りなかったのだ。

しかし、中学に進学して柔道をやめついでに今までのピアノやバイオリン習字などの習い事を全部やめれば秋は多少余裕ができるし、六つ上の武満は大学に進学するし、好美もパートの時間が減るのでそういうことならと犬を飼うことに決めたのだ。

実際利也などは負けたら落ち込んでいる秋をなくさめるためにもと考えており、勝つても負けても犬は飼うことができるのだが、

そこは負けず嫌いな秋はわかっていても是非優勝してワンちゃん獲得権を正式に両親にもうしたてたいのだった。

「それだけやる気があれば優勝まちがいなしだな。」

「お兄ちゃん柔道全然しらないのに無責任なこといわないの。」

「柔道を知つとる。俺も秋は優勝するとおもつぞ。」

武満と竜から激励の言葉をもらい、今日の試合はもう終わったので近くのホテルへとむかった。

「わああ。すつごい綺麗なホテル」

秋は思いのほか立派なホテルに歓声をあげている。

「秋ちゃんの晴れ舞台だからね。おじさんたちみんなはりきってたんだよ。」

そう言ったのは司のお父さんだった。

「ほんとすみません。なんだかんだいって私たちの分までだしていただいでして。」

竜の家は母子家庭なのでお母さん一人だが、竜の親友の大会とあって少し無理して休暇をとって参加していた。

「それじゃそれぞれの部屋に行って今日は休みなさい。特に秋ちゃんも明日が本番なんだからしっかり休むように。」

皆が話している間にフロントで鍵を受け取ってきた利也は鍵を渡しながら先頭にたって歩きだした。

「「「はあい。」」」

子どもたち三人は元気に答えると、そろそろと総勢九名の集団は各部屋に向かっていく。

「でもさあ。お父さんたちも、よくこんな部屋割りゆるしたよねえ。」

「

部屋に着くと初めに声を出したのは司だった。

三人ずつ人部屋になったとき、母親たち、父親たちプラス武満となり最後に子どもたちの部屋となったのだ。

さすがに交通費などもあり、大会に負けたらキャンセルをしなければならなかったのであまり多くの部屋をとることはできなかったのだ。

三日間ある大会なので明日負ける分には翌日は観光でもすればいいので、保護者たちは今日勝ち残ってくれた秋に心の中で感謝した。

「ま、三人とも幼馴染だし、気にしないってことだろ。」

「あんたたちねえ。着替えとかお風呂とか絶対に覗くんじゃないわよ?」

「大丈夫だよ。それに昔は一緒にお風呂入ってたしい。」

「は?マジか?どなんだった?」

とりあえず竜には残酷の右手がヒットした。

右手なのに司の方を見ていた竜には暗黒の要素も加わっていたことだろう。

「司はそんなことしなさそうだし、大丈夫ね。竜!絶対だめだからね。」

「バカ!絶対しないよ。」

「じゃあ信じてあげる。」

竜は約束をしたら絶対に守ってくれるという安心から秋はあっさり
と信じたのだが、もともとマセガキだった竜はそろそろ思春期を迎
える年ごろなわけで、信じてもらって裏切れない気持ちと、覗きた
い気持ちの狭間で苦悩するのである。

「竜う。今日見てわかってると思うけどお、秋は強いよお。」

普段のポケの突っ込みなんて完全に手加減してるんだからあ。下手
なことはしないでねえ。僕まで被害がきちゃうからあ。」

この司の言葉に、竜は生唾を飲んだ。

柔道では結構な強さをもつ竜は今日の試合を見て秋の強さが理解で
きた。

竜ならひよつとしたら善戦するかもしれないが、日本屈指の選手を
いとも簡単に投げ飛ばす秋の実力はただものではないのだ。

「わかった。絶対に覗かない。」

「なんか、それはそれでむかつくわね。まあいいわ。お父さんも言
ってたけどまだ二日もあるんだもの。今日はもう遅いしお風呂には
いって寝ちゃいましょ。」

そう言うとパジャマを靴から取り出し、バスルームの扉をあけては
いって行ってしまった。

多少豪華なホテルとはいえ、ユニットバスなので、二人は秋が出て
くるまでトイレを我慢しなければいけなくなり、いざとなったら隣
の父親たちの部屋にでも行こうかと相談するのであった。

「ん〜。よく寝た」

朝食はバイキングのようで、広間に三人はむかった。風呂から出た秋は交代で入っていく二人を置いて寝てしまったので、そのあとどうなったかしらなかったが、明るい場所で見ると、二人の目には大きなクマができていた。

「どうしたの二人とも？あんなにふかふかのベットだったのに寝れなかった？」

「僕らはね、今日秋ちゃんが女の子だったことを、睡眠時間を削って理解させられたよ。」

いつもは間延びする司が今日は伸ばす元気もなく秋には理解できない言葉で説明した。

「なに言ってるのよ。私は女の子に決まってるじゃない？」

「だって、まさかあんなムゲ・・・」

「竜、それ以上言ったら秋から警戒されるだけだからやめとこ。」

「了解。」

そんな三人の様子を保護者たちは暖かいまなざしで見つめていた。秋の両親は近頃女の子らしくなった秋のことをしているし、全員三人が幼馴染で意識をしない関係なのをしっていたので、これはこれで良い成長なので悪くはない反応だと考えている。しかし、明日からの部屋割りの変更しなければならぬだろう。

「まあいいわ。とにかく今は大会に向けてご飯ちゃんとたべないと！！」

頭の回転は速いが、前世の記憶の影響で女の子としての自覚が足りない秋は恋愛関係に関しては意外と鈍いのだった。

まあいつもそばにいる二人の意識が変わったのだから、今後の発展もあるだろう。

それでは第三試合を開催します。

今日は二日目ともあってある程度の実力者がそろっている。
今日の最初の対戦相手などは前回の優勝者で、今回も優勝確実だろ
うとされていた。

「互いに礼!!はじめ!!」

昨日と違い見た目で判断して油断してこない。
秋の様子をじっくり見ながらも大胆に踏み込んできた。

しかし秋は、『これなら、女子の部でなら竜も結構いいところまで
いくんじゃないかしら?』なんて考えながら試合にのぞんでいた。

「一本それまで!!」

様子を見たぶん前の選手よりも時間はかかったが、秋の半径1Mに
近付いた瞬間襟を取られ反応した時には受け身を取るのがやっとの
状態だった。

「ありがとうございました。」

結局そんなこんなでそのあとも順調に進んでいき、準決勝も勝って
しまった。

明日は決勝戦と三位決定戦と男子との試合の三つしか行われず、選手的には2試合しかない。それもそのはず、大会終了後にはかなり大規模な大会のため盛大な閉会式はトリフィーや賞金などの授与などもあわせて十分な時間をとってあるのだ。

「お疲れ様。」

「だからさあ。つかれようがないわよ。」

「あんな、昨日とちがって今日は優勝候補といわれてるような人ばかりだったんだぞ？」

「あれ？竜が標準語つかってる？やっぱり東京に来ると標準語にもどるの？」

「それ今あ、関係ないよお。」

あまりにも緊張感のない対戦ぶりに試合がない間休憩していたこと

もあって何とか復活した二人は元気になって秋に話しかけているのだが、秋の様子に結局力がぬけるのであった。

「ねえ。お母さん。どうせ明日は試合あんまりないし、疲れてないから少し東京見物いっちゃだめえ？」

今日の試合でも延長戦などもあり、かなり疲労がたまっている他の選手を尻目に、毎回一本だった秋は試合のためによく寝て、栄養を取っていてあり余った体力を発散させるべく、母親に懇願するのであつた。

「だめ、っていつて夜抜けだされたらそっちの方が心配だから少しだけよ。」

「まあ秋だったらやりかねないからしかたないな。」

秋のことを理解している好美と武満はしぶしぶといった形ではあるが、承認するのであった。

「じゃあさ、娯楽施設だと時間的にあんまり遊べないからシヨッピングにしよう。」

「まったく、じゃあ俺たちは先にホテルに帰っているから、お母さんとあと竜さんと司くんは一緒にいくだろ？」

保護者たちはホテルのバーでお酒を飲むのだろう。

武満は未成年だが、もう体は十分にできているので少しくらいなら大丈夫だろう。好美はひとり、お酒は飲めないのでもうこの時はいつも子どもたちのお守りをするが、

本人も楽しんでいるのでよしとする。今後の方針も決まったので保

護者達は電車で、子どもたちは秋のこともあるので少しリッチにタクシーで移動を始めた。

秋は不幸少女なのでこういう時に公共の施設を使うとたいいてい事件に巻き込まれるので、できるだけタクシーなどの事故などの起こりにくい移動手段をとっているのだ。

「わあ。このネックレスかわいい。」

百貨店のようなところに着くと、秋はショウウィンドウをなめまわすように見ながらアクセサリや服などをみていた。

「やっぱり、秋は女の子だよな。」

「昨日実感させられたばかりじゃないのぉ。」

よく一緒に遊ぶとはいえ、元々田舎である海良町にいるときは一緒にシヨツピングなど行かなかったため、ここでも二人は女の子な秋の一面をみせられた。

「ねえねえ、どっちがいいと思う?」

「……」

「最近サイズが合わなくなったし、せつかくだから買ってくれるんだって」

男二人は、ふりふりのついたブラジャーを手に話しかけてくる美少女にかたまるしかなかった。

二人が無言のため秋は仕方なく母親に聞くためにまたランジェリーシヨツプの中に入って行った。

「あれをこたえるのか?」

「いやあ、僕らに聞くあたりは秋ちゃんらしいけどねえ。」

「無理だよなあ。」

「まあ、あんまり意識しなかったけどお、女の子らしくなってきたのは確かだし。」

「というか、普段は気付かなかったけど、秋って美人だったんだな。こうして他の女の人がいる場所に来ると意識させられる。」

「はあ・・・」

この二日間で秋の意外な一面を存分に体験した二人はため息をつくしかなかった。

しばらくたつと、女の子の買い物は時間がかかると気づき、二人で好美に声をかけ、百貨店内にある紳士コーナーを回ることにした。

四人が合流し食事を済ませると時間はもう8時になっており、今からホテルに帰ればちょうど良い時間になったのでまたタクシーを拾いホテルへ帰ることになった。

「ねえねえ、ボクまたおつきくなってたんだよ。」

「そっか、成長期だから身長も伸びるよな。」

「違うよ。胸だよ。Cカップだってさ。」

「んな報告いらんわ!」

「あ、今日初めて竜の関西弁聞いたかも。」

「そっかもお、今日は竜ずっと標準語だったもんねえ。」

二人はそれぞれ秋を意識しないように必死だが、恋愛にとことん鈍感な秋は逆に二人の眠っている男の子の部分を刺激してしまってい

るようだ。

「おばさん。どうかしてくださいよ。」

「どうにかって？何かあったかしら？」

後部座席に座っているので顔は確認できないが助手席であきらかにニマニマオーラをだしている好美に、二人はまたそつと溜息をつくのだった。

「もう、今日は朝から二人変だよ？どうしたの？」

「「なんでもない！」」

結局ホテルに帰ると部屋割りの変更されることになり、秋と好美が

入れ替わることになった。

お酒を飲みに行った二人は部屋にいなかった。秋は不思議に思いながらもベットに潜り込むと、決勝の前だからほぼ一人部屋になるようにしたのかな？

と考えすぐに寝るようにした。

強豪選手が昨日の時点で倒されてしまったため、決勝戦は本当にあつけない終わり、実力の拮抗した三位決定戦の方が、盛り上がったくらいである。

そして優勝が決まった秋は最後の男子との試合のために会場の隅でストレッチをしながら出番をまっていた。

決勝戦ともなると報道陣もあふれかえっており、特に小学生でしかもらくらくと勝ち上がった秋には取材やカメラが多数向けられ、肉体的には全く疲れていないが、精神的にはかなり疲れてしまう秋だった。

「すみません。まだ小学生なので取材などは保護者を通してください。大会終了後にあらためてきちんとした場所を準備しますので、会場内での撮影などは控えてください。」

林先生はスタッフの人たちと一緒にあって秋を守るようにして立っていた。

こんな状態では応援している竜や司たちも近付くことができずに、応援席で心配そうにみているだけだった。

「それでは、男子と女子の優勝者による親善試合を始めたいと思います。両名中央へ。」

アナウンスが流れると、やっと報道陣から解放されゆっくりと歩いていく。この試合は他のものとは違い勝敗よりも親睦を深めることが目的のため試合の前に、それぞれ中央で握手をし会話を交わすことになっている。

「君が秋ちゃんか、小学生ってきいていたけど、とってもかわいいね。」

「ありがとうございます。良い試合ができるようにお互い頑張りましょう。」

秋がそう言うと相手の男は口の端を少しあげいやらしい目つきで胸の方をみてきた。おおかた寝技にでももっていかうと頭の中でエロいことを考えているのだろう。

元男の秋には相手の考えることがわかってしまい。握手もそこそこに、最初の位置にもどっていった。

「これより親善試合を始めたいと思います。両名礼、はじめー!ー!」

男の方は女子の部門の試合を見ていなかったため秋の実力を知らない。
本来ならそれでも男子の方が圧倒的に有利なのだが、階級差の無いこの大会で軽く優勝していたことから秋にはそんなハンディはあつてないようなものだった。

「本当はここまできたら流石にお母さんも怒らないからこの試合だけは負ける予定だったんですけどね。」

そう言うと、ゆっくり値踏みをするように近づいてきていた男に向かって踏みこむと

「一本!!それまで!!」

男は畳の上で受け身もうまくとれずに倒れてしまった。

「えへっ 勝っちゃった」

舌を出しかわいらしく微笑む秋の姿を報道陣はまばゆいばかりのフラッシュで迎え、その日の夕刊や翌日からの新聞にはポニーテールを揺らしている秋の写真でいっぱいになってしまったのだった。

「俺、秋の前では失言しないように努力するわあ。」

「僕もお、今までいじってきたけどお、流石に命の方が大事かもお。」

今後の秋との付き合い方について語り合う親友ふたりの横では、先ほど秋がしたことの意味をあまり理解していない保護者たちは「

やったあ！！」などと浮かれてはしゃいでいる。
こうして名実ともに最強の不幸少女となった秋は、かなり多額な賞
金と一緒に不名誉な称号を与えられることになるのであった。

<最強美少女現る！！日本で一番強いのは小学生の女の子！！>

「なによこの見出しいい！！！」

新聞の見出しをみてみて絶句する秋に周りは生暖かいまなざしをお
くるのだった。

「良かったな。不幸少女から最強美少女に変更だ。」

「そうだよお。しかもお、美少女だってさあ。」

「ボクが美少女なのはいいのよ。それよりも記事の内容と副見出しよ」

そこには、快拳をとげた勇士がつづられているのかと思いきや、秋の容姿を誉める文章や、

ロリコンたちの注目の的になっているという変な話、“ポニーテールの妖精”などを含めた巷での様々なありがたい迷惑な呼称など、かなり本人とは関係のないものまで書かれていた。

「そっか、林先生が情報隠しとるんやったな。あんまりにも報道陣がきてたから多少の情報漏れはあるみたいやけど、全部公開すると秋たちの生活が狂ってしまうとかいうとった。」

「それは、わかってるわよ。でも情報がないからって、この記事はなんなのよ。一日目から取材にきている記者さんもいるんだからきちんとした記事書いてよ。」

「無理だよ。正確な情報を持っているのは一部だけだから。ほとんどが最終日にきただけだからねえ。しばらくはデマとかが流れちゃうのはあきらめなきゃあ。」

そんな話をしていると、教室の扉が開いて一つ学年が下の女の子がはいつてきた。

「あの・・・サインください。」

彼女は道場でも一緒なのでよく知っている。新聞をみてすぐに秋のことだとわかったのでわざわざ色紙まで用意して朝一番にサインをねだりにきたのだろう。

「サインなんてしたことないからてきとうだけいい？」

「はい、できれば愛をこめて真奈美へって書いていただけると嬉しいです。」

「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

流石に無理だったので自分の名前と相手の名前を習字でならった点字で書いてあげた。

点字なので内容がわからないので本人は嬉しそうに色紙を抱きしめると教室をでていった。

「あつはつはつは！！良かったな。次の記事はく恋人は女の子？ホテルから出てくる最強美少女の傍らにはいたいけな少女が>これで決定やな。」

あほなことを言い出した竜には殺戮が待っていた。
失言を控えるとの言葉は早くも実行不可能なようだ。
逆にこういう時にならず茶化す司は空気を呼んでおり、竜の介抱をする振りをしながら秋に見えないように笑うのだった。

「ボクはユリでもバラでもない！！ノーマルだ！！」

女の子がバラとか言っている時点でおかしいのだが今日の危機迫る秋の様子に突っ込みをいれられる人物のうち、

一人は最もダメージの高い殺戮の頭突きをくらって床に倒れており、もう一人は下手にあおることができないため、笑いをこらえながらも親友の勇士をながめるのだった。

チャプター9（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

伏線を少しだけ回収でき、さらにこれからの展開にたくさん伏線をはる話になりました。

不幸体質な秋はあまり目立つ存在になるのは良しとは思いません。あと、今回は初めて完全な第三者目線での字の文に挑戦しました。というかこの話を伝えやすくするために挑戦させていただきました。次の話でようやく洋司さんと本格的に話す機会があります。

この大会で優勝しちゃった理由などもそこで明らかにする予定です。

今回のテーマは“最強”です。気持ちいいくらい強い秋ちゃんが表現できていたらこの話は成功だと思っています。

もしみなさんの気持ちやAKIに協力してやろうと思いましたが意見・感想おまちしております。

今回もみなさんの貴重なお時間をAKIの小説のために割いていただいて本当にありがとうございます。

チャプター10 (前書き)

PV三万突破&ユニーク1万突破いたしました。
みなさん本当にありがとうございます。

それでは、チャプター10をお楽しみください。

チャプター10

ナイスミドルとファーストキスの行方

最強美少女の称号を得たボクは、実に過ごしにくい日々を送っていた。

新聞の一面だけでなく各種のメディアに取り上げられてしまい、そうなるとうなると田舎町である海良町では顔がばれてしまっているため、学校でも登下校中でも今まで話しかけられたことのない人からも声をかけられる毎日だった。

「まあもともと不幸少女で有名だったんやから、回避対象として見られるか尊敬対象になるかの違いやん。」

「それでもさあ。林先生のおかげでえ、マスコミは来ないんでしょあ？」

「そうでもないのよ。いつまでも隠し通せるわけじゃないからってことで、来週末には取材と記者会見のために東京にいかなきやいけないのよねえ。」

「そっか、じゃあお土産よろしく!!」

「バカ!!ギヤラも出るし交通費から宿泊費まで全部マスコミ持ちとはいえ、おかげで時間の余裕もとれなくてせっかくのワンコ参観日の予定がパーなんだから。」

かなり多額の賞金をもらったボクにとってはお金よりも念願であったワンコが遠のくことの方が重要なのだ。

このままでは本当に中学にはいるまでワンコの無い生活になるかもしれない。

こうなったらギャラついでにワンコも請求するとか動物と一緒に取材など以外は断るのも手かもしれない。

「はいはい、ワンコが大好きなのはわかったからギャラで請求するのだけはやめとけよ。」

またしても口に出していたらしい、司ならともかく竜に言われたのだから確実に口にしたのだらう。

この癖は直さないといけないな。

マスコミの前で変なことを口走ったらこんどは妄想美少女なんてあだ名がついてしまいそうだ。

「とところでえ、今日は何で竜の家なんかに行くのお？」

「ああ、それは竜のお母さんが優勝祝いにご飯をごちそうしてくれららしいのよ。ほら、ちょうどバスも来たし、行くわよ。」

遠くの方からバスの影が見え、こちらに近付くにつれて速度を落とし始めていた。

あれ？

あの子・・・

ボールばかりみて、バスに気づいていない？

気づいてしまうと体が勝手に動きだした。

学校の側のバス停なため広い敷地でたくさんの子たちがまっている中、皆の視線をさけて後ろの方にいたのがあだになった、今向かっ

ても間に合うかどうか怪しい。

耳をつんざくようなブレーキ音とともに、迫りくるバス、やっと少年は気づいたようだが、驚いてしまって硬直している。

「あぶない!!」

バスとぶつかる寸前に少年とバスとの間に体をねじ込むと、少年をかばうように抱きかかえる。

「キィィィイ!!!!ドカッ」

ブレーキは間に合わなかったようで、強い衝撃とともに、意識がフエイドアウトする。

『こんにちは、秋ちゃん。』

『こんにちは、洋司さん。』

『もう少し驚くかとおもっていたけど、大丈夫そうだね。』

『はい、前回の記憶のおかげだと思います。先に質問なのですが、エンマ帳ではあの子はまだ死なないのでしょうか？』

『おどろいたね。そんなことまで記憶の復元がすすんでいるなんて大丈夫だよ。君のおかげで多少の擦り傷はあるものの、大事にはいっていない。』

『それはよかったですね。これで助からなかったら痛い思いをした意味がないもの安心しました。』

『和くんの記憶が復元されつつあるのに女の子の言葉づかいなんだね。』

『復元されたから余計に、です。』

『そうか、そうだったね。秋ちゃんは賢い子だったね。じゃあま
り前置きを置かないで説明をはじめよう。』

『はい、助かります。』

『今回こうして話しているのは長い間臨死体験をするから説明を十

分にできるためであること、そして記憶の復元が未完成であるため。」

『そうですか。でも、一般人であるはずの私にこのような記憶を残してよろしいのですか？』

『それについてはもう少し説明してからにしよう。先に秋ちゃんの記憶が部分的にはいえ残っていることについて、秋ちゃんが再転の間にいたことに関係してくるんだ。あそこには同時に保存の珠玉が置いてある。本来万全をきすために、保存の珠玉には複数名入るのが普通なんだ。』

『でもあの時は洋司さんしか入っていなかった。』

『その通り、ではなぜ僕しか保存の珠玉にははいつていなかったのか。それは鬼人ではない秋ちゃんの記憶を部分的とはいえ残すためなんだ。』

『でもなぜそんな回りくどいことを？』

『それは将来秋ちゃんが鬼人になるからだよ。そして前世では鬼人でなかった秋ちゃんには保存の珠玉の溶液はきつすぎるため、間接的な方法をとらざる得なかったからだよ。』

『鬼人にですか。冥界で保護されるなんていうからおかしいと思っ
ていたら、再転の宝玉や保存の珠玉に加えて真実の鏡まで使うので
すね。』

『本当にすべてお見通しといった感じだね。あ、ちょっと話は中断
して見てごらん。』

いきなり話を中断されて驚いたがボクは洋司さんが指さす方向をみて絶句した。

『ボクのファーストキスが・・・』

そこには一心不乱に心肺蘇生を行っている竜の姿があった。

道場で教えられてできるようになったとはいえ、初めてのことにぎこちないしぐさではあるが、一生懸命ボクのことを助けようとしている姿はちよつとかつこよかった。

しばらく啞然としてみると、近くの民家で電話を借りて救急車を呼んだことを司が伝えてくれた。

素早い応急処置は蘇生の確率を飛躍的に伸ばすというので、今回は竜の応急処置と司があわてずに救急車をよんでくれたことがボクの命を救うと考えると、さっきまでの羞恥心はどこかへ行き、感謝の念で涙がでてくる。

少しの間ぐずっていたが、だいぶ落ち着いてくると洋司さんが声をかけてきた。

『秋ちゃんはこんなにも愛されているんだ。頭の記憶は生きかえった時に消えるけど、感謝の念の様な魂の記憶は残ることが前回の再転の前に確認されている。生きかえったらきちんとお礼がいえるはずだよ。』

この、感謝の念が消えないことがわかり、少し安堵したボクは顔をあげ、洋司さんを見上げた。
すると洋司さんはボクのことを優しく包み込むようにして抱きしめると、顎をもちあげ、

『鬼人である僕には現世の君にキスを送ることはできないけど、魂のファーストキスはいただくね。』

そういつて、優しくボクに唇を近付けた。

ボクはさつき現世で感覚はないとはいえファーストキスをされたばかりなのに、魂のファーストキスまでされそうになりびっくりしたが、なぜか抵抗する気が起きずにされるがままになっていた。

しかし、眼を閉じていたのにいつまでも唇にその感覚がやってこない。
い。

そういえば抱きしめられているはずなのにその感覚さえなくなっていた。

『まだ、不完全なままか、ファーストキスは36回目の臨死体験までお預けだね。』

目をあけると、そのままの格好だが、ボクの体が透き通ってしまっただよつで、

洋司さんのうでが不格好にクロスさせられ、普段のナイスミドルな微笑みを苦笑いにした洋司さんがいた。

魂の方の唇はとりあえず今のとこと守られたらしい、そのことに安堵の気持ちと残念な気持ちが半分といった気分だった。

『ここで、唇を奪っていたら、鬼人になるのを早めることができたのだが、まあ当初の予定通り秋ちゃんには45歳から鬼人になって

もらうことにしよう。』

『え？キスが鬼人に関係あるのですか？』

『冥界とのつながりが強い秋ちゃんなら、真実の鏡の力だけでも鬼人になれるだろうけど、鬼人と交わることによってより安全に鬼人化が成功することになるんだよ。』

無駄なことをあまりしない洋司さんのことなのでそんな気がしてはいたが、そこまで理由のある行動だったことに胸の奥でチクリと何かが痛むような気がした。

『そこは嘘でも優しく愛の言葉をささやいてくださいよ。』

『もちろん秋ちゃんのこととは好きだけど、秋ちゃんにはまだこれから現世での生活があるからね。』

冥界とのつながりを深めるのはもっとゆっくりでいいんだよ。今後の臨死体験では、それらの作業に入るつもりさ。』

『しかし、普通とは違うとは思っていましたが、鬼人になれるほどだったとは・・・』

『前世もあわせて冥界で清められた強い魂と今回は300年もの寿命をもつ強い肉体があるからね。』

再転をしなかった場合は肉体が損傷をうけて魂が著しく低下するためいくら回数を重ねても鬼人化は中々難しかったが、だいたい30回目の臨死体験以降であれば鬼人化は可能になるだろうね。』

『肉体と精神はそんなに密接に関係しているんですね。でもそれだ

「だったら今回だってそれだけの数の臨死体験をしたら体がこわれてしまうのでは？」

「大丈夫だよ。今回の秋ちゃんは和くんの時とは違って普通の人は違って強すぎる肉体に魂の方がついていけるだけの成長をしているから、これからおこる困難を柔軟に乗り越えて今後ここまで長い臨死体験をすることもほとんどないんだ。」

「さりげなく今後の人生が平穩無事ではないことがわかってしまいましたね。しかも、その言いぶりだとボクはかなりの超人になってしまうのではないのでしょうか？」

「和くんの人に比べたら平和なもんだよ。最後の臨死体験の理由も食中毒かなにかだしね。秋ちゃんの超人的な性能についてなんだけど。」

最後の臨死体験ということは現世での死因にあたるはずのことが食中毒と聞いてボクの中になにか大事なものをなくした気がしたが、もっとカッコ悪い死因はたくさんありそうなので我慢することにしよう。

「秋ちゃんは今後実力的には東京大学に軽く主席でうかって地球上どんな大学にだって行けるだろう頭脳と、正直オリンピックピックに出場したら出場可能であればほぼすべての種目で金メダルくらい取れちゃうような運動能力をもっているかな。」

「ええ？それってかなりの大問題なのではないでしょうか？」

「そうだね。でも秋ちゃんだから、今後家族や竜くん、司くんと相談してそれらは隠して生活するようになるんだ。」

高校や大学には首席合格をして学費は必要ないように調節するみたいだし、運動だって個人での遊びの時は思いつきり力を発揮するけど、大会などは前回の柔道のことがあってからはある程度手を抜くのをまわりも認めてくれるからね。』

『そうですか。でもそんなすごい人もいるんですね。なんか欠点が見つからないですね。最強美少女じゃなくて、完璧美少女だったんですか?』

実際は不幸体質というやつかいな欠点があるのだが、これは棚にあげておいた。

洋司さんも不幸少女に関しては気にしていないのか。

『本来否定したいところなんだけど、これだけ完璧でしかも性格まで良いから現世においては完璧美少女っていつでも間違いないだろうね。』

それだけ、様々な分野において鬼人になっても認められるような人物ってことさ。』

『そうなんですか。まあ、不幸少女なんで、恋愛などができないことだけが少し残念ですが。おおむね良好な未来が見えてきました。』

前世の記憶が残っているので不幸に巻き込まれて離れていつてしまった恋人たちに悲しい気持が隠せないが、これだけなんでもできるのであれば、贅沢をいうのも悪いと思い、前向きに考えることにした。

『うーん。前世と違って鬼人になることが決まっているから問題ないし、少し教えてあげるなら、秋ちゃんも女の子だから大丈夫だよ。』

大学を卒業後は小説家になるんだけど、自分の不幸体験を書き記してベストヒットを連発させ、きちんと永久就職もして不幸体質を除けば幸せな人生を送る予定だから。まあ小説を書くのは和くんも予定していたみたいだけどね。』

『エンマ帳って確か生死にまつわることしか書かれていないはずですよ？』

『ああ、会社にも入ってるかもしれないけど、小説を書くのは確かだよ。ファンの人からの贈り物で臨死体験をするし、結婚に関しては子どもが生まれるからわかって当然なのさ。』

『理解しました。というかわかっているけども気づきたくない事実を理解させられました。』

このあとも、現世に持ち帰れないはずの現世での能力について、今後の鬼人化にむけてのこと、それに秋についての話だけでなく、冥界や洋司のことなどをのんびり話しながら救急車にのって運ばれた体にもどるために病院にむけて飛んで行った。

『今さら言つのも変だけど、これからよみがえろつというのにほん」と落ち着いているよね。』

『エンマ帳で、前もって予定を把握している洋司さんがいますから洋司さんにあわせていれば特にあわてる必要がないじゃありませんか。』

『エンマ帳に乗っているのは生きかえる時間くらいなものだし、そ

れだって僕がすっかり時間を間違えてしまつかもしれないじゃないか？』

『うーん、でも今までそんなことが一度もなかったので信じますよ。洋司さんなら大丈夫なんだって安心感があるんですね。』

『全幅の信頼をありがとう。さて信頼に応えるべくそろそろ準備を始めようかな。』

『はい、大変な仕事なのはわかっていますが、回避不可能なようですのでこれからもよろしくお願いします。』

『はいはい、臨死体験を当然のように受け入れるのもどうかと思うけど了解したよ。』

洋司さんは以前のように頭に手を乗せると記憶を操作するために集中するのか眼を閉じた。

その姿になんだかほっとするような、そして少しのドキドキを感じながらボクも目を閉じ冥界とのしばしの別れを告げるのだった。

「意識を取り戻しました。」

「秋！」 「秋い！」

「秋！！お母さんよ分かる？」

「秋ちゃん！！」

病室には竜と司、好美と祝賀会のために休暇をとっていたから駆けつけることができた竜の母親がいた。

「おはよう。よく寝たよお。」

「馬鹿。こんな時にぼけるんじゃないの。」

「開口一番冗談をいえるんなら平気そうやな。」

さっきまで意識がなかったとは思えないのんきな発言に安心した秋に、四人は緊張した顔から少し疲労はあるもののそれでも笑顔を見せた。

心配をかけてしまったことに申し訳ない気持になったのだろうが、確認したいことがあったので口を開いた。

「あの子は？」

短い言葉だったが、察しの良い司には伝わったらしく答える。

「かすり傷程度のものだよお。一応検査のために病院にいるけどお、特に問題ないみたいだよお。安心してえ。」

間延びした司の声と少年が無事だったことに対する安堵から秋は自然と笑顔をみせる。

そんな様子を見ながらも医者はテキパキとなにかカルテやら機械やらをいじっていたが、最後にもう一度体を確認すると、もう大丈夫だろうと判断したようだ。

「安心してください。意識もはっきりしているし、しばらく入院はしていただきますが、若いこともありますし、きっとすぐに良くなりますよ。」

外傷も大したことはないし、骨や神経の方も正確な検査は後日行いますが、おおむね問題ないでしょう。」

声にいつものハリはないものの、医者からの言葉もあり今度は完全に安心したのだろう。

好美以外は安心したようで、意識がもどったばかりなので病室を後にした。

「お母さん、また心配かけちゃってごめんね。」

「本当よ。ついこの前川に溺れたかと思ったらこれだもの。親より先に死ぬなんて絶対やめてよ。」

実際は300年近くも生きるし、逆に現世においては親よりも先に死んだことになってしまっただが、現世の秋と好美はそんなことも

しらない。

心の底から心配をする母親と申し訳ない気持ちでいっぱいなのがそこにはいた。

「無理かな。ボクだって死にたいわけじゃないし、こんな経験好きでこんなことしてるわけじゃないけど・・・。」

やっぱり、今回みたいないなことがあったら体が動いちゃうと思う。だって、あの時助けられたのについて後悔したくなんてないから。」

「それで、秋が死んじゃったら意味ないじゃないの!！」

「ううん、ボクはもう既に二人の命を救ってるんだよ。こんな体質だからこれからだってそんな場面あるかもしれない。」

そんな度に見殺しにして自分が安全な方法をとるなんてボクにはできないよ。」

秋の言葉に、今までたくさん起こってきた出来事と、性格を知っている好美は、

悲しくて心配で張り裂けそうなおもいと、立派に成長した娘への嬉しい気持が同居していた。

「それにね。前にも言ったけどボクには司と竜がいるし、今回は偶然間に合わなかったけどこれでも最強美少女だから。ちょっとやつこのことじゃしないわよ。」

そう言って微笑む自分の娘に、強い意志と希望の光を見た気がする好美だった。

「いいわ。お母さん人助けをするなどはこれから絶対に言わない。でもね。」

できるだけ秋が安全な方法をとって、今回みたいに自分の身を呈して守るんじゃないかってあなたも相手も助かるような工夫をしてちょうだい。」

「うん、約束するよ。どうしてもじゃない時を除いて絶対に自分の命も大事にするね。」

「まったく、本当はどうしてもじゃない時は自分の命を優先してほしいけど、それは秋だから仕方ないわよね。」

本当に普段は親孝行な子なのに一番大事なことで親不孝なんだから。

「好美は普段から子どもたちの意思を尊重してくれるところがあつた。命にかかわることだけに今回は引き留めたい気持ちも大きいようだ。」

秋の様子をみてそれが不可能だと察すると、せめてもの妥協案としてできる限りでも自分の命を大事にしてもらうように説得するのだつた。

「お母さん、できたら竜と司と話したいんだけど、三人だけで、良いかな?」

ベットの横でまだ様子をうかがっていた医者に確認をとると好美は答えた。

「お医者さんももう大丈夫って言うてくれたしあの二人ならいいわ。」

そうして、医者と共に病室をでると一言一言二人に何かをつげて入れ替わるように司と竜が入ってきた。

「本当にもう平気みたいやな。」

「ほんとに今回は心配したよお。」

「心配かけてごめんね。あと、本当にありがとう。」

「なんだよ。あらたまっちまって。」

「みずくさいよお。」

司はいつもと変わらない様子だが、竜はなにか緊張しているようだ。緊張するとえせ関西弁が標準語になるのかな？

「だって二人がボクの命救ってくれたんでしょ？誰も説明してくれなかったけど、あの場で対処できたのは二人くらいしかいなかったからね。」

「ああ、司が近くの民家に駆け込んで救急車を呼んでその間に俺が心臓マッサージをしたんだ。」

「やっぱり、そうだったんだ。ということは胸さわられちゃったなあ。どうしよう。秋は汚れてしまったわ。もうお嫁にいけない。」

からかい半分でそんなことを言うと竜は真赤になってうつむいた。

「違うよお。前と違って呼吸もとまっていたから人工呼吸もしてたよ

「お。」

「「……………」」

空気を読める司のことだ、態と教えただろう。

「人工呼吸……ってことは??」

「ごめん、ファーストキスの相手は俺だ。」

真赤になりながらも前からファーストキスにこだわっていた秋のことを知っていたので、申し訳なく思っていたのだろう、竜は思い切り頭をさげた。

「いいわよ。緊急事態だったんでしょ。」

いきなりのもので、驚いたものの状況が状況なので怒ることもできず、むしろ感謝の気持ちの方が大きかったので秋は許してあげることにした。

「それに、初めてが竜でよかったわよ。」

「へええ。秋ちゃんもたまには素直だねえ。」

「バカ!!そんなんじゃないわよ。変態ロリコン男とか定年すぎのおじいちゃんなんかと比べたらましっただけよ!..!」

そう叫びながらも、流石に恋愛に鈍い私も司の言っている意味がわかった。

秋は自分でも顔が熱くなって、真っ赤になっているのが鏡を見ないでもわかり、よけいに恥ずかしくて布団をかぶろうとする。

「いた!!」

思っていた以上に体に負担がかかっていたようで布団を引き上げることには失敗し、顔を隠すことはできなかった。

しかし、そんな様子を見て口は元氣だが人が人なのだと二人も気づき、さつきまでの桃色の雰囲気は和らいだ。

「まだ安静にしてる。ブレーキ踏んだとは言えかなりの衝撃だったらしいからな。」

まだ、標準語が抜けていないので少し緊張はしているのだろうが、それでも心配していつてくれているのでふざけるのはやめて、素直に聞いておくことにする。

「うん、ともかく感謝してるの。これは本当よ。ありがとう。」

これまでも何度も助けられた二人に、今回は命まで助けてもらったこともあり、

感謝の気持ちをもう一度伝えると二人はそれぞれ微笑み、大したことはないといってくれた。

するとノックの音が聞こえて今度は看護婦さんが入ってきた。

「けが人なのでそろそろ面会は終えて安静にしてください。」

そう言うと、さっき動かそうとして動かなかった右手とは逆の左手についている点滴を確認したりとボクの状態をチェックしだした。二人は「また来るから」といって病室を出て行った。

精密検査の結果右手にはひびが入っているためギブスをはめることになったが、夏までには今までのように戻るといわれ、他には目立った外傷もなく週末までには退院できるとのことだった。

マスコミの取材はわざと包帯だらけで行くことによって顔を隠せし、家族と話し合った結果今後このような大会には参加しなくてもよく、

学校などでもあまり目立ったことをしたくないという秋の意見を取り入れることになった。

ちょうど良いので子どもを救って怪我をし、その事故のせいで選手生命がたたれたことにしてメディアには伝えることにした。

それと、助けた男の子の両親からは涙ながらに感謝され、ひとりっこだったらしくどんなに大事にしていたのかが伝わり秋も嬉しくなった。

今回はいろんなことがあったが、少し成長することができた三人だった。

チャプター10（後書き）

皆様にお礼を綴る前に先にお詫びを、話の途中で視点が変わってしまいました。

本当に申し訳ありません。

読みにくく感情移入がしにくくなっていたら本当にごめんなさい。AKIもずっと秋視点でと考えて苦心をしたのですが、伝えたいことを表現しようと考えた時にやはりこの方法が一番のように思いました。そのような形に落ち着きました。

今後もAKIの判断によりこのようなことが起こるかもしれません。

それなら、話を二つに分ければいいのかもしれませんが、あまりぶつ切りになるのもどうかと考えてどうせ一話ずつ投稿するなら読み応えのあるものにしたかったのでこれでチャプチャー10にいたします。

話の内容に入ります。

ちょうど10話目ということもありまして今回は節目となっております。

今回のテーマは“秋の謎”です。この作品は、秋が幸せを手に入れるお話という趣向ですので、秋にまつわる周囲の想いや秋本人の秘密について節目であるこの10話を通してみなさんに理解していただけたらと思っています。

ついでに、前回の臨死体験が大会前に必要だった理由については魂

との調和のために一度冥界とのつながりが必要だったのです。
実はあの臨死体験前は、普通の女の子に近かったのですが、あれ以降秋ちゃんも鬼人に向かって邁進しております。
こちらへんはとあるアニメの野菜星人みたいですね。

それではここまで読んでいただき読者の皆様には本当に感謝しております。

ありがとうございました。

チャプター11（前書き）

今回と次回は完全につながっております。

チャプター 11

秋の（ラブラブ？）大運動会！！

「ほんとあんな大きな怪我したとおもえへんな。」

「右手が使えなかったから授業とか大変だったんだから。」

「まあでもおかげでえ、僕らもまじめに授業受けるようになったよ
お。」

そうなのだ、この二人はいつもボクに頼って授業を受けていたので
今回右手の使えないボクがノートを書けないようになった影響で小
学六年生にしてやっと真面目に授業をうけだしたのだ。

「意外とちゃんと授業受けると面白いもんやな。いつも秋から勉強
のやり方教えてもろてたから結構ついていけるしな。」

「そうだねえ。中学になつたらクラス分けなんかもあるしい、ちゃ
んと勉強できるようにならないといけないねえ。」

「本当よ。学生の本分は勉強なんだからしっかりしなさいよね。」

「そのの三人！！さっさと次の場所いきなさい！！」

「……はあい」「」

三人でまったりと会話をしていたが、実は今は運動会のリハーサルの真っ最中である。

運動会の知らせがあったころにはまだギブスがはめられており、司と竜も面倒なことは他のクラスメイトに押しつけてしまったのであまり仕事がないとはいえ、最上級生として最後の運動会なのでしっかりやらなければならぬ。

この学校は縦割り班で全校生徒を4つの組にわけて競技をおこなうのでバランスを考えた班分けをされた結果、運動神経の良いボクらはライバルどうしである。

「秋の大運動会を開催します。」

「よかったな。秋のために運動会ひらいてくれるんやて。」

古典的なボケをする竜に突っ込みをいれつつ、前をむく。

「そう言えば最近秋ちゃんってえ。竜に優しくなったよねえ。」

「は？なにいつてるのよ？」

「さっきみたいなボケがました時はあ、いつも悶絶させるダメージを与えてたのにい。」

「骨折してる手で殴るわけにもいかないし、これでもギブスとれた

ばっかりなんだから当然でしょ。竜に優しくなっただんじゃなくて自分の体を大切にしているのよ。」

そうはいつているが、実際怪我もずいぶん治っており右手でなくても突っ込むことはできるので悶絶させることは可能なのだが、なぜか前ほど竜のポケや失言に強くあたれないでいるのだった。自分でもよくわからない変化にとまどっている。

「まあ、最強美少女に攻撃されたら、俺の命がいくらあってもたりひんわ。」

「そっか、最近竜って男女ネタ言わなくなったかも、前一番腹がたつた失言がなくなったからボクもそれほど強い突っ込みしなくなっただよ。」

「確かにねえ。竜最近秋のこと男っばいとかいわなくなったねえ。」

そういつてニマニマしている司に少しキョトンとしてしまう。暴力が減って介抱する必要がなくなったからよろこんでいるのだろうか？

「当然だろ、司だって同じじゃないか。」

「確かにい。でも竜は特に最近かわったよねえ。」

そういつと、なぜか竜が赤くなっている。それに標準語になっていることからなにかテンパっているようだ。まあ二人とも楽しそうだし悪いことを考えているわけでもないし良いとしよう。

「ねえねえ。この前100Mはかつたら怪我の影響でかなりタイムおちてたのよ。ちょうど二人のタイムと変わらないし、今度の運動会賭けをしない？」

「へえ。そう言えば秋と勝負事なんて久しぶりかもお。いいよお何をかけるう？」

幼稚園時代あんなに対抗意識を燃やしていた司も小学校の半ばにもなると秋のスペックにあきれて勝負事を申し込まなくなった。

しかし、それまでの勝負と武兄ちゃんと約束した野球をはじめたことによつて運動神経はとても良いので100Mのタイムはかなり良い。

「ついに秋を俺の前にひれ伏させる時がきたか。で？何秒だったんだ？」

一方竜は柔道などでもずっと対抗意識を消すことがなく、前回の大会を見て流石に表面上は見れなくなってきたが、

小学校六年間の間中ずっとボクにことあるごとに勝負を挑んできていた。

もちろん一回も勝ったことがないが、じゃんけんですら動体視力と反射神経のいいボクには負けているので、最近では公平になるようにとくじ引きを持っている始末だ。

「一応この前は16秒くらいだったけど、体の調子も良くなってるからもつと良いタイムではずよ。」

「余裕やん。俺の前のタイムは14秒もうすぐでいくとこやったしな。」

「僕もお、そこまで早くはないけど15秒の前半だから運次第ではかてるかもねえ。」

「じゃあ、司はちょっとハンディあるし、負けてもいいことにしてボクに勝つたらこの前の賞金で何か欲しいものかかってあげるよ。」

「うん！負けてもいいなら安心だねえ。」

「は？負けた時のことなんか考とんなや。16秒だぞ？絶対にひれ伏させたる。」

「強気だね。じゃあ竜はボクに負けたら何でも一日言うことをきくつてので、どうよ？」

「いいぜ、秋も負けたら一日召使だからな。」

「あああ、二人ともあつくなくなっちゃってえ。まあ一日奴隷がんばってねえ。」

そう言うと司は竜の肩をポンと叩いた。

昔からの付き合いでボクの異常な回復力をしてるので今回もどうせベストのタイムをたたき出すと予想しているようだ。

「ボクだって人間だぞおたつた一週間かそこらで16秒のタイムがベストの時みたいになるわけないじゃない。」

実際ベストには戻らないだろうが良い勝負になるだろうと考えていた。

まあなんだか今回はいつも以上に回復がはやく、右腕もギブスを長くつけすぎたせいで衰えていたが骨なんかは結構早い段階でくっつ

いらしいのだが、まあ気にしないでおうづ。

「宣誓！」 「僕たち（私たち）……誓います」

定番の選手宣誓を終えると秋の大運動会が始まった。

季節がらかよく晴れており、父兄席では子どもに引っ張られる形ですっかり仲良しになった三人の家族たちがカメラやビデオを手にかたまつて座っていた。

地区ごとに別れてすわるはずなのだが、元々地区が同じ蟹津家二つのところに竜のお母さんは座っており、弟も生徒として運動会に参加しているため一人くらい増えても平気なのだろう。

こちらとしてもカメラの角度が決まっただけで助かるので何もいわないことにした。

競技のプログラムは基本的に低学年からはじめ、閉会式の手前から

全校リレー・100M走となっているので勝負が決まるのは結構最後の方になる。

ついでに100Mとリレーと二回連続で走る事になっているが、六年生の最後はいつも一番早い生徒たちがはしるし、リレーもそのメンバーはアンカーを務めることがおおいので問題はあまりない。むしろ100M走で負けても縦割り班次第では勝つこともあり、それはそれで盛り上がるようだ。

最初の競技がはじまり、低学年による可愛い催しや高学年によるちよつと危険もある組み体操などが終わると、昼前に保護者たちによる綱引きがあり、すぐに昼食がはじまった。

「お兄ちゃん、お疲れ様。」

結構年がいつてきた父に代わり若い兄は綱引きに参加し、うちの地域も同着の3位となかなかいい成績を残してきた。そんな兄とご飯を食べるために既にみな集まっていた。

「早くたべよおよう。」

「腹へつてもたわ。」

成長期真っ盛りの二人はボクらが来るまでまたされて広げられているお弁当のおかずが夢中だが、一応待つてくれていたようだ。

「ほら、ちゃんと手を拭いてからよ。」

そう言つて手を拭くための濡れタオルを渡しているのはお母さんたちだった。

綱を握って手が汚れていた武兄ちゃんは丁寧にタオルで拭き取ると輪の中にはいっていくと腰を落ち着けた。

「「いただきまあす!!」「」

ちゃんといただきますの挨拶をするあたりはしっかりしているが、お弁当の中にはいつてるおにぎりやらサンドイッチや唐揚げを食べる手は司も竜もかなりのはやさだ。

「ちょっと、私の分まで食べないでよね。あ、竜!それ私の好きなおかかのおにぎり」

「モグモグと、モグッないからだ。」

口の中に物が入っていて何を言ってるのかわからなかったが、伊達に六年間一緒にお昼を食べていない。

おそらく“さつさとたべないから”とかそのようなことを言っているにちがいない。

竜がおにぎりと格闘している間に竜の前に置いてあった、野菜をお肉でまいたものを箸でつかむと口の中にいれた。

「ああ!!それ俺の。」

「あら?さつさと食べないのがいけないのよ。」

ボクらが奪い合いを始めるが、司は自分の分はうまく確保し、保護者達は仲の良い子どもたちの様子をながめている。

「秋姉ちゃん、それ僕のだよ。」

つつい、ヒートアップしすぎて竜の弟の貴史たかしくんの分まで取ってしまったボクは、冷静になり、周りを見渡した。

「ほんと仲がいいわね。」

「秋ちゃんに食べてもらうならおばさんもお弁当作ったかいがあったわ。」

司のお姉ちゃんの真美子さんは中学校の部活で忙しくていないものの、三家があつまった場所での失態にボクと竜は赤面する。

「まあ二人はこの運動会でも約束をかわす仲だからねえ。」

「な！なに言ってるのよ。司だって一緒にかけてるじゃない。」

「そうだ。しかも“今回は”約束とかじゃねえし。」

「秋ちゃん、竜が標準語になるときは何か動揺してたり隠し事をしてる時なのよ。」

あ、やっぱりそうだったんだ。今度から覚えておこつ。

「母さん。余計なこといわないで！」

「まあ、それで今度はどんな約束をしたのかしら？またお母さんたちには秘密かしら？」

「「約束じゃない！！」」

保護者たちはあらあらとか困っている風な言葉を発しながらも全然困っていない様子だった。

お父さんは微妙な顔をしていたが、相手が竜で男勝りな性格や色々なことから今まで浮いた話の一つもなかったので貰い手のなさそうな娘が、将来お嫁にいけるのであればと我慢しているようだ。

そんなやりとりをしているとお昼の時間はすぐに過ぎてしまい、午後からの競技の準備の時間になってしまった。

田舎の小学校とはいえかなりの人数がいるので1000M走やりレーなどを終わると結構な時間になってしまったため計時係の司は持ち場に向かい午前中で役目を終えていたボクらは休憩時間をのんびり過ごしてから生徒たちのテントに向かった。

六年生の1000M走は特にトラブルもなく、ついに決戦の時がおとずれた。

毎年だと若い男の先生も最後の走者と走るのだが、今年はダントツに早い三人があり、若いというには微妙な先生しかいないので生徒だけで走るようだ。

「位置についてよ……い……ドン」

競技用のピストルの音とともにボクらは綺麗にスタートをした。一人一番そとのレーンを走っていた子がもたついていたが、司と竜はなかなかの出だしをしたようだ。

ついでに、グラウンドがあまり広くないので、100M走はトラックを回るようになっており、一番内のコースからボク、司、竜、もたつきくんの四人で走っている。もたつきくんにはリレーでがんばってもらおう。

カーブに差し掛かってくると司とならび、抜き去ることに成功した。しかし、竜は健闘しており、カーブが終わってやっと並ぶような状態だ。

これはかなり白熱した戦いになりそうだ。

後ろからは司の足跡がかなり近い位置で迫り、眼の端でボクのことが見えたのだろう。

顔を真っ赤にして竜は腕を振り、足をだす。あと10Mといったところで勝負はきまった。

「お疲れ様です。すぐにリレーがあるのでアンカーの出番までゆっくりしててください。」

百合後輩の真奈美ちゃんは大会いらいボクにこうして機会があるたびにアピールしてくる。

気のきく良い子なのだが、ノーマル宣言をしたボクとしてはあまり仲良くしてはいけないと警鐘がなっているので、手硬くせつしておく。

「ありがとう。真奈美ちゃんも計時係の報告がおわったら来てね。」
一声かけたただけなのだが、顔を真っ赤にしてルンルン気分でタイムを書いた紙を提出していた。

これならおそらく僅差だった場合、真奈美ちゃん効果により賭けが成り立たなかっただろう。

「司！秋！さつさと行くこうぜ。」

竜はさつきの結果もあって元気にリレーのアンカーの待機位置へと向かっていった。

「あああ、欲しいものあったのにい。」

「そんなに落ち込むなら、リレーで勝てたら考えてあげるわよ。」

結局リレーでも、もたつきくんの活躍はなく、三人で競り合うことになったが、班のメンバーが優秀だった司が一番にゴールし、二番目にボク、三位に竜、結構差がついてもたつきくんの班だった。

まあ100M走で力を使い果たしていたらしい竜は案外あっさりとボクに抜かれてさつきと違い結構落ち込んでいた。

「司も頑張ったし、ホントに賞金使い道ないし高いものでなかったらかってあげるわよ。」

「ホントにい？やったあ！じゃあ明日までにリストアップしておくねえ。もう少しで出来上がるからああ。」

「一個だけに決まってるでしょ。」

「わかったあ。じゃあ明日までにどれが一番欲しいか選んでおこう。」

本当にわかっているのか微妙な発言だが、司のことなので明日には一番欲しがっていた新しいグローブでも請求してくるだろう。

閉会式も終わると、秋の大運動会は無事に終わったのだった。

チャプター11（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

秋の（ための）大運動会終了しました。

ずばり、“次回への伏線をどのように伝えるか”です。

この構想は次話とともに作品を書きだした当初から考えておりまして、次話ではAKIがどんな風に二人の関係を持っていきたいかが分かると思います。

皆様への感謝の気持ちが多すぎて事前に書くことができることもあり、あとがきが長くなりがちですが、今回はすっきりテーマ発表を試してみました。

それでは今回もありがとうございます。

チャプター12 (前書き)

前回の賭けとの連作になっています。

チャプター 12

ご主人様とナメクジの恐怖

翌日、今日は運動会の振り替え休日、学校は休みだ。100Mの賭けを守るべくボクと竜はボクの家にいる。弟がいる竜の家ではあまり変なことができないので、普通の平日をすごしているため、ボクの家で目的を達成することにしたのだ。

「これでよろしいでしょうか？ご主人様？」

「うん、よく似合う。」

そこには、普段なら絶対にきかないであろう、フリフリのたくさんついたドレスにエプロンをつけたメイドの姿があった。

うん、本物はなかったがそれっぽい服をつかって擬似メイドを作ったのだがそれっぽいかもしれん。
こんな姿めつたにないので記念に残そうとカメラを構えるとそれを阻む手が、

「ご主人様、撮影は禁止になっております。」

「それは残念だな。じゃあせめてその状態で外に出ていこう。」

「うざけんなあああ！！俺は男だあ！！」

魂のシャウトでわかっていただきたろうが、勝ったのはボクだ。奴隷契約ということである忙しくてまだワンコを買いに行けないので首輪をくけて犬のまねごとでもさせようかとも考えたのだが、可愛いワンコを楽しみにしているボクとしては竜をペットなんていだけない。

「こら、そこは“ご冗談をご主人様、わたくしは男でございます。だろっ?”

「く・・・ご冗談をお嬢様、わたしは男でございます。」

せめてもの抵抗なのだろう、微妙に変化させてきたが、まあ屈辱的なことには変わりないし、良いとしよう。

まあこんなところを實際他の人に見せたら竜が落ち込むので昼に来たこともあり、確実にだれも帰ってこない時間を考慮して三時間ほどしか時間はないが、本当に一日まるごと奴隷にする気もなかった

ので、許してやる。

「当たり前だ。一日中こんな格好させられたら死んじまう。」

「最近声に出さないようになっていたのに、つい声にだしてしまっていたのね。」

「確信犯だろう？明らかに聞こえていたぞ？」

「何のことかしら、おーほっほっほー！」

普段はしない高笑いをして笑うと竜は苦渋の顔をつくってこちらを睨みつけてくる。

「まあまあ、このところ忙しくてセーラー服を取りに行けなくなつて急ぎよボクの服をメイド服にみたててあげたんだからそんなに睨まないの。」

「ちょま、セーラー服を着させるきだったのか？まだ学生服もきていないのに・・・」

「いいじゃないの、水兵の服よ。まあそのワンピースは動きやすい

し、ボクのお気に入りになんだから感謝されても、睨まれるいわれはないわ。」

「感謝って、ん？お気に入りに？どつりで着替える時に秋の匂いがしたとおもったぜ。」

「かくなああ！！」

最近ご無沙汰だったが、けがもしていない暗黒の左手が炸裂すると擬似メイドはじゅうたんの敷きつめた床に転がって行った。

「くそお。こんな格好はさせられるし、暴力まで、この屈辱いつかぜったい。」

「ほら、言葉が戻ってるわよ。それに、きちんと命令を守ったら怒ったりはしないわよ。」

「しゃあないな、わかりました。お嬢様、それではなんなりとお申し付けください。」

「ふふふ、うまいじゃない。実はメイド趣味だったの？」

「いいえ、お嬢様、そのようなことは一切ございません。」

こめかみのあたりがひくついているが、言葉づかいが汚くなったら攻撃しようと黄金の左足を準備していたのだが、がんばってこらえたようなので、仕事を与えることにした。

「もうお昼は済してしまっただし、まずはメイドのたしなみとして掃除よ。」

「はい、お嬢様。」

そう言うと竜は掃除機の場所を尋ねたので、案内してあげた。

.....

結果からいうなら、さんざんだった。

普段から掃除などを手伝っているボクとくらべて、手際も悪いし、

かなり雑だったため、結局ボクが手伝うことになり、なし崩し的に二人で家じゅうをピカピカにした。

「はあ、なんでメイドよりもご主人様の方が働いてるのよ。」

「申し訳ございません。お嬢様。」

掃除中なんども訂正したのでかなりメイドっぽい言葉づかいにも慣れてきていた。

「本当は一時間くらいで終わらせる予定だったのに、二時間もかかっちゃったじゃない。」

「お嬢様一人でされた方が、早く終わったのではないですか？」

「いいのよ。竜にさせることに意味があるんだから、次は洗濯物を取り寄せるわよ。」

「はい。わかりました。」

庭に干しているものは外にだすのはかわいそうなのでボクが取りに行くことになって、竜には二回のベランダに干してあるものをお願

いした。

取り寄せ終わってたたむためにリビングにつくと、竜が洗濯物を先に取り寄せてまっていた。

後ろを向いている竜はボクが入ってきたことにまだ気づいていない様だ。

「竜？何をしてるの？」

ボクのブラジャーを手にしげしげと眺めている竜の姿があった。

声をかけると急いで後ろに隠したが、目撃してしまっているので意味はない。

「えっと・・・これは・・・」

「ボクとしたことがあまりにも掃除が大変で二階には下着泥棒に合わないように下着を干していたのを忘れてたわ。」

「え？怒らないのか？」

流石に動揺してメイド口調がとけてしまっている。

「いいわよ。指示を出したのはボクだし、変なことに使ってたわけでもないしね。」

「へ、変なことって、俺はただ、大きいなあって思ってたんだけど、あ……。」

「そう、竜も男の子だもんね。でも前の事故の時に触ったんじゃないの？」

「あんときは、必死だったし、そんな余裕なんてなかったんだよ。」

「そうだったわね。今更だけど、ありがとうね。」

「これで何回目だよ。まあ秋にありがとうって言われるのは嬉しいから別にいいけど。」

「ふふ、じゃあさっさと洗濯物たたんじゃおう。」

「かしこまりました。お嬢様。」

そのあとはたたみ方の指導をしつつも、軽い談笑を交えて洗濯物をたたむと、ダンスの中にしまっていていった。

「お疲れ様、もうメイド服は脱いでいいわよ。」

「ふう、まさかこんな罰ゲームになるとは、他の奴には絶対に内緒だぞ?」

ボクの部屋につくとおもむろに服を脱ぎだした。

今日来たときも説得までに一時間を要し、結局こぶしに物を言わせて着させたので、二人だけの秘密ということでした。

「でも、司には見せてあげたかったわ。竜って整った顔してるから女装させても意外と似合うのね。」

「女装が似合ってもうれしくねえよ。まあ整った顔立ちってというのは間違いないわ。」

「いくら、自分でいうんじゃない。」

「秋だって時々冗談で自分のこと可憐な乙女とかいうやん。」

「それは、竜が男女とか男勝りとかお嫁のもらい手がないとか言うからでしょ。」

ワンピースの下に服を着ていたのでエプロンとワンピースを脱ぐだけであとは掛けてあった上着を着たらいつもの竜にもどる。

「ああ、フリフリのワンピースとエプロンだけじゃものたりなかったなあ。でもお母さんのお化粧道具勝手に持ち出したらまずいし、というかばれるし、今回はこれで勘弁してあげるか。」

「ちょま、何か不穏な響きが混じったきがするんやけど？今回はとか化粧とか……。」

「やだあ、あはは、冗談よ。でも竜がボクにひどいことしたら、その時は罰としてつかえるかもしれないわね。」

「もう二度としいひんわ。じゃあ、帰るわな。」

「え？何で？」

「何でって、もう終わりやろ？運動会で疲れたし、精神的にもかなり疲れたから休みたいんやけど……。」

「メイドじゃなくなったんだから、誰か帰ってきてても平気でしょ？それに、奴隷契約は一日でしょ？せめて帰るまでは言うこと聞きなさいよ。」

「うーん。まあ確かにそうやわなあ。ま、俺も秋が無茶なことしいひんとおもってこんな約束したんやし、もう少しくらいやったら聞いたるわ。実際メイドの格好意外はまともな命令やったしな。」

「メイド意外まともな命令こなせてなかったけどな。」

「うるさいなあ、わかったわ。煮るなり焼くなりすきにせえ。」

「男に二言はないわね。ふっふっふ。」

「げ、そんな言われるとなんかこええ。」

「まずこれを付けて。」

そついうと病室や東京までの移動の時に使っていたアイマスクを取り出した。

これをつけると安眠できるのでかなりお気に入りだ。

最近では眠れない時は耳腺とアイマスクをつけて寝ることもある。

「まっくらやん。これ、あぶないんとちゃう？」

アイマスクをつけると、少しふらつくようだが、元々柔道をしているのですぐに体制を立て直して真っすぐ立っている。こけたりすると危険なので支えてあげながらベッドの上に腰かけさせる。

「どう？真っ暗って何されても抵抗できないし、結構こわいでしょ？」

「ああ、少し動くだけでもなんかにぶつかっちまいそうでこわいわあ。」

「じゃあ、はじめるわね。」

「うわ、なにをのせたんや？」

「さっき台所を掃除しているときに見つけたナメクジよ。」

「ちょ……んなもん手にのせんよ。」

「だめよ。うごかないの。」

そう言つとボクは竜の手足が動かないように押えつけ、ベッドに寝かせた。

「おいおい、なんかやわらかいもん、あたつとんだけど。」

「ぬいぐるみよ。竜って意外と怖がりなのね。かわいい。」

「いや、こんな重たいぬいぐるみ部屋になかったやろ。」

ドゴッ

とりあえず殴つておいた。

「次はどこにナメクジおこつかなあ。ここなんてどつ?」

「首はやめろ! ! 流石にこそばすぎるわあ。」

「しょうがないわね。じゃあこつちにしてあげる。」

「バカ顔はもつとあかんわ。」

そうとうと竜は無理やりアイマスクを取り外した。

「あ……。」

ほっぺたをなめているボクと目が合ってしまった。
何が起こったのかわからなかった竜は
目を見開いて固まってしまった。

「アイマスクを取るのは反則だよ。」

そうとうとボクはおもむろに竜から離れていった。

「ナメクジって?」

「冗談に決まってるでしょ、ボクだってわざわざ手に取りたくないもん。」

言われてみれば当然なのだが、初めてアイマスクをつかった竜は結構テンパっていたらしく本気で信じていたようだ。
せめて濡れタオルとかスポンジくらいだろうと考えてほしかったのだが、本気でナメクジがくっついたとおもっていたようだ。

「普通こういう時はスポンジか何かだと思ってアイマスクなんてとらないでしょうが。」

「そんなこといっても、動揺してたんだから仕方ないだろ。」

まだ、動揺しているみたいだ。

標準語になってるぞ。

昨日竜のお母さんから最終確認をしたから隠し事するような状況じゃないので、竜は動揺しているのだ。

「まあまあ、おちつきなさいよ。ナメクジじゃなかったんだからいいじゃない。」

「いいわけあるか、ってかあれじゃまるで・・・」

そこまで言うつと真っ赤になって口ごもった。

「だって、ボクあの時意識がなかったし、どうせならきちんと意識があるときに初めてをやりなおしたかったもん。」

そういうとボクも恥ずかしすぎて、口を閉ざしてしまう。

本当ならナメクジ作戦で竜にきづかれないうちに済ませてしまおう

と思っていたが、こうなったらなるようになれと言ってしまったが、ちよつと後悔・・・恥ずかしすぎて死ぬるかもしれない。

「まあ、確かにファーストキスうばっちまったもんな。いいぜ、やり直ししよう。」

「罪の意識あるんじゃない。じゃあやり直させてあげるわ。」

あんまりにも可愛くないセリフだし、あの時のことは一度許しているのに罪なんてないけど、口からでてしまったものは仕方がない。そのままの体勢で目をとじた。

ギシリと竜がベッドから立ち上がる音が聞こえる。

暖かくて大きな手が右肩をつかみ、左耳のそばをまた手が添えられる感覚があつた。

緊張して必要以上にまたギュツと目を閉じる。

「チユツ」

それは優しく触れるようなものだったが、確かに唇に柔らかいものがあつた。

添えられていた手ははなれていったので、眼を開くと竜も真赤になつていた。

翌日、司と約束の買い物にきた。

竜と三人で昨日あったことを報告も兼ねて三人で司の欲しいものを買いに来たのだ。

司は予想通り新しいグローブを所望したので、ちょっと遠出をして品揃えのいいスポーツ用品にきている。

「へえ、それで二人はキスしちゃったんだあ。らぶらぶだねえ。」

「それが、そうでもないんや。これには続きがあんねん。」

少し落ち着いたのか竜が声をかけてきた。

「これで、いいか？」

「うん。ありがとう。」

「最近感謝されまくりだな。」

そうはいうものの、まんざらでもないようで、竜ははにかむように笑うと、しっかりとボクの目を見つめてきた。

「どうしたのよ。そんなに見つめて。」

「いや、これで俺たちも恋人なんだとおもつとさ。」

「え？なんで？」

「おいおい、そんなところでボケるなよ。」

「だって、ファーストキスやり直したただけでしょ？ボクと竜は友達だよ？」

「なんでやねええん。」

「あはは、口調が似非関西弁にもどったね。あ、もちろん司も友達だよ。」

「まてまて、そんなんわかりきつとるやろ。そうじゃなくてキスマでしたんやから。」

「うーん確かにそうだね。じゃあ二人とも親友に格上げしたげる。」

「今まで親友じゃなかったんかい。」

「そっか、もう親友だったね。じゃあさ親っていう字を心に変えよう？心には命って意味もあるし、命の友達、心を許せる友達、心が繋がってる友達、どれもいいけど心友って響きがすごいいいね。」

「……」

「どうしたの？うれしくない？」

「つつわけで、司ともども心友に格上げされたわ。な、心の友よ。」

「どこかのガキ大将じゃないんだからあ。でも心友かあ。同じ発音なのに秋にそんな風に言われるとなんだか悪くないねえ。」

「まあな。あんまりにも心地良い響きに結局俺も納得させられてしまったわ。」

「そうでしょ？司ならわかってくれると思ってたんだ。ボクらこれからどんなことが起こっても、何かでライバルになって競い合うようなことがあってもずっと心友でいよ。」

「あたりまえやん。心友でも次こそは100M勝つたるからな。」

「僕も賛成だよお。何があっても心友だよお。だからさあ。このスパイクも買ってえ。」

「お調子者。うーんでも、成長期で足が大きくなっちゃうからスパイクはいるわよね。」

「確かに、俺も最近靴がちっちゃくなっちゃったんで。」

「はあ、ごまかしたけどお、両想いなんだから付き合っちゃえばいいのにい、僕との関係をきにしたんだろうなあ。まあ僕もこのままの関係がもう少し続くのはうれしいからいいかあ。」

「司？何一人でブツブツいつてるんだ？そんなに欲しいならスパイクも見ておくか？この前の誕生日入院してて特に祝ってやれなかったからあんまりにも高いものじゃなかったらいいぞ。」

この前の取材のギャラの明細がといたんだが、渋ったこともあってかなりの高額になっていてな。ボクは今左手うちわなの。」

「秋だつて誕生日病室で過ごしたのにい、でも甘えちゃおうかなあ。」

「そう言えば二人つて誕生日ちかいやんな。俺だけ一人一か月近くはなれてるやん。」

「いいじゃない。別々にお祝いができるんだから。」

「そつか、確かにそれはいえとるな。」

三人で笑いながら、あれこれとみていく。

もうすぐ冬になり中学生になるボクらは、ちょうどいい機会だと用

具をみながら、中学校ではいるクラブ活動について話した。

「僕はやっぱり野球部だなあ。小学校ですつとやってきてレギュラーになれたんだしねえ。」

司は少年団でショートかセカンドを守っている。

運動神経は良いが肩はあまり強くないのでピッチャーやキャッチャーのとうなポジションはできないようだ。しかし、ボクらに負けるとは言え小学生では足が速いので五年生の時から一番を任されており、打率も結構いいらしい。

竜と一緒に応援に行った時はフォアボールとヒットで全打席出塁して盗塁をきめて前に走者がいない時はかならず三塁に進めていた。

「野球は中学まで続けられるからいいよね。柔道部は無いし全員どれかのクラブに所属しなきゃいけないからボクらは何か新しいクラブを探さないと。」

「クラブ続けながら道場にも来てる人もおるけど、俺はやめるつもりやからな。」

「うん、ボクもだよ。ワンコの散歩の方が大事だからね。」

「次の休みには買いに行くんだったねえ。僕にもみせてねえ。」

「もちろんだよ。というわけで比較的早く帰れる文科系のクラブにはいる予定だよ。」

「意外と二人ともきめてるんやな。俺も何か考えないかな。」

「竜は身長あるんだからバスケットなんでお？」

「あ、ボクもそれ賛成。竜なら足も速いし絶対いいよ。」

「バスケットか、屋内競技だから肌白くなりそうやな。」

「父親が黒いと子どもまで黒くなっちゃうから白い方がいいよ。竜はバスケットで決定ね。」

「どんな理由やねん。でも、他の競技と違ってシューズくらいしかお金かからへんしそうしよかな。」

「じゃあ、まだ決定じゃないし、シューズは早いけど、リストバンドくらいならもしバスケット意外になっても使えるから買っちゃおうか？」

「どうせならあ。三人おそろいで買おう。」

「賛成!!!」

三人でおそろいのリストバンドを選び。

結局スパイクもグローブも買うことになり、レジへもっていくと、意外とお金がかかってしまった。

それぞれのリストバンドは自分のお金で買って竜が選んだ赤いものをボクが、ボクが選んだ水色のものを司が、司が選んだ緑色のものを竜がつかうことになって、店からだと先ほど交換したリストバンドをさっそくつけた。

心友の証みたいでなんだかむずがゆくて照れくさかったけど、ちょ

っ
とあつたかい気持ちになった。

中学生になってもずっと心友でいようね。二人とも大好きだよ。

チャプター12（後書き）

というわけで、キャプチャー12お送りいたしました。

正直はっちゃけ過ぎました。不快に思う方がいらしたら、ごめんなさい。

今回のテーマは“どれだけはっちゃけた文章を作れるか”です。ほんとやりすぎでしょ。AKIもわかってはいるのですが、書きたくて仕方がなかったのです。そのために、ワザと字の文を減らして背景描写の無い文章にしたりと、秋ちゃんの可愛さが伝わってくれたらいいなと思いつつも意地悪な文章を作ってしまった。

それでは次回からもどうぞよろしくお願いいたします。

これまで読んでいただきありがとうございました。

チャプター13

女神降臨!!

ボクらは中学二年生になった。

小学時代は勉強をさぼっていた二人もボクの手を借りながらもちゃんと勉強するようになって、地元の公立高校に入れるくらいまでは実力をつけていた。

部活動も部員数が多い野球部はたくさん人数がいた一年生るときと違い、上の学年がすくないのもたすかつて、

司も無事レギュラーを獲得して一番セカンドは怪我でもしないかぎり不動だろう。

中学生になって身長が伸び出した司は今ではボクよりも10センチ近く高い。

ボクも一応伸びて160センチ近くあるから、170くらいはあるだろう。

結局バスケットに入った竜はそれよりもさらに身長が伸びていた。

今では180センチに届きそうで、ボクは最近二人と話していると肩が凝りそうになる。

肩が凝るのは見上げているのだけが原因ではないが、まあ今はいいだろう。

「竜もついにレギュラーとっただって?」

「おう、背も高いし、ジャンプ力なんかもあるからセンターかフォワードでつかってくれるんやってさ。」

「おめでとお。まあ初心者からはじめたといっても元々の運動神経がいいからねえ。」

「確かにね。女性とはいえ全国レベルの選手と同じくらい柔道強かったんだから当然といえば当然よね。」

「またそれをいうなや。それを知ってたらまだ柔道やってたかもしれへんのやぞ。」

「ごめんって、ボクとばかり稽古してたから強くなってたけど、逆に自分の実力にきづいてなかったなんて、言われるまで気づかないわよ。」

そうなのだ、ボクはあの大会後ゴタゴタしているうちに竜が強いことを伝え忘れており、そんな事とは知らずに才能がないと思いきんだ竜はきれいさっぱり柔道をやめてバスケットに打ち込みだし、レギュラー確定といわれたところに、ぽつりと

「柔道もかなり強かったけど、運動神経良いし努力もするからバスケットも上手になっただわね。」

とボクが言ったことよってこのことを知り、身も心もバスケット少年となってしまうていた竜は少し後悔したもの、今はバスケット一本になっっているのだ。

「秋が別格なのはもう驚くことじゃないよお。最強美少女は、今はなんていわれてるんだっけえ？」

「芸術の女神だろ？」

「それ言わないでよ。ボクだって好きで呼ばれてるんじゃないんだ

からね。」

「別にそれはええやん、最近できたもう一つのほう方はどうかとおもうけどな。」

「レズジュツの女神だっけえ？真奈美ちゃんにも困ったもんだねえ。」

「もうちょっと困った顔して言ってくれない？」

司の方に顔を向けたので自転車が揺れる。

「おい、変な体制になるなや。こけてまうぞ。」

「これくらいでこけないでよね。」

何故こうなったかというところ、小学六年生のファーストキス事件のあと蟹津家ではお赤飯がたかれることになったのだ。

前世の記憶に引っ張られて女の子らしさの欠けた幼少時代を過ごしたボクも女の子の自覚がでてきたらしい。

「あらあら、秋ちゃんもついに来たのね。ずいぶん女の子らしくなってきたけど、他の子よりもちょっと遅かったけどお母さんは安心したわ。」

別にまだの子だっているんだからお母さんは気にしすぎだと思っただが、男勝りな性格だったことと、今だに治らない一人称のものであるので、

そのあと長々と続く女の子としてのたしなみから、お母さんの青春時代の話などをしっかり聞いたボクは、学校で二人にあうと、

「毎月一定期間ボクに優しくする期間を作りなさい。」
と宣言をした。

最初啞然としていた二人だったが、司は真美子さんがいるので何となく察しがつき、承諾してくれると、意味が分からないなりに、別に元々二人ともボクを大切にあつかってくれたこともあって二人は一定期間優しくしてくれるようになった。

そして中学校になると本来はバス通学の竜は一定期間自転車で来るようになり、そのうち毎日自転車でくるようになったので、いつも後ろにのるようになったのだ。

「でもさあ。これ竜にとってはいいトレーニングになるしい、秋ちやんとらぶらぶできるしい、メリットだらけじゃないのお？」

「らぶらぶ言うな！」

そうやって勢いよく振り向くとまた自転車が揺れたのであわてて体制を直して竜の腰に手を回す。

「おい、ひつつきすぎや。そろそろ学校近いしまた噂たつぞ。」

「女神の恋人はだれか？つてやつでしょ？モテる女はつらいわ。」

そう、正直ボクはモテる。

そんなこと言ったら竜や司だってそうなのだが、それまで男装に近かった服装がセーラー服というどこから見ても女の子にしか見えな
い格好をするようになると、

注目があつまりだし、今まで二人の方がモテていたのがうそのように、学校のアイドル状態だ。最初のうちは竜や司に今までと違うと

馬鹿にされるかとおもっていたのだが、二人は意外とすんなりと慣れてしまった。女の子らしいボクをみて啞然とする姿を見たかったのでちょっと残念だったが、今までと変わらない対応に今は感謝している。

「おはようございます。蟹津先輩。」

「おはよう！秋ちゃん！」

「おはようございます。女神さん。」

約一名ほど、名前じゃないがまあ学校についたら男の子の半分以上は女神と呼ぶし、

女の子でもさつき追い抜いた麻美のように昔から仲がいい子を除いたら半分を超える子たちが先輩後輩同級生までも女神と呼ぶので放置だ。

敬称はちゃんだったりさんだったりするが、一つだけ気をつけなきゃいけないものがある。

「女神様あああ！！！」

学校に到着して自転車から降りたボクを待ち構えたようにして呼びながら後ろから抱きついてきたのは真奈美ちゃんだった。

「真奈美ちゃん。その“様”っていうのどこにかならないの？」

「無理です。だってファンクラブの全員が女神様と呼ぶように規約ができてしまいましたから、

中学生になるのが一年遅れたために会員番号が低い私は逆らうこと

はできません。」

「じゃあさ。せめて今度のファンクラブ集会の日時と場所をこっそりおしえてくれないかしら？」

「だめですよ。女神様はそう言っただけでこれまで何度も会員規約規定を変更されてそのたびに規約規定をかいくぐるための新規約が練られることになるんですから。」

しかも女神様は本当にぬかりがなくて、様付けにするのもやつと見つけた抜け穴なんですから。」

ほとんどの規約を作成できないように規約規定を作り、それを守れないものはファンクラブから除隊するなど画策してきたが、

あまりにもひどい規定に除隊者が続出して「最強美少女クラブ」が解散の運びになると新しく「芸術の女神クラブ」なるものが作られ、それ以降はボクの介入を極力避け陰ながら「ファン」として活動するものも多く、

ファンクラブ自体はそこまでボクに悪い影響はないので今は放置しているのだった。

「ところで、いつまで抱きついているつもりなの？」

「ごめんなさい。私としたことが、ではお言葉に甘えて。」

真奈美ちゃんはそういうと、後ろからおなかに回していた手をずらし、ボクの胸をもモミだした。

「ひゃ、あうん！」

「いつモンでも柔らかくて弾力があって素敵です。ただ、手が小さ

すぎて女神様の豊満な胸はつかみきれません。」

「やめ・あつて。」

たとえ百合街道まっしぐらの変態とはいえ後輩でしかも女の子なので無理やり引き剥がすこともできず、助けを求めるべく竜と司の方をみると、

二人とも目をそらして、こちらを見ないようにしていた。

「二人いともおんさつさと・たすけ・なさいよ」

必至になって助けを求めると真奈美ちゃんは、右手は胸をモンだまま、左手をほほに添えるとボクの左耳に息をふきかけてきた。

ゴスッ

残念ながら我慢の限界がきてしまった。暗闇を発動させると真奈美ちゃんは鳩尾をおさえてでも顔は嬉しそうにくずれおちた。

「ひでえ、いきなり暗黒はないやろお。」

「あんな密着した状態からじゃ残酷か暗黒か殺戮しか使えないじゃない。しかも視界がない状態じゃ暗黒も残酷もかわらないんだから一番ダメージは少ないはずだわ。」

「一応う、手加減はしてるんだねえ。」

「二人がさつさと助けてくれたら、何もせずに済んだのよ？」

「いや、あそこに割って入るのはむりやろ。俺たちも男の子だからな。」

「男なら乙女のピンチを助けなさいよ。」

「物理的なものはあ、いつも助けてるよあ。」

まあ確かにその通りだ。

初めのうちは自分で自転車に乗っていたボクが交通事故にあつて自転車がぺしゃんこになった時も二人のおかげでかすり傷一つ負わなかった。

この二人、特に竜と一緒にいると事故や事件を回避できることが多いことを知ったボクは自分で自転車に乗ることをあきらめこうして竜の自転車の荷台にのっている。

学校側も今までの13年間の事故率の高さなどから、特例的に許可をだし、特殊なヘルメット（正直デザインは酷い）を竜がかぶることによって警察などにもとがめられることなく登下校できている。

「おかげさまで不幸少女の汚名はずいぶん薄くなりましたよ。」

「秋が男だったらお願いされても断つただろうけど、か弱くは無いとはいえ女の子だからな。一緒に自転車乗るくらいやってやるよ。」

「その発言は微妙だけど、まあ暗闇つかったばかりだし今回は見逃してあげるわ。」

「それよりい、その百合姫が目覚める前にい、教室にいこうよあ。」

「せやな、こんなところで話しとるとまたいつ男女どっちかわからへんけどファンクラブにからまれてまうわ。」

そういうと、竜はボクと司を促して歩きだした。

「なんだかなあ。ファンクラブに女の子が当然のように入っているってどうなのよ？」

「秋の反応は男女どっちにも受けがいいんだよお。朝からあんな熱烈な声きいちゃったあ。」

「しょうがないじゃない。五感どころか第六感まで鋭くないといつ死んでもおかしくない生活を送ってきたんだから。女の子は繊細なの。」

「女の子が繊細なのと、第六感まで鋭くないと生きられないのはイコールでは結ばれへんが、秋と一緒にいるだけでたぶん俺ら二人かなりケンカとかやったら負けへんくらい強くなってる気がするわ。」

「ケンカなんてしないでよ。ボクらが相手する人たちっていつもナイフとか銃とかもってるんだから。」

「それはカツ上げしてる現場とかあ、明らかに悪そうな人たちにしかケンカをうらないからだよお。普通の人にはナイフはともかく、銃なんて持ってないよお。」

「まあ、平和な日本で貴重な体験をしたわね。」

「そんな体験しないのが一番いいちゅうはなしや。まあ中学にはい

「つてからは命にかかわるようなことは何もあらへんからええけどな。」

「竜も感覚が麻痺してきたねえ。本来命にかかわるような大事件もあつたよお。」

「銃を突き付けられようと、鉄骨が落ちてこようと、無傷で済んだやつはええねん。秋と一緒にあつたらそんな日常茶飯事やないか。」

「せつかくボクの不幸少女系噂が減ってきたんだからあんまりそう言う話堂々としなくてよね。また周りがドン引きしちゃうじゃない。」

「多少わざとでもそういうの知らないで近づいてくると、怪我したり危険な目にあつてそれをかばつて秋があぶない目にあうんやから、不幸体質なんは隠さんほうがええで？」

「そうだねえ。秋や僕らだけの時は最強美少女がなんとか解決するけどお。何も知らない人が巻き込まれるとお、大変だよお。」

「じゃあボクは一生不幸少女として暗くさみしい人生をおくつていくんだね。」

「いやあ、秋にはそれはむりでしょお。不幸を呼び込むのと同じくらい人をひきつけちゃつてるからねえ。」

「そうそう、俺らがおらん時は校庭歩いとるだけで鳥の大群やら迷子やら何でもかんでも遭遇しちゃつて休まる時があらへんやん。生きとるだけでお祭り騒ぎやな。」

三人で話していると教室についた。
今年は竜と違うクラスになったのでここでお別れだ。
田舎とはいえ2クラスはあるので、仕方がない。
1年の時は小学校の担任が掛け合ってくれたみたいで、同じクラス
だったが、ボクの不幸体質を知らない先生たちは、今年は別のクラ
スにしたみたいだ。

「じゃあまたな。」「こけないよおにねえ。」

ガラガラ

「おはよお!!」

ボクは、挨拶はぜつたいにする派だ。
人間関係の第一歩は笑顔と元気なあいさつから始まるはずだ。
普段は竜と司とばかり仲がいいが、他のクラスメイトとだってちや
んと話したり、遊んだりしている。
危険が及ばない程度にはだけど。

「パシンッ!!」

「もう、誰だよお。あぶないじゃないか。」

「ごめん、ごめん。大丈夫だった女神様？」

そうやって声をかけてきたのは浩太だった。
というか、こいつは小学校からいや、幼稚園から同じの癖になぜか
ファンクラブにはいつている。

話によると会員番号0番の永久会員なんだとか、溺れたのを助けた

あたりから気になりだし、セーラー服と同時に信者になったらしい。

「でもお。朝から上靴がとんでくるなんてえ。秋は大変だねえ。」

「プロレスのマネごとなんてしてるからよ。ボクだったからよかつたけど、他の子だったら怪我するんだからやめなさい。」

「はいはい。ボクだったら大丈夫あたりはさすが最強美少女だね。」

そういうと、浩太は一緒にじゃれあっていた友人の方へ向かっていった。

浩太もあれ以来二次元以外にも興味をもったらしく、意外とうちとけている。

まあ三次元は今のところボク限定な気がするが、現実にも目を向けただけ良かったのだろう。

「メグちゃんは相変わらずの収穫ね。」

「毎日ゲタ箱とかに入っているのに。捨てるのもかわいそうじゃない。」

今話しかけてきたのはボクの隣の席に座っている鈴だ。

彼女は、小学校は違うが一緒に道場に通っていたりして仲が良い。

元々親に無理やり入れられていて、運動がすきでもなかったので中学になったので一緒に文科系のクラブを立ち上げた一人だ。

そうなのだ。

あまりボクの不幸体質に巻き込まれてはいけなさと考えてボクは一年生の時に今までなかった美術部を立ち上げた。

美術部といっても、絵だけでなく芸術関係の作品なら自由に作って

も良いとして窓口を広くとってあった。

「浩太くんも、美術部じゃなかったら毎日手紙かいてるんだろっ
なあ。」

「まあね。浩太は会員番号0番だからな。」

クラブを作るには最低三人の人が必要で、学校側もあまり人数の
ない学校にあたらしいクラブなんて許可できないという雰囲気だっ
たのだが、

浩太と鈴の協力とボクの作品の完成度と噂程度の不幸体質のおかげ
で美術部はできたのだ。

「僕も秋に手紙かこうかあ？普段は渡される方だしいたまには渡す
方にもなるのかなあ。」

「司はいつも話してるから手紙で書くような内容ないじゃないの。」

「いやいやあ。この内に秘められた気持ちは口では表せきれないよ
お。」

「なに言ってるのよ。どうせ、帰りにアイス食べたいとか、野球部
でマネージャーの仕事してくれとかその程度でしょ？」

「ピンポンピンポン！！大正解〜！！」

「やっぱり手紙いらさないじゃないの。」

そうそう、ボクの席は通路側の一番後ろだ。

窓側に座ると飛来物が飛んできて割れてしまい、教室の中心に座る

と被害者が増えるので小学校のころからこのポジションはきまっている。

対処可能な司か竜が横と前だったのだが、今年は竜がないので美術部でも仲が良く。

柔道経験者でもある鈴が代わりに座っている。

左斜め前のポジションは席替えの度に变化するが、三人だけは変わらない。

鈴いわく「この場所なら授業さぼれるし、メグの側にいれば何とかなるから平気よ。」

とのことだった。

ボクが男の子だったら惚れてしまうぞ。

「司くんも、そろそろ授業の準備しないと先生くるわよ?」

「はあい。でも次の大会は応援に来てくれよ?みんなのやる気が違うんだからさあ。」

「まあ、竜ともかぶってないし、いけると思うわよ。土産は何がいい?」

「この前のはちみつとレモンの奴がいい。あれおいしいしい、元気がでるう。」

「了解、はちみつ漬けとあと司の分はお弁当でも持って行ってあげようかな。」

「やい。じゃあお母さんにお弁当必要ないってえ、言うておくねえ。」

「二人って付き合ってるの?」

「心友よ。親しいじゃなくて心のね。竜と司とボクは心友なんだよ。」

「なんかうらやましい。メグって男の子みたいな付き合い方するのね。」

「昔はねえ。本当に男の子よりも男の子だったんだよ。今は芸術の女神なんてよばれてるけどねえ。」

「もう、昔の話はNGでしょ。」

さりげなく黄金が司の右足を踏んでいるのだが、しれっとしたもので鈴は気付かないし、ボクも司も机の下でのやり取りは周りにはわからないように素知らぬふりをした。

キンコーン

ガラガラ

チャイムがなって少し経つと、担任の吉川先生が入ってきた。

学級委員長が号令をかけ、生徒たちが着席すると、

「朝のホームルームは来月に行われる遠足についてだ。みなここに書いてある事項をしっかりと読んでおくように。」

そういつて熊のような体を窮屈そうに小さな椅子の上に預けると各自

目を通す時間を与える。

一年の時は入学したての生徒たちが仲良くなるように、二年の時は来年の修学旅行の時に困らないように電車など普段田舎ぐらしのボクらが使わないものに慣れるために遠足に行く。そして三年生は修学旅行に行くのだ。

「遊園地だってえ、ジェットコースターのろうよお。」

「班別行動なんだからみんなで行けるところに決まってるでしょ。」

「じゃあ問題ないわ。私もジェットコースター好きだもの。」

ボクらのクラスは35人なので、四人班が8つあり、不幸体質も考慮してボクの班は鈴とボクと司の三人なのだが、班員で話し合う前に配られた冊子を確認しないでもいいのだろうか。。。

238

「だいたい目を通したか？もう既に班で話し合ってるところもあるが、来週までに話し合って行動予定を先生に提出するように。」

そういつて吉川先生は授業の用意を教卓に並べだした。

今日は最初の授業は先生の数学だ。

「秋い、予定作るのまかせるねえ。秋が組んでくれたら問題ないでしょお。」

「そうね。メグならタイムスケジュールとか完璧よね。一応絶叫系が好きだからそれを中心にしてあとは全部任せるわ。」

「丸投げしないでよ。まあ別にこういうの嫌いじゃないからいいけどさ。」

ボクらの班はボクが作るようだ。

鈴はちゃっかり自分の要望をまぜてお願いしてきたし、一回作ってみて確認すればいいだろう。

遊園地なんて待ち時間でどうせスケジュール変更することになるのだから適当に回りたいものをピックアップしてあとはお土産を買う時間で調節すればいい。

キーンコーン

授業開始のチャイムがなった。

吉川先生はもう一度号令をする必要もないだろうと、学級委員に言うのと、授業を開始した。

吉川先生の数学は公式を丸暗記するものではなく、解法と面白い話をつまかく混ぜた説明をするので、数学の苦手な子にも結構人気である。

今日も方程式の説明をしている。

春はまだ、図形やグラフはしないらしい。

一年の時は熊みたいな体で図形を表現する吉川先生に笑わせてもらったのに。

そんな風に考えながら授業を受けていく。

楽しみな遠足に期待をこめ、ワクワクとドキドキを胸に秘めながらもちゃんと授業に集中する。

キーンコーン

「ふう、終わったあ。じゃああ、僕はクラブいってくるねえ。終わったら竜と迎えに行くからおとなしくまってねえ。」

「いってらっしゃい。ってなんか子どもあつかいしてない？」

「秋ちゃん、さみしがらないで待ってるんだよあ。」

「さっさといってこい！！」

軽く残酷を肩にあてるが力が入ってないので痛くはない。

笑顔で手を振ると同じ野球部のクラスメイトたちと司は外にでていった。

「女神様！僕たちも美術室にいこう。」

「メグちゃんは女神様じゃないわよ。」

「鈴、そのメグちゃんってどこから来たのかしら？ボクの名前は蟹津秋でもどこにもメグなんてないよ？」

「あははは、中学はいつたら女神なんて言われるようになって気にいっちゃったんだもん。」

「まあ、女神よりもメグの方が可愛いからいいけどさ。」

「仕方ないよ。本当に女神様の作品は芸術の女神がいたらそれこそつてのばかりなんだからな、しかも、こんな可愛い子があんな作品やこんな作品をつくってるなんて。」

「含みのある表現しないでよ。ちょっと男の子っぽい作品つくったりするだけじゃない。」

「メグちゃんはそれがいいのよね。なんだか、洗練されているっていうか、女の子なのに男の子っぽいタッチでまだ完熟しきっていない甘酸っぱい果実のような作品をつくるんだから素敵なのよ。」

「もう、また変な表現する。鈴の絵だってほんわかして優しい感じがしてボクは好きだよ。」

「ありがと、今日もがんばろうね。」

「ねえ、僕の絵は？鈴ちゃんだけ誉めてなんで僕には？」

「……………」

「技術は認めるわ。でも、題材が全部二次元なのはちょっとね。」

「わかった。じゃあ今日は模写をするから女神様がモデルになってよ。」

「メグちゃんのヌードかあ。」

「まてまて、何でボクが裸にならなきゃいけないのよ。」

「大丈夫だ。服をきたままでも僕が心眼で女神様の服の中を描こう。」

「ぎゃああ。素敵過ぎるわ。」

「鈴までそつちの世界にはいらなくてくれ、あとボクを題材にした作品は部長権限で全部エツチなのは没にするから。」

エツチなのじゃなかったらモデルくらいはしてあげるわよ。」

「わかった。じゃあ明日は猫耳とメイド服を持ってくることにするよ。」

「この！！オタクがああ！！」

破壊が浩太の左脇に突き刺さった。

あほな話をしながらも美術室についたので扉をがらりと開け横に体を滑らせる。

「女神様あ！！」

真奈美ちゃんが、ボクがさっきまでいた場所にむかって飛び着くと、後ろにいた鈴がそのままの勢いで抱きつかれる。

「またかわされてしまいました。あ、でも鈴先輩の胸も柔らかいかも。」

うん、最近鈴が変な言動を言うようになったのは真奈美ちゃんの影響か、早めに来て準備をしてくれるいい子なのだが、

その主な目的が、ボクが入ってきた時に飛びつくことだったり長くボクと一緒にいたいからだったりするのはちょっと問題がある。

部長であるボクが部活の環境をきちんと整えていかなければいけない。

「真奈美ちゃん。そんなところで百合ってないで自分の作品にとり

かかりなさい。もう一か月近くたつんだからそろそろ作品を作る段階にはいらなさいといけないわよ。」

「わかりました。じゃあ模写をするのでモデルをしてくれませんか？」

ん？

なんだかこの会話はデジャブだぞ？先ほど崩れ落ちていた浩太も回復したようで一緒に美術室にはいっていく。

「さつき浩太にも頼まれたしちょうどいいからモデルはしてあげよ。新人生があつまったら希望者はボクのことを描いて良いようにしよう。」

「はい、まだ由香と花火は来ていないので、先に着替えてください。」

「ん？着替える？ボクはこのままでいいよ。いきなり凝った服なんてかけないだろうしね。」

「大丈夫です。由香と花火には了承をとっているし浩太先輩も普段から書き慣れている服なので問題ありません。」

そういつて真奈美ちゃんは紙袋をボクの目の前に差し出してきた。浩太が書き慣れているという部分ですでに嫌な予感がしていたボクは紙袋の上の方からはみ出ている白と黒のひらひらを引っ張り上げて絶句する。

「なんでメイド服なのよ！！」

「だって、女神様にご奉仕されるなんて最高じゃないですか。」

そういつて熱く語りだした真奈美ちゃんは浩太と気があつたらしく、ボクのメイド姿やその他ちよつとボクには理解できないというか理解したくない話をしだしたので、紙袋をもつと準備室の方へ向かつていった。

「あの二人はダメね。自分の欲求に素直すぎるのよ。」

「はあ、鈴も止めてくれてもいいじゃないか。」

「どうせ着ないんでしょ？でも何も着替えないのもかわいそうだしどうするの？」

「一応中身を確認だけはするわよ。でもたぶんあれね。ラインを隠せるし、シンプルな模様なのも描き易くなるとおもうわ。」

そういつて指をさしたところには、この前デザインからすべて自分で製作した可愛いワンピースがあった。

背中は少し大胆にあいているが、前から見る分にはたしかにシンプルで描き易いだろう。

「でもあれつて背中あいてるからブラとかできないんじゃないの？」

「まあそれくらい大丈夫でしょ。大胆なデザインだけど元々ボクが着たい服をつくつたんだから動きやすくすれにくいようにできてるのよ。」

「なるほどね。じゃあとりあえずその扉にへばりついている二人がはいってこないようにカギをしめて着替えちゃいませよ。」

「ありがと、ちょっと特殊な服だから着替えるのてつだつてくれる？」

「ええ、良いわよ。」

そう言つてワンピースに着替えると、純白のドレスに少し近いようになつたボクは鈴と一緒にでていった。

「「「「「おおお！」「」「」」」」

着替えている間に由香ちゃんも花火ちゃんも来ていたようで、四人でボクの姿をみて感嘆をあげた。

真奈美ちゃんや浩太はメイド服じゃなかったので残念がるかとおもつていたが、これはこれでご満悦の様子で、なぜか真奈美ちゃんは真赤になっているが、悪くはないようだ。

「はい、じゃあ今日は模写をします。今までは備品の説明や道具の使い方、先輩がついて簡単なものをつくったり、つてとこだったけど今日はみんなも自分の力で作品をつくってみましょう。」

初めてだから模写にしてもらうけど、前から言っているように今後はある程度きちんとしたものだったら自分の作りたいものをつくってもらつから、その先駆けとしましょう。」

「女神様つてさっきまでポニーテールしてましたよね？」

そうだ、ボクはさっきまでいつものポニーテールだったのだが、服の雰囲気にあわないので今はほどいておろしている。

ピンもなにもつけずにただおろしただけなのだが、結構評判はいいようだ。

「一日中ゴムをつけていたのに跡がついていないなんてやっぱり女神様だったのですね。ああ、ポニテも素敵ですがこうしていると本当に女神様のようです。」

「ちょっとオーバーすぎるわよ。まあ確かに髪は癖がつかないから便利だけど、それくらいで女神だなんて言いすぎよ。」

「真奈美ちゃんじゃないけど、メグの髪はうらやましいわ。」

そういつて鈴はボクの髪をなででした。

柔道をしていたころはショートだった鈴も中学にはいつてからは伸ばしだし、今は肩より少しながいくらいまで伸びているが、ボクは下ろすと腰より少し高いくらいなので、やはりうらやましいらしい。

「でも、シャンプーだけだよ？切るのはお父さんが許してくれないけど、手入れは面倒だから特にしてないからね。」

「シャンプーだけでこの滑らかさなんですか？私も先輩みたいな髪がほしいです。」

ここにきて初めて発言したのは由香ちゃんだ。

女の子らしい女の子で、文化部があとには音楽系しかなかったため、こちらに来たようだが、引っ込み思案なわりにボクらには結構なついでくれて自身も長い髪をおろしているのだが、ボクの髪をみてうらやましそうにしている。

「へえ、手入れしなくていいんだったらうちも髪伸ばしたいな。ショートじゃないとうちみたいにうねってるってグネグネになっちゃうしな。」

ちよつと男勝りな雰囲気があるのは花火ちゃんだ。

由香ちゃんの幼馴染で活発な子なのだが、そのせいで小学時代いじめられていたようで運動部みたいなどころにはいかずに、由香ちゃんに着いて美術部にきたが、

大胆な筆遣いはかなり光るものがあり、今後の成長に期待している。

「はいはい、鈴まで一緒になって無駄話しないの。今からなら2時間くらいは時間があると思うからさっそく始めましょう。」

この服はここに置いておくから書ききれなくてもまた明日きてあげるから焦らずに書くのよ。あと、せつかくだから助っ人は無しね。質問があったら教えてあげるけど、できるだけ自由に書いてみて。」

「ところで女神様、気になったんだが、下は何を着ているんだ？」

ボクの周りをぐるぐるまわって黙って観察しているとおもったらそんなことを考えていたのか。

「シャネルの5番よ」

冗談でいったのだが、浩太には通じてしまったらしく鼻血をだして筆などを洗うためについている水道の方へ行ってしまった。

よくこんな話していたなと自分のことは棚に上げ、どうせ浩太は慣れているので模写にそんなに時間はかからないだろうと考え長時間たつのはつらいのでイスをもってくると皆が見える位置に座り、部活を始めることにした。

チャプター13（後書き）

中学生になって秋もすっかり女の子らしくなりました。

二つ名も増え、心機一転です。前回の話からギャグ要素があがってきましたね。

中学生になってから関わりの強そうなキャラたちを目一杯出してみました。

さて恒例のテーマ発表ですが、“変わるものと変わらないもの”でおおくりしました。

中学生になって始まった変化と、今までと同じものがこの話で伝わればと思います。

それではみなさん本当にここまで読んでくださってありがとうございます。ございました。

チャプター14

竜の憂鬱

俺たちは中学生になった。

三人の仲は、表面上は小学校のころと変わらない。

しかし、俺の中ではたくさんの変化があった。

まず、俺は秋に惚れてしまったらしい。事故で仕方がなくなるとはいえファーストキスを奪うと、それに不満だった秋からやり直しを請求され、セカンドキスマでしてしまったのだ。

それに、出会った時は女の子の格好をしていたとはいえ、あの性格で女として意識するなんてありえなかったのだが。

ホテルでのあの晩俺は今まで気づいていなかったところで秋が女の子らしくなっていたことに気付かされた。

「うーん、ああん。もうたべられないよ。」

言っていることは秋らしく、女の子らしくはないのだが、声と寝顔がやばかった。

「なあ、司。ねれるか？」

「無理い。秋がこんなに女っぽくなってたなんてねえ。」

「だよな。俺はまだしも幼稚園から一緒だった司が気づかへんところで女の子になってたんやな。これは反則だろ。」

「反則かどうかはわからないけどお。むしろ一緒にいたから気づかなかつたんじゃないかなあ。大会の会場なんかでは、男の人が鼻の下伸ばしてるの良くみたもん。」

「ああ、よく考えたら好美さんに似てるんやから、かなりの美人のおはずやからな。」

「お母さんがお嫁さんにほしがるわけだよお。」

「は？司のこの母ちゃんそんなこといっとんのか？」

「なに他人事みたいにいってるんだよお。竜んちのお母さんも秋ちゃんを是非って言うてるよお。」

「まあ、この寝顔と色っぽい声聞かされたら、悪い気はしいひんけどさ。それでも早過ぎるやろ。」

「まあ、結婚はねえ。でもさあ。今は僕らの方がモテているけどお。中学校に入ったらわからないよお。というか絶対にモデルとおもっなあ。」

「なんでだよ？別にかわらへんやろ？」

「今まで秋がモテなかったのは男勝りだったからだだよ。それでも陰で人気があるくらいなんだからあ。」

「秋が起きとつたら破壊か残酷は覚悟したほうがいいぞ。その発言。」

「大丈夫だよ。声も大きくないしい、良く寝てるからこんな会話してるんですよ。それで秋なんだけど、中学に入ったら制服があるでしょお？」

司がそこまでいって俺はやっと納得した。

今まで女の子の格好をしていなかった秋が、セーラー服というどう見ても女の子にしか見えない服装をすれば、周りからの見方も当然変化が訪れ、秋は人気者になるだろう。

「せやな、俺らも精進しいひんとあかへんな。」

「それ、本気でいってるの？ 俺はモテモテの秋を見ても平気なんだあ？」

「ん？ まあ俺ら以外と一緒にいるとけが人増えそうやからどうにかしないかな。」

「そっかあ。確かにそれもそうだねえ。先に言っておくけどお。お母さんは秋ちゃんのことお嫁さんについていってるけどお。僕は別に好きな子いるからねえ。」

「いつの間に？ 誰？ もう付き合ってるのか？」

「ただだけどお。よく知ってる子だし。前のバレンタインでもチョコもらってるからたぶん向こうもオッケーだとおもうなあ。」

「チヨコって、あんなにたくさんもらってたら誰のことかわからへんやん。それで、だれなんや？」

「竜が好きな子を教えてくれるなら教えてもいいよお。まあ分かってるんだけどねえ。」

「バカ。俺は別にいねえよ。さっさと教えとけ！！」

「うーん。まあきちんと答えもらったわけじゃないしい。内緒かなあ。」

そんな話をしながら、夜は更けていった。秋をおこしてはまずいとできるだけ秋のベットから離れた部屋の隅に置いてあるソファアでこの日は司と恋愛について語り明かしたのだ。

よく考えると今まで恋愛とか意識していなかった俺は、この時初めて女の子というものを意識したのかもしれない。

「ああ、絶対俺秋に殺されるわ。あいつこの前浩太がおぼれた時からめっちゃファーストキスキにしてたやん。応急処置とはいえ結局俺が無理やり奪ったことになるんやろ？」

「大丈夫だよお。骨は拾ってあげるからあ。」

なんの慰めにもなっていないが、病室から出た俺たちはこんなやりとりをしていた。

秋がバスに轢かれそうになった男の子をかばって倒れた時にはあせ

つており、冷静でいられなかったが、意識が回復し意外と元気な姿をみた俺たちはリラックスモードはいつていった。

「竜くん、司くん。秋が、話があるんだって、お医者さんも少しなら大丈夫とおっしゃってくれているし、命の恩人だから少し話してあげてくれないかしら？」

「命の恩人なんて大げさですよ。むしろ一緒にいたのに止められなくて本当にごめんなさい。」

「そんなことないわ。二人がいてくれて本当に助かったのよ。これからも秋を助けてあげてね。」

「はい、もちろんです。」

そういつて俺たちは病室へとはいつていった。

「本当にもう平気みたいやな。」

「ほんとに今回は心配したよお。」

「心配かけてごめんね。あと、本当にありがとう。」

普段はおてんばな秋がしおらしくそんなことを言つとなんだか照れくさい。

「なんだよ。あらたまつちまつて。」

「みずくちよお。」

「だって二人がボクの命救ってくれたんでしょ？誰も説明してくれなかったけど、あの場で対処できたのは二人くらいしかいなかったからね。」

「ああ、司が近くの民家に駆け込んで救急車を呼んでその間に俺が心臓マッサージをしたんだ。」

微妙に覚悟ができなくて人工呼吸のことは避けて事故の状況を秋に伝える。

「やっぱり、そうだったんだ。ということは胸さわられちゃったなあ。どうしよう。秋は汚れてしまったわ。もうお嫁にいけないい。」

キスのことしか気づいていなかったが、そういえば胸もさわっていたのだった。

まあ結構大きいのは聞いていたが状況的にそんなこと考えている余裕なんてなかったので覚えていないのだが。

「違うよお。前と違って呼吸も止まってたから人工呼吸もしてたよお。」

「……………」

何故わざわざ伝えたんだ？司は俺の骨をそんなに拾いたいのか？

「人工呼吸……ってことは??」

「ごめん、ファーストキスの相手は俺だ。」

死亡率を少しでもさげようと俺は精一杯の気持ちを表すために頭をさげた。

それでもフルコンボはなくても殺戮くらいは覚悟して待っていると頭の上から予想外の声が聞こえた。

「いいわよ。緊急事態だったんでしょ。」

絶対に怒りだすと思っていた俺は啞然としてしまつた。

「それに、初めてが竜でよかったわよ。」

「へええ。秋ちゃんもたまには素直だねえ。」

「バカ！！そんなんじゃないわよ。変態ロリコン男とか定年すぎのおじいちゃんなんかと比べたらましっただけよ！！」

なんだか、喜んでいいのか悪いのかわからない会話を司と秋が続けていたが、布団を引き上げようとしていた秋が声をあげた。

「いた！！」

元気にふるまってはいても、やはりけが人なのだ。

あまり無理をさせるのは良くない。

「まだ安静にしてろ。ブレーキ踏んでたとは言え、かなりの衝撃だったらしいからな。」

「うん、ともかく感謝してるの。これは本当よ。ありがとう。」

あらためて、秋は感謝の言葉を送ってくれた。こういう時にごめんねじゃなくて、ありがとうと言える秋はすごいと思う。

自分の悪かったところを謝るだけではなく、自分の失敗などを助けた人に精一杯の感謝ができる人間なのだ。

すると俺たちもこれから頼ってほしかったのでたいしたことはないうというノックの音が聞こえて今度は看護婦さんが入ってきた。

「けが人なのでそろそろ面会は終えて安静にしてください。」

そう言うと、点滴やら秋の容態やらを確認したので、俺たちは病室を出ることにした。

また明日もお見舞いにくるつもりだったし、秋の体調が良くなったらまた一緒に遊べるのだから。

「絶対にいやだあああ!!」

今日は運動会で賭けに負けた俺は秋の奴隷になるべく秋の家へと来ていた。昼についた俺は人生最大の選択を迫られている。

「そんなに嫌がるなら選択肢をあげるわ。奴隷に選択肢をあげるなんて優しいご主人様でよかったですわね。」

「おう、それを着なくてすむなら感謝でもなんでもしてやるぜ。」

「じゃあ、この擬似メイド服を着て男を捨てるか、三人で決めた約束を破った罰としてボクの制裁を受けて命を捨てるか選ばせてあげるわ。」

「おいおい、そのどこに選択肢があるんだ？というかもう既に殺る気まんまんですね？」

「その構えは幻のフルコンボとかいうやつですよ？」

「普段のつつこみなどでは使わないが、悪人に対しては結構容赦がない秋は時々これを使う。」

「この前カツ上げを止めにはいった秋にナイフを向けた不良は泡を吹いて倒れ、救急車で運ばれていった。」

「あの・・・別の選択肢は？」

「もちろんあるわよ。一本背負いの千本ノックの相手をするとか、服を着るのが嫌なら全裸になってもらって町を一周するとか？」

「選択肢はなかったようである。」

「メイド服をお願いします。」

「フッフ、素直にそう言えばいいのよ。ま、でもかわいそうだし家の中だけでいいわよ。今日は誰もいないし、夕方にお母さんが帰ってくるまでその姿でいてね。」

「存在自体がむちゃくちゃな奴だが、基本は悪いやつじゃないので、きちんと俺へのフォローも考えていたらしい。」

「服の上からだし、下着までつけるわけでもないのだからこれくらいは我慢してやろう。」

「服にそでを通そうとすると何かいい匂いがする。」

香水などはちがう、太陽のような匂いだ。

「このエプロンとかもつけるのか？」

「もちろんよ。それと、今日の竜は奴隷なんだから口調もメイドっぽくしなさい。」

「ええ???なんで俺がそこまで。」

「なぜわたくしがその様なことまででしょ、あとボクのご主人様と呼ぶように。」

エプロンを着け終わった俺は言われたとおりにメイドっぽく話してみる。

といつても本物のメイドさんなんてみたことがないので雰囲気だ。

「これでよろしいでしょうか?ご主人様？」

「うん、よく似合う。」

そのあとちょっとした掛け合いをした俺たちは掃除をするべく秋の部屋をあとにした。

ところが普段掃除なんてしない俺はなにをやるにも秋に聞かないとわからず、結局秋が掃除するので重いものとかを運んだり、少し手伝うだけにおわった。

「お嬢様は普段からお掃除をなさっているのですね。わたくしは学校の掃除もさぼってばかりだったので何もできませんでした。」

「はあ、なんでメイドよりもご主人様の方が働いてるのよ。」

「申し訳ございません。お嬢様。」

掃除は全くの役立たずでしかなかった俺だが、なんども訂正されたおかげでメイド口調は様になってきていた。

「本当は一時間くらいで終わらせる予定だったのに、二時間もかかっちゃったじゃない。」

「お嬢様一人でされた方が、早く終わったのではないですか？」

「いいのよ。竜にさせることに意味があるんだから、次は洗濯物を取り寄せるわよ。」

「はい。わかりました。」

俺は階段で二階に行くと少し段差になっているところからベランダへと出て行った。

洗濯物の数は多くないが、これは俺が取り寄せていいのか？

「下着とかばつかりじゃないか。」

ついついメイド口調がもどってしまったが、秋がないのだからいいだろう。

掃除でも活躍できなかったのだし洗濯物を取り込むくらいはしないとかつこがつかないだろうと、誰に対してか言い訳をしながらリビングへと持っていく。

リビングに着くとまだ秋は帰ってきていなかった。

そのまま持っているわけにもいかないので、床に洗濯物を下ろすと、

この前東京で買ったブラが目にとまった。

「Cカップって言うてたよな。意外とおっきいんだな。」

そう言うて手に取ると普段は色気も何も無いブラをつけているのにちよつとおしゃれにフリルなどがついたブラを眺めてしまつて秋が帰つてきたのに気付かずに見つかつてしまった。

「えつと・・・これは・・・」

「ボクとしたことがあまりにも掃除が大変で二階には下着泥棒に合わないよう下着を干していたのを忘れてたわ。」

「え？怒らないのか？」

前だったら確実に一撃がはいっていたはずなのに、この前の事故以来なんだか優しい秋は怒ることもせず自分の過失をあげた。

「いいわよ。指示を出したのはボクだし、変なことに使つてたわけでもないしね。」

「へ、変なことつて、俺はただ、大きいなあつて思つてみていただけで、あ・・・。」

「そう、竜も男の子だもんね。でも前の事故の時に触つたんじゃないの？」

「あんときは、必死だったし、そんな余裕なんてなかったんだよ。」

「そうだったわね。今更だけど、ありがとうね。」

「これで何回目だよ。まあ秋にありがとって言われるのは嬉しいから別にいいけど。」

「ふふ、じゃあさつさと洗濯物たたんじゃおう。」

「かしこまりました。お嬢様。」

そのあとまた秋の指導を受けつつ簡単なタオルなんかをきれいにたたみ、談笑を交ながら洗濯物を片づけていった。

「お疲れ様、もうメイド服は脱いでいいわよ。」

「ふう、まさかこんな罰ゲームになるとは、他の奴には絶対に内緒だぞ?」

メイド服から逃れられるという安堵を覚えつつ秋の部屋へと向かう。もう二度とこんな服は着たくないが、服装以外の命令は特に無茶な要求がなかったこともあり、特にいやな気分はしなかった。

「でも、司には見せてあげたかったわ。竜って整った顔してるから女装させても意外と似合うのね。」

「女装が似合ってもうれしくねえよ。まあ整った顔立ちっていうのは間違い違いないわ。」

「いらら、自分でいうんじゃない。」

「秋だって時々冗談で自分のこと可憐な乙女とかいうやん。」

「それは、竜が男女とか男勝りとかお嫁のもらい手がないとか言うからでしょ。」

秋の部屋に着くと元々服の上から大きめのエプロンとワンピースを着ていただけなのであっさりと脱いでしまった。

まあ下に何もきてなくても相手が秋なのだから問題ないのだが一応女の子だと確認したばかりなのでヌードショーは遠慮ねがう。

「ああ、フリフリのワンピースとエプロンだけじゃものたりなかったなあ。でもお母さんのお化粧品道具勝手に持ち出したらまずいし、というかばれるし、今回はこれで勘弁してあげるか。」

「ちよま、何か不穏な響きが混じったきがするんやけど？今回はとか化粧とか……。」

「やだあ、あはは、冗談よ。でも竜がボクにひどいことしたら、その時は罰としてつかえるかもしれないわね。」

「もう二度としいひんわ。じゃあ、帰るわな。」

メイド服を脱いで落ち着いた俺は肉体的というよりも精神的に疲れたので帰ろうとすると、なぜか秋に声をかけられた。

「え？何で？」

「何でって、もう終わりやろ？運動会で疲れたし、精神的にもかなり疲れたから休みたいんやけど……。」

「メイドじゃなくなっただから、誰か帰ってきてても平気でしょ？」

それに、奴隷契約は一日でしょ？せめて帰るまでは言うこと聞きなさいよ。」

「うーん。まあ確かにそうやわなあ。ま、俺も秋が無茶なことしいひんとおもってこんな約束したんやし、もう少しくらいやったら聞いたるわ。実際メイドの格好意外はまともな命令やったしな。」

「メイド意外まともな命令こなせてなかったけどね。」

「うるさいなあ、わかったわ。煮るなり焼くなりすきにせえ。」

「男に二言はないわね。ふっふっふ。」

「げ、そんな言われるとなんかこええ。」

「まずこれを付けて。」

秋が取り出したのはアイマスクだった。

夜は快眠の俺はこんなのもの使ったことはなく、使い方もわからなかったがとりあえずメガネのようなものだと思ったので適当に装着する。

「まっくらちゃん。これ、あぶないんとちゃう？」

少しふらついたが、こんなことでコケたらカッコ悪いのでバランスを取ると真っ直ぐ立ってみせる。

そうするとやはり危なっかしかつたのか秋がベッドに腰掛けるように促し、手を引いて導いてくれた。

「どう？真っ暗って何されても抵抗できないし、結構こわいでしょ

「？」

「ああ、少し動くだけでもなんかにぶつかっちまいそうでごわいわあ。」

「じゃあ、はじめるわね。」

「うわ、なにをのせたんや？」

いきなり生暖かいものが手に触れ手を引っ込めてしまった。

「さっき台所を掃除しているときに見つけたナメクジよ。」

「ちょ……んなもん手にのせんよ。」

「だめよ。うごかないの。」

そう言つと秋は俺の手足を拘束してベッドに寝かせられてしまった。

「おいおい、なんかやわらかいもん、あたっとなんだけど。」

「ぬいぐるみよ。竜って意外と怖がりなのでかわいい。」

「いや、こんな重たいぬいぐるみ部屋になかったやろ。」

秋が乗っているのはわかっていたので冗談で言ったら殴られた。普段と違い見えなかつたので暗黒をくらつたように不意打ちとなり結構いたかつた。

「次はどこにナメクジおこつかなあ。ここなんてどう？」

「首はやめる！！流石にこそばすぎるわぁ。」

押さえつけられているので抵抗もできずされるがままになっていると調子にのった秋の行動はエスカレートしていった。

「しょうがないわね。じゃあこっちにしてあげる。」

「バカ顔はもつとあかんわ。」

流石に我慢ができなくなった俺はアイマスクを取り抗議してやろうとすると秋の顔が目の前にあった。

「あ……。」

「アイマスクを取るのは反則だよ。」

真赤になりながら秋は離れて行ったが、俺はまだ状況をよく理解できないでいた。

「ナメクジって？」

「冗談に決まってるでしょ、ボクだってわざわざ手に取りたくないもん。」

言われてみれば当然なのだが、初めてアイマスクをつかった俺は結構テンパっていてそんな簡単なことにも気付かなかっただらしい。

「普通こういう時はスポンジか何かだと思ってアイマスクなんてと

らないでしょうが。」

「そんなこといっても、動揺してたんだから仕方ないだろ。」

秋に舐められた羞恥心とナメクジと間違えたまま気付かなかった羞恥心とが一緒になって、間抜けな言葉しか出てこない。

頭がこんがらがってしまつて正常に働いてくれないらしい。

「まあまあ、おちつきなさいよ。ナメクジじゃなかったんだからいいじゃない。」

「いいわけあるか、つてかあれじゃまるで・・・」

キスみたいじゃないか、と言おうとしてその恥ずかしい発現に口籠もつてしまふ。

「だって、ボクあの時意識がなかったし、どうせならきちんと意識があるときに初めてをやりなおしたかったもん。」

勇気を出して言ったのだろう。

真っ赤になりながら言う秋は可愛いかった。

あれだけ気にしていたファーストキスだ。

秋が望むならかなえてあげよう。

「まあ、確かにファーストキスうばっちゃまったもんな。いいぜ、やり直ししよう。」

「罪の意識あるんじゃない。じゃあやり直させてあげるわ。」

強がりと言っているが緊張しているのが分かる。

秋は目を閉じて立っているが、両手を握りしめているのが見えた。俺はベッドから立ち上がると、優しく秋の右肩をつかみ、左ほほに手を添えてやる。

すこしビクツとしたが、さっき以上に目をきつく閉じて震えている秋に俺は止まりそうになかった。

「チュツ」

本当はもっと秋の唇を味わってみたかったが、ガチガチに緊張している秋がこれ以上緊張しないように軽く触れるようにキスをする、体を離れた。

その時は秋と付き合いだすことになるんだと思っていたが、秋は心友になるうと提案してきて、

司との三人の関係は確かに魅力的で俺もそれには賛成だったのでこれまで以上に仲良しの三人となったが恋愛的にはなにも変わらない日が続いた。

何故か毎月“優しくする日”なんてものを作られたが、それで日常が変わったわけでもなく三人の関係は今も続いている。

ところが、中学二年になってそれが大きく覆されることになった。今までクラブ活動はちがったが、それ以外はクラスでも登下校でも一緒だったのだが、クラスが別になってしまい、秋や司と一緒にい

る時間が短くなってしまった。

しかも一年生としてはいつて来た真奈美ちゃんは今までの遠くから見ているファンクラブの連中とは違い積極的に秋と接しようとし、それに影響されて周りも秋に対してアピールを開始したようだ。

今朝だってゲタ箱には大量のラブレターが入っていたし、部活に行く前だって俺に声もかけずに浩太と鈴ちゃんと話しながら美術室むかっていったのを見かけた。

彼氏でもないのに嫉妬なんてカッコ悪いが、しかも一番のライバルが女の子である真奈美ちゃんっていうのが悲しいが、それでも気持ちが落ち着かない。

「竜う。まだ終わらないのお？」

「ああ、今日は体育館モップ掛けたら終わりだからもう少しまってくれ。」

今日は珍しく司の方が先に練習を終わったらしい。

司は荷物を置くと何やらいじりながらこつちを観察しているようだった。

「お疲れ様でした。司、待たせたな。」

「いいよお。それよりなにかあったのお？竜へんだよお？」

司ともかなりの付き合いだ、少しの変化もわかってしまったらしい。元々隠し事が下手な俺は司には自分の気持ちを伝えていたので今の心情を相談してみる。

「気持はわかるかもねえ。どっちの気持ちもねえ。」

「どっちもつてのは俺と秋のつてことやんな？」

「そうだよお。三人の関係を続けていきたい秋と今まで以上を望む竜の気持ちかねえ。」

「今まで以上つてわけじゃねえよ。むしろ前に戻れるならその方がいいやん。」

「うーん、でも秋がモテてるんだから前に戻るのは無理でしょお？ じゃあ今まで以上の関係にならないと竜の気持ちは晴れないんじゃないかなあ？」

「まあ、確かにそうかも知れねえけど、秋はそんな気はねえからしやあないやん。」

「ふう。まあ僕にも思うところがあるからあ、もうしばらくは我慢してよお。」

美術室に向かいながら話していて、扉の目にきてしまったので司は扉をあけると固まってしまった。

「おい、どないしたねん。秋いゝ帰るぞお！！」

そう言つて美術室の中を覗くと俺も石化してしまった。

「もうそんな時間が、じゃあみんな今日はここまでだ。出来上がった絵は一度持ち帰つて明日も持つてくるんだぞ。」

初めての作品だ。大事にあつかったらボクからいいものをプレゼントするから期待しておくように。」

「「はあい。」」

「ん？どうしたんだ二人とも？ボクはこれを着替えてくるからちょっと待っていてくれ。みんなも帰る準備をして早く帰るんだぞ。」

「「はあい。」」

もう一度部員たちは元気に返事をする。帰り支度を開始し、それぞれ帰って行った。

「ふふ、女神様って呼び名も間違いじゃありませんよね。」

俺たちの気持ちは真奈美ちゃんが代わりに代弁してくれた。俺と司は秋が準備室から出てくるまでの間真奈美ちゃんと、どのようにして女神が降臨したのか話を聞いていた。

「おまたせ！ずっと動かなかったから体中がだるいよ。」

「お疲れえ。モデルだったんだってねえ。真奈美ちゃんから聞いたよお。」

「新入生に模写のモデルを頼まれてね。どうだった？あの服もボクがつくったんだよお。」

「うん、本当に女神みたいだったよお。」

「ありがと！司は正直者だね。」

「そこはもう少し謙遜するところだよ。」

「あはは、でも部員のみんなもだけど二人とも唾然としちゃってさ。作ってよかったよ。」

「服も素敵でしたが、女神様が着てこそその女神降臨でしたわ。」

「真奈美ちゃんはまたそういうことをいう。でも悪い気はしないからいいわ。さあ、帰りましょ。」

「ああ。」

俺はここにきてやっと声を出せた。

服はセーラー服にもどっていたが、おろした髪はそのまま、そのせいかさっきのドキドキが中々治まらない。

俺は本格的に秋に惚れているらしい。

「ねえねえ。どうだった？竜からは何も感想聞いてないわよ？」

秋は俺の荷台でそう言って体をくっつけてきた。

いつもより胸の感覚が柔らかい気がする。

「ああ、よかったと思うよ。真奈美ちゃんじゃないけど女神みたいだった。」

なんだか緊張してしまっただがどもらずに言葉がでてくれた。

「ほんと？うれしい。あとね、あれ後ろがガバツとあいちゃうからブラつけれなくて、今も面倒だったからノーブラなんだ。」

「ちよま、ひつつくな！！胸あたってるから！！」

「嬉しい癖にい。竜くんはシャイなんだからあゝ。」

「司！お前あとでおぼえてるよ。」

「そんな動揺しないの。それよりも、きりきり漕ぎなさい。」

そう言うと秋は体を離した。

ちよつと残念な気もするが心臓のためにも今はその方がいいだろう。あんまりにも自転車を真剣に漕いでいるので鼓動がすごい勢いだ。

「それは自転車をこいでるせいじゃないよお。」

「うるさい！変なところで突っ込むな！」

「ふふふ、もうほとんど完成したみたいだけど明日も今日の続きする予定だから明日はあの服きてかえろっか？」

「バカ！私服なんて着て二人乗りしたら警察につかまるだろうが。」

「こんな田舎で警察なんて来ないよお。先生たちはヘルメットみて分かるからあ別にあの服でも問題ないとおもうなあ。」

「明日きちんと着替えなかったら後ろにのせてやらないからな。」

「じゃあ、司乗せてね。荷台ないけどステップのところまで十分だしね。」

「どあほ、あんな服でそんなことすんな。」

「じゃあ竜が乗せてよ。今更歩いて帰れとは言わないでしょ?」

「ああ、もうわかったよ。その代り大人しく乗るんだぞ。」

「はあい。」

しゃべりながらも自転車は進み、そのあと結局なんだかんだと秋と司にいじられ続け、秋を家に届け、司ともわかれ道でさよならをし、家に帰るのだった。

「はあ、明日はあれが荷台にのるのか。でも綺麗だったなあ。」

「お兄ちゃん帰ってくるなりニヤケてどうしたの?」

「貴史!ニヤケてなんかねえよ。」

「はいはい、どうせ秋姉さんが荷台から抱きついて胸でも当たったんでしょ。」

俺ってそんなにわかりやすいのか?

遠からず近からずの解答が貴史から帰ってきたのでとりあえずうなずいておいて、家に入っていく。

昔は祖母と母に任せっきりだった家事もメイド事件いらい手伝うようになり、着替えたら台所に向かうつもりだ。

「おかえり、竜。学校はどうだったの?」

学校のことを聞かれたのに秋のことを思い出してしまい顔が真赤に

なってますまう。

「そう、秋ちゃんとうまくいってるのね。着替えたら手伝って頂戴。」

「なんでお母さんまで分かるんだよ？」

「あら？竜つてすごく正直な性格してるわよ？今だつて標準語になつてるじゃない？」

「あ！そういえば俺秋の女神姿みでからずつと標準語だったかも・・・」

「え？秋ちゃんの女神姿？お母さんも見てみたいわ。明日はカメラ持って行つても良いから写真撮つてきてちょうだい。それがダメなら秋ちゃんを家に招待するのよ？」

「なんでやねん。とりあえず着替えてくるわな。」

「うーん、今は意識して関西弁にしたが、これはやばいな。」

「家になんて呼んだら大変なことになるだろうし、カメラどこに置いてあつたかなあ？」

「そんなことを考えながら俺は着替えるために部屋へとはいっていく。」

チャプター14（後書き）

初めての竜視点でのお話でした。

あの時竜は、みたいな感じで書いたのですが、いいですね。この方法も

さて今回のテーマは、別人格からの視点です。はい、そのまんまですね。

でも、AKIは一人しかいないのに、秋以外の竜の気持ちや司の気持ちを書くのはかなり大変でした。まあ楽しんで書いていることなので苦痛ではないのですが、死神みたいに超越した人格ではないので人間味があふれる視点になっているかが不安です。

それではキャプチャー14を読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

秋の憂鬱

この服は普段男のものしか着ないボクが鈴の奨めで女の子らしい服を試作的にデザインから起こしてみたのだが、人気は上々だ。

みんな誉めてくれるし、模写は新生もそれなりの作品に出来上がり、ボクが作った額縁をプレゼントしたら大事にしてくれると皆約束してくれた。

初めての作品なので思い出として取っておいてほしいと考えたのが正解だったらしい。

「なあ秋、変な頼みなんだけどお前の家についたらちょっと写真を撮らせてくれるか？」

「ん？どうしたんだ？おばさんに頼まれてもしたのか？」

「そゆこと、昨日ついこの服の話をしちまってん。そしたら写真を取ってこいってうるさいから一枚だけでええから撮らせてほしいねん。」

「いいわよ。せっかくだから三人で取りましょ。学生服とつてのがちよつと変だけどまあいいでしょ。」

「いいよお。じゃあ僕と竜が交代でとつてえ。秋のお母さんに頼んで三人のも取ってもらおうよお。」

「せやな、それがええな。」

「写真か、遠足にもっていく使い捨て買うの忘れてたわね。」

「そう言えばあ。タイムスケジュール決まったのお？」

「ある程度はね。また明日鈴と一緒に見せるから二人がおっけーなら先生に出しちゃうわ。」

「今年は秋と司と鈴でまわるん？」

「そつだよお。竜は誰と周るのお？」

「クラスの班やで、麻美とかもおるし途中で合流できるかもな。」

「麻美と一緒になんだ。ボクも麻美と周りたいよ。」

「聞いとくわ。でも俺の班数少ないアンチ秋メンバー結構いるからわからへんけどな。」

「ああ、なるほどねえ。竜もたいへんだねえ。」

そんな会話をしているうちにボクの家についた。

お母さんと呼ぶと最初は三枚の予定が悪乗りして結局フィルムの残り10枚近く撮ってしまった。

「ほな、またあしたな。」

「おやすみい。」

この時ボクは遠足であんなことが起こるとは思いもしなかった。

「わあ〜。平日とはいえやっぱり混んでるわね。」

「これはタイムスケジュール通りには無理っばいわ。」

今日は遠足の日だ、鈴も司もタイムスケジュールには賛成してくれて、竜は班員の反対があつて結局三人で周ることになったのだ。

ところが、平日だからと絶叫系もすいているはずだったのだが、ここは結構人気の遊園地でいい天気にも恵まれ過ぎてしまい、大学生らしい人やら家族連れやらで客がかなりいる。

多少スケジュールの変更は余儀なくされるようだ。

「あのジェットコースターは絶対乗りたいからいくつか別の絶叫をあきらめてあとは待ち時間を見て乗れそうなものに乗っていきましようか。」

「そうね。基本はメグに任せるわ。司くんもいいでしょ?。」

「いいよお。タイムスケジュールに合わせて楽しめないよりいいからねえ。」

「竜もそれでいいでしょ?。」

「秋い、今日は、竜はいないよお。」

「あ、そうだったけ。遊ぶ時っていつつも一緒だったからなんかボケちゃったわ。」

「メグったら、じゃあ改めてしゅっぱあつー!」

学校行事のため朝一でならんだりできないのもう既に開園から2時間以上たっており、

ある程度列などはもうできていたのでまず並ばずに乗れるバイクングやら小さめのジェットコースターに乗ると、

お昼の時間は各自で取るようになっているのですいている間に一番人気の高速ジェットコースターに並んだ。

「今の時間ならすぐ乗れると思ったのにね。」

「仕方がないわよ。一番人気だしメグと同じように考える人もいるんだから。」

「確かにねえ。でも待ち時間30分は早い方だよお。来てすぐ向かった班は1時間以上待ったみたいだよお。」

「なんで司がそんなの知ってるのよ?」

「それはねえ。竜たちの班だからだよお。」

「なるほどね。さつき並ぶ前に声掛けてたのは竜たちだったんだ。ってまだあそこに……?」

「あ、ホントね。でもあの班女の子ばかりじゃない?」

「アンチ秋のメンバーってそういうことだったのね。」

遠くに見えた竜たちの班はお弁当を食べているようだった。

しかし四人班のうち三人が女の子でクラス内の人数は男女均等なのでおそらく竜のファンの子たちが無理やり班を作ったのだろう。

アンチ秋とは要するに竜や司といつも一緒にいる私を煙たがっている竜ファンのことであり、司ファンの子たちはそうでもないのだが、竜ファンの子たちは結構露骨にボクのことを悪くいたりするのであまりボクも仲良くしたいとは思わない。

「竜くんも大変ね。司くんのファンと違って頭悪い子がおおいから。」

「鈴、そんなこと言ったらかわいそうだよ。」

「まったくお人よしね。でも、あの子たち二人は大丈夫よ。メグのこと悪口言ってる竜くんが惹かれるわけないわ。」

「あのねえ。竜がだれと恋愛しようとか関係ないの。ボクらは心友なんだから。」

「あら？そう言ってる割にはさつきからずっと竜くんの方はっかり見てるじゃない？メグは素直じゃないんだから。ほらほらお姉さんに相談してごらん。」

「そんなんじゃないわよ。」

そうはいったものの、少し気になって目がいつてしまうのは事実で、ちらちらと竜の方を確認してしまふ。

すると、竜ファンの女の子二人はトイレかジュースでも買いに行くのかどこかに歩いて行ってしまい、竜と麻美の二人だけになった。

「ねえ、ボクって視力いいよね？」

「ええ、メグは両目ともかなりいいわよね。上限が2.0だからそれ以上はわからないけど、この前なんて300M以上向こうで落ちたスズメを見つけて介抱してたわよ。」

「そうだよ。ボクには二人がキスしてるように見えるんだけど、あれは錯覚？」

「うーん、角度的によく見えないけど、あれだけ長く顔を近づけるのはキス以外では思いつかないわね。まあベタなところでいえば目にゴミが入ったってところだろうけど。」

「目にゴミね。うん。」

ボクには二人がキスしているようにしか見えないよ。

なんだか胸の奥がキュってなってすごいつらくなってしまいこれ以上見ることができなくなったので、ジェットコースターの列を確認するフリをして、反対側を見た。

「そつえばさつき竜と話した時にい、結局午前中はこれしか乗れなかったしい、班でこれ以上行動するのも面倒だから昼食べたら合流しよあってさあ。」

だからあ、お昼食べる場所教えておいたよあ。」

なんで司は今このタイミングでそんなこと言うの？

普段だったら竜と一緒に周れるんだからうれしいはずなのに、さつ

きの光景が目には焼きついてしまつて素直に喜べないよ。
鈴だつて恋人同士が班に合流してきたらいやに決まつてる。

「いいわよ。どうせだつたら浩太も呼んじやつてもいい？ 今回の班あんまり仲良くないらしくつて結構浮いてるらしいのよね。」

「あ、うん。いいよ。」

まさか鈴がおっけー出すと思つていなかったなので今さら反対もできずに結局竜と麻美と浩太と合流することになり、
ジェットコースターの順番もそろそろなのでその話はそこでおしまひになった。

人気のジェットコースターだけあつてすごい迫力だつたのだが、なんだかノリ切れなかつた。

「メグ大丈夫？」

「うん、あんまりの迫力にちよつと酔つちやつたかも知れない。とりあえずお昼にしよう。少し休憩したら元気になるよ。」

そういつてジェットコースターから少し離れたところにある机やらがたくさん置いてあるエリアに着くとお弁当を広げた。

今日は張り切つて早起きをして作ったのだが、今はあまりおいしそつに見えないのでサンドイッチを一つだけ手に取るとモシャモシャと口を動かした。

「あ、うまそうやん。一個頂戴。」

竜はいつの間にかボクの後ろにたつており、ボクのお弁当の中からハムサンドをとつて食べた。

「ホント、秋ちゃんって昔から何でもできたけど、お弁当も美味しそう。」

もちろん麻美も一緒だ。

麻美はおいしそうとはいったもののさっきお昼を食べたばかりなので食べようとはしなかった。

「ボクさっきのジェットコースターで酔っちゃって食欲ないから食べてもいいよ。司たちもどうぞ。」

そういつて机の真ん中にお弁当を置くとさっきのハムサンドはもうたべてしまっていたらしい竜はもう一個今度はツナサンドを手に取り、

司と鈴もそれぞれひとつずつサンドイッチを食べた。

麻美も一つくらいならとトマトやキュウリを挟んだ野菜サンドを食べるとお弁当は残り半分くらいになりあとは司と竜でたいらげってしまった。

二人は男の子なのでボクの分くらいぺろりとたべてしまうとごちそうさまといってゴミを捨てに行ってくれた。

「女神様あ。おまたせしました。」

「浩太おそいわよ。もう少し早くくればメグの手作りお弁当食べれたのにね。」

「なにい！！女神様の手作りだと？？なぜ待ってくれなかったんだ。」

「私に言わないですよ。ほとんど食べたのは竜さんと司くんなんだか

ら。」

「竜う。司あ。許せん。俺の編み出したギャラクシークラッシュャーをお見舞いしてやろう。」

「浩太は相変わらずやな。そんなおなががすいとるんなら鈴のおにぎりが一個残ってるからそれをくえばええやん。」

「食べる？メグのサンドイッチたべちゃったらお腹一杯になっちゃったのよ。」

「うむ、女神様の手作り料理が食べられなかったのは残念だが、いただこう。もぐもぐ、意外とうまいな。シヤケ好きなんだ。」

「そう、よかったわ。一応それも私が握ったんだからね。」

「なに？鈴は料理のできないお嬢様じゃなかったのか？」

「あのねえ。中学からしか知らないんだから、仕方ないんだけど、私これでも柔道してたり、箱入り娘とは程遠い存在よ？」

「そうか、だから一年の時は髪が短かったのか。鈴の意外な一面を見つけたな。」

「まったく、メグが可愛いし性格も運動も頭もいい完璧少女なのはみとめるけど、私だってそこそこいい女なんだからね。」

「うむ、確かに女神様は完璧少女だ。」

「.....」

「さあ、ご飯も食べ終わったみたいだしアトラクションまわりましよう。」

空気をさっして移動を促したのは麻美だ。

その提案には全員が賛同し、次のアトラクションに向かうことにした。

「でもさあ。またアトラクション混んできちゃったわね。」

「そうだねえ。午後からのフリーパスで入る人もいるから今からは人がおおくなっちゃうからねえ。」

司はどこでその情報を手に入れたのだ？

ほわほわした話し方をしますが結構活発な性格である司には意外と謎が多いような気がする。

「あ、あれなら人も少ないし、お昼食べたばかりだからちょうどいいんじゃない？」

そういつて麻美が指差したのはお化け屋敷だった。

「いいねえ。あれにしよう。」

「俺はええよ。浩太も鈴ちゃんもいいよね？」

どうやら全員が賛成のようだ。

「ボクちよつとまだ酔いがさめてないみたいだからここのベンチで待ってるよ。」

「歩いていくタイプのお化け屋敷だから乗り物にはのらないわよ？」

鈴は善意で教えてくれているのだろう。

しかし、他の四人は明らかに顔がニヤニヤしている。さすが幼稚園からの付き合いである。

（竜は小学校からだが、仲が良いので関係ない）

「鈴、女神様は基本的に完璧少女ではあるが、やはり人間なのだよ。」

「そうね。秋ちゃんもこればかりはね。」

「え？なに？ひょっとして中学生にもなってお化けが怖いのか？」

「・・・そうよ。怖いわよ。っていつかなんでみんな平気なの？お化けだよ？病気でもないのに学校にも仕事にもいかない存在なのよ？」

「おいおい、それはアニメの話やろしかも微妙に間違ってるし、それただの二ートちゃん。」

「じゃあ、ナイスミドルのおじ様やキャリアウーマン風のお姉さんや和服なのにはっちゃけてるお嬢様に『あなたは鬼なのよ。さあいつしよに冥界にいきましょう。』ってつれていかれちゃうのよ。」

「それは秋の夢の話でしょお。」

「メグの夢？」

「ああ、何でも交通事故で臨死体験をした後から見だしたとかいうやけにリアリティのある夢のことよ。」

「僕を助けたあとにもナイスミドルのおじ様ってのは夢に出てきたって言うてたよね。」

「夢の話だけど、そんなのどうでもいいの、ボクは絶対にお化け屋敷にははまらないからね。いくならみんなでいけばいいよ。」

「でもねえ。ここのお化け屋敷は二人ずつ入る様になってるから一人あまつちやうんだよねえ。ってことで秋も入ることは決定してるんだよね。」

「司、タイムスケジュールにお化け屋敷がないのに行くわけないでしょ。」

「確か列をみてその場で臨機応変にうごくんじゃないかなかったっけえ？」

「く……」

司は絶対にこうなることをしっていたわね。

タイムスケジュールにお化け屋敷が入っていないことも、当日人が多くて臨機応変に動くことも、ひよっとしたらお昼の位置からすべて計算されてたんじゃないかしら？

被害妄想な気もするけど、司ならそれくらいやりかねないわね。

「わかったわ。ボクの負けだよ。でも司か竜のどっちかが一緒にはいつてね。」

暗いところだとボクの場合は幽霊もだけど不幸の確率も格段にあがつちやうから。」

「そうね。じゃあ一番安全な竜さんと一緒に入りなさいよ。私は司といくから。鈴ちゃんも浩太くんと一緒でいいでしょ？」

麻美はなぜか彼氏であるはずの竜をあつさりボクにゆずると鈴と浩太に確認を取った。

何故か司には拒否権はないようだ。

「私はそれでいいわよ。」

「女神様と一緒にいけないのは残念だが、この場合は仕方ないな。」

「あんたらね。昔から知ってるとは言え不幸少女を疑わないなんてどうよ？」

「慣れじゃないの？うまく付き合えば問題ないし実際竜くんが横にいれば滅多なことがない限り不幸はおきないじゃない？」

「うーん。確かに不思議なんだけど、竜と一緒にいる時は不幸のエンカウント率低いのは確かなのよね。もし起こっても一人の時と比べても全然問題ないレベルだしね。」

「そうだねえ。小学校に入って竜と出会ってからはみんなある程度平和になったよねえ。」

「おいおい、俺を魔除けの札みたいになや。秋の不幸はともかく俺のはいいがかりやろ。」

「まあそんなこと言ってる間に順番がきたわよ。まずは私と浩太が行くわね。浩太の叫び声でメグちゃんがおびえているところが見れないのが残念だけど、仕方がないわ。」

「鈴ちゃんも結構、秋慣れしてきたねえ。」

「どついう意味よ。まったく、不幸少女扱いするわ。女神あつかいするわ。ボクをなんだとおもってるんだよ。」

「うーんと、今は何か話して気晴らしをしているう。か弱い少女ってところかなあ。」

「うるさい!! わかってるんだったら。」

「ぎゃああああ!!」

ビクッ ガシッ ブルブル

「あれは浩太くんの声よね?」

「そうだねえ。ところで秋い。そろそろ竜をはなしてあげないとかわいそうだよお。」

「え? 何してんのよ!! 変態!!」

ボクはそう言ってさっき思わず抱きついてしまった竜に黄金をいれた。

でも明らかにボクがわるいので軽く。

「理不尽すぎるやる。いきなりすさまじい力でベアハグされたかとおもったら黄金って。」

「もう行ってもいいみたいだから僕らはいくねえ。僕らが見てないからって逃げ出しちゃだめだよお。」

っひい。

司たちが行ったら次はボクの番じゃないか。

ああ、神様。あんまり信じてないけど今だけは信じるので時間を止めてください。

「秋・・・そんなに怖いならやめとくか？司はあんなこといっとつたけど、別に今ならやめれるぞ？」

「う・・・大丈夫、たぶん、おそらく、maybe。」

「後半全部同じ意味やん。ほれ。」

そういつて竜は手を差し出してきた。

「お金はらったら入らなくてもいいの？」

「ちやうわ！手をつないで行ったるって意味じゃ、そしたら少しは怖くないやる？」

「なんだあ。真剣にお金で解決するならとか考えちゃったよ。」

「あほか。お化け屋敷は作りもんや中身人間やから入ってみたらそんな怖くないんやぞ。」

「絶対だね？でもやっぱり怖いから手は離さないでね？」

そういうと、ボクは竜の手を握った。

竜も怖いのかな？

ちよつと汗ばんでるかも。

でもおつききてあつたかい。

いつの間にか背も見上げなきゃいけなくなったし、男らしいその手にお化け屋敷とはちよつと違うドキドキが始まった気がする。

「あははは！！なにこれえ。面白い。」

「おいおい、入る前と態度違い過ぎやん。」

「だってえ。あ、あそこに人いるわよ。ちよつとまってね。」

そういうと、少し竜を下がらせ、お化け役の人が出てくる寸前で「ちらから

「ばあ！」と脅かしてみる。

すると向こうもそんなことをしてくると思っていなかったのか腰を抜かさんばかりに驚いていた。

「ああ、お化け屋敷って面白いんだね。ボクは本物の幽霊さんたちがとらえられている箱を順番に開けて行って幽霊さんたちにお説教

されるところだとばかり思ってたよお。」

「どんなお化け屋敷やねん。つかそれ教えたの武ちゃんだろ？」

「うん、あれは別のところだったんだね。」

「いや、お化け屋敷はたいていこんなもんやぞ？むしろそんなお化け屋敷は聞いたことあらへん。完全にからかわれとな。」

「なにい、武兄ちゃんの明日のお弁当は全部涙巻きにしてやるう。」

「おお怖。お化け屋敷よりもこええな。」

「ふっふっふ、ボクをだますとどうなるのか武兄ちゃんに思い知らせてやるのだ。」

「ほどほどにしとけよ。」

「はあい。」

そんなこんなでお化け屋敷を出てきた。

途中から全く怖くはなかったのだが、なんとなく手を話す気にもなれずに、ずつとつないだまま外に出てきた。

「あれえ？メグちゃんが涙を流しながら出てくると思ったら意外と元氣じゃないの。」

「鈴、ボクはお化け屋敷というものを把握した。今度からはお化け屋敷は怖いものではなくなったのだよ。」

「涙を流すのは秋じゃなくて武ちゃんになりそうやわ。」

「武ちゃんって秋ちゃんのお兄ちゃんの中？何があったのよ？」

あ、今声をかけてきたのは麻美だ。

そしてボクは竜の手を握ったままだった。

幼馴染とはいえ彼氏の手を女の子が握っているのはあまりうれしくないだろ。

そうおもって手を離しておく。

「どうせえ、武ちゃんが秋に嘘のお化け屋敷でもおしえていたんでしょ。」

というか、出てくる時にこうなっているのは予想できたしねえ。もちろん手の方も予想済みだよ。」

「ばか、何言ってるのよ。ボクがあんまりにも怖がってたから竜が仕方なく握らせてくれただけでこれは何も無いんだからね。」

「秋ちゃんったら、真っ赤になっちゃって、可愛い。」

へ？

それをなんで麻美が言うの？

あれ？あれ？何がどうなってるの？

「女神様そんなに怖いなら僕の手をどうぞ。」

「ん？この中で怖がってたのって浩太だけじゃなかったけ？ボクは結局中にはいったら平気だったよ？」

「がーん！！」

「口で言わないの。そうなのよ。私より怖がっちゃってさ。」

「鈴、それは言わない約束では？」

「詳しいことまではいわないわよ。でもあれだけ大声だしてたらみんなある程度わかってるとおもっわよ。」

みんなで頷くとそれが事実なんだとわかり浩太はうなだれた。

「さあ、思ったよりもお化け屋敷で時間使っちゃったから集合時間まであと一個くらいしか乗れないわよ。どうする？何か乗りたいものあるかしら？」

「そうね。私は観覧車に乗りたんだけど、秋ちゃんは何がいい？結果はどうあれさつきは嫌々お化け屋敷に連れて行ったんだから選ばせてあげるわ。」

「うーん。特にお化け屋敷以外嫌なものもなかったしみんなで決めて良いよ。でも最後だしみんなで乗れるのがいいかな。」

「だったら大観覧車にしよつかあ？普通よりも乗車定員がおおいから回転率も良くてえしかも結構高い所まであがるんだよお。」

「それいいやん。じゃあ大観覧車にみんなで乗ろうぜ。」

「賛成」

大観覧車は本当に大きくて、六人でのつてもまだスペースがあるくらいだった。

さっきまでのモヤモヤもいつの間になくなって、六人でにぎやかに話しながらのり、頂上付近では海の地平線が丸くなっているのか待ちの景色とちよつと遠くに山なんかも見えた。

もしこれが暗い時間だったらそれもまた綺麗なんだろうなと思った。頂上を過ぎた時に気づいてカメラを取り出し下に着くまで六人で思い思いに写真にとり、午前中の方も合わせてあと一枚しかフィルムがのこらない状態になってしまった。

「今日は楽しかったね。」

「ホントね。私と竜は班員とこれから合流してから集合場所にいかなくつちや。」

「あ、うん。ところでさ。ちよつと聞きたいことがあるんだけど。」

「ん？どうしたの？」

「麻美つて竜と付き合ってるの？」

「え？竜と？付き合ってるないわよ？じゃあ秋ちゃんたちも集合場所に遅れないようにね。」

「あ、ちよつと麻美！」

麻美は言いたいことだけいって竜をひきつれていってしまった。

「もう、まだ聞きたいことがあったのに。」

「女神様。僕も班員と合流しないと帰れないから。また集合場所で。」

「うん。どうせクラス単位で電車のるから一緒に行けばいいんだけどね。」

「一応先生たちにはばれているとは思っけど、最後までらしい班の奴らと一緒に行くさ。」

「うん、またね。」

浩太も班員と合流するべく立ち去った。

「ねえ。鈴、気になることがあるんだけどさ。」

「なあに？メグのためならお姉さんなあんでも教えてあげちゃうわよ。」

「浩太の班って仲良くなかった？」

「ええ、昔はしらないけど、浩太は芸術の女神ファンクラブの0番だし班員と折り合いがつかないなんてことはないわよ。」

「っていうかごめんなさい。お願いだからその握りしめたこぶしをほどいてくださいメグ様。」

「まあいいわよ。どんな理由があったかわかんないけど、結局楽しめたのは事実だしね。」

「そつだよお。さあお土産買って集合場所に向かおう。もうみんな着いてるかもしれないよお。」

司はボクらを促して集合場所にむかつて歩き出した。
なんだか話題をそらされたけどこれ以上問い詰めても結果はかわらないだろうと考えボクもそれに従った。

「ねえねえ。竜う。秋ねえ。教えてほしいことがあるんだあ。」

学校まで戻ってきたボクたちはいつもとは違いなぜか竜と二人で帰ることになった。

司や鈴は帰りの電車の中でもうまくボクの追求を時には流し、時にはボクが乗りそうな話題をふってとうまくごまかされてしまった。しかし、正直者の竜ならもし何か知っていればすべて話してくれるのでこうして荷台から抱きつきながら教えてもらおうとしているのだ。

「どないしたんや？変な声なんてだして。」

やさしく抱きしめてあげていたのに、ちょっと力をこめてやる。

「そんな強く抱きつくな。胸あたっとするぞ。」

「もう、そんなことはどうでもいいの。今日の司たち変じゃなかった？何か知ってるならすべて洗いざらい吐きなさい。」

「いやいや汚物とちゃうんやで、とりあえずなんか出発前に麻美と

司がなんや画策しとったつてことくらいしかしらへんぞ。

俺も二人が話しとるんを見ただけやから内容まではしらへんし。あの六人で集まるためいろいろしてただけやろ？」

「うーん。そういわれるとみんなで集まりたかつたつて気持ちは同じだし、実際今日は楽しかったからいいんだけどね。なんだかそれだけじゃない気がするのよ。」

「なんやそれ？まあ秋の第六感はずれたことはないから間違いないやけど、いやな感じがすんのか？」

「嫌な感じとは違うんだけど、なんとなく今まで感じていたのと違う。うーん一番近いのがファンクラブのメンバーのたくらみに似ているような。そんな感じなのよね。」

「ああ、意味がわかったわ。司と麻美この前のバレンタインからつきあつとんねん。その変な感覚つて恋とか憧れとかの感覚だろ？」

「ええ？ほんとに？知らなかった。麻美と司つて昔から仲良かったけどやつと付き合いだしたんだね。」

ん？

待てよ。

何か大事なことを忘れてる気がする。

というか麻美と司が付き合っているなら、お昼のあれはなんだったのだ？それに今日の感覚は司と麻美のラブラブモードにあてられたようなそんな感覚ではなかったはずだ。

「ねえ。竜つてさ。お昼麻美と一緒に食べてたんでしょ？」

ボクは直接聞くのも恥ずかしかったのでジェットコースターの並んでいる時に見ていたことを隠して質問した。

「ああ、ホントは他にも二人女の子がいたんやけど、麻美が追い払って助かったわ。」

「うん。知ってる。ボクあの時近くのジェットコースターに乗るために鈴と司と並んでてちょっと遠かったけど竜たちのこと見てたもん。」

「え？マジか。じゃあひょっとしてあれも見てたのか？」

お、これはうまく言えば全部話してくれるかもしれないな。

「そうだよ。あの時麻美と仲良くしてるのを見てたんだから。司も当然一緒にね。」

「あいつ、だからあんな指示をだしてきたのか。道理でおかしいと思っただぜ。」

「ん？どういうこと？」

「麻美が司に頼まれたとか何とかいって俺の顔に変なシールやらを貼りやがって、しかもそれが取れないとかいってずっとくっついてたんだよ。」

「ほう。つまり今日の出来事はすべて裏で司と麻美がたくらんでいたことだったってわけですな？」

あれを見たボクが竜と麻美が付き合っていると勘違いをするようにしかもそのあと合流するようにと。」

そういうと、ボクは竜の腰をちよつと強く締め上げた。

「まてまて、たくらんだのは司だろ？なんで俺に八つ当たりしようとしてるんだよ。」

「たぶん正確には鈴も一枚かんでただろうね。浩太はわかんないけど鈴のあの態度は今思うと変だったもん。」

「たぶんせやるな。あいつらはいったい何考えとんねん。」

「うーん。理由はなんとなくわかるけど今は教えてあげない。」

「なんやそれ、全くこんな悪戯しやがって。あとで秋のお仕置きがこわくないんやな。」

「ふふふ、ボクを甘くみてもらっては困るというものよ。」

ボクらはこのあとのようにして報復をするか話していたのだが次第に今日の遠足の話になり、ボクは荷台で揺られながらも竜との時間を過ごした。

ボクは今まで気づかなかったことに司たちのせいで気づかされたので報復は手加減をしてあげようと思っていた。

「ねえ。使い捨てカメラのフィルム一枚余っちゃったんだ。」

「一枚くらいええんとちゃう？また何か取りたいもんとか出てくるかもしれへんやろ？」

話している間に家の前まで着いてしまったので、カメラの最後の一

枚を残しておくのも、もつたいないので竜と撮ろうと提案する。

「でも早く現像したいから撮っちゃいたいから一緒にとろ？」

「ええけど、どやってとるんや？」

「こつやって撮るのよ。」

そういつてボクは竜の隣に立つとカメラを持っている腕を目一杯伸ばした。

「これって失敗しやすい撮り方やん。」

「ちよつと、ボクの身長に合わせてよ。ただでさえ一枚しかないんだからね。」

「はいはい、って顔近すぎじゃね？」

「恥ずかしがって映らなかつたらいやじゃないの。笑ってね。」

「はい、チーズ。」

家の前は街灯があるとはいえ暗かったのでフラッシュくらいできちんと撮れたか分からないが、現像するのが楽しみだ。

「じゃあ、また明日ね。」

「おやすみ」

暗かったので竜は気付かなかったみたいだが顔が赤くなっているのは自分で分かる。

最後の写真は綺麗に撮れていたら大事にとっておこう。顔の熱が引いたのを確認してボクは家に入って行った。

「ただいまあ〜。」

「おかえり。楽しかったかい？」

「うん、お兄ちゃんにお土産あるんだよ。」

「お、本当か、なにになに？」

「お土産話だよ。今日は一杯いろんなことがあったからたくさんお話ししてあげるね。」

「おかえりなさい。」

「ただいま、お母さん。お土産あるよ。」

「お土産話でしょ？武と話してるのが聞こえたわ。」

「違うよ。お父さんとお母さんには買ってきたよ。」

「あらあら、お母さんもお父さんもお土産話が一番のお土産なのよ。」

「

「うん。そつちも期待しておいて。」

「秋？なんでお母さんたちにはあつて俺にはないんだい？」

「冗談よ。お母さんとお父さんだけじゃないわ。」

「おお。さすがわが妹よ。」

「ペコちゃんの方もきちんと買って来たわよ。」

「お兄ちゃんはペット以下ですかあ。」

ペコちゃんは小学六年生の冬に新しく家族になったビーグル犬だ。大型犬だとお散歩が大変なので小型犬となったのだが、ペットシヨップのショーウィンドウで垂れた耳と愛らしい目を見た秋が一目ぼれをし、新しい家族となった。

「お兄ちゃん、遊園地のアトラクションで何か思い出すことはないかしら？」

「アトラクション？ジェットコースターとか、あ……。」

「というわけでお兄ちゃんにお土産はなしなのよ。」

「秋い。お兄ちゃんが悪かったよ。怖がる秋が面白くってつい出来心だったんだ。」

「みんなに【中学生にもなつてお化け屋敷が怖いなんて】っていじめられたんだからね。」

「今度からは絶対嘘はつかないよ。だからお兄ちゃんを許してくれ。」

「絶対だめ。もうお兄ちゃんなんかしらないんだから。」

そうは言ったが実は武兄ちゃんのお土産も買ってきた。

しばらく反省してもらって寝る前にも渡してあげればいいだろう。そう考えるとボクは食卓についた。

今日はボク一人遅れて帰ってきたので一人でご飯を食べるのだが、食べながらお土産話をしているのでお父さんもお母さんも武兄ちゃんもテーブルの周りに集まってきているからさみしくない。

お化け屋敷の話をした時はきちんと武兄ちゃんに今後嘘はつかないと約束してもらい、蟹津家の夜はいつもみたいに、一家団欒で更けていくのであった。

チャプター15（後書き）

いかがでしたでしょうか？中学生編初のイベントでした。

投稿前に修正のために読みなおしながらニヤニヤしてしまったAKIです。このメンバー書くの楽しいですね。

でも、キャラクターが増えると書き分けが難しいです。一応個人が分かるように工夫はしておりますが、少し慣れるまで分かりにくいかもしれません。

さて、今回のテーマ“秋の本当の気持ち”です。

秋は優しすぎる。というか和也時代から好きな人を友人に譲ってしまふキャラ設定でしたので、完全な両思いにならないと秋に春はきません。この話でも麻美に譲ってしまおうとしています。

さてそれではキャプチャー15を読んでいただきありがとうございます。是非AKIと一緒にニヤニヤ読んでしまったという方は感想コーナーにて交流をお願いいたします。

チャプター16

番外編 司の計画

「麻美い。こっちだよお。」

「おまたせ。どうしたの急によびだしたりして?」

「僕たち付き合ってるんだよねえ?」

「なに言ってるのよ。この前やっとな返事くれたのは司じゃないの。」

「そうなんだけどお。正直このままじゃデートも何もできないよねえ。」

「そうなのだ。」

僕たちは去年のバレンタインの時から付き合いだしたのだが、もう5月になるから三か月近くたっているのに春休みにデートにいったり、時々こうして二人で会うくらいであまり時間を取れていない。

「まあ、秋ちゃんのことがあるからねえ。」

「そこでさあ。僕たちが二人になる方法じゃなくてえ。秋と竜から僕が離れる計画をたてたんだよお。」

「あら? 仲良し三人がそんな簡単に離れられるの?」

「うーん。秋も竜も心友だからこれまでと一緒にのようにつきあっていたよ。」

竜にはもう既に付き合いだしたことは伝えてあるのだが、秋にはまだ言っていないし特にだれもまだ僕らの関係をしっている人間はない。

だが、付き合っていることを秋が知ってしまったら優しい秋のことだ。

麻美との時間を作るためにいろいろと気を配ってくれて逆に麻美も申し訳なく感じるだろうし、秋や竜だって今までと違う対応に困ってしまうだろう。

そんなことにはなりたくない。

「え？じゃあ無理なんじゃないの？」

「でもねえ。僕がいなくても大丈夫な時は結構あるんだよ。たとえば登下校とかは竜の荷台にのっていれば問題なんてほとんど起きないからねえ。」

「なるほどね。でもいきなり司と一緒に登下校しなくなったら二人とも嫌な気分になるんじゃないかしら？」

「そうだねえ。だからさあ。竜と秋にも二人つきりで登下校したいと思えばいいんだよ。」

「ああ、なるほどね。でもあの二人ってキスマでしたのに付き合い合っていないでしょ？」

「そうだねえ。どこからどう見ても両想いなんだけど。どっちも恋愛に関しては鈍いっていうか。」

奥手っていうかあ。だからさあ。今度の遠足でちょっとお互いの気持ちに気づいてもらおうかなあって思うんだあ。」

「竜くんは大丈夫だとは思うけど、秋ちゃんは難しいんじゃないかしら?」

「大丈夫だよあ。ちょっと耳貸してえ。」

そついうと僕は麻美に計画を話した。

要は鈍い秋に竜が好きなことを分からせてあげればいいのだから結構簡単だろう。

直接いったら照れ屋な秋は違つと行って反発してしまうだけなので自分で気づかなければいけないが、ここまでやって気付かないほど秋は馬鹿ではない。

むしろ頭の回転はめっちゃくちゃいい。

「計画的には問題ないと思うわ。私も司もお互いに班でうまく誘導すればいいだけなんだし、難しくはないと思うわ。でも、司の班には鈴ちゃんがいるでしょ?」

「ああ、鈴ちゃんにも協力してもらつつもりだよあ。鈴ちゃんは秋のこと妹みたいに思ってるからあ。」

相談したらたぶん大丈夫だと思うよあ。むしろノリノリであおつてくれると思うなあ。」

鈴のあの性格なら確実に話に乗るだろう。

そして当日は秋の様子にうまくフォローを入れながらも気持をあおつてくれることだろう。

「あんまり鈴ちゃんと話したことないからわからないけど、司がそ

ういうなら大丈夫ね。でも、秋ちゃんと竜くんをくつつけるなら鈴ちゃん浮いちゃうんじゃないかしら？」

「そこらへんは鈴ちゃんと相談するよお。鈴ちゃんだけどこかに消えてもいいしい。一番簡単なのは浩太を誘って六人でトリプルデートみたいにするのがいいかなあ。」

「浩太くんってあの？中学に入って変わったのはしってるけど、そうなんだあ。」

麻美は浩太のことを幼稚園からみているのでその頃のイメージが抜けないようだ。

中学に入っても運動はあまり得意ではないが、勉強の方は秋の次くらいに良かったはずである。

まあ満点以外をとったところを見たことがない秋は別格なので除くと考えれば。

学年で一番成績がいいのかもしれない。

「うーん。こっちはあ、あんまり確証はないけどお。仲がいいのは確かだからあ。鈴ちゃんならうまくやってくれるとおもっよお。」

「彼女の前で他の女の子のことを誉めるなんてダメよ。」

「今さらじゃない？秋と仲がいいの知ってて告白してくるぐらいだからねえ。」

「それもそうね。でも秋ちゃんは心友なんですよ？秋ちゃん以外と浮気したら許さないんだからね。」

「秋とだってえ。他の子だって浮気しないよお。」

「もう、そういつ時くらいビシツとかつこよくいつてよね。」

「僕はこれが普通だからあ。こんな僕がすきなんでしょあ？」

「もう、ずるいんだから。」

口はすねているようにしているが、眼が怒っていない。

秋の影響であまり時間がとれなかったが、それでもちゃんとお互いを理解し合っているのが分かる。

こんな彼女がいて浮気なんてできるわけがない。

チャプター16（後書き）

調子に乗って番外編なんて書いてしまいました。

今回のテーマは“司の位置をみんなにわかってもらおう”でした。

恋愛とは違う心友関係を大事に思う司が遠足の前にどんな風におもってあの計画をたてたのかが伝わってくれたらなと思います。

司は基本面倒見がいいので、竜や秋の相談役といった雰囲気ですね。まあ時々はっちゃけますけど。

それでは番外編をご覧いただきありがとうございました。

チャプター17

番外編〜涙のお弁当事件〜

昨日、秋は遠足に行つて来た。

俺は昔秋があまりにもお化けを怖がるので遊園地にあるお化け屋敷の話をしたことがある。

適当なことを並べたてたのだが、秋は信じていたようで昨日の遊園地ではかなり恥ずかしい思いをしたらしい。

大変ご立腹の様子だったのだが寝る前に部屋に来た秋は、お土産を渡してくれた。

怒って買ってもらえなかったんだと思っていた俺は妹の優しさと寛大さに心から感謝した。

「武満。なにニヤニヤしてんだよ。」

今声をかけてきたのは大学の友達で同じ学部で結構仲がいい。

「今日も学食いくだろ?」

「いや、今日はお弁当を持ってきたから良いよ。」

「マジか? ってことは秋ちゃんの手づくりだろ?」

そうだ、大学生になってから講義やサークルの関係で不定期なためお昼は基本学食やコンビニで済ませている俺がお弁当を持つてくる

時はいつも秋が作ってくれているのをこいつは知っている。

「ああ、本当に兄想いのいい妹だよ。」

「いいよなあ。秋ちゃんなら付き合ってみたいぜ。」

「秋はまだ中学生だぞ？付き合うなんてまだ早いって。」

「武満ってシスコンだよな。まああの秋ちゃんなら俺だってシスコンになっちまうがな。」

「お前には絶対に紹介しないから安心しとけ。」

「いいじゃねえか。あんな可愛い子野放しにしておいたら、いつ狼の毒牙にかかるかわかんねえぜ。その点俺なら安心だ。」

「その心配はないよ。あれで昔は柔道をして俺よりも強いからな。」

「最強美少女だっけ？一時期うわさになったもんね。あれが秋ちゃんだったなんて。」

あの時は事故で怪我をし、選手生命を断たれたことになったが、俺はちょっともつたいないような気がしていた。

しかし、中学に入り美術部をつくって様々な作品を作ってしまう秋にあの時の決断は正しかったと今は思っている。

「とにかく飯にしようぜ。」

「そうだな。でも俺の飯がねえからやっぱ学食行こうぜ。いつもの

学食なら弁当だしても問題ないだろ？」

「仕方がないな。つきあつてやるよ。」

そう言つて二人で学食へ歩いていく。

この大学には三つ学食があるが、クラブ塔の近くの学食は普段は人が少なくしてお弁当を持って入っても席につけるのでそこにいくことにした。

「なあ。お前秋ちゃんになにかしたのか？」

「……」

俺はお弁当を開けて啞然としてしまった。

「どう見ても怒つてるよな？」

「ああ、実は……」

俺は事の顛末を話すことにした。

「なるほどね。夜に許したフリをしてこれか、秋ちゃんはツンデレなんだな。」

「嬉しそうに言うんじゃないよ。渡してくる時やけににこやかだっ

た時に気づくべきだった。」

朝お弁当を渡してくれた時にとても良い笑顔をしていたのだが、昨日の晩お土産を渡して許してくれたことに上機嫌だった俺は何も疑わずに受け取ってしまった。

「まあ弁当いっぱいにしてのは無茶だが、意外とうまそうじゃね？」

「半分その定食と交換しないか？」

「いいぜ。秋ちゃんの手料理が食べられるならそのくらいの困難は乗り越えてみせる。」

お馬鹿なことをいつている友人だが、流石にこれを一人で食べるのはきついので半分定食を分けてもらいお弁当いっぱい詰められた涙巻きに挑むのだった。

「きくう。でも味は本当にうまいな。これ生をわざわざすってあるじゃん。」

「ああ、妹の優しさに涙がでてくるぜ。」

それほど混んでいないとはいってもそこそこ人はいるわけで、お弁当を食べながら涙を流している俺たちは少し浮いていた。

チャプター17（後書き）

さて、2話連続の番外編ですがどうしても書きたかったのです。

武満が活躍してくれないとやっぱり家族愛が伝わらない気がします。どうでしょうかとっても妹想いのいいお兄さんでしょ？お弁当いっぱい、の涙巻きにも、捨てるという選択肢は絶対にしないこの優しさ。

ついでにAKIは涙巻き大好きです。わさびっておいしくないですか？まあ涙巻きなんて食べなくても年中涙腺緩んでますけどね。何度読んでも泣いてしまう小説ってありますよね。

この前1リットルの涙をyoutubeで見つけて久しぶりにみて泣きました。昔TV放送された時にも泣いたのに、これで見ると3回目とかだったきがするのですが、気がついたら涙で画面が見えなくなっております。

それでは次回からは本編に戻りたいと思います。番外編を読んでいただきありがとうございます

チャプター18

夏に咲く花

「おはよう!!」

バシッ ポイツ ガゴッ

「おはようメグ、相変わらずね。」

「おはよう、鈴。今日は夏服にしてきたんだね。」

さつきあつたことを説明しよう。

以前浩太の上履きが飛んできたのを軽くキャッチしたのを見ていたクラスメイトが、時々ボクが来るのを見計らってボールやら何やらを投げてくるのだ。

一度黒板消しが飛んできた時はチョークの粉が嫌で避けたが基本は投げてきた本人に投げ返している。

それでも止まないとところをみると彼らはマゾなのだろう。

「うん。熱くなってきたからね。夏服解禁になったとたんに変えてきたメグよりは遅いけど、衣替えよ。」

「まあね。ボクは動き易いから夏服の方が好きなんだよ。」

「おかげで男子どもは大喜びよ。」

「鈴・・・ボクはサービスでしてるわけじゃないぞ。」

「そうよね。竜くんに見せるためだもんね。」

「な、そんなわけないじゃないか。」

反論してみるものの、真っ赤になってしまっているのが自分でもわかる。

その後ボクは司には黄金を送ったが、鈴や麻美のことは許してあげた。

そして登下校の時は二人で帰らせてあげることにしたのだが、なんだか全部司の思惑どおりになってしまったようで、ちょっと悔しい。

「今日もあつちはラブラブだったのに、こっちはメグがこれじゃあねえ。」

「もう、そんなこと言って鈴だってムゲッ。」

「メグ、そこから先は禁句よ。」

そういつて口を押さえられてしまった。

首をコクコク縦に振ると鈴は手を離してくれた。

「ごめん。でもさ、この前のことでわかったんだ。」

「ほう。ついにメグにも春が来ましたか。」

「竜はボク以外の女には興味がないってことが。」

そういつと鈴はガクつと椅子からずり落ちてしまった。

「まあ、間違つてはいないけど、普通はもうちょっと違う解釈をするわよ。」

「冗談だよ。いくら鈍いボクでも流石にそれほどじゃないよ。」

「そう。じゃあお姉さんがとつてもためになることを教えてあげろわ。人の気持ちつていうものは変わってしまうものよ。」

メグがきちんと向き合わなければ竜くんはそのうち気持ちが離れてしまうのは絶対よ。」

「うーん。心友から一歩踏み出す勇気がないのよ。」

竜を失うくらいならまだ鉄砲をもった強面のおじさん達とかと遊んであげたり、人食いサメのプールで泳ぐ方が楽なのよね。」

「女の子のセリフじゃないけど、それができてしまいそうなメグが怖いわ。」

「ん？前にあつたよ？おじさんたちは意外と話せば分かる人たちだったし、サメなんて血のにおいがかなきゃ大人しいものよ。」

.....

「ほんとなんでメグが生きているのかわからないけど、もうそつち系の話は慣れちゃったわね。普通だったら嘘だと思っただろうけど本当なんですよねぇ。」

「基本嘘はつかないよ。この体質だからね。」

キンコーン

チャイムと同時に司が教室に入ってきた。

時間ぎりぎりまで麻美と話でもしていたのだろう。

司に挨拶をし席についてしばらくすると吉川先生が入ってきてSH
Rが始まった。

「わあ。綺麗な生地ですね。」

授業も終わって今はクラブ活動の時間だ。

ボクは夏に向けて浴衣を作ろうと考えちようど今日生地が届いたの
で寸法などを測っている。

「由香ちゃんの方も作ってあげるから期待して待っててね。」

「ええ？いいんですか？でも、生地と違って結構高いはずですよ
？良く学校がお金だしてくれましたね？」

「今回は自費だよ。でもお金の当てはあるから心配しないで、その
代わりちよつと協力してね。」

「浴衣を作ってもらえるならどんな協力でもします。」

うん、由香ちゃんは本当に純粋な子だ。

まあ、作る前に報告しなくちゃいけないかったんだろうが、みんなボクの言うことなら結構聞いてくれるから問題ないだろう。

「うちらにもつくってくれるんですか？」

「もちろん花火ちゃんの間もあるよ。その代わりにボクのイメージで作りたいから、生地を選んだりはできないけどそれだけは許してね。」

「いや、うちもこんなん着たことないし、女神先輩のセンスなら間違いないんでお任せします。」

「うん、じゃあ二人ともちよつとサイズ測らせてね。真奈美ちゃんもそんなところで妄想に浸ってないでこっちに立って。」

真奈美ちゃんは頬を赤くしてニヤケた顔をしている。そろそろ慣れてきたボクはスルーだ。

「はい。女神様はもうご自分のサイズを測ったのですか？」

「うん。二年になったときの身体測定で測ったから大丈夫だよ。」

「でも、せっかくだからきちんと測り直した方がいいのではないでしょうか？」

ふむ。

確かにその通りだ。

ボクもこの前からブラがCではきつくなってきたのを知っていたの

で納得する。

「じゃあ測り直そうかな。由香ちゃん手伝ってくれる?」

「はい。そくらいでよければ手伝います。」

「なぜ女神様は私を指名してくださらないのですか?」

「はいはい、自分の胸に手を当ててよく考えてみようね。」

「では、お言葉に甘えて。」

そついうと真奈美ちゃんはボクの胸をモミ出した。

「あん。違うんわよ。真奈美んちゃんの・・・」

「女神様の胸また大きくなったんじゃありませんか?」

鼻息を荒くしながらも真奈美ちゃんの手はエスカレートしていく。

誰か助けてと周りを見渡すと由香ちゃんは手で顔を覆い、でも指の隙間からちゃっかり見ている。

花火ちゃんは顔を赤らめながらも凝視していた。

「はいはい。真奈美ちゃんはサイズ測ってもらったら自分の作品に取り掛かりましょうね。」

ふう。

鈴がいてくれて助かった。

「はあい。でも本当に女神様の胸大きくなってますよ。サイズを測

り直した方がいいのは絶対ですね。前はCだったのにDになってました。」

おいおい、なんで触っただけでサイズがわかってるんだ。

結局浩太もいるので準備室に行くのと三人とも順調にサイズを測ることができ、それをメモってボクのサイズは鈴と由香ちゃんが図ってくれることになった。

「わあ。真奈美ちゃんじゃないけど、これはすごいわね。」

「あんまり見ないですよ。結構恥ずかしいぞ。」

「恥ずかしがるようなプロポーションじゃないわよ。んと、B86・W58・H83このグラビアアイドルよ。」

「先輩はボンキュボンですね。」

「由香もそのうちおおきくなるさ。まあ先輩の場合その体系を維持するのに何もしてないってのがすげえけどな。」

「花火だって結構おおきじゃない。」

「花火や鈴先輩には負けてると思ってたけど、まさか由香にも負けてたなんて。」

だいたいこの順番はボク>鈴⇨花火ちゃん>由香ちゃん>>真奈美ちゃんだった。

というか真奈美ちゃんは凹凸がなかった。これで勝っている子はいないだろうに。

「女神様。詰め物するんで胸の部分は上手にごまかしておいてください。」

「はいはい、みんな成長期だからある程度ゆったり着られるように作るつもりだったからそこら辺は大丈夫よ。」

真奈美ちゃんはずまくラインを作って胸があるようにしてあげるわね。」

「ありがとうございます。」

普段百合後輩の真奈美ちゃんも一応乙女なのでそこら辺は気にするようだ。

花火ちゃんと鈴は十分胸があるので問題ないが由香ちゃんと真奈美ちゃんにはうまいデザインを考えてある。

「さあ。みんな自分の作品に取り掛からないと学園祭で展示物の無いブースを出すことになるわよ。」

「はい」

美術部は学園祭の時に特別に出し物をする事になっている。

というか去年ボクがあまりにもすごい作品を作りすぎて発表の場を作ろうということになって、今年もあるので、後輩たちにはそれを目標に作品作りをさせることにした。

後輩たち三人が出ていくと準備室には鈴と二人だけになった。

「ねえ、メグ？さっきお金のこと言ってたけど、本当に大丈夫なの？」

「ああ、むしろ部費としては余ることになると思うわ。みんな個性的な性格ではあるものの見た目はとつてもかわいいからね。」

「ん？見た目とお金に関係あるの？危ないことじゃないでしょうね？」

「大丈夫よ。夏に合宿に行くことは前に決めただしよ？」

「ああ、海の近くなんだってね。これも部費でしょ？余計にお金がなくなるんじゃないのかしら？」

「ふふふ、ところがその合宿先の民宿の近くで結構大きな浴衣コンテストがあるのよ。」

「ああ、なるほどね。そんでもってコンテストの賞金をいただくってことか。だったらメグ一人でいいじゃないの。」

「優勝賞金だけで元手はとれるんだけど、どうせなら副賞なんかも総なめしたいじゃない？」

この前調べたところによると、このメンバーならそれも不可能じゃないからね。ついでに合宿には安全を測るために竜と司と麻美も呼ぶから。」

「安全って、まあ確かに竜くんはいた方がいいとは思うけど、部外者三人なんて学校側は大丈夫なの？」

「あら？ボクをなめてもらってはいけないよ。」

そこら辺の交渉もコンテストの日程もすべて調節済みよ。

【校長先生は作品展示のためにどうしても必要なんです。】って言

つたら鼻の下を伸ばしながら

【活動の記録はしっかりと撮ってきて提出するように。】なんて言
ってたわ。

私の浴衣写真でも数枚持つていけば問題ないわよ。」

「メグから黒いオーラが見えるわ。普段はこんなに可愛いメグちゃ
んなのに不条理や悪に対しては本当に容赦ないわね。」

「いいのよ。向こうが大人の都合で動くなら、こっちは子どもの都
合で動くだけよ。」

「まあいいわ。それだけ自信があるならお金のことは心配いらな
いし、私は学園祭に向けて自分の作品と後輩たちの指導をしてあげる
からメグは浴衣作りに専念しなさい。」

鈴はこういう時に気を配ってくれるのがすごく嬉しい。

ボクも流石にすべてを一人でできるわけではないのでこうしてボク
の手が届かないところをうまくフォローしてくれる鈴には本当に感
謝している。

「ありがとう。でもデザインとかはもうほとんどできているから、
あとは作業だけなのよ。」

結構すぐにできると思っわ。できたら試着しなきゃね。竜たちも呼
んで試着してもらって、あとは、またボクも他の作品とか後輩の指
導とかに周るよ。」

「ほんとメグの頭の中を一度でいいから見てみたいわ。じゃあ、が
んばりましょ。」

そう言って鈴は準備室を出ていき、ボクも今から作業する分だけの

生地を手にとると残りは準備室に保管して美術室の方に向かった。

チャプター18（後書き）

夏の花の一つに浴衣を持ってきました。

しかし、秋は本当に抜かりがないですね。大きすぎず小さすぎず。身長は以前160前後となっており、こちらも大きすぎず小さすぎず。

作者であるAKIの夢がいっぱい詰まった秋でした。

さて、今回のテーマは“夏の準備”です。

春の遠足が終わり、夏が近づく様子を鈴の衣替えあたりから浴衣に至るまで表現したつもりです。

そして合宿では海が近くにあります。海って聞くと嬉しくなるのはAKIだけですか？AKIは海が大好きです。海の家焼きそばっておいしいですよ。祭りの時のたこ焼きっておいしいですよ。

というわけで、夏の準備である18話を読んでいただきありがとうございます。ございました。

チャプター19

白球とボク

「カキーン！」

今日は前に司にお願いされた試合の応援に来ている。

田舎の野球部なのであまり人数はいないが、ほとんどが小学校の時からずっと続けてきた野球少年たちなので結構強く、今日は県予選の決勝だ。

ボクは約束通りにはちみつ漬けと司の分のお弁当を持って竜と麻美の三人で見に来た。

「司あ。来てやったぞ。」

「竜う。それに麻美と秋も。」

前までなら麻美よりも先にボクに反応しただろうが、今は司と麻美はラブラブなのでこの順番は仕方ない。

というか麻美に気づかなかったらボクからの制裁が待っている。

「ちょうど良かったよお。三人ともベンチに降りてきてえ。そっちの扉からグラウンドに降りられるからあ。」

「え？ボクらもベンチに入ってもいいの？」

「いいよお。というかは是非ベンチに入ってほしいんだあ。」

ん？

何か変だが、どうせなら近くでしかも屋根があるところで観戦したいので司の言葉に甘えてグラウンドの中に入っていく。

「監督う。補充が着きましたあ。」

「おお、よかった。これで不戦敗にならずに済む。」

え？

補充ってどういう意味？

というかボクら部員じゃないのにベンチに入るってやっぱりおかしいよね？

「司？どういうこと？ボクら不幸が起きないように時間ぎりぎりにここに来たのに誰か怪我したわけでもないでしょ？」

そういうと司と監督はボクらに説明してくれた。

なんでもこの会場までバスと車で分乗してきたのだが、そのうちの車の方が準決勝までの会場に間違えて行ってしまい。

バスで来た監督と、8人の選手しかいないらしい。

もう一つの会場は遠く、このままでは不戦敗になってしまいうらしい。もし車でこちらに向かっている三台の車が到着しても時間内にベンチに人がいないと交代も不可能なため竜はおいておいて、ボクや麻美までベンチに入れられたのだそうだ。

「まあ、実際に試合に出なきゃいけないのは竜だし、別にいいよ。竜なら野球もやったことあるし問題ないわね。」

「え？秋が出るんじゃないの？四番でピッチャーにいれてもいいよあ？」

「バカ言わないですよ。ボクはこれでも女の子だよ。」

帽子をかぶって髪を隠し、マスクでもはめればいけないだろうが、マスクなんてないだろうし、ここは竜に出てもらう。

「ん？マスクならあるよあ。砂よけで使うひと結構いるんだあ。」

試合中日差しが強いからペイントも許されてるしい、もしだれか怪我したら出てもらうからねえ。」

なんでそんなものを用意しておくかな。

しかもバスに荷物を積んできたらしくユニフォームなんかもしつかりと三人分用意されていた。

男子用の更衣室しかなかったのでボクと麻美は司と竜に扉の護衛を頼むと一応ユニフォームに着替えた。

「秋ちゃん可愛い。なんだか小学校の時に戻ったみたいね。でも、今の秋ちゃんを見てもだれも男の子だって思わないでしょうね。」

「流石に胸は隠せないね。でもばれるとまずいらしいしどうにかしない。」

そうしてボクは更衣室になぜか置いてあった包帯とテーピングで胸を潰し帽子とマスクでどうにか変装をした。

「麻美は中学生になってショートにしたからいいわよね。ボクももうちょっと短くしてもいいようにお父さんに言ってみようかな。」

「秋ちゃんのお父さん厳しいもんね。」

「そうでもないよ。ちょっと頭が固いから女の子らしくしていないと怒るけど、他は特に緩いからこうして竜とか司とかがいればほとんどのことは許可してくれるんだ。」

「まさか男の子に混じって野球してるとは思わないでしょうね。」

「ばれたら大変だよ。まあ今日は帽子とマスクがあるから大丈夫だろうけどね。」

「そうね。司たちも待つてるし行きましょ。」

「うん。」

更衣室を出ると入れ替わりで竜も着替えるのかと思ったら竜は男の子なので外で着替えてしまっていた。

「準備できたみたいやな。キャッチボールの人数たりひんから秋は俺と一緒にグラウンド一回でてくれ。」

「ひとが足りないからあ。麻美も監督にきいてえ手伝ってえ。」

「もう、ホントに人使いあらいだから。」

麻美はそう言っているが、司の力になれるのがうれしいのか顔はにやけている。

恋する乙女は偉大だ。

「みんな、レギュラーの奴も数名来ていないから守備位置なんかを

変えるぞ。まず、一番はショートで司。内野は司が基本中心になるから頑張れよ。」

そのあと監督は守備位置と打順を発表していく。

竜は9番バッターでサードに着くようだ。

司が横にいるからフォロースやすいと考えたのだろう。

竜の実力をしつたら監督は悔しがるかもしれないな。

「じゃあ今行った通りで行くから、準備運動とキャッチボールをして肩をならしておいてくれ、あと三十分ほどで全体の守備練習の間だから急ぐように。」

監督の言葉を聞くとみんな体育会系の乗りで返事をし、準備運動を始めた。

ボクも竜とキャッチボールの相手をしなければならないのでマスクと帽子を確認するとベンチから出て行った。

「秋、お前もし試合にでることになったらフェイスペイントもしておけ、何があるかわからへんし、マスクをしても俺や司なら秋ってわかってまうくらいやからな。」

キャッチボールを終えると竜がそう言ってきた。

「出ないで済むことにこしたことはないけど、ボクだからねえ。一応準備だけしておくよ。でもマスクしてても分かるのは二人だけだとおもっよ。」

「まあそうかもしれへんな。とりあえず全体練習始まるみたいやから行ってくるわ。」

麻美はボクたちがキャッチボールをしている間に監督からいろいろ仕事を頼まれたらしく今は球出しをしていた。

元々ボクらと仲が良かった麻美は野球のルールなども分かるのでこのままマネージャーになっても問題なさそうだ。

「はあ。本当なら観客席で司たちの応援してるはずだったんだけどなあ。」

独り言を漏らすと、ボクはフェイスペイントの準備をする。

竜が側にいるから滅多なことは起こらないだろうが、こういう時に油断するとボクの場合あとで思わぬしっぺ返しがあるからだ。

「プレイボール」

試合が始まるとレギュラーが数名欠けているとはいえ主要なメンバーがそろっていたのか意外と良い試合をした。

今は6回の表で向こうの攻撃のだが、ピッチャーの子とキャッチャーの子がうまく司の方へと打球が飛ぶように調節しているらしい。竜の方に飛んでも実際問題がないのが途中からわかり、司と竜のところにボールを集め時々大きいのをもらってしまふものの、善戦していると言えるだろう。

カキーン ドゴツ コロコロ ダダダダ シュパッ

「アウト！」

全くあとちょっとだったのに・・・

相手打者が打った球がうちのピッチャーの左腕にあたった。

打球はうまいとこ所に近い方へ転がったのでアウトは取れたが、グローブを持つ方の腕とはいえあれでは今後のピッチングはきついでろう。

「タイム！」

タイムを取って監督は救急箱を持ってマウンドへと駆け寄った。遠目で見たただだから確証はないが、打ち身だろう。

力むと痛むので踏み込みが甘くなり、ボール球が増えたり球威が落ちるのは間違いない。

監督は時計と入口の方を見ている。控えのピッチャーはまだ着いていない。

というかこの時間だ、試合には間に合わないだろう。

「監督う。秋を使いますかあ？」

「なにを言ってるんだ。これくらいのけが大丈夫です。続投させてください。」

おお、男の子だね。

見た目はあんまりさえないか思っていたけど、十分かっこいいよ。ボクは司にアイコンタクトを送った。

『ピンチになったら出るからできる限り投げさせてあげなよ。』

『本当に大丈夫？けが酷いかそこからわかる？』

『ただの打ち身だから。でも、今までのようには投げれないと思う。』

本当に通じたかは分からないが、身振り手振りもあつたし、司とボクの仲なので大体は伝わっただろう。

「大丈夫よ。たぶん伝わったわ。というか彼女を差し置いてそういうことしないでほしいわ。まったく心友つてのも伊達じゃないわね。」

「ありゃ？口に出てたか。まあそんなわけだから準備しないと。ペイントよろしくね。」

「はいはい、可愛い顔に落書きするのは忍びないけど一種のお化粧と思うわ。」

結局腕をかばいながらの投球は乱れ、少し打たれたしたが、何とかその回は抑えることに成功した。

「えっと、ピッチャーの・・・名前なんだっけ？」

「おいおい、これだけ一緒にいたんやから覚えてたれや。」

「先輩となんて普段つながりないんだから仕方ないじゃない。まあいいわ。腕見せて。」

そういうと、ピッチャーの子は打球の当たった腕を見せてきた。

「うーん。やっぱりただの打ち身ね。でもこれ以上は投げさせられないわ。」

患部が熱を持ち出してるわ。コールドスプレーでさっきの回はなんとかなつたみたいだけどドクターストップね。」

そうとうとボクは救急箱からテーピング等を取り出して腕を固定してしまった。

これで続けたくても続けられない。

「ちよつと、女神だかなんだかしらないが、医学の知識もないのに勝手な真似はよしてくれないか？」

そういつてせつかく治療したものを取ろうとした。

「ああ、ボク柔道で、全国大会で優勝するくらい人体に関しては詳しいから。

整体師をしている格闘家のOBがいることくらい知ってるでしょ？ボクの見立ては間違いないよ。

あと、試合の方も大丈夫よ。ここまでレギュラーの揃っていない守備を考えて無理な投球してきたんだから誇りをもっていいわ。」

そうとうと、先輩は啞然とした。

ひとつ年下の少女を相手にしているはずなのに、何もかも見透かされているように感じたのだらう。

「監督う。ピッチャー交替で秋に投げさせてください。こっちの攻撃の間にピッチング練習してもらえば大丈夫だってわかるとおもいます。」

「竜あんたもう打順回って来ないでしょ。受けて。」

そうとうと、先頭打者でアウトになってきた竜にミットを渡すと急いでベンチの前に設けられている控えの投手が肩を慣らせたりするピッチング練習場へと向かった。

監督は状況を理解していないが、司がそうとうので一応こちらを見

ている。

「竜。ど真ん中にストレートね。その一球で十分だと思うから。」

「あいよ。つてことは俺次の回からキャッチャーか。」

「そうね。まあキャッチャーの子がこれと、他にも数種類ある変化球を取れるなら別に大丈夫だけどね。」

「とりあえず投げとけや。時間があらへん。」

ボクは頷くと、大きく振りかぶって竜が構えているミットに向かって渾身のストレートを投げた。

バシユン！！

「相変わらず手がいてえな。」

「まだ、肩が慣れてないからこんなもんよ。次はもうちょい早いのがいくよ。」

「おう、あとで変化球の打ち合わせしないかな。」

数球投げると、ボクは竜と変化球のサインを決めながら一緒にベンチに戻った。

「君って、芸術の女神ってよばれている蟹津秋ちゃんだよね？」

「そうよ。先輩なら知ってるんじゃないかしら？最強美少女って称号も？」

そういうと、ベンチにいた全員が納得したようだ。

最近目立ったことをしていなかったため忘れられていたようだが、ボクの昔の呼称も結構有名なのだ。

「監督さん。ボクの球とれるの竜と司だけなんで竜をキャッチャーにしてください。あとは別になんでもいいです。バットにかすらせない予定なんで。」

先ほどのピッチングを見てしまったので、監督も頷かざるを得なかったようだ。

その回は打者だった司もアウトになってしまい、試合の点数は二対四で、二点差でまだ負けている。

ピッチング練習をしている間にボクが変わるピッチャーの子の打順が来てしまい。

腕をかばって打席にたったのでアウトになってしまった。

「さあ。あんまり時間をかけると、ばれちゃうからきりきりアウトとってきましようかね。」

そういつてボクはマウンドへと向かって行った。

バシユン。バシユン。ブン、バシユン。

「バッターアウト。チェンジ。」

7回は見せ球も必要がなかった。

9球で終了。

まあ中学生であるの球速にはついていけないだろう。

司や竜ならあてることも可能だが、球が重すぎて飛ばすことは難しい。

「変化球必要なかったわね。でももう一度確認しておきましょう。」

ベンチでもう一度変化球や配給についての確認を竜としているところらの攻撃は三人で終わってしまった。

まずいなあ。

ボクまで打順まわってくるんじゃないのか？

八回でどうにか逆転してくれて打順回ってきてても打たなくていいようにならないかな。

「アウト！チェンジ！」

今回はカーブも使ってあげた。

相手がクリーンナップだったのでストレートだけでは失礼だろうとちよつとした心遣いなのだ、それなら投げなければいいのだが、ここで手を抜いてもしょうがないのできっちり三人で抑えておいた。

しかし、こちらにも攻撃陣はだめだ。

つながらないとかではない。

元々前の二点も司と腕をけがしたピッチャーの子と四番を打っているキャッチャーの子の活躍で取っていたのでその三人が出てこない下位打線では相手のピッチャーの思うままにゲーム展開を進められてしまう。

「次って竜からだよね？延長戦なんて嫌だから絶対に出塁してね。

竜と司とボクで三点だから、ゲームセットよ。」

「おいおい、今からプレッシャーかけるなよ。」

「まあ、せっかくボクが出場したんだから勝ちたいじゃない？」

「はいはい。とりあえず今回も三人でおさえちまうぞ。」

「当然よ。」

で、やっぱりバットにかすることもできなかった相手チームは絶対死守の構えになった。

最終回で二点差だ。

打つことができなくてもこのまま守り切れれば勝ちである。

「竜う。耳貸して、まあ絶対成功する方法だからさあ。」

「ん？どないしたんや？」

「ゴニョゴニョ。」

「お前さ。ほんま怖いわ。確かにそれなら秋に周るし、勝ち決定やな。」

司が何か竜に吹き込んでいたが、司の作戦なら失敗することはないだろう。

助っ人が入ってるはずなのに監督のサインも見ないで竜は打席にいた。

カコン

バントしやがった。
ってか最初から使えよ。

バスケ部の竜は素振りなんてしてないから、普通に打とうと思うと、流石にうまくあたらず、フライやら、ゴロになって今まで出塁できていなかった。

しかし、元々ボクの球を見ているので、眼はいいし、バットに当てるだけのバントなら簡単だ。

あ、これはあれするな。司も悪よの。

カコン

二連続バントだ。

先ほどの竜の足を見ていた相手選手は今まで足が速いのが司しかいなかったのだから一番と間違えており、二点差で送りバントなんて普通はしないので完全無警戒だった。

「ホントに出塁しちゃったよ。これは心友の期待を裏切れないね。」

ボクも打席に向かった。

投球を見ていたとはいえ女の子なので監督はとにかく四番の子に回せることができるかと考えボクには期待していなかった。

声を出すとばれてしまうので無言でお辞儀をして打席に着く。

相手のベンチに顔が見えないようにと考えて、別にどっちでもよかったのでとりあえず左打席に入っておく。

カキーン

初球をライトスタンドに思いっきりすつとばしてあげた。

これで逆転サヨナラだ。

ゆっくりとダイヤモンドを回ると、ベンチに向かってグッと親指を立てた。

ボクらは勝ったのだ。

周りの観衆たちにはマスクをしていることから体調不良で途中まで休んでいたが、元のエースだったと嘘でもついてもらおう。

背番号が偶然10番だったので控えのピッチャーはよくこの背番号だからあまり無理はないだろう。

「おつかれさま。」

「もうこれきりにしてよ。」

「わかってるってえ、というか今後絶対にマークされちゃうからあ、隠し通すことはできないよお。」

「まあ次の本戦がんばってね。」

「本戦もでないかい？」

「先輩、予戦だから選手のチェックも甘かったので出れましたが、本戦では無理です。」

それにすぐに処置したので二、三日で先輩の腕も完治するんで頑張っつて投げてください。」

「本当かい？それは良かった。でも、女神の名はだてじゃないんだね。本当に何でもできてしまう女神様のようだ。」

「誉めても何も出ませんよ。じゃあボクと麻美はバレる前に着替えちゃおうんで。」

そういつと麻美と見張り用に司と竜を伴って更衣室へと向かった。着替え終わりフェイスペイントも取ってしまうと、竜たちに外に誰もいないか確認をとって出てくる。

途中からだったのであまり汗もかいていなかったから着替えてしまえばばれる要素は何もない。

「おつかれさま。今日はいろいろあったしさっさとかえっちまお。」

「そうね。麻美もそうしましょ。司と一緒に居たいかもしれないけど、バシテ司が困るよりはいいでしょ？」

「そうね。用具なんかは全部司が運んでおいてちょうだい。」

司に荷物をあずけると三人で裏から会場を抜け出して帰り道を歩きだした。

「しかし、秋ちゃんって本当にすごいわよね。男の子だったら司じゃなくて秋ちゃんに惚れてたわ。」

「男の子じゃなくても惚れる子がいるからそういう発言はやめてよ。」

「せやな。レズジュツの女神なんてあだ名もあるもんな。」

「うるさい…」

余計なことを言った竜には残酷が待っていた。

しかし、今日は竜も頑張ったので今度なにかしてあげよう。

「ほんと、こつみてる秋ちゃんって、すっごい美人で可愛いのに変なところ男の子っぽいよね。」

「小学校のころを知ってる麻美にとってはまだボクは男女かもね。」

「そんなことねえよ。秋は女の子らしくなったぜ。」

あれ？なんで標準語なの？

「はいはい、なんかあやしいけど、まあいいわ。」

「ふふ、確かに女の子らしくなったけどこつという所は昔のままね。」

「なんのこと？」

「いいの。秋ちゃんの魅力の一つでもあるんだから。」

誉められたのだが何か釈然としない。

まあ悪いことではないようなのでいいか。

「結局運動しちゃってお腹すいたわね。司たちは今頃お弁当食べてるだろうし、せっかく街まで出てきたんだからどこかに食べに行っちゃおうか？」

「いいわね。私オムライスがいいわ。」

「俺はなんでもかまへんよ。」

「じゃあこれから練習がある司には悪いけど、ファミレスにレッツ

ゴー」

「おう。」

試合は終わったが、このあと閉会式があり、閉会式後も県予選の本戦が待っているので練習があるらしい。

ボクらは応援にきただけなので、そこまで見る必要はないし、ばれちゃいけないからと会場を出てしまったので、今からは遊びに行くのだ。

「でもさ。麻美も余裕よね？昔だったらボクと一緒に遊びに行くなんて怖くていかなかったじゃん？」

「今日は竜くんがいるからね。それに昔は司と秋ちゃんの仲がいいのが嫌で断っていたってのもあるのよ。」

「ふむふむ。乙女の嫉妬ってやつですか。そして今は司とラブラブなので平気になったってことですか。」

「そうよ。心友って関係も司と付き合いだしてから理解できるようになったもの。今ではうらやましいとは思っても、嫌だとは思わないわ。」

「麻美にはかなわんな。からかおうと思ったのにさらりと返してくるとわ。」

「これでも司の彼女よ？司ならもっとと上手に私の恥ずかしい部分を刺激してくるわ。」

「なんか微妙にのろけられた気分よ。まあ、二人が幸せになってくれるのはボクも嬉しいんだけどね。」

「秋ちゃんはどつなの?」

そついつて麻美は竜に気づかれないように竜に目線をやった。

「はう。どつつて、何もないわよ。」

「あらら?どつかしら?今日は野球でキャッチボールしてコンビを組んだけど今度は愛のキャッチボールができるんじゃないかしら?」

完全に藪蛇になっていたらしい。

他のことならいざ知らず、恋愛のことになるとボクは勝てないようだ。

真つ赤になつてしまつてゐるが、前を歩いてる竜は二人の会話には気付いていないようでもくもくと歩いてゐる。

チャプター19（後書き）

夏合宿を期待していた皆様ごめんなさい。先に以前のフラグを回収させていただきました。

夏合宿後になるとどうしても間隔が空きすぎて不自然になってしま
うのでここで秋には野球をしていただきました。

今回のテーマは“心友の絆と新たな絆”です。

スポーツを通すと友情が増えてませんか？今回は全幅の信頼を持って
いる三人を描いたつもりですが、青春のページにスポーツって
欠かせないかなって思ってたので入れました。

そして今まで少し距離を置いていた麻美はこれをきっかけにして秋
たちにさらに歩み寄っていきます。司の彼女で幼馴染だった麻美に
はもっと秋たちと接してほしいかったです。

それではキャプチャー19を読んでくださってありがとうございますま
した。

チャプター20 (前書き)

キャプチャー20に伴ってショートの外編をUPしようと思いま
す。

そちらもよろしかったらご覧ください。

チャプター20

宝物の地図

「いやあ。結局麻美にまで手伝ってもらっちゃって悪いわね。」

今日は、結局県大会本戦の二回戦で負けた司の残念会&本戦出場祝いにボクの家でバーベキューをしようと、竜と司と麻美が家に来ている。

「これくらい良いわよ。それよりどこかのお二人さんが空腹で倒れちゃう前に鉄板を運びましょ。」

「うん、確かこのあたりに。」

そう言っただけは柵の上の方を見た。すると普段はあまり使わないので結構上の方で埃をかぶっている鉄板とアミのセットを見つけた。

「ありゃ、これじゃ届かないね。竜に取ってきてもらえばよかったな。」

「竜さんと司は薪の火をおこす手順を、おじさんに教えてもらってるんだから仕方ないわよ。あそこの台を使えば私たちでも届くわよ。」

そういうと古くてボロボロの台を持ってきた。

「ありがとう。安定しないからちよつと抑えていて。」

そういつとボクは台の上に乗って鉄板に手を伸ばした。

ドサドサ「キャツ！」ガラガラ！

下から見たら鉄板とアミで見えなかったが、何か上に乗っていたらしく。

動かしたとたん雪崩が起こり、ボクと麻美は下敷きになってしまった。

実はボクだけならよけることもできたが、麻美がけがをしたらいけないので麻美をかばってほとんどボクの上に落ちてきた。

「秋ちゃん大丈夫？」

「あはは、最近平和だったから油断してたよ。ごめんね麻美。」

「なに言ってるのよ。全くまた私をかばって、鉄板とかアミみたいな危ないものは当たらなかつたみたいだけど、けがは無い？」

「うん。大丈夫だよ。というかこんな風に叱られるの。なんだか即視感的なものを感じるな。」

「前世の記憶とかいうやつ？正直司から初めて聞いた時は信じられなかつたけど、秋ちゃんが言つとなんだか本当な気がするわね。」

そうなのだ。二度目の臨死体験後あまりにも感覚が鋭敏になったため、このまま皆に隠したままなのも嫌だったので司と竜それに中学校にはいつてからは鈴と浩太にはボクから教えて、

司から麻美にも伝えてもらい。

特にボクの周りでいつも一緒にいてくれる人たちにはこのことを考えてもらっている。

「ボクも最初はそれほど気にしてなかったんだけどね。感覚が鋭くなつてからはこの人がどれくらい前世で仲が良かったのかわかっちゃうから。」

「そうなんだ。じゃあ私はきつと前世の恋人ね。秋ちゃんの前世は男の子だったんでしょ？ だったら絶対に私惚れていたわ。」

ちよつと赤くなつてしまった。

「確証はないけど、たぶんね。でも、その感覚によると前世でも不幸体質だったみたいで、竜と司以外は微妙にみんな距離があるのよね。」

「馬鹿ねえ。どうせ秋ちゃんは不幸体質が危険だからって自分から離れて行ったんでしょ？」

私なら多少危険でも恋人から離れたくないなんて思わないもの。それが毎回デートに竜くんが一緒に来てあきれちゃったのかもしれないけどね。」

「麻美い。それじゃあボクは竜意外と付き合つのが無理みたいじゃないか。ボクは自分の思うままに恋愛するぞ。」

「あら？ 竜くんならちよつどいいんじゃないかしら？」

麻美はこのところ竜とボクをくつつけようとしている。

そしてボクはというと、

「嫌だよ。竜が恋人だなんて、なんだか変なんだもん。それに、ボクはお金持ちで、性格もよくて美形で、運動も頭もいいような理想的な男の人としか付き合わないって決めてるの。」

「あら？お金つて部分は、今はわからないけど、他は全部大丈夫じゃないかしら？それとも竜くんの顔は秋ちゃんの好みじゃないんだっただかしら？」

「はう。」

やっぱり恋話になると麻美には勝てないようだ。

雪崩で落ちてきたよく分からない布の塊や本を片づけていると最後に麻美が手に取った一冊から紙切れのようなものが落ちた。

「あら？何かしら？秋ちゃん読める？」

「ん？えつと、ここに我が宝ありと書いてあるわね。」

「ええ？それって宝の地図じゃないの？すっごおい。」

「まさか？だってこの家おじいちゃんの代に立てたのよ？そんな埋蔵金なんて無いわよ。」

「おじいさんが昔残した遺産かもしれないじゃない？とにかくこの本は持っていきましょ。」

「まあ、別にかまわないと思うよ。それよりも予定よりもずいぶん時間使っちゃったからそろそろ行かないとみんなが心配しちゃうね。」

「

そういつて、鉄板をボクが、アミと串を麻美がもってみんなが待っている庭へと向かった。

庭につくとお父さんの指導の甲斐もあってか二人も無事火をおこすことに成功したらしくボクら待ちの状態だった。

「秋い。遅いよお。早く食べようよお。」

「おまたせ、ちょっとした事故があつてね。まあ私も秋ちゃんもけがしたわけじゃないから気にしないで。」

麻美が雪崩事件について語っていたがこれは問題ない。

時間がかかりすぎているし、埃を被ってしまったので下手にごまかすより何もなかったことをきちんと報告した方がみんな心配しない。

「まったく、竜と少し離れると寂しくって問題起こしちゃうんだから。」

「その言い方だとボクが竜の側にいないのが不満で、わざと事故をおこしたみたいじゃないか。」

麻美はボクのことをからかうことも、きつちり忘れなかったようだ。

「まあ、俺の側にいろよ。魔除け札みたいに言われるんは嫌やけど、面倒が起きひんのは確かやからな。」

「それよりも、倉庫で面白いもの見つけたのよ。おじさん、これ何か知ってますか？」

「ああ、懐かしいね。お爺ちゃんの宝物だね。」

「え？お父さん知ってるの？」

からかわれ過ぎて真っ赤になっていたボクもお父さんの言葉で復活できた。

「もちろんだよ。この宝物はみんなの共通だからね。これなら危険もないから秋たちでも安心だ。“協力してくれる人を集めて”行ってくるといいよ。」

「おじさん。何がここにあるんですか？俺らの共通ってことはみんなで使えるようなものなんですか？」

「そうだね。全て宝をみつけたらわかるよ。」

「冒険みたいでえ。面白そうだねえ。」

「そうね。来週末にでも、みんなで行きましょっか。ついでだし、浩太と鈴にも声をかけましょ。」

「いいわよ。ふふふ、秋ちゃんといると本当に次から次へと面白いことが起こるわ。」

「またそういうことを、好きでこんな体質じゃないんだからね。」

そのあとは、みんなで楽しくバーベキューをした。ペコちゃんがお肉の匂いにつられてあんまりにも鳴くのでお座りをさせてお肉をあげた。

「なあ、ペコって俺にだけ絶対懐かへんよな？」

「ペコから見たらあ。秋を奪いあうライバルだからねえ。」

「なんやそれ。俺のライバルはファンクラブに百合趣味の後輩に犬か？」

「うーん。もっと多いと思うよあ。秋の魅力は種族を超えるみたいだねえ。」

途中竜と司が良く分からない話をしていたが、麻美とのおしゃべりに夢中であり聞き取れなかった。

「宝の地図？いいわね。なんだか面白そうじゃない。」

鈴は参加してくれるみたいだ。

今朝一番に宝の地図の話をしたらこの反応なので大丈夫だろう。

「あとは、浩太だけね。週末予定入ってないって言ってたし大丈夫だよな？」

「浩太は参加決定よ。というかメグのお誘いを浩太が断るわけないじゃない。たとえ何か予定が入ってもメグがお願いしたら全部キャンセルして参加するわよ。」

「鈴はそれでいいの？」

「大丈夫よ。だって秋には竜くんがいるでしょ？二人がくつつけば自然と浩太も気付くはずよ。人間ってそういうものよ。」

「鈴ってなんだか肝っ玉母ちゃんみたいね。いいお母さんになるわあ。でも、相手は尻にしかれること決定ね。」

「そんなことしないわよ。相手は立てるわよ。影から操るに決まってるじゃない？」

「それも形が変わっただけで尻にしいてるんじゃないかな？」

「もう、そんな可愛いお口でお尻とか言わないの。じゃあ週末空けておくから何か準備するものとかあったら教えてね。」

「了解。今この宝の地図と古文書？を読んでいるから読み終わったら必要なものを教えるわ。」

そう言っただけは古文書？のページをめくった。

お爺ちゃんが書いたものなので少し古い言葉を使っているのもあるが、なにより内容が暗号めいていて中々意味がわからない。読み説くには少し時間がかかりそうだ。

「ワンワン」

今日は約束の宝探しの日だ。

ボクらは今日古文書の指示に従い、海良町内を回るようになった。というのも、古文書によるといくつかのチェックポイントがあり、それらを見つけないと地図に書かれたお宝の場所に直接いっても宝は見つからないようになってきているようだ。まあ歩く距離もそこまで多くはないのでペコちゃんの散歩も兼ねてみんなでピクニックということになった。

「浩太。お前山登りにでも行くんか？」

竜がそういうのもうなずける。

浩太は宝探しと聞いて何を思ったのか冒険者のそれといった格好をし、大きなリュックを背負っていた。

「みんな何故そんな軽装なんだ？藪の中にはいたりするんだろ？特に女の子たちはそんなに手足が出ていたらけがをってしまうぞ？」

「あのねえ。メグはともかくとしても、私たちは危険な場所とか草むらには入らないわよ。」

私たちの担当はお弁当の作成と、謎ときよ。力仕事は任せたわ。」

「なるほど、言われてみればその通りだな。じゃあ頭脳派の僕もこんな格好必要なかったのか、
じゃあ悪いが女神様の家に荷物を置いて行かせてくれ。必要なものだけポシエットに入れ替えてくる。」

そうやって浩太はリュックをボクの家玄関の中に置くと、さつきよりはすっきりした格好になった。

「さあ。浩太のボケも済んだしい。行こうかあ。」

「なんか司がいうと力が抜けるわね。まあいいわ。行きましょ。秋ちゃんほど上手にはいかないだろうけど私もお弁当作ってきたから期待しててね。」

「麻美と司は相変わらずらぶらぶだね。ボクらも行こう。距離はなけれど謎が難しかったら意外と時間がかかってしまうかもしれないしね。」

「せなや。浩太のボケは鈴にまかすとけば平気やる。」

「ワンワン。」

こうして六人と一匹は第一チェックポイントである近くのお寺に向かうのだった。

「ねえねえ。この“すべての力を合わせて金を響かせればおのずと分かるだろう”って何のことだと思っ？」

ボクは古文書をみんなの分かる言葉に書き直して重要な部分だけ二枚の紙に写し一応原本をもちその紙を鈴に持ってもらっている。鈴ならボクの不幸に対処することができるので、なくしてしまうこととはないし、浩太が横にいたので謎解きもスムーズに進むはずだ。

「せやな。みんなでいっぺんに金をたたいたら大きな音がして仕掛けが作動するとかやないかな？」

「あのねえ。ボクのおじいちゃんはカラクリ師でもなんでもないんだよ。」

そんなもの作れるわけないじゃないの。たぶん人が多くいると何か

「起きるってことだと思っわ。」

「え？じゃあ六人で大丈夫かしら？というかこの宝の地図って何人
でくるかわからないんでしょ？」

「大丈夫よ。お父さんにいろいろ聞いたら【その六人なら、無事に
宝にたどりつけるだろう】っていったもん。」

「相変わらずう、秋に甘いねえ。おじさんは他になんて言ったの
お？」

「それがね。ボクも教えてくれるだろうと思ったんだけど、ヒント
はいくつかくれても、絶対に宝の在り処とか、宝が何かはおしえて
くれなかったの。」

「じゃあ、とにかく古文書の通りに動くしかないわね。メグのお父
さんがそういうならきつと自分たちで見つけないと意味がないもの
なのよ。」

「せやな。頑固なおじさんやけど、根はいい人やし、思慮深い人だ
からなにか考えがあるんやろ。」

「わかった。ちょっとみんな来てくれる？」

話をしている間にも浩太はなぞ解きをしてくれていたようだ。
正直ボクらはまったりと会話なんか楽しみながら全然謎について考
えてなかったのもうわかったのかとびっくりした。

「ここにきてみんなでこの綱を握ろうとしてくれるかい？」

浩太の指示のもと、全員で鐘をつくための棒から垂れ下がっている綱を持つととする。

「ちよつと、六人で持つにはきついんじゃない？背の高い竜は平気かもしれないけど、ボクらはきついよ。」

ただでさえ鐘つき堂の狭い空間に六人も入っているのに竜などは体が大きくて結構密着してしまう。

「でもこうするとみんな自然に目線が上を向くよね？そして目線の先にあるのは、あれだ。」

確かに一番上を持っている竜以外のみんなは目線が上を向くことになった。

そしてそこには少し古めかしい文字で“知”と書いてあった。

「“知”って書いてあるけど、あれが一つ目のキーワードかな？」

「たぶんね。これでチェックポイントを全部回らないといけない理由がわかったね。」

「たぶん全部集めると何か意味のある言葉になるんだよ。そしてそれが宝を見つげるためのヒントか何かになってるんだと思う。」

「なるほどね。しかし浩太って結構頼りになるのね。」

「ふふふ、伊達にRPGなどをやり込んでいないのさ。クリア条件を満たすにはキーワードが必要なストーリーは定番だからね。」

「・・・・・・・・」

ゲーム脳ここに極まるだった。しかし、浩太のおかげで意外とすんなり謎がとけたのでみなで労って次のチェックポイントへ向かう。

『秋ちゃんも大変ワンね。こんなメンバーで本当に大丈夫なのかワン。』

特にあの竜とかいうやつガルルル。秋ちゃんにべったりくっつきやがって。クンクン』

「キュンキュン。」

「おまたせペコ。次の場所に行こうね。」

「ワン！」

謎ときの間、近くの木につないでいたペコを回収するとボクらは次のチェックポイントへと向かった。

「このお地蔵さまでいいんだよね？」

「ええ、鈴はこら辺に住んでないからわからないと思うけど、ボクらの中でお地蔵さまっていったらこれのことなんだ。」

「そうだねえ。僕や麻美や秋は特に同じ地区だからあ。お地蔵さま

の話は良くきかされてるんだあ。」

「確か、道祖神とかいうので、旅の安全を守る神様なのよね？」

「ああ、その話なら僕も聞いたことあるよ。竜と僕も地区は違つとはいえ同じ小学校出身だからね。」

「このお地蔵さまなのはわかったけど、謎ときのヒントが良く分からないわよ？」

「なんて書いてあるんや？またさっきみたいにその通りに動いたら自然に見つかるのとちゃうんか？」

「えっと、“集いし者で手をつなぎ、活目せよ”って書いてあるけど……」

「一応やってみるう？」

「そうね。さっきもそれでうまく行ったんだし、やってみましょ。」
麻美がそういうと、今隣り合っているものどおしで手をつないでみた。

ちなみにお地蔵さまに向かって、左から鈴・浩太・竜・ボク・司・麻美の順番だ。

順番に意味はないのだが、らぶらぶな司と麻美は一緒にいるし、ボクの両脇は竜と司が一番安全なので自然とこういう並び順に常になつてしまう。

鈴も意外と浩太にアピールをかけているようだ。

.....

「なにも起きないわね。というか起きるわけがないわね。そっちはどう？」

もし並ばせるのが目的なら端っこの私が鈴ちゃんに何かが見えとおもっただけど。」

「私の方もさっぱりよ。というか、それなら手をつながなくても立ち位置を変えるだけでわかつちゃうからね。」

「うーん。困ったね。」

そういうと、両手をつなぐためにリードが持てなかったため代わりにペコを預けた麻美からペコを返してもらつとみんなで謎について考えた。

「ペコ、困ったわね。手をつないで何かを見なきゃいけないんだけど、どうしたらいいと思う。」

ボクは八方塞がりになり、ついにペコにまで相談をした。そうすると、ペコは何を思ったのかお手のポーズをする。

「そっか、ペコも手をつなぎたかったのね。はい、良い子いい子。」

ペコの手をボクの左の手のひらに乗せると、逆の手で撫でてあげた。ペコはとっても賢くてかわいらしい本当にいい子だ。

何故かいつも一緒に登下校をしているのに竜には懐かず、逆にペコ

の鳴き声で朝は竜が来たことがわかり、帰りもボクが家に着いたことがわかるので、家族は重宝していたりする。

「それだわ。古文書には集まった者で手をつなぐって書いてあったのよ。別に人とは書いてなかったじゃない。」

「え？ほなペコも一緒に手をつないでもつかい並ぶんか？」

「違うわよ。もう一人ここにはいるでしょ？その人と手をつなげばきつとわかるのよ。」

そういつて、麻美はお地蔵さんの方へと寄って行った。

「ほらあったわ。次のキーワードは“田”ね。」

麻美が指し示すとおりにお地蔵さまの右手を見るとそこには“田”と彫られていた。

「なるほどね。道祖神はもともと人だったらしいし、これなら納得がいくよ。これでキーワードは“知”と“田”の二つになった。」

またしてもキーワードとなる文字が判明し、浩太の推論が正しければあと二つのキーワードを集めれば意味のある言葉になるらしい。結構みんな頭がいいのもあり、意外とスムーズに謎ときは進んでいく。

「それじゃあ、三つ目のチェックポイントにレッツゴー。」

ボクはそう言うと、ペコを引き連れて歩きだした。ペコには偶然とはいえヒントをもらったのであとで褒美におやつをあげなくちゃ。

『まったく、秋ちゃんは、頭はいいのに手が掛かるワン。でも嬉しそうだし、いいとしようかなクン。』

「ちよつと、竜。絶対離したら承知しないからね。」

「はいはい、真昼間から幽霊なんてねえよ。」

そう、第三チェックポイントは墓場だ。

墓場の中にある戦没者の慰霊碑に次のキーワードがあるらしい。

田舎の墓地なので大きくはないのだが、それでも墓場の雰囲気というものはあるのでボクは絶対に入らないとゴネたのだが、結局竜の手を握って入ってきた。

「メグ、可愛すぎるわよ。お姉さんの母性本能がものすごい勢いでくすぐられてるんだけど。」

「うふふ。普段完璧少女の秋ちゃんもこんな時は一人の女の子なのね。」

「うるさい。無駄口叩いてないでさっさとキーワードみつけるわよ。」

「

」でもさあ。そのキーワードが難しいんでしょあ？

今まではそこに一文字あるだけだったからあ、見つけるのは簡単だったけどお、墓場にはたくさんさんの文字があるから限定するのは難しいんじゃないかなあ？」

「そんなことないわよ。ここのキーワードは“藻”よ。さあさっさと出るわよ。」

「いや、なんでそんなことわかるんだ？もうちよっと調べてからの方がいいと思うよ？」

「浩太の言う通りだ。俺ももう少し考えた方がいいと思うぞ。」

「うるさい！ギャー！！離さないでよ！！！」

ボクは反論した竜に残酷を当てたのだが、テンパっていることもあり、手加減ができずかなりのダメージをくらった竜は手を離してしまった。

「無茶いつなや。まあ理由は外に出てから聞いたるわ。行くぞ。」

「竜は秋にあまいなあ。」

「あほか、そんなんちゃうわ。このままここにおいたら俺も一緒に埋められるっちゅうの。」

「それもそうだねえ。じゃあ行こうかあ。」

くそ、絶対みんな面白がってやがる。

浩太はさっきから使い捨てカメラを何度もこちらに向けていた。怖がって気づいて無い思っている様だがあとで回収しておこう。

墓場を出たボクはみんなに説明を始めた。

「古文書には“魂の集まる場所にて背を向ける”って書いてあったでしょ？」

「そうだねえ。だから僕たちは一番魂の集まっている慰霊碑にいったんだよお。」

「そうよ。でも実は行く必要なんてなかったの。あの石碑に何か書いてあるわけでも、墓地に何かがあるわけでもないのよ。」

「え？どういう意味だ？」

「あの場所に関係があつたのは方角よ。あんな場所にキーワードなんて書いてあつたらそれこそ林の中で木の葉を探すことになるでしょ？」

だから慰霊碑の立っている正面から後ろを向いた方角にある藻神神社を示してるのよ。

そしてその境内には藻って文字が一文字大きく書いてあるでしょ？だから正解は藻なのよ。

この文字は死者を祀る喪って文字から縁起が悪いからってことで変わった字で結構有名だからキーワードとしてはぴつたりだし、一応現場まで行つたけど他の選択肢はなかったから間違いないわ。」

「とっても長くて詳しい説明をありがとう女神様。

ところで今までの謎は全く下調べしていなかったのは一週間かけてこのポイントだけを入念に調べておいたのかい？」

「う・・・そうよ。」

場所が墓地ってわかったから先に考えられる選択肢は全部調べてお

いたわ。」

「メグ・・・やっぱりあなたは完璧少女なのね。自分の苦手な分野を回避するためにそこまでがんばるなんて。」

「もう、うるさいな。そんなこと言っていると、そろそろお昼にしようと思ったけどお弁当わけてあげないぞ。」

「女神様あ。そればかりはご勘弁をお。」

「ん？浩太の分は無いわよ？さっき撮影したカメラを渡してくれたらひよっとしたら少しは余るかもしれないけど、竜と司なら浩太の分くらい食べられるだろうからね。」

「そんな殺生なあ。わかった。しかし、今日みんなの写真が入っているから破壊はしないでくれ、現像してさっきの分だけ抜き取ることは許可しよう。」

そういつて、先ほど全部取りきってしまったのだろう。使い捨てカメラをボクに渡してきた。

やけに素直なのが気になるがお弁当を食べるために苦渋の決断をしたのだろう。

「浩太。メグに渡しちゃっていいの？」

「ふ、カメラはもう一台あったのさ。」

「現像したら私にもちょうだいね。」

「鈴、浩太次のチェックポイントは小学校だしあそこでお弁当にし

ましょ？」

「了解。」

小学校に着くと校庭の一角にある芝生に、麻美と鈴が用意してくれたシートを敷いてみんなで輪になって座った。

「じゃじゃ〜ん。」

「「「おお！」」」

「相変わらずメグの料理はおいしそうね。」

「秋ちゃんは昔から料理とか本格的だったからね。ひよっとしてこのパン手作り？」

「さすが麻美だね。そうだよ。昨日のうちに焼けるように準備しておいたんだ。」

ボクのお弁当は手作りのロールパンに真中で切れ目を入れてそこにジャムとかサラダといった具材をつめこんだお惣菜パンだ。

「メグには負けるけど、早起きして作ったんだから私のも食べてね。」

鈴はオーソドックスにおにぎりのようだ。でも中の具は結構種類が多く、こちらも美味しそうだった。

「二人とも予想通りのお弁当ね。これなら私の分も食べてもらえそうね。」

「わぁ〜おいしそう。」

麻美が取り出したのは少量のサンドイッチとクッキーだった。

サンドイッチも挟んであるのはジャムとか甘い物がおおいのでどちらかというとデザートのようなようだ。

「麻美ちゃんの気配りには負けるわ。私はおやつにまで気が回らなかったわ。」

「そうでもないわよ。秋ちゃんのお弁当には勝てないから必然的にこうなっただけよ。」

でも秋ちゃんもあまりたくさん量はつくれないから鈴ちゃんのお弁当も大事よ。これからこうやって六人が集まる時は、私はおやつを担当するわね。」

今まで少し距離があったような気がしていたが、麻美も鈴もすっかり仲良くなった気がする。

今日は六人で集まってよかったな。

「おお、うめえ。こら司お前は彼女のお弁当を食べる。女神様のお弁当が減るじゃないか。」

「麻美のデザートも楽しみだけどお。甘いものばかりじゃ身が持たないよお。」

「はいはい、私の作ってきたおにぎりも食べてよね。」

「うむ、シャケはどれだ？」

「まったく、はい。ホントにシヤケが好きなのね。」

みんな今日の宝探しの話をしながらものんびりとお昼を過ごした。多少の小競り合いはむしる仲がいい証拠だ。

先ほど活躍してくれたペコにもお弁当の隅に入れておいた唐揚げをひとつあげた。

『まったく秋ちゃんは、唐揚げ一個で機嫌をとろうなんてクンクン。この尻尾は秋ちゃんが撫でてくれたから振っているんであって、唐揚げにつられたわけじゃないんだからねワンワン。』

「それで、最後のキーワードなんだけど、“扉”だよな？」

「せやな、“扉”以外おもいつかへんな。」

「え？浩太も竜くんもなんでみてないのに分かるの？」

「鈴ちゃん。古文書の文をよんでくれるう？でもお、僕も“扉”だとおもっよお。」

「“皆の憩いの場にて今日の行動を振り返れ”よ。これがなんで扉になるの？」

「鈴ちゃんとちがつて私たちはここの小学校出身だから、この文章をみたらわかっちゃったのよ。一応確認のために来たけど、これは間違いないと思うわ。」

そうしてお弁当を片づけ終わったボクらは校庭の一角にある池へと向かう。

池のそばには大きな岩があり、そこには大きな文字で“扉”と彫られていた。

「昔の生徒の悪戯って聞いていたけど、まさかボクのおじいちゃん
が原因だったなんてね。」

「あら、そうとは限らないわよ。お爺さんは宝の地図を作っただけ
で、その時偶然あつた落書きを使っただけかもしれないでしょ？」

「ボクもそう信じたいんだけどね。扉って普通一番したのは止めるか
せめて払うでしょ？」

この文字は跳ねてるじゃん？古文書のおじいちゃんの癖と同じなん
だ。

昔お爺ちゃんの日記を見つけたことがあるからこの古文書は間違い
なくお爺ちゃんの手書きだよ。」

「あはは、秋のおじいちゃんは面白いひとやったんやな。」

「これを前にしたら反論できないわ。」

「まあこれでキーワードは全部集まったわけだし、お宝の場所に向
かいますよ。」

麻美に慰められながらボクらはそこからそれほど遠くない坂下神社
へと向かった。

「キーワードは、“知”“田”“藻”“扉”の四つであってる？あとはこの古文書の文章を解読すればお宝は見つかるんだね。」

「浩太出番よ。あなたのゲーム好きがここで答えをみつけるはずよ。」

「無茶言わないでくれよ。第一この文章じゃ抽象的すぎて何を言ってるのかさっぱりだよ。」

「確かにい。知っている田んぼの藻を扉につければお宝が見つかるのかなあ？」

「さすがに、それはないと思うわ。司でも分からないみたいね。」

「鈴ちゃん、もう一回読んでくれへん？やっぱり古文書のヒントが重要なんやおもつんで。」

「いいわよ。」

「日々を送りし冒険者よ。謎を解き、すべてを集めし時この場でその宝を開くべし、真実の宝はここにある。」

これで全部よ。メグの翻訳だから間違いはないと思うし、実際原本の方もあまり変わってないわ。」

「そうだね。翻訳の信憑性はボクが保証するよ。でもこれだと宝箱がここに置いてあってそれを開く合言葉のように書かれているわね。」

「なに言ってるんだ。合言葉を唱えて宝箱を開くのは物語の中だけだよ。」

「……………」

ゲーム脳の浩太にそう言われてジト目を全員が送ると、浩太は頬を書いて気まずそうにした。

「まあ、浩太が言うことは正論ね。でもやっぱりこの文章とキーワードをどうにかしないといけないみたいね。」

「そうだね。ボクもそう思うよ。キーワードだけじゃなくこの“サカサさん”でないといけない理由がなにかあるんだと思うわ。」

「ん？秋、今なんて言った？ここは坂下神社やないんか？」

「ああ、正式名称は坂下だけど、地元の方はサカサさんとか呼んでるのよ。通称名称よ。」

「通称名称ってのが何かはわからんけど、ひよっとしたらわかったかもしれないぞ。今までのキーワードは知・田・藻・扉だったが、これは順番がサカサなんじゃないのか？逆から考えると意味のある文章になるとか。」

「じゃああ。扉に藻をくつつけると、田んぼが知っている宝にありつけるのお??？」

「司、あなた考えるの諦めてない？普段ならそんなこといわないじ

やない。」

「うん。だって、三つ目が“藻”ってわかった時点で元々知っていた扉とサカサさんで全部わかつちやったからねえ。」

「「えええええ?」」

「さつき司古文書の文章が意味不明っていつてなかったっけ?」

「違うよお。文章が抽象的すぎるってのに確かにそうだねえ。って答えただけだよお。」

「僕は一度も分からないなんていつてないよお。」

「やられた。」

「確かに司はこういうやつだった。」

「とうの昔に答えがわかっていてもみんなが悩んでいるのを楽しみながら眺めるそんなやつだ。」

「まあ、ボクもさつきのヒントで流石にわかったけどね。確かにこれは危険もないのに手に入れられる。とつても大事な宝だよ。」

「秋の場合はあ、危険もないのについていうのは変だよお。」

「うるさいわね。確かにそうだけど、今回の宝探しに関しては当たってるじゃないの。」

「メグ、そろそろ私たちにも教えてくれない?二人だけで納得して話を進めないでよ。」

「ああ、ごめんごめん。簡単に説明するなら万葉仮名みたいなものよ。それぞれの漢字にはひとつずつ言葉に変換できるのよ。」

最初から順に“ち・だ・も・と”といった感じにね。それで最後にサカサさんってことで逆から読むと、ともだち。そう、友達になるのよ。」

「わあ。なるほどね。秋ちゃんのお爺さんって素敵な人だったのね。」

「ありがと、宝の地図作るために学校の岩にいたずらしちゃうようなやんちゃんなおじいちゃんだったみたいだけど、でも本当に良いおじいちゃんだったんでボクもおもつよ。」

みんなの顔を眺めると、本当に無理をしないで自然とあふれだすような笑顔が見えた。

おじいちゃん、本当だね。

友達は人生の宝物だね。

チャプター20（後書き）

またしても、夏合宿に進めませんでした。だって、竜に何か じゃあホームパーティー 蔵で何か見つけるのもいいかも 当然宝の地図でしょ。

というAKIの中での方程式が発動してしまいました。さらにこの話を書いていたら書きたい構成ができてしまい、どうしたものかと悩んでおります。

さて今回のテーマは“友情”です。ここでツンデレワンコと書きたくなるおバカなAKIですが六人の友情が描けていましたでしょうか？

AKIの中ではかなり好きな一話となっております。

それではキャプチャー20をお送りいたしました。本日もご声援ありがとうございました。

チャプター21

夏だ。海だ。合宿だ？

キンコーン

「はい。そこまで！解答用紙を回してください。」

「はあ。終わったあ。」

「お疲れ様。どうだった？今回はできたんじゃない？」

「うん。空欄はないよあ。ケアレスミスとかはあるかもしれないけどあ。」

「二人とも余裕ねえ。私は数学苦手だからちよつときつめよ。」

「鈴は英語で稼いでるから大丈夫よ。司はこれでも小学校時代からボクが勉強みてるからね。」

「そうだねえ。今回も秋の山は大正解だよあ。秋ほどじゃないけどできた方だと思っよあ。」

「女神様あ。テストが終わったし、美術室で合宿の準備しようぜ。」

「浩太も余裕みたいね。まあみんなで勉強したんだからよほどのミスがない限りみんな問題ないでしょ。」

「普段はばかなことやってるけど、浩太はボクの次に成績はいいからね。」

「ほんと、普段からしつかりしてくれたらもつと美術部も部員ふえるんだろっけどね。」

「増えすぎたらそれも問題だよ。まあ来年はボクたち、すぐ引退だから部活紹介は前に立つよ。」

「それって詐欺なんじゃないの？」

メグが【引退まで仲良くしてください】なんて言ってウィンクでもしたら部員は大量に入るだろうけど、文化部だからってすぐ引退したらみんな泣いちゃうわよ？」

そうなんだよね。

部員が増えすぎたら新しい部活を作ってまで不幸体質を避けた意味がないので、去年の部活紹介は浩太が前に立った。

しかし、それでもどこかから情報を手に入れたらしい真奈美ちゃんには騙せなかったが、バスケット部と野球部の応援には良く行くと噂を流しておいたので新入生はそちらに流入してしまったのだ。

実際顧問もあまり顔を出さない美術部はかなり自由でやることはやる良い部活だとおもっが、文化部というだけで人数は少なくて助かっている。

「秋い。来たぞ？今から美術室いくんやろ？」

「竜。麻美。そうね、急ぐわけでもないけどさっそく行きましょ。」

今日は出来上がった浴衣の衣装合わせと合宿の打ち合わせだ。

もう随分前にできていたのだが、せつかなので全員が集まれる日に着ようということになり。
テスト明けでみんなの時間が合う今日になった。

「あ、ちょっと待ってね。浴衣が汚れたら嫌だから。」

そついうとボクは麻美を隣に引き寄せて、美術室の扉を開けた。

「女神様あ。」

ギユウッ

「もう、いけずなんですから。でも麻美先輩も抱き心地いいですう。」

「こらこら。浴衣が着崩れてるぞ。」

「秋ちゃん？これはどういうことかしら？」

「ああ、今日は一年生の方が、テストが少なかったから先に準備をしておくように頼んだの。」

さすがに全員分を着つけるのは大変だからね。鈴ももう一人で着れるでしょ？」

「はあ。もういいわよ。抱きつかれるくらいなら許してあげるわ。真奈美ちゃん？毎回秋ちゃんに抱きつくの？」

「朝は成功するんですけど、部活の時はいつも失敗してます。」

「その情熱を違う方向に向けてほしいわ。さあ、真奈美ちゃんも手

伝って頂戴。メグと私は麻美と一緒に準備室で着替えるから男子の着つけは任せるわよ。」

「はあい。」

会話を聞いていた花火ちゃんや由香ちゃんも竜と司と浩太の着付けを手伝うべくそれぞれに指示を出していた浴衣を持っている。

「みんな終わった？」

「ちよつと待つてください。まだ真奈美ちゃんと竜先輩の二人が終わってません。」

返事をくれた由香ちゃんと花火ちゃんは終わったのだろう。

準備室の扉ごしに着替えが終わったか確認したらまだ少し掛かるらしいと返事が来た。

「本当にこれらってもいいの？」

「いいわよ。その代わり麻美にもコンテスト出てもらうわよ。」

「おまたせしました。入ってきていいですよ。」

「「おおお!!」「」

なんだか最近着替えて出てくるたびにこんな反応が待っている。

中学に入っても私服はやっぱりどちらかというと男ものに近い格好をしているので、春に着たドレスワンピースも、浴衣もみんなには刺激が強いのだろう。

ボクから遅れて鈴と麻美もでてくるとそれぞれにもきちんと良い反

応が返ってきた。

「本当に秋先輩のコーディネートはパーフェクトですね。鈴先輩はもちろんです。今日初めて話させてもらった麻美先輩も本当に似合っているっていうのがわかります。」

「ありがと、まあボクからしたら幼馴染でよく知っているから麻美が一番イメージしやすかったんだけどね。」

みんなの浴衣は個性に合わせてコーディネートした。

大胆な性格の花火ちゃんは黄色の記事をつかって花も元気なひまわりをいくつか配置してある。うまく邪魔になりすぎない位置にひまわりも来ていると思う。

大人しい由香ちゃんには濃紺の背景に足元と胸のラインを隠すところだけ白い小さな花が咲いている。

陽気で妹キャラの真奈美ちゃんにはピンクに散りばめるようにした花柄だ。

花柄の場所は当然ラインをうまくごまかしている。

そうそう花火ちゃんと真奈美ちゃんは足がきれいだし、二人とも活発な性格なので丈の短いものにしてある。

しかし、見苦しく出すのではなく、作品として評価されるためにもちろんアレンジは加えてあるので下品ではない。

鈴は結構いい出来だとおもう。

水色の下地に金魚が泳いでいる生地を使ったのだが、これが本当に泳いでいるように作らせてもらった。

作ってみたら一番の傑作になったかもしれない。

まあデザインからの生地の発注なのでそこらへんも自分の思うままだ。

作品としては一番普通かもしれないが、一番似合っているのは麻美

だ。

黒に風鈴の柄なのだが、もうどう見ても大和撫子にしか見えない。時間があつたら髪もアップにしてあげたい。

というかコンテストの時は髪もボクが全部やってしまおう。

「きれいだよ。麻美。」

「ありがと。嬉しいわ。司も似合ってるわよ。」

お〜い。そこで空気を作るな。

まあ気持はわかるけどね。

「どう？男子の方は動きずらくない？」

男子の浴衣は結構シンプルにした。

特に見た目に関してはかくことは無い。

一応イメージカラーがあつたので、竜は濃い緑を混ぜた生地をつかっており、司は水色のラインが縦に入っている。

浩太はあえて無地の灰色にしておいた。

帯も黒なのでこの中では一番シンプルな浴衣になっている。

「ああ、大丈夫だ。」

やっと言葉を発したと思つたら一言かよ。

竜も司みたいに「きれいだよ。」とか言ってくれたらいいのに。

まあ標準語になってたから、ボクらの浴衣に圧倒されてるんだろう。

「大丈夫よ。竜くんの目はメグを見て止まっていたから。」

鈴に耳打ちされてしまった。ボクってそんなにわかりやすいかな？

竜のことをとやかく言えないな。

「女神様の浴衣は何度みても素敵だな。今日はカメラも持ってきたし、思う存分撮らせてもらおう。」

美術部の浩太には先に一度みせているので回復は早い。

それでもさつき感嘆の声を上げていた気がするが、それで嫌な気分になるわけじゃないので、まあいいだろう。

「ねえ、秋い。浴衣って本当はもつと着るの大変なんですよ？」

「そうよ。でも、これなら私たちも簡単に着られるでしょ？脱ぐのも楽だし、ちゃんと紐さえ結んでおけば着崩れすることもないはずよ。」

「ほんとメグの作品には驚かせられるわ。でもこれって体の構造とか計算してるんでしょ？商品化したら確実に売れるわよ？」

「そうでもないよ。今回は生地が特別だったからねえ。それに商品化するには大量発注に対応しなきゃいけないけど、完全オーダーメイドじゃないと意味がないからねえ。」

「一応多少の成長は考慮してあるけど、みんな成長期だから来年着れないかもしれないよ。」

「うーん。それでも売れると思うんだけどなあ。まあ、メグがやりたくないならいいわ。」

「おこずかい稼ぎ程度にはなるかもね。でも今回はこの浴衣を売ってお金を作るんじゃないわ。コンテストで賞金をもらうのが目的だからね。」

「ああ、そうやったな。ほんで俺らはどんな部門にでたらえんや？」

色々と話している間に竜も回復したらしい。

「みんな良く聞いてね。それぞれ各部門の特別賞を目指してもらおうわ。まず、花火ちゃんと真奈美ちゃんには新作賞とインパクト部門を取ってもらうためにそのスタイルよ。

結構斬新なスタイルだから普段通りにしていればもらえるはずだけど、デザインの割に動きにくいとか下品だとか思われないように、活発に動けるのに、浴衣の良さを損なわないという動きが必要よ。これも作品を作る時のイメージ練習としてこれ以上のヒントはあげないから二人で相談して考えてみなさい。」

「わかりました。花火ちゃんがんばろ。」

「むっちゃむずかしくないっすか？女神先輩の理想はたかいつすね。」

「そんなことないわ。二人ならできるからこの浴衣を作ったのよ。さあ、あんまりヒントをあげちゃうとダメだからここまでね。」

「了解っす。」

「由香ちゃんには、鈴と相談しながらお嬢様部門をとってもらおうわ。鈴は総合の方で上位に入ってもらおう予定だから特に注意することもないんだけど、どちらかが総合の上位にはいってお嬢様部門をどちらかが受賞してね。」

「お嬢様ですか？そんなこと言われても・・・」

「さつきも真奈美ちゃんたちに言ったでしょ？できると思うからこの浴衣をプレゼントしたの。」

浴衣をどのように生かすかは由香ちゃん次第よ。」

「ホントにメグには負けるわ。さあ、由香ちゃんも考えてみましょう。私もこの前まで浩太にお嬢様育ちと間違えられてたくらいだから、少しはアドバイスできるとおもっわ。」

「はい。秋先輩の期待に応えられるように頑張ってみます。」

引っ込み思案の由香ちゃんもこれで進歩してくれるといいな。

もし部門賞をとれなくてもきつと自分を磨くいい機会になるだろう。

「私たちはどうしたらいいの？」

「ああ、麻美は一応部員じゃないからそこまで気負う必要ないよ。どうせそのままで総合の上位はボクと鈴と麻美でとれちゃうからね。ただ、一つだけ部門賞をお願いするならベストカップル賞かな。

これも優勝と副賞があるからボクと竜と司と麻美で取れたらベストだけど、とれなくっても問題ないしね。」

「協力するって約束したんだから最後までするわよ。でも秋ちゃんすごい自信ね。それもまた前世の記憶とかいうのが関係してるの？」

「前世かどうかはわからないけど、予感的なものはあるね。麻美は可愛いから大丈夫だよ。」

「なあ、さつきから聞いてると僕らは該当部門がない気がするんだ

が男子の部とかもあるんだよな?」

「ないわよ。コンテスト当日にある祭りで着ていく用だもの。」

「ええ?じゃあカップル部門の無い僕は本当に着るだけなのか?」

「ふふ、冗談よ。男子の部門も小さいけどあつて優勝と副賞は竜と司にとつてもらつて、浩太には伝統部門をお願いしようと思つてそのシンプルなデザインなんだから。」

まあ男子は基本同じような浴衣の人が出場することが多いから浴衣よりも顔ばつかりだからあきらめなさい。」

「女神様・・・何気にひどいぜ。」

「とりあえず、古風な顔立ちしてるのに、趣味のゲームの世界が全面に出てるからそれを抑えてね。」

浩太の部門賞は确实だと思つてるから安心していいわよ。」

「ちゃんとフォローされたはずなのに喜べないのはなぜだろう。」

「あら?フォローなんてする気無いわよ?」

「がーん!」

「ねえねえ。秋い。さりげなく僕ら二人のハードルめちゃくちゃ高くないい?」

「二人はボクの心友でしょ?これくらい乗り越えられない心友を持つた記憶はないよ。」

「ほんまむちやくちややな。まあこの浴衣があればなんとかなりそうなきはするねんけどな。」

この色つて俺らの心友の証と同じ色だろ？」

「心友の証？そんなのあったの？」

「麻美は知らないよね。小学校の時に三人で買って交換したリストバンドがあるんだ。」

その色が、司は水色で竜が緑、最後にボクがこの浴衣と同じ赤なんだよ。それにしても竜、良く気づいたね。」

「大事な思い出だからな。結局三人ともあんまり使わないで取ってるんだぜ？」

ちようどいいし合宿の時はつけてくか？」

「いいなあ。私も心友の証ほしいな。昔は理解できなかったけど、今なら心友って気持ちわかるもん。」

きつと、浩太くんや鈴ちゃんだつてわかつてくれると思うよ。」

「そうだね。じゃあ今度は浴衣の色に合わせてリストバンド買っちゃおうか？」

麻美は黒でいいけど、水色は被っちゃうから鈴は青で浩太は灰色ね。」

「いいねえ。昔だったら秋の方からみんなに迷惑かけないように距離をおいてたのにい。」

この前の宝探しのおかげかなあ？」

「そうかも、この六人なら大丈夫って安心感が今ではあるわ。例えどんなに離れても心はつながってるって言うのかな？」

「女神様・・・僕なんか感動した。」

そう言つて浩太は泣きだしてしまった。

美術室の少し離れた場所で相談をしていた真奈美ちゃんと花火ちゃんは驚いたようにしてこちらを見、

鈴と由香ちゃんはどうしたのかと寄つて来た。

「へえ。メグがそんなことを、良いわね。私も賛成よ。心友に是非入れてもらうわ。」

絶対にお互いに競い合うようなライバルになつても心は繋がったままか。メグらしいくつて素敵ね。」

そのあとボクは着つけた記念にと写真撮影をした。浩太の目はまだちよつと赤かったけど、基本男子三人はカメラを構える方だったので大丈夫だろう。

ベストカップル部門にでるからということボクと竜・麻美と司のペアでの写真も撮っておいた。

アルバムには浴衣姿のみんなの笑顔が残った。

「武兄ちゃんありがとうね。」

今日は合宿当日だ。

電車で行ってもよかったのだが、中学生だけで行くのはダメだとお父さんが言うので合宿は武兄ちゃんも一緒に参加することになり、どうせならと車を出してもらった。

大きなバンタイプの車なので荷物と鈴・麻美・浩太・竜・司と運転手も入れて7人も乗っているがなんとか問題ない。

真奈美ちゃんたちは現地集合だが、駅からは武兄ちゃんが往復してくれるのでそれでも楽はできる。

「荷物降ろしたらボクと武兄ちゃんは真奈美ちゃんたちを迎えに行くから先に部屋にはいつてて。」

「うん。わかったよお。武ちゃんありがとねえ。」

司や竜は武兄ちゃんの車には結構乗り慣れている。

免許取り立ては怖かったものの、一ヶ月もすれば慣れてきたようだったので、ボクらは武兄ちゃんを足に使って遊びに行くことは良くある。

「メグのお兄さんってすごいかっこいいのね。なんか、日本の男の人って感じがいいわ。」

鈴の趣味がわかった。

武兄ちゃんはお父さんに見た目はよく似ているので結構古風だ。

浩太も顔立ちは古風なのでこういう顔がすきなんだろう。

「ふん。」

お、浩太の機嫌が悪いぞ。

最近がんばっている鈴の効果がやっと現われてきたらしい。

「なぜ、女子と男子が別の部屋なんだ。これでは女神様の寝顔がみれないではないか。」

・・・

それでもないかな。

ごめんね。鈴、ボクがんばるよ。

浩太と鈴のためにも竜との関係をもう少し親密にしないといけないことを確認すると、ボクらは真奈美ちゃんたちを迎えに駅へと向かった。

「おはようございます。」

元気にあいさつしてきたのは真奈美ちゃんだ。

あれ？いつもなら花火ちゃんも元気にあいさつしてくれるはずなのだが・・・

武兄ちゃんを見て花火ちゃんは真赤になっていた。

「おはよう。大学生が中学生に混じってしまつてごめんね。」

「い、いえ。そ、そんなことはありません。な、仲良くしてくださいちゃい。」

どもりまくりの噛みまくりだが、花火ちゃんなりに頑張つたようだ。

「よろしくね。さあ乗ってくれ。妹の後輩をこんな熱いところに長くいさせるわけにはいかないからね。」

「は、はい。失礼します。」

こんどはちょっとでもったけど、上手く言えたようだ。

「三人とも忘れ物はないわね？浴衣とかは全部もう部屋にいれてあるはずだから行きましょ。」

「「はい。」」

今度は三人で答えてくれた。
後輩って可愛いな。

「秋先輩、言われたとおりには水着も持ってきたのですが、海が近い旅館なんですか？」

「そうだよ。この時期だからちょっと値が張るけど、良いとことだから安心して。」

「楽しみです。」

そんなこんなでボクたちの合宿は始まった。
色々不安は残るが、楽しい合宿になるといいな。

チャプター21（後書き）

長らくお待たせいたしました。ようやく夏合宿の開始です。

実はまた二話ほど番外編を挟もうかとも思ったのですが、合宿編を一話完結にしないという荒業で番外編を吸収してしまうことにしました。

今後もイベント等を何話かに分割することがあると思います。

作者は短くまとめるのが苦手なようです。正直、もうそろそろ高校編に飛ばしちゃうかとも考えていますが、きちんと中学編を今のところは書いております。

それでも残った構想は番外編にて発表しようと思います。

さてさて、今回のテーマは“新しい関係”です。今まで司と竜依存に近かった秋ちゃんは心友の証を渡す決心をします。さらに、竜との関係も変えることを作中でほめかしていますね。今後の二人の展開にAKIはドキドキワクワクです。だってこの話を書いている時点では告白の構想は何もできていませんから。

現在執筆が進み、33話まで書いております。しかし、その間に付き合いだしたか等は今はひ・み・つです。

ごめんなさい、ごめんなさい。言いたかっただけです。

それではキャプチャー21をご覧いただきありがとうございました。

チャプター22（前書き）

ご都合主義全開でまいります。

チャプター22

合宿始動

「まず始めにみんなにボクからの注意点があるから聞いてちょうだい。」

武兄ちゃんの車が着き、旅館に全員が着くと、大部屋にみんなを集めてミーティングを開始した。

一応着替えなどもあるのもう一つ部屋を借りたが、どうせ夜中までみんなで遊んで過ごすので物置代わりとコンテストのために借りたような部屋だ。

「これは、あくまでクラブの活動の一環なので羽目を外し過ぎないように、特に男子は浪漫に走って女湯を覗こうなんてしたら明日はないものと思いなさい。」

「ちよま、なんで俺だけ睨むねん。この中で一番やりそうなのは浩太やる。」

「僕は壁をよじ登るほど体力がないからってことじゃない？」

「正解よ。司は麻美がいるから安心だから唯一覗きができる竜と武兄ちゃんが心配ね。二人とも絶対にしないでね。」

「了解。」

「次に、今回の合宿はコンテストの参加と創作のための見聞を広めることが目的よ。」

普段とは違う場所でこんなものが作りたいとか、この風景を残したい、など思いついたら忘れられないように各自しっかりメモを取りなさい。」

「……はあい。」

部員たちからは良い返事が返ってきたので安心だ。

「じゃあ、あとは部員として恥ずかしい行動をとらなければ基本は自由よ。」

今日はコンテストがあるので海はいけなから近くの町並みを見たりしてコンテストの準備を考えて5時にはこの旅館に帰ってくるよ。」

解散。」

「わーい。」

創作の題材探しなどと言っているが、メモを持っている以外はほとんど旅行に来たのと変わらない。

ボクは下手に街にでると面倒が起るので、部屋で作業の予定だ。

「秋、どうせえ、自分は部屋にいるつもりなんでしょあ？僕たちもこのころうかあ？」

「いいよ。司と麻美はせっかくなんだからデートしておいでよ。」

部員たちは残りたいって言っても行かせるけど、竜はどうする？」

「うーん。司らについて行ったら邪魔になるだけやしな。武ちゃん

どっか一緒にいかへん？」

「俺はさつき花火ちゃん達に誘われたから一年生の子たち三人についていくよ。」

「そっか。ほな、俺もここでのんびりしとるわ。いってらっしゃい。」

こうしてボクと竜を残してみんなは街へと出て行った。

一年生集団はお兄ちゃんに色々な昔の話を尋ねるだろう。

先手を打ってお兄ちゃんには恥ずかしい過去を言ったら涙巻き弁当を友人の分まで用意することを伝えてあるので問題ない。

浩太と麻美は美術部の部員なのでお店などを回ったりしていることだろう。

この旅館の近くは民芸品などの店が多いのと自然が豊かなので遊んでいるだけで創作のヒントなどが見つかるだろう。

司と麻美はどうせラブラブだ。

「竜、暇でしょ？」

「ん？そっただけど、何か手伝ってほしいのか？」

「うん、もう一つの部屋に一緒に行って荷物を運んでほしいの。」

「いいぜ、今度は何を作るんだ？」

話しながら立ち上がり、もう一つ取ってある部屋へと向かった。

「浴衣に合わせて髪飾りなんかをね。といつても当日作ってたら間に合わないからほとんどできてきているんだけど。」

「すげえな。これだと全身が秋の作品を展示するショーウィンドウになってまうな。」

「まあね。美術部って言ってるけど、芸術作品ならオールオツケーな部だから、こういうのもあるってのを見せる意味でもいい機会だからね。」

「なるほどな、でもその髪飾りとかもあげちゃうんやろ?」

「もちろんタダではあげないわよ。エントリー者の情報はつかんだから、入賞したらあげるってみんなには伝えるつもりよ。」

「お金で賞を買おうとした人は全部事前に潰しておいたから、今回のエントリー者はたいしたことない人が集まってくれたのよ。」

「自信もついて、お金ももらえて、みんなへの思い出をプレゼントできて本当に助かったわ。」

「部長やっとするんやな。俺らはまだ先輩らおるからついてっとするだけやわ。」

「夏の大会終わったら先輩たち引退でしょ?この合宿終わったらすぐじゃない。」

「せやな。でもキャプテンとか俺のキャラにあわへんから誰かにやってもらうつつもりやねんけどな。」

話している間に部屋についたので、まとめておいた箱と作業用の道具をもって先ほどの部屋に戻る。

「竜ならできると思うよ。これで結構頼りになるところあるしね。」

「キャプテンになったら忙しくなるから秋の側におれへんやん。俺がおらんとまた不幸少女になってまうぞ?」

「うーん。それは困るかも。じゃあさ、高校生になって同じ高校に通うようになったらキャプテンになってよ。」

ボクがマネージャーしてあげるからさ。

キャプテンとマネージャーなら一緒にいれるでしょ?」

「それならええな。秋はどこ受けるつもりなん?正直どこでも行けるやろ?」

「前ほど不幸少女に抵抗はなくなったとは言っても、目立って不特定多数の人と関わりをもつのはやっぱり嫌だから、そこそこの高校に行くつもりよ。」

「T高なんてどう?竜なら十分いけると思うし、特待生制度があるから、がんばればお金かからないわよ。」

「T高か、妥当なところやな。海良からも近いで、電車とかに乗らんですむし、ええと思うわ。」

「その代わりしっかり勉強もクラブも頑張りなさいよ。どっちの手を抜いても竜はもったいないんだから。」

「まあ、特待生は無理でも準特待生くらいにはがんばれば、なれそつやもんな。」

「そうね。受験のシーズンになったら今度は勉強合宿ね、でもごめ

「んだけど主席はボクがなるよ。」

「じゃあないやろ。前世の記憶やつけ？」

「この前大学受験の試験問題が満点やったってことは、前世はすつげえ頭良かったんやな。」

「それなんだけどさ。まだ確証はないけど、変なのよね。」

ガラガラ

部屋に着いたので作業を始めながら話す。

デザインを考えたりする時は無理だが、今はデザインの通り作るだけの流れ作業なので問題ない。

「変つて？前世の記憶がある人つてオカルトの世界ではあるけど、おるんやろ？」

「ボクも感覚がやけに研ぎ澄まされてからは一応調べてみたのよ。やっぱり原因は二回の臨死体験だったみたいで、小学六年生の時の大会もひよつとしたらあれで一気に強くなってしまったのかもしれないのよね。」

「臨死体験したことで前世の記憶がもどって今までより強くなつてたってことか？」

「それなら納得いくやん。」

力を隠しとつたって言うても全国大会でしかもトップ選手を圧倒ほど強くはなかった気がしとつたんで、それが浩太を助けて溺れてから一気に強くなって完全に置いてかれたもんな。」

「ボクもあの時は浩太を助けて溺れたのがちよつと悔しくて、

がんばったからだろうっておもってたんだけど、二回目以降は本当におかしかったもん。」

「せやな。あんとき結構大きくなげがしたはずなのに、すぐに治るし、前よりもごつつレベルあがってたわ。」

「まあ、臨死体験で前世の記憶が覚醒したのは間違いないんだけど、気になるのはそのことじゃないのよ。」

「なんかあるんか？」

「他の人の体験談とかを調べてみたら、前世で出会った人ともう一度出会うなんて滅多にないことみたいなのよ。」

「え？秋って結構おらへんかったっけ？」

「そうよ。普通の輪廻転生の考え方の場合、本当にさばくの中から針を見つけるような感覚はずなのに、今ボクが、仲がいい人はみんな前世で仲が良かったとか分かるのよね。」

「お前、それって全然ちゃうやん。秋の関係者なんて両手で数えられへんぞ？」

「そうなのよ。竜とか司とか家族とかさ。それでさ、仮定を立ててみなの、

“男として生まれてきたボクが、あまりにもすごい事件を起こしてしまい。

神様はタイムマシンで過去にもどってボクを女の子に生まれなおさせた。

その時に何かの不都合で男として生まれていた時の記憶が一部残ってしまった。”

「どう？これなら結構すんなり納得できない？」

「うーん。それやと頭はともかくとして運動とかはどうなっとなのや？あきらかに人のレベルを超えとんで？」

「人を人外みたいに言わないですよ。でも、確かにそうなのよね。」

もしかしたらそれが原因でもう一度赤ちゃんからやり直して、男よりも筋肉の発達しにくい女の子に生まれ変わらせたのかも。」

「秋ってホンマは筋肉無いやろ？」

柔道と一緒に稽古してる時から変やおもてたけど、腕つかんでも柔らかいのに投げ飛ばされとったからな。」

「柔道は力のスポーツじゃないから関係ないわよ。」

でも筋肉関係がないってのは本当かも、前から気になってたんだけど、ボクってやっぱり変なのかな？

自分じゃわからなんだよね。」

「ちょっと触ってもいい？」

「えええ？なんか微妙だぞ？まあ確かめるためだから仕方ないけど。」

「そんな動揺しないの。あとでボクの筋肉も確認してくれる？」

自分の判断だけだとおかしいことに気づけないかもしれないから。」

そういつてボクは作業の手を休めた。ボクは自分が変なのは前から知っていた。

今日は竜とその秘密を共有したくてわざとこんな話を振ったのだ。

ペタペタ・モミモミ

「うーん。ボクより断然硬いね。ボクの場合だとこれだけ筋肉があれば、

100M走でオリンピックで金メダルとれちゃうかも。」

「そんなわけないだろ。ただの中学生が金メダリストなんて普通はねえよ。」

「もう、そんなに緊張しないでよ。言葉が完全に標準語になってるよ。」

「無茶言うな。いきなり体をペタペタ触られて緊張しないわけがないだろ。」

「まあ緊張してもいいから触ってよ。やっぱり竜の意見も聞いておきたいからさ。」

竜にあんなことを言ってもボクだって緊張する。しかも結構強引に触ることを認めさせてしまった。

「後でフルコンボとか言うなよ。」

竜も覚悟をきめたのだろう。腕を触りだした。

一番無難で問題がない個所を選んだ結果だろう。

「人体で一番大きくて分かりやすい筋肉は足だから、足にしてよ。」

ちよつと大胆かもしれないが、理由もきちんとあるので触ってくれるだろう。

「うえ。それはちよつと、まずくないか？」

「誰もいないんだから大丈夫よ。あくまでボクのおかしい体の構造を調べるんだから変なことはしないでよ。」

「わかったよ。」

竜もしぶしぶ頷くと、足を触りだした。

自分の足と比べながらじつくり見ていく。

「力入れてみる。」

指示までだしたということは真剣に調べてくれているのだろう。ボクが足に力を入れるとまた同じようにボク筋肉を握ったり自分のと比べたりしている。

「なんとなくわかったかも。」

「ほんと？どうだったの？」

「結論からいうとたぶん秋は筋肉の性質が違っただけで筋肉はあるんだと思うぞ。」

「どつゆつこと?」

「筋肉の構造とか成長の仕方って秋はしってるか?」

ここでボクはありつたけの筋肉の知識を教えた。

横紋筋と平滑筋の違いから、筋繊維の成長の仕方や骨格筋の構造までかなり詳しく説明すると竜は理解してくれたようだ。

「じゃあ、秋には筋肉はあらへんわ。」

「は? さっきあるっていったよね?」

「ああ、すまん。秋にはそれらの普通の筋肉はあらへんわ。」

俺らは筋肉を発達させるには筋繊維を傷つけて修復して太くなると力が増えるんやろ?」

「ええ、太ければいいというわけではないけど、おおむねそんな感じね。」

「秋の体には、その太くなった筋肉と同じくらい強い力を持った細かい筋肉のようなものはいっとるみたいやな。」

俺らの筋肉が紙でできた筋肉としたら秋の筋肉は鋼でできた筋肉みたいなものや。

素材が違うってことやろな。」

鋼とか、紙とか言われるほど違いがあるのか。

でもこれで一つ謎が解けた。

これで目的の一つは達成できたな。

その時、

ガラガラ

・・・

「失礼しました。」

「待て、あれはどついついことだ？」

・・・

もう一つの目的もこれで完成だ。

「今の浩太と鈴だったよな？」

「うん。」

「どつするん？」

「正直に言うよ。“竜に体のあちこちをなめるように触られてた”
つてさ。」

「んなあほな。」

ま、そついついこと。

竜に体を触らせたのはこの現場を浩太と鈴に見せるためでもあった。

集合時間まで、まだずいぶん時間があるので竜は油断していたが、鈴と浩太は竜が残ると決める前に外に出て行っておりボクは事前に部屋に残ることを言っていたので、様子を見に来たのだ。ついでにお昼でも一緒にと二人は考えていただろうが、もう外に出てさっきの状況を二人で話しているに違いない。

お昼は二人で食べてくることだろう。

「なあ？まぢがいなく勘違いされとらへん？」

「いいんじゃない？これで浩太の私鬣肩が減るならもうけものだし、しばらく勘違いしておいてもらおうか。

でも鈴にまで隠すと竜が追及されたらバレちゃうから鈴には伝えておくね。」

「うーん。なんかうまくいって使われた気がするが、浩太のためなら仕方がないか。」

「そゆこと、浩太もそろそろボク以外の三次元の世界に興味を持ってもらわないとね。」

このあとお昼を食べ終わった鈴と浩太は先ほどのことをきちんと確認するべく部屋に戻って来た。

浩太には分からないように鈴に事情を説明すると、

「鈴、女神様はどうなっていたんだ？」

「私の予想通りだったわ。
仲がいいのは分かるけど、昼間からしかもみんなが泊まる部屋であんなことしないように言っておいたわ。」

と言って嘘はつかずに勘違いをさせておいてくれた。

ボクや竜からではなく鈴からの言葉だったので、浩太もボクらが付き合っていると信じてしまったようだ。

「これより第22回宮海浴衣コンテストを開催いたします!!」
会場は開会のあいさつとともに熱気に包まれた。

コンテストの方法はいたって単純だ。

一人ずつ浴衣を着て観客席中央に設置された舞台を通り、審査員の前を通過し舞台袖に一回もどる。

その時に浴衣と立ち居振る舞いを見られて審査員の判断で20名予選通過を決められる。

そのあとは、ひとりずつマイクの前で自分の浴衣のアピールをし、予選通過者の中から各部門の優秀賞と総合の三位までが選ばれておしまいだ。

結果発表までの時間を使って参加者の少ない男子の部を挟み、最後にカップルイベントが行われる。

カップルの場合は先ほど一人で歩いたところを二人で歩き、アピールの時も二人で行うのだ。

毎年男子と女子の部門の入賞者がカップルイベントにできればほぼ入賞は決まっているらしく、

カップルイベントは盛り上げるためにあるらしい。

「それでは、美女たちの登場です。今年もたくさん夏の花達が集まっております。」

司会の声と同時に審査のスタート。

ボクたちは舞台袖で会場の雰囲気には耳をそばだてていた。

全部で200以上の参加者がおり、かなり大規模のコンテストなので、それなりの反応があるようだ。

ボクらの先陣はインパクト部門を目指している真奈美ちゃんだ。

「「おおお」」

「これは斬新なデザインの浴衣美女が登場しました。ピンクの浴衣の可愛いらしい少女に会場の熱気も再加熱か??」

司会が良いコメントを付け加えているということは人気も上々なのだろう。

二人ほど人をあけて花火ちゃんの出番だ。

「おお、先ほどのピンクの浴衣に勝るとも劣らないデザインですね。これは手作りでしょう。これは新作賞の最有力候補の登場か?」

司会の人は良い目をしているようだ。

今までにないデザインを的確に言いであてる、これなら審査員の信頼性もかなりのものだろう。

新作賞とインパクト賞は花火ちゃんと真奈美ちゃんがもらったね。

控え室などでかなりインパクトのある浴衣を着ている子もいたが、二人の歩き方は印象に残りはするが、下品なものにはなっておらず、審査員たちの評価は高いだろう。

「落ち着いていけば大丈夫よ。歩き方も一生懸命練習したでしょ？
由香ちゃんのことをみんなに見てもらいましょ。」

鈴が由香ちゃんにエールを送っている。

引っ込み思案の由香ちゃんは今も緊張でガチガチだ。

鈴ががんばって励ましているのでボクも何か言っておあげよう。

「由香ちゃん。ボクは由香ちゃんなら大丈夫だと思ってこの浴衣や髪飾りを選んだんだよ。」

由香ちゃんが緊張する気持ちも分かるけど、自分に自信がないならボクのことを信じてくれないかな？

ボクが作った浴衣なんだから、大丈夫だってそんな風に考えてくれない？」

由香ちゃんはボクの顔を見ると、今まで震えていた手もしっかりと落ち着き、うなずいてくれた。

「はい。自分に自信はないけど秋先輩のことは信じています。そうですよ。私が気負う必要無かったんですね。先輩の浴衣をみなさんに認めてもらってきます。」

うん。

ちよっと言い過ぎちゃったかな？

由香ちゃんの部門は総合と一緒に狙ってくる人が多いからかなりの

難易度なんだけど、
まあ予戦くらいは通過するからいいか。

「いってらっしゃい。」

笑顔で送り出してあげると、由香ちゃんも緊張が少し和らいだのか、さっきよりも自然な笑顔が出ていた。

「メグ・・・他の二人は大丈夫だろうけど、由香ちゃんは落ちちゃったら結構傷つくと思うわよ？
大丈夫なのあんなこと言ってる？」

「部門賞はわからないけど、予戦は通過すると思うわ、
部門賞は由香ちゃんの頑張りに期待ね。」

「なんかまるで私たちのためにコンテストがあるみたいないかたね。」

「言っただけじゃなかったっけ？裏金とか使って応募してきた人たちにはお願いをして辞退してもらったの。」

「だ・か・ら、ボクらみたいな一般人のためのコンテストよ。」

「大きなコンテストってことは知ってたけど本当にそういうのがあるのね。」

「おっと、そろそろ私の出番だ。行ってくるわね。」

「頑張ってきてね。」

本当に鈴は肝っ玉母ちゃんみたいだ。
由香ちゃんたち後輩の前では緊張してないフリをしていたが、ボクもかなり緊張してしまっているのに。

「秋ちゃん、私の前では弱いところ見せても良いのよ?」

そういつて後ろから肩を抱いてくれたのは麻美だ。

ボクの気持ちを察して声をかけ、触れてくれる優しさに心があったまる。

司、ごめんね。今だけ麻美を貸してね。

「ありがと、落ち着けたよ。麻美ももうすぐ順番だしがんばってきてね。」

「ええ、私は賞をめざしてないから気楽なものよ。」

普通はそれでも人前に出ていくのだから緊張すると思つが、麻美はいつも自然体だ。

司もこのほんわかした雰囲気惚れたんだろうな。

「本当にありがと。楽しんできてね。」

がんばれというのも変だったので、こうして声をかけた。
麻美も頷くと舞台袖近くに向かった。

「おお、漆黒の浴衣をまとった姿はまさに大和撫子!! 今大会の優勝候補のお出ましか?」

浴衣の雰囲気と自然体な微笑みは高得点間違いなしだ。」

相変わらず司会の人は良い目をしている。
これならボク出なくつてもよかったな。
あんまり目立ちたくないのだが部長だし仕方がないか。

「さあ、後半に入って続々と美しい夏の花が出てくるもあと残すところ十名ほどとなりました。

次はエントリーナンバー250番の登場です。」

ある程度間隔をあけて入場してはいるが、
時間の関係で流れ作業に近いそれでも入場のコールとコメントを送っている、司会の人も大変だろうな。

.....

ボクが出ていくと会場が静まり返ってしまった。

「申し訳ありません。司会が見とれてコメントを忘れるなんて、今は会場と気持ちを一つになりました。
一言であらわすなら、完璧です。」

「「おおお!!」」

司会のお兄さんも大変だな。

一人ずつある程度のコメントを述べていたのだが、後半になってボキャブラリーが尽きたのだろう。

ボクは舞台の中央に着くと審査員席の脇まで歩いて舞台袖にはけた。同時に司会の人の次の人の紹介が始まったのだが、本来なら舞台の中央付近でするはずであり、

コメントが思いつかなかったのが進行を遅らせてしまったらしい。

「お疲れ様です。女神様の魅力に会場中が止まってしまいましたね。」

「そこまですごくはないよ。真奈美ちゃんもよく頑張ったね。みんなはどこに?」

「はい、結果発表まで20分ほどの休憩がありますので、控え室の方にいますよ。」

「じゃあみんなと合流しましょうっか? 竜先輩たちはみなくいいんですか?」

「いいわよ。勘違いしたチャラ男しかエントリーしてないみたいだったから予選通過は決定してるようなものよ。」

ボクたちはしばしの休憩のために休憩室へと足を運んだ。

結果からいうならば、全員予選通過だ。

ボクの後に出た女の子たちは結構可愛かったし浴衣も凝ったデザインだったのだが何故か落ちてしまっていた。

「仕方がないわよ。メグを見たあとじゃ審査員の人たちも目が曇ってしまうわ。」

「なんだよ。ボクが何か悪いことしたみたいじゃないか。」

「もう少し秋先輩は自覚をもった方がいいと思うっすよ。」

「花火ちゃんまで、ボクは一生懸命がんばっただけなのに。」

「女神様が本気を出せばコンテスト自体が成り立たないことがわかりました。全ての賞を一人で取れたかもしれませぬね。」

「窓口を広くとるために一人一つって決まってるんだからそんなわけないでしょ。」

「だから成り立たないんですよ。女神様なら大会規定を覆しても不思議じゃないってことです。」

「もう、そんなこと言っていないで、最終審査始まるわよ。みんなコメントはしっかり考えてきたんでしょうね?」

「バッチリです。女神様の素晴らしさを皆さんにしっかりアピールしてきます。」

おいおい。

自分のアピールをしっかりとりにしてくれよ。

自発的行動を促すためにコメントなんかはすべて任せてしまったが大丈夫かな?

「それでは予選通過の人たちの登場です。」

司会者のコールがあったのでみな定位置に向かうべく会場に入場する。

真奈美ちゃんと花火ちゃんは順番が近かったので隣だし、由香ちゃんの隣に鈴一人あけて麻美も近くにいるのでお互いフォローができる状態だ。

一人離れたところにいるボク以外は大丈夫だろう。

「それではエントリーナンバー50番の方アピールをお願いします。」

「はい。」

元気に挨拶をしてマイクの置いてある中央に向かった。

新作部門とインパクト部門を狙うのでまあ悪くはない対応だ。

二人以外の浴衣はオーソドックスな形が多いしこれなら部門賞は大丈夫だろう。

「私たちの着ている浴衣はこのコンテストの出場者の中にいます。」

その人は女神のような容姿で赤い浴衣を着ています。

髪飾りや小物まですべてデザインから起こした新作となっています。

「あちゃあ。」

「一番言っではいけないことを言ってしまったな。」

新作賞を目指すためにオーダーメイドを主張したかったのは分かるが、あれでは新作賞の候補にボクたち六人全員が登ってしまう。

そのあとみな無難なコメントを言ってボクの順番が来てしまった。審査員の質問でボクらが同じ中学から来ていることなどは全部知られてしまったので言うことがない。

「エントリーナンバー250番の秋と言います。頑張って作った浴衣なので、評価していただけたら嬉しいです。」

あまり言葉を飾るよりも良いだろう。
ゆっくりとお辞儀をすると会場から拍手が起こった。
みんなボクの作った浴衣を気に入ってくれたのかな？
中学生ということも加味して温かい反応をくれたのだろう。

「それでは、審査員の方、各部門発表と総合の結果発表をお願いします。」

.....

「ええええん。女神様ごめんなさい。」

今泣いているのは真奈美ちゃんだ。

声は出していないが、由香ちゃんも泣いている。

真奈美ちゃんと由香ちゃんは、予選通過はしたものの、部門賞は取り逃した。

花火ちゃんはインパクト賞を麻美は総合の副賞を、そして鈴が新作賞を取ってしまった。

まあ当然だろう。

鈴の浴衣はボクの中でも傑作だと思うし、流石に全員賞を取ってしまつては審査員側が海良中学と癒着があるのではと考えられてしまうため、わざと避けたところもあつたようだ。

「まあ、自分たちのアピールだけじゃなくて、相手の立場も考えないといけないってことよ。
由香ちゃんも真奈美ちゃんも予選通過はしたんだからメグだつて満足よね？」

「うん。予選を通過したつてことは、純粹に評価した場合美術部のみんなは認められたつてことだからね。

みんな本当によく頑張つたね。

コメントなんかもこれから練習したらいいよ。

学園祭の時はみんなにも頑張つてもらつて予定だからどんな風に作品を伝えたらいいかの勉強になつたでしょ？」

「ヒックツ。秋ゼンバイ。ほんどうにゴベンなさい。」

「もう、由香ちゃんも泣かないの。」

由香ちゃんなりに一生懸命やってくれたんだからボクは怒ってないわよ。

むしろ誇らしいわ。部員がこんなに成長してくれたんだもの。」

「びえええん。」

普段おとなしい由香ちゃんだが、みんなの前で泣くことはない。それだけボクらの前でさらけ出してくれているんだ。

コンテストに参加して本当によかった。

「総合優勝はエントリーナンバー22番竜くんだあ！！」

「男子の方も終わったみたいね。鈴、花火ちゃん、ボクらは行くから由香ちゃんと真奈美ちゃんのことよろしくね。会場の隅で見ててくれると嬉しいかな。」

「はい、二人が落ち着いたら参加者の特別ブースの方に向かますね。」

「浩太にもこっちに来るように伝えておいてちょうだい。」

「了解。麻美、行きましょ。」

男子は連続になるが、特に問題ないだろう。

竜たちと合流すると、竜たちもそれぞれ受賞してきたらしい。コメントなども無難な感じでまとめ、体の大きい竜を見ても中学生だとは気付かれなかったのも良かったかもしれない。

「浩太、鈴たちは、トラブルで受賞できなかった二人が落ち着いたら参加者のブースから観るみたいだから合流しておいて。」

「ああ、しかし本当に女神様の見立ては良く当たるんだな。女の子たちももう少しだったんだがな。」

「ええ、でもいい勉強になったと思うわ。ボクにとっても真奈美ちゃんたちにとってもね。」

「ああ、結果がほぼ決まっているとはいえ頑張ってくれ。」

「ありがとう、じゃあまたね。」

「優秀賞おめでとさん。」

「ありがとう、竜も司もおめでと。」

「ありがとう。麻美も副賞おめでと。次も副賞だろうけど、がんばる。」

「秋ちゃんがいるんじゃないわよね。」

「ベストカップルは司たちがとると思うわよ？ボクらは本当に付き合ってるわけじゃないからオーラがちがうからね。」

「秋ちゃんがそういうなら期待しちゃおうかしら。」

「どっちが取ってもええやん。」

賞金のおかげでタダで旅行できとる俺らにとってはどっちがすごいとか関係ないしな。

どっちもすごいでええやん。」

竜の言葉にちよつとドキドキしてしまった。

本当にその通りだと思つたし、ボクの気持ちを代弁してくれたような、共感してくれたような。

とにかく四人で参加できてよかった。

「ベストカップル賞は〜！！エントリーナンバー43番司くん麻美ちゃんカップルだ！！」

「おめでとう。やっぱり本当に付き合ってるわけじゃないから友達感覚が審査員に伝わっちゃったね。」

「そうだねえ。もし二人が付き合いだしたら勝てなかっただろうねえ。」

「また、勝ち負けなんてどっちでもいいでしょ。秋ちゃんのおかげですごい良い思い出ができたんだから私はそれで満足よ。」

「そうだねえ。写真どうするう？どうせなら鈴ちゃんと浩太にもあげたかつたんだけどねえ。」

受賞者は大会側から記念の写真が届く。

鈴や浩太も各部門で撮ったそれぞれの写真はとどくだろう。

「みんなで集まって撮った方がいいんじゃないかな？

武兄ちゃんに頼んで旅館の前で取ってもらえばいいでしょ？

結構良いカメラ持ってきたみたいだから、プロの人ほどじゃないけ

ど綺麗に撮れると思うわよ。」

「いいねえ。コンテストで疲れちゃったし、旅館に戻るうか。」

「女神せんぱい。こっちつす。」

花火ちゃんの声が聞こえた。

参加していなかった武兄ちゃんとも合流するために集合場所を決めておいたので、これで全員が集まった。

「お疲れ様。」

記念写真とるだろ？ここで撮るか？

それとももつと明るい場所に移動するか？」

「うん。みんな疲れているし、旅館に移動してそこで撮ってもらおうかなコンテストの間も撮っていたんでしょ？フィルム残ってるの？」

「予備のフィルムも持ってきたんだ。」

でも全体写真用にあと6枚しか残ってないから明日のからの分はまた買ってくるよ。」

武兄ちゃんは本当に妹の考えていることをしっかりと理解してくれているみたいだ。

それでもフォルム限界まで撮ってしまったのはきつとシスコンが働いてシャッターを切りすぎたのだろう。

そのあと旅館の前で一年生三人の写真と、部員だけの写真と仲良し

六人組の写真、全体の写真をとつてあとに二枚になつてしまつた。上手に取れなかつたらいけないからと全体のものをもう一枚撮つたところで旅館の前で撮影をしていたのに気付いたのか女将さんが出てきて武兄ちゃんもいれた写真を撮つてもらつた。

「お疲れ様。じゃあみんな着替えて晩御飯とお風呂にしましょ。ご飯は大部屋に運んでもらうように頼んでおいたから女子は着替えたら大部屋に行くわね。」

こうして無事コンテストは終わった。

みんなの中に様々な思い出ができたことだろう。

チャプター22（後書き）

合宿編は元々構想していたわけではなく、作品を書いているうちにこの話を入れた方がと考えたため、執筆が難航しております。

さてそれではテーマを発表します。“どれだけ秋たちの様子を伝えられるか”で書きました。、書きたいことが多すぎてテーマとして伝わりづらいですね、ごめんなさい。

これがAKIの目一杯の表現です。

それではみなさんのご来訪に感謝を、本当にありがとうございました。

チャプター23

旅館の夜はこうして。

「うわあ〜おいしそう。」

「すっごくおい。」

「はいはい、ご飯の前に少しだけ先輩の話聞いてね。じゃあ、まずは浩太と鈴から一言ずつどうぞ。」

「じゃあ、僕から。正直女神様が大丈夫と言われていても、全員が予選突破できたのは、みんなの努力の結果だとも思う。コンテストでの経験をいかして今後の創作にも一層の努力をしてくれ。予選突破と各賞の受賞おめでとう。」

「ヒソヒソ、ザワザワ」

「どうしたんだい？なんでそこで内緒話を？」

「いえ、浩太先輩っていつも私と一緒に女神様の話とかしているの
で……」

「まさかこんな真面目な話をなさると・・・」

「誰ひとり想像してなかったっす。」

「あのねえ。みんなの中で僕はどんなキャラなんだい。」

「二次元オタの秋先輩マニアです。」

由香がそういうと、花火と真奈美もうなずいていた。

「由香ちゃんまで、まあ間違っではないが、きちんとやる時はやっっているんだよ。」

「そうですね。女神様が印象強すぎてあまり意識してなかったですが、浩太先輩って質問したりするととても丁寧に説明してくれまっすね。」

二次元オタと女神様マニアがなければ結構いい先輩かもしれません。

「真奈美ちゃんもそんな風に言わないの。二次元に関しては趣味だけど、メグのことは仕方ないわよ。昔色々あって心から尊敬してるんだから。それに、今は私たち心友だからね。」

「私も聞いたことがあります。あの話って本当だったんですね。」

「そうだよ。僕は女神様に一度命を救われている。そして今は本当の意味で心からの友愛で結ばれているんだ。」

昼間のこともあってか、秋に対する目が柔らかいものに少し変わった気がする。

浩太もこの合宿で成長しているのだ。

「じゃあ、私からも一言ね。浩太も言ってたけど、このコンテストはこれからのみんなにとって本当に良い思い出となると同時に創作の手助けになってくれると思うわ。

メグみたいにこんな風に色々なところから評価されるのは無理でも、自分たちの作品をこれから認めてもらえる機会があると思うの。

目標をもって何かをするという良い例だと思うわ。これから三人も学園祭に向けて自分の作品を作り、みんなに評価してもらいましょう。

「

「はい。」

浩太の時とは違い。

すぐに後輩たちは返事をし頷いた。

「最後にボクだね。浩太と鈴が、ボクが言いたいことはほとんど言ってくれたから重要事項の発表だけするわね。

ボクたち二年生は諸事情によって学園祭からは仮引退とするわ。

一応部長もボクがやって新入生への勧誘もするけど、部活の運営は基本的にみんなに任せるつもりなの。

これは今日のコンテストを見て鈴と浩太に了解を取って決めたの。ほぼ一年早く任せることになるけど、みんなならできると思ったわ。本当に良く成長してくれたわ、お疲れ様。」

「女神先輩……」

秋の話に花火が不安そうな声を上げる。
他の二人もそれぞれ顔を見合せている。

「まだ学園祭まで時間はあるわ。」

さあ、今日はご飯にしましょ。みんなもお腹ががすいたでしょ。」

「鈴の言う通りね。いただきます。」

「「いただきます。」」

それぞれが心に残る想いはあるが、今はご飯を楽しんでいる。
コンテストの達成感。これからの不安。

様々なものがあるだろうが、おいしい料理と皆の雰囲気それをすべて良い方向に気持を持って行ってくれる。

「武兄ちゃん。お酒はダメよ。」

未成年がいるんだし、酔うといつも竜や司にまで飲ませようとするんだから。」

「ええ？俺はもう未成年じゃないんだからいいじゃないか？」

「明日の晩は少しくらいなら出してあげるから今日は我慢してね。」

「仕方ないな。こんなに料理がおいしいんだからお酒もきつとおいしいのに。」

「武満さんはお酒強いんっすか？」

「そうだね。秋よりは強いよ。秋はお猪口一杯で真っ赤になって眠っちゃうからね。」

「女神様にも意外と弱点があるんですね。」

「それって小学生の時のことじゃないの。今はそんなことないわよ。」

「どうだね。家は俺ともう死んじゃったけど、じいちゃん以外はお酒に弱いみたいだから秋も強くはないだろうね。」

「そうなんですか。ふふふ、女神様を落とす時はお酒を準備しておきますね。」

「真奈美ちゃん。まだメグのこと諦めてないのね。浩太はやっと諦めてくれたのに。」

「え？浩太先輩がですか？あれだけ女神様に傾倒していたのに。」

「命の恩人だし今もやっぱり尊敬しているよ。でもさ、心友だからね。心友が幸せになってくれるなら身を引くことも大事なんだよ。」

「今日は浩太先輩どうしたんですか？いつもなら秋先輩にもっと違う感じの接し方なのに、何かあったんですか？」

秋は昼間の話がでてボロが出る前におもむろにリストバンドを三つ取り出した。

「渡すタイミングが思いつかなかったから、今、渡すね。心友の証。鈴は青で、浩太は灰色、麻美は黒でいいよね？」

それぞれみんなのイメージなんだ。
海のように広い心をもつ鈴。影からみんなを支えてくれる浩太。何

物にも染まらないでもすべての色を混ぜるようにみんなのことを考えてくれている麻美。

浴衣の色に合わせたんだけどぴったりだと思っの。」

「ありがと、大事にするよ。」

「メグにそんな風に言われちゃ断れないわね。」

「秋ちゃん。本当にうれしいわ。」

それぞれにリストバンドを渡すと竜、司、秋の三人も自分の手にリストバンドをはめ、微笑みあった。

「先輩たちの親友の証ですか。素敵ですね。」

「私たちも女神様たちのような親友の証作っちゃおうか？」

「うちも賛成。六人みたいに仲良くなりたいな。」

うちらだってまだ出会ったばかりかやけど、これから親友になれたらええと思っし。」

「ボクがみんなに額をプレゼントしたじゃん？」

あれは美術部の仲間になっただって証だよ。」

「それに、たぶんみんな勘違いしとんな。」

俺らの親友とはちゃうんで、心の字を書いた心友やねんで。」

「そうだねえ。」

どんなことがあってもお、たとえ何かを争うライバルになろうとも心の底ではあ、いつも繋がっているそんな心からの友になるう。

その誓いなんだよお。」

「司たちのその気持ちに賛成した私たちは、絶対に心の底では裏切らない。」

そう誓ったのよ。

秋ちゃんは体質の影響で様々な問題があるわ。

でも、そんな時に私たちだけは絶対に裏切らない。

裏切りたくない。そんな気持ちが込められてるの。」

「そんなに大切なものなんですか。」

食事もだいぶ進んでおり、もう終わろうかという頃だったが、後輩たち三人は目に涙を溜めて話を聞いていた。

人伝にしか聞いたことのなかった秋の不幸から守るために心友の誓いを立てた五人、

今までみなに迷惑をかけたくないと距離を置いてきた秋、

秋の中で信頼が生まれ、心友として認めたと、それらの感情が伝わったのだろう。

そこには、お遊びの友情ではなく、絶対の信頼の気持ちと相手を思いやる気持ちが混ざっていた。

「ありがとう。秋は本当にいい友達を持ったんだね。」

武満はそれぞれの顔を見て優しく微笑んだ。

「さあ、もうお腹も十分ふくれただろう。」

お風呂に行っておいで、コンテストに出て疲れてるだろうし今日は早く寝るといいよ。」

武満の声にそれぞれお風呂に行く準備を始めた。

秋たちはどこか満足した様子で、真奈美たちはそれぞれ思うところがあったのか三人で少し話すといつて先に行つてもらった。

「武満さん、うちらも先輩たちみたいになれますか？」

「どうだろうね。秋は本当に特殊だからあんな風には慣れないかも
しれないよ。」

実際に竜くんや司くんは秋が死にかけてるのを助けているし、逆に
浩太くんは秋に助けられている。

そんな命の危険がある状態でも迷わずに心友になりたいと思える鈴
ちゃんや麻美ちゃん。

俺から見ても六人の友情はうらやましいくらいだよ。」

「そうですね。私たちはそんな経験ありません。」

花火とはずっと小さい時から一緒にいますが、そんな経験したこと
がありませんし。」

「ねえ、女神様たちみたいになる必要ないんじゃないかな？」

私たちは私たちなりの心友になって仲間として認めあえばいいとお
もうの。」

「いいこと言うね。」

真奈美ちゃんの言う通りだよ。

俺も大学生になって君たちより経験はつんでいるけど、それぞれの
関係がある。

秋たちのような関係ではなくても本当に信頼する友人だっている。

そうなれたら十分だよ。」

「そっか。女神先輩みたいになれなくても、自分たちなりの友達を

つくっていけばいいんっすね。」

「やっぱりさ。」

親友の証つくろ？」

花火ちゃんや由香ちゃんとは中学からだけど、これから親友になりたいもの。

女神様たちのようでもなくてもいいから、私たちの親友の証を作ってこれから心の方の心友になれるようにがんばりましょ。」

「はい。私も頑張ります。」

「そつと決まったらうちらもお風呂いくか。」

「そうね。女神様の入浴姿を目に焼き付けておかなかつちゃ。」

「真奈美ちゃんってば。」

でも行きましようか。親友の証はこれから三人で話し合って作りましょ。」

「うん、本当にいい仲間に恵まれたね。」

武満のつぶやきは三人にはもう聞こえなかった。

三人は急いで準備をし、旅館の大浴場へと向かった。

脱衣所に着くと、服を着て髪を乾かしている秋の姿があった。

「ええ？女神様もう出ちゃったんですか？」

「ああ、ボクは髪の毛シャンプーだけだし、あまり長く使っているとのぼせちゃうから早く出てきたんだ。」

麻美と鈴はまだ中にいるから大丈夫だよ。三人なりの答えを話したら相談に乗ってくれるよ。」

「私たちの考えは秋先輩にはお見通しなんですね。」

「あの話の後だからね。ボクはみんなに依存して心友になってもらってる感じだから、話を聞くなら二人の方がいいよ。」

きつと三人も良い友達になれるとボクは思うよ。」

そう言い残し秋は脱衣所から出て行った。

真奈美たちが服を脱いで浴室に入ると鈴が待つてくれていた。

「体を洗ったら露店風呂にいるから、長話をするならそっちの方がいいでしょ？」

露店風呂は海水の成分を引いてるらしいから美容にも効果あるらしいしね。」

「女神先輩だけじゃなくて、鈴先輩にも考えをよまれてたんすね。」

じゃあ体洗ったら三人でむかうんでまっけてください。」

「ええ、可愛い後輩の頼みだもの、待つてるわね。」

「本当にあの人たちにはかなわないわね。」

「でも、真奈美ちゃんもすごいと思うよ。私や花火だけならきつと今こんな風には考えてないから。」

やっぱり、真奈美ちゃんともこれから仲良くなりたい。」

「ありがと、先輩たちがゆでダコになっちゃっ前に露店風呂に行きましょ。」

「みんな良い顔になってたな。」

晩御飯の時は涙流していたから失敗したかと思ったけど、ホント良く成長してくれてるわ。」

秋は三人たちの様子を見て安堵したのだろう。のんびりとロビーに向かって歩いていった。

「お、相変わらず秋は早いな。」

女の子はもうちょい体を磨いたりして長風呂するもんとちゃっくんか?」

「竜も短いじゃないの。司や浩太はまだ入ってるの?」

「司は長いでな、浩太は露店風呂の方でなんか鈴と話してたけどすぐ出てくるやる。」

「ああ、なるほどね。」

露店風呂は壁があるだけで繋がってるから後輩たちの話でもしてたんでしょ。」

「今回は合宿によんでくれてありがとな。俺らも楽しませてもらうと

るわ。」

「良いところでしょ。」

前に旅行に来たことがあって、ここならみんなも気にいると思ったのよ。

ふああ。」

竜と話していると秋が眠そうな欠伸を漏らした。

「もう、そんな時間か、相変わらず早寝なんやな。」

小学校の修学旅行じゃ、みんなが起きとんのに一人だけ爆睡してたんやっつてな。」

そいっつて竜はロビーに設置されているソファーに腰をおろした。

秋も隣に座ると眠そうだが答える。

「ボクにも弱点はあるのよ。特に竜たちの前ではそれが出ちゃうんだよね。」

他の子の前では隠せるんだけど、どうも気がゆるんじやっつていうか。」

「ええんとちやう？いつも気がはっとるよりも、俺ら六人の前ではのんびりしとれよ。」

損な体質で普段から休めへんのやから俺らとおる時くらい休んどき。」

「むにゃ、ありがと。」

眠さの限界に来ていたのか、竜と会ったことによって安心してしまったのかわからないが、秋は竜にもたれかかるようにして眠ってし

まった。

「ほんまに寝顔はあのころと変わってへんのやな。」

しばらく、秋の寝顔を眺めていた竜だが、深夜で人がいないとはいえ、風邪をひいてはいけないので、秋を両手で抱えて部屋へと運ぶ。

「軽いな。こんな軽いのにあんな力がでるんやから、今日確かめたとは言え不思議やわ。」

御姫様だっこのまま、大部屋ではなくもう一つの方の部屋に秋を運び、布団をひいてそこに寝かせた後大部屋の方に竜も移動する。

「おかえりい。遅かったけどお、途中で秋とあったのお?」

「おう、話の途中で寝ちまったからもう一つの部屋に寝かせてきた。」

「そうか。武満さんは僕らと入れ替えにお風呂に向かったよ。」

「武ちゃんも長風呂やし、しばらく三人やな。トランプでもしとるか?」

「いいよお。でも心理戦は竜が弱いから運でできるゲームにしよう。」

か。」

「お前らがつよすぎんねんで、一回変えのポーカーにしか。それなら多少運できまるやる。」

浩太が、荷物の中からトランプを取り出そうとしている時に女の子たちが帰って来た。

「ただいまあ。メグは？」

「あいつは、夜は、はよねるんやわ。今はもう一つの部屋で寝とる。」

「昔からそうよね。小学校の学外研修の時から一番に寝ちやう子だったもの。」

「そうなんですか。秋先輩のあの綺麗な肌は十分な睡眠からできているんですね。」

「私、女神様の様子見てきます。」

「見に行くのはいいけどお、カメラは持っていかない方がいいよお。前にい、浩太がカメラを構えた瞬間おきだしてえ、寝ぼけたまま攻撃されて朝まで気絶してたことがあるからねえ。」

司の言葉に、秋の寝顔を激写しようと考えていた真奈美はそつと懐にしまっていたカメラを置くと、それでも秋の寝顔を一目見ようと部屋を出て行った。

「真奈美ちゃんも頑張るわね。トランプするつもりだったの？人数

多いからUNOにしない？」

鈴の意見にみな頷いたので、浩太はUNOを取り出しカードを配った。

しばらく、七人で今日のことについて話しながら遊んでいると、武満が帰って来た。

「みんな元気だね。でもそろそろ中学生は寝る時間だよ。

秋は向こうの部屋で寝ちゃったのかな？部屋の分配とかはどうなってるんだい？」

「本当は人数の関係で男子が向こうで、女子がこっちで寝るはずだったんですが、真奈美ちゃんも帰ってこないし、花火ちゃんと由香ちゃんどっちがいい？」

もうわかってると思うけど、男の子たちはみんな安全だから私たちはどっちでもいいわよ。」

「そうですね。秋先輩と同じ部屋でなければという前提はつきますけど安全ですよね。」

「ちよま、なんで俺の方ばかり見んねん。そんなん言ったら司と麻美のが大変やる。」

「私たちは清らかな関係よ。まあ、寝ている秋を部屋に寝かせたのは竜だから、竜も大丈夫よ。みんなもそんな目で見ないの。」

「真奈美ちゃんがどっちで寝るかで決めたいです。」

「じゃあこっちで寝た方がいいわね。真奈美ちゃんをメグと一緒にの

部屋で寝かせたら朝まで寝れないだろうから。」

「そうね。秋ちゃんの寝顔は慣れている私でさえ破壊力があるもの、真奈美ちゃんじゃ絶対に朝まで寝れないわね。」

あっちの部屋は狭いから逃げ場がないしね。」

「はい、じゃあ先輩たちは向こうで寝てください。真奈美ちゃん分の布団も出しておきますね。」

「麻美ちゃん、行きましようか。」

「うん。じゃあみんなおやすみなさい。」

「「おやすみ。」」

「竜先輩、そんなに秋先輩の寝顔って破壊力あるんですか？」

「せやな、俺と司は小学校の時一緒にホテルの部屋で泊まったことがあんねやけど、あん時は朝まで語り明かしてまったな。」

「そうだったねえ。女の子らしくない秋を始めて意識したのはあの時だったねえ。」

こちらの部屋も話題は尽きずに、寝るのは遅くなりそうだが、武満もいるので適当なところでみなを寝かせるだろう。

「真奈美ちゃんいる？」

「ひゃい。いまふう。」

「鼻血まで出して眺めないでよ。
こっちは私と麻美ちゃんが寝るから、真奈美ちゃんは大部屋で寝なさい。」

その様子じゃ確実に朝まで寝れないわね。」

もう止まっていたのか鼻に詰めていたティッシュを取ると真奈美ちゃんも答えた。

「そうします。さすがに今日はコンテストで疲れてしまったので寝たいです。」

でも夢にまで出てきそうな寝顔ですね。」

「はいはい、よく我慢したわ。」

もし抱きついたり変なことをしようとしたらきつと今頃強制的に眠らされてただろうからね。」

「酷いですよ。」

鈴先輩は私が節度が無い後輩だと思ってるみたいですが、私のは傾倒であって女神様への崇拜があるので、寝込みを襲ったりはしませんよ。」

確かに普段は抱きついたりしてますけど、純粹愛なので無理やりとか意識がない時になんてしませんよ。」

「普段もよけられたりしてるんだから無理やりに近いとは思っけど、まあ考えているのはわかったわ。」

明日は海に行くんだし早く寝るのよ。」

寝不足でメグの周りにいたら確実に危険がまってるんだからしっかりと睡眠は取っておきなさい。」

「はあい。」

真奈美もしばらくは目に焼きついた映像で眠れないだろうが、きちんと睡眠をとるだろう。

部屋に寝ている秋と二人だけになると、鈴と麻美は布団を出して寝る準備を整える。

「本当に可愛い寝顔ね。メグのこの顔をみたら竜くんが惚れるのも当然ね。」

「鈴ちゃんつてさ。秋ちゃんのこと妹みたいに思っているのね。普段はしっかり者の秋ちゃんも時々抜けたところがあるから、鈴ちゃんの側にいると安心できるのね。」

「まあね。部活の時でもなんでも自分でやろうとするとところがあるから。どうしても世話を焼きたくなっちゃうのよ。」

「ふふふ、でも一番世話を焼きたいのは浩太くんなんですよ？」

「あらら、麻美ちゃんにもバレちゃったか。まあ隠すことでもないからいいんだけどね。」

「お互い、心友なんだし呼び捨てにしない？私も鈴って呼ぶから麻美ってよんでくれないかな？」

「そうね。いつまでも他人行儀だったし、私たちもメグの心友の仲間に入ったんだし賛成よ。」

よろしくね。麻美。」

「うん、よろしくね。鈴。」

お互いに呼び合うと自然と笑いが漏れ、秋を起こさないようにと小声ではあるが親しい雰囲気か二人の中に流れた。しばらく二人で笑っていると麻美が先に声を掛けた。

「ねえ。なんで浩太くんなの？」

私たち小学校の時から一緒だから、逆に浩太くんって考えられなくて。」

「ああ、小学校の時は本当に友達も作ろうとしない人間だったみたいね。」

浩太から話は聞いてるわ。

【女神様に救われたのは命だけじゃない。心も救われたんだ】
って浩太は言ってたわ。」

「へえ、それで中学校から変わったんだ。」

確かに勉強はできたから頭は良いんだけど、どうしてもキャラクターが苦手って子多かったんだけどね。」

「今でもすごいキャラクターよ。学校でも帰りの道でいつも馬鹿な話ばかりだからね。」

「あれ？鈴って浩太くんと帰り道違うんじゃないの？」

「たぶん、惚れたのはそれが影響なのよ。美術部って文化部だけど帰りが遅いのよね。」

「ああ、前は早かったみたいだけど、秋が事故して一人で帰れなくなったから遅くなったらしいわね。」

「そうなのよ。メグは竜くんたちが終わるまで一人で待ってるって

言ってたんだけど、
どうせならみんなで部活をしてようって浩太と説得して残ることに
なったんだけど、

「帰りが遅くなりだした時って冬だったから暗くなっちゃったのよね。」

「冬だと運動部に合わせてたら真っ暗よね。私も司と一緒に帰るよ
うになるまでは女の子の友達と一緒にじゃなきゃ怖かったわ。」

「そうなのよ。でも、メグと一緒に暗い時は逆にもっと危ないじ
やない？」

「だから、浩太が送ってくれるようになってね。」

「へえ。あの浩太くんがそんなことするなんて考えつかないわ。」

「普段はあんなんだからね。でも、

【女の子を一人で帰らせるわけにはいかない。確かに俺はケンカは
よわっちいけど、襲われた時に困になるくらいならできる。】
なんて言っちゃってね。」

「かつこ良いのか悪いのか微妙な発言ね。」

「まあね。でも、弱い浩太なりに守ってくれるって言われてその時
はすっごくかつこ良く見えちゃったのよ。」

それから帰りに一緒に話しているうちに惹かれているのがわかつち
やったのよ。」

「素敵ね。司はそういうのは絶対に口にだしてくれないからなあ。
いつもの間延びした声で【大丈夫だよ】って言って終わりよ。」

「まあ司くんも癖がある性格だからね。でも心配りができて素敵な彼氏よね。」

「ありがとう、鈴も恋が実るといいわね。」

「うん、そろそろ寝ましょ。私たちが夜更かししてたら後輩に示し
がつかないわ。」

「ふふ、そうね。おやすみなさい。」

「おやすみなさい。」

チャプター23（後書き）

AKIは浩太みたいな子結構好きです。

竜や司は強くて頼りになる設定ですが、浩太や麻美はケンカとかは全くできないように設定してあります。

鈴は柔道してたので浩太よりも実は強いですが、浩太は鈴をかばってくれるでしょう。

今回のテーマは“心友とは”でお送りしてきました。最初は真奈美ちゃんを使ってコメディにするつもりが、リストバンドを渡したいと考えた瞬間その構想は次回に持ち越すことにしました。

AKIは自分で書いているのに、涙を我慢するとうわけが分からない状況になりながらも一生懸命みんなに伝わるように書いたつもりです。

稚拙な表現で申し訳ないのですが、本当に読んでいただきありがとうございました。

チャプター24

渚のビーナス

「おはようございます。」

「真奈美ちゃんは朝から元気がいいわね。」

「女神様も起きていたんですね。もう一度女神様の寝顔を拝見しようと思いましたが残念です。」

「え？寝顔なんて見られてたの？恥ずかしい。」

「ああ、羞恥心に顔を赤らめている女神様も素敵です。」

「はいはい、変なこと言っていないでご飯にしましょ。昼食は海の家で済ませる予定だけど朝は旅館に頼んでおいたから大部屋に行くわよ。」

「鈴先輩、今日は海に行くんですよね？ということは先輩たちも水着を着るんですよね？」

「そうよ。水着までメグも作る余裕なかったから各自持って来たわよね。」

「はい。ちゃんと準備してきました。」

「ご飯にしましょ。鈴・秋ちゃん行きましょ。」

「あれ？麻美が鈴のことを呼び捨てにしてる？」

「ええ、心友になったからって昨日秋ちゃんが寝たあとに二人でお互いを呼び捨てにしようって話しあったのよ。」

「ずるい。ボクも呼び捨てでいいよ。そういえばボクはいつつも呼び捨てなのに麻美はちゃん付なんだもん。」

「うん。秋ちゃんはずっとこう呼んできたからこれが一番親愛を込めての呼び方なのよ？」

「えへへ。じゃあどっちでもいいや。麻美の好きなように呼んで。」

「ああ、なんか先輩たちすごく仲良しオーラを出してますね。女神様、私たちももっと親密になりましょ。」

そう言つて真奈美ちゃんはボクにすり寄ってきた。

「その女神様ってどうにかならないの？それがなかったらボクも、もうちょつと打ち解けられると思うんだけどな。」

「会員規約ですから。」

「まあ、真奈美ちゃんが決めた規約だからね。秋ちゃんがそういうなら僕も何か考えようかな。“様”って部分がよそよそしいんだろ。うから女神ちゃんならどうだい？」

いきなり声をかけられて四人は入口の方をみる。

「浩太、それに司も？ノックくらいしてよね。仮にも乙女の寝室だよ。」

「その乙女の寝室に入れないからって困っているパジャマを着替えたい後輩たちがいるんだけど？」

「あらら、由香ちゃんたちの着替えもこっちにおきっぱなしだっけ。二人に入るように言っておいて、あと女神ちゃんの方が断然今よりいいよ。」

「了解。」

浩太はおそらくどちらも了解したのだろう。外にいた二人に声をかけると大部屋の方へ司と一緒に向かっていったようだ。

「真奈美ちゃん？これはどういうことかな？」

「えっとですね。女神様にふさわしいような敬称をと考えた時にですわね……」

私もこれから女神先輩って呼びます。それで許してもらえませんか？」

「ふむ。あのまま言い訳を続けていたら分からなかったけど、それで許してあげるわ。」

笑顔で許してあげると真奈美ちゃんは安心した顔になった。ちょっと頬が赤いのはいつものことだ。

「さ、あなたたちも着替えたら大部屋に来てね。すぐに海に行くから下に水着着ておくのよ。」

鈴に促されてボクらは大部屋に、真奈美ちゃんたちは着替えに取り掛かった。

「おはよう。竜たちは寝れた？」

「おはよう、秋。俺たちはしばらく話してたんやけど、武ちゃんに言われて寝たから十分睡眠はとったで。」

「引率ご苦労様。夜はボクも苦手だから助かったよ。」

「おう、明日はちゃんとかつちで寝てくれよ？何も無いとはいえ男女混合の部屋なんて父さんにどう報告したらいいかわからないからな。」

「はい。」

会話をしていると、仲居さんが朝食を持ってきてくれた。昨日の晩とは違い軽めではあるがとてもおいしそうだ。コンテストの賞金が出たので、ボクも結構奮発している。料理の準備が出来上がるちょっと前に真奈美ちゃんたち三人も着替えを終えて来たので、みんな揃ってご飯だ。

「朝からごちそうですね。」

「由香ちゃん。これは女神先輩だからよ。来年はこんな風には絶対にできないから、今のうちに楽しんでおきましょう。」

「そうっすね。女神先輩のコンテスト優勝なしではこんな警沢でないっす。」

「さあ、みんなもそろったんだし食べましょ、いただきます。」

「「いただきます。」」

ボクの掛声とともに食事を開始する。

みんな素直でいい子たちだ。

竜たちも既に着替えてあり、ご飯を食べたらすぐに海に向かえるだろう。

「うわあ。すごい人ですね。まだ夏休み前とはいえ連休はやっぱり混みますね。」

「真奈美ちゃん。パラソル建てるのでつだいなさあい。」

「はあい。」

鈴の声に呼ばれて真奈美ちゃんは荷物を置いておくパラソルの設置に向かった。

麻美や浩太はインドア派なので、おそらくあそこでのんびり過ごす

のだろう。

運動は苦手ではないが、鈴もたぶん浩太と一緒にいるかもしれない。

「秋い。ビーチバレーしようぜえ。武ちゃんが午前中は焼きたいから荷物の番してくれるってさあ。」

あら、そういえば武兄ちゃんがいたんだっけ。
すっかり忘れてたわ。

「武兄ちゃんありがと、午後からは遊び疲れたメンバーがいると思うからゆっくり焼いてね。オイルでも塗ってあげようか？」

「妹に塗ってもらっても微妙だっつの。」

「だったらうちがやるっす。バレーは人数が奇数になるし、午前中はうちもパラソルの側にいることにします。」

おお、花火ちゃんも積極的だね。

まあ、武兄ちゃんの雰囲気みてるよ、完全に子どもの相手をしてい
るお兄さんだけだね。

「じゃあ、チーム作るわよ。実力が均等になるように、

竜・司・鈴・真奈美ちゃんチームと

ボク・浩太・麻美・由香ちゃんチームでいいかな？」

「秋先輩？どこが均等なんですか？」

「いや、たしかに寄りすぎとるな。」

司と浩太を交代して秋はサーブ・スパイクしないってくらいがベ
ストやろ。」

「ええ？スパイク打ちたかったのにい。竜のケチイ。」

「女神先輩と一緒にチームじゃないんですか。」

「まあまあ。真奈美ちゃんも由香ちゃんもお。始めたらこれでもハ
ンディ少ないとおもはずさあ。」

「メグの能力はあり得ないからね。スパイクもサーブも誰もとれな
いからこれは仕方ないわ。」

「大丈夫よ。竜と司ならなんとかなるって。」

「いや、あれは俺にも無理や。コースとタイミングがわかつとれば、
何とかなるかもしれんが、フリわけられたら取れても百球に一回で
良い方やで。」

「またそついうデマを後輩に流す。一回軽く打つてみて決めましょ
うよ。」

「必要ないと思うで？まあそんな言うならあげたるわ。司とり
あえず死ぬなよ。」

「ええ？僕がつけるのお？」

「あほか、他の奴が受けたら午前中お寝んねやろが。」

「仕方がないなあ。じゃあ四割までにしてよあ。」

「オツケー！元々そんな強く打つ気はないわよ。」

その声をかけると、竜がボールを上げてくれる。竜はバレーもいけるかな？

結構打ちやすいところに上げてくれる。」

バシンツ　ゴー　ボンツ

「いったあ。四割って言ったのにい。」

「ごめんごめん。竜が良いところに上げてくれたからついね。」

「えっと？秋先輩？あれで何割くらいなんでしょうか？」

「ん〜と、つい力が入っちゃったから五割くらいかな？」

「五割で十分世界狙えますよ。秋先輩って本当に文武両道なんですね。」

「というよりも女神よね。メグのスペックは神の領域よ。」

「ですよね。女神先輩素敵です。」

「あらら、やっぱりサーブとスパイク無しでいいや。一発撃てたからすつきりしたしね。」

こうしてビーチバレーは始まった。

試合はボクにハンディが付いたことによって結構いい感じで白熱した。

竜たちはみんなで拾って鈴が上げ、バスケットで活かしたジャンプ力と元々の身長でかなり良いスパイクが落とされる。

ボクの方に飛ばさないので結構得点を稼いでいた。

こちらボクがレシーブやトスをあげると司がうまくスパイクを決めたり前に落としていたりしていた。

「ナイススパイク!!」

バシンと司とハイタッチを交わす。

「流石に幼稚園からコンビ組んでるだけあるわね。即席コンビの私たちじゃ、ちと荷が重いわ。」

「そんなことないわよ。確かにあの二人ほどぴったりじゃないけど、竜くんの身長とジャンプ力があるから良い試合になったじゃない。」

「麻美の言う通りだね。ボクがハンディあつたとはいえ、良い試合だったし、楽しかったよ。」

「でも、みんな砂まみれになってまつたな。そして秋はいつになったらシャツ脱ぐんや?」

「ふふふ、シャツを着ている状態でもこれだけ視線が集まっているんだから、メグがシャツ脱いじやつたら一番困るのは竜くんじゃないかしら?」

「鈴つたら。ボクらの集団は可愛い子多いから確かに視線を集めてるけど、ボクが脱いだくらいで変わったりしないよ。」

そうなのだ。ボクはまだシャツを着ている。

最近大きくなつた胸の影響で今まで使つていた水着が着れなくなつたので新しいのを買ったのだが、鈴に強引に進められ結構露出の多い水着なので恥ずかしい。

鈴や麻美はそれぞれツーピースの水着を着ており、麻美は腰のところからパレオをつけた黒のもので、鈴は青にパンツのついたものを、どっちも良く似合っている。

真奈美ちゃんと由香ちゃんはそれぞれ胸にコンプレックスがあるのでワンピースタイプの、真奈美ちゃんはちよつとフリルのついた、由香ちゃんはプリント柄の可愛い水着を着ていた。

「それに、ボクの水着姿なんて微妙だし、みんなみたいに似合っていないから。」

「女神先輩に似合わない水着なんてないですよ。もし似合わなくても、それは女神先輩の責任では絶対ないです。」

「そうよ。秋ちゃんはスタイルもいいんだから、きつと浜辺の男子全員を振り向かせるわ。」

「それは逆に嫌なんだけど、みんながそういうなら。」

そういつてボクは下まで隠すように着ていた大きめのシャツを脱いだ。

なんかみんなの視線がいたい。そんなにジロジロ見ないでほしい。

「似合っていないかな？」

何も言ってもらえないので恥ずかしくなつて尋ねると、一番に鈴が

答えてくれた。

「似合ってるけど、やっぱりシャツは着ておいた方がいいわ。海に入る時だけ脱ぐようにしましょ。」

「ということできさっそく海に入るわよ。あんまり浜辺でぐずぐずしていると人が集まってくるわ。」

「似合ってはいるらしいが、注目を集めるようなデザインらしい。」

赤と白のストライプに犬の足跡がついた可愛い水着なのだが、ちょっと奇抜なデザイン過ぎたらしい。

「秋ちゃん。違うわよ。というか、口に出す癖治らないわね。時々こんな風に恥ずかしがったり、混乱していると口に出てるから。」

「ありや、これでも気をつけてるんだけどね。」

「まあそんなことは良いよお。とにかく海に行こう。海の中に入っちゃえば水で見えないから安心だよお。竜も見とれてないでいくよお?。」

「竜は見とれていたらしい。」

「感情が表に出やすい竜なので、わかりやすい反応をしてくれるので安心する。」

「竜がそんな感じということはそのままで悪くはないだろう。」

「由香ちゃん、真奈美ちゃん。ボールとこのシャツをパラソルのところまで持って行ってってくれる? ネットは武満さんが片付けてくれると思うから。」

「はい。早く女神先輩を安全な海に連れて行ってあげてください。」

安全な海って、真奈美ちゃんは海の怖さを知らないんだな。
結構危険なんだぞ。

「秋、俺から離れるなよ。不幸体質が発動するのも危険だが、今はもっと危険な状態にある。」

竜、標準語になってるよ。そんな焦るほど危険があるなんて。

せかされる形となったが、竜たちと海に入って行った。
冷たい水がバレーで運動してほてった体を癒してくれる。

「気持良い」

「秋ちゃんは泳ぐのも平気よね?」

「人体って元々浮くようにできてるからね。ボクは沈む方が難しい
と思うんだけど。」

「いやいや、普通は泳がなかったら沈むわよ。ってメグってどっ
ちで泳いでるの?」

「ん?今は地面に足がついてるけど?キャッ!」

ザバーン

ボクは何者かに足の下に潜られて、その上に立っていたようだ。

「ちょっと、何するのよ。」

「秋にも泳げない人の気持ちを知って貰おうと思っただけ。」

「そうだよ。浩太を見てごらんよ。あれ以上先は深いから、絶対にいけないんだよ。」

今ボクたちは、浩太と鈴を置いて深い所まで来ている。

浩太は泳げないので浅瀬で鈴に泳ぎの特訓をうけるそうだ。というか鈴に泳げないことがばれて強制的らしい。

「こうしてみると、あの二人って結構うまが合ってるのかもね。」

「そうだねえ。浩太がもう少し歩み寄れば自然と良い雰囲気になると思うよ。」

「なあんだ。結構みんなにばれてるんだね。麻美はいつから知ってるの?」

「私はクラスも違うし、確認を取ったのは昨日の晩よ。鈴の気持ちに気づいたのは宝探しの時ね。お弁当に浩太くん用があったからね。」

「そうやったんや。鈴が浩太を好きやったなんて知らなかったわ。だから、昨日あんなことしたんやな。」

「あのねえ。そうじゃなかったらわざわざあんなところ見せたりしないわよ。」

「竜う?何があったのお?」

こういう質問の時にボクじゃなくて竜に尋ねるあたりは昔からの仲

だけはある。

竜なら隠そうとしてもボロが出るから隠しきれない。観念したボクは二人に事情を説明した。

「へえ。秋ちゃんの体をそんな風に、竜くんも大胆ね。」

「この場合秋が大胆なんだよお。触って欲しいのお。なんて言っ
て竜を誘惑したんだよお。」

「ちよま、きちんと話を聞いてたのか？俺は、秋の体の異常を調べ
るためにだな。」

「はいはい、真っ赤になってるわよ。」

「ついでにい、標準語になる時はあ、動揺してるかあ、嘘について
る時だからあ。」

「あらそうなの。ってことは何を隠してるのかなあ？秋ちゃんの体
をちよつと触ったくらいで浩太くんが誤解するはずないものね。」

「そうなの。ボク汚れてしまったの。」

「まてまて、なんで秋までからかうんだよ。足を触つてるところを
浩太たちに見せて、鈴に誤解するように伝えてもらっただけだろ？」

「怪しいねえ。まだ標準語が抜けてないってことはあ、まだ何か隠
してるねえ。」

「実際のところどうなの？秋ちゃんはどこまで竜くんにされたの？」

「えっと、鋭い目つきで視姦されて、情熱的に揉まれました。」

「ちがあう。違ってないけど違う。」

真剣なのは秋の体が心配だったからだし、揉んだのは足でそれも筋肉をきちんと調べるためだ。」

「あははははは。」

「竜う。そんなことはわかってるんだよお。」

「そうよね。何の意味もなくそんなことしたら、竜くん今頃サメの餌よ。」

「秋ちゃんも、人が悪いわね。」

「だって、竜があんまりにも焦るからおもしろくって。」

「なんやねん。こっちは災難やわ。」

「竜、ありがとね。ボクのことを心配してくれたのが今のですっくわかったよ。」

「あほう。心友なんやから当然やろ。」

「ふふふ、心友って素敵ね。体中をなめまわすように触ったりするんだ。」

「私にはしないでね竜くん。」

「あほか、秋いがゴニョゴニョしない。」

麻美はきつちり最後まで竜をからかうのを忘れないようだ。
ボクも犠牲になったことが何度もあるからこれには勝てない。
竜は真赤になって何かつぶやいている。

「竜いじめも楽しいけど、せつかくの海だし泳ごうよ。
あんまり、竜と離れるとサメとか出てきちゃまずいからボクは竜と
泳ぐけど、麻美と司は自由に泳いでいいのよ?」

「うん。最近はさあ。きちんと自分たちの時間も作れるようにな
ったからあ。」

四人でいる方が楽しい時は四人で遊ぶよあ。」

「司に賛成ね。私も秋ちゃんと一緒にいて楽しいもの。それとも二
人つきりになりたいのかしら?」

「うん。ボクも麻美と司と一緒にいれて楽しい」

みんなといるのがすごく楽しかったボクは麻美と司に笑顔で答えた。
司が竜に何かを言っていたが、どうせまたさつきみたいにボクにい
たずらを考えているだろうから注意しておかないと。

そのあと結局四人でじゃれあいながら遊び。
真奈美ちゃんたちもネットを片づけ終わったらしく合流して竜と司
が空腹を訴えるまで泳いだ。

「久しぶりに、いっぱい泳いだね。うちの中学はプール無いから、
こうでもしないとおよげないから嫌だよ。」

「あら？秋ちゃんの髪の毛、色が変わって見えない？」

「ホントです。女神先輩の髪の毛の色が緑に見えます。」

「ああ、なんか臨死体験したあとから緑色の髪の毛が生え出しちゃってさ。家族と相談して染めてるのよ。海でちょっと落ちちゃったかな？」

「その色も悪くはないんやけど、結構目立つからっておじさんが染めるようにいうてたな。」

「どうするのぉ？黒染めもってきてるう？」

「一応海に入るからって用意はしてきたけどしばらくは良いわよ。どうせ昨日の写真で活動報告は済むんだから、学校に見せるわけでもないから今日の夜にでももう一度染めるわ。」

「でも、秋先輩の色綺麗ですよ。染めるなんてもったいない気がします。」

「うーん。自毛が緑だなんてあんまり自慢できないわよ。」

昔はちよつと茶色が混ざってるだけだったから良いけど、緑だと生徒指導につかまっちゃっわ。」

「秋ちゃんも大変ね。普通に染めるだけならいいけど、生え際が緑なんじゃ市販のものでごまかすしかないものね。」

ボクの場合、プリンになったら染め直すというわけにもいかず、髪を切りに行く時は専門の人にしてもらうこともあるが、どうしても

生え際などの処理のために自分で薬局の黒炭しを使っている。
こうして水につかったりすると時々とれてしまうのは仕方がない。

「おかえり、メグ、その頭どうしたの？」

「いやあ。海藻にまで好かれるみたいでこびりついちゃったのよ。」

「嘘つかないの。鈴、実はね。」

さっきの説明を麻美が、鈴たちにもしてくれる。

元々知っている武兄ちゃんは特に反応はみせないが、初めて聞いた
浩太と鈴と花火ちゃんに驚いていた。

「まあそういうわけだから、しばらく緑の髪の毛よ。気にしないで
ね。」

「それより、早くシャツ着た方が良いみたいやな。髪の毛で目立つ
し、みんなもシャツ着たら海の家行って飯にしようか。」

「俺たちはさつき食べてきたんだ。海で最後まで泳いでいた六人で
行っておいで、浩太ちゃんと鈴ちゃんは引き続き泳ぎの特訓かな？」

「そうね。だいぶ浮くようになってきたから息継ぎさえ覚えたら問
題ないわ。」

「へえ。小学校の先生がいくら教えても泳げなかったのに、鈴って
教師とか向いてるかもね。」

「ああ、鈴の教え方は意外とうまいぞ。今まで泳げなかったのが馬
鹿みたいだ。」

浩太と鈴も中々うまくいってるらしい。

金鎚だった浩太が今は泳げるようになるのが楽しいみたいだ。

「じゃあ、ご飯食べてくるねえ。午前中荷物見ててくれてありがとう。武兄ちゃんと花火ちゃんもボクらが帰ってきたら海行っておいでよ。」

「おう。まあゆっくり食べておいで、お兄ちゃんものんびり待つてるから。」

海の家に向かっていているボクらの後ろで、武兄ちゃんが花火ちゃんに

「一人で大丈夫だし、行っておいでよ。」

なんてことを言っている。

武兄ちゃんの中では完全に子どもなのだろう。

まあロリコンなのは困るが、花火ちゃんの様子に気づいてない鈍感なのもちよつと困りものだ。

「さすがあ、秋の兄妹だねえ。」

「確かにね。あの鈍感さは秋ちゃんとそっくりよ。」

「どつという意味よ。ボクは武兄ちゃんほど鈍感じゃないよ。空気だつて読めるもん。」

「武ちゃんもお。空気は読めるよお。ただし、自分に対する気持ちだけは鈍感になるんだよねえ。」

「う……確かに似てるかも。」

ボクはこれまで何度も告白を受けてきたが、決闘の申し込みか何かと思って竜や司を連れていくことは結構ある。

司などは途中から一緒に来てくれなくなったが、竜は断りやすいだろうと思ってか毎回来てくれて、実際告白を断る時に便利だ。

「焼きそばください。」

海の家で食べる焼きそばってなんでこんなにおいしいんだろう。すごい幸せだ。

「秋ちゃんって本当に幸せそうに食べるわね。」

「竜や司にはまけるけどね。二人の食いつぶりは異常だし。」

「なんでやねん。俺らは成長期なんやからええんや。午前中いっぱい泳いだし、これくらいくったかて太らへんからな。」

「竜は食べた分だけ大きくなったねえ。僕もたべてるけどお竜ほどじゃないよお。」

「武ちゃんの財布もってきたんやろ？おかわりしてええか？」

「いいわよ。ボクは次も焼きそばだなあ。イカ焼きそばお願いしまあす。」

「まだ食べるんですか？竜先輩って体が大きいから食べれるんだとは思ってましたが、すごいですね。」

「女神先輩も竜先輩と同じくらい食べてませんか？それだけ食べても太らないのは竜先輩よりもある意味すごいですね。」

ボクと竜は武兄ちゃんの財布があるので、お腹一杯食べる気満々だ。司もそこそこ食べているが、竜はこれで焼きそば一つとカレーを二杯、次はラーメンを頼むようだ。

「海の家焼きそばだから入るのよ。普段はこんなに食べないわよ。」

「いやいや、秋ちゃんは昔から男の子と同じだけの量食べても太らなかつたわよ。」

「そうだったけ？まあ運動してたからね。」

「焼きそばとラーメンお待ちどうさま。」

「いただきます。」

ボクは合計三皿目となる焼きそばに箸を伸ばした。うーん、美味しい。

「御馳走様。三皿も食べるとおなかいっぱいね。」

「武ちゃんに感謝やな。」

「ホントだねえ。食べ過ぎたしパラソルのところで休憩しようかあ。」

「御馳走様でした。私はそんなに食べてないけど、三人の食べっぷりにお腹がいっぱいよ。」

「私もです。」

女の子三人はそんなに食べなかったが、ボクらの食欲をみて満腹らしい。

つい、昔みたいに竜と司と張り合って食べてしまったのでボクもおなかいっぱいであまり動きたくない。

パラソルの場所で武兄ちゃんと交代した。

「花火はずっと武満さんと一緒に荷物番してたでしょ？午後からは私たちと一緒に行きましょ。武満さんも一緒に遊びましょよ。」

「ああ、ひとりで泳いでもつまらないから、一緒にいかせてもらおうよ。」

完全に保護者の対応だな。

花火ちゃんがんばれ、でも武兄ちゃんにロリコンになってほしくないかな。

複雑だ。

「声にでとるぞ？ほんま俺らとおると油断しまくりやな。」

「いやあ、竜とか司とか麻美と一緒にいると油断しちゃうことがわ

かりましたな。」

「昨日の夜も話しとる途中で寝るんやから。まあ、俺らの前ではええけどな。って昨日も同じこと言ったか。」

「へえ。昨日の夜そんなのがあったんだ。私にも詳しく聞かせてほしいなあ。秋ちゃんのひ・み・つ」

「麻美さん、黒い水着を着ているはずなのにピンク色のオーラが出てますよ。」

「麻美い。ここは根掘り葉掘り聞いたって面白いことは出てこないからあ。二人つきりにしてあげるのがいいよあ。」

「それもそうね。お邪魔虫は退散したほうがいいかしら。」

結局二人にからかわれて過ごしていると、

「痛い。お腹が・・・」

ボクは先ほど食べ過ぎたのか、焼きそばのイカに当たったのか意識を失った。

『やつほあ。秋ちゃん!!』

『え？えええ？霞さん？なんでこんなところに？』

『実は、洋司様の担当地区以外は私が来るようになってるのよ。と
いつても予定ではあまり回数ないんだけどね。』

『そうなんですか。じゃあ今回は記憶を操作して、もどして終わり
ですか？』

『お話をするくらいはできるけど、特に伝えることはないわね。』

『というか、私はずっと洋司様とあなたの動向を見てきたから初対面
じゃないけど、なんであなたは私のことを知ってる雰囲気なの？』

『あ、そっか。霞さんは再転してるから過去の記憶とか無いんです
よね。はじめまして。』

『え？どういうことかしら？秋ちゃんって臨死体験が多いからって
理由で冥界に保護される予定の子よね？』

『あ、そうです。あんまりにも臨死体験がおおいので、冥界の業務
が滞るってことで女の子になりました。』

『おかしいな。洋司さんの話だと、ボクは鬼人になっていくはずだよ
ね？』

『この対応だとまるで一般人を相手しているみたいだ。』

『洋司様から聞いている話だと、通常よりも特殊な体験をするから
保護するようにってことだったんだけど。』

『はい。ボクは現世で最も冥界に近い存在らしいです。今も三度目
の臨死体験を経験してますし、今後36回もこんなことがあると思

うと憂鬱です。』

『え？36回も臨死体験？それはすごいわね。というか、エンマ帳を見てないのに何故そんなことがわかるのかしら？』

『えっと、なんだか洋司さんと話が食い違ってるみたいなのでボクの方から説明できないと思います。』

『そう、でもさっきまでの会話で、何かあるのだけはわかったわ。さてと、ちよつと食当たりしたただだからもう息を吹き返すはずよ。』

そういつて霞さんが取り出したエンマ帳は今まで見たものとは全く違うものだった。

『そのエンマ帳ボクのじゃないですよね？』

『ああ、洋司様がお持ちになっている原本を見たことがあるのね？エンマ帳の原本なんて滅多に持ち出せないから、普段はこうして、大勢のデータをまとめたものを持ち運べるようになってるのよ。』

うん。

確実に何かあるね。

洋司さんはそういえば再転後にボクのエンマ帳を開いたことはない。前ならエンマ帳を覗きながら生きかえるタイミングを確認したりしていたような場面でも出さなかったのは今思うとおかしい。

『わかりました。次に洋司さんに会う時にはボクの方でも確認を入れておきます。』

『えっと、何がどうなってるのかわからないけど、記憶を現世用のものに戻すわね。』

冥界の記憶だけ消して臨死体験の時は戻すなんて私は初めてのことだからちよつと時間がかかるから話はまた今度にしましょ。』

『はい。未緒さんの時にも言われたのでわかってます。』

『ほんとどうなってるのかしら？』

最後まで混乱していたが、流石にエンマの娘だけあって洋司さん程ではないがさほど時間もかからないと言っていた。そしてボクは現世に戻っていく。

「うう。」

「武満さんおきました。救急車大丈夫です。」

「麻美？またボク死にかけてた？」

「そうみたいね。武満さんも砂浜にケータイなんて持ってきてきたからさつき司が旅館に向かつていったんだけど、救急車はいらなかったみたいね。」

「あはは、食当たりで倒れるなんて恥ずかしい。」

「メグ、よかったよお。」

鈴は起き上ったボクに抱きついてきた。

鈴の他にも電話をかけた司とそれを止めにさつき走って行った武兄ちゃん以外全員が心配そうに顔を覗きこんでくる。

「泣かないで、今回はただの食当たりなんだから大丈夫だよ。前なんてバスにひかれたんだからこんなのでボクは死んだりしないよ。」

「バスにひかれて生きてたんすか？女神先輩はすごいっすね。」

比較的落ち着いている花火ちゃんが反応してくれた。

あとのみんなは涙を流していたりとかかなり心配したようだ。

しかし、麻美はこんな時にも笑顔をみせてくれた。

ボクら六人の中で一番事故などに巻き込まれたら危ないかと思っていたが、精神面では一番強いかもしれぬ。

「とにかく秋ちゃんが無事でよかつたわ。でも、倒れたんだから一応旅館に帰りましょ。他のみんなはどうする？」

「ボクが決めても今の状態じゃ説得力ないから浩太と鈴で今後について考えて、とりあえずボクは麻美と竜の三人で旅館にいつてくるよ。」

この状態で竜と離れるのは余計に危険だから。」

「ほんま、心配かけやがって、流石に食当たりまでは俺でも回避できへんわ。」

そういうと、竜はボクを御姫様だっこした。

「ちょっと、みんなが見てるのにこれは恥ずかしいよ。」

「気にすんな。それに昨日の夜も秋が寝てもうたから、こっつして部屋まで運んだんやぞ？」

「余計に気にするよ。恥ずかしい。おろして。」

「あかん。心配かけた罰やで、これぐらい我慢しい。これくらいせえへんと俺も気が落ちつかへんねん。さっきは、なんも対処したれへんかったからな。」

そこまで言われると反論できない。

羞恥心に顔を赤らめながらも、竜の大きな体に抱かれて旅館に向かった。

チャプター24（後書き）

久方ぶりの霞さん登場です。

さて、今回のテーマは“秋の秘密”でした。主人公なのに謎が一番多いのは秋ですよ。ちょっと自分のことには鈍感な秋は実は色々なところでだまされてますよ的なノリです。伝わったでしょうか？霞がそれらの鍵になってくれることでしょう。

本編は秋の幸せをつかむことと、臨死体験に伴って判明する鬼人や冥界の謎の二つのストーリーが混ざっております。どっちも秋に影響を与えるため手を抜くことができません。でも、一つのストーリーにしておけばと後悔もしています。冥界の話は最初の構想のときからあったので仕方ないか……とにかく頑張ってみます。

それでは、今回もありがとうございます。

チャプター25

秋の苦手なもの

旅館でしばらく休憩すると、秋ちゃんは元気がでたみたい。何でもできるし、普段はすごく頼りになるけど、心配もその分大きい。

「みんなごめんね。ボクはもう元気になったから心配しないで。」

そんな風に言うのも秋ちゃんらしい。

私たちが心配しているのを心ぐるしく思っているのだろう。

全く、心配をかけないように隠したりする方が私たちにとっては心配なのよ？

わかってるのかしら。

「さっきまで青くなってた人間が元気になるわけないでしょ。メグはもうしばらくゆっくりしてなさい。晩御飯まで寝ていていいわよ。」

やっぱり鈴に怒られた。

しかし、鈴の気持ちは全員の気持ちを代弁している。

私だって心配したし、家族である武満さんも、その時側にいた竜や司もまだ、本当に大丈夫なのか様子を見ているようだ。

「ううん。みんなに話があるの。こんなことが起っちゃったら隠し

ておけないね。

真奈美ちゃんたちにはまだ言っていなかったことがあるんだ。きちんと話をするよ。」

「なんでも言ってください。秋先輩のこともっと詳しく知りたいんです。」

「女神先輩はうちらにみずくさいところあるっす。」

花火ちゃんや由香ちゃんも、付き合いが短いとはいえ、秋ちゃんの人となりを知ってしまったら協力せずにはいられないのだろう。秋ちゃんはみんなの様子を眺めると、静かに語りだした。

「ボクの臨死体験は、これで三度目なんだ。普通じゃありえないんだけど、ボクの場合色々なものを引き寄せちゃうらしく。

それが良いことばかりじゃなくて、今回みたいな悪いことも沢山引き寄せるんだ。」

そう言って、今までの体験談などを話します。

幼稚園から見えてきたものや、人伝には聞いていたもの、司と付き合いだしてから秋ちゃんの側において実際に体験したことなどを話していく秋ちゃん。

私も知っているつもりだったがまだまだ知らない話もあった。

「そんなことがあって、ボクは臨死体験を三度も繰り返したんだけど、その度に体に変化があるの。」

「さっき言っていた髪の毛もその一つかしら？」

「うん。髪の毛だけなら良いんだけど、体や頭の中まで変化してる

みたいなのよ。」

海の中で簡単に説明されただけでは分からなかった詳しい部分についてまで秋ちゃんに語ってくれた。
時々竜や司が補足を入れてくれたので真実なのだと伝わる。

「メグの話は全部本当よ。実際に見てきた竜くんや司くんの証言もあるし、最初の臨死体験も浩太が関わっているからみんなも聞いているでしょ？」

「はい。直接女神先輩から聞いたのは初めてですが、浩太先輩とバスの事故は小学校では有名でしたから。」

「中学校でも有名ですよ。ファンクラブの規約に、女神先輩のことが色々乗ってるのもその影響なんですよね？」

「そうだ。僕がファンクラブを作った理由の一つが、無闇に女神ちゃんに接して不幸が降りかからないようにという配慮があったからね。」

今回は違っただけど、女神ちゃんの場合自分自身が危険になるだけならなんとかなる。

そう竜と司から聞いていたからそこら辺はかなり嚴重に規約を作って保護した。」

「ありがと、おかげで中学に入ってから結構安全なのよ。」

「あと、付け加えてほしいんは、俺と司は平気ってとこやな。」

昔から俺と司だけは秋の周りにいてもケガとかたいしたこと起こらへんねん。」

「そうだねえ。特に竜と一緒にいる時はあ、竜が色々な防波堤になつてえ、秋の不幸は軽減されているみたいだねえ。」

「これは真実だよ。竜は小学校から転校してきたんだけど、ボクの知る限りでは竜と仲良くなりだしてからの事故は確実に減っている。」

「竜くんや司くんがいつも側にいてくれるから私たちはメグと安心して心友でいられるのかもしれないわね。」

「せやけど、ずっと俺らと一緒にいることはできひんやろ?」

「そうなのよね。でも、美術部でも不幸が今までなかったことを考えると、秋ちゃんの周りにもう一人くらい竜くんと同じような状態の子がいるかもしれないわね。」

私は以前司と相談していた謎についてみんなに疑問定義を試してみた。

「心当たりがあります。というか、竜先輩が秋先輩の不幸を減らすというならこれしかないと思っんですけど?」

まあね。

竜くん以外にも側にいると不幸があまり起こらない人間を考えると、予想はできていたんだけど、これしかないわよね。

「たぶん、由香ちゃんの言いたいことはみんなに伝わったわ。」

ようは、秋ちゃんのことを愛している人がいると、その人からの愛情で秋ちゃんの周囲を守ってるのよ。」

「なるほどね。つまり竜くんは昔からメグのことどこかで好きだっ

たと、そして美術部では浩太や真奈美ちゃんの影響で不幸が少なかったと。」

「一概にそうともいえないよお。完全な防波堤にはなっていないけどお。一人でいる時よりも、僕といる時の方が少しは不幸が減るからあ。」

そうなのよね。司は、今はうぬぼれじゃなく私のことを愛してくれているはずなのよね。

「それ、私もそうかもしれないわ。メグと一緒にいて私も少し危険なことはあっても、竜くんや司くん程じゃないけど、不幸は減つてると思うの。」

「だいぶ結論に近付いてきたみたいだから、俺も一つ言おう。秋は幼稚園などの家の外にでるまでは不幸は経験していない。つまり、家族の愛でも秋を守ってあげられるということだ。」

「そこで、私たち心友六人が出した答えは、メグの周りがメグの幸せを望めばメグは幸せになって、メグのことを憎めば不幸になる。こういうことで良いわよね?」

鈴を除く四人が頷いた。

秋ちゃんもしぶしぶといった表情だが、反対意見は持ち合わせていない。

どんな形であれ、真実の愛情をもって秋ちゃんと接していれば怖くないってことよね。

その考えなら心友やめなくていいのよ。むしろ、秋ちゃんと仲良くなればなるほどみんな幸せになれるんじゃないかしら？

「みんなの中で結論が出たみたいやな。秋と今後も付き合っていくんやったら、真剣勝負ってことがわかったな？

生半可な気持ちで付き合えばまちがいでなく不幸になるんや。

秋が許しても、不幸になった子をかばって危険な目に会っくんがわかっとなるから、俺たちが許せへん。」

「そうだねえ。今まで美術部で何もなかったから言わなかったけどお。

今日も人が多いところに来たからあ、誰かが秋に嫉妬とかを持ってえ、その結果僕たちが側にいても不幸が起こったって考えもできるからあ。」

司の言っていることはたぶん真実よね。

秋ちゃんは気付いてなかったが、浜辺の視線を集めている秋ちゃんに嫉妬している女の子はたくさんいた。

「秋先輩かわいそうです。人が不幸になってほしいって気持ちが強ければ本当に不幸がおこり、幸せになってほしいって気持ちが強ければ幸せになるなんて、

秋先輩の気持ちは関係ないんですか？」

「女神先輩は優しいから余計に辛いつすね。うちらが今までそういう現場を見てこなかったのは、先輩への憧れと、鈴先輩たちの愛情が守ってたからだったんすね。」

「ボクもあまり認めたくはないけど、今までの経験ではそんな感じがするのは確かだよ。」

前に竜や司のことを好きな子に、思いつきり嫉妬された時は自転車が壊れたからね。」

「せやったな。結局俺が自転車の後ろに乗せだしたら、諦めたんか嫉妬しんくなつて、平和になつたんやからな。」

そう考えると今後はかなり危険かもしれないわね。

中学までは、ファンクラブができるくらい秋ちゃんを守ろうという風潮がある。

それに、秋ちゃんと竜くんの仲を知っている人からは嫉妬されないだろう。

しかし、全く事情を知らない人からはモデル竜くんとの関係に憎しみを抱く子も出てくるだろうし、正式に付き合ってもいないのにと考える子も出てくるかもしれない。

「まあ、そういうわけで、ボクは不幸体質だから、早めに部活も引退して新人生が入ってくる前に美術部から離れる必要があるのよ。真奈美ちゃんたちが入った時も、もし不幸が起きたしたら引退するつもりだったんだけど、今まで引退を先延ばしにしちゃってごめんね。」

「秋先輩・・・」

私大丈夫です。

確かに先輩たちみたいに女神先輩のことを思うことはできないかもしれませんが、今まで何もなかったし、先輩のこと尊敬してますから。」

「私も、女神先輩のこと大好きです。絶対に不幸になってほしくないなんて考えません。」

「うちも平気です。いじめられてたうちが由香と一緒に美術部なら大丈夫って思ったのは先輩のおかげです。そんな先輩の不幸なんて望めないです。」

「うう。ごめんね。ヒックッ本当にありがと。ヒック。」

秋ちゃんの実力の結果なんだよ。こんな良い後輩ができたんだから、秋ちゃんは本当にみんなのこと大切にしてたんだよね。私も秋ちゃんにつられて涙でちやいそうかも。浩太くんや鈴ちゃんは泣いてるわね。

「よかったな。秋のことこんなに考えてくれとる後輩がおったんやで。」

「そうだねえ。今後美術部で不幸が起こることはないだろうねえ。」
「そうね。秋ちゃんには、今まで辛かった分幸せになってもらいたいもの。」

私たちの言葉を聞いて本格的に秋ちゃんは泣きだしてしまった。幸せな涙ってこんなに素敵なんだね。私も我慢できそうにないわ。グズッ。

「秋の周りは幸せであふれてるな。お兄ちゃんも安心したよ。」

さあ、長いことしゃべってしまったし、そろそろ晩御飯の時間だ。今日は先にお風呂に入っておいで。」

しばらくみんなが泣いていると武満さんが声をかけてくれた。秋ちゃんの話は詳しく説明するために長くなってしまったし、みんなで泣いていたので、気づいたらそんな時間になっていたらしい。

「メグ、眼が真っ赤よ。」

「鈴だつて赤いじゃないの。」

「みんな真っ赤な目でお風呂に行くんだから仕方ないわ。」

三人で赤くはれた目を見て少しだけ笑った。

元々うれし涙だったし、泣いたらすすきりしてしまった。

「昨日は見逃したので今日は女神様の姿をしっかりと脳内に焼き付けます。」

「真奈美ちゃん。女神様にもどってるわよ。」

「しゃあないつて、由香もよくそんな気づくな。うちなんていつもそれやったから自然に聞き流したぜ。」

「まあ、あの話の後だし許してあげるわ。お風呂行きましょ。遅くなると晩御飯が先に着いちゃうわよ。」

「はい。女神先輩のお背中を流させてもらいます。」

「絶対に余計なことするからそれはいいわ。」

「それに、昔小学校の学外研修で、秋ちゃんと一緒にいて不幸にあった子がいるから、秋ちゃんは一人で入るのが好きなのよ。」

「そういうことね。昨日も私と麻美は少し離れて入浴することになったからね。」

「そうなんですか。でも近づけなくても楽しみです。」

そんな会話をしながら私たちはお風呂に向かった。

脱衣所に着くと、真奈美ちゃんの視線があまりにも痛かったのでタオルを巻いて着替える秋ちゃんがいた。

「女神先輩。日本の温泉は、タオルは巻かないのが礼儀ですよ。」

「鼻息を荒くしてそんなことを言われてもボクは取らないよ。シャワーを浴びるだけならとる必要はないしね。」

「そんなこと言わないで下さいよ。私の愛情で優しく守ってあげますからあ。」

なんだか間違った愛情な気がするが、実際これだけ周りに秋ちゃんを守ろうと先ほど誓った人がいるのだから問題ないだろうと助けは出さない。

「真奈美ちゃん。裸のままじゃ風邪ひいちゃうからさっさと温泉につかるわよ。」

メグも今日は一度不幸にあってるんだし、みんなが幸せを願ってる状態なんだから少しくらい平気よ。」

鈴ちゃん。

「一応私も同じこと考えたけど、真奈美ちゃんから救ってあげるのも重要じゃないかしら？」

「まあ確かに今日は大丈夫よね。ボクもあんまりバスタオル巻くのとかが好きじゃないし、いつか。」

流石、秋ちゃんだね。

昔から男気あふれる性格だったけど、私だってタオルで前は隠しているのに、一度決めたら一糸まとわぬ姿になってしまったわ。

タラリ。

「真奈美ちゃん。鼻血出てるわよ。」

「すみません。ちょっと刺激が強すぎたみたいです。シャワーで流してきます。」

そういつて真奈美ちゃんは洗い場の方に向かった。

「真奈美ちゃん大丈夫かな？まだお風呂につかってもないのにのぼせたの？」

秋ちゃん、秋ちゃんの魅力はそこで気づけないことかもしれないよ。自分の姿を鏡でみて、世間一般できれいといわれている人と比較してみてください。

「麻美、メグ、今のうちに体を洗って温泉に浸かっちゃいませよ。湯船で体を隠せば真奈美ちゃんもそれほど問題ないだろうし。」

これ、海でも同じことしたわよね？
秋ちゃんの様子は海と同じで何が起こっているのか分かってないよ
うだ。

「はあ。気持良いね。うまいこと空いてたからよかったよ。人とこ
んなに近くで温泉に入ったの久しぶりだよ。」

「ふふふ、また六人で旅行に来ましょ。私と鈴なら安心して一緒に
はいれるでしょ？」

「先輩たちだけなんですか？ 私たちも一緒に行きたいです。」

「うちらも安心っすよ。」

「そうね。考えておくわ。でも、やっぱり麻美や鈴はボクの中では
特別な。」

由香ちゃんと花火ちゃんは守ってもらっつていうよりも、守ってあ
げたいもの。」

「秋先輩、女の子が惚れて告白する気持ちがありました。」

秋先輩は、母性本能をくすずつて、なおかつ男性と一緒にいるよう
な気分させられます。」

「小学校の時を知らないから由香ちゃんは今まで気づかなかつたの
ね。」

私なんて女神先輩のもつと男性身あふれるアグレッシブな姿をこの
目で見たことがあるのよ。」

「そうですよね？麻美先輩？」

「そうねえ。秋ちゃんは昔から竜さんと司と仲が良かったから、男の子に混ざって遊ぶことも多かったし、男の子に勝っちゃうくらいだったからね。」

「さっきも秋先輩の昔話を聞きましたが、もっと知りたいです。」

「お湯につかりながらだとボクのほせちゃうから、そろそろ出るね。麻美、変なことまで吹き込まないでよ？」

「わかったわ。秋ちゃんがやってきた竜さんとの恥ずかしい話は内緒にしておくわね。」

ちよつとからかってみた。

秋ちゃんの顔が温泉のためではなく真っ赤になっていくのが可愛くてついこういう意地悪をしてしまう。

こういうところが司とうまが合うのかもしれないわね。

「もう、とにかくあんまり変なことは言わないでね。鈴もだよ？」

「はいはい、メグは先に部屋で待ってて、どうせ私たちもそんなに長くは入れないから部屋で続きを話さうしね。」

鈴の言葉を聞いて秋ちゃんもとりあえず出口に向かった。

その後ろ姿を真奈美ちゃんはポーとしながら眺めていた。これでは脳内に焼き付けると言っていたのもあやしいものだ。

「ああ、何であんなにスレンダーなのに出る所は出ているんでしょっ？」

顔も小さいし、髪の毛はきれいだし、女神様の欠点なんてあるのでしょうか？」

あら？意外と秋ちゃんの弱点って知られてないのね。

「あるわよ。結構いっぱいね。」

「なんですか？私がそれを使って女神様に近寄れるチャンスはありますか？」

「おいおい、目的が不純だよ。」

「まあ悪い感情で使うわけじゃないから、教えちゃおうかな。」

「鈴、言っても平気よね？」

「いいと思うわ。どうせ、真奈美ちゃんじゃどうしようもないしね。」

「そうね。まず一つは、自分に対する鈍感さよ。」

「みんなも気付いていると思うけどね。あの鈍感さは十分な弱点よ。」

「そうっすね。今日も浜辺でみんなの視線が集まってるのに、気づいてなかったみたいっすね。」

「遠くからでもうちらがわかったのに女神先輩はわかって無かったみたいっす。」

「パラソルのところからだ、余計に視線がどこを向いているのかわかった、というのもあったと思うわよ。」

「実際麻美と私だって最初は流石に気付かなかったもの。試合の途中でやばいなって思ったくらいだからね。」

「一つ目はみんな分かったわね。」

もう一つは知らなかったみたいだけど、お化けが苦手なのよ。他にも色々あるけど、一番苦手なのはお化けね。」

「秋先輩がお化けを？」

「まさか、女神様にそんな弱点があったなんて。」

「先輩ならお化けだってたおしちやいそうっすけどね。」

「そうでもないのよね。」

ここで、鈴と顔を見合わせる。

私たちは秋ちゃんが お化けを怖がって震えている姿を見ているのでお互いにニヤニヤしてしまった。

「お化けを怖がってる時のメグはすごいわよ。」

普段があんなにしつかりしてるから、めちゃくちゃ可愛く見えて、母性本能を刺激させられまくるわ。」

「そうなのよね。ギョッてしたくなるほど可愛いわ。」

「女神様のおびえるところなんてやばすぎます。是非みたいです。」

「まあそのうち見れるわよ。なんならご飯の後に怪談話でもすればすぐよ。」

ただし、誰か犠牲にならないといけないけどね。」

「そうね。あんまりにも怖いからって竜くんがベアハグくらったり、

殴られたりしてたからね。」

「じゃあ竜先輩には是非私たちの欲望のために犠牲になってもらいましょう。」

私たちが女神様をもっと幸せになってほしいと感じるための小さな犠牲です。」

そのあと、どうせ竜くんなら抱きつかれても平気だし、むしろ良いこともあるのだからと全員で決定し、

ご飯のあとは怪談話をすることに決め、お風呂をあがり、部屋に向かった。

「おかえり、やけに長かったけど、変なこと教えてないでしょうね？」

「大丈夫よ。秋ちゃんの可愛いところを教えただけだから。ね？ 鈴？」

「まあ確かに間違っちゃいないわね。あの時のメグは可愛過ぎたわ。」

「微妙に含みがあるわね。まあいいわ。ご飯の準備はできてるんだし食べましょ。竜と司が空腹で倒れちゃう前にね。」

竜くと司は昼もあんなに食べていたのにもうお腹がすいたらしい。

人体の神秘ね。

「いただきます。」

「「いただきます。」」

食事の時は部長なので秋ちゃんの、いただきますから始まる。

その時の秋ちゃんの顔がまた可愛いのだが、みんなご飯に夢中で気づいていない。

鈴と私だけはこっそり秋ちゃんの笑顔を楽しんでから箸をもつ。

「このお刺身美味しいです。海の近くだと新鮮なお魚が取れるからいいですね。」

真奈美ちゃんの言葉は本当だが、それだけじゃないわ。この旅館の料理はどれも一級品ね。

今回のように、お金に余裕がある時しかこんな贅沢はできないかもしれない。

「竜、それボクのお刺身だよ。お昼もあんなに食べたんだからボクのとらないですよ。」

「うまい。ほんまここの料理はさいこうやわ。」

「もう、じゃあ、こっちのテンプラちょうだいよ。」

秋ちゃんは怒った口調だがたぶん竜くんの優しさに気づいているのだらう。

普段ならもっとやりあつのに今日は交換することを提案してるので間違いない。

昼間、生のイカで当たったらしいと考えて竜くんはわざとお刺身を食べてしまったんだよね？

「じゃああ、僕もこれと交換してよお。」

司も竜の考えに賛成のようだが、残りのお刺身を奪うと自分の煮物を秋ちゃんのところへ渡す。

なんだかんだ言っただけ二人は過保護だし、ちゃっかり秋ちゃんが座る場所も竜くんと司の隣が多い。

「いいよ。司も竜もボクのじゃなくてもいいのに、それにボクは全部食べ切れるけど、麻美たちは量が多くて食べ切れないでしょ？」

「そうね。よかつたら私の分も食べてもいいわよ。司も十分お刺身は食べたでしょ？」

「やったあ。じゃあ麻美が余ったのはもらうよお。」

「竜先輩、女神先輩も食べ切れないので私たちの分もよかつたらどうぞ、その代わり後でお願いがあるので聞いてください。」

真奈美ちゃんたちも行動に出たらしい。

これで竜くんの犠牲は確定ね。

浩太くんはそんなに食べないし、自然な流れで断れない理由を作るなんて案外侮れないかもしれないわ。

「ほんまに？じゃあお腹一杯になったらでええよ。俺も自分の分たべてからもらうぞ。」

「さっきメグからもらう時はまだ自分の分あつたんじゃないかしら

「？竜くんはメグには甘いわね。」
普通なら甘くはないのだが、この場合は鈴木も気付いているのだろう。秋ちゃんの周りは愛情もあふれているが、策略も結構あふれているかもしれない。

「麻美い。今度はどんな面白いことを思いついたのお？さつきからあ、顔がにやついてるよお。」

あら、一番策略をめぐらしているのは私と司だっけ。

小声で聞いてきた司にお風呂での話を秋ちゃんにはれないように伝える。

「流石あ、麻美の考えることはあ、僕の気持ちをきちんとして理解してるねえ。僕も二人が逃げ出さないように協力するよお。」

あうんの呼吸というのかしら？

これだから司の彼女はやめられないわ。

それに秋ちゃんの心友もね。

私たちの楽しみは秋ちゃんと一緒にあるんですもの。

「御馳走様でした。」

「ホントにおいしかったね。武満さんもお酒ばかり飲んでないで料理も食べないんですか？」

「俺はお酒のつまみに食べてるからみんなよりもゆっくりになるのは仕方ないよ。」

「武兄ちゃん真っ赤じゃない。もうその辺にしておいたら？」

「大丈夫だって、明日の昼に帰るんだろ？それまでにお酒が抜けるように考えて飲んでるからね。」

それより、竜と司も一緒にどうだ？」

「竜先輩は今から私たちと一緒に怪談話をするのでダメです。」

「え？真奈美ちゃん今なんて言ったの？」

「怪談話ですよ。女神先輩も一緒にしますよね？夏合宿の夜といえは定番ですから。」

「そんな定番はないわ。というかもうこんな時間なのね。そろそろみんな寝ないかしら？」

「明日はお土産を買って、帰るだけですから少しくらい夜更かしをしても良いって言ったのは秋先輩ですよ。」

「由香ちゃんまで、まさか。鈴？麻美？」

「だって、メグの可愛い姿といたらこれでしょ？」

「さっきの変な感じはこれだったのか。ボクとしたことが気を抜きすぎていたみたいね。」

「先輩達、私たちの料理食べてお願い聞いてくれるって言いましたよね？」

「うぐ、なんだかみんなから黒いオーラが出ている。ボクは不幸を祈られるといけないんだからやめようよ？」

「可愛い先輩をみてもつと好きになるためです。むしろ幸せを願っていますのでその逃げ道はありません。」

「ええん。誰かボクの見方はいないの？」

秋ちゃんは周りを見渡したが、私と鈴は真奈美ちゃん達に伝えた張本人だし、

司はいたずらが成功した子どもの笑顔、浩太くんは可愛い秋ちゃんの様子を思い出しながらカメラを取りに行った。

竜くんがさきほどの料理で秋ちゃんと一緒に買収されているので最後の頼みの綱と武満さんを見ると、

「秋がお化け苦手になったのは俺のせいでもあるし、ここは俺が責任を持って怖い話をしてあげよう。」

武満さん完全に酔って悪乗りしてますね。

まあ、全員怪談話が始めれば問題ないのだから頷く。

「裏切り者お。なんで料理もらっちゃったのよ。今すぐ吐きなさい。」

「無茶いうなや。そんな言ったら秋だって食べたんやから一緒やる。」

「うう。もう逃げ場はないのね。」

「ほらほら、秋ちゃん。いつもみたいに竜くんが横にいてくれるんだからそんなに心配しないの。」

それに今日はお話だけで本物のお化けは出ないんだから心配しないの。」

結局秋ちゃんは竜くんの手を握りながら話を聞くことになった。竜くん以外は危ないということでも少し距離を置く。これは鈴の指示だ。

「竜先輩ちょっとうらやましいです。まだ話しだしてもないのに震える女神先輩が可愛すぎますよ。」

「いくらでも代わってやるぞ？いつもと違って秋から以外の物理的攻撃は、ないはずだからな。」

「やめておきなさい。半径1M以内に入らなければきっと平気よ。でも恐怖で理性を失ったメグは本当に危険よ。」

前に墓場に行った時は竜くんじゃなきゃ危ないところだったと私は思うわ。」

宝探しのことを言っているのだろう。

遊園地の時もすごかったが、あの体の大きな竜くんが一撃をもらって手を離してしまったのを思い出す。

「私も、近づかない方がいいと思うわ。竜くんですら一瞬意識飛びそうになるんだもの。」

「私たちなんて本当に病院に行きかねないわね。」

「さて、準備はいいか？これは昔ある旅館で起こった話なんだが、その旅館は海に……」

武満さんは酔っている割にはしっかりと話に強弱をつけて情緒感あふれる話を展開していく。

これを小さい時から聞いていたらお化けが怖くなるのも分かるわ。私も司の手をそっと握る。司は少し驚いたみただけどニコリと笑って握り返してくれた。

「廊下からヒタ、ヒタと足音が聞こえる。

その足音は段々近づいてくると、部屋の前で足音がぴたりと止まる。恐る恐るそちらの方に目を向けると」

ガラガラ

「「ぎゃああああ!!」」

「ぎゃあああ!!」

びっくりした。

話のタイミングを見計らったかのように仲居さんが障子をあけて入ってきた。

武満さんと司と竜くん以外はみんな声をあげてしまった。

話の途中でもビクビクしていた秋ちゃんも突然の仲居さんの訪問に大きな叫び声をあげると竜くんを抱きついていた。

あ、私も気付いたら司に抱きついていたらしい。

「えええん。怖いよお。」

「秋よくみる。仲居さんがきたただけだ。それより少し離れてくれ。」

おお、竜くんが標準語になってる。
きつと抱きつかれてるし、胸なんかもあたってるんだね。

「麻美い。意外と麻美も怖がりだったんだねえ。」

「あれは無理よ。なんで司たちは平気だったの？」

「それはねえ。」

麻美たちの行動を読んで、先に武ちゃんと話してタイミング良く仲居さんにお布団をひきに来てもらうように頼んでおいたんだよお。
元々僕と竜はこういうの全然平気だしねえ。」

あらら、やつぱり司にはまだ勝てないらしいわね。

秋ちゃんをはめたつもりが、私たち全員、司の罠にはまっていたの
ね。

「ほら、仲居さんがお布団をひきに来てくれたしそろそろ寝るぞ。」

「無理ですよ。武満さんの話怖すぎです。しかもこんなどつきりを
用意してるなんて、心臓が止まるかと思いました。」

真奈美ちゃんは結構大丈夫みたいね。

話せるだけまだましよ。

由香ちゃんは花火ちゃんに抱きついて軽く涙がでているし、秋ちゃん
なんて仲居さんと分かってても竜くんから離れずこっちは本気で泣
いている。

「いやあ。ここまで怖がってもらつと話がいがあるねえ。」

あ、すみません。適当に出しておいてください。もう一つの部屋は

四つでこっちは六つでお願いします。」

「武満さん。こんなのを毎回秋ちゃんに聞かせていたんですか？」

鈴が武満さんに尋ねている。

たしかこれは司から聞いたタブーだったはずだ。

「おや、もっと聞きたいかい？じゃあ次はとある中学校で起こった美術学生の悲劇でもはなしてあげようかな。」

「だめえ！！武兄ちゃんのお弁当一か月涙巻きにするわよ！？」

ふう。

なんとか秋ちゃんへの回復が次の怪談に移行するまでに済んだらしい。私もあそこまで怖い話は一話で十分よ。

「涙巻きはひどいよ。」

まあ、流石に寝れないといけないから今からはカードゲームでもしてみんなが眠れそうになるまですごそうか。」

武満さんは涙巻きのお弁当になにかトラウマがあるらしい。

今度詳しく聞いておこう。私も武満さんに対抗する手段がないとま
ずいだろう。

「メグ、大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも。」

昔竜や司を使って、こんな事をされたことあったんだけど、まさか仲居さんが出てくるなんて予想外だったよお。」

秋ちゃんの声がよわよわしい。
これは相当まいっているのだろう。

「秋ちゃん落ち着いて、ほら水でも飲んで気を静めてちょうだい。」
そう言っつて私は未だ隔離状態にある竜くんと秋ちゃんの元に近付き
コップに入っていた水を秋ちゃんに渡した。

「麻美、ありがとう。」

秋ちゃんはそういうとコップの中身を一気に飲み干した。

「麻美ちゃん。それ、お酒なんだけど・・・。」

「え？だつて武満さんずっと熱爛だつたじゃないですか？」

「熱爛だと冷めちゃうからつて最後に注文した冷酒だよ？」

「うそお？」

私はよく確かめもせず秋ちゃんにお酒を飲ませてしまつたらしい。
秋ちゃんも普通は匂いとか味で気づいてもいいようなものだが、恐
怖に震える秋ちゃんに正常な判断は無理だつたのかしら？

「竜う。怖かつたよお。」

あれ？

特に顔も赤くないし、さつきと変わらないかもしれない。

「わかつたからそろそろ離れてくれないか？UNOができないだろ

「？」

「UNOとボクとどっちが大事なの？ボクは竜の腕の中にいないと怖くて仕方がないんだよ？」

「いやいや、もう話は終わっただろ。落ちつけよ。」

「落ち着いてるよ。だって竜の腕に抱かれてるんだもん。えへへ。あつたかくつて安心できるんだ。」

やっぱり酔ってるわね。

秋ちゃんはニヤケ顔で竜くんの胸に頬ずりを始めた。

「武ちやあん。秋って酔うと寝ちやうんじゃなかったのお？」

「前はそうだったんだが、強くなってるのかな？でも、明らかに周りが見れなくなっているみたいだね。」

「そうみたいね。普段のメグならみんなが見ている前では、照れてあんなことしないし、言うこともないわ。」

「竜う。大好きだよ。」

ああら、酔っていると本音が出て甘えん坊になるのか。

秋ちゃんの苦手なものがもう一つ分かったわね。

もしこれで翌日記憶が残るタイプの人間だったらどうなるのかしら。

「記憶が残ってたらあ。秋はどうするんだろうっねえ。」

とりあえず明日は記憶が無かったフリをして竜の前ではごまかすだらうけどお。

朝起きたら確認しといてねえ。」

「分かったわ。どっちが幸せなのかは分からないけど、鈴と相談に乗れるようにしておくわ。」

そのあと真奈美ちゃんは秋ちゃんの様子に喜んだり竜くんをつらやましがったりして秋ちゃんの気を引こうとしていたが、

「竜う。ボクのこと離さないでねえ。」

甘えた口調でそういつて竜くんにすり寄る秋ちゃんの様子に諦めたようだ。

浩太がしきりにカメラを向けていたが、秋ちゃんの記憶があった場合は自分で回収するだろう。

「浩太、今回もダミー用意しておいてね。現像したら私もちょうだいよ。」

「私も欲しいわ。浩太くん鈴と私の分よろしくね。」

「了解。全員分用意するさ。どうせ真奈美ちゃんたちからもお願いされるんだからね。」

浩太くんは本当に中学に入ってから接しやすくなったわね。

前はこんな話、絶対にしなかったもの。本当にこれなら六人で心友になれるわ。

しばらく経つと、秋ちゃんは酔いが回りきつたのか竜くんの膝枕で寝てしまった。

竜くんは布団に秋ちゃんを寝かせてあげていた。

その頃にはみんなも寝る雰囲気になっていたので、男の子たちはもう一つの部屋へと移動をして私たちも布団をひいて寝ることになる。

「女神様の寝顔はホント素敵ですね。私だったら抱き枕にしてくれてもいいのに、やっぱり竜先輩にはかないませんね。」

「あら？意外と残念そうじゃないわね。」

「はい。あそこまで純粹に好きな気持ちを表現されて逆に吹っ切れたかもしれません。」

それでも尊敬できる素敵な先輩であることには変わりありませんけどね。」

この状態なら真奈美ちゃんもよく眠れることだろう。私たちも布団に入るとおやすみの挨拶をして眠る。

「きゃああ!!どうしよう。ボクあんなことを。」

まあ結果は朝一番の秋ちゃんの目覚めの声でわかってしまった。

お酒を飲んで寝たのに早起きな秋ちゃんに起こされた形となって私と鈴は布団から身を起こす。

「メグ、朝から真っ赤になってどうしたの?」

鈴、あなたは絶対理由に気づいてるわよね?

「あ、おはよう。鈴、麻美。どうしよう。ボク昨日お酒に酔ったとはいえ、あんなことしちゃったわ。」

「いいんじゃないの？本当に好きなんですよ？」

「好きだけど、ダメなの。ボクはもう少しこのままの関係でいたい
の。」

「じゃあどうするの？記憶がなかったふりでもしちゃう？」

「うん。ごめんだけど奇声をあげたことは内緒にしておいて、真奈美ちゃんたちはまだ起きてないみたいだし、絶対に内緒ね。」

「いいわよ。その代わり次のクリスマスまでね。」

「クリスマスは私と司とダブルデートしたいからそれまでにはきちん
と気持ちを伝えてね。」

「ええ？それって結構ハードル高いよ。」

「いいなあ。私もクリスマスまでに浩太と付き合えたら六人でデー
トにしましょ。」

「いいわねえ。じゃあ秋ちゃんも鈴もがんばってね。」

「うう。もうちょっと先にならない？」

「まだ七月でしょ？半年近くもあるじゃないの。」

「浩太も今回でメグと竜くんのこと分かったみたいだし、私の方は
たぶん大丈夫だともうわ。」

元々浩太の周りに女の子は美術部員しかいなかったからね。」

「鈴たちは大丈夫だよ。それはボクが保証したげる。ボクの保証は結構あたるから。」

「秋ちゃんは？」

「どうしよう。」

秋ちゃんにとっても課題ができたようだ。

この合宿で後輩たちを成長させようと考えていたみたいだけど、秋ちゃんもしっかり成長できたみたいだね。

チャプター25（後書き）

最初の雰囲気を見てシリアスかと思った人本当にごめんなさい。

AKIはシリアスに耐えきれませんでした。

元々、旅館二日目はこのような展開を予定していましたので、冥界とのつながりを考えると仕方ないのです。

今回のテーマは“秋との接し方をみなさんに伝える”です。

タイトルで秋の苦手と示した通り、秋についてみんなで考える一話にしてみました。途中脱線も多かったかと思いますが、それぞれのキャラ達が秋との距離について深く考えています。

そのための初めての麻美視点でした。麻美視点は楽しいですね。策略をめぐらす司とのやりとりなんかはちよつと気にいつてしまったかも知れませんが。今後も別のキャラ視点になることは多いと思いますが、基本は秋視点で進める予定です。

チャプター26

真奈美ちゃんのクッキー

合宿では竜先輩と女神様の強い絆を見せてもらいましたが、やっぱり私は女神様のことが大好きなのです。

今日は美術室で、みんなに食べてもらおうとクッキーを焼いてきました。

「女神せんぱい。」

いつものように入口で待ち伏せして飛び着いたら今日は抱きとめてくれました。

「真奈美ちゃんも合宿で変わったかと思ったけどそうでもないよね。」

「鈴先輩。変わりましたよ。これは尊敬の抱きつきなのです。だから女神先輩も避けないで受け止めてくれたんですよね？」

「まあね。ところで、さっき女神先輩って呼んでくれたけど、鈴たちの話だとボクがいないところでは女神様って呼んでるらしいわね？」

「鈴先輩そこは言わない約束では？」

鈴先輩に報告されていたなんて、今後は女神様の目の届かない家で

しかつかつに言えないですね。

「あと、この前合宿の挨拶に行った時にお母さんから報告を受けているから、家で言ってもボクにはばれるから気を付けてね。」

ママの裏切り者。

真奈美の情報を女神様に売るなんてひどいです。

「私のママをお母さんだなんて、義理の母と認めてくれたんですか？」

「はいはい、妄想に浸ってないで部活始めるわよ。」

「冗談ですよ。女神先輩、今日は真奈美がみんなにクッキーを焼いてきたのです。」

みんなで食べてくれませんか？」

「いいねえ。女神ちゃんの料理もおいしいけど、女の子の手作りは、歓迎だよ。」

「浩太先輩の分はありませんよ？」

「まてえ。なんだか部活の中での僕のキャラがそういつのになっかないか？」

「反応を返してくれるので楽しくって、冗談ですよ。たくさんあるので浩太先輩も食べてくださいね。」

先輩たちと話している間に由香ちゃんと花火ちゃんもやって来たので、私は袋を取り出しみんなが食べられるように中央に置く。

「真奈美ちゃん？これはココアかしら？」

「はい。ちょっと黒くなりすぎましたが、食べてみてください。」

私の声にみんなが一つづつ手に取って口に運ぶ。

「どうかな、上手にできたかな？私も一つ取って食べてみます。」

「えっと、ごめんなさい。ココア味だから少しくらい黒くても平気かと思つてたんですが、焦げていたんですね。」

「うん。ちょっとこれはココアの色だけじゃない黒さがあるわね。」

浩太？さっき女の子の手作りは歓迎って言つてたわよね？」

そういうと、鈴先輩は浩太先輩にクッキーを渡す。

「そんな、こんなにも焦げたクッキーなんですから捨てましょうよ。」

「大丈夫よ。浩太なら乗りきってくれるわ。さあ、お口を大きく開けてね。」

結局浩太先輩が残りを食べてくれた。

みんな一個食べて焦げているのは確認しているので鈴先輩の暴走を止めようとしないうつです。

「決めたわ。お菓子も一つの芸術の分野よ。」

ボクが家庭科室を借りておくから、明日はみんなでお菓子作りをしましょう。」

「合宿もあつたし、夏休み前の最後の活動ですよ？いいんですか？」

「大丈夫だよ、由香ちゃん。夏休みも、多少作品作りのために集まる予定だし、ちょうど最後に良いと思うわ。」

「女神ちゃんの作ったお菓子で、夏休み最後の部活を締めくくれるなら、良いと僕も思うよ。鈴も賛成だろ？」

「ええ、じゃあ今日はみんなで、明日何を作るか考えましょっか。」

先輩たち三人の意見がまとまったので、私たちも反対する理由もありません。

明日、何を作るか話をして今日は解散となりました。

「はあ、失敗しちゃったな。」

「真奈美ちゃん落ち込まないで、おかげで明日秋先輩がお菓子作りを教えてくださいさるんですから。」

「そうだな。確かに、真奈美ちゃんがクッキーを持ってきてくれたおかげで、女神先輩のお菓子がたべれるんだ。気にすんなよ。」

帰りに由香ちゃんと花火ちゃんに慰められて私は家に向かいました。明日は一生懸命作り方を覚えて、今度こそ失敗しないように頑張ります。

「今日はクッキーを作るよ。材料なんかはボクの方で用意してきたから、落ち着いてきちんと指示通りに作れば、大丈夫だからね。」

「はい。今日こそはおいしいクッキーを作ってみせます。」

「ところで、なんで麻美先輩も一緒なんすか？」

「それはね。秋ちゃんも全員を指導するのは大変だから、夏休み前で部活も忙しくないからってお手伝いにきたのよ。

お菓子なら私も結構教えられると思うからね。」

「麻美はボクら六人のお菓子担当だからね。

前にみんなが集まった時も美味しいクッキーを作ってくれたから、安心して質問したらいいよ。」

「私もお菓子はそれほど作ったことがないから、麻美が来てくれて助かるわ。」

こうして、女神様と麻美先輩を中心としてクッキー作りが始まりました。

途中までは一緒におしえていましたが、麻美先輩の手際の良さに女神様は指導をまかせると、違うものを作っているようです。

「由香ちゃんと鈴は前に作ったことがあるからそんなに問題はないわね。

真奈美ちゃんも十分上手よ。前のクッキーも焦がした以外は、失敗はなかったんじゃないかしら？」

麻美先輩は教えながら、みんなの様子をきちんと見てくれます。

色々と参考になることも教えてもらいながら、基本的には間違えてなかったみたいで私は結構すぐに指示をもらったら動けるようになりました。

「浩太！！なんでこんな型をもってきてるのよ。」

「いいじゃないか、形は多少大きくなってしまいが問題なく作れる
だろ？」

「その大きいのが問題なんですよ。これじゃあみんなのクッキーが
焼けないじゃないの。」

浩太先輩はちよつと特殊な型抜きを持ってきたらしく、いつものよ
うに鈴先輩に怒られています。

「大丈夫よ。オーブンは三つあるんだから、何度かに分ければみん
なの分も焼けるわ。」

「まず、浩太の大きなクッキーと良くできている由香ちゃんと真奈
美ちゃんのクッキーを焼きましょ。」

次に麻美のと、花火ちゃんのと、鈴のを焼いたらいいわ。」

女神様の提案で順番に焼くことになりました。

浩太先輩が大きいものを作らなくても結局二回にわけないといけな
かったようです。

「ちよつと入りきりませんね。秋先輩どうします？」

「じゃあ、ボクのケーキを焼いている間に余った生地全部やつちゃ
おう。」

かなりの量になったわね。」

「こんなに食べ切れないっす。さすがにこの量は女神先輩でも無理
じゃないっすか？」

「竜と司が来るからそうでもないわよ。鈴と浩太で二人を呼んできてくれる？」

「今日のことは伝えてあるから、お腹を空かして待ってるはずよ。」

「いいわよ。浩太は司くんを呼んできて、私は体育館に行って竜くんを呼んでくるわ。」

先輩たち二人が家庭科室を出ていくと女神様はまたケーキの作成に取り掛かった。

「クッキーよりも焼く時間がかかるから、先に作った方が良かったんじゃないですか？」

「一気に作っちゃったら全部食べる前にクッキーが冷めちゃうですよ？」

冷めてもおいしいけど、できたてをみんなで食べたいから、わざと時間をずらしたのよ。」

麻美のおかげでこっちも取りかかれるからホント助かったわ。」

「いいのよ。私は暇だったし、おかげでこうしてみんなで遊べるんだから。」

「一応部活の一環なんだけどな。」

まあ今日は合宿のお疲れ会と夏休み前の骨休みって感じだから、いいつか。」

運動部と違い文化部は大会を控えているわけでもないの、ここら辺は気楽です。」

まあ、学園祭の前は美術部も忙しくなるみたいだから、今のうちにのんびりしているのかもしれないね。」

「来年、私もこの時期は部活で忙しいと思うから、今年だけね。といつても、来年は真奈美ちゃんたち中心になるのよね。」

「秋ちゃんみたいには言わないけど、後輩ができたらいろんなことを伝えてあげてね。」

「それ、ボクのセリフだよ。なんだか本当に麻美も美術部の部員みたいだね。」

しばらく、談笑していたが、一回目のクッキーが焼けたので

麻美先輩は私たちに指示をだすと、花火ちゃんと由香ちゃんと協力してやけどをしないようにミトンを着けてクッキーを取り出しました。

「わあ、おいしそう。」

「みんな遅いわね。じゃあ、二回目を入れて焼いている間に先に食べ始めちゃいましょ。」

「みんな紅茶でいいかしら？」

女神様はケーキを作っていたはずなのに、お茶の準備までしてくれていました。

「どこまでも抜かりがないようです。」

「おいしい。やっぱり真奈美ちゃんはちょっと焦がしたただけ、あとは問題なかったんですね。」

「由香ちゃんのも美味しいわよ。二人とも成功ね。」

「麻美先輩の指導のおかげですよ。本当にありがとうございます。」

次に焼くクツキーをオーブンに入れていた花火ちゃんと女神様も席に着くと、司先輩と浩太先輩が入ってきました。

「良いにおいだねえ。麻美い。僕の分はあ？」

「いっぱい作ったから焦らなくても大丈夫よ。」

秋ちゃんがお茶も用意してくれたから、手を洗ったら一緒に食べましょ。」

私には司先輩が焦っているようには見えなかったんだけど、彼女ともなるとあの間延びした声の中に変化がわかるのでしょうか？

「ああ、僕のクツキーが、何で割れてしまってるんだ？」

「大き過ぎて焼いてる途中で割れちゃったのよ。味は変わらないと思うわ。」

「麻美ちゃん、一応美術部として作っているから、見た目も大事なんだよ。」

しかし、生地 of 膨張率まで気が回っていなかったな。普段の作品よりも難しいかもしれない。」

浩太先輩は意外と真面目だったみたいです。

普段はお茶らけるし、今日作ったクツキーも形はアニメのキャラクターだけど、やることは手を抜かない人です。

「あらら、浩太のは割れちゃったみたいね。私のもオーブンに入れてくれたんだ。ありがと。」

「良いにおいやな。俺もさっそく。」

鈴先輩たちも入ってきたのですが、つまみ食いをした竜先輩は女神様に怒られていました。

手を洗って席に着くと、女神様も食べても良いと許可がでて一皿目はすぐに食べ終わってしまいました。

「流石にこの人数で食べるとあれだけあっても足りないわね。」

竜も司ももうすぐ次が焼きあがるから物足りなそうにしないの。」

「もうそろそろね。鈴と私と花火ちゃんの分だから、みんなで食べれるとおもっわ。」

「うちのは自信無いっす。こういうん初めてなんで、失敗してるかもしれないっす。」

「大丈夫よ。私が教えた通りにやってたし、クッキーは失敗してもある程度大丈夫なお菓子だから心配いらなわ。」

「そつつすね。昨日も浩太先輩結局全部食べちゃったくらいっすからね。」

「花火ちゃん酷い。そこは私のために言わない約束でしょ。」

「秋ちゃんからみんなに伝わってるから、今さら隠す人はいないわよ。」

麻美先輩まで私をいじめます。

でも、麻美先輩のおかげで今日のクッキーは成功したので良いのです。

「さあ、焼けたみたいよ。花火ちゃんのも上手に焼けたから食べてね。」

女神様と麻美先輩と鈴先輩がクッキーを出してくれました。

私たちと違って慣れているのか、手際よくオーブンからクッキーを出すと、最後の残った生地とケーキをオーブンにいれて先輩たちも席に着きます。

「花火ちゃんのクッキーもおいしいね。」

「麻美先輩が教えてくれたおかげです。」

「麻美もお。全くできない子に教えることはできないからあ。」

花火ちゃんもこういうのに慣れていけばあ、一人で作れるようになるよお。」

「せやな、十分おいしいし、次は自分一人でチャレンジしてみたらええんちゃう?」

「司たちの言う通りね。ようは慣れよ。私はお菓子が好きだったし、食べてくれる人がいたからね。」

花火ちゃんも今度何か作って秋ちゃんのお家にもっていったらいいわ。」

「先輩っ。」

女神先輩の手料理に慣れてるんで、それはもうちょっと練習してからにするっす。」

花火ちゃんの相手は武満さんなのですね。

麻美先輩は優しいけど、人をからかうのは司先輩と一緒に大好きみたいです。

さすがに二皿目ともなると、みんなお腹が膨れて来たので、次に焼けた分はみんな家で持ち帰ることになりました。

でも、女神様のケーキはここで、みんなで食べるみたいです。

「さあ、お腹一杯のところでもわるいけど、ケーキは持ち帰れないから食べてね。」

「美味しい！！これなら全然重くないし食べられるわ。」

「これってイチゴか？これならみんなも全然いけそうやな。」

「生地にイチゴを混ぜたの、本当なら切って、間にイチゴと生クリームを挟むんだけど、これでも十分いけるでしょ？」

女神様はパウンドケーキを作りました。

生地に混ぜられたイチゴが爽やかで、お腹一杯だったはずなのにすぐにケーキはなくなっていました。

「どうかな？これに少しデコレーションをして、十分作品になるよ。うなら、学園祭の時にブースに出そうかと思うんだけど。」

「これなら完売まちがいなしやな。けど、うちの学校ってクラス少ないからそれぞれのクラスで劇するだけやろ？」

「美術部は少し時間をもらって作品展示をするのよ。その時に配ろうと思うてね。」

「なるほどねえ。いいと思うよ。ただ、絶対に足りなくなると思うからあ。」

前の日から準備しておかないとダメだろうけどねえ。」

「そこらへんは大丈夫よ。ボク一人で作るわけじゃないし、年中行事にするために学園祭前に真奈美ちゃんたちには作れるようになってもらわなきゃね。」

「このケーキの作り方も教えてもらえるんですか？」

「もちろんよ。今日見た感じだったら十分作り方さえ教えれば、来年も自分たちでできると思うから、問題ないわ。」

女神様の目はもう既に私たちが独立しても大丈夫なように下準備に向けられているようです。

確かに色々なことを教えてもらって成長していけるのは嬉しいのですが、女神様と離れるのはさみしいです。

「そんなにさみしそうな顔をしないの。」

メグも私も浩太も卒業はまだ一年も先なんだから引退しても顔くらいは出すわよ。」

鈴先輩の言うことも分かっているのですが、まだ入学して半年もたっていないのに私たちは女神様たちが大好きになってしまったので離れる話は嫌なのです。

「さあ、クッキーをラッピングしてしまいましょ。」

それが終わったら、休み前最後の部活だし、夏休みのことを報告し

たら解散するわよ。」

先輩達にラッピングの仕方を教わって綺麗に包むと、それぞれにクッキーが渡されました。

女神様は花火ちゃんが作ったクッキーを持って帰り、武満さんに食べさせるようです。

花火ちゃんも、今日は麻美先輩に教えてもらって上手にできたので、少しためりましたが、承諾していました。

「学園祭の展示は時間の関係から、ボク以外はひとつ作品を出すだけになるみたいなの。」

それぞれ夏休み中にある程度までは作っておくようにするわ。

ボクは麻美や司や竜と一緒に平日は美術室に来るようにするから、どんな作品を作るか、どんな風につくったらいいのか質問があったら来ていいわよ。」

「見せるのは一つと言っても、いくつか作った中から最高のものを出す方がいいから、

私や浩太もメグと一緒に美術室に通うつもりだから、みんなもできるだけ来て作品に取り掛かった方がいいわよ。」

それに、去年と同じならメグの美味しいお弁当のおまけがつくこともあるしね。」

「ああ、ついつい美術室に毎日通うようになってその影響で僕も技術があがったね。」

「中学校から始めたのに先輩たちが上手なのは、そんなわけがあっ

たんですね。」

「そこまで上手でもないし、それに昔から私たちは好きで絵なんかを書いていたのもあるわよ。」

でも、夏休みがなければ今より技術が上がるのは本当ね。」

こうして、夏休み前の最後の部活は解散となった。

由香ちゃんや花火ちゃんの反応を確認してみたら、やっぱり平日毎日いくみたいだ。

私も毎日女神様に会いたいし、通うことにしましょう。

チャプター26（後書き）

実はこの話と鈴の浩太への気持ちは番外編の予定でした。詳しくはブログにて

さて、今回のテーマは“真奈美ちゃん視点をどのように分けるかです”元々番外として出そうと思っていたこともあり、視点を变える時の字の文を意識して執筆しました。これらも詳しくはブログにて発表します。

それではみなさんご愛読ありがとうございました。

天使の羽

今日は鈴と浩太を誘って竜の試合を見にきた。

ボクたちは大会がないので応援に来れるが、麻美や司は、それぞれ自分の部活の試合があるため、今日は三人で見に来ている。

「来てくれたんやな。前回司の応援に行ったん知った連中が、こっちにもってうるさかったから助かったわ。」

「あの時は応援どころじゃなかったけどね。はい、お母さんから頼まれたお弁当。」

ボクはこうして竜や司の応援に行く時はいつもお弁当を作ってくる。司の家はそんなに大変ではないが、竜の家は母子家庭なので、試合でただでさえ朝が早いから、後から持っていこうかと提案したら、

いつの間にか作っていくことになっていた。

「あとで先生のところに許可取って差し入れも持っていくわね。」

「なにもってきてくれたん？」

「浩太と鈴からはスポーツ飲料で、ボクからはレモンの蜂蜜漬だよ。司の時には人気があつたからね。」

「あれは人気やで争奪戦になるな。ほんま、ありがとな。」

そう言つて竜はアップをしているコートの方へ向かつて行つた。

竜は180センチくらい身長があるので、周りと比べてもかなり大きく、結構目立っている。

海良中学では一番身長が高いので、マークも厳しくなるだろう。

「吉川先生。お疲れ様です。」

ボクたちはバスケット部の顧問である吉川先生に挨拶にきた。

野球部と違ってバスケット部は中学からみんなスタートなので学外からのコーチなどはいない。

「ああ、美術部は大会がないんだつたな。今日は三人で応援にきてくれたのか。」

「はい。三人から差し入れがあるんですが、構いませんか？」

「ああ、去年も持ってきてくれたやつだろう？」

かまわないが、そんなに気を使わないで応援に来てくれるだけでいいんだぞ。」

「何かできることをしたかっただけのんで、気にしないでください。」

「そうか、バスケットは竜がいるからって、みんなも喜んでよ。」

普段はテニスに一番、人が集まるのに、今年はバスケット野球に集中して先生は喜んで良いんだか悪いんだか。」

「顧問としては嬉しいけど、先生としては均等になつてくれないから困っちゃうんですね。」

「まあ、美術部に集まらなかっただけ幸いだよ。来年も浩太が前に立つんだろ?」

「来年はボクが立ちますよ?引退するから不幸に合わなくてすみませんからね。」

「やめてくれ、男子の部活が全部廃部になっちゃう。」

「そつか、そういうのも考えないといけないんですね。あとで部員と相談しておきます。」

「前に立つのだけはやめてくれ、そんなことしないで秋の噂を知つて流入する生徒はいるんだろうから、これ以上混乱を作られては、残業どころじゃなくなる。」

「あと一年間頑張ってください。」

会議が嫌なら三年生は竜と司と浩太と麻美と鈴の五人をクラスにまとめることをお勧めします。」

五人がいれば何かとフォローできますよ。」

「本当か?試合が終わつたら会議に提案してみるよ。」

秋の不幸体質は信じられないが信じるしかないからな。」

六人をクラスに集めるだけで問題が解決するなら修学旅行も行けそうだ。」

「修学旅行、行けないかもしれないな。」

「ああ、学外にでるから、どうしても事故なんかが起こったら責任を取れないと

中止の声もあつたんだが、美術部で問題が起こっていないからと懸案中だったんだ。

そうか、今年に入ってクラスで不幸が多いのはやっぱりメンバーに問題があつたんだな。

先生の方からそのメンバーを集めるように言っておくから安心なさい。」

吉川先生は見た目もクマ見たいに大きいけど、心はクマよりもっと大きいらしい。

先生は、話に区切りがつくと顧問として生徒たちの方へ歩いて行った。

「まさか、修学旅行が中止される会議が起こってたなんて、メグの不幸もここまで来るとすごいわね。」

「まあ対処方法が分かったんだからよかったじゃない。」

「そうだね。ヨッシーにはあとで僕の方から合宿で結論を出した秋の話をしてみるよ。」

他の大人は頭が硬いから聞いてくれないかもしれないけど、ヨッシーなら大丈夫だと思う。」

「ボクもそんな気がするよ。吉川先生って本当に生徒たちの様子をしっかりと観察している良い先生なんだよね。」

竜と登下校をさせた時も気づいて、特殊ヘルメットを会議に出してくれたおかげで、歩いて学校に来る必要がなくなったもん。」

「あの時竜くんだったら、二人乗りしているところを叱った先生に食ってかかったんだってね。」

「普通そんな反抗されて意見を聞く先生なんていないんじゃないかな？」

「僕も何度か先生にファンクラブのことで話をする機会があったけど、本当に良くしてくれるよ。」

ボクらの中で吉川先生の人気はかなり高いね。

実際海良中学はいい先生が多いけど、吉川先生の人気は今のところ一番だ。

「メグ、私たちは離れてましょ。他の中学も来てるし、あんまり近付くと危ないわ。」

「そうだな。竜たちの邪魔をしないように応援しよう。」

二人の提案に従って、ギャラリーにある選手たちの荷物がある場所へ移動した。

「女神様？竜先輩の応援に来たんですか？」

そこには、レギュラーじゃない子達が集まっており、荷物番などをしていた。

今年は人数が多いのは知っていたが、一年生が本当にたくさんいる。

「美術部は大会ないからね。みんなと一緒に応援させてもらおうわ。」

バスケット部の応援に来たのであって竜の応援ではないのだが、そこは言わない方が何かと便利なので放置しておく。

まあ、竜とは心友だし問題はないんだけどね。

「メグ、何を考えているのかは分かるけど、そこで顔を赤くしてたら意味がないわよ。」

「鈴、別にそんなんじゃないわよ。本当に今日はバスケット部の応援に来たんだから。」

「はいはい、部に所属している竜くんって部分が抜けているわよ。」

もう、最近麻美と仲良くなってボクをからかうのを楽しみにしてるんじゃないかな？

浩太も意味ありげなニヤケ顔だし、ボクはそんなんじゃないんだから。

「クリスマスまでって期限がついたことによつて、また意識しだしちゃったのかしら？」

「そんなことないよ。ボクは今まで通りだもん。確かにあんな失敗をしたあとだから多少気まづくはあるけど、今までと変わらないわ。」

自分で言いながら微妙に顔が赤くなっているのには気付いている。はあ、なんだか可愛くないな。

「まあまあ。そろそろ一試合目が始まるみたいだぞ。」

浩太の声にコートの方を向くと、先生を中心に円陣を組んでいる両チームが見えた。

竜は出してもらえるのかな？

レギュラーになったって言うてたから大丈夫よね？

「竜くんレギュラーみたいよ。でも、三年生も最後の大会だからみんな出すとは思っけどね。」

「じゃあ、試合に余裕が出たら交代するのかな？フルで出ないのは残念だけど仕方ないわよね。」

「一試合目の相手は前に大差で勝ってるって、聞いてるからそうなるだろうね。」

コートに集合がかかると竜はスタメンで出てきた。

三年生の子が5人いるはずなので、ひとりだけベンチにいるみたいだ。

あとはたしか三年生の子たちだったと思う。

ボクも何度か見に来ているし、海良中学事態人数が少ない学校なので顔くらいは覚えてる。

「キヤーー！！竜くん。がんばってえ。」

黄色い声の方を見ると、女子バスケの女の子たちがいた。

アンチ秋メンバーの子たちだった。彼女たちは竜のことが好きなのだから仕方がない。

でもなんだか嫌な気分だ。

「ほら、メグも負けてないで応援してあげなさいよ。」

「うん。がんばってね。」

竜個人に言うのはなんだか恥ずかしかったので、レギュラーの子たちみんなに手を振って笑顔を見せた。

先輩たちも笑顔で手を振り返してくれた。

ジャンプボールが行われ試合開始だ。

竜がジャンプすると、ボールを味方に弾いて海良から攻撃が始まった。

さっきまで格下相手ということもあってリラックスモードだったコート内みんなの目が真剣なものに変わる。

「お、流石は竜くんね。あの高さじゃ相手も敵わないわ。」

「本来センターの子が飛ぶらしいけど、高さがあるからってジャンプボールは任されているらしいよ。」

すごいなあ。

竜がジャンプすると羽が生えているみたいだ。

ボクも男の子だったらあのコートに入れるのかな？

「竜くんかつこいいわね。あ、決まった。」

鈴の声を聞きながらもボクは試合に釘付けになっていた。

先輩達が相手のゴールにうまくボールを運ぶと、竜がゴールしたで相手をかわしレイアップを決めた。

さすがに竜もダンクを決めることはできないみたい。

「中学校でダンクなんて滅多にないのね。竜だったら届くとおもっ

んだけどな。」

「遊びでならできるかもしれないけど、試合中にダンクなんて狙ったら先生から叱られるよ。」

「そうなの？そう言えば竜もそんなこと言ってた気がするわ。」

「竜くんが気になる？メグがお願いしたらダンクくらい決めてくれるかもよ？」

「いいよ。ボクのがままで竜がレギュラーを下ろされるのは嫌だからね。」

「まあ、試合が一方的になってきたら見れるかもしれないわ。」

鈴の言葉にうなずくとコートに集中した。隣では後輩やベンチに入れなかった子たちが大きな声で声援を送っていた。

インターセプトにも成功して、試合は20対6と押している感じだ。点差が開いたので安心したのか、先生は竜を下げた三年生の先輩と交代させた。

それでも相手との実力差があるのか、その先輩もそこまでプレーがひどくなかったし、海良中学は一回戦を勝ち上がった。

女子も同じ会場ということもあって午前の試合は一試合で、午後からもう一試合あって今日は終わりだ。

「お疲れ様。竜くん。途中で交代しちゃったけど、かっこ良かったわ。」

同じバスケット部だから先生たちの話の時も側に行けた竜ファンの女の子たちが駆け寄っていた。

ボクも声をかけようと思っていたけど、なんだかそうする気も起きないで浩太と鈴と一緒にお昼を食べるために一度会場を出た。

「勝って良かったな。あそこの芝生でご飯にしようぜ？」

浩太の指した芝生に三人で座ると、それぞれお昼ごはんを取り出した。

「竜くんすごい人気ね。少ししか試合に出てなかったけど、バスケット上手だったししょうがないわね。」

「竜はあれで、バスケット部で一番練習してるから。昔から運動神経はよかったけど、努力してレギュラーになったんだよ。」

ボクも司と一緒に何度か練習に付き合ったよ。」

「そうなんだ。竜って昔から女神ちゃんに負けないように人一倍努力してたからな。」

「結局、臨死体験後にボクが一気に成長しちゃったから追いつけないのは分かったみたいだけど、それでも努力はやめなかったね。」

「メグと一緒にいたかったのよ。メグに釣り合う男になろうと一生懸命だったんだわ。」

「そんなことないよ。竜はモデルからボク以外にもたくさん女の子はいるし。」

「さっきの集団のことを言ってるなら間違いだな。」

僕は少し竜に声を掛けたが、女神ちゃんから声をかけてもらえずに寂しそうな顔をしてたぞ。」

「まあ、照れ屋のメグにあんな風になれとは言わないけど、さっきの対応はいけなかったわね。」

嫉妬した気持はわかるけど声くらいかけてあげなきゃ。」

「嫉妬なんかじゃ・・無いと思う。」

「はいはい、竜くんの前で照れるのは構わないから、お姉さんに話してごらん。」

「鈴って女神ちゃんに甘いよな。まあ僕らで良かったら相談くらいするから胸の内を話してみるとすっきりするよ。」

浩太と鈴はボクの考えていることはボク以上に分かっている気がする。

それでも心友となった二人に隠し事も変なので気持ちを伝えてみる。

「ボクは竜のこと好きなんだと思う。」

それは心友ってだけじゃないのも自分でわかっているんだけど、勇気が持てないんだ。

もし、このままの関係でいられるなら、その方が良いつて気もする。

「でも、今日みたいに他の女の子と仲良くしているのを見るのは嫌なのよね？」

「うん、遊園地の時もそうだったけど、それはきちんと自覚したよ。」

「じゃあ、どんな風になったら一番うれしんだい？」

「今までみたいに六人で仲良くして、それでもって竜がボク以外の女の子に興味を持たないのがいい。」

司や浩太も心友だが、竜に関して違う所はここだろう。

竜が他の女の子と仲良くしているのを見たくない。
司と麻美が付き合っているのを聞いた時のように祝福してあげれない醜い自分がある。

「そうね。竜くんはメグにとって特別だと思うわ。
六人で仲良くしたいって言ったけど、司くんや麻美ちゃんが付き合っているからといって私たちの友情は変わらないわよね？」

「うん。二人には幸せになってほしいって思ってるもん。」

「じゃあ、メグの幸せを望む心友のたちが、メグが竜くんと付き合い
たからって心友じゃなくなるはずないわ。」

このことはもう、竜くんとの関係から逃げ出す口実にはならないの
よ。」

「逃げ出すって、」

うん。そうかもしれない。

心友でいたっていう気持ちで自分の気持ちに嘘ついてたかも。」

「そうだね。女神ちゃんは、周りを気にし過ぎるから仕方ないけど、僕たちは祝福するよ。」

「二人ともありがと。ボク前向きに考えてみる。」

そのあとボクたちはそれぞれのお弁当を食べ、試合の時間までいろいろな話をした。

相談したいこともたくさんあったし、浩太も鈴も話題を豊富に持っているので時間まで途切れることなく話した。

「そろそろ行こうか。まだ相談したいことはあるみたいだけど、応援に来たのに試合を見なかったら意味がないからね。」

「そうね。メグ、今度はちゃんと声をかけてあげるのよ。」

「うん。気持も楽になったし、大丈夫。」

三人でお弁当をしまつて先ほど応援した場所に向かう。

「ちょうどいいタイミングやったな。今から下に降りてアップやわ。お弁当ありがとな。」

「うん。次もがんばれ。」

これだけで精一杯だった。

竜は頷き空になったお弁当を渡すとコートの方へ向かっていく。

「はあ、自己嫌悪だよ。もうちょっと気の利いたセリフを考えていたはずなのに。」

「十分よ。飾らない分良かったと思うわ。」

「そうだね。女神ちゃんは意識をしない方がうまく接することができるみたいだね。」

「一番はお酒飲ませることだけど、こんな場所じゃ無理よね。」

「未成年だし、大会が終わった後にも、女神ちゃんの家かなにかですることでしょうか。」

武満さんなら喜んで協力してくれるだろうしな。」

「ちょっと待ってよ。そんな方法はいやだよ。」

次から頑張るからそれだけはやめて、ボクが恥ずかしくて死んじやう。」

「ふふふ、あの時のメグも可愛くってよかったのにもったいないわ。でも、無理やり飲ませるわけにもいかないし、メグの努力に期待しましよ。」

そんなことを話していると、後輩の子が蜂蜜漬けを入れていたタッパーを持ってきてくれた。

いつまでのこんな話をしているわけにもいけないのでタッパーをしまつと、今度はアップをしている竜にだけ笑顔で手を振ってみる。

「ふふ、遠いから気づいてないみたいだけど、今の真っ赤になってるメグを竜くんに見せてあげたいわ。」

「もう、今日の鈴は麻美みたいにからかうんだから。」

「当然よ。こんなに可愛いメグをからかわないで心友とは言えないわ。」

そういつて鈴に抱きしめられてしまった。

鈴の方が小柄なのに抱きしめられる率はボクの方が多い気がする。

「そんなことをしていると、またレズジュツの女神なんて言われるぞ。」

余計なことを鈴の横から言ってくる浩太には残酷を当てておいたが、確かにそんな噂が立っては困るのでボクも鈴も離れることにした。

「海良し〜ゴォー!」

「「オー!」」

円陣をかけていたベンチ入りのメンバーから声がかかり、試合がもうすぐ始まること分かる。

今回も竜はスタメンだ。

試合数が多いので休憩時間は長く一試合目も二試合目も時間が短かい、レギュラーメンバーはそれほど疲れていないようだ。これに勝てば明日も試合がある。

「がんばてえ。竜くん。次も勝ってねえ。」

黄色い声も前と同じだ。ボクも今度は鈴にせかされる前に声をかける。

「がんばれえ〜。明日も応援に来てあげるからねえ〜。」

これは鈴と考えた。

こういえばレギュラー陣が絶対に頑張るとお墨付きなので言ったのだが、みんな闘志を燃やしているようだ。

「おお、やる気で満ちてるね。メグの応援は効果あるわ。」

「鈴がこう言えって言ったんでしょ。まあ、勝ったら明日も来てあげるつもりだけだよ。」

「女神ちゃんはこの言葉の意味に隠された本当の意味が分かっていないんだね。」

「どつゆつこと?」

「いいの。メグはそのままが可愛いんだから。」

「うんうん。」

なぜか二人で納得をされてしまった。

二試合目は練習試合でもいい勝負をするところらしく、勝てるかあやしいと言っていたのだが、前半で20対14と勝てそうな雰囲気がある。

前半を終えてベンチで小休憩をしているメンバーに上から声をかける。

「このまま行けば勝てるわよ。相手の5番と3番の子がうまいから気を付けてね。」

試合を見ながら相手の分析をしていたのだが、相手も結構うまい子がいて、

その子たちにうまくボールが行くとシュートを決められていた。

お節介かとも思ったが、下からだけでは見えないところもあるだろうと三番の子と五番の子の癖を寄ってきた竜に伝える。

「ホンマか、じゃあそのしぐさ見つけたらマークに入るように先輩らにいつてみるわな。」

秋に観察してもらってよかった。」

「そうでもないわよ。上からだったからボールをもらう時の癖とか見やすかったのよ。」

竜はサンキュと言ってベンチに戻ると、さっきのボクの言ったことを伝えているようだ。

昔は力でかなわない相手に勝つために、色々相手の癖とかを見るよ

うにしていたので、
それが役立つたようだ。

「メグってよくそんなところ見てたわね。でも、言われてみたら確かにそうかもって思うわ。」

「昔からの癖だね。あんまり鈍感だとボクの場合生死にかかわるから仕方ないよ。」

「その鋭敏さのかけらでも恋愛に向けてくれたらいいのに。」

「そこまでボク鈍感かな？」

「ああ、女神ちゃんは、恋愛に関しては竜に負けていない鈍感さだよ。」

「竜と同じなんて言いすぎよ。」

ボクの言葉に二人は顔を見合わせると溜息をついた。

どうやら本当に竜並みに鈍感のようだ。

ちよっと不貞腐れている間に後半が始まった。

点数も離れていないので今度は、竜もフルで出場するようだ。

「あら、本当にシュートの時とフェイントの時で癖があるわね。

あ、あの子パス欲しがってるわ。」

後半が始まると、鈴もボクが言った相手チームの癖に気づいたらしく、それを探しながら観戦していた。

相手の動きが読めるようになったからか、こちらは余裕ができ、点差は前半よりも開いて海良中学は二回戦を勝つことができた。

「お疲れ様。三回戦出場おめでとう。」

今度は別の場所で女子の試合もあるらしく、邪魔されずに声をかけることができた。

「ありがと、ヨッシーが驚いottaで、みんなもがむしゃらに追いかける必要がなくなつて楽になつたつていうottaわ。」

「でも、力が拮抗してないと、そんな余裕はないわよ。分かつていても動きがついて行かないなんてことは普通にあるからね。」

「確かに鈴の言う通りやな。前半でも勝つていたし、それくらいの相手じゃないと女神ちゃんの助言も意味をなさないだろうな。」

そのあと、ボクらは邪魔になつてはいけないと、会話もそこそこに帰宅した。

友達以上に意識してしまつたので、今日は変な子みたいだつただろうな。

試合もあつたし、竜は気付いてないだろうけど、一日変な子をしてしまつた。

「秋いゝ。竜くんから電話よあゝ。」

嘘？

何かあつたのかな？

明日も試合だし、何かお願いしたいことでもあつたのかな？

「もしもし?」

『秋?俺やけど、明日の試合も今日持つてきてくれたやつ頼める?みんながおいしかったって人気でさ。』

やつぱり、明日のことだったんだ。言わなくたって持つていくのに。

「いいよ。全部食べてくれたから、こっちとしても作りがいあるからね。」

『サンキューな。ところでさ、明日の試合も三人だけで来るん?』

「そのつもりだけど?司も麻美も明日まだ試合があるみたいだからね。」

『いや、アンチ秋のメンバーってバスケット部に多いやろ?』

今日は何もなかったけど、明日は女子バスケット負けたからずっと応援席におるらしいんで、

今日の秋あのメンバー苦手そうにしてたからさ。』

意外とボクのこと見てたんだ。

苦手とかじゃないんだけど、嫉妬しただけだなんて言えないし。

「別に苦手じゃないよ。鈴と浩太もいるから大丈夫よ。」

『無理はすんなよ。俺の試合に来て秋が不幸になるんは嫌やでな。』

竜のこんな真つ直ぐな気持ちにボクは弱いんだろうな。

一生懸命で、不器用で、努力して認められていく。

そんな竜にいつの間にか惚れてたのかな。

「わかったわ。明日も早いんだから早く寝るのよ。」

『おう。おやすみ。』

「おやすみ。」

ボクあんまり今日は寝れないかもしれないな。

そっだ、明日の準備しておかないと、レモンは買っておいだから、はちみつ足りるかな？

その時、電話が鳴りだした。

プルルル。ガチャッ

「はい、蟹津です。」

『蟹津秋さんのお宅でしょうか？美術部でお世話になって……。』

「鈴？秋だよ。」

『やっぱりか、声でメグかもって思ったけど、お母さんだったらと思っただ。』

「うん。どうしたの？長くなるようなら子機に切り替えていい？」

『あ、じゃあそうして。ちょっとゆっくり話したいからさ。』

明日も会うのに、わざわざ電話掛けてくるなんてどうしたんだろう。

子機に切り替えると、はちみつ漬けを作りながら会話を始める。

「おまたせ、どうしたの？明日も会うでしょ？」

『そうなんだけど、浩太もいるからさ。』

「まあそうね。浩太に言えないってことは浩太に関する相談？」

『そうなんだけど、なんで自分のこと以外は鋭いかなこの子は。』

「ボクのことはいいよ。で、相談ってことはついに告白する決心がついたの？」

『竜くんの応援終わったら夏はずっと部活でしょ？』

その間ずっと気まずくなるのもどうかとも思ったんだけど、今日のメグの様子見てたら私も頑張ろうかなって思えてきてね。』

「そっか。鈴もついに彼氏ができるんだね。」

『まだ分からないわよ。浩太はつい最近までメグのこと好きだったんだしね。』

「ボクの感は当たるって言ったでしょ？思いつきりぶつかってごらん。きつとうまくいくよ。」

実際、ボクのこういう未来予知みたいな感覚はほぼ外れることはない。

昔は時々間違えていたが、臨死体験を経験してからは感が冴えわたっている。

『メグからそう言われると勇気がでるね。メグも頑張るんだぞ。』

そのあと、竜から電話がきたことや、どうやって告白するかを話し合う。

試合後に竜とボクが一緒に帰れば鈴と浩太は二人で帰ることになるので、この方向ではなしがまとまった。

明日も二試合あるが、一試合目で負けるだろうとみんな予想していたので問題ないだろう。

もし勝ちあがったら準決勝進出となるのだが、海良はそこまで強くない。

昨日の二試合もかなりくじ運が良かったと竜から聞いている。

「じゃあ、また明日ね。」

ボクは鈴との電話を切る。普段は長電話などしないのだが、偶にはいいだろう。

「おはよ。今日は相手つよいみたいだから、午後から帰ることになるかもな。」

「そうだね。浩太と鈴は終わったらすぐ帰っちゃうでしょ？」

ボクは竜と一緒に帰るから先に帰っていいよ。竜と一緒になら問題な

いからね。」

「そうさせてもらおうかしら。浩太もいいよね？」

ここまでは、昨日の晩電話で打ち合わせしたとおりだ。

「ああ、僕の方もちょっと鈴と話があったんだ。悪いけど先に帰らせてもらおうかな。」

え？

浩太が鈴に話？

ひよっとして？

まさか浩太がそんな思い切ったことはしないとは思うけど、これは願ってもないチャンスなんじゃないかな。」

「おお、秋。サンキユ、ホンマに来てくれて助かったわ。」

もうすぐアップ始まるから観客席んどこおってくれ。三年生も昨日勝てたんで満足してるみたいやからな。」

「目標を低くみたらいけないぞ。」

「それは来年のメンバーに言ってくれや。この夏バシバシ練習して超える目標ができたんやしな。」

やっぱりベストエイトって海良中学ではかなりの快挙らしい。

来年それを超えることを目標とするなら悪くはないかもしれぬ。

「まあ、がんばっておいで、これお弁当とはちみつ漬けね。」

どうせ昨日確認とってるんだし竜に渡してもいいでしょ？」

「催促までしてもて悪いな。レモンの方はゲームの間にたべるわな。」

「うん。負けるってわかってても最後まで走るんだぞ。」

「任しとけ、とりあえず空中では負けへん自信があるでさ。見とき。」

「竜なりに目標をもって試合に臨んでるんだな。」

「今回は空中戦で競り負けないことが、相手チームにも竜くらい背の高い子がいるだろうから心配だけど竜なら大丈夫よね。」

「なんか、昨日より雰囲気良くない？女神ちゃん何かあったの？」

「ちよつとね。夜に電話があつてさ。それにいろいろ二人に相談したおかげだよ。」

「浩太、鈴。ありがと。」

「そういつて二人に笑顔を向ける。二人とも笑顔でかえしてくれた。浩太の反応が柔らかなもの変わって、ボクとしてもこっちの方が付き合やすい。」

「さあ、竜くんもアップに向かったみたいだし、私たちも移動しましょ。」

「昨日と同じ会場なのだが、一日目に敗退した学校が来ていないので今日はゆっくり見れそうだ。」

「昨日込み合っていたギャラリーもなく、三人でゆったりと座った。」

「海良し〜ゴー！」

「「オー！」」

今日も気合入っているね。今日も前半はレギュラーメンバーで行くようだ。

昨日より試合時間が長くなっているから途中でうまく交代するんだろっ。

「ジャンプボール負けるんじゃないわよ。」

大会始まって初めて竜にだけ声を掛けたかも、しかも女子バスケのメンバーよりも先に声掛けるなんてちょっと頑張りすぎかな？

「竜くん！！がんばってえー！！」

黄色い声もきちんと聞こえてきた。

声は竜に集中している様だが、他の先輩たちの応援もきちんといるみたいだ。

昨日は余裕がなくて気付かなかったただけだったんだね。

女子は昨日負けているから応援に来ているのは三年の女子と数名だけだった。

試合観戦も練習とする部活とそうでない部活があるみたいだ。

まあ、ボクたちみたいに大会がなかったりして来ている子もいるかもしれないが、そこまでは分からない。

「お、ホントにジャンプボール勝ちちゃったよ。制空権は本当に竜のものだね。」

「相手も強いみたいだけど、竜くんがゴール前にいればこっちが優勢じゃないの？」

「そうでもないと思うよ。ルーズボールは確かに強いかもしれないけど、

チーム全体としてみたらやっぱり向こうのチームの方が圧倒的に有利なんだよ。

ほら、ボール取られたね。」

そこからは、結構一方的だった。

何とか食らいついてはいつたが、ボールの支配率が圧倒的に向こうの方が上だった。

こちらのパスをインターセプトされ、かなりの確率でシュートを決められてしまっていた。

試合は58対32で負けてしまった。格上相手によく頑張った方だと思う。

途中で竜は降ろされるだろうと思っていたが、先生は逆に三年生を出さずにベンチにいた二年生を出した。

三年生もこれから頑張る後輩たちに最後を託すと、笑顔でベンチに座っていた。

「本当は三年生の子たち最後までやりたかったんじゃないかな？」

「そうよね？ヨッシーのことだから三年生に聞いて交代したんだと思うわ。」

「たぶんそうだろう。僕から見ても三年生の先輩たちはみんなやりきった顔をしていたからな。」

そのあと、昨日みたいにメンバーのところには行かずに、遠くから三人で見っていた。

ヨッシーが泣きながら先輩達に声をかけている姿があり、先輩たちも泣いていた。

浩太と鈴はその様子にちょっと目に涙を浮かべながら、先に帰ってしまった。

「ヨッシーも先輩たちも泣いてたね。」

「せやな。俺もやりきった涙を流して引退したい。これからがんばるって思たわ。」

「運動部も良いもんだね。ボクも男の子だったら運動部に入ってたのかな？」

「たぶんせやろな。でも、秋が女の子でよかったと俺は思うで。」

「なんでだよ。男の子の方が不幸だって回避できるじゃん。」

「秋はこのままでも十分強いけど、男やったら周りから守ってあげようって気にならんかもしれへんやん。

そうなたら、今よりもっとすごい不幸がまっとうたかもしれへんで？」

「なるほどね。じゃあボクはか弱い女の子を演じないといけないんだ。」

「そういうこっちゃ。俺が守ったるから安心しとけ。」

「そう言うのはボクより強くなってからいつてよね。」

「そりゃ無理や。でも、秋にできひんことは何でも言えよ。」

ごまかしてはおいたけど、自転車の後ろでよかった。今のボクは前から見たら真赤になってる。

竜は笑っているけどボクは結構それどころじゃない。

天然でボクのことを口説くとは、竜もやるようになったじゃない。

「夏の間は俺に合わせて帰れよ。」

学園祭の後はどうしても帰宅する秋と一緒に帰ることはできひんから、それまでは守らせろや。」

「学園祭のあとどうしようね。部活終わるまで教室か図書室で鈴たちと勉強とかしてるって手もあるんだけど。」

「めっちゃおそなるで？」

自転車がないからしゃあないっちゃそうなんやけど、武ちゃんってもう大学の授業すくないんやろ？」

「迎えにきてもろたら？」

「その手があったか。じゃあ学園祭のあとは武兄ちゃんに頼もうかな。」

それでも週に何回かは居残りしなきゃだけどね。」

そのあとは、自然と今までのような会話ができた。

昔の話とか夏にどうするかなんて他愛のない話ができたのがちょっと嬉しい。

「今日はお疲れ様。明日からの練習も頑張ってるね。じゃあまた明日。」

「秋も俺らの練習に合わせて学校行くんやろが、お互いがんばるな。」

これから引退した先輩たちとヨツシーで、新しいキャプテン等を決めて新体制でバスケット部も動き出す。

今日見た感じだと二年生の子たちも頑張っているみたいだし、竜もこれからより一層の努力をすることだろう。

竜は力をこめて自転車をこいで行ってしまった。

「あ、鈴と浩太って付き合いだすのよね？居残りできないじゃん。」

ボクは重大な事実が判明し、夏のうちに考えておかないといけない

ことが増えた。

チャプター27（後書き）

今回のテーマは“秋の気持ち”です。秋視点に戻ってみたら、ツンデレを表現するにはどうしたらいいかを悩み、少しだけ照れた秋を表現してみました。

これからも再転の姫君をよろしく願います。

夏の一時

結局、ボクたち美術部は夏の間みんな平日は毎日活動をする事になってしまった。

今日も、全員が参加している。

「メグ、今年は何を作るつもりなの？」

「今年は、アクセサリー数点と絵の予定だよ。鈴と浩太はどうするの？」

「私も今年はオーソドックスに絵にするつもりよ。」

「僕はまだ決めかねているよ。色々と手を出してみてもその中から選ぶつもりだよ。」

そういえば、やっぱり鈴と浩太はあの後うまくいったらしい。

浩太の話っていうのは告白では無かったらしいが、鈴から告白するとおっけーだったそう。

何故か浩太が何を相談したかは教えてもらえなかったが、カップルにそれを尋ねるのも悪い気がして追及はしてない。

「女神先輩のアクセサリーってそれっすか？」

「そうよ。木と革をメインで使ってみたの。シルバーアクセサリー

と違って美術部の備品でも十分に作れるからね。」

「シルバーアクセサリーも好きですが、木でできたものも素敵ですね。」

「私も女神先輩の作品のように手で一つずつ丁寧に作ってみたいですね。」

「由香ちゃんありがと。自然の素材そのままだから、味があつてボクも好きなんだ。」

「女神先輩、私もつけてみて良いですか？」

真奈美ちゃんがつけると何故かエロい気がするボクだが、実際みんなに使ってもらって違和感がないかみたいなので、許可を出す。

まだ三つしかできていないので後輩たち三人につけてもらうことにした。

「どうかな？とりあえずネックレスを三つ作ってみただけど、違和感はない？」

「秋先輩に包まれているような気がします。手造りなのが余計にホツとしますね。」

「女神先輩と木の匂いがします。重くないので肌身離さずつけられます。」

「装飾が派手じゃないんで、うちみたいな動く人間でも全然じゃまじゃないっすね。」

「適切なコメントをありがとう。真奈美ちゃんの発言には何か引かかるものがあったけど、強度の問題はあるかもしれないけど、意外とよさそうね。」

三人から一旦ネックレスを回収する。

「女神先輩、学園祭が終わった後にいくつか作品をいただけませんか？」

「ん？まあアクセサリーだから気にいったなら配ってもいいけど？」

「はい、個人的に欲しいのもあるのですが、来年サンプルとしてみんなで作れないかなあと思っています。」

「うん。いいと思うな。材料の発注先とか、作り方とかもメモを作っておくね。」

「たぶん花火ちゃんとか作らせたなら上手くいきそうなんだけどな。」

「うちがつすか？装飾品なんて店で買ったこともないんで無理っす。」

「花火ちゃんはこう言っているが、実際木を削ったり、模様を描いたりする時に、大胆な削り方ができる花火ちゃんなら、少し慣れれば面白い作品が作れると思う。」

「今すぐ上手に作れなんてメグも言っていないわよ。作る前にシヨップカタログとかで研究してみたらいいんじゃないかな？」

「そうだね。今回ボクが参考にしたカタログなんかメモと一緒に残しておくし、
買い物に行った時に少し眺めてみたらいいよ。」

「了解つす。今年のうちも絵にしようと思うんで無理っすけど、来年は挑戦してみるっす。」

「ふふふ、メグと一緒に並べても見劣りなんてしないから今年から始めてもいいんだよ。」

ボクは花火ちゃんの頭を撫でてあげる。

「いやいや、女神先輩の隣ってのは、やっぱり勇気がないっす。でも、学園祭が終わったら指導お願いしたいっす。」

「みんな、ボクのこと超人みたいに思ってるかもしれないけど、
一つしか学年も違わないんだから、そんな風に考えなくていいのよ。」

「そういつて今度は由香ちゃんの頭も撫でてあげる。」

真奈美ちゃんが物欲しそうにしているので、花火ちゃんを撫でていた手を離して真奈美ちゃんも撫でてあげた。

「秋先輩は私たちのあこがれなんです。」

「一つしか違わないって言われても浴衣のコンテストもそうですし、
秋先輩が作るものって本当に素敵だなって思うんです。」

「ありがとう。ボクもみんなの期待に応えられるように頑張らなく
つちやね。」

そうやってボクはアクセサリー作りに取り掛かった。
しばらくデザインをまとめていると、鈴にお昼ごはんにしようといわれた。

「あら？もうそんな時間？

竜たちもそろそろ来る時間だし、一旦片付けしてお昼にしましょうか。」

「そうですね。まだ休みはありますし、休み明けでも多少は時間がありますから焦る必要はありませんよ。」

「そうだね。じゃあ竜たちが来る前にお弁当が食べられるように片づけをしておこうか。」

「片づけて言ってもほとんど浩太が汚したんでしょ？

メグは今日はデザイン画だけだし、私たちは絵を描いているんだからこんなに散らかしたのは浩太だけよ。」

「というか、浩太は何をこんなに削ったんだ？」

「うむ、この木片を見ていたら削りたくなった。

今まで作品が基本二次元世界で構成されていたから、今後は3Dの世界に挑戦しようと思ってるね。」

「まあそれは良いんだけど、せめて計画性を持ってやってよね。でも、なんだかそれ何かの形に見えるわね。」

「ああ、削っているうちにイメージが沸いてね。

たぶんこのままだったら神話に出てくる聖獣とかができるかもしれないね。」

今まで絵を描いてきたが、彫刻って僕に合っているかもしれない。」

「相性云々はわからないけど、この短時間でこれだけの木くずを出すってのはすごいわね。」

「さあ、話てるよ。本当にみんな来ちゃうわ。手分けして片づけましょ。」

「ボクらが美術室を片づけていると連れだって麻美と司と竜がやってきた。」

「おなかすいたよお。」

「ホンマやで、秋い飯まだ？」

「二人とも、私まで催促してるみたいだからやめてよ。」

「相変わらずの三人の反応だ。」

「ご飯を待ち望む子どもの二人とお姉さんの麻美。」

「待つてね。これだけ片づけちゃうから。浩太が張り切りすぎちゃうてさ。」

「浩太！お前は俺のご飯を邪魔するとはいい度胸やないか。」

「お腹が空いている影響か、竜は浩太に向かって良く分からない恨み事を言っている。」

「ところで竜はお弁当持ってきたの？」

「は？秋が作ってくれとるんとちゃうんか？」

「なに言ってるのよ？今日はみんな自分の分もって来てるわよ？」

「マジで？司、弁当もってないやん？」

「僕の分はあ。麻美が作ってきてくれたよあ。」

司の声と共に麻美は司の分と自分の二つのお弁当を取り出した。

「浩太。お前はないやろ？」

「馬鹿ねえ。私がつって来たに決まってるでしょ。」

こちらも鈴がお弁当を取り出している。

片づけも終わり一年生の三人はそれぞれ自分の分を取り出していた。

「ちょま、お弁当ないん俺だけか？」

「毎日ボクが作ってたら大変だから、それぞれ持つてくるようにって昨日言ったじゃない。」

「そんなあ。母さんに秋が作ってくれるから夏休み中はいらへんっていうてもたわ。」

「全くしょうがないわね。どうせそんなことだろうと思ってたわよ。」

そういって、ボクは自分の分と竜の分として二つのお弁当を取り出した。

もし、竜が覚えていて、持ってきていたら、みんなで少しづつ分け

てもいいし、

竜なら二つくらい食べられると思っていたのだ。

「サンキュー、秋。やっぱり俺のことようわかつとるわ。」

「わかりたくないわよ。今日だけだからね。」

「ちょま、せやから母さんに夏休みいっぱい、いらへん言つてもたから、明日からも作ってくれへんって。」

「それくらい説得しなさいよ。お母さんだつてきちんと言えば明日からは作ってくれるでしょ?」

「秋が作るつていうたら。絶対に夏休み中は作らないから、
拜んでも毎日作ってもらいなさいって言われとるんやけど……」

「はあ?なんでそうなるのよ。それなら自分で作りなさいよ。」

そのあと竜は本当に土下座までしようとし、
ボクも仕方なく今後のお弁当を作ってくれることを承諾してしまった。

「良かったわね、竜くん。秋の愛妻弁当が毎日食べられるようになつて。」

「その代わりに、練習がない時も美術室に来て手伝つてよ?」

「毎日自転車で送り迎えしたつとるやないか。」

「お弁当いらなの?」

「手伝わせていただきます。」

「よろしい。」

「竜くんは将来メグの尻にしかれるわね。」

「そうかしら？ 案外秋ちゃんって献身的に尽くすタイプだと思うわよ？」

「確かにそうかもね。」

「その二人！！ボクは竜の奥さんじゃない。」

「はいはい、今は奥さんでも妻でもないわね。」

この二人はボクの気持ちを知っててこんなことを言うんだから。竜から顔をそらして怒った顔をする。

「怒った女神先輩も素敵です。」

真奈美ちゃんがそう言うのと、麻美になぜか抱きつかれてしまった。ボクは本当に怒ってるんだぞ？

「まあ、秋の弁当は美味しいから、ほんまありがとな。」

竜にそんなことを言われてしまったので怒る気が失せて微妙に顔がゆるんでしまった。

「秋ちゃん。顔がゆるんでるわよ。まんざら作るのが嫌でもないん

でしょ？」

「そんなことないよ。ペコの散歩にいけなくなるじゃないか。」

「ペコちゃんの散歩は夕方でしょ？」

それとも竜くんのお弁当を何にするか考えて一日集中できないのかしら？」

麻美にはかなわん。

何を言い返しても竜と結びつける気だ。

まあ竜はボクが作ったお弁当に夢中だし、ボクらは聞こえないように小さい声で話しているので問題はないが。

「麻美い。それくらいにしておかないとお、真奈美ちゃんの二人を見る目がおかしくなってるよお。」

そういうことはもっと早くいつて欲しい。

ボクらは離れると、真奈美ちゃんに心友同士の抱擁であつて、けしてアブノーマルな関係ではないと伝えておいた。

「でも、秋って昔っから女の子にもモテるやん。」

「うるさい。ボクはノーマルだ。」

お弁当を食べ終わって変なことを言い出した竜には暗黒をプレゼントしておいた。

せっかく食べたお弁当がもったいないので腹部は避けておいた。

「あんなに美味しそうに食べてたから吐き出してほしくなかったのよね。」

「違うわよ。食材がもつたいないでしょ。」

そうはいつでも、麻美にはやっぱり見透かされているようで勝てそうにない。

「真奈美ちゃん。」

麻美を見習ってメグのこと上手に自分の方に向かせようなんて無駄よ。

麻美の場合自分に向かせるんじゃないかって誰かさんのことを上手にあおってるんだから。」

「確かにそうですね。女神先輩の気持ち余計にある人に向かっていくだけですからね。」

「鈴、真奈美ちゃん。最近足技使っていないから使ってみようか？」

「スカートめくれちゃうわよ？」

まあ、下にはいてるのに自信があるの？そんなに見てほしいんだ。」

そういつて、後頭部を強打されて悶絶している竜の方に流し眼を送った。

「なんか最近鈴と麻美の言い方が似てきた気がする。」

「私たち心友だもんね。」

鈴も私も秋ちゃんがとあることで悩んでいるのを解決してあげたいだけなのよ。」

確かにたくさん相談に乗ってくれているが、その分からかわれてい

る気がしてならない。

「からかって楽しんでるの。間違いじゃないの？」

「だって、メグってとあることになる我真っ赤になって反論するからすつごくかわいいんだもん。」

やっぱりからかってるんじゃない。

全くとんでもない心友を持ってしまった。

「まあ。昔からあ、秋はからかわれてたからねえ。」

「司が言うなあ。一番の元凶はあんたでしょ。」

「麻美い。そう言えばねえ。今日の朝なんだけどお。」

「まったああ。」

ボクはとりあえず麻美の間にはさんでいたため、少し距離があった司に黄金を使って黙らせた。

「あ、白色。」

頭を押さえてかがんでいた竜には見えてしまったらしい。

「あんたももう一回寝とけ。」

竜に残酷をあて、司と竜の二人をノックダウンさせておいた。

「朝どうしたのかなあ？秋ちゃん心友に秘密はなしよ？」

「そうそう。朝メグとそこで倒れている人の間に何があったのかしらっ。」

麻美も鈴木も興味津津といった様子でごまかすことができなさそうだ。

「ああ、司の話だと、妙に意識した女神ちゃんが竜の後ろに乗るのを渋って、竜が抱きかかえるようにして乗せたらしいぞ。」

「なんであんたがしってるのよ。」

「朝、美術室に来る前に司と話をしてたんだ。」

もう、知らん。

結局後輩たち含めてここにいる全員に知られてしまった。

「竜くんって大胆なのね。朝から秋ちゃんのこと抱きしめてたんだ。」

「浩太じゃ、抱きしめるなんて度胸がなくてできないわよ。」

「そ、そんなことない。」

というか、竜のは天然で女神ちゃんが何を考えてるのか分かって無かっただけじゃないか。」

ボクが真赤になっている間に鈴と浩太は夫婦喧嘩を始めた。

こんなやりとりをしているが、二人の仲がいいのは空気で分かる。

「まあ、秋ちゃんも、もうちょっと竜くんに優しくしてあげなさいよ。」

照れる気持ちはわかるけど、竜くん完全に伸びてるじゃない。」

「うう。痛かったあ。」

「あら？司のダメージはたいしたことなかったみたいね。
やっぱり竜くんの方がおもいつきり攻撃しちやっってるんだ。」

「竜は昔から失言キングだったから、ボクの攻撃には慣れてるよ。
多少威力込めないとここまで伸びないんだよね。」

しばらくすると竜も回復して恨み事を言ってきた。

「いつてえ。今日のは本気でやばかったで、二回連続やし、
回復する余裕もあらへんかったやん。」

「乙女の下着を覗いたんだから当然よ。」

「秋ちゃんの下着を見たのは竜くんだけなんだから良いじゃない。」

「良くない。今日はそんな可愛いのはいてきてなかったんだから。」

「じゃあ、可愛いのだったらいいのかしら？」

「それは……。」

麻美は絶対にボクのことをからかって楽しんでるんだ。

ボクは真赤になりながら反論しようと思をめぐらす、普段は早い
回転も、

なぜかこういう時にはうまく回らず良い言葉が浮かんでこない。

「ごちそうさまあ。竜と僕は午後から自主練習してるからあ、終わったら教えてねえ。」

どっちの部活も自由参加だから人数少ないしい、自由に抜けれるからあ。」

午後からは自主練習らしい。

空気を読んで助けてくれたのが、それとも、マイペースなのか分からないが、

司のことなので空気を読んでくれたんだろう。

「男子は大変ね。私は午後から無いから、しばらく秋ちゃんをからかってから野球部の方見に行くわね。」

麻美の声を聞くと、竜と司は二人して美術室を出て行った

何？むしろからかいモードを助長しただけなのか？

「秋ちゃん。何を考えてるのか当ててあげるわ。」

竜くんがいなくなったから、きちんと固有名詞を出してお話しまし
ようね。」

「あう。ボクの話はやめない？学園祭に向けて作品をつくらないと。」

「そんなこと言っても、まだ時間はあるんだし、メグのこと気にな
つてみんな作品に集中できないわよ。」

「ええ？ボクのことなんかみんな気にしないで作品に取り組もうよ。」

「女神先輩の話すつごく気になります。」

「合宿後から気になってたんですが、前と違って竜先輩のこと意識しすぎてませんか？」

「そつすね。うちも、なんや前より女神先輩の竜先輩に対する反応がおかしくなってる気がするっす。」

結局このあと、麻美と鈴にからかわれながら、今までの経緯と、竜にクリスマスまでに告白をすることを教えることになった。

「結局、司以外の全員がこの話しってることになるんじゃない？」

「あら？司にはもう伝えておいたわよ？クリスマス一緒にデートするんでしょ？」

「確かにそう約束したけど、早過ぎないかい？」

「そうでもないとおもっぞ。僕と鈴も参加することになっただし、早めにデートコースとか決めておかないと、海良町内では遊ぶ場所なんてないんだしな。」

「まあ、デートするんだつたら街にでないと遊ぶ場所ないのはわかるけど、

ボクと竜が付き合うとは決まってるじゃないか。」

「でも、秋ちゃんは竜くんじゃなきゃいやなんでしょ？なら、決まっただも同然よ。」

「竜がボクのこと好きとはかぎらないじゃないの？」

確かに、小学生の時に一度キスをしたこともあり、竜とボクは仲もすごくいいと思うが、

竜から告白してもらったことは無い気がする。

「そっか、今まで秋ちゃんに告白させることはすっかり考えてきたけど、

よく考えたら秋ちゃんの気持ちは分かっているんだから、照れ屋の秋ちゃんをせつつくよりも、

竜くんをたきつけた方が早いかもしれないわね。」

「待ってよ。そりゃボクも女の子だから告白してもらった方がうれしいけど、

竜が嫌なら無理やり気持ちを曲げてまでボクのこと好きって言わせるのはダメだよ。」

なぜか全員からあきれた目をされ、溜息を吐かれてしまった。

「秋ちゃん。要は竜くんの気持ちをきちんと知りたいわけね？」

「じゃあ、竜くんが自分から秋ちゃんに好きって言ってくれたらオッケー出すわね？」

「それは、嬉しいし、そこまでされたらいくら照れたってオッケーですよ。」

竜から真剣に告白されたら、いくら恋愛音痴のボクだって、きっと快くオッケーをだして竜と付き合っことができるはずだ。

「何だかあやしいけど、わかったわ。司と相談してみるわね。」

まあ、秋ちゃんが言うように竜くんが嫌って言うたら

無理に告白させることはしないから安心なさい。」

「そうね。やっぱり、女の子から告白するのはいけないのよ。浩太も見習いなさいよ。」

「まあ、私と司も私からだっだし、考えつかなくったけど、女の子としては男の子からの告白って憧れるわよね。」

そのあと、鈴と麻美で互いの彼氏の話になり、浩太が真赤になることとなった。

ボクは二人の話を聞いてなんだか彼氏ってすごくいいなと思った。

「いつまでも恋話なんてしてたら作品ができないし、そろそろ自分の作品にとりかかるぞ。」

話題の的になったことにより、浩太が作品作りを呼びかけると、麻美と鈴も十分気が済んだのか、合意する。

「じゃあ、私は司のところについて今日はもう帰るわね。」

明日から秋ちゃんは竜くん分だけでお弁当はいいから。」

「麻美先輩は最後までからかうのは忘れないんですね。」

真奈美ちゃんの言う通り、ボクは真赤になりながら麻美にさよならをした。

明日からのお弁当どうしようかな。

「流石に私たちも女神先輩のお弁当にはかり頼ってられませんね。」

「そうだな。女神先輩に負けないように、うちらもお弁当作りが」

ばろつぜ。」

「秋先輩のお弁当には勝てない気がするんですが？」

「由香ちゃん。女神先輩も言ってたけど、がんばるのよ。勝てないまでも、負けないようにいまから努力しなきゃ。」

「それって、うちのアクセサリーのはなしっちゃん？」

「いいのよ。とにかく、女神先輩に追いつくように努力することが大事なのよ。」

女神先輩の周りに、何かとすごい人が集まるのは女神先輩を見て一緒にがんばろって努力するからそうなるのよ。」

「ほう、真奈美ちゃんは中々良いところに気づくわね。」

あの竜くんも、道場でメグと一緒に頑張って一生懸命練習したからあんなに運動ができるようになったのよ。」

「私も後輩として道場に通ってましたから。」

竜先輩はいつも女神先輩に負けないようになって人一倍がんばってました。」

「そうね。メグもそういうひた向きで一生懸命なところが好きになつたんでしょ？」

「まあね。」

竜は昔から何かにつけてボクに勝とうと頑張ってきたから、ボクもそんな竜を見てたらなんだかそういつの良くなって思っちゃつたよ。」

「ふふふ、本人がいない時はこんなに素直なのに、竜くんから告白されてもちゃんとオツケーするのよ？」
間違っても照れて断ったりしちゃダメよ。」

「大丈夫、だと思う。」

「もう、今のうちにどんな風に告白されても大丈夫なように考えておきなさいよ。」

いきなりだと混乱しちゃうかもしれないけど、あらかじめ分かっていたら多少は照れなくなるでしょ。」

「そんなこと言っても、まだ本当に竜がボクに告白してくれるか分からないし。」

そういうと、さっきと同じような反応を返され、最後に鈴に肩を叩かれて言われた。

「メグのそういうところ嫌いじゃないけど、竜くんがかわいそうになっってくるわ。」

「どういう意味よ。ボクは竜に悪いことしてるのかな？」

「そうじゃないわ。でもね、メグはもう少し自分ってものに興味を持ってほしいと思うの。」

いつも他人のことばかり考えて、自分が周りからどんな風に思われているか分かってないでしょ？」

「うう、多少は分かっているはずだよ。」

不幸少女で周りに迷惑かけてるし、最強美少女なんて言われて恐れられてるし、

芸術の女神っていわれてある程度評価してもらってるのはわかってるもん。」

「メグにこの話は早かったわね。いいのよ。メグはこのままでいてちょうだい。」

????

鈴の言ってることはよく分からない。

確かに、中学に入ってからあまり暴力を振るわなくなったから、芸術の女神なんて言われて多少モテるようになったが、

不幸少女という体質があるので、鈴たち以外にはあまり親しくできないし、

小学校から知っている子が伝えたため、最強美少女として不良たちにはケンカをする前に逃げられると自覚しているつもりだ。

実際最近では竜と司と浩太以外攻撃した記憶がない。

あ、真奈美ちゃんはちよくちよく抱きついてきた時に反撃するか？

「ねえ。真奈美ちゃん。ボクって何をわかってないの？」

「えっと、私からは教えることはできません。」

「由香ちゃんならわかる？」

「私も推測はできますが、やはり今秋先輩に何かを教えても意味がないかと思います。」

「どづいうことよ？花火ちゃんなら説明できるかな？」

「うちも、女神先輩と一緒にこういうんは苦手なんで、女神先輩ほどではなさそうっすけど。」

「ええ？余計にわけわかんないわよ。」

「メグ、とりあえず、時間まで作業しましょ。」

今は忘れて学園祭に出す作品に取り掛かった方がいいわ。麻美と司くんに任せておけば大丈夫だから。」

結局ボクは良く分からないまま、このあと夕方までアクセサリーのデザインを描くことにした。

ネットレスしかなかったが、プレスレットなど、

革紐と木を組み合わせて色々な装飾品のデザインができ、

あとは種類を増やし、作成に取り掛かることになるだろう。

もう一つ考えている絵は作品の構成とタイトルはすでに決まっている。

描き出せばきつとすぐに筆が動くことだろう。

「お疲れ様。今日って司ちゃんと麻美は先に帰ったんでしょ？」

「そうだね。麻美が出て行ってからずいぶん経つからたぶん先に帰ってるだろうね。」

「じゃあ、私たちも二人で帰るから、メグも二人つきりね。」

あ、今日は暗くないし、浩太も同じ方向だと思っていたが、付き合いだしたのだし、おくっていくんだっけ。

「あれ？真奈美ちゃんは？」

「メグがデザインに集中してる間に由香ちゃんと花火ちゃんと一緒に帰って行ったわよ？」

「なんでも私たちに負けないように親友の仲を深めるんだってさ。」

「私も鈴たちと帰っちゃだめ？」

「メグって竜くんの荷台に乗るんでしょ？」

「だったら、行き先の決定権は竜くんにあるし、私たちと一緒にだと余計に意識するだけじゃないかしら？」

確かにそうかも、今日までうまく司や麻美と一緒にいたのでなんとか、

あまり意識せずに来れたが、鈴の家に向かっている間浩太と鈴の邪魔をしてしかも、

鈴の家に着いた後も浩太と一緒にいても竜の荷台でうまく話せるとは限らない。

二人のカップルを邪魔するよりも竜と普通に帰った方が意識しないで済むかもしれない。

「メグ、私と浩太は帰るわね。竜くんとうまくやるのよ。」

「そんなこと言われると余計に意識しちゃうよ。」

「女神ちゃんにしてはいい傾向だと思うよ。」

「今まで完全に友達感覚だったのが、男の子として竜を意識してるんだからな。」

結局二人は先に帰ってしまったので、ボクは竜を呼びに体育館に向かった。

シュツツ ダンダン ガツン。

体育館に着くと、竜の他には誰もおらず、一人が残っている竜の姿があった。

「さっきのダンクでしょ？本当に届くんだね。」

「お？秋か。さっきまで秋が来るからってみんな待ったんやぞ。」

「そうだったんだ。ちょっと集中しちゃって、きりがいいとことまでやるうと思ったらこんな時間になっちゃったよ。」

「そっか。これ片づけてくるで、ちょっとまったり。」

そう言っただ竜はバスケットボールを倉庫にもって行った。

「おまたせ。」

「ううん。ボクの方こそ待たせてごめんね。」

「そうでもないで？ほんま、ついさっきまでみんなおったし、自主

練習とはいえ、バスケすんのは楽しいしな。」

「そっか、今度自主練習に参加しちゃだめ？ボクもダンクやってみたい。」

「秋のジャンプ力なら届くかもしれへんな。こんなにちっこいのにすげージャンプすっからな。」

そう言つて竜はボクの頭を撫でてきた。

「ちっこくないよ。竜がでかすぎるんだよ。」

「まあな。なんも勝てへんけど、身長だけは秋にいつの間にか勝つてたからな。」

「そんなことないよ。竜だつてすごいと思つよ。」

「サンキユ。ほな帰るか。」

「うん。」

さつきまで変な心配してたけど、竜と二人きりになつても、竜はいつもの竜だと思えた。

頭をなでられた時はちよつと緊張したけど、なんだかくすぐったかつたし、

ずっとしてほしいと思えた。

「はよ乗れよ。それとも今日は走って行くか？」

「ううん。後ろに乗る。スカートじゃなかったら走るのもいいかも

ね。」

こう言ったがボクはスカートも最近では気に入っている。だって、走れない代わりに、竜の後ろに乗れるから。

竜の後ろに乗ると、ヘンテコなヘルメットを被った竜は力を入れて漕ぎだした。

「おい、そんなひつくと汗かいたるしあついやろ?」

「ん〜。もう日が高くないしそうでもないよ。落ちるといけないからこつこつしてる。」

「そつか。まあ、落ちるとは思えへんけど、秋がそうしたいならそつとき。」

「うん。」

まだ、竜の顔を見ながらこつこついうことはできないけど、後ろからなら、甘えられる。

そのあとも、今日のバスケット部であった話を竜がしてくれたり、ボクが今作ってるアクセサリーの話などをしながら帰った。

鈴に意識して上手く話せないかもしれないと言っていたが、竜と一緒にいたらなんだかいつの間にかいつもの自然な雰囲気になってい

た。
荷台で竜の背中を見つめながら何となく夕焼けのためだけじゃなく顔が赤くなっているところを除けば前と変わらない二人の関係がそこにあった。

「バスケ部の練習参加したいならヨッシーに言うときよ。」

「うん。吉川先生に運動できるのばれると、運動部に掛けもちとかで参加させられそうだし、みんなにバレない時にするよ。」

「せやな、だったらみんなにも見せへん方がいいか？」

「うん。今日みたいに竜が一人で残った時にワンオンワンしよっか。」

「これでもバスケ部のエースやから負けとれへんな。」

「まだまだ、ボクに勝つのは無理だよ。ボクに勝てたら何かいいことしたげても良いよ。」

「秋と掛けするん久しぶりやな。ほな、この夏でうまくなって負けせたらなあかな。」

チャプター28（後書き）

いよいよ。秋と竜の係に進展がありそうですね。

そして、軽くフラグが立ちましたね。AKIはこういう伏線大好きです。現在28を書いている段階では何にも考えずに伏線張りました。

ではでは、おまちかねの？

テーマ発表にまいります。“秋のツンデレをどう表現するか”です。

正直ペコの方がツンデレな感じがし、実は番外編ペコの気持ちはこの28を書く少し前に書いていたため、ペコに負けないように秋にもツンデレになる要素をたくさん入れ込んでみました。これって27と同じじゃないかという感じもしますが、ここ最近の課題なので申し訳ありませんがこのテーマでがんばらせてもらいました。

では、今話もお読みいただきありがとうございました。

チャプター29 (前書き)

武満出番到来

チャプター29

夏祭り

「女神先輩。明日の夕方、隣町で開催される夏祭りに一緒にいきませんか？」

「ボクはちょっと、今年はやめておこうかと思ってるんだけど。」

「せっかく先輩が浴衣を作ってくださいたのだから、その浴衣を着て祭りに参加したいってみんな言ってますよ。」

真奈美ちゃんの発言を聞いた秋は、由香や花火の様子をうかがう。二人とももう一度あの浴衣を着て祭りの会場に向かいたくてうずうずしているようだ。

「メグって祭り好きじゃなかったっけ？なんで今年は参加しないの？」

秋は、昔から行事ことは好きで毎年祭りなども竜や司と一緒になっ
て参加していた。

「いや、今年は司と麻美が付き合ってるし、鈴と浩太もカップルで参加するでしょ？」

ボクは一人で参加すると、いろいろな面倒に巻き込まれちゃうから、
やめておこうかと思って。」

「竜くん一人いれば問題ないんじゃないの？」

それに、男女比は別に問題ないんだし、真奈美ちゃんたち一年生もいるんだから行きましようよ。」

「女神ちゃんが行くなら、みんなも張り切って参加するし、良いと思うぞ。」

美術部内では全員参加の雰囲気ができあがっており、これ以上断ることが困難になってきた秋は本音を吐露する。

「その、竜と一緒にっていうのがなんだか今年は恥ずかしくって。」

その秋の言葉に全員が納得し、なおかつ反論した。

「なら、メグは参加決定ね。祭りの日は他の部活も練習ないはずだから、竜くんたちも全員参加するように伝えておくわ。」

「そんなあ。ただでさえ合宿以降、変に意識しちゃってダメなのに、普段と違うところになんていけないよ。」

秋が弱音をはいたが、鈴たちには通用しなかった。

「メグにはいい機会だと思うわ。それに、メグが自分で作った浴衣を着ていくんでしょ？」

絶対に竜くんも喜んでくれるから安心して参加しなさい。」

何に安心したら良いのかといった秋の様子を部員たちは眺め、それぞれが祭りに参加するように促していく。

ついに、説得に折れた秋は美術部員と心友のメンバーで祭りに参加

することを承諾するのだった。

「秋先輩の浴衣姿がもう一度みられるなんて嬉しいです。」

「そうよね。本当に浴衣姿の女神先輩は素敵だったわ。」

「祭りの当日はコンテストでもないから、あんまりお化粧とかはしていかないよ。」

「メグは本当にそれでいいのかしら？ 竜くんも来るんでしょう？ せっかくだからお化粧した方がいいんじゃないかしら？」

鈴の言葉に赤面した秋は、明日の祭りですどうするか悩むのであった。鈴や麻美の性格を考えても、からかわれたり、恥ずかしい思いをする気がして不安もあり、
みんなで一緒に周れることに嬉しい気持ちも確かに存在していた。

部活を終わり、帰りに麻美や司や竜に確認をとると、それぞれから良い返事をもらい、みんなでコンテスト用に作った浴衣を着て参加することを承諾して秋たちは自宅へと帰った。

「武兄ちゃん。明日暇よね？」

「明日ってお祭りだろ？ 秋も行くのか？」

「うん。合宿で一緒だったメンバーで行くんだけど、みんな浴衣だから車出してほしいんだけどいいかな？」

「ああ、別にかまわないけど、明日は何人乗るんだ？」

それに会場は混むから、近くまでしか乗り入れできないぞ？」

「駐車場いっつも満員だもんね。みんなそれぞれ送り迎えしてもらえらしいから、

竜と司と麻美の三人だけでいいみたい。」

「じゃあ良いよ。この前みたいに往復することはできないからな。それに今年は真美子ちゃんから誘われてるから、司の家で真美子ちゃんも拾っていかないとな。」

「え？武兄ちゃんって司のお姉ちゃんに手を出してるの？」

「手を出すって、まあ昔から交流はあったけど、この前バイト先で偶然会って、

夏祭りに誘われただけだよ。」

武満は秋ほどではないが、結構モテる。

ちよっと？シスコンが入っていたため以前は女子から避けられていたところもあったが、

秋が成長すると共に、良い兄としての立場が周りからは面倒見の良い優しい男と印象を良く変換された。

元々顔立ちも悪くなかったので、高校時代から徐々にモテ出した。

本人は意識していないが、周囲からアプローチもかなりある。

古風なのは顔立ちだけでなく考え方も利也に似たのかあまり女遊びをすることもなく、友人として健全な仲を保っていることが多い。

「武兄ちゃんって、モテるんだから、そろそろ彼女の一人くらい作ったら?」

「何人が付き合ってみただけど、向こうから告白された影響があんまり真剣に恋できなくて、すぐに別れちゃうんだから仕方ないよ。」

「早く好きな人見つけてよ。ボクはこの家継ぐ気無いんだからね。」

「はいはい、どうせ竜と一緒にちよくちよく実家に帰ってくるんだから継がなくても平気だよ。」

「なんでそうなるのよ。別に竜とはそんな関係じゃないんだから。」

「秋の態度見てたら、竜以外いないと思うんだが?」

「今はそうかもしれないけど、将来は分からないじゃないの。」

秋の性格はわかりやすいらしく、自分のこととなると鈍感な武満にもしっかりばれており、

両親の中でも竜と今後付き合うのだろうと考えられていた。

「秋ちゃん。お母さんは竜くんなら賛成だから、付き合いだしたら隠さないでちゃんと報告するのよ。」

「はう。」

好美にまでからかわれて、赤面してしまう秋だった。
これでは、明日の祭りでどうなるか分からない。

「司く武満さんと秋ちゃん来てくれたわよ。」

真美子が家の中で、まだぐずぐずしている司を呼んでいる。

「真美子さんお久しぶりです。その浴衣可愛いですね。」

昔は司の家に良く通っていた秋だが、小学校の高学年から数が減り、中学生になってからは全く来なくなってしまうので、真美子と会うのは2年ぶりくらいだ。

「秋ちゃんも見ないうちに本当にきれいになったわね。その浴衣すっごく素敵ねどこで買ったの？」

「ボク今、美術部に入っていて、自分で作ったんです。」

「ええ？手造りなんだ。すっごく良いわ。私も作ってほしいくらいよ。」

「ちよつと、材料費が高くなりますがそれでもよろしければ、今度作りますね。」

今日一緒に祭りに行く子たちはみんなボクが作ったので、こんなデザインが良いとか考えておいてください。」

「ええ？それ一つじゃなくてまだ作ったのがあるの？」

「じゃあ、今年は無理だろうけど、来年までに秋ちゃんのお家について相談させてもらおうかしら。」

「はい、十二月以降なら学園祭も終わって余裕があるとおもつので、それくらいに来てもらえば来年に間に合うと思いますよ。」

「おまたせえ。やっぱり慣れないと歩きづらいねえ。」

真美子と秋が浴衣のことで盛り上がっていると、司も勝手口から出てきて、車に乗り込む。

このあと先に近い麻美の家により麻美を乗せると竜の家に向かった。

「お兄ちゃん。秋姉さんたち来たよ。」

「おお、今行くわ。」

竜もきちんと浴衣を着て出てきた、これで全員そろったことになる。

「武ちゃん。貴史も一緒に乗せてもらえへん？」

友達と向こうで合流するから、会場に着いたらほっといたらええんやけど、

隣町まで遠いで大変やってことになってさ。」

「座席も余ってるし良いよ。後ろで調節して乗ってくれ。」

予定になかった貴史くんも一緒に乗ることになったが、武満の車は大きいので十分に乗れた。

ただ、みんな浴衣の中に運転手の武満と貴史だけ普段着なので微妙に浮いていたが、

本人はあまり気にしていないようなので問題ないだろう。

「少し早めに着くかもしれないが、渋滞するだろうからもう会場に向かうよ。」

「うん。みんな浴衣着てるからゆっくり歩くことになるから大丈夫だよ。」

集合時間は6時に会場側の本屋の前となっているが、本屋なので時間もつぶすことができるし、

早く来すぎてる子がいるかもしれないので少しくらい早く着くのは問題ない。

早めに着くはずが、会場の側まで車が着くと既に渋滞しており、真美子と武満が車に残り、帰りの待ち合わせ場所と時間を確認すると先に降りて秋たちは集合場所に向かった。

「こんな時にケータイってあると便利よね。」

「確かにね。最近公衆電話も少なくなってきたから、ケータイがないと連絡取りにくいよね。」

まだ中学生なので、田舎の海良町ではあまり使う機会も無くケータイを持っていないが、祭りなど、少し外へ出かけた時には欲しいと思ってしまうものだ。

「まあ、高校に入って帰りが遅くなったりしたら買ってもらっちゃし、ええやん。」

「ボクの場合はずぐに警察や救急車が呼べるから早めに欲しいところだよ。」

「秋ってさあ。最近不幸体質を認めだしちゃったよねえ。」

「仕方ないわよ。ここまで頻繁に色々なことに巻き込まれてたら体質を否定するよりも対処を考えるしかないじゃない。」

実際不幸が起こる原因のようなものも、ある程度把握することができたため、

不幸な出来事が起こらないように予防したり、起きてしまった場合に備えてしまう秋だった。

「ほんま、小学校の時に有名人にならんくて正解やったな。

あの時もしメディアに紹介されてたら、幸せを願ってくれる人も増えたかもしれへんけど、

それ以上に妬みや嫉妬で今頃不幸体質まっしぐらやったかもしれへんもんな。」

「そうね。秋ちゃんはかなり賢明な判断をしたとおもっわ。

おかげでこうやって心友たちに囲まれていれば、安全に遊ぶこともできるんだもの。」

そんな話をしていると集合場所の本屋が見えてきた。

「秋先輩！！こっちです。」

そこには時間の10分前だというのに既に由香ちゃんと花火ちゃんが待っていた。

「二人とも早いね。鈴と浩太と真奈美ちゃんは時間ぎりぎりかな？」

「めえくがくみ先輩！」

「キヤツ。」

人込みで気配を消して近づいてきていた真奈美に気づかず秋は後ろから真奈美に抱きつかれてしまった。

「真奈美ちゃんもついてますよ。さっき飲み物を買って行くって少し離れていただけです。」

「由香ちゃん。抱きつかれる前に言って欲しかったかな。」

「真奈美の愛の抱擁を拒否するんですか？こんなに愛しているのに。」

そう言つて真奈美は秋の胸に手を伸ばしていった。

「ちょ、や。ダメえ。」

「相変わらず女神先輩の胸は大きいし、反応が可愛すぎます。」

「今日は、ん、浴衣だか、ひゃ、やめ・・・」

「女神先輩は最近真奈美に構ってくれなかつたのでこうして抵抗できない時に思いっきり堪能させてもらい。痛！」

「まったく何してるのよ。メグ、大丈夫？」

ちょうど浩太と共にきた鈴に、真奈美は頭をはたかれ秋と離されてしまった。

「鈴先輩。酷いです。先輩と後輩のスキンシップをさせていただけるのに。」

「じゃあ私もスキンシップの一つよ。油断したらすぐこれなんだから。」

「ええん。浩太先輩。鈴先輩がいじめます。」

そう言つて浩太に泣きつこうとしたが、全員が真奈美のやりすぎた状況を理解しているため、真奈美は結局たしなめられてしまった。

話が一段落すると、それまで一緒にいた貴史が秋に声を掛けた。

「秋お姉さん。僕そろそろ友達のところ行くね。」

「貴史くんも集合時間忘れないようにね。」

「はい。」

「なんで、兄の俺じゃなくて秋に言つてくかな。」

「車は武ちゃんのだからねえ。それにい、貴史くんも秋に言った方がいいと思つたんだよお。」

「まあ、秋はしっかりしとるからな。秋に確認とつとけば問題あらへんわな。」

竜は、周囲がどんな風に竜と秋の関係を見ているのか良く理解できていないようだ。

「さあ、せっかくみんなが集まったんだから屋台とかまわりましょ。」

鈴の声で、全員が動き出す。

しかし、人込みがすぐく、すぐにはぐれそうになってしまふ。

「秋、あんまりはなれんな。」

そう言つて竜は秋の手を取つた。

一年生たちは三人で手をつないであり、カップル二つも互いに手を取り合つていたため、

秋の手をとることができるのは竜一人なのだが、竜も秋も互い顔を赤くしながら、手を握り合つた。

「ありがと、今日は何も起こつてほしくないし、側にいてね。」

「ん？なんや言つたか？」

小さい声で秋がそうつぶやくが、人込みの中その声は竜に届かなかつたらしい。

「ううん。今日は楽しましょ。」

「せやな。せっかくみんなが集まったんやし、楽しまなかな。」

「女神先輩。かき氷食べたいです。」

「うちも、食べたい。」

後輩たちの声により、かき氷を食べることになった。

秋も、人込みと緊張でほてった体を沈めるべく、それに同意するのだった。

秋と麻美と鈴はイチゴ・竜と浩太はメロン・司はブルーハワイ・真奈美と由香はレモン・花火はミックスを注文した。

「花火ちゃんのかき氷なんかすごい色になってるよ。」

真奈美の言う通り、花火のかき氷はシロップでずいぶん溶けてしまっているし、

混ざり合ってすごい色になっていた。

「うちの中では祭りのかき氷はこういうもんなんやって。」

「麻美い、イチゴもちょうだいい。」

「いいわよ。じゃあブルーハワイと交換ね。」

そう言うと、半分以上食べてしまった司のブルーハワイとまだほとんど残っているイチゴを交換する。

「麻美って、意外と司に甘いのね。私たちも交換する?」

「そうだな。僕も半分くらい食べたしちょうどいいから交換しよう

か。」

浩太と鈴も交換して、後輩たちはそれぞれ自分の分をたべていた。

「俺らも交換しようぜ。」

「嫌だよ。竜ほとんど食べちゃってるし、舌が緑になっちゃうじゃない。」

「じゃあ、私のレモンと交換しましょ。レモンならそんなに気にならないです。」

「いいよ。つてか真奈美ちゃんあんまり食べてないけどいいの？」

「はい。女神先輩のかき氷と交換できるなら全然問題ないです。」

「なんか、微妙に変な気分だけど、まあいつか。」

秋と真奈美がかき氷を交換すると、真奈美は手に持っていたストロ―まで交換した。

「女神先輩と間接キス。うふふふ。」

真奈美は秋と交換したストロ―を使って真赤になりながらかき氷を食べだした。

「真奈美ちゃん。秋先輩のこと諦めたんじゃないの？」

由香が真奈美に耳打ちすると、真奈美は意外と真面目な顔で答えた。

「竜先輩も、女の子の私が相手なら嫌な気分にはならないでしょ？
女神先輩が間接キスを恥ずかしがっていたのを助けただけよ。

まあ、それでもちよっと嬉しいのは確かだけだね。」

「意外とちゃんと考えてるのね。自分の欲望に素直なだけかと思っ
たわ。」

「それもないとは言えないわ。

でも、応援したい気持もあるから、どっちも得な時は私の願望を満
たすのよ。」

「うん。誉めていいのか、引いていいのかわからないところね。」

「私って強い人が好きなだけだから、女神先輩は特別だけど普段は
ノーマルって前にも言ったじゃない。」

「そうなのよね。秋先輩以外に対してノーマルだから私たちも普通
に接してられるのよね。」

二人がコソコソ会話をしているのを、麻美と司はさりげなく聞いて
おり、

問題がないことを確認すると、計画を進めるべく動きだした。

「せっかくみんなでえ、集まったけどさあ。これだけ人数がいると
移動も大変だよなあ。」

「そうね。私たちは一緒に帰るから別だけど、鈴と浩太と真奈美ちゃんたちは別行動してもいいのよ?」

そういつて、麻美は鈴にウィンクをする。

「うん。確かにそうかもね。じゃあせっかくだしデートする?」

「みんなでいるのも捨てがたいけど、一番の要因である女神ちゃんが竜くと

一緒に行動するなら問題も起こらないだろうっしいよ。」

会話の流れるにバラバラで行動する雰囲気になって秋は焦り出す。

「せっかくみんなが集まったんだからみんなでいようよ。」

「合宿の時も言ったけど、みんなが集まった方がいい時はそうするわ。

でも、今回みたいに人込みを集団で移動するのは大変だし、カップルばかりじゃ真奈美ちゃんたちも気が引けるでしょ?」

「カップルって言うのは今さらですし、大丈夫ですが、集団で移動するのは確かに大変ですね。」

由香のその言葉を聞いて麻美が花火に耳打ちをする。

「花火ちゃんも武満さんを探したいんじゃないの?」

今日私たちを車で送ってくれたから会場のどこかにいるわよ。」

「う、うちも一回解散した方がいいっす。」

花火が上がる時にもう一度みんなが集まるのはどうですか？」

麻美に簡単に懐柔される花火だった。

こうなると、真奈美は秋と一緒にいたいのが、邪魔をするのも悪いので合意するしかない。

「じゃあ花火が上がる少し前の6時50分くらいになったら公園の噴水集合にしましょ。」

「ホントに別々に行動するの？」

「まあええやん。こんな時くらい浩太たちをらぶらぶさしたり。」

竜は、浩太たちがデートをするために一時離れると考えているようだ。

しかし、明らかに竜と秋の関係を深めるためにみんな動いており、秋はそれが何となくわかってしまったため焦っている。

「メグにしては鋭い観察ね。でも、本当に私たちもたまにはデートしたいってのもあるから、花火が上がるまでだけね。」

鈴にそう耳打ちをされて、あきらめるしかないようだ。

秋は鈴にうなづくのと、みんなに集合場所と集合時間をもう一度確認をとった。

「じゃあ、私たちは先輩たちに負けないよう、心友の絆を深めてきます。」

「私と浩太も初めてのデートだし、楽しんでくるわね。」

結局残ったのは麻美と秋と竜と司の四人となった。

このメンバーなら実際なにかが起こっても対処できるし、秋のことを本当に思ってくれているという自信が秋にもあるので問題は無いのだが、

浴衣姿で祭りに来ているという普段とは違った雰囲気これだけのメンバーになったことにより、秋は意識してしまう。

「ほな、俺らもまわるか。何から行く？」

「そうだねえ。食べ歩きしながらあ、ゲームがあったらするって感じがいいと思うよお。」

「そうね。行きましょっか。秋ちゃんは私と手をつなぎましょ。」

普段は竜と司の間で移動するのだが、今日はなぜか秋・麻美・司・竜の並び順で動くようだ。

秋としても今竜と隣同士というのは恥ずかしいのでこれは嬉しい配慮だった。

「司と麻美も本当は二人つきりになりたい？」

秋はそつと麻美に耳打ちする。

「それもいいけど、恥ずかしがってる秋ちゃんを見るのも楽しいから良いわよ。」

司も竜くんをからかって楽しんでるみたいだね。」

秋が目線を送ると、どうやら司も竜に何か言っているようだ。

明らかに竜に対して秋のことだからかかっているのだが、秋は気付いていない。

「あの二人は昔から仲いいからね。ボクも麻美とこうして仲良くなれてホントにうれしいけどね。」

「もう、秋ちゃんって本当に可愛いわ。」

最近こうして誰かに抱きしめられることが増えている気がするが、秋はびつくりすると、

「とりあえず学校でもないのでレズジュツの女神なんて言われはしないが、

司のこともあるので麻美をおちつけるとそつと体を離す。

「秋と麻美ってなんだか姉妹みたいだよええ。」

普段は秋もお姉さんぽいところあるけどお、麻美や鈴と一緒にいると秋って末っ子だからあ。

「甘えたくなるのかなあ？」

「別にそんなんじゃないわよ。」

「でも、麻美や鈴には思いつきり甘えられるっていうのはあるかもね。」

「せやな。秋って武ちゃんの影響で昔は甘えん坊やったしな。」

「なんだよ。まるでブラコンみたいじゃないか。」

そんな話をしていると、遠くの方で真美子と武満が一緒にいるのを発見した。

「噂をすればね。あら？武満さん手つないでない？」

「え？ホントだ。ひよつとして真美子さんと武兄ちゃんって付き合ってるの？」

「うーん。お姉ちゃんがあ武ちゃんのこと好きなのは知ってるけどお。」

「武ちゃんはどうなんだかわからないからねえ。」

「ちよま。真美子さん武ちゃんのこと好きやったんや。」

四人が見ていることに気がついてない武満たちは、仲がよさそうに手をつないで話ながら、建物の中に入って行った。

「追いかけてみよつか？」

「いいわよ。じゃあ秋ちゃんもあれに入るのね。」

「あれ？げ、やっぱりやめとこつか。出てきてからでもいいし。」

武満たちが入っていったのはお化け屋敷だった。

遊園地で克服したとはいえ、やはり幽霊が苦手な秋はしり込みをす

る。

「中でえ。何か展開があるかもしれないしい。行こうよお。」

ちよつど空いてるからさつき入ったばかりならうまくいけば二人の会話を聞き取れるかもよお。」

「ええやん。お化け屋敷はもうこわくないんやろ?」

「そうよ。お化け屋敷なんて偽物だもん。ボクはちつとも怖くないよ。」

竜に怖がっているところを見せなくなかったのか、秋は見栄をはり、ひとりですんずん進んでいく。

「ちよま、先に行くな。お化けは怖くなくても一人でくらいとこ行ったら危ないやろ。」

そついつて竜は後を追いかけていく。

「大成功?かしら?」

武満さんには悪いけど、上手く二人っきりの場面ができたわね。私たちは外で待つてることにしましようか?」

「そつだねえ。」

真奈美ちゃんたちには浩太と鈴が伝言してくれてるだろうしい、あとは上手に竜に告白させるだけだねえ。」

策士カップルは今日の計画が上手くいきそうなことにほくそ笑むのだった。

そんな中お化け屋敷に突入した二人は、

「竜、絶対に手を離さないでよ。」

「作りものは怖くないんやなかったんか？」

「もちろんよ。でも、お祭りのときってお化けも活気づくっていうじゃない？」

「ああ、お盆も近いし確かにそうかもしれへんな。」

「だから、絶対に離すな。幽霊が出たら竜が盾になるんだぞ。」

「はいはい、わかったって。」

「あ、足もとの穴に人がいるから気を付けて。」

「ほんまや。ごめんな。」

足をつかんでこわがらせるつもりやったんやろうなあ。」

アトラクションとは違ったところで結局怖がっている秋だった。そして出て行ったところには、司と麻美が待っているわけで、

「お二人さん仲がいいねえ。」

「秋ちゃんの手柔らかかった？」

盛大にからかわれる二人であった。

真っ赤になりながらも、

「お化け屋敷じゃなくて、暗いところで一人だと危ないから、手をつないでいただけだもん。」

反論する秋だが、手をつないでいた事実は変わらないわけで、結局そのあとからかわれながら祭りを回ることになる。

「それで、結局武兄ちゃんたちはどうなったの？」

「外に出てきた時に話しかけたら、にごされたけど、たぶん付き合いだしたんじゃないかしら？」

「たぶんねえ。お姉ちゃんはわからないけどお、武ちゃんの反応はそんな感じだったあ。」

「じゃあ、花火ちゃんは失恋かあ。好きな人と恋人になれないなんてかわいそうだなあ。」

「両想いなんて中々いないものよ。仕方がないわ。」

「両思いでもお。勇気をださないとお、上手くいくとは限らないんじゃないかなあ。」

麻美は花火を気遣ったの発言だが、司は竜と秋に牽制となる一言をさりげなく伝えた。

「せやな。両思いやったら付き合いたいよな。」

分かっているのか怪しい反応が竜から返ってくるが、竜のことなので、

司の発言の真意は伝わっていないのだろう。

秋も、色恋沙汰となるとさっぱりなのでこちらも期待できそうになり。

「麻美い。この場合どうしたらいいと思うう？」

「司にどうしようもないことを私に振らないでよ。」

流石にここまでだと、私にもどうしたらいいのか分からなくなってくるわ。」

司と麻美の発言にはてなマークを浮かべる竜と秋だった。

「司たちが、らぶらぶなのは分かっていたから、そろそろ集合場所に移動しない？」

人も多いし早めに合流した方がいいと思う。」

「せやな、秋がお化け屋敷を怖がってる間にだいぶ時間つかってもたからな。」

「ボクはお化け屋敷を怖がったんじゃないもん。」

言ってることはめっちゃくちゃだが、結局仲の良い二人をみて、何故両想いなのにくつつかないのか頭を悩ませながらも司と麻美も集合することに賛成して、移動を始める。

「なんかさ。この場所ってあれじゃない？」

「せやな、集合場所にはちよつと問題ありやな。」

公園の噴水前は、花火がその場でも見れることもあり、カップルたちのたまり場となっていた。

一応四人も男女比はそろっているので問題はないのだが、秋と竜には刺激が強かったようで、軽く怯んでしまう。

「竜う、ちよつと話があるんだけどお。」

「秋ちゃんと私はみんなが来るといけないからここで待ってるわね。」

こうして司は竜を連れてどこかに行き、秋と麻美だけがそこで待つことになった。

「竜は気付いてないかもしれないけどお、今日の秋はきれいだからあ、すつごいたくさんの人が秋のこと見てたよお。」

「それくらい、気づいとるって。ほんま秋は人を引き付けるもんあるよな。」

「そうだねえ。学校でも何度も告白されてるくらいだからあ。こんなところにいたらいつ狼が現れるかわからないねえ。」

「それやばいんとちゃう？俺ら二人から離れとるんまずいやろ？」

「浴衣が目立つからあ。すぐに駆け付けられるしい。これくらいの距離なら大丈夫だよお。」

「まあ、確かにそうか。離れすぎへんかったら、人の目線を追いかければ合流できるでな。」

「それよりもあ。そろそろ、告白したらあ？鈴たちも付き合いたんらしい。竜たちも付き合ってもいいと思うんだよねえ。」

「いや、秋はあんな美人なんやし、俺じゃ釣り合わへんやろ。」

「そこは問題じゃないよ。竜は秋のこと好きなんでしょあ？
まあ竜なら釣り合いも全然問題ないとはおもうけどねえ。」

「うん。せやけど、秋は心友でありたいって前にも言っつたし
なあ。」

「小学校のころの話だよ。今は麻美や鈴を見てえ。」

「気持ちが変わってるかも知れないんだからあ。アタックするべきだ
よあ。」

「実はこの集合場所は雰囲気をよくするために司と麻美がわざと指定
し、

鈴たちに伝言を頼み真奈美たち後輩三人も別の場所で花火を見るこ
とになっている。」

「みんながあ、集まってくる前にい。アタックするべきだよあ。」

「さあ。秋と麻美のところにいこあ。」

完全に司たちにお膳立てされていることに気づかない竜は、司に頷
くと、秋たちのいる噴水の側にむかった。

「麻美い。竜たちに任せておけばあ。みんなが来ても大丈夫だから
あ。」

先に花火がもつと見れる場所に移動しよあ。毎年の場所って言った
ら秋わかるよねえ？」

「大丈夫よ。あそこなら人も少ないし、みんながここに来たら連れ
ていくわね。」

「って？二人は先にいつちゃうの？」

「じゃあ、みんなが来たらよろしくね。」

麻美と司は二人を置いて行ってしまう。

周囲はカップルだらけで、秋と竜は二人っきりになってしまった。

ヒュル〜ルル ドンッ パラパラ

「花火始まりましたね。綺麗ですね」

「女神先輩たち今頃どうしてるでしょ？」

「二人なら大丈夫よ。きっとみんなが来ないことに気づいて花火が終わったならここに来るはずよ。」

「なんだか、騙してしまったみたいで申し訳ないです。」

「仕方がないさ。」

時間ギリギリになってしまったから、僕が場所を知っていたから偶然一緒にいた真奈美ちゃんたちを連れてここに来てしまったんだからね。」

そう、これが浩太や鈴たちのいい訳である。

こうして集合場所で二人つきりで花火を見る秋と竜。

その前に竜からの告白を受けてきつとらぶらぶで花火を見ていることだろうと全員が考えていた。

「真美子も、昔から花火好きだったよな。」

「この日は毎年みんなで集まって、いつもここで花火見れたからもの。」

武満と真美子もここにおり、花火は二人の様子にそつと悲しむのだった。

「花火ちゃん。花火が終わったらたこ焼きでも買ってから帰りましょ。」

私も失恋したんだもん。」

真奈美と由香は花火を気遣い、慰めながらも友情を深めていくのだった。

「鈴！浩太！なんで集合場所に来ないのよ。」

花火が終わり、秋と竜も合流すると、秋からの抗議があがった。浩太が前々から考えておいた、事情を説明すると、秋は膨れながらもしぶしぶ許した。

「メグ、いいじゃないの。竜さんと二人っきりで見れたんでしょ。」

鈴が秋に耳打ちする。

「秋、ちょっとみんなが来る前に話があるんだけど。」

「どうしたの？いきなり標準語になって。」

「実は……」

「あれ？女神様？」

声を掛けてきたのは野球部のメンバーで、以前助っ人をしたピッチャーの子たちを中心とした人たちが集まっていた。

「先輩。お久しぶりです。部活は引退したんですよね？
受験生がこんなところに来ていていいんですか？」

「受験生って言うても毎日勉強じゃないよ。
それにしても女神様の浴衣姿は本当に素敵だね。」

「ありがとうございます。
あの、最近ではファンクラブでも“様”は言わなくなったし、
先輩から様って言われるのは違和感があるのでやめてもらえますか
？」

「ああ、ごめんね。そういえば夏休みに入る前にそんな話が出てい
たね。」

「ファンクラブに入ってるんですか？」

「実はあの試合でみんな秋ちゃんのファンになっちゃってね。
だからこうして男ばかりで祭りに来てるってわけさ。」

確かに野球部のメンバーで来ているというのもあるのだろうが、モテる子もいるはずなのに、男ばかりで集まっていた。

「あはは、ボクのことを思ってくださいるのはすごく嬉しいんですが、卒業もされることですし、ボクなんかにも構ってないで自由に恋してくださいよ。」

「うーん。そうだね。竜くんだけ？仲がよさそうだし、お邪魔しちゃったかな。」

「いえ、美術部の子たちと待ち合わせしてるだけなんです。他にも麻美や司もさっきまでいたんですが、先にもっと良く見える場所に移動しちゃって、

ボクたちは後輩が来るのをここでまってるだけですよ。」

「そうだったんだ。てっきり付き合ってるのかと思ったよ。」

「仲がいいので良く間違えられます。ボクらは“心友”ですよ。」

「そっか、じゃあその後輩たちが来るまで一緒に待たせてもらってもいいかな？」

「はい。もうすぐ来るはずなんですが・・・」

「そういえば、竜、さっきなに言おうとしたの？」

「いや、また今度でええわ。」

「ってわけで、結局誰も来ないから野球部の人たちと一緒に花火を見たのよ。」

「司くん？どついついことかしら？」

「そんなあ。先輩たちはもう引退したからあ。連絡とってないんだよお。」

「そんなタイミングであられるなんてえ。予想もできなかったよお。」

「ボクもいきなり声をかけられたからびっくりしたよ。」

「司たちと離れたから不幸が来たのかと思って焦ったんだからね。」

「秋の言葉を聞いて、司はとりあえず竜の肩に手を置き、小さな声でつぶやいた。」

「今回はあ、秋の不幸っていうよりもお。竜にとって不幸だったねえ。」

「付き合っということ完全に否定されて心友って言われたんやけど、」

告白せんくて正解やよな？」

「竜にしては良い判断だったと思うよお。またこんな機会を作ってあげるからあ。

がんばって告白するんだよお。」

「お、おう。秋が周りからめっちゃ好かれとることが分かったから俺も頑張るわ。」

「そうだねえ。とにかく、アタックするなら早い方がいいよお。」

そのあと、遊び疲れた秋たちは、武満の車で帰ることになった。

「武兄ちゃん。唇に赤いものが着いてるよ？」

「え？マジ？ちゃんと拭き取ったはずなんだけど……。」

「武ちゃん。何もついてないわよ。」

もう、隠せるとは思ってなかったけどすぐばれちゃうんだから、私と武ちゃん付き合うことになったの。」

「うん。」

真美子さんって昔からお姉ちゃんって感じがしたから、本当にお姉ちゃんになってくれてボクも嬉しいよ。」

「ありがと、秋ちゃん。これからもよろしくね。」

「うん、来年は浴衣任せて、真美子姉さんにピッタリなの頑張ってるから。」

「ふふ、楽しみにしてるわね。良い妹を持ったわ。」

「なんか、俺と付き合うよりも、秋が妹になることの方が喜んでないか？」

「どっちも嬉しいわよ。武ちゃんのこと大好きだからね。」

帰りの車の中のやり取りはおおむねこんな感じで、
貴史以外は祭りの時すでに知っていたこともあり、
会話の流れは武満と真美子の話題でもちきりとなった。

チャプター29（後書き）

じれったいな、早く付き合えって思った読者様本当に申し訳ありません。

A K Iも十分で書きながらさっさと付き合えと突っ込んでしまいました。しかし、今回は武満と真美子というダークフォースが現れ、一話で二組もカップル作るのは問題だと思い、断念いたしました。

今回のテーマ“いかにして秋と竜を付き合わせないか”でお送りしました。

じれったい、でもラブラブな二人がみなさんに伝わればA K Iは幸せです。秋と竜がいつ付き合いたすのかはまだ分かりません。ひよっとしたら付き合わない？付き合う？そんな様子を楽しんでいただけたらと思います。

それではキャプチャー29読んでいただきありがとうございます。

追伸

今日はUPしない予定だったのですが、偶然武満出てくるし、コメントをいただいたのでどうせなら今と思い、投稿しました。

チャプター30

ボクは不幸な少女がお似合い？

二学期が始まり、今日の残りの授業はHRだけだ。ボクは司と鈴と学園祭について話しながら吉川先生が来るのを待っていた。

ガラガラ

「ああ、今日はいいさつは帰りにまとめてやるから、今日のHRはクラスでする劇を発表するぞ。
クラス委員前にきて進めてくれ。」

「はい。」

クラス委員の和美ちゃんと要くんが前に出てきた。

「台本はクラスの代表者で先に決めてあります。今から配りますので各自目を通してください。」

和美ちゃんがそう言うのと要くんが台本をみんなに配り、その台本には

“オズの魔法使い”と書いてあった。

5分くらいすると和美ちゃんはクラスを見渡してから話し出す。

「有名な作品なので、知ってる人も多いかと思えます。劇用に時間を短くしてあるので、少し内容が変わっていますが、基本的な登場人物は同じです。」

「和美。台本の中に歌が出てるんだけど、これ英詩じゃない。こんな歌えないんじゃない？」

「大丈夫よ。鈴、だって、その

“Over the rainbow”を歌うのは女神ちゃんだもの。

女神ちゃんならこれくらい大丈夫よ。」

「ちよま、なんでボクが歌うことになってるの？今日は配役を決めるんじゃないの？」

「まあそうね。主人公のドロシーをやりたい人いますか？いないみたいなので推薦ありますか？」

さっきの和美ちゃんの発言の影響か、クラスの全員がボクの方をみている気がする。

「気がするだけじゃないよお。全員が秋にドロシー、って思ってるよお。」

「鈴、助けて。」

「助けてあげたいけど、確かに“Over the rainbow”を歌うならドロシーはメグしかないかな。」

一応最後の希望をとばかりに浩太の方に目を向けると、手のひらを上
上に両手を肩まで上げるポーズ。
お手上げということか。

「じゃあ、希望者もおらず、クラスの総意もあることだし、女神ち
やんにドロシーはやってもらうわ。」

その他の配役は黒板に書き出すから希望のところに名前を書きに来
てね。」

主人公だけ決め方が違うし、まるでボクを狙ったかのような決め方
だった。

ボクは一年の時も同じように主人公にされた記憶があり、学校中に
決められているような気分になる。

「うーん。本当に先生も含めた全員が秋の主人公を期待してと思
うよお。」

「また口に出てた？」

「出てたわよ。というか、メグ以外が主人公をしたら学園祭の観客
席が保護者だけになるから仕方ないわ。」

「え？去年は保護者だけじゃなかったっけ？」

「今年のはあ、色々な人が見に来るらしいよお。」

教育関係のお偉いさんが来るからあ、先生たちもお、秋が出てくれ
ないと困るんだってさあ。」

「司はよくそんなこと知ってるな。ま、そう言うわけだから頑張っ
てくれよ。」

先生は前にいたはずなのに、クラスのみんなが黒板に集まっている隙にボクの席の側に寄ってきていた。

「先生の給料がかかっているからボクを生贄にしたんですか？」

「まあ、それもないとは言えないが、浩太から聞いた話によると、周りからある程度支持されていた方が問題が発生しにくいんだろ？ それも考えて和美と要にも秋には主人公をと言ってあった。」

「うーん。そんな風に言われたらがんばるしかないじゃないですか。」

「そういうことだ。ドロシーみたいに異世界に飛ばされるかわいそうな少女なら条件にぴったりじゃないか。」

「間接的にボクのこと不幸少女だと言ってませんか？」

「まあな。それより二人とも黒板に行かないでいいのかわいそうにやりたい役全部もっていかれるぞ？」

「ボクの役はあ、人気があるからあ、すぐに決まることはないよお。」

「私の逆には誰もやりたがらないから問題ないわ。」

黒板の方をみると、かかしが一番人気でブリキ・ライオンなどは数名が集まっており、

悪役である西の魔女のところには、誰も名前がなかった。

「鈴って、西の魔女をするの？」

「ええ、北の魔女も捨てがたかったけど、やっぱりヒールに徹してメグのことをいじめるのが良いとおもっの。」

「ボクも西の魔女がいいなあ。西の魔女なら箒に乗って飛びまわったりするんでしょ？」

「本当に飛べるみたいに言わないでよ。」

それにそんなこと言ったらドロシーだってたつまきで飛ばされるんだから、かなり激しい動きもあるわよ。」

「そっか、上手く悲劇のヒロインを演じながらも、冒険を楽しめばいいんだね。」

「メグらしいけど、舞台上で人を投げ飛ばしたりしないですよ。」

「そういうのは、ライオンとかの役だからね。ライオン浩太にならないかな？」

うまくボクの動きに合わせてくれたら、隠れて投げ飛ばせるのに。」

「普段は可愛いのに、ブラックメグが出てきてるわよ。」

今回は、ヨッシーの言う通り、メグを思っの画策でもあるんだから怒っちゃダメよ。」

「はい。」

鈴は、そこまで言ってボクの隣から立ち上がり、黒板に向かった。

西の魔女のところに名前を書く和美ちゃんと話し、帰ってきた。

「西の魔女で決まってよかったね。」

「聞こえてたの？」

「唇の動きで決まったっぽいことが分かったただけだよ。」

「読唇術？メグにできないことって何があるのよ……」

「え？空も飛べないし、魔法だって使えないよ？」

「そんなこと分かってるわよ。普通の一般人が、なんで読唇術なんて覚えてるのよ。」

「うん。小さい時に警察の人が教えてくれて覚えたから？」

「そうよね。何かと事故に巻き込まれているうちに、危機察知の知識が莫大な量になったんだったわね。」

「おかげで最近では安心して街で買い物ができるんだよ。」

「普通の人みんな買い物くらいで安全確認しないわよ。」

「え〜。」

だって、お金が動くところでは、色々な私利私欲が動くから、お買い物に行くのが一番危険なんだよ。

女性専門店とかだと問題起きたことがないのは不思議だけどね。」

「理由はだいたい分かるわ。
女性だけの場所なら確かに嫉妬じゃなくて尊敬の念の方が強くなる
でしょうね。」

「なんで尊敬？」

「つていうか男の人がいると嫉妬つてそんなにボク男の人に嫌われる
ようなことしたかな？」

「違うわよ。男の人が嫌つてるんじゃないの。むしろ男の人からは
好かれてるわよ。」

「ええ？じゃあ何で嫉妬されるの？」

「いいわ。メグにこれ以上話しても無駄な気がしてきたから、今度
ゆっくりこの話はしましようね。」

なぜか、話の途中で、鈴が頭を抱えてしまったのでボクはこれ以上
聞くことができなくなった。

ちょうど、浩太がジャンケンでライオンの役を勝ち取ってこちらに
来たのでそっちに声をかける。

「ライオンそんなにやりたかったの？」

「ライオンがよかつたんじゃなくて、メグちゃんがドロシーなら周
りの配役がある程度ボクらで埋めた方がいいと思ってね。」

「ああ、だから司もかかしをやるうとしてくれてるんだっけ、

去年は竜と二人で脇を固めてくれたから、今年は浩太なんだね。鈴には悪いけど練習や本番では浩太のこと借りるね。」

「いいわよ。どうせメグの気持ちは誰かさんで一杯なんだから浮気の心配もないし。」

「ほう。そ、そんなことは・・・」

「赤くなっちゃって可愛い!!」

鈴に抱きしめられてしまった。

というか、これはマッチポンプなのでは？

いじめておいて抱きしめて慰めるなんておかしいぞ。

「ところで、浩太の呼び方が夏休みくらいから、また変わった気がするのだが、気のせい？」

そう言っつて、鈴から離れる。

まだ少し顔が赤いかもしれないが、たぶん大丈夫だろう。

「ああ、鈴と話してるうちに移っちゃってね。」

鈴も女神ちゃんからメグに変わったみたいだし、仕方無いかな。

まあ、女神ちゃんより呼び易いしいじゃないか。」

「うん。女神って呼ばれるよりもなんか良いよ。」

「そうだね。僕たちがメグちゃんって呼んでいればファンクラブでもそれが広がるかもしれないね。」

そんな会話をしていると司もかかしに決まったらしく、ボクの前の席に着くと、グツと親指を立ててきたのでボクも返しておいた。

放課後、美術室

「女神先輩のクラスは“オズ”なんですか。ドロシー役の女神先輩・
・ふふふ。」

「真奈美ちゃん。なんでボクがドロシーってわかったの？」

「だって、ドロシーは女神先輩しかいないじゃないですか。
北の魔法使いという手もありますが、やっぱり舞台の中心で悲しげ
に微笑む女神先輩が一番ですよ。」

「ボクってそんなに不幸少女が似合うのかな？」

「そんなことないです。普段の秋先輩はどちらかという不幸なん
て全く感じさせません。」

「だからこそ、逆にギャップにみんながクラッと来ると思います。」

「ギャップねえ。まあ、一生懸命練習するし、ドロシーやってみせ
るよ。」

「でも、主人公なんて大丈夫なんすか？

女神先輩って学園祭の時作品もだすのに、そんな余裕あるんすか？」

確かに、ボクは学園祭の時に作品をいくつか出すことになっており、そちらでも忙しい。

「メグちゃんなら大丈夫だよ。そのために、後輩を育てたんだからね。」

「浩太の言う通りね。」

メグの作品は夏の間、ほぼ完成しているし、紹介はコンテストのリベンジも兼ねて真奈美ちゃんたちに頼むことにするわ。

ケーキの配布もほとんど真奈美ちゃんたちを中心にしてもらうつもりだしね。」

「そういうこと、ボクも全力でサポートするつもりだから心配はいらないけど、

学園祭は美術部にとって一番のイベントなんだから真奈美ちゃんたちには、

張り切ってもらわないとね。」

「うちの発言が藪蛇だったす。こちらにそんな大役、荷が重いです。」

「なに言ってるのよ。」

私たちだって、去年は三人しかいなかったんだから、花火ちゃんと同じ年で同じことをやったのよ。

花火ちゃんたちなら大丈夫だって部長が言ってるんだから頑張りなさい。」

「鈴先輩。去年はどんなことしたんですか？」

由香ちゃんの質問から、去年の作品紹介の様子や今年との違いなどを説明することになり、

今日はほとんどの時間を学園祭の打ち合わせで使ってしまった。

明日からも準備で忙しくなるだろう。

「秋。そろそろ帰るで。」

「竜。わかったわ。じゃあみんなも明日から学園祭まで忙しくなるけど頑張りましょ。」

美術部のメンバーはそれぞれ学園祭での仕事が決まり、やる気とちよつとの不安を抱えて帰宅の道に着く。

「竜、また、ボク主人公になっちゃった。」

「ほんまか、大変やろうけどがんばるんやで。」

「でもお、秋はその劇の中でえ、僕とのキスシーンがあるんだよお。」

「ちよま、そんなん中学生であかんやん。」

「もうう、台本も配役もきまっちゃったしい。」

そう言っつて、司と麻美は笑っている。ここは合わせるところかな？

「みんなで決めたことだし、仕方無いよ。麻美も許してね。」

「演技で仕方無くとは言っつてもねえ。竜くんはどう思っつ？」

「いや、それは、まあ・・・」

後ろからだから見えないが竜が何かに焦っているのはわかった。

「冗談だよ。中学校の学園祭でキスシーンなんてあるわけないじゃないか。」

助けてくれたお礼に手にキスをするだけだよ。しかも衣装の上からね。」

かかしの人気が高かったのはこれが原因でもあるらしいのだが、思春期の男の子なんだからラブシーンに期待をしてしまうのも頷ける。

ボクも司で無かったら意識していたかもしれない。

「秋ちゃんは、いつも助けてくれてるナイトにお礼はしないのかしらっ。」

ギクツ。麻美がからかいモードに入っている。

「ボ、ボクはいつもお礼は言ってるよ。ここは日本だからきちんと頭をさげてるもん。」

「麻美い。ちゃんとナイトにはお礼のキスをしてあるから大丈夫だよお。」

人工呼吸でだけどねえ。」

「ちよま、あれは緊急事態で、そんなんじゃない。」

「そ、そうだよ。ボクは意識がなかったんだし。そういうのじゃないんだから。」

「そうだったねえ。お礼のキスは運動会の後だったねえ。」

「はう……。」

顔が熱い。

竜の後ろに乗っているので竜にはバレていないが、その代わりに麻美と司のニヤニヤ顔をずっと眺めていなければならぬ。

そのあと二人にからかわれて自宅に着く。

ボクは自分の部屋に入ると、昔買ったCDを探す、

“over the rainbow” 虹の彼方に と邦題の夕

イトルが入ったものを見つけてデッキに乗せると聞き始める。

素敵な歌だよな。

こんな風にボクは歌えるのだろうか。

和美ちゃんも、ボクならって言ってたけど、こんな風にボクが歌えるとは思えない。

翌日からボクらは劇の準備に追われることになった。

衣装や小道具・大道具を脇役をしてくれてる友達が作成し、ボクらみたいな出番が多い子たちはその間も台本の読み合わせなどで大忙しになる。

「女神ちゃん！！そんなんじゃないわよ。」

意外と和美ちゃんは本格派なのか厳しく指導される。

要くんもブリキ役でセリフは多いのだが、恵美ちゃんと交代制で今は道具製作班の指示を出している。

「和美。なんか、メグに対してやけに厳しくない？」

私が失敗してもあんなにきつく言わなかったんだけどな。」

「主役だから、一番出演も多いし、がんばってほしいだけだと思うよ。」

「まあ、それだけならいいんだけど、もしメグのことを嫌いとかだったら劇中とかに不幸が起きる危険があるから。」

注意しておくのよ。」

「うん。もしそうだったら、本番までに対策を練らないとね。」

「女神ちゃん。休憩してないで、台本は覚えたの?」

鈴と話していたら、また和美ちゃんに怒られてしまった。

台本の内容は覚えてしまっているので問題ないが、不幸少女というのに抵抗のあるボクはどうしても役になりきれず、注意されっぱなしだ。

「私はそろそろ、要くんと交代してくるから、私がいないからって練習さぼらないでね。」

特に主役の女神ちゃんは、役になりきるまで台本を何回も読んでもらうから。」

そう言って、和美ちゃんが要くんを呼びに特別教室に向かうと、浩太と司が声を掛けてきた。

「和美ちゃんさあ。かなり頑張ってるよねえ。」

「そうだね。さっき鈴ともそのことについて話してたんだよね。」

「彼女はファンクラブにも入ってないから、ひよっとしたらメグち

やんのこと嫌っているかもしれないな。」

「女の子でファンクラブに入っていないからって、嫌う理由にはならないわよ。」

「いや、メグちゃんのファンはかなりの確率でファンクラブに入っているから、

ファンクラブにいない子のほとんどが、メグちゃんに嫉妬した子だと考えた方がいいと思う。」

「確かにねえ。アンチ秋は大抵の子が竜とか僕がらみだからねえ。」

「でも、和美って男の子に興味無いつて感じだったわよ?」

鈴は先ほどとは違い和美ちゃんを擁護にまわった。

「そういう子の方が、裏で何考えてるのか分からないんじゃないかな?」

「浩太の言うことは分かったよ。」

とにかく、和美ちゃんにきちんと理解してもらえるように話し合った方がよさそうだね。」

「そんなにいい、心配しなくていいと思うけどお。」

一応、秋と二人で一回話してみた方がいいかもねえ。

その時はあ、僕らが近くで控えるから、勝手に話しようとしなくてねえ。」

「うん。」

でも、和美ちゃん一人くらいなら、そんな危険な目には合わないと

思うから大丈夫よ。」

「メグの場合、危険な目にあっても、それが相手に及ばなければ良いとか思っただけで怖いわ。」

「鈴う。流石にボクだつてそんなお人よしじゃないよ。」

自分の命が危険になった時はそつちを優先するよ。」

「どうかしらね。あ、要くんも来だし練習再開しましょうか。」

話に区切りがついた時、ちょうど要くんが和美ちゃんと交代して戻ってきたため、

ボクらは練習を再開する。

要くんはブリキ役で恵美ちゃんと違いセリフも多いので練習する場所はかなり多い。

そういえば、和美ちゃんは北の魔女という重要だが、出番が少ない役なのに、ボクらの方に要くんよりも多くいる気がする。

やっぱり何かあるのかもしれない。

ボクもみんなから恋愛関連についてはかなり鈍いといわれているし、きちんと観察しておかないといけないな。

翌日から、授業中や、休憩時間なども、恵美ちゃんの様子をつかがうようにした。

そうすると、明らかに目をそらされたり、声を掛けようとすると上手くはぐらかされる場面が多いことに気づいた。

劇の練習の時だけは、目をそらされることも、避けられることもなく、厳しく指導された。

部活が終わって帰り道。

今日は麻美と司がデートなので、竜と久しぶりに二人つきりだった。

「竜。また新たなアンチ秋の子が見つかったかもしれない。」

「ちょま、また俺の関係者か？」

「ううん。それは分からないけど、普段は顔も合わせてくれないのに、

劇の練習の時だけすつごく厳しいの。」

「それって、前に司たちが言ってた委員長の和美ちゃんやつけ？」

「うん。和美ちゃんって、テニス部だから司とも竜ともあんまりつながり無かったから気付かなかったけど、

この反応はやつばまずいよね。」

「せやな。俺は今クラスちゃうから難しいけど、できるだけ一人になるなよ。」

練習中に不幸とか起こってないんやったら、司たちが側におったら危険はないって事やし、

ひとりにならへんかったら大丈夫やおもつてさ。」

「うん。じゃあ、朝と夕方は竜が守ってね。」

ボクが後ろから竜の背中にギュッと抱きつくと、

ちょっと照れているのか、「まかせとき。」と一言だけ返ってきた。そこから会話はあまりなかったけど、ボクは竜に守られてるんだと思うと自然に顔がにやけてしまい。

家に着いてからも、和美ちゃんに嫌われているかもしれないことなんて気にしないで、

ゆっくり眠ることができた。わかれる時に竜が、

「俺にできることって少ないかもしれへんけど、秋のこと守ってやりたいから、

なんかあつたらすぐに俺に言うんやで。」

そう言ってくれたのも嬉しかった。

最近竜なしの生活なんて考えられないな。

竜依存症なのかな？やっぱり、ボクは竜のこと大好きだよ。

数日すると、台本合わせは終わり、動きも入れている練習に入りだした。

和美ちゃんはやっぱり厳しくボクの動きなどを注意してきた。セリフも多く、

動きまで加わったのでどうしても簡単にはいかずに周囲の子も中々うまくできないみたいだ。

「はい。ちょっと休憩入れるわよ。」

みんなが悪戦苦闘しているのを見て和美ちゃんが休憩を入れた。

休憩に入ると、和美ちゃんはボクの方に来てみんなに聞こえないよ

うに小声で話しかけてきた。

「女神ちゃん、次最後のシーンするから、ちょっと来てくれるかしら？」

最後のシーンは、北の魔女がボクに魔法を掛けてカンサスに送り返すシーンだ。

最後のシーンでも大切な場面だし、

二人の動きとセリフのタイミングで照明などもいじらなくてはいけないので、

二人の呼吸が合わなくてはいけないからその打ち合わせだろう。

司たちも、やっと入った休憩なので、ゆっくりしてるし、ボクは注意されていたけど、

少しくらいならと、和美ちゃんについて廊下に出た。

「女神ちゃん。先にちょっと練習しましょ。私あんまり劇とかやったことなくて心配なの。」

厳しくビシバシ指示を出していたので慣れているのかと思っていたら、

和美ちゃんも手探りだったらしい。

慣れていないからどうやって指示を出してよいか分からなくてそれで変に厳しくしちゃったのかな？

そう思うとなんだか今までのことが可愛く思えてきてボクは頷いた。

「いいよ。和美ちゃんって緊張屋さんだったんだね。」

「う、うん。すっごくあがり症だから治るようにつてクラス委員に立候補したの。」

「そうだったんだ。しっかりしてるからみんなをまとめるのとか慣れてるのかと思ってた。」

「そんなことないわ。それよりも休憩の間に一回通したいから早くしましょ。」

「うん。カンサスに帰るところでいいんだよね？」

「ええ、じゃあ始めるわよ。」

そう言つて、和美ちゃんはボクの肩に魔法のステッキを置くと、セリフを言いだした。

「あなたを、カンサスに帰してあげましょう。さあ、眼を閉じて、カンサスの風景を思い出すのよ。」

あれ？

最後つてこんなだったっけ？

台本を見ながらセリフを言っているので間違いないだろうと考え、ボクは次のセリフがどんなだったかを思い出しながら目を閉じた。

「さあ、こつちを向いて、私にカンサスの風景を見せてちょうだい。」

そういつて和美ちゃんはボクの顎を持ち上げると、顔を寄せてきたのが目をつぶりながらもなんとなくわかった。

あれ？

カンサスの風景を思い出せって言ったのに頭じゃなくて口に近付いてない？

ガラガラ

「メグ。そろそろ・・・あんたら何やってるの？」

「ああ、もうそんな時間か。」

和美ちゃんが最後のシーンの練習をしたって言うから、ちょっと先に練習してたんだよ。」

「ああ、そうなんだ。とにかく、時間だからメグは先に行っておくれる？」

「私ちょっと和美と話があるから。」

ボクは和美ちゃんがあがり症で厳しくしていたことを、そっと鈴に耳打ちしておいた。

鈴が誤解して和美ちゃんに、変なことを言ったらかわいそうだと思っただの。

「ええ、大丈夫よ。私と和美は同じ小学出身だから良く分かってるつもりよ。」

「この子の性格とか好みもね。」

「??？」

良く分からないけど、そういえば和美ちゃんと鈴は仲が良かった記憶があり、

ボクが竜たちと一緒にいて、鈴の側にいない時は良く話しているのを見かけたことを思い出した。

ボクは、教室の中にはいると、仲良しの邪魔をしてはいけないと、司と浩太の方へ行き、休憩しながらもさっきおかしかった、台本の確認をした。

チャプター30（後書き）

新しいキャラクターたちが出現しましたね。

要はセリフもないし、特に絡みはありませんが、和美はかなり今後の展開にかかわってくる予感がしますね。

A K I的に中学生編でこれ以上キャラが増えるのはどうかと思ったのですが、キャラが少なすぎてオズの配役がクラスメイトAとかBとかになってしまうよりは良いかなと思います。

今回のテーマは“秋の鈍感力の強化”です。恋愛音痴な秋が竜に口説かれているところなど上手く書いていたら嬉しいです。

行き当たりばつたりなA K Iではありますが、今後も暖かい目でみていただけるとありがたいです。

それでは読者の皆様、ここまでお付き合いいただき本当にありがとうございました。

大変申し訳ないのですが、更新あまりしなくなるかもしれません。

チャプター31

メグを愛する女性たち

そういえば、和美ってこういう子だったわ。

メグの不幸体質の影響で和美の性格なんてよく考えてなかったし、ここのところ和美とあまり話していなかったからどうなってるのか聞いてなかったわ。

「和美、今台本に書いてないことしようとしてたわよね？」

「あら？そうだったかしら？女神ちゃんと練習してただけよ。」

「他の子は騙せても、私にはそのごまかしは通じないわ。」

「そうよね。ああ、もうちょっとだったのに、休憩時間ももう少し長く取っておくんだったわ。」

「相変わらずね。メグにはあがり症だからなんて言ったんだって？」

「そうよ。私ってすっごくあがり症だからね。」

「言いまわし次第よね。和美のあがり症は演劇なんかじゃないでしょよ。」

「うふふ、最近鈴が構ってくれないし、それに鈴よりも好きになっちゃったんだもの。」

「私は彼氏がいるから。」

それ以前から言ってるようにノーマルだから絶対に和美とは付き合わないよ。

それはメグだって同じよ。」

「そうなのよね。竜くんloveなのよね。」

せっかくあんなに可愛いのに、私のことは見てくれないのよね。」

全く小学校から変わってない。

周りには気づかれないうようにしているが、和美は同性愛者だ。

小学校の時に告白されて断ってから私はそのことを知っているが、無理やり何かを強制しようとしたことなど無かったので友達としてもやっていけたし、

今まで誰にも言わなかった。

「和美にしては、今日のはおかしいんじゃない？」

相手の同意も無しにキスなんて、今までなかったじゃない。」

「だって、女神ちゃんは本気の恋なのよ。」

ファンクラブにもあえて入らないで、チャンスを伺ってきたんだから、まさか鈴に邪魔されるとは思わなかったけどね。」

「メグの魅力は本当に女の子にも適用なのね。」

「私のはファンクラブの子たちみたいに半端なものじゃないわよ。純愛なんだから。」

「余計に悪いわよ。とにかく、相手の了承なしに今度あんなことしたら許さないからね。」

もし今後こんなことがあったら、昔の恥ずかしい話から何から何までばらしてあげるんだから。」

「わかってるわよ。今回失敗したんだから、もうそんなことしないわ。」

でも、女神ちゃんにはきちんと私のこと知ってもらわないとね。」

はあ、メグの可愛さはこんな子まで引き付けるのか。

まあ、私がターゲットじゃなくなったのは嬉しいけど、矛先がメグに向かったことを考えると喜んでもらえないわね。

でも、この状態なら不幸が起こることはないだろうから、二人つきりにしなければある意味問題ないわね。

「もういいわ。とにかく、今日のことは黙っててあげるから、変なことしないのよ。」

私も和美に対して甘いかもしれない。

本当ならメグたちにこのことを伝えてしまえば、メグの貞操の心配も不幸に対する警戒もしなくていいのだが、

和美も友達なのであまり隠し事を広めてやるのもかわいそうだと思っってしまった。

「もう、しないうって言うてるでしょ。さあ、女神ちゃんのドロシーを堪能しなくっちゃ。」

基本的に悪い子じゃないんだけどなあ。

和美に続いて私も教室の中に入っていく。メグたちが心配して寄っ

てきた。

「鈴、話長かったみたいだけど、大丈夫だったの？」

「ええ、問題なかったわ。お互い誤解があったみたい。

恨まれているわけじゃないから、不幸が起こることもないと思うわ。」

「そうだろうねえ。でもお、秋と竜のためにも二人つきりにはしない方がいいと思うなあ。」

「ちよ、司くん何を言ってるの？」

「ん〜。和美ちゃんと鈴ちゃんって昔色々あったんでしょお？

噂では僕も聞いてたけどお、矛先が秋に向くなんてねえ。」

司くんって、話し方とか間延びしてるし、おっとりしてるのかと思いきや、

結構鋭いところもあるし、頭の回転が早く、周囲の観察ができる人間だし、

これはバレてるわね。

「昔の話よ。和美も相手が嫌がったら強制はしない子だから、

このことは誰にも言わないであげてね。」

「いいよお。むしろお、こんな子がいないとお、秋たちってえ、

いつまでたっても今までの関係に安心して何も起こらないからねえ。」

「なるほどね。確かにそうね。」

うまくすれば、今後二人の関係を良くできるかもしれないわけね。」

「二人は何の話をしてるの？なんだか、司と鈴だけが分かる会話みたいだけど？」

「一応僕も鈴の彼女だからわかるよ。」

前に少しだけ相談を受けたことがあったんだけど、和美ちゃんのことだったんだね。」

僕も司の話に賛成だから誰にも言わないでくよ。」

「ええ？浩太も分かるのになんでボクだけ分からないの？」

「メグにこの話は早いわ。」

機会があつたらきちんと話すかもしれないけど、とにかく和美と二人きりになつちやダメってことよ。」

普通にみんなと一緒に話しかけても無害だけどね。」

「え？二人きりになると無害じゃなくなるの？」

「そうだねえ。もしい、二人きりになつちやって何か不穏な気配がしたらあ、」

竜の名前をだしたらいいよお。」

「え？竜？やつぱり竜は何か御利益のあるお守りだったの？」

「そうね。竜くんといれば幽霊だつて少しは怖くないでしょ？」

あれと同じように、竜くんがいれば和美も悪さをしないのよ。」

「おお、竜にはそんな便利な機能があつたのか。じゃあ、できるだけ竜の側にいるね。」

幽霊の例えを出したのは間違いだっただかしら？

竜くんを魔除けのお札みたいな扱いにしまっている気がする。まあ、どんな理由であれ竜くんとメグが一緒にいる時間が長くなれば、

それだけ竜くんにもチャンスが増えるんだし、問題ないかしら？

「そうだねえ。とりあえずう、学園祭まで練習がんばろう。」

このことについてはあ、またあとで考えようよあ。」

そのあと私たちはそれぞれ練習に入った。

無駄話をしていたのに和美は怒ったりはせず、道具の作成ばかりしていて練習をしてなかった子たちの指導をして時間を使っていた。

「あら？もう厳しい指導はしないの？」

「もうあれは必要ないからね。今度からはアプローチの方法を変えていくわ。」

女神ちゃんは優しくしてくれる人の方が好みみたいだね。」

帰り、最近浩太と二人で帰ることが多かったが、私は久しぶりに和美も誘って三人で帰ることにした。

「そうなの。浩太さんと司くんにはバレちゃったの。まあいいわ。女神ちゃんがまだ気づいてないならそれで問題はないわ。」

「あのねえ。」

昔は私のこと狙ってたのに彼氏ができたらすぐに違う子を狙いだすなんて、純愛が呆れてものも言えないわ。」

「え？私ずっと女神ちゃんのことを好きよ。」

鈴にフラれてからずっとだからもう二年以上片思いね。」

おいおい、私に告白したのは六年の時だから、その時まだメグとは知りあつてすらいないだろう。」

「ああ、そういうえば鈴には内緒にしてたわね。」

私さ、鈴にフラれてもあきらめきれずに道場に勝手に勝手について行ったことがあるのよ。」

その時に女神ちゃんのことを知ってたね。」

鈴には申し訳ないけど、女神ちゃんに惚れちゃったのよ。」

「全然申し訳なくはないけど、すごいね。」

「一目見た瞬間に、メグのことを好きになるなんて。」

「まあ、僕もあまり言えないけど、」

「一応メグちゃんには竜くんという好きな人がいるんだから、変なこととはしないでくれよ。」

「わかったわ。女神ちゃんを私に惚れさせればいいわけでしょ？」

竜くんはかつこ良いけど、男の子だもの。女神ちゃんはきつと私と

同じで女の子の方が好きだもの。」

「どうしてそうなるのよ。」

確かに一人称は“ボク”で男の子っぽいところもあるけど、メグはちゃんとした女の子よ。」

「ふふ、女神ちゃんのこととは調べたわよ。」

昔は一人称どころか、しゃべり方からしぐさまで男の子と同じだったって話じゃない。

ということは、上手く興味さえ引けば私にだってチャンスがないとは思えないわ。」

どこまで調べたんだか、心友の中では知られているし、

小学校から同じ友達なんかも知ってはいるが、

ファンクラブでも知らないようなことまで調べつくしているかもしれない。

「なんだか、真奈美ちゃんがノーマルに見えてきた。」

「そうね。私も同じ気持ちよ。」

恵美のことを知ってたから真奈美ちゃんに対して抵抗なかった私だけ、

真奈美ちゃんよりも危ない子がいたから感覚が麻痺してたのかもしれないわね。」

「二人ともそんなこと言わないの。」

後輩の真奈美ちゃんにはできなかったことが私にはできるんだから。ふふふ、女神ちゃんと一緒に学外研修に行くのが楽しみよ。」

おいおい、体育の時間の時に着替えなどでもこれから警戒した方が

いいかもしれないわね。
なんで私、和美と親友なのかしら？

「大丈夫よ。鈴と約束したように、無理やりとかは私もしないから。むしろ無理やりされたいわ。」

柔道していた時の女神ちゃんはすっごく荒々しくて素敵だったもの。

「

当面の危険がないことが判明したわけだが、それ以上に今後の危険な予感がして、

私と浩太は頭を悩ませるのだった。

「司はあんなこと言ってたけど、やっぱり竜や秋にも言った方がいいんじゃないかな？」

「私もそんな気がしてきたけど、一応あの司くんが大丈夫って言ってるんだし、

今は黙っておきましょう。」

「そうよ。私の性癖を中学校にこれ以上知られるのはまずいわ。私は女神ちゃんと一緒の高校に行くために努力するんだから。」

「どづいいう意味だい？」

「浩太さんと鈴はお互い同じ高校に行きたいでしょ？」

「だったら、きつと女神ちゃんもT高を受けると思うのよ。」

でも、T高はレベル的に特待生で行く女神ちゃんや竜くん以外の心友メンバーはいかないでしょ？」

「和美ちゃんはどこまで、メグちゃんについて調べてるんだい？」

確かに今の成績を考えると竜と女神ちゃんがいはY高に行つてしまつたらうね。」

「それで問題になるのは、女神ちゃんの体質よ。」

私も、あなたたちの話を盗み聞いただけだから確証はないんだけど、女神ちゃんつて周りに女神ちゃんのことを大切に思う人がいないと不幸が起こるんでしょ？」

「こんどみんなの家に盗聴器がないか調べる必要があるな。」

「そんなものつけてないわよ。」

「というかそんなものがあつたら確認なんて取らないわよ。」

偶然夏休みに美術室に用事があつて行つたらそんな話が聞こえたのよ。」

「夏休みの美術室の用事つてのが気になるところだけど、和美は盗聴器とかは使わないわよ。」

そんなことしたら、犯罪者じゃないの、私だつてそんな子とは友達でいられないわよ。」

「鈴がそういうなら信じよう。しかし、このことは一応他の子には言わないで欲しい。」

不幸を願う子が知つてしまったら、メグちゃんは不幸を祈られることになつてしまつたらね。」

「私も女神ちゃんが大好きなんだから、そこら辺は大丈夫よ。やっぱりそうなのね。」

だから、もし竜さんと女神ちゃんが付き合うことになつて、T高に進学した場合に、

周りに守れるのが竜くん一人なのは危険だと思うから、私も影から

女神ちゃんを支えてあげたいのよ。」

同性愛思考ではあるが、本当に純粹にメグのことを大切に思っていて、
れていることが私と浩太にも分かった。

こんな性格だから和美が私のことを友達ではなく、恋愛の対象として
見ていることが分かってても親友でいれたのかもしれない。

「わかった。

でも、そのことについては、僕らの中でも色々と検討しないと
いけないと思うから、

やっぱり今度みんな集まった時にきちんと話をしよう。

僕らは竜とメグちゃんが付き合うように応援してるけど、それでも
平気なんだよね？」

「大丈夫よ。こんな性癖だから、好きだけど恋愛に発展しないこと
はよくあったもの。」

鈴もだけど、中学校になってからだって、

女神ちゃん以外にも色々な人を見て私の性癖が受け入れられないこ
とは覚悟ができてるつもりだから、それでも愛してるんだからいい
の。」

そのあと、和美の家につき、浩太と二人きりになった。

「どうおもっ?」

「僕には判断がつかないよ。

同性愛者の人って受け入れられないことが多いから、その分純愛になるって話は聞いたことがあるけど、

その純愛がどんな形になるかまではわからないからね。」

「和美は悪い子じゃないけど、一途なのよね。

それがいい方向に向いてくれるなら、私たちにとってもメグにとっても良いことだとは思っわ。」

「そうだね。司もきつと、そう思ってるんだとは思っけど、やっぱり心配だね。」

「今のところ気づいてるのは司を合わせて三人なんだし、少し三人で話し合ってみましようか?」

「それがいいと思うよ。

和美ちゃんがメグちゃんのことを大切に思ってくれるなら、それを拒否するなんて選択僕らにはできないしね。

それに、一番はメグちゃんの気持ちだ。」

「うん。竜くんとの話見てもメグの恋愛音痴はすごいわよ? こればかりは私たちがサポートした方がいいんじゃないかしら?」

「これは、司と竜と僕の三人で話していたことなんだけど、さつき和美ちゃんが言ったこともあながち間違いないかもしれないんだ。」

そのあと、臨死体験と絡めて、メグの男の子らしさについて話し合った。

恋愛について鈍感なのは前世の記憶というものが係わりがあり、前世は男だった可能性まで聞いて私は困ってしまう。

「じゃあ、メグって男の記憶が残っているから女の子のことが好きかもしれないの？」

「いや、真奈美ちゃんへの反応を見ても、今はそんなことはないと思うよ。

ただし、今後どうなるかは分からない。

正直メグちゃんは僕たちの思考では思いもよらないことをするのが常だから、推測はできても確証はないんだよ。」

「そうね。メグなら何が起きたって不思議じゃないのは私も納得よ。これじゃあ竜くんが奥手になるのもうなずけるわ。」

「うーん。竜のことはまた良く分からないだよな。

こっちも複雑でさ。

心友かといわれたら間違いないんだが、男同志の関係かと聞かれたら真っ赤になるメグちゃんの反応からは男女の関係を思わせるだろ？」

「確かにそうね。

ああ、本当に頭がこんがらがって来たわ。

私も同性愛だったら浩太よりメグちゃんのこと好きだったかもしれないわね。

むしろ、前世ではメグちゃんと恋人だったりして？」

「それが、竜の話だとあり得るんだよな。」

前世の記憶と言っているが、その性質は普通とは違うらしいんだ。」

このあと、夏合宿の時に竜くんとメグがどのような結論になったかをもう一度話して、

あの時実は誤解だったことも赤くなりながら、浩太が話してくれた。

「ふふ、誤解のおかげで、私たちは付き合うことになったんだから、それには感謝よね。」

「まあ、でも、誤解してなくてもいつかはこうなっていた気がするよ。」

あの時は無理やり分からされたけど、冷静になってみたら二人は完全に両思いなんだからね。」

「そうね。」

ところでさっきの話だけど、私もメグの結論が正しいと思うわ。

前世の記憶があるだけにしておかしいことが多いのも確かだもの。

メグは一回人生をやり直してるのよ。」

「そうだね。」

その時仲が良かった人と現世でも仲良くなっていると言ってたから、麻美ちゃんや鈴、ひよっとしたら真奈美ちゃんや由香ちゃん、花火ちゃんも前世ではメグちゃんの恋人だったかもしれないね。」

「前世のメグはプレイボーイだったのかしら？」

メグに限って、そんなはずはないわね。

一度に付き合うわけないわね。

それだけ恋人が変わってしまったのは、前世ではすごく不幸だったのかもしれないわ。

優しいメグは危険な目に合わせたくなくて、付き合っている彼女を

振ったり告白されても相手にしなかったりして、でも、相手はすごく愛していたからメグに近づく。」

「たぶんね。」

そう考えると、タイムマシンで女の子に変わってしまったのは本当に幸せなことだったのかも知れないね。

竜という安全な恋人を手に入れることができたんだから。」

「そうね。」

私たちが不幸が起きた時に男の子のメグを守ってあげられなかったかもしれないし、逆を守ってもらうことが多かったかもしれないわ。

それを考えると竜くんなら危険な目にあっても乗り切れるし、メグのことを守ることができるものね。」

「全部推測でしかないけど、メグちゃんのことには本当に守ってあげないと思って気になってきたね。」

前世で苦勞をしただろうメグちゃんのためにも今回は幸せになってもらわないとね。」

私たちは、お互いにこれからできる限りメグのために幸せを願ってあげようと確認しあい、

私の家に着いたので別れた。

メグと前世では付き合っていたかもしれないとわかり、それもちょっと嬉しいような気持ちになったが、

やっぱりメグに幸せになってほしいので、離れてしまっただろう前世のことを考えるよりも竜くんと幸せになってほしいと思った。

「あれ？もし、浩太の仮説が正しいとして、メグと和美の関係ってどうなってるのかしら？」

変な疑問が頭によぎってしまったが、私はご飯を食べて寝ることにした。

一応明日メグに確認を取って見ないといけないわね。

チャプター31（後書き）

鈴目線にしたのに、秋のツンデレを書くことができずに少し後悔しております。

新キャラである和美のキャラが今回で伝わったでしょうか？

当然ながら今回のテーマは“和美の紹介”です。和美がどんなキャラで、どんな風に今後秋たちと接していくのが皆さんに伝わったらと思います。

百合キャラ二人目かよと思った皆様には、大変もうしわけないのですが、真奈美が百合脱出しつつあるので、新たなキャラである和美には今後活躍してもらおう予定です。秋には男の子にも女の子にもモテて欲しいというよく分からない作者の願望が和美のキャラクターを決定した予感がします。

そのうち薔薇キャラも出てくるの？って思った方、期待は期待のままで、今は沈黙を守らせていただきます。

それでは、キャプチャー31を読んでいただきありがとうございます。

チャプター32 (前書き)

ついに感動の最終回???

読み進めていただければわかります。

チャプター32

私たち海良中学美術部の作品

「ああ、それだったら、麻美や鈴と同じくらいの雰囲気があったよ。和美ちゃんは前世では恋人だったかもしれないね。」

鈴に前世の記憶に関することを聞かれてた秋はそう答えた。

「ええ？じゃあ、和美は男の子のメグと付き合いっていたってこと？」

「たぶんね。三回も臨死体験して、感覚が鋭くなっているから間違いないと思うよ？
でもそれがどうしたの？」

「変ね。和美が男の子メグと付き合い合うなんてあるはずなのに。」

「その言い方なんか嫌だな。それって、竜に聞いたの？
確か、竜以外には言っていないとおもうんだけど。」

「ああ、浩太に聞いたのよ。」

「竜くんも司くんと浩太になら相談しても大丈夫と思ったんでしょ
うね。」

私にも相談してほしかったところだけど、まあそれは仕方がないと思うわ。

竜くんも前世とはいえ元カノかもしれない人間にそれを伝えるのは抵抗があっただろうし。」

鈴の言葉に秋は良く分からない様子だ。

一応、心友たちに内緒にしていた後ろめたさから謝っておくことにしたらしい。

「ごめんね。」

前世の記憶については、完全にオカルトの話だから確証があったわけじゃないし、ボクが昔男だったなんて言い辛くって。」

「別に良いわよ。今は浩太と付き合ってるんだしね。麻美にはこのことは言ったの?」

「言うてはいないけど、気づいてるみたいだよ。前に叱られたこともあるしね。」

「そうなんだ。」

なんて叱ったのか私も分かるからそれは良いわ。

でも、一応ちゃんと自分の口で説明した方がいいと思うわ。」

「うん。分かったよ。」

麻美と鈴にはお世話になってるし、隠しことはできるだけしたくないんだよね。」

「お世話だなんて、みずくさいわよ。」

まあ麻美も今は司くん付き合ってるんだしきちんと話したら分かってくれるわよ。」

それよりも、もうすぐ学園祭だけど、作品の方は大丈夫なの？
最近劇の練習ばかりで作ってる暇なんて無かったんじゃないの？」

「このところ忙しく、確かに秋は作品作りはしていない。
アクセサリーの方は出来上がっているのだが、もう一つの絵の方は
最近美術室に置きっぱなしで何も手をつけていなかった。」

「それなんだけど、昨日、和美から電話があって、
練習はだいぶ進んだから美術室に多少行けるようになったよね。」

「え？主役がいないで大丈夫なのかしら？」

「おはよう。鈴、女神ちゃん。」

二人の会話を扉の向こうで聞き耳を立てていた和美が入ってきた。
確かに盗聴器などはつけていないが、こうして何度も鈴と秋の会話を盗み聞きしていたのだ。

「おはよう。今日も扉の側にきて入って来なかったからボクらの会話を聞いてたの？」

「え？」

「ごめんなさい。盗み聞きしてたんじゃないかって、込み入った話っぽかったから私の話題が出るまで入り難くって。」

「必至になってごまかしているが、秋は近くにいた気配に気づいており、

それには気付いていなかった鈴木、

こうして何度も会話を盗み聞きしていたことによって昨日の話がで

きていたことに気づいてしまった。

「うん。女神ちゃんはすごいわね。」

扉はさんでいても私のことを分かってたなんて、何か運命的なものをを感じるわ。」

案外和美も鈴の親友だけあって肝が据わっている。

秋にはあがり症だなんて言っていたが、人生という舞台で普通の女の子を演じてきた和美にとって学園祭の舞台などさほど緊張するよ
うな場面ではないだろう。

「全く、聞いてたのはもう忘れるなんて言っても無理だからいいけど、言いふらしちゃだめよ。」

本当に何が起こるかわからないんだから。」

「了解したわ。」

さっきの話の続きなんだけど、昨日脇役の子たちを見たら、

女神ちゃんの演技は素晴らしいことが分かったから、

場面が多いから完全に休んでもいいようにはできないけど、

少しくらいなら美術部の活動ができるように合わせることにしたのよ。」

「ありがとう。」

和美ちゃんも大変だろうけど、部長だから少しは美術室にいかないとまずいからごめんね。」

「そんなのいいわよ。」

それより、さっきみたい呼び捨てで、和美でいいわよ。

昨日の電話でも言ったけど、女神ちゃんとはもっと仲良くなりたいのよ。」

「じゃあ、ボクもその女神ちゃんってのどうにかしてほしいかな。秋でいいよ。ボクも呼び捨てなんだし。」

「わかったわ。秋って呼ぶわね。」

女の子で呼び捨てにするのは和美だけだつのも、アドバンテージのように考えているのだろう。

鈴にはそれらが分かった。

昨日の宣言通りに秋に優しく接することによって関係を深めたいのがわかったのだろう。

「はあ、これじゃあ和美の思うままね。学園祭では竜くん頑張ってもらわなきゃ。」

「ん？竜たちのクラスはそんなに大変なの？」

竜って今年は主役とかしないで小道具係って言った気がするけど？」

鈴の言葉を目ざとく拾った秋だが、その真意に関しては全く理解していないかった。

もう一度大きくため息を吐くと鈴は和美に顔を向けた。

「どう？私の言い分も理解できたでしょ？」

これなら私だってチャンスがあると思うわけよ。

まあ、そうならなくなつたって前世の恋人をないがしろにしたいなんて私も思わないから平気よ。」

「そ、そんなことまで聞いてたの？」

え、えと。前世の話は完全なオカルトだから信じないで、ボクもそ

んなことがあるかどうか分からないからさ。」

真赤になって和美に弁解する秋だが、それが和美にも鈴にも照れていることが伝わってしまっていた。

「ああ、本当に可愛いわ。」

前世の私を呪ってあげたいわ。こんなに可愛い秋のことを手放したなんて許せないわ。」

そういつて、立っていた和美は座っていた秋の頭を抱きよせた。

鈴はちよつと引きつった顔をしているが、ここで無理やり引き剥がしても、

逆に要らない心配ができるだけなので秋の対応に任せることにした。

「和美。苦しいよ。」

まあ、前世では付き合ってたかもしれないけど、今度は女の子同士なんだし、友達になってね。」

「ええ、もちろんよ。」

まだ、心友って言われる六人に入れるほど関係はできてないかもしれないけど、

今後お互いに知り合っていけば私も心友の仲間に入れると思うわ。」

「ごめんね。」

本当にまだあんまり話したことないからボクも判断がつかないけど、学園祭を通して和美と仲良くなれたら、みんなと同じように心友に証をプレゼントするね。」

「うふふ。楽しみにしてるわ。絶対に秋に私のことを理解してもらおうわ。」

和美のここでの私への理解というのは色々な意味が含まれているのだが、
秋には伝わるはずもなく、素直にうなずくのであった。
鈴は本当にどうしたものか判断がつかず、とりあえず、司たちに相談すべく、
今は二人のやりたいようにさせておくのだった。

和美のことが危険ではないことも分かり、美術室にも定期的に来れるようになる。秋も余裕ができたのか、
作品も仕上がり、役の方も自分が出る場面は、本人はほとんど完璧になっていたため、
小道具などの手伝いをするようになった。

秋が手伝いだすと、普段から美術部で色々なものを作ってきた秋は手先が器用で、衣装などもかなり立派なものができ、舞台背景なども、かなりきれいな絵が描かれた。

「本当に秋が手伝ってくれたら、あっという間に準備が終わったわね。
将来舞台女優兼衣装係、として就職したら間違いなく売れっ子になれるぞね。」

「それはできないかな。」

小学校の時に武道家の道をあきらめたのと同じ用に、あんまり目立ったことはしたくないんだよね。

和美は知らないかもしれないけど、ボクはこれでもすでに結構有名なんだよ。」

「最強美少女のことよね？大会優勝後に悲劇の事故で選手生命が絶たれた日本で一番強い小学生でしょ？」

「あら、やっぱり有名なんだね。中学校じゃそこまで詳しくは、うわさになってないとおもってたんだけど。」

秋のことを調べていたことがバレそうになってちょっと苦笑いをしながら和美はごまかす。

「ちょっと聞いたことがあったのよ。中学校じゃ最強美少女って名前しかあんまり知られてないかもしれないわ。」

不穏な響きに気づく秋だが、和美が何か隠したいことがあると気づいても、

言いたくないならば掘り起こすのも悪い、と考えて秋の方もそのことについて追及はしないことにした。

「とにかく、明日の学園祭はがんばりましょ。」

「ええ、美術部も明日は展示があるし、大変だろうけど、こっちも手を抜かないですよ。」

明日は1、2年生の劇と美術部の展示がある。そして次の日には三年生と先生たちが劇をすることになっている。

本来なら三年生の方が注目をあびるのだが、今年は作品展示もあるので、役員の人たちは一日目に集中してくるらしい。

「それぞれのクラスの演劇を見ていただく前に、私たち美術部の展示の時間をいただきましたまして、ありがとうございます。」

今年からは部員も増えましたので、私からではなく、それぞれの作品の制作者と後輩三人から作品の紹介をしていただきます。それではみなさん舞台中央をご覧ください。」

舞台の端に立ち、秋は最初のスピーチをした。

挨拶が終わると、マイクを真奈美たちに渡してしばらく休憩だ。

最後の挨拶も秋がすることになっているが、

去年はそのほとんどを鈴と浩太と三人でやっていたことを考えると、今年の秋は余裕がある。

それぞれの作品を紹介していき、後輩たちの作品もかなり好評のようだ。

鈴の作品が終わり、浩太の作品となった。

「僕は、去年から蟹津秋さんの作品にずっと触れてきました。色々な分野で才能を展開する彼女に影響されて、僕にも何かこれだけはこの才能がないのか模索するようになり、今年になってこの彫刻というものに出会いました。」

浩太が挨拶をして上に掛けてあつた布を取り去ると、そこには木の彫刻でできた二人の人物象があつた。作品自体はとても小さいためスクリーンを通しての映像だが、観客たちはその作品の出来栄に驚いているようだ。

「木というのは、削りやすい場所削りにくい場所があり、思うような形を作るまでかなり苦労しましたが、最後にできたこの作品は本当にこの形になるべくして存在していた様な木でした。」

元々は二つの像を作る予定でした、しかし、ここに出来上がった二人は、手のところがとても硬くてこれ以上削ることができません。もし、これ以上無理に削ろうとすると、割れてしまいます。そして二人の顔の部分は常に微笑みの形になっています。二人の愛をこの木は示しているかのように感じ、僕はこれが完成形だと確信しました。」

会場からは大きな拍手が起こった。

浩太はこの像を作るために夏休み全部かけていたので美術部のメンバーも、

浩太の作品が認められたことに本当に喜びあい。

浩太に激励を送っている。

「それでは、最後になりましたが、私たち美術部の部長である蟹津秋先輩の作品を代表で私が紹介します。」

コンテストの時は失敗してしまった真奈美だが、何度も練習し、秋たちに相談をし、ここに立っている。

今回はあの時の失敗を繰り返さないためにも、失敗は許されないとばかりに気合十分である。

「まずは、アクセサリーをお見せします。」

これらの装飾品は、一部を除きすべて自然のものを使っております。手造り故の歪みも、自然を由来とした材質と相まってとても美しい仕上がりになっています。

実際に数点を美術部員の花火が装着しておりますのでこちらをご覧ください。

今は制服姿ですが、実際に私服姿になっても全く違和感なくつけることができます。」

ここで、花火が舞台中央でゆっくりと回転する。

シルバーアクセサリーと違い、光を反射しないので遠目では良く見えないところもあるが、

そこはスクリーンに移されている画面で後ろの人たちにも見ってもらう。

「一つずつ部長の小さな手の温もりが伝わってくるような、そんなアクセサリーとなっています。」

自然由来の素材と部長による生き生きとした曲線がこれらのアクセサリーを芸術にしています。

続いては、部長の絵画を紹介します。」

真奈美の声に従って花火は舞台上に残ったアクセサリーを持って舞台袖に引くと大きな布を掛けた絵を持った由香が舞台中央に歩いてくる。

「布をとる前に作品の紹介をさせていただきます。

これは部長からのたつての願いですので、皆さんも目を閉じて先にこの中に描かれている内容を想像してみてください。」

そう言つて真奈美は会場の客たちが目を閉じるのを待つ。

「この作品のタイトルは“幸せな時”です。

部長の蟹津秋にとって、これ以上幸せな時が思い出せないほど、この時幸せを感じた風景を、この一枚のキャンバスに写し取りました。ある晴れた日、心友と一緒に小学校の中庭でみんなで作ってきたお弁当を食べ、笑っている風景がこのキャンバスには描かれています。

それでは、みなさん。目を開けてみなさんの想像したイメージと私たち美術部の描いた幸せの時を比べてみてください。」

会場の人は目を開け、秋の描いた絵を見る。

そこには、芝の上にお弁当を広げ、輪になって笑いあう六人の少年少女が描かれていた。

長身の男の子は手におかずをもっており、それを少し小さい男の子が奪おうとし、

それをたしなめている肩まで髪の毛の伸びた女の子がいます。

もう一人の男の子は、ショートヘアーの女の子と笑顔でその様子を眺め、

そんな五人を見ているロングヘアーの女の子も幸せそうに微笑んでいるのでした。

「このロングヘアーの女性は部長本人を表しています。

他の五人は部長にとって心から信頼できる心友なのです。

親しい友達という親友を超えた心の友と過ごした昼下がりの一時、どんな楽しい遊びをするよりも、どんな美味しいご飯を食べるよりも、

部長にとってこの時が一番幸せな時だったのです。」

真奈美ちゃんという言葉が終わると会場中から割れんばかりの拍手が起こった。

真奈美ちゃんも笑顔でお辞儀をして舞台袖で待機していた花火が舞台の幕を下ろす。

幕が降り切るのをまって秋は袖から出てお辞儀をする。

会場からはまた大きな拍手がおこり、拍手が収まるのをまって、マイクを使って話します。

「これで、美術部の作品展示を終わります。
みなさんからの温かい拍手に迎えられ、私たち美術部も来年に向け
てより一層努力することができます。」

私たち海良中学美術部の作品をご覧いただき誠にありがとうございました。
ました。」

もう一度秋がお辞儀をすると、また会場から大きな拍手が起こった。
秋は顔をあげると笑顔で舞台袖へと戻って行った。」

「お疲れ様でした。」

「真奈美ちゃんもお疲れ様。良いスピーチだったわ。」

「本当に、夏から成長したわね。これで私たちも心置きなく引退で
きるわ。」

「そんなことはありません。今回は女神先輩や浩太先輩の作品が会場
の人たちに認められてこんな反響があっただけです。」

「確かに、浩太の作品はすごかったけど、真奈美ちゃんたちの作品
だって、会場の人たちは注目してたはずよ。」

「うちの作品の時と拍手がちがったっす。やっぱり女神先輩たち
の作品はすごいですよ。」

「ボクが最後に言った言葉聞いていなかったの？」

“私たち海良中学美術部の作品” って言ったでしょ？ボクや浩太の作品だけじゃないわ。

みんなの作品を会場の人たちにはみてもらったんだから。」

「そうだな。僕から見ても、みんなの作品をそれぞれ、感想をもつてみてくれていたように感じたよ。」

作品紹介前の真奈美ちゃんたちが作ったケーキも含めてね。」

「浩太先輩。なんだかやつぱり浩太先輩が凄い良い人に見えます。」

由香の一言で全員が笑いだす。

浩太も、自分からしくないことを言った自覚があつたのか大きな口を開けて笑っていた。

「全く、由香ちゃんにはかなわないな。」

まあ、僕たち美術部の展示は成功したとおもう。

あとは片づけをしてクラスの劇を頑張ろう。」

「確か、次は由香ちゃんと花火ちゃんのクラスよね？」

片づけは私たちに任せて舞台設置の方に行っていいわよ。」

「大丈夫です。」

元々、美術部の仕事があるからってクラスには伝えてありますので、美術室に作品を運んですぐに向かえば間に合うように私たちの出番は遅めになってます。」

「そうっす。さあ、そういうことなんで一緒に美術室に行けるっす。」

それぞれの作品を手にとり、秋たちは一度体育館を離れ美術室へと向かった。
秋の作品は量が多いし大きいので花火や由香が手伝っていた。美術室に着くと、
由香と花火は走って体育館の方へと戻って行った。

「本当にこれで女神先輩たちは引退なんですね。」

真奈美は秋たち三人の顔を見て、涙をためながら話しかける。

「泣かないで真奈美ちゃん。これでお別れっていうわけじゃないんだからさ。」

そう言っただけで秋は真奈美を抱き寄せた。

あとにも先にも秋から真奈美を抱きしめたのはこの一度だけかもしれない。

「だって、ヒツグツ女神先輩い。」

真奈美は本格的に泣き出してしまった。

浩太と鈴も、そんな真奈美の様子を優しく見守っている。

真奈美の嗚咽が少し治まってくると、ゆっくりと体を離し、秋たちは今後のことについて話した。

「ボクたちから真奈美ちゃんにお願いがあるんだ。」

「私たちは、どうしても美術部を続けていくことはやっぱりできないの。」

「だけど、時々は顔を出すつもりなのよ。」

「だから、そんなに泣くな。」

あと、メグちゃんは中々来れないだろうけど、鈴と僕は三年になつてからも学園祭まではサポートしに来るつもりだからね。」

「はい。それは分かってます。」

「だからね。」

ボクたちが美術部を訪れた時に、美術部のみんなが泣いてたら嫌だなと思うんだ。

ボクらが美術部を早期引退したこと、後悔するくらい楽しい部活に、真奈美ちゃんたちにはしてもらいたいんだ。」

「後悔させるくらい?」

「そうだよ。」

そうしたらボクらはもっと美術部に愛着を持ってついつい訪れてしまつかもしれないね。

そうなつたら、真奈美ちゃんたちには温かく迎えてほしいんだ。」

「わかりました。先輩達が、うーんと後悔するくらい良い部活にして見せます。」

「ありがとう。」

じゃあ、部長は真奈美ちゃんにお願いするね。」

花火ちゃんや由香ちゃんにはすでに了解を取ってあるから、四月になって、ボクがこれなくなるまでに、部長の仕事をたたき込むからしっかりついてきてね。」

「はい。私女神先輩みたいには無理かもしれませんが、一生懸命がんばります。」

秋は真奈美の力強い言葉を聞いて、真奈美の頭をなでた。

自分は体質の影響で美術部を途中で投げ出してしまうことになるが、真奈美たちがいれば、

今後もきつと美術部は楽しい部活になるだろうと感じていた。

「さあ、由香ちゃんたちの次は真奈美ちゃんたちのクラスだよ

。涙のまま舞台上がりたくなかったら涙を拭いて笑って舞台に向かおうよ。」

そう言っつて、真奈美の頭をもう一度優しく撫でると、秋たちは美術室を後にした。

美術室の中には、秋たちの作品が静かにその様子をつかがっていた。

「女神先輩から初めて抱きしめられてしまいました。」

「真奈美ちゃんもさっきまで、泣いてたかと思ったたら強かだな。」

「ふふふ、女の子の涙は武器ですから。女神先輩に抱きしめられて、涙を流した記憶は私には一生の宝です。」

「真奈美ちゃん。嘘泣きしてもボクには分かるから、今後涙で抱きしめてもらおうなんて考えても無駄だからね。」

「ええ？そんなこともわかつちゃうんですか？もう少し泣いていればよかったです。」

「こらこら、泣くなどは言わないけど、部長になったら泣いてる暇なんて滅多にないんだぞ。」

「女神先輩も合宿の時に泣いてたじゃないですか？私だって辛いことがあつたら泣いちゃいますよ。」

「そうよね。メグの泣き顔はホント可愛かったわ。」

でも、今度から泣く時はメグにじゃなくて、由香ちゃんや花火ちゃんと一緒に泣いた方がいいわ。」

その方が真奈美ちゃんにとって“幸せな時”が来るはずよ。」

「女神先輩の作品みたいにですか？だったら、私もそうします。」

「そうだね。由香ちゃんや花火ちゃんなら真奈美ちゃんの本当の意味での心友になってくれると思うわ。」

「はい。あの絵の中の先輩たちの用に心からの笑顔で話せる心友になつて見せます。」

「でも、あの絵は反則よね。私なんて浩太を叱ってる所じゃないの。」

「

「僕は竜のお弁当を奪おうとしてるところだぞ？」

「だって、あの時本当に幸せだったんだもん。」

「もう、恥ずかしい場面を描かれたはずなのにそんな風に言われたら、怒れないじゃないの。」

「全くだ。メグちゃんには負けるよ。」

三人はお互いに微笑みあい、そんな様子をみて真奈美もこれから美術部を頑張ろうと心に誓うのだった。

体育館に着くと、司や麻美、竜も秋たちのことを迎え入れ、先ほどの絵の用に微笑みあう六人の姿があった。

“幸せな時”それは人によって違うが、秋にとって、心から信頼できる友人たちとの一時それこそが本当に幸せな瞬間なのだろう。

「秋の絵はすごかったな。まるで本当にあった場面を抜き出したみたいやったやん。」

「竜う。まるでじゃなくてえ。本当にあった場面だよお。」

「え？ほんじゃあ、あれってやっぱり宝探しの時のなん？」

「そうだよ。ボクにとってあの宝は本当に大切な宝物だったからね。思い出として絵に残しておきたかったんだ。」

「そっか。」

あん時の写真もみんな大切に持つてるみたいやし、俺らにとって一番の宝ってやつぱ心友なんやろな。」

「そうね。私も秋ちゃんと今みたいな関係になれて本当に良かったと思ってるわ。」

でも、欲を言えば、もっと親密になってほしいところが一か所あるけどね。」

「ん？もつと親密に？」

竜は司に、秋は麻美に、二人が付き合ってくれたら良いといった内容を耳打ちする。

「ちよま。そ、それはだな。えつと・・・」

「麻美い。幸せな時だったんだからいいじゃないか。」

それぞれ真つ赤になりながら反論するのだが、お互いにテンパっており、互いに何を耳打ちされて反応しているのか気付いていない。

「どう？メグにとっての幸せな時って意味わかった？」

「そうね。私も秋から認められてあんな風に絵に残してもらいたいと本気で思ったわ。」

「ふふ、和美が男の子メグに惚れちゃうのも分かるわ。」

メグは生まれ変わってもきつとメグだもの。

男だからとか女だからとかそういうのを超越して、周りを幸せにする何かを持つてるのよ。」

「そうね。私も秋が男の子でもきつと恋してたと思うわ。」

「あ、和美。鈴も和美と話してないで助けてよお。麻美がいじめるんだよお。」

「私も混ぜてもらおうかしら。秋の真っ赤な顔は可愛いから私もからかってみたいくなるわ。」

「そんなあ。和美までボクのことをいじめようとするなんて。ボクの味方はいないの?」

「私たちはいつだって秋ちゃんの味方よ私たちは心友だもの。」

ただ、秋ちゃんの反応が可愛いから少しいじめたくなっちゃっただけよ。そうよね?」

麻美の言葉に和美も含めた六人が頷く。

そこには、新しい“幸せな時”が築かれようとしていた。

FIN

麻美（以降麻）「ちょっと待ちなさいよ。何よこのファインって。」

司「そうだよお。まだ、秋と竜付き合っていないじゃないかあ。」

作者（以降作）「ごめんごめん。なんかすつごく良い感じだったからこれで終わりってのもありじゃないかと思ってるね。」

麻「いい加減なこと言わないでよ。次は秋ちゃんのドロシーが待ってるのにこれで終わりなんてダメよ。」

司「そうだよお。劇のことあれだけ説明しておいてえ。ここで終わりなんてえ。読者のみなさんも許さないと思うなあ。」

霞「私の出番もすくな過ぎじゃないかしら？」

作「ちょ、霞は司や麻美とは別次元の登場人物なんだから出てきちゃダメでしょ。」

霞「いいのよ。作者が出てきてる時点で本編とは関係ない場所なんだから。」

作「まあそうだけどね。じゃあ、なんで作者がFINなんてつけたか説明しよう。」

三人「「「そうしなさい（い）」「」」

作「それはね・・・シリアスに耐えきれなかったからだよ。」

三人「・・・」

麻「全然シリアスじゃないと思うわよ？」

作「だって、あそこの最後はもうちょっと秋とかが暴れ出したり、竜が失言したりしてほしかったんだよ。でも、流れるにできなかったんだよね。」

司「まあねえ。あそこで秋を暴れさせたらあ、作者の神経を疑うよお。」

作「でしょ？しかも、次の“オズ”はぶっちゃけコメディにしようと思ってるからさ。ワンクッションこうしてボケを挟まないと執筆が進まないんだよ。」

麻「だからって、こんなパラレルワールド作ってまでブレイキングタイム作らなくてもいいと思うわよ。」

霞「まあおかげで、ここのところ出番がなかった私もセリフがあるわけだけど。」

作「ああ、霞は当分の間は出番ない予定だよ。」

霞「え？本当に？」

作「本当だよ。だって、旅行では竜たちに守ってもらって臨死体験

しない予定だし、基本旅行先でもない限り洋司さんでことが足りちゃうつてのが現状の設定だからね。」

霞「じゃあ、私なんで前回思わせぶりな発言させられたのよ？」

作「だって、秋の謎に迫るなら従順で仕事一本やりな未緒よりも、エンマの娘という立場にありながら破天荒な霞のキャラの方が使いやすいそうじゃない？」

霞「誉められてない気がするわ。」

作「まあ、今後秋の謎を解く時には活躍してもらおう予定だから今はゆっくりキャラを温めていてよ。」

麻「ねえ？高校で私たち秋と一緒にならないのよね？」

作「そうだよ。心友メンバーに囲まれてたら秋が臨死体験しないからねえ。」

麻「ということは、私たちが活躍できるのって、中学生編までじゃないかしら？」

作「確かに、高校とか大学のキャラ新しいの考えないと。作者のお気に入り達がみんな高校編で一旦とはいえ、離れてしまうのは作者的にもダメージが大きいよ。」

司「僕ってさあ。初めて出会った心友なんでしょお？離れても執筆できるのお？」

作「う・・・司に関しては、書き分けもすっごく楽し、離したく

ないのが本音だけど、計算してみたら臨死体験の数が少なすぎて、45までに36回も臨死体験できないんだよね。このまま行ったら、

司「それで、僕たち心友を高校時代切り離して、回数を稼ごうってわけえ？」

作「まあ、そこは大人の都合ってことで。」

麻「全く、きちんと最終回までプロット作っておかないからこうやって序盤の設定の埋め合わせをすることになるんだから気をつけなさいよ。」

作「すみません。なんで、作者が自分の作ったキャラに叱られてるんだろう。」

麻「そんなの自分でキーボードたたいてるからに決まってるじゃないの。」

作「小説のキャラは自分の手を離れて独り歩きするって言うけど、本当だったんだね。AKI的にはもっとキャラたちは違うイメージだったんだけどなあ。」

司「まあ、良いんじゃないかなあ。読者様はこんな作品だから読んでくれているわけだし。」

作「そうだね。読者の皆様には本当に感謝してます。これからも、再転の姫君をよろしく願います。」

麻「何勝手にきれいにまとめようとしてるのよ。FINとか勝手に

入れるし、パラレルワールド利用して今後のネタバレまでしたんだから、きちんと謝罪しなさいよ。」

作「麻美って、作中とここでのキャラが違う気がする。」

ギロリ

作「なんでもありません。読者の皆様突然このようなパラレルワールドを書いてしまい本当に申し訳ありませんでした。FINは嘘なので二話からもうかが再転の姫君を見捨てないで読んでください。」

霞「二話ってなによ。次話のことね。本当に誤字多いんだから、今後も誤字などありましたら報告お願いします。作者であるAKIも一生懸命書いていますが、漢字苦手だったり、修正忘れたりあると思いますので、どうか温かい目で見てあげてください。それでは、次回は秋がドロシーになってオズの魔法使いの世界を演じます。」

作「結局キャラ達に・・・」

司「まあまあ。今後頑張っていこうよお。」

作者は司に肩を叩かれ慰められるのだった。

チャプター32（後書き）

作者も後悔しています。

途中までは宝探しの回くらい良い出来栄えだったようなそんな気がしています。

ただし、途中から本気でF I Nにしかけたことにより、だめだ、ここで終わってはいけないと考え、パラレルワールドを展開いたしました。

ドロシー秋も書かなくてはいけないし、秋の謎について全く放置のまま終わってしまうのはまずいし、中学生編だけでもF I Nにしたいという気持ちもありましたが、それだとドロシー秋を完全な番外編で書くしかなく、番外編は短い文章にしようと考えているのであることもできずに、こうしてパラレルワールド出現という形になりました。とりあえず、今回のテーマを発表いたします。

“ 幸せの定義 ” です。作者にとっての幸せの定義をみなさんに押しつける気持はありませんが、作者にとっての幸せの定義をみなさんに伝えたくて、宝探しの時と同様に大切な宝物として心友を出させていただきました。

このような稚拙な文章ではありませんが、お付き合いいただき本当にありがとうございました。

本当に次回に続きます。

チャプター33 (前書き)

みなさんお久しぶりです。あいも変わらずアクセス数は閲覧できませんが、諸事情により投稿を再開したいとおもいます。

チャプター33

オーバー・ザ・レインボー

「次は、”オズの魔法使い”です。」

司会の男の子の声とともに、舞台の幕があがり、照明と音響でたつまきをイメージしながら、秋たちの劇は始まった。

たつまきが収まると、小さな小屋の絵から、ひとりの女の子が犬のぬいぐるみを抱えて出てくる。少女は青と白のチェックのかわいらしいワンピースを着てゆっくりと中央に歩いてくる。

「まあ、怖かったわ。いきなりたつまきが起こるんだもの。トト大丈夫？」

「ワンワン」

音響の犬の鳴き声が響き、少女と犬のトトの無事が知らされる。少女は当たりの様子をつかがいながら、セリフを紡ぎ出す。

「すごく大きなたつまきだったのね。ここはどこかしら？生まれ故郷のキャンパスではないみたいだけど・・・」

そうすると、舞台袖から数人の生徒達が奇妙な衣装をまとい、出てくる。そして、最後に和美が美しいドレスに身をまとい出てきた。

「これはこれは、魔女様。悪い東の魔女を退治していただき、ありがとうございます。」

「え？私は魔女なんて退治していないわ。」

「お家をごらん下さい。あなたのお家の下敷きになって悪い東の魔女は退治されたのよ。」

和美のセリフとともに、舞台上の少女は小屋の方を見る。すると、真赤な靴だけがおちている。それを和美が手にとって、少女へと差出す。

「これは、悪い東の魔女の履いていた靴よ。これを履いてちょうだい。可愛い魔女さん。」

「どうしましょう。私人をあやめてしまったのですか？」

「気にすることはありませんよ。あなたは、悪い魔女を退治しただけなのですから。さあ、この靴を履いてごらんなさい。魔女さんは悪い魔女からこの東の国を救ったのですから。」

「あの、私は魔女ではありません。カンサスで生まれたドロシーという普通の女の子です。あなたはどなたでしょうか？」

「あらあら、良いことに気を取られて、自己紹介がまだでしたね。私は北の魔女よ。そしてこの人たちは東の国の住人、マンチキンたちよ。」

「北の魔女さん。私は悪い魔女を退治したわけではありません。たつまきに飛ばされて流れ着いただけです。その靴をいただくことはできません。」

「ドロシーは正直ものなのですな。」

そう言って、和美はドロシー役の秋を抱きしめた。

(ちょっと、台本に抱きしめるなんてないじゃないの。)
(これくらいのアドリブ問題ないわ。さあ、靴も私が履かせてあげるわね。)

「あなたのお家が悪い魔女を退治したのだから、あなたがこの靴を履いていいのよ。さあ、この靴は魔法の靴ですから、サイズもぴったりになるはずよ。」

秋はとりあえず、和美に合わせて、靴を履く、元々ぴったりのサイズのものだが、

「あら不思議、靴が小さくなって私の足にちょうどサイズのになりました。ありがとうございます。優しい北の魔女さん。」

「私は何もしていないわ。さあ、マンチキンのみんなもドロシーに感謝していますよ。」

和美の声に続いてマンチキンたちはそれぞれ感謝の言葉をのべ、丁寧にお辞儀をした。

「北の魔女さん。どうか、カンサスへの帰り道を教えていただけないかしら？ 私はカンサスに帰らなければいけません。」

「カンサスという場所は私も知りません。そうだね。エメラルドの都に向かってごらんさい。エメラルドの都には大魔道師オズ様がいらっしやいます。オズ様なら、カンサスへの帰るみちをご存知かもしれませんか。」

「エメラルドの都？大魔道師オズ様？」

「そうです。オズ様は私たち魔女が束になっても敵わない素晴らしい力をもって、エメラルドの都をお納めになられてします。さあ、この道を真つすぐ進みなさい。この道をたどっていけば、エメラルドの都につけましよう。心配いりませんわ。その魔法の靴があれば、きつとエメラルドの都へだって歩いていけるはずですよ。」

ドロシーは北の魔女とマンチキンたちに別れを告げると、舞台袖の方へ歩いていきます。

場面が変わって、かかしの格好をした司が背中に長い棒を背負って立っている。

「こんにちは、かかしさん。良いお天気ですわね。」

「こんにちはあ、本当に良い天気だねえ。」

ドロシーはかかしが返事をすると思っておらず驚いてしまつた。

「あなた口をきいたの？」

「はい、魔女さん。私は生きたかかしでございます。」

「まあ、この国には生きたかかしがいるんですね。私は魔女ではありません。ドロシーといいます。」

「ドロシーさんですかあ、良い名前ですねえ。お辞儀をしたいところですがあ。背中についた棒が邪魔でえ、身動きがとれませえん。」

「あらかわいそうに、私が棒を外してあげましょう。」

そう言って、ドロシーはかかしの背中から棒をとりあげます。

「ありがとうございます。何と心優しい人でしょう。」

かかしは、ドロシーの手をとると、ひざまづいて口づけをする。

(見てえ、ファンクラブの子たちが涙を流してるよあ。)

(え？本当だ。そんな感動するシーンだったっけ？)

(もちろんだよあ。みんな秋の演技に涙してるんだよあ。)

仲良しになったかかしとドロシーは一緒にエメラルドの都に行くことになりました。

「オズ様はあ。脳みそをくれるだろうかあ？」

「オズ様は偉い魔法使いですもの。きつとかかしさんに脳みそを分けてくださるわ。」

しばらく歩いていると、今度は斧を振りかぶったまま固まっているブリキの木樵がいました。

「ブリキさんどうしてそんなところで固まっているの？」

「実は、木を切り倒している最中に雨が降ってきて、関節が動かなくなってしまうんだよ。」

「じゃあ、なんで話せるのお？」

「え？ちよま、えっと・・・」

ブリキ役の要は司のアドリブに困り果ててしまった。

「口の中まで雨にぬれずに良かったですね。何か私たちにできることはありませんか?」

(もうちょっとからかいたかったのに。)

(要くんごめんね。司も和美もいきなりアドリブ入れないでよ。)

「あ、えっと、じゃあそこにある油をさしてくれないか?それで動けるようになるから。」

「これでいいのね。どうかしら?」

ドロシーが油をかけてあげると、ブリキは動けるようになった。

「ありがとう。本当に色々と助けてくれて、たすかったよ。君たちは何故こんなところに?」

「私はカンサスから来たドロシーと言います。私はカンサスへの帰り方を教えてもらいに、かかしさんは脳みそを分けてもらいにエメラルドの都へ向かうところです。」

「そうだったんだ。じゃあ、僕も心臓がないんだ。よかつたら、一緒に連れて行ってくれないか?」

「ええ？ドロシーと二人で仲良く旅してたのにい。」

ドガッ

観客席から見えない死角から秋が司の脇を攻撃した。もはや十八番となりつつある暗黒だ。

「かかしさん大丈夫？ブリキさん。こちらからもお願いします。かかしさんも具合が悪いみたいですし、どうか一緒にエメラルドの都に行ってください。」

「あ、ああ。とりあえず、つ・かかしさんを一緒に運ぼうか？」

「ええ、お願いします。」

ドロシーとブリキはかかしを引きずって舞台袖へとはけて行った。ブリキの顔は緊張のためかかなり引きつっていた。

「さあ、三人で、エメラルドの都へ向かいましょ。」

「ワンワン。」

「ごめんなさい。トトも一緒にね。」

何事もなかったかのように、舞台袖から三人とトトのぬいぐるみは出てきて歩き出す。

「がお〜!〜!」

ライオンが突然三人と一匹を襲い……

ドゴッ

ドロシーの黄金の左足がライオンを襲いました。ドロシーはとても機嫌が悪かったのです。

「痛い〜。あ、ドロシーは本当に強いんだね。」

「あなたみたい大きなライオンが私たちのような小さな人を襲うなんて臆病なのね。」

「そ、そうなんだよ。僕は臆病ライオンなんだ。だから、君たちに

ついて行ってオズ様に勇気をもらいたいんだ。一緒に連れて行ってくれないか？」

「いいよ。君みたいなあ。大きなライオンが側にいてくれたら、安全な旅ができるからねえ。」

(浩太あ、ごめんねえ。秋の機嫌めっちゃ悪いみたいい。)

(司のせいだろ。弾よけにも是非仲間になってことか?)

(気のせいだよ。さあ、劇を続けよう。)

「ありがとう。かかしくん。ブリキくん。ドロシーちゃん。みんなと一緒にエメラルドの都へ出発だ。」

「ええ、よろしくね。ライオンさん。これで危険な動物に襲われる心配がなくて嬉しいわ。」

「そ、そうだね。僕たちの危険は全部ライオンくんが引き受けてくれるから安心だね。」

「ブリキさんは鉄でできているんだもの。危険なんてないわ。藁でできたかかしさんとお肉でできたライオンさんと私は危険かもしれないね。」

「「「.....」」」

「さ、さあ。エメラルドの都までまだ遠い出発しよう。」

「痛い。さっきライオンさんに驚いてつまずいた時に足首をひねってしまっただけです。ブリキさん。どうか手をかしていただけませんか？」

「それは、大変だ。つかまって。」

ブリキはドロシーの様子に顔を赤らめながらも手を差し出すと、舞台の袖まで手を引いてはけていった。

逆のそでからその様子を見ていた。西の魔女

「ほっほっほ。とってもかわいいお嬢さんたちだね。これは、旅の邪魔をしなくっちゃ。ドロシーちゃんを怯えさせてあげるわ。」

「「おおお!!」」

なぜか観客からは、応援の声と非難の声が半々に上がった。

「かかしさん。ここはどこかしら？この道を通つすぐに進めばエメラルドの都につけるのよね？」

「そうだよ。暗くて恐ろしい森だけだよ、ここを通らないとお、エメラルドの都には辿りつけないんだよ。」

「この森には、何がいるか分からないから、みんな気をつけるんだよ。」

「何がでるんだい？怖い獣とかがでるのかな？」

「あなたはライオンでしょ？獣が出てきてもあなたなら大丈夫よ。本当に臆病なのね。」

「だから、オズ様に勇気をもらいにいくんだ。」

その時、いきなり、照明が光度をおとし、怪奇音と共に、西の魔女が現れた。

「この森は通してあげないよ。通してほしければ、私の出すクイズに答えるんだ。ただし、答えられるのは、一人一問だけだよ。」

四人は相談して、答える順番を決めました。ドロシー・ブリキ・ライオン・かかしの順番で答えることになりました。

「一問目は、七月二十六日はとある芝居が初上演されたことにより、特別な名前が付いています。その名前とは？」

ドロシーは戸惑いながらも、きちんと答えました。

「幽霊の日よ。」

「正解！」

(ちょっと、本当にクイズじゃない？簡単ななぞなぞを作ってたんじゃない？)

(和美ちゃんと鈴ちゃんが本番前に考えたらしいよ。)

(なによそれ、しかも、なんでわざわざ暗くするかな・・・)

「ひゅ〜ドロドロ。」

ビクッ

「さあ、次の問題を早くだしなさい。というかさっさとしなさいよ。」

「うふふ、ドロシーちゃんったら。そんな半泣きですごんだって可愛いだけよ。次の問題ね。ドラキュラ伯爵のモデルとされている、15世紀ルーマニアのワラキアの人の本名は？」

（ブラド三世よ。）

（え？何で秋ちゃんはそんなことしってるんだい？）

（散々武兄ちゃんに怪談話を聞かされてきたからね。）

「ブラド三世だ。」

「正解！第三問目にいくわよ。」

「次は僕の番だ。」

「学校には、様々な怪談話がありますが、海良中学に存在する七不思議を六つ答えなさい。」

「簡単だよ。開かずの間・独りでに鳴り出すピアノ・毛伸びの井戸・動く絵画・夜中に揺らめく人魂・亡者への階段ちなみに七つ目は、蟹津武満って人に聞けばわかるらしい。」

「パーフェクトよ。七つ目に関しては私も知らなかったわ。」

「なんでライオンくんはそんなことをしているんだい？」

ブリキはライオンに尋ねたが、西の魔女はその質問を遮って声をだす。

「さあ、最後の問題よ。海良中学きつての美少女と噂され、美術部に所属していることから、芸術の女神と呼ばれる少女の弱点は？」

「幽霊だよ。お化け屋敷に一人で入れないからねえ。」

「いやああー!!」

ドロシーは泣きだしてしまいました。というか、ライオンが学校に存在する七不思議について話しているあたりから、冷や汗をたらし、ブルブルとおびえていました。

「悔しいがすべて正解よ。仕方がないからこの森は通してあげるわ。」

（メグの可愛いおびえた姿も見れたしね。）

「次こそ覚えてなさい。」

そう言つて、西の魔女は去つて行きました。西の魔女が立ち去ると、あたりは明るくなり、道もはっきり見えるようになり、ドロシーたちはこれで迷わずに森を抜けることができそうです。しかし、ドロシーがあまりにも疲れてしまっているので、一行は少し、休憩をとることにしました。

「西の魔女は本当におそろしかったね。」

「そうだねえ。ドロシーの弱点をついたあ。適格な嫌がらせだったよお。」

「そうだな。臆病な僕も、今のドロシーちゃんを見ていたら、なんだか勇気がわいてきたよ。」

「あれ？こつて、かかしが頭がいいってところじゃなかったっけ？」

「もう、このさいいいんじゃないか？どうせ、次からもアドリブで変更されてるんだからな。」

「それに、ブリキくんだって、ハートが無いと言っていたのに、ド

ロシーちゃんを怖がらせないように心づかいができていたじゃないか。」

「そんなことはないよ。ハートが無いからこそ、不親切にならないように気をつけているんだよ。」

しばらく経つと、ドロシーもだいぶおち・・・疲れが取れたので、一行はまたエメラルドの都を目指して旅立ったのでした。

エメラルドの都では、東の魔女が退治されたという報告が届き、パレードが行われていました。

エメラルドの都は全てが緑一色でできたそれはそれは素晴らしいところでした。

そのころ舞台裏

「鈴、どういうことよ。ボクの弱点なんてみんなに教えて。」

「大丈夫よ。何でもできてしまう完璧な少女よりも、弱点があった方が周りからは保護欲ができてメグのことを守ってあげたいって思

われるようになるわ。」

そう言つて、鈴は秋のことを抱きしめている。秋も最近気づきだしたが、鈴の行動は完全なマツチポンプであり、自分で怖がらせておいて、慰めるといった悪質な方法なのだが、秋は結局鈴に抱きしめられて安心している。

「次に西の魔女のところに行って来た時は武満さん直伝の怖い話を
してげるから楽しみにしていてね。」

ビクッ

やっぱり、あんまり安心していないかもしれない。

「さあ、出番よ。さっさとオズとの会見を終わらせて私のところに
来てね。」

舞台

「わあ〜。ここがエメラルドの都か。あたり一面が緑色なんだね。」

「すごいねえ。僕も藁じゃなくてえ。新緑が詰められてるみたいだよあ。」

「かかしくんはあんまり変わって無い気がするよ。」

「それよりも、オズ様に会いに行きましょう。東の魔女を退治したことを話せばきつと話をきいてくださるわ。」

「じゃあ、みんなで、呼んでみよう。」

四人で声を合わせて「オズ様〜。」

舞台そこから、大きな人の顔のようなセットが現れ、話します。

「わしが、くおそろしい大魔法使い>オズ様じゃ!!」

「私たちは、東の魔女を退治して、そこからここへオズ様をお願いがあつて旅をしてきました。」

「東の魔女を、なるほど、話を聞いてやろう。わしにどんな頼みごとがあるのじゃ。」

「私とトトは生まれ故郷のカンサスに帰る方法を教えていただきました。参りました。」

「私は、脳みそをいただきにきました。」

「僕は心臓が欲しくてきました。」

「僕は勇気をいただきたいと思つてここまできました。」

四人はそれぞれの願いを頭を下げてできるだけ丁寧にオズ様に伝えました。

「ならん。この国では、何かをしてほしくば、それ相応の仕事をしなければならん。お前達が西の魔女の持つ、魔法の帽子を持つてくることのできたら、その願いを聞いてやろう。」

「でも、私たちはすでに東の魔女を退治しました。それではいけないのでしょうか？」

「お前たちは、東の魔女を退治したことで、わしに願いを伝えることができた。願いをかなえなければ、西の魔女のところに行って、西の魔女から魔法の帽子を取ってくるのだ。」

「そんな、西の魔女はそれはそれは恐ろしい魔女です。どうか、カンサスに帰していただけられないでしょうか？」

「ならん。魔法の帽子を持ってくるまで、願いはかなえてやることはできん。」

「じゃあ、私はカンサスに帰るのをあきらめます。」

「ちょ・・・」

「ドロシーちゃんの気持ちは分かるけどお。がんばって西の魔女を倒そうよお。」

「嫌よ。あんな怖い話を聞くくらいなら、帰れない方がいいもの。」

「ドロシーちゃんの怖がるのも仕方がないとは思っけど・・・どうか西の魔女を倒してくれないかな？」

「他の方法じゃだめ？」

ドロシーは上目遣いで、目を潤ませてオズにお願いをしました。

「まあ、ドロシーちゃんがそこま・・・」

「おーほっほっほ、話は聞いたわよ。そのドロシーという少女が私の城に来るのね。私は首を長くして待っているわ。」

舞台そでから、悪い西の魔女が現れました。ドロシーたちは、西の魔女に知られてしまい、逃げ出すこともできずに、西の魔女から魔法の帽子を奪わなくてはならなくなってしまうました。

（まったく、あそこでおねだりなんてしたら、劇の台本が狂っちゃうじゃないの。）

（鈴にそんなこと言う資格はないわよ。私と司くんとで台本いじりまくったんだから。）

（私たちは良いのよ。メグのことを考えてやってるんだから。）

舞台袖からは、禍々しいオーラが立ち込めており、ドロシーたちはとても怖かったのですが、励ましあい勇気を振り絞って西の魔女の住む城へとやってきたのでした。

「お願いします。その魔法の帽子を譲ってくださいませんか？」

「馬鹿を言わないで、これは大切な帽子なの、だから絶対に渡すわけにはいかないわ。のこのことやってきたこの子たちを、どうしてくれようかしら。」

その時、西の魔女はドロシーの靴を見ました。それは、東の魔女が昔自慢をしていた魔法の靴でした。その靴が欲しい西の魔女はドロシーたちをだまして、靴を奪い取ってしまおうと考えました。

「その三人は牢屋に入れてしまいなさい。ドロシーちゃんは私と一緒にくるのよ。」

西の魔女の命令で、ドロシー以外のみんなは、牢屋に連れていかれてしまいました。

一人ぼっちになったドロシーは心細くて、怖くて震えてしまいます。そんな様子を見た西の魔女は、ドロシーが魔法の靴をうまく使えていないことに気づき、にやりと恐ろしい笑みを浮かべるのでした。

「さて、ドロシーちゃんには、私の奴隷になってもらおうかしら。まずは、どんなことをさせようかしら。」

そう言っつて西の魔女はウォークマンを取り出しました。その中にはドロシーの苦手な怪談話がたっぷりはいっており、ドロシーは逃げることもできずに、恐怖におびえてしまいます。

「やめて、それだけは嫌なの。本当にね？」

「うふふ、子鹿みないに震えちゃって、本当に可愛いわ。」

その時、ドロシーは、あまりの恐怖に動転してしまい、逃げたい一心で近くにあった水の入ったバケツを西の魔女に投げつけました。

「私に水を被せるなんてえ〜。なんてことをしてくれただい。」

西の魔女は水が大の苦手で、体が解けてしまいました。西の魔女が解けてしまうと、そこには魔法の帽子だけが残り、ドロシーはそれを抱えると、牢屋に連れていかれてしまったみんなのもとへと急ぎました。

元々悪い西の魔女に無理やり働かされていた西の国の人たちは解放されたことを喜びドロシーたちにお礼をしました。ドロシーたちは、

良いことをしたと考えると、帽子を持ってエメラルドの都へと帰って
行きました。

「オズ様。私たちは、約束を守りました。今度はあなたの番です。」

ドロシーはそう言って魔法の帽子を掲げました。仲間たちも、これ
で欲しいものが手に入るとにこにこ顔です。

「そうか、それではわしは考えなくてはならん。明日の朝もう一度
ここへ来るのだ。」

「そんなあ。考える時間はあつたでしょお？いい加減なことをいわ

ないですよ。」

ライオンはここで、脅かしてやろうと考え、大きな声で吠えました。すると、隣にいたドロシーたちの方がびっくりして、側にあっただいたてを倒してしまいました。そこには、ついたてを倒してしまったドロシーよりも驚いている老人がいました。

「お前は誰だ!？」

ブリキは老人に斧を構えて問質しました。

「わしが、オズじゃよ。」

「「ええ?」「」

「きちんと説明するから、その斧をおろしてくれ、実は・・・わしは、魔法使いでもなんでもないんじゃない。」

ドロシーたちはもう一度驚き、オズの話聞くことにしました。

「わしは、オハマの生まれでな、そこで腹話術しと気球乗りをしていたんじゃない。ある日気球にのっていると、事故で乗っていた気球が

流されてしまい。この国に降り立ったというわけじゃ。じゃから、わしはただの人間なんじゃ。」

「オハマってカンサスのすぐそばじゃないですか。」

ドロシーたちはオズの正体を知って困ってしまいました。オズが普通の人間で騙していたことには憤りを感じましたが、それ以上に魔法使いではないことがわかり、自分たちの願いが叶わないと思ったからです。

「じゃあ、私たちの願いはかなえられないのでしょうか？」

「すまん。カンサスへの帰り方はわしにも分からん。しかし、他の三人の願いは、わしがどうにかしてやる。明日の朝、もう一度ここに来てくれ、それまでにしっかりと準備を整えておこう。」

「わかりました。とりあえず今日は帰ります。」

四人とトトは明日もう一度オズのところへ来ることにしました。

翌朝、四人とトトは約束通りにオズを訪ねてきました。

「かかしくんは脳みそが欲しいんだったよね？さあ、これを頭につけるんだ。きつと脳みその代わりをしてくれるはずさ。」

そう言つてオズはかかしの頭に入つてる藁の代わりに何かを入れました。

「ありがとう。この脳みそが慣れたらあ、きつと私は今よりもつと賢くなるだろお。」

「ブリキくんはハートだったね？ハートを入れるために君の体にすこし穴をあけなければいけないけど、構わないだろうか？」

「ハートをもらえるんだつたら、少しくらい継ぎ接ぎができたつて構わないよ。」

オズはブリキの了解を得たので、大きなはさみを取り出して、ブリキの体に穴を開け、真赤な心臓をその中に入れまて、もう一度穴を閉じました。

「ありがとう。これで僕もやつとハートを手に入れることができた。」

「最後にライオンくんには勇気だったね？これは勇気の元が入った

薬だ。ただしこれは勇気のものであって、それをきちんと体に取り込まないと意味がない。少しにいがいが、大丈夫だろうか？」

「どんなににがくつたって、それで勇気が手に入るなら、僕は一気に飲んでみせるぞ。」

そういうと、オズの持っていた薬をもらい、ライオンは一気に飲み干した。

「勇気がわいてくるようだ。」

「みんな本当に良かったわ。」

ドロシーがそう言うと、三人は気付いてしまった。自分たちだけが願いをかなえてもらい、ドロシーには故郷に帰るといふ願いがかなっていないこと。

「本当にすまない。わしがここに着いたとき、気球は壊れてしまい、わしも帰る方法がないんじゃない。」

悲しみにくれたドロシーは歌を歌いました。

Somewhere over the rainbow
Way up high
There's a land that I heard of
Once in a lullaby

(虹の向こうのどこか空高くに
子守歌で聞いた国がある)

Somewhere over the rainbow
Skies are blue
And the dreams that you dare to
Really do come true

(虹の向こうの空は青く
信じた夢はすべて現実のものとなる)

Someday I'll wish upon a star
And wake up where the clouds are
Ever far behind me
Where troubles melt like lemon
drops
Away above the chimney tops
That's where you'll find me

(いつか星に願う
目覚めると僕は雲を見下ろし

すべての悩みはレモンの雫となって
屋根の上へ溶け落ちていく
僕はそこへ行くんだ)

S o m e w h e r e o v e r t h e r a i n b o w
B l u e b i r d s f l y
B i r d s f l y o v e r t h e r a i n b o w
W h y t h e n , o h w h y c a n ' t I ?

(虹の向こうのどこかに

青い鳥は飛ぶ

虹を超える鳥達

僕も飛んで行くよ)

歌は静かに、しかし力強く心に響きます。会場中がいえ、ドロシー
の声が届く範囲すべての生あるものがその歌声に聴き惚れました。

ドロシーが歌い終わると、北の魔女が現れます。

「なんて素敵なお声なのでしょう。あなたはそんなに、故郷に帰りたいんですね。」

「はい。でも、私には鳥のような羽はありません。カンサスに帰ることはできないのです。」

「そんなことはありませんよ。あなたには魔法の靴と魔法の帽子があるじゃないですか？二つの魔法の道具があれば、きっとあなたの思い描くカンサスまで飛んでいくことは可能です。」

「本当ですか？でも、魔法の道具を使う方法が私にはわかりません。」

「使い方なら私が知っていますよ。さあ、眼を閉じて、あなたの故郷であるカンサスを思い出すのです。」

ドロシーはカンサスのことを思い描きながら、眼を閉じました。

ブチュ〜！！

「な、何すんのよ！〜！」

北の魔女は目を閉じたドロシーに口づけをしました。

「魔法の使い方をお教えしました。これで、カンサスに帰ることができるようでしょう。」

北の魔女の言う通り、ドロシーは魔法の道具の使い方をいつの間にかしっており、魔法の言葉を唱えたとあたりは真っ暗になりました。

明かりがつくと、ドロシーは故郷のカンサスの草原の上に立っていました。

「ただいま!!」

ドロシーとトトは自分の家に向かって駆け出しました。いつの間にか魔法の靴と帽子はなくなっていました。ドロシーにはもうそんなものは必要ありませんでした。

大きな拍手が起こり、舞台の幕が下りてきた。幕がもう一度あがると、役者たちが勢ぞろいしており、もう一度大きな拍手とともに丁

寧にお辞儀をし、幕が下りてきて本当にオズの魔法使いはこれでありだった。

「お疲れ様。秋のドロシー最高だったわ。」

「ありがと、それはいいんだけど、台本に無いアドリブがかなり入ってた気がするんだけど？」

「緊張してセリフとかを間違えちゃうのはあ、仕方ないよあ。」

ドガッ

司は秋に久しぶりに殺戮をもらった。今の秋は本当に機嫌が悪いよ
うだ。

「一応主犯はこれで片づけたわ。次は、鈴と和美、ちょっとお話があるの？片づけはみんなに任せてちよつと来てくれるかしら？」

「私委員長だし、片づけを・・・」

「浩太？要くん？ここお願いできるわね？」

秋は満面の笑みで二人にお願いをした。二人は首を縦に振ると、片づけの指示を出しながら自らも動き出す。

「さあ、これで問題ないわ。お話ししましょうね。」

秋の笑顔には逆らえない何かが存在し、鈴と和美は秋の進む体育館裏のだれも立ち入らない場所へとしぶしぶ向かうのだった。

チャプター33（後書き）

いかがだったでしょうか？AKIの大好きなオズの魔法使いの話を、劇の中で再現してみました。

今回のテーマは“虹を超える世界観”です。

大きなことを言っていますが、簡単にいえば、オズの世界観と再転の姫君の世界観をどうやって混ぜるかです。

AKIはUSSJに行つてウイケツトなども見ているため、西の魔女「悪者」という考えがどうしてもできずに、鈴にこわい魔女を演じてもらいました。

秋の今後には幽霊「怖いもの」という話が絶対的にでてくることでしょう。

お化け屋敷・墓地・夏の怪談・学校の七不思議とここまできたので、今度はどんなお話でビクビクしてもらおうか悩み中です。

それではAKIの再転の姫君に付き合っていたいただきありがとうございました。

チャプター34

七不思議のラスト

「二人ともどういう訳か説明してくれる？」

ボクは本気で怒っていた。本当に演技の失敗でアドリブが入ってしまったのならこんな怒ることはないのだが、司と鈴と和美のは、あきらかに狙ったものがあり、特に最後の和美のキスは本番前までは額にフリをするだけのはずだったのだ。

「ごめんね。メグ、私も和美があそこまでするなんて思ってなかったのよ。」

「秋のセカンドキスうばっちゃった。ふふふ・・・」

和美はさっきのキスを思い出したのかどこか遠い世界へと旅立っていた。

「和美、ボクもう二回竜とキスしてるし、最近ではペコと何度もキスしてるから全然セカンドじゃないよ？」

「ええ？竜くんと二回も？人工呼吸の一回だけって聞いてたのに。まあいいわ。秋とチューできたのには違いないんだもの。」

「え〜と、詳しい説明をしてくれるかな？和美はちよつと黙ってたね。」

「えつとね。メグはもう分かっているとと思うけど、和美って女の子が好きなのよ。それで、二年くらい前からずつと片思いだったらしくって。」

「なるほどね。それで、なんでボクはキスされなきゃいけなかったのかな？」

「私だって、本当にキスするなんて思ってたわよ。私と司の狙いは、メグの弱点をみんなの前でさらすことによつて、みんなの保護欲をかきたてようつてそれだけだったんだもの。」

「鈴はたぶん本当ね。司は正直あやしいけど、そこでなんで和美がでてくるのよ？」

「それは、最近仲良くなつてるし、メグの秘密も結構知つてしまつてるから、今後も手伝つてもらふこともあるだろうと考へて、委員長長の立場を使つて今回も台本の修正をお願いしたのよ。」

色々ボクのために考へてくれるのが伝わり、これ以上怒れ無くなつてきた。でも、一つだけはつきりしておかなければならないことがある。

「ボクのために色々してくれたのは分かつたよ。ただし、ボクはノーマルだ。和美とは付き合えないんだから、和美には余計に嫌な思ひをさせたんじゃないか？」

「そんなことはないわ。私も秋との思ひ出ができたし、すつごく幸

せよ。たとえ今後秋と竜くんが付き合うことになってもね。」

「ちよま、なんで・・・」

ボクは自分が真赤になっていることが分かった。さっきまで怒りで早かった鼓動が別の意味で早くなっている。

「そう言うことよ。和美は変態だけど、純愛なの。だから、私は信じて和美のことを仲間に行けるとおもったのよ。浩太たちはまだ信じられないみたいだけど、私は小学校から一緒だし、和美に昔告白されたこともあるから、だから良く知ってるのよ。」

「そうだったんだ。じゃあ、浩太には悪いけど、元さやってことであきらめてもらおうか。」

ボクの中での一番平和な案を二人に提示してみる。

「無理よ。だって、今は私秋一筋なもの。鈴には申し訳ないけど、本当の恋を知ってしまったら元には戻れないわ。」

「全然申し訳くないって、それより本当にメグはノーマルなの？」

「レスジュツなんてのは、真奈美ちゃんの影響でできたあだ名だよ。ボクはノーマルだ。」

ボクの中でもゆずれないことの一つだ。

例え前世が男だろうと、これだけは守っていかうと決めている。

「今はそういうことにしておくわ。あと、かつてなんだけど、私が秋のことを好きっていうのは内緒にして欲しいの。それをきちんと守ってくれるなら、きっと秋が竜くんのことを好きでも私は秋のことを大切にできると思うんだ。」

「うん。別に言いふらしたいわけじゃないから構わないけど、ボクって顔に出やすいから、麻美とか司とかにはバレると思うよ?」

「ああ、大丈夫よ。そこらへんはもう知ってるから。メグの周りで知らないのは、竜ちゃんとメグだけだったからね。」

「ええ?じゃあ、四人はもう知ってたのか。つまり、ボクはその四人以外に内緒にすればいいんだね?」

「竜くんはちょっと、メグ以上に顔に出る性格だからしばらくは内緒にしてあげて、麻美と司くんについては、教えたっていうよりも知ってたって言う方が近いから、秋が隠すまでもなかったのよね。」

「あのカップルは本当に良く分からん。二人が仲間だから怖くはないけど、敵に回ったらもつとも恐ろしいとボクは思う。」

「私たちだってそれは同じよ。司くんなんて、普段間延びした受け答えなのに、能ある鷹は爪を隠すって感じよね。」

「全然隠しきれてないと思うのは、昔から知ってるからかな?とにかく、和美的ことは理解したよ。その上で、みんなが納得できるなら、ボクも心友の証を渡してもいいと思う。」

ボクの了承も無しにキスしてきたことには腹が立ったが、学園祭までの間に和美は本当にボクのことをサポートしてくれていた。

今思うと、鈴や麻美と一緒にいる時のように、安心して不幸がこない状態を和美は作ってくれていたのだ。そんな和美なら、約束通り心友の証をプレゼントしても良いと思えていた。

「本当に？ やっぱり、秋って私のこと愛してくれているのね。」

「違う。友愛であって、恋愛の愛情とはまた別なの。」

「照れちゃって、怪談におびえる秋が可愛くってついキスしちゃったけど、秋からチューしてくれてもいいのよ。」

「ボクからキスすることは絶対じゃない。それだけは確かだ。」

「焦ると、男言葉にもどる？」

「え？ そんなことはないはず。」

最近男の子として扱われることがなかったので、言葉づかいも女の子らしくなっていたはずなのだが、変なところでまだ抜けきっていないのかもしれない。

まあ、それが焦ったから出たとかじゃないだろう。

とっさの瞬間に時々男言葉になるだけだ。

「まあいいわ。それよりも、秋のお兄様にはあいさつに行かなきゃね。七つ目の不思議を聞きだして、秋が怖がっているところをしっかりと見させてもらわなきゃ。」

ギクリ。

そうだった、すっかり忘れていたが、浩太と司の発言により、ボク

の一番の苦手は完全に把握されており、その怪談にボクの周辺の間で最も精通しているのが武兄ちゃんであることまでもバラされてしまっていた。

「武兄ちゃんは大学で忙しいから、そんなに家にいないと思うな。」

「さつき、劇の前に確認とったら、学園祭も終わって美術部が暇になるなら、週末遊びにおいでって言うってたわよ？」

鈴……

そんなにボクのこといじめて楽しいのかな？ボクはやっぱり何か前世で悪いことをしたんだろうか？

「大丈夫よ。メグが前世で悪いことなんてするわけないじゃないの。みんなで集まる時は竜くんを呼んであげるからそれでいいでしょ？」

確かに、竜がいるのといないのならいた方が怖くはないのだが、怖い話自体をやめてほしいのがボクの本音だ。

「言っとくけど、和美も心してかかった方がいいわよ。武満さんの怪談は合宿に行った時に竜くんと司くん以外の全員を眠れ無くさせるくらい怖かったんだから。」

「合宿って美術部の？なんで竜くんや司くんがいるのよ？武満さんに限っては中学生ですらないじゃない。」

「まあ色々あってね。その時は麻美も合わせて10人もいたんだから、事前に知っていた竜と司以外の全員が恐怖におののく、そんな怪談なの。だから和美もやめておこ？」

武兄ちゃんの話がどれほど怖かったかを切実に語り、今回の計画をなくそうと頑張ったのだが、

「私、がんばるわ。秋のためだもの、たとえどんなに怖い話でも耐えきってみせるわ。」

変な闘志を掻き立てただけに終わってしまった。

和美の様子に諦めたボクはとりあえず全員の予定を思い出し、来週の土日が部活もなく、武兄ちゃんも家にいるはずなので、その日にみんなを呼ぶことにした。

武兄ちゃんにそのことを話すと、どうせ話すなら暗い方が盛り上がり、土曜日の夜に泊りにくることになり、真美子さんまで呼ぶことになってしまった。

ボクはやな予感しかしてこない。当日逃げるにも、仲の良いメンバーが集まるので、友達の家に泊まりになんて逃げ口実もできず、週末を迎えるのだった。

「「こんばんわ。」」

「いらつしゃい。今日はみんなが来るって言うから、私と秋でいっぱいごちそう作ったから遠慮なく食べてね。」

みんなが揃うと、まず晩御飯を食べることになった。怪談を聞きにきたとはいえ、みんながせっかく来てくれたので、ボクもご飯の手伝いをした。

とはいっても、大人数に対応するには普段からパーティなどをしてるわけでもないの、大きな鍋に具材をいれただけのだが、みんなおいしそうに食べている。

「野菜はほとんど家で取れたものだから、本当に遠慮しないでね。竜くんも司くんもこんなにおおきくなっちゃって。」

お母さん、その発言は年をとってきた証拠なんだよ。ギクッ

「秋ちゃん。みんなに飲み物取ってきてくれるかしら？」

お母さん。なんで思ってることが分かるんですか？

何となく逆らえないオーラがあったので、ボクはみんなのためにお茶とジュースを運ぶのだった。

「秋のお母様って美人ですね。秋の容姿はお母様譲りでしょうか？お父様もかっこいいですが、どちらかというと、秋はお母様の方に似ている気がします。」

食事に夢中になっている竜や司などは放置しておいて、和美がなぜかお母さんにおべっかを使っていた。

まあ、お母さんは実際ちよつと童顔だが、整った顔をしており、嘘を並べているわけでもない。

「まあ、そんな、和美ちゃんだけ？秋と仲良くしてあげてね。」

「はい。秋のこと大好きですから。」

その大好きにはどんな意味があるのかな？心友としての大好きなら歓迎なんだけど、もっと深い意味が込められてるよね？

「じつそうさまでした。」

結局鍋の中身の半分以上を司と竜に食べられた気がするが、残すよ

りも作った方としては嬉しく、鍋の後のおじやまで完食してしまっ
た。

「ほな、そろそろ武ちゃんの部屋に移動しよつか。」

「本当に怪談するの？ボクの部屋でトランプでもしない？」

「それはあ、怪談の後にしよあ。どうせみんな寝れなくってえ、秋
の部屋で夜を過ごすんだからあ。」

寝れなくなるくらいならやめておけばいいのに、真美子さんも合わ
せて、八人も人数が武兄ちゃんの部屋に入ると、結構広めの部屋
が狭く感じる。

「眠れ無くなるってそんなにお兄様の話はこわいんですか？」

「そうだねえ。武ちゃんの怪談は昔からリアリティあるからねえ。」

話を始める前に、和美が武兄ちゃんに何か色々とボクの昔話だった
り、家族関係だったりを聞きだしている。その様子は今日知り合っ
たばかりとは思えない親密な雰囲気か漂っていた。

「真美子さん、良いんですか？彼氏が女の子とあんなに仲よさそう
にしているの？」

「大丈夫よ。話の内容はほとんど秋ちゃんのことだし、武ちゃんは
シスコンではあるけど、ロリコンではないわ。」

それにね、どうせ怪談が始まったら武ちゃんに近付こうなんて思わ
なくなるわ。」

真美子さんと武兄ちゃんの中で絶対の信頼関係が出来上がっていることには驚いたが、確かに、武兄ちゃんの怪談はボクのトラウマになるほどの威力があり、納得できた。

「司と竜くんはメグの部屋にはいったことあるんだよね？どんな感じだったの？やっぱり男の子っぽい部屋だった？」

「そうでもないよお。ぬいぐるみとかも置いてあったしい。秋って動物が好きだから、メルヘンってわけじゃないけど、昔から部屋は動物の写真とか絵で一杯だったからねえ。」

「せやな。あの部屋でアイマスク付けた時は、絵とか写真とかから本物の動物が出てきそうでこわかった思い出があるわ。」

「アイマスクって、例のナメクジの話でしょ？どんな風に迫られたの？」

「竜は黙ってなさい！！」

ゴグツ　　グハツ

竜が余計なことを言いかけたのでボクは強制的に竜の口をふさいだ。このまま放置しておけば、武兄ちゃんの話が終わるまでは夢の世界から帰ってこないだろう。

「竜大丈夫か？さて、そんじゃそろそろおまちかねの怪談話でもし

よつか。「豆球を残して明かり落とすぞ？」

「待って、竜起きなさい。あんたが寝てたら誰が魔除けになるんだよ。」

自分で眠らしておいて可愛そうだとは思つが、怪談話の時に竜が寝ているのはボクにとって死活問題になる。ちょっと無理やりでも起こさないわけにはいかなかった。

「秋、私が竜くんの代わりに秋のこと守って・・・」

和美は最後まで言わせてもらえずに、隣にいた司になだめられた。麻美や鈴も必死になって説得をしているようだ。まあ、ボクとしても、竜以外が被害をこうむるのは問題ありだと考えているし、賢明な処置だろう。

「秋にベアハグされて気を失うなんて別に平気よ。むしろ足蹴にしてもらいたいくらいだわ。」

とりあえず、和美の願いを聞き入れて黙ってもらうことにした。

ゴッ・・・

「メグ？あんた今日は容赦ないわね。和美は竜くんと違って普通の女の子なんだから、下手したら怪我じゃ済まないわよ？」

「一応人体に影響はないように暗黒を入れたよ。起きた時は何が起こったのかわからないはずよ。」

そんなことをしていると、竜が復活した。最近竜の回復力が人とは違う気がする。何故か和美もすぐに起き上がり、やはり状況がつかめないうつでキョトンとしていた。

「秋の暴走も収まったみたいだし、そろそろ始めてもいいか？」

そのあと、明かりを落とし、武兄ちゃんの怪談が始まった。

部屋の配置は、武兄ちゃんのベットの所にボクと竜。これは周りに被害を出さないためだそう。ボクは武兄ちゃんの布団を被って、竜の背中に隠れながらおびえている。

ベットから逆側の隅にある、勉強机に備え付けられているイスには真美子さんが、そこから時計回りに浩太・鈴・和美・司・麻美・真美子さんへ戻るといふ順番に部屋の形に合わせたいびつな輪になつて座っている。その輪の中心には今学校の七不思議の六つを一番から順番に説明している武兄ちゃんが座っている。

劇の時にそれぞれの主題を聞いただけでビビっていたボクは、武兄ちゃんにそれぞれの詳しいいきさつや伝承を説明されて今でさえ泣きそうなのに、まだ、最後の七つ目が残っていると思うと気が遠くなりそう。七つ目を語る前に、武兄ちゃんはふつと窓の方を見て、溜息をついてから、言葉を押し殺すようにして引き出す。

「実はね。七つ目って言うのは、もうここにいる全員が体験することができるんだよ。他の六つと違い七つ目の不思議には体験するための重要なカギがある。それは・・・」

「きゃ〜!!!」

真美子さんの悲鳴を聞いて、全員がそちらを見る。すると真美子さんは窓の外を指さして、がくがくふるえている。ボクは怖いのを我慢して、そちらの方を見ると、窓の外にはゆらゆら揺れている人魂があつた。

「おい。秋？大丈夫か？しっかりしろ。」

ボクはあまりの恐怖に気を失い。竜の声で目を覚ましたらしい。

「うええええん。竜う〜。」

気を失う前のことを思い出してボクはみんなが見ているのも構わずに竜に抱きついて泣きだしてしまった。

「だからやめようって言ったじゃないの。武ちゃんって秋ちゃんに甘い割にはこういういたずらは好きよね。」

「本当だよ。メグちゃんほどじゃないけど、僕らも怖かったんですから。」

「いやあ、しかし、メグのおびえ方と気を失ってる時の寝顔は格別だったねえ。」

「確かに、秋の様子は最高だったわ。普段はあんなにしつかりしているのに、このギャップがたまらないわね。」

「そうだねえ。これだからあ、僕らもお、秋をからかうのはやめられないよお。」

「そうね。秋ちゃんの可愛い姿は人生の活力源ね。」

それぞれが、好き勝手なことを言っているが、ボクはそれぞれどころじゃない。何があつたのかは良く分からないが、とにかく怖くて安心できる場所が欲しくて竜にしがみついたまま泣きじゃくった。

「そろそろ、落ち着けて、あれは武ちゃんの悪戯で本当の人魂とちやうんやから。」

「え？人魂じゃないの？」

「そろそろ種明かししてあげなさいよ。秋ちゃんこんなに泣いてるじゃないの。」

真美子さんの言葉により、武兄ちゃんはボクに説明をしてくれた。というか、気絶している間に一度種明かしがあつたらしく、ボク以外のメンバーは笑いながら聞いている。

「つまり、また司と武兄ちゃんが共謀してボクをだましたってことね？」

「今回はあ、真美子さんも一緒だよ。そうじゃなきゃあんないタイミングでみんなが窓の外を見れるわけないからねえ。」

仕掛けは簡単だった。武兄ちゃんが思わせ振りの話をふる。真美子さんが悲鳴と共に窓のそとを指さす。司が隠しもっていたペンライトで人魂を再現する。たったそれだけのことだった。

「ペンライトの光なんてちやちな仕掛けでこんなにみんなが怖がってくれるなら、今度は本物の火でも使ってみるか？」

「そうだねえ。でもお、本物の火なんてえ、どうやってタイミングを合わせるか難しくなるしい、どこでだってできる仕掛けだから良いよお。」

決めた。今後武兄ちゃんのお弁当は一週間は涙巻きだ。あと、司と武兄ちゃんを一緒にするところくなことがおきない。今度からこういう時には司は絶対に呼ばない。

「涙巻きのお弁当はお母さんに言って、作らせないように頼んでおいたから。」

あと、司と竜はどうせこういう時に絶対に呼ぶんだから、離そうなんて考えても無駄だな。」

「分かったわ。涙巻きはあきらめてあげる。でも、司は今後ボクの家への一時的不可侵を申請するわ。真美子さんの浴衣がどうなってもいいなら、司を連れてきてちょうだい。」

「司、浴衣ができるまでは秋ちゃんの家に行くことを禁止するわ。」

ボクは真美子さんという強い味方を手に入れて司の侵入を阻止した。しかし、真美子さんも今回は一役かっていたのだが、真美子さんは流石に何もできない。

「お姉ちゃんだけ許されるなんてずるいよお。」

「私は、二人に言われて悲鳴を上げたただけだもの。主犯格である司を取り締まることで罪は帳消しよ。」

真美子さんはボクのことを良く理解しているようだ。真美子さんは絶対に司と武兄ちゃんの接触を防いでもらわなければならない。

「電話とかはもちろん。矢文さえも送れないように監視しておくわね。」

「矢文つて、流石に司もそんなことまではしないだろ?」

「浩太は知らないのね。小学校の修学旅行先で買ったおもちゃの矢と弓で武満さんと司は時々やりとりしてるのよ。秋ちゃんにバレないようにそつと打ち合わせするには窓と外が一番安全らしいわよ。」

「何？ボクもそれは初耳だ。そんなことまでしてボクのことを怖がらせようとしてたのか。」

そのあとしばらくボクは二人を説教して、真美子さんは明日バイトがあるとかで武兄ちゃんに送ってもらい帰り、男子から順番にお風呂に入って、ボクの部屋で遊んでから寝ることになった。

「はあ、今日はさんざんだったよお。」

ボクは男子を待っている間部屋に着くと、溜息をもらし、ベットに寝そべりながら愚痴をこぼした。

「いいじゃないの。秋ちゃんは竜くんを抱きしめられてたんだもの。」

「麻美く。そのためにわざとこんな計画に乗ったんじゃないでしょうね？」

「あらそうよ？秋ちゃんが怖がる姿を見たかったってのもあるけど、一番の目的は竜くんとの関係の向上だもの。」

麻美は隠すことなく、しれっとそんなことを言う。ボクだって何となくそれは分かっているんだけど、やっぱりこういう雰囲気と竜と関係を深めても駄目だと思う。

「竜との関係はちょっと違うんだよ。お化けみたいなドキドキって
いうよりも、竜と一緒にいるとほっとするって言うか、安心できる
って言うか。とにかく、お化けに怖がってドキドキしても竜との関
係は良くならないの。」

「あら？でも、怖い話の後に竜くんに抱きしめられて安心してたで
しょ？それでさっきの話も納得できるじゃないの？
飴と鞭よ。怖い話を聞いたご褒美に竜くんに抱きしめてもらえるん
だからいいじゃないの。」

「う・・・それはそうだけど・・・」

「メグはあのままでもいいのよ。とにかく、問題は竜くんなんだから。
メグは抱きしめられて喜んでたけど、竜くんは周りを意識して顔を
真っ赤にしながら困った顔してたんだから。」

「そうねえ。あそこは周りを気にせずにブチューとキスでもしてあ
げたら秋ちゃんも恐怖なんて忘れられるのにね。」

「私が代わりにチューってしてあ・げ・る」

百合発言をしだした和美はとりあえず置いて、確かに竜は積極性に
は欠けると思う。他のことはそうでもないのだが、竜は今まで告白
とかはされるのに誰とも付き合ったことはなかったし、ボクらがち
よっとからかったり、ひつついたりするだけで真っ赤になる。

「あのねえ。そこは、ボクらじゃなくて、秋ちゃんがからかったり、
ひつついたりするから赤くなるのよ。」

「ありゃ？口に出てた？怪談の影響でもう今日はスタボロだよ。」

「うん。そうなのか。秋は少し恥ずかしがったりする方が好みなのね。」

「べ、別に竜がそういう態度を取るから好きになっただけじゃないもん。」

「じゃあ、秋は竜くんのどんどころに魅かれたのかなあ？」

和美はそう言っつて、ボクににじり寄ってきた。ボクは今ベットの上におり、後ろは壁で逃げ場はなかった。

「和美。それくらいにしておかないと、本当に我慢できなくなるわよ。」

「もう限界かも、真っ赤になって後ずさる秋見てたら本当に欲情してきちゃったかも。」

おいおい、そんなことで欲情しないでくれ、ボクはノーマルだぞ。

「まあ、可愛いと思う気持ちは分らないけど、今はダメよ。メグが許してくれたらその時はきちんと節度をもってお付き合いするのよ？」

鈴はお姉さんみみたいな雰囲気と和美に諭しているが、伝えている内容はあんまりボクにとって良いものではない。

「秋ちゃんは一応今はノーマルなんだから、そんな話を本人の前でしないの。」

それより竜くんのことよ。秋ちゃんのことだから、竜くんからきちんと気持ちを伝えられたら二人は付き合いたすと思うのよね。」

「あの〜。なんだかさつきから竜がボクに告白するみたいな話がちよくちよく聞こえるんですが、竜の気持ちもきちんと考えてあげない・・・。」

三人になぜか憐れんだような、ちよつとかわいそうな子を見るような目をされてボクは最後まで言い切ることができなかつた。

なんで??ボクは相手の気持ちもきちんとか確かめるべきだと言っただけなのに。

「良いわ。じゃあ、今夜ゲームで負けたら、秋ちゃんの好きなように竜くんの気持ちを尋問できるようにしましょう。どうせこのメンバーなら竜くんは負けるに決まってるんだから、それでいいわよね?」

「まあ、心理戦のゲームなら竜は負けると思うけど、いきなりそんなこと言われても、何を質問していいのかボクには分からないよ。」

そのあと、ボクらは男子が全員お風呂から出るまで質問内容について話し合った。長風呂の司がなぜか一番に入っていたらしく、途中から司も議題に入ってきた。

「お先に、どうも。女の子たちはどうやって入るんや?男子と違って一緒に入るん?」

「時間がもつたないから一緒にはいつちゃいたいんだけど、この場合ちよつと問題があるから、鈴と和美ちゃん。私と秋ちゃんの二回に分けましょ?」

「そうね。私なら和美と一緒にでも安心だからそれが一番ね。」

竜は頭にいったいはてなマークを浮かべているが、女の子たちは着替えを持ってリビングに降りて行った。ボクの部屋に男子だけが残ることになるが、竜たちが悪さをするとお思えないので、あまり気にしないことにする。

「私も秋と一緒に風呂はいりたいなあ。」

「今の和美は歯止めが利きそうにないからダメよ。それに麻美と一緒にってというのは、メグにとって竜くんと司くんを除いて一番安全なんだから。」

「まあね。過去にいろいろあったみたいだけど、今では小学校から一緒に竜たちと同じくらい信頼してる心友だからね。」

そのあと、なぜか先に入ること拒んだ和美と鈴を残してボクと麻美は一緒にお風呂にはいった。湯沸かし器があるので、最後の方とはいえ、あったかいお風呂につかることができ、もう10月とはいえ、少し体が熱いような気持ちになり、鈴と和美が出てくるまで少し外の空気に当たることにした。

この行動によって、さっきまでボクの部屋で話し合っていた計画がほぼ無駄になるとは今のボクには思いもよらなかった。

チャプター34（後書き）

どうも、真夜中の告白か？と思わせておいて、裏切る展開をまたしても考えているAKIです。本当にどうしようもない作者ですね。今回のテーマは“秋にどれくらい怖がってもらえるシーンを作るか”です。前回のドロシー秋にもう少しやれたのではないかという後悔があったため、今回は失神してもらいました。

さて、次回で新キャラ登場です。次のキャラは両想いの二人を引き裂く、秋の気持ちを揺さぶるキャラが登場いたします。え？大丈夫ですよ。この物語はハッピーエンドを目標として書かれておりますので、ドロドロしたものは極力少なくなっております。

それでは、また次回もよろしく願います。そして、ここまで読んでいただきありがとうございます。

チャプター35

真実の愛

庭に出たボクと麻美は、しばらくのんびりと夜空を眺めていた。街灯が多少あるとはいえ、田舎の海良町はネオンの光などにさえぎられることもなく、きれいな星空を見ることができた。

その時、車庫の隅で変な物音が聞こえた。

ガチャガチャ

「そこにいるのは誰？」

先ほどの武兄ちゃんの怪談を思い出して、ボクは麻美にしがみつくと、暗がりの方へと視線を送る。幸い生きた生物のようだ。

「武兄ちゃん？そんなところで脅かそうとしても無駄だよ？」

しかし、暗くて良く見えないが、武兄ちゃんにしてはあまりにも小さく、気配が薄い。やっぱり本当に幽霊がでたのかとおもって逃げ出そうとするよ。

「ミヤコ。」

猫？確かにうちの周りにも野良猫くらいはいるが、こんなに弱々しい鳴き方をする猫はいなかったはずだ。

ボクは動物好きということもあり、少し顔を見たくなくなって車庫の明かりをつけてそちらに近寄っていった。

そこには、一匹の猫がヨチヨチ歩きでこちらに歩いてきており、今にも倒れてしまいそうになっていた。ボクは子猫に近づく前に、本 coming であるう、親猫を探した。

もし親猫がいるのに子猫に触れてしまうと、親猫が今後子猫に近寄らないようになり、そちらの方が子猫にとっては残酷なことになるからだ。

「麻美、子猫にさわっちゃだめだよ。とにかく親猫を探そう。足も強くないみたいだからきつと側にいるはずだよ。」

しばらく二人で探していると、車庫の隅に置いてあった段ボールの中でそれは発見された。カラスか何か鳥にやられたのだろう。

段ボールの中にはさっきの子の兄弟と思われる死体だけがあり、親猫の姿はすでになかった。

段ボールの裏に小さな穴があり、ここから入り込んで子育てをしていたのだろう。

「どうするの？この子の親はもういないみたいだし、放っておいたら死んでしまうわ。」

「ボクが育てるよ。ちょうど学園祭も終わって余裕はあるから、ボクがこの子の母親になる。」

ボクはそう麻美に告げると、今度は迷いなく子猫を抱きあげ、家の中に入って行った。

「秋どうしたの？お風呂にはいったとはいえ外なんか長いこといたら湯ざめしちゃうわよ？」

「うん。少し風にあたるだけのつもりだったんだけど、この子がいたから。」

そう言って、ボクはお母さんに腕の中に抱いた子猫を見せる。

「まあ、この子どうしたのよ？まさか母猫からさらってきたんじゃないわよね？」

ボクと麻美は先ほどみたことをお母さんと二階から降りてきたお父さんに説明をした。

最初は驚いていた二人だが、事情を聴くと納得し、真剣にどうするのか話し合うことになった。

「今さら車庫に戻してこいなんて言えないわね。でも、うちにはペコちゃんがいるから猫は無理よ。」

「じゃあ、みんなに引き取ってもらえるか聞いてみるよ。もし引き

取ってくれる子がいたらそれでもボクはいいと思うし。」

ボクはこの子を育ててあげたいと思ったが、ペコのこともあるのでとりあえず今日来ているメンバーの中に子猫を飼える人がいないか尋くことにした。

同時に、ずいぶん弱っている様子なのでお父さんにコンビニまでミルクを買ってきてもらおうようお願いした。

「猫用のものがあつたらそれが一番いいから。無かつたらとにかく牛乳でも一番濃いのにして子犬用とかでも牛乳よりは良いはずよ。分からなかつたら電話してちょうだい。部屋に確かペコのと一緒に子猫の本もあつたはずだからそれを見て指示を出すから。」

ボクは子猫を冷やさないようにタオルで包むと、麻美を連れて部屋へと戻った。

「メグどうしたの？私たちより先にでたはずだったのに。」

そこには、お風呂を出たばかりの和美と鈴もあり、武兄ちゃんも真美子さんを送って帰ってきたらしくみんなが輪になってUNOをしていた。

「実はね。この子がうちの車庫にいて。」

そう言つてボクは子猫を見せると、みんなに事情を説明した。

「協力したいのはやまやまなんだけど、僕の家はちょっと・・・」

浩太はそういうと、和美と鈴の方にも目を向けた。二人も首を横に振っている。司や竜や麻美の家では飼うことは不可能なのは分かっていたので頼みの綱は三人だったのだが、どうやら事情がありどこも駄目のようだ。

「ペコに見せて大丈夫そうならええんとちゃう？武ちゃんもそれならええと思うやろ？」

竜の言葉を聞いて、武兄ちゃんもしぶしぶといった様子で頷く。お父さんやお母さんもペコのことを一番に心配していたので、とにかくペコがなんとかなればあとはどうにか説得できるだろう。

「じゃあ、ペコのところに行ってお姉ちゃんになってくれるように頼んでみるね。」

ボクは最近やっと甘えん坊からだいぶ卒業の兆しが出てきたペコのところに子猫を連れて向かった。これでペコが鳴いたり、かみついたりしたら絶対にこの子を助けることができないので緊張する。

「ペコ。お願いがあるの。ペコにお姉ちゃんになってほしいの。」

「くんくん」

『なに言ってるのよ。昔っから私の方がお姉ちゃんに決まってるでしょ。』

今更お姉ちゃんだなんて呼ばなくてもいいわよ。』

「ペコ鳴かないんだね。良かった。ペコが許してくれるなら、きっとこの子もボクたちの家族になれるよ。」

『え？この子って？』

ボクはペコの前に子猫を差し出すと、ペコはクンクンと子猫をかぐと、子猫の頭をペロペロなめだした。

「ペコも気に入ってくれたんだね。今日から君も蟹津家の家族だよ。」

『べ、別にその子がかわいかったんじゃないわよ。秋ちゃんが心配そうな顔するから。こ、これはサービスなんだから。』

ボクはペコにお礼を言うと、リビングに戻り、お母さんの説得に取り掛かった。

お母さんを味方につけたころ、お父さんはミルクを買って戻ってきたので、お父さんも説得にかかる。

ちょうど子猫用のミルクがあったようで、それを子猫に飲ませながら話していると、最初は渋っていたお父さんも、ミルクを飲む姿に頬を緩ませ許可してくれた。

「みんな、この子飼ってもいいって。」

「メグ、よかったわね。おじさんたちオツケーくれたんだ。」

「お父さんは少し渋ってたけどね。これでこの子も家族の一員だよ。」

ミルクを飲んだばかりで、うつらうつらしている子猫を抱きながらボクはみんなに紹介をした。

そうすると、みんなでこの子の名前を決めることになり、それぞれ意見を出し合った。

「黒ネコなんだから黒。これで決定やん。」

「そんな安直な名前ダメだよ。それに、この子の毛は真っ黒じゃないもん。」

「じゃあさあ。猫でいいんじゃない？」

「司、あんた考える気無いでしょ？私はミーちゃんとかがいいわ。これもそのままかもしれないけど、可愛いじゃない。」

「秋がお母さんになるんだから、秋ジユニアにしましょうよ。私たちの初めての子どもよ。」

「はいはい、和美は少しお口をチャックしてようか。でも、実際メグがお母さんなんだから、メグが決めた方がいいんじゃないかしら？」

「確かにそうだね。お父さんかお母さんから名前をもらった方がその子にとってもいいとおもっよ。」

「お父さんってことは俺か？」

「なんで武兄ちゃんがお父さんになるのよ。じゃあ片親なんだし、ボクが決めるのが一番だね。」

武兄ちゃんのボケをさらりとスルーして結局ボクが名前を決めることになりそうだ。

「なあ、黒が嫌なら黒ネコで思いつくジジでええんとちゃう？」

「あ、それいいかも、ジジか、魔女の宅急便だよな？ジジちゃん可愛いしそれにしようか。」

つい、竜がつぶやいた言葉に反応してボクは名前をジジに決めてしまった。ジジと呼ぶと子猫はニヤーと反応をし、まるで自分に名前がついたことを理解しているようだ。

「そろそろもう一回ミルクあげてくるね。子猫の時は結構頻繁にミルクあげなくちゃいけないんだ。」

「ねえ。私たちも一緒にいてもいい？」

「いいよ。みんなで一度リビングに行こうか。ミルクを温めないといけないからここではあげられないんだよ。」

そう言っただけでボクは立ち上がると、ジジを抱いて部屋をでた。みんなボクの後ろにそろそろと続いてリビングに向かう。後ろの麻美がボクに耳打ちしてきた。

「良かったわね。お父さんが名前をつけてくれて。」

「ちょ……」

ボクは真赤になりながらも、ジジが驚くといけないのでゆっくりとリビングに足を運ぶのだった。

たしかに竜が名づけ親みたいになったけど、お父さんとはまた違うんだから。

ジジはペコの時に買ったけどあまり使わなかった子犬用の哺乳瓶でミルクを与えると、元気よく飲みだした。

これだけ元気があれば心配ないだろう。明日は獣医さんのところに行つて、きちんと手続きをしなくてはいけないな。

「可愛い。ゴクゴク飲んでるわよ。うちは家族みんな犬派だったんだけど、子猫も可愛いわね。」

「そうね。癒されるわ。」

「今回のミルクはあげおわったけど、今夜は特に弱ってるからつきつきりで見えてあげないといけないんだよ。だから、ボクはリビングで寝るよ。麻美たちはボクの部屋で寝てくれる？」

ボクは子猫の排泄の手伝いを水にぬらしたティッシュを使ってしてあげながらみんなに今後のことを伝える。

「秋の部屋で寝るの？ベッドも使ってもいい？」

和美が不穏なことを言い出したので、麻美と鈴に監視しておくように頼み、男子もそれぞれ自分たちが寝る用に布団が用意された部屋へと向かって行った。

お母さんたちは、ペコの時にもなれているし、明日が日曜日なので心配もせずに自分たちの寝室へと行って寝てしまったようだ。

「みゃ〜。」

「ジジは気楽だね。もう少し発見するのが遅かったら本当に危なかったんだぞ？」

ジジは状況を理解しているのか分からないが、用意してあげた段ボールから抜け出してボクの手じゃれついてきた。みんながいなくなって二時間ほどたち、そろそろもう一度ミルクをあげるために電子レンジで温めていると、竜が起きだしてきた。

「どうしたの？寝れないの？」

「ああ、ちよつと喉が渴いてたんで。」

「冷蔵庫の中に牛乳があるから飲んでいいよ。ジジと一緒にミルクの時間ね。」

「それって微妙やな。まあええわ。もらうで？」

「どうぞ。さあ、本当にジジもミルクのもつねえ。」

ボクが哺乳瓶でジジの口元にミルクを持っていくとジジはさっきと同じようにゴクゴク飲みだした。

「その子大丈夫なんか？結構よわってたんやろ？」

「ちゃんとジジって呼んでよね。竜がつけたんでしょ。」

「わりい。ジジは元気になるんか？」

「そうね。対処も早かったし問題ないと思うわ。一応明日病院にも連れて行くけど、これだけ元気にミルクを飲むならそこまで心配ないはずよ。」

ミルクを飲み終わったジジは、ボクの手でまたじゃれつきだした。

「ほんま、のんきなやつちゃな。秋のこと本当のお母さんやと思っ
とるんとちやうか？」

「どうだろうね。赤ちゃんには、この可愛さだけが武器だから、自
分の武器を目一杯使って生きようとしてるのかもよ。」

「赤ちゃんの武器は可愛さか。確かに可愛いつていうのは武器にな
るわな。」

「そうだよ。狼だって人間の赤ちゃんを育てた例があるくらいなん
だから。ボクも将来赤ちゃんが生まれたらジジにしたように思いつ
きり可愛がつてあげるんだ。」

「なるほどな。本物の猫かわいがりつてやつやん。」

竜のつまらない冗談に笑うと、そのあとしばらくボクと竜はリビングでジジと一緒に話した。ジジは満腹になったので眠ってしまったので小声ではあるが、ちょっと幸せな時を過ごすことができた。

「そついえばさ。竜に聞きたいことがあったんだ。」

「ん？なんや？」

「竜ってモテるのになんで今まで彼女とか作らなかつたの？」

これは、今日の罰ゲーム用に鈴たちと考えていた質問の一つだ。罰ゲームではないが、竜なら答えてくれるような気がした。

「うん。そやな。昔っから好きな奴がおんねん。そいつ以外と付き合う気がせえへんから。これじゃあかんか？」

「うん。十分だよ。その人と両想いになれるといいね。竜はカッコ良いからきつと相手も竜のこと好きになつてくれるよ。」

笑顔でボクは竜に伝えると、竜は赤くなって答えてくれた。

「ありがとう。そいつと付き合うことになったら一番に秋に教えたるわな。」

「分かったよ。約束ね。」

ボクと竜は照れながらも昔のように指きりをしておやすみをした。竜が部屋に戻っていくと、ジジが何事かと起きたので、ボクはみんなを起こさないように静かにジジの相手をしてあげた。

竜のことは大好きだけど、竜がそこまで相手のことを思っているんだったら、ボクは応援しよ。だって、竜は本当に素敵な心友なんだもん。

「良かったわね。メグ。」

「え？鈴？それに、麻美に和美？」

竜が先ほどリビングから出てきた扉から、麻美たちが現れた。

「大丈夫。竜くんにはばれないように隠れてたから平気よ。」

いやいや、ばれないように盗み聞きしてたってことね。ボクも竜が側にいたから周りに気を張っておらず、自宅内では危険も少なかったため、気配をさぐるのを怠っていた。

「麻美には負けるわ。ひよっとして司とかも知ってるの？」

「司は、竜くんが起きたことだけ私たちに告げて寝ちゃったわ。明日にでも説明を求められるだろうけどね。」

「なるほどね。竜の動きを間接的にみんなが監視していたってわけだ。全くボクと竜のプライバシーはみんなの前ではないのと変わらないね。」

「そんなことないわよ。秋たちがどんな状況になっても邪魔する気はなかったんだもの。」

「和美、本当にボクが服を脱ぎだしても目を閉じてまわれ右して部屋に戻れた？」

「ばつちり視界に収めて秋の姿を脳内にたたき込んでおいたわ。」

「流石に扉が開いたらボクだって気づくから。竜もボクと一緒にいるんな危険なことにあつてたんだから、同じ部屋の中に不穏な気配があつたら気付くとおもっぞ？」

「竜くんはどうかしらね。秋ちゃんしか見えてなかつたみたいだから気付かなかつたかもしれないわよ。」

「なによそれ、それよりもさっきの会話聞いてたならもうわかつたでしょ？竜は好きな人がいるの。ボクは竜をあきらめることにするよ。」

「「「え？」「」」

なんで三人はそこで驚くの？さっきの会話は、どう考えても竜がボクに自分が好きな子がいるという相談している場面だったじゃん。ちよつと辛いけど、心友としては応援してあげないと。

「質問した内容が周りくどすぎたのよ。なんで私達が考えたみたいに、【ボクのことを一生愛してくれますか？】って質問しなかつたのよ。そしたらめでたく結ばれてたのに。」

「そ、そんな恥ずかしいこと言えるわけじゃないか。それに結

果的に竜に別の好きな子がいることが分かったんだからいいじゃないか。」

麻美たちは、もう一度あきれたような顔をして代表で麻美がボクに竜の言葉の意味を説明してくれた。

「あのね。竜くんが昔から好きだったって言ったことは、竜くんとずっと昔から一緒に過ごしていた子が好きだって意味でしょ？」

「うん。ってことは、小学校から一緒の子だね。ボクたちの小学校はあんまり女の子いなかったし、結構しぼれるね。」

「しぼれるどころじゃないわよ。小学校から一緒の子で竜くんに告白して断られていない子なんて二人しかいないんだから。そのうちの一人は司の彼女である私なのよ。」

「え？みんな竜に告白してたんだ。じゃあ残りの一人って誰？」

麻美はため息を吐くと、ゆっくりとボクを指さした。

「え？」

流石にボクもその事実気付かされた。そう言えば、ボクって竜に告白していない人物じゃん。というか、昔から司を好きだった麻美以外の女の子はボクらの学年ではほとんどが竜ラブだったことを忘れていた。あんまりにも竜が告白などを断るから中学に入ってしばらくするとみんな別の男の子に興味を抱きだした。

「ということとは？小学校から一緒に、竜に告白していないのってボクだけ？」

麻美は頷いた。ど、どうしよう。ということは、直接ではないとはいえ、ボクって告白されたってことでは？

「でも、同い年の子とは言っていないし、道場の子って可能性も。」
道場の子なら鈴も知っているだろうと鈴の方を見るも、首を横に振っている。

「メグ、恥ずかしさで混乱しているのは分かるけど、道場の子も全敗してるわ。というか、竜くとメグの様子を見て諦めた子がほとんどよ。」

「同い年以外っていうのもないわよ。竜くんはバスケットとかでも先輩後輩あわせて可愛いといわれている子たちの大半からの告白を断っているんだから。竜くんに告白していない子も大勢いるのは事実だけど、それでも、竜くんの様子を見ていたら、秋ちゃん以外にありえないんだから。」

どうしよう。ボクってそんなに鈍感だったのか。竜はずっと昔からボクのこと好きでいてくれたのに、全然気付かなかった。いや、気づいていたのかもしれないけど、気づこうとしていなかった。

「ボクどうしたらいいかな？」

「それは、明日の朝起きた時にでも返事を返してあげるのが一番なんじゃないかしら？」

「秋が今すぐ竜くんの寝ているところに行って、目覚めのキスで返

事ってのもいいと思うわよ。」

「和美の案はちょっと、ボクにはできそうもないから、遠慮してお
くよ。明日の朝一番か・・・」

話をしている間にジジがミルクをねだったので、とりあえず、レン
ジで温める。

ジジにミルクをあげながらも麻美たちと今後ボクがどうしたらいい
のか話し合った。ジジがミルクを飲み終わり、眠りだしたのを確認
してボクたちは大きな声で起こさないように少し離れた場所に移動
して決意を述べた。

「決めたよ。ボク勇気を出すことにした。」

「あのね。それって勇気とかじゃないんじゃないの？それに、竜く
んは精一杯がんばって秋ちゃんに気持ちを伝えたんだから、それはち
よっとかわいそうよ。」

「ううん。やっぱり、ジジのこともあるし、きちんとけじめを付け
た方がいいと思うんだ。」

「けじめって、それにそんなこと言ったら、司くんがなんて言うか
分からないわよ?」

「大丈夫だよ。司にはきちんとわかってもらおうし、気持ちがあつ
たんだからあとはボクの勇気さえあれば進展するとおもっもん。」

「確かに前進はしてるかもしれないけど、その結果がこれじゃあ・・・」

三人とも、ボクの結論には反対のようだ。でも、ボクの決意は揺るがない。

「メグ、本当にそれでいいの？クリスマスまでに間に合わなかったら本当に司くん怒るかもしれないわよ？」

「ぐ……きつと大丈夫だもん。」

「大丈夫よ。それに、劇の主人公を演じたとはいえ、元は顔に出やすい性格してるんだから、きつと問題ないよ。」

「それでも、気づかなかったことにするなんて、ちょっと酷過ぎないかしら？秋の鈍感さなら確かに気付かないって考えも分かるけど、現にこうして私達が教えちゃってるわけだし……」

そう、ボクは、麻美たちに教えられないで、気づかなかったことにすると決めた。だって、竜がきちんとボクのことを名指しで言わなかったのが悪い。きちんと周りくどい言い方をしないで告白してくれたら問題なかったんだ。

「なんかさ。私、秋がもし今日竜くんに告白されてても、上手くい訳を作って無かったことにしてたかもって思えてきたわ。」

「それは、前にやってるらしいわよ。小学校の時キスマまで迫っておいて、心友の証渡してごまかしたそうよ。」

「麻美、それは言っちゃダメでしょ。ボクの中でも今では後悔してるんだから。」

「あのねえ。後悔してるんだったら、同じ過ちを繰り返そうとしな

いでよ。」

「あの時はだって、司だけ仲間外れになっちゃうような気がして、嫌だったんだもん。」

「じゃあ今回は問題ないじゃないの。むしろ付き合っていないのは秋ちゃんと竜くんだけよ。和美のことはおいておいて、二人が付き合ってもなんら問題ない状態なのになんではぐらかすような真似するのよ。」

「それは、えっと・・・」

「メグ、そろそろ恥ずかしがるのもいい加減にしないと本当に竜くんあきらめちゃうわよ？ 竜くんに諦められたら一番困るのはメグなんだから。」

「そんなことは分かってるよ。ただ、ジジの世話もあるし、ボクの気持ちも整理がついてないから、こんな状態では付き合えないっていうかなんというか・・・」

「ジジちゃんのごとは関係ないんじゃないの？ 竜くんと付き合っただけだよ。ジジちゃんの世話はできるんだから。それ以上に問題なのは、その恥ずかしがり屋の性格をどうにかしなさいよ。恋愛になると本当にからつきりなんだから。」

「そんなこと言われても。」

「ええい。あんまりうだうだいってると、秋の代わりに私が竜くんもらっちゃうよ?」

「和美が竜を？」

「私的には竜くんの代わりに秋をもらいたいところだけど、それが無理なら竜くんが我慢して上げるわよ。まあ、竜くんも顔はいいし、優しいし、スポーツも勉強もできるしね。」

「ダメ!!」

ボクはつい否定の言葉を出してしまっただけとなる。和美はニヤリと笑うと、ボクの心まで見透かすように目を向けてきた。

「秋ちゃんのことだろうから、竜くんが好きなのがいるって思った時は応援しようとしたんでしょ？でも、実際に取られそうになるとどうしても許せない。違うかしら？」

「そんなことは……ないとは言いきれない。」

「メグは竜くんのこと好きなのよ。それがわかったら、ごまかすなんてやめて、きちんと向き合わなくっちゃ。」

そのあとも、三人に説得され続けたが、結局、クリスマスまでに結論を出すということで三人には理解してもらった。話しながらもミルクの時間になり、ジジにミルクをあげると、もうずいぶんな時間になっており、三人はボクの部屋に帰って少しだけでも寝ると言った。

次のミルクの時間前にお母さんが起きて来たので、ボクはリビングを離れる気にはならなかったが、その場で毛布を使って朝食まで

少し寝ることにした。

「いやん。秋の寝顔って超可愛い。」

和美に頬をつつかれてボクは目を覚ました。和美や麻美や鈴木も結構遅くまで起きていたので、さっきまで寝ていたようで、お母さんがみんなの分の朝食を準備していた。

「おふあよう。みんなは？」

ちよつと欠伸をしながら挨拶をすると、麻美が状況を説明してくれた。どうやら、浩太と司と竜もあのあと遅くまで起きていたらしく、まだ起きていないようだ。竜に寝顔を見られなくてちよつと安心した。

「大丈夫よ。私たちしか秋ちゃんの寝顔は見えないから。顔を洗ったら、竜くんたち起こしてあげて、私たちもみんなが揃うまで待つてるわね。」

「分かった。ジジにミルクはあげた？」

そう言つて、ボクは顔を洗いに行った。ボクの背中にきちんとミルクをあげたことをお母さんが報告してくれた。ボクって夜も朝もそんなに得意じゃないのに、一晩中ミルクなどジジの面倒をみるために起きていたから、頭が働いていない。

顔を洗つてすつきりすし、司たちの寝ている部屋に着くと、竜以外の二人はすでに起きだしており、朝食ができたことを告げると、竜を放置して先に行つてしまった。

「もう、相変わらず朝は弱いんだから。」

竜と司は何度もボクの家に泊まりに来たり、一緒に旅行に行つて外泊しているが、いつも竜は朝目覚めが悪く、こうしてボクが起こすのも何度目かになる。

「和美が昨日変なことというから・・・」

目覚めのキスで答えるなんて和美の言葉を思い出して、いつもみたいに起こせないでいる自分に変な気分になる。なんだろ、こうしてゆっくり竜の寝顔みてるよ、なんだか可愛く見えてしまう。熟睡してるみたいだし、キスしても起きないかな？

変なことを考えながら竜の顔を見てみると、竜が身じろぎをして、本当に竜の唇がキスできる場所にきてしまった。どうしよう。でも、ばれなきゃいいよね？

「秋。ばれないうちにしちゃいなさいよ。」

ビクッ

「和美？こ、これは別に・・・」

「秋が返ってくるのが遅いから様子を見に来たら、お邪魔だったかしら？昨日は見てたら分かるみたいに言ってたけど、やっぱり気付かないじゃないの。」

「そ、それは起きたばかりで頭が回転してないし、っていうか。別にボクは起こそうとしただけで何もしてないんだから。」

「はいはい、今は何もしてないのよね。お腹すいちゃったし竜くん起こして早くご飯にしましょ。」

和美は誤解してるだけなんだから、ボクは本当に何もしてないもん。確かに、和美が来なかったらひよっとしたら……。いや、絶対何もしてなかったと、思う。たぶん。

そのあと、竜をたたき起して、みんなでご飯を食べると、ジジを病院に連れて行くべく日曜日に開業している獣医さんを探し、解散となった。

ボク本当にどうしたらいいんだろう。

チャプター35（後書き）

うん。そろそろ、引っ張るのも無理になって来ましたね。

今回だって、軽く告白しちゃってるし、竜のセリフを書いてから、あれ？告白してんじゃない？とAKIも気づき、それなら麻美たち使っただけか、まさか、まだ引っ張る要素があるとはAKIもびっくりでした。さっさと付き合っちゃえばいいのに……

今回のテーマは“秋の可愛さとジジを含む周囲をどれだけ書けるか”でした。

AKI 秋という話は、ブログでも書いたのですが、それにしても秋の可愛さは異常ですね。本当に、こんな献身的で、ジジに対してもそうだし、竜に対してもすごく可愛い反応をする秋に作者であるAKIはびっくりです。AKIの頭の中にこんな人物が眠っていたとは……

さて、今後の秋たちの展開が気になると思いますが、それは次回からのお楽しみということで、

35話を読んでいただきありがとうございました。

チャプター36 (前書き)

読者の皆様からの温かい応援のもと、投稿しております。本当にありがとうございます。

チャプター36

恋の時限爆弾

結局、ジジのことを構っているうちに10月を半分以上使ってしまった。10月に入ってすぐ学園祭があり、12月のクリスマスまでの2か月の間に竜との関係をどうにかしないと、ボクはきつと司や麻美によって無理やり付き合わされることになってしまう。結果的には付き合うことには変わりはないが、どうせなら自分たちで何とか付き合うようにもっていききたい。

それに、名指しではなかったとはいえ、竜から一応告白なるものをしてもらったのだから、それにもきちんと答えないといけない。もし、ここできちんと答えを出さなければ本当に竜はボクから離れて行ってしまつかもしれない。

「どうしよう。」

今は放課後だ。美術部を半分引退したとはいえ、帰りは基本的に竜の自転車の後ろであるボクは、武兄ちゃんが迎えに来てくれる日を除いて、美術部に顔を出したり、鈴や浩太と勉強をしたりしながら竜が終わるまで時間をつぶさなければならぬ。

「こうして教室にいないで、体育館で竜くんの練習の様子でもみてればいいじゃない？」

「それはみんなの迷惑になるからダメだよ。ボクらは勝手に引退し

たけど、本当なら来年の夏までは部活を続けていることになったんだから。」

「じゃあ、模写だとか言ってるペンとスケッチブックを持っていけばいいじゃない。ギャラリーはあいてるんだから別に問題ないでしょ？」

「それは、まあそうだけど。鈴や浩太がいるんだし、ボクも教室にいた方が・・・」

「メグちゃんは、竜さんと今までと違う場所で会つと、緊張しちゃうからさけてるだけだろ。」

グサ、まあ、事実だから仕方がないんだけど、実際美術部の方も、鈴や浩太の指導があれば問題なく、真奈美ちゃんたちも来年に向けて既に計画などを立てており、ボクは学校にいてもやることがない。

「いいよな。メグちゃんは勉強なんてしなくても、受験楽勝だし。」

「うん。それは否定しないかも、勉強よりも当日だけ不幸に合わずに受けるか、こっちの方が大事だからね。絶対に竜の側から離れられないよ。」

「受験当日は、みんなそれぞれ必至だから、流石にメグのことを恨む余裕なんてないんじゃないかな？」

「そうだね。試験の邪魔でもしない限り問題ないでしょうね。」

「まあ、一応別室で受けれるか確認だけでもとっておいたら？メグの成績をみれば、流石に高校側も欲しいはずだからひよっとしたら

特別認定してくれるかもしれないわよ。」

「人と違うことをするってあんまり好きじゃないんだけどな。」

「受験のためだもの、それくらい許されるわよ。第一、メグにとつては今さらじゃないの?」

「それを言わないでよ。人と違うからこそ、人と同じことができるように努力してるんだから。」

受験まで猶予があるボクらは結構こんな感じでおしゃべりをして過ごすことも多い。鈴はもともと勉強好きだし、浩太も成績は良いので、今から焦って詰め込むこともない。というか、心友全員結構頭が良い。ボクと竜は近くって特待生で行けるのでT高を受ける予定だが、鈴たちは有名名門高のY高に普通に入れるだろう。浩太なんかは首席合格も可能かもしれない。

「そろそろ、メグのナイト様が練習終わる時間じゃないかしら?」

「ナイトってなんだよ。そんなんじゃないよ。」

「あら?麻美から聞いたわよ。守ってやるって約束してくれたんでしょ?」

最近ボクと竜の情報は、司と麻美によつてただ漏れである。というか、竜は元々隠し事ができない性格なので、ほとんどの情報が心友メンバーには伝わっており、それを使ってボクをからかうのが心友メンバーの楽しみになりつつある。

「はあ。まあいいわ。確かに練習終わる時間だし、体育館に向かお

うか。」

「あら？私いつナイト様が体育館で練習してるなんて言ったかしら？」

「言っていないけど、竜のことなんですよ。」

「へえ。メグの中で竜くん」ナイト様って構図ができちゃってるのね。」

「やられた。こうしてボクは毎日鈴たちにいじめられるんだ。ボクが真赤になって否定しようとする、鈴はボクの頭を撫で撫でして最後の一撃をくれた。」

「大丈夫よ。ナイト様もきつとメグの熱い口づけを待っているから。」

「はうあ・・・」

小学校の事件のことを知っていてこんなことを言うから達が悪い。結局そのあと鈴に抱き締められたりして、体育館に行くのが遅れ、竜は自転車をげた箱の前まで持ってきていた。

「丁度ええタイミングやったんやな。今日は部活じゃなくて浩太たちとおったんやな。」

「部活の方はもうだいたい軌道にのってるからな。それじゃあ、僕と鈴は帰るからまた明日学校でな。」

浩太はそう言うと、鈴と仲よさそうに自転車置き場の方へ歩いて行

った。なんだかんだあつたけど、二人も結構お似合いかもしれない。浩太もあれで前よりもずっと良い男になったからね。でも、やっぱりまだ鈴にはもつたいたい気がする。

「あいつら仲ええよな。せやけど、なんで鈴ちゃんは浩太なんやるな。」

「まあ、美術部じゃないと分からないことがあったのよ。竜も美術部にいたらきつと浩太と鈴が付き合いだすのも違和感ないと思うよ。」

「俺が美術部やったら、帰る時間早くなって鈴ちゃんは浩太と付き合わへんかったんうやないか？」

「そうでもないと思うよ。結局結ばれる運命だったんだよ。」

「秋がそんなこと言うん珍しいな。普段からファンタジー体質やのにそう言うん絶対信じへんやん。」

「まあね。でも、ボクも運命ってあると思うよ。だって、竜と出会ったのも運命だと思うしね。」

「ちよま、それは・・・」

真赤になった竜だけど、少し間をおくと、考えをまとめたのか、言葉を紡ぎだす。

「秋のは前世の記憶とかいうやつやろ？運命とは違うんちゃうかな？」

「うん。それも一種の運命なのかもよ？もし違ったとしても、これから運命にしていけばいいじゃない。運命は自分で切り開くものだよ。」

「自分で切り開くなあ。まあ人に決められた人生よりはええかもしれへんな。」

「熱いわねえ。いつまで話してるつもりなの？最終下校時刻過ぎちゃうわよ？」

自転車を取ってきた浩太と鈴に冷やかされてしまった。ボクは真赤な顔がバレないように竜の自転車の後ろに急いで乗ると、竜に出発を促した。しばらく走っていると、ボクから竜に話しかけた。

「さっきの話だけど、竜はボクが運命の人だったら嬉しい？」

「せやな。前にも言われた気がするけど、前世でも今でも絶対に心友やったなんて嬉しいもんやで。」

「そうじゃなくって、運命の……恋人だったら……」

ボクも恥ずかしくなって小声になってしまふ。

「ん？なんて？」

「うん。何でもない。それよりもうすぐ竜の誕生日だね。」

「ああ、せやったな。最近部活とか忙しくって忘れとったわ。」

「なに言ってるのよ。この前ボクと司の誕生日祝ったんだから、」

か月後でしょ。」

「悪い悪い。どうもそういつ行事ごとって覚えれんくってさ。」

「こんなんじゃ、付き合つた記念日とか期待しない方がいいわね。」

「せやな。彼女ができてもひよっとしたら忘れちゃいそうで怖いわ。」

「全く、そんなんじゃ彼女できないぞ。」

「うん。このままやったら本気でやばいかもしれへんな。そろそろ俺も現実をみよっかな。」

え？現実って？ひよっとしてきちんともう一度告白してくれるのかな？

「俺の周りってほんま秋みたいな暴力女しかおらへんからなあ。」

ぎゅ。ギリギリ。

「ちよま、マジで骨までいっとなるって、暴力反対。」

「ボクみたいな美人をそんな風に言うのは竜くらいなんだからね。それに胸が当たって良い思いしてるんですよ。」

「まあな。秋はほんまに美人やおもつで。」

「ちよ……そんなこと……いきなり言われても。」

結局ボクの方が竜の背中であつた赤になつてしまつたのだつた。今度は力はいれずに、ぎゅっと竜の背中に抱きついた。

「ほんま、役得やな。」

「馬鹿いつてないで力入れて漕ぎなさい。」

声とは裏腹に態度は優しくなつてしまつた。

翌日、鈴はボクに何か発展があつたか聞いてきたが、特に何もなかつたと言つておいた。しかし、ボクは良いことを思いついてしまつた。そう、竜の誕生日に告白の返事をする事だ。明後日はちょうど土曜日で竜も部活も学校もなく、元々心友で集まつて何かしようということになつていた。

「司、お願いがあるんだけど、明後日ボクと竜以外を呼んでどこかに遊びに行つてくれない？」

「いいよお。その代りい、後できちんと報告してねえ。ついでにい、今回逃したら、竜に無理やりクリスマスの日に別の子に告白させるからあ。」

「ええ？クリスマスデートつてボクたちを無理やり誘つて話じやなかつたの？」

「気が変わったんだよお。秋が竜の気持ちにんてあてあげないんだつたらあ。そろそろ竜も別の子に興味を持たないとかわいそうだと思つてねえ。大丈夫、秋も誘つてあげるからあ。」

「全然大丈夫じゃないよ。竜が他の子といちやいちゃするのを見る

なんてボクにできると思う?」

「うん。思わないけどお。それはそれで上手く行きそうだから問題ないかなあ。」

そんな横暴な・・・

確かにボクはそこまでされたら流石に竜に気持を伝えるかもしれないが、その時は竜には彼女がいるわけで、彼女になった子に申し訳ないし、間を引き裂くのが悪くって本当に何もいわないで心友つてなる可能性だつてあるわけで。

「大丈夫だよお。そこはバシツと言うのが秋だからあ。まあ告白しておいて二人で幸せになつてねなんて言いそうだけどねえ。」

「メグ、テンパるのは分かるけど、あんまり言葉に出さない方がいいわよ。誰も聞いてなかったから良いようなものの、そのうち誰かに聞かれちゃうわよ。」

「ごめん。そうだね。そこで聞き耳を立ててる和美みたいな子がこれからもいるかもしれないもんね。」

「あはは、バレてたか。」

和美がいつものごとく扉の向こうで聞いており、ボクに名指しされて中に入ってきた。

「別に和美には隠し事してるわけでもないんだから堂々としてきてよね。なんか、扉の向こうにいられると逆に変な気分になるんだよ。」

「つい癖になっちゃってね。でも、本当に私がいても平気で内緒話するんだから。気をつけたほうがいいわよ。」

「うーん。あんまり隠し事とか好きじゃないからねえ。聞かれたらたぶんどうしてもってことじゃなきゃ答えちゃつかも。」

「ホントに？じゃあスリーサイズは？」

「上から88・59・85だったかな？寒くなってきてちよつと太っちゃったけどね。」

「夏前はよりすごい体系になってるじゃないの。」

「やっぱり太りすぎかな？体重はそこまで増えてないんだけどね。」

「違うわよ。太ったんじゃないくて、磨きがかかっているのよ。」

「身長はあんまり変わってないのに体重だけ増えたんだよ？」

「その体重のほとんどが胸でしょうが、それは太ったんじゃないくて成長したのよ。なんだか、竜くんとの関係が良くなる度に成長しているんじゃないでしょうね？」

「そ、そんなことないよ。」

「そう言えばあ、ファーストキスの事件ぐらいからだよねえ。秋が女の子らしくなったのってえ。」

「そ、そうだったかしら？」

「そうだよお。浩太がおぼれてからあ、急激に女の子らしくなつてえ。竜とキスしてからは本当にい、男の子っぽさがなくなつたよねえ。」

「き、気のせいよ。だって、中学入つてからだって、暗黒やら残酷やらやりたい放題じゃないの。」

「暴力は確かにねえ。でもお、殺戮とか黄金とか破壊はあんまり使わなくなつたよねえ。」

「それは、スカートだから足技使いにくいから仕方がないわよ。」

「殺戮はあ？頭だけどお？ああ、竜と顔の距離が近づくからあ、やらなくなつたんだねえ。」

「司あ、そんなにボクの必殺技が見たかったのね。ボク誤解してたよ。司はもつと命を大事にする子だと思ってた。ごめんね。今まで勘違いしてて、偶にはフルコンボしてあげるね。」

「あ、竜う。」

ビクッ バッ ガシッ

「司くうん。竜なんていないよねえ？それと、いきなり立ち上がったどこに行こうとしたのかな？」

「いやあ、竜に用事があったのを思い出してさ。それでちょっと竜のどこに行かなきゃって声を出したただだよ。」

流石の司も焦っているらしい。間延びしない司の声を久しぶりに聞

いた気がする。

ガツ、ドゴツ　グハツ……………

「南無う。」

鈴が司に手を合わせているが、そんなことは今は放置だ。司のせいで話が脱線してしまったが、とにかくボクは竜の誕生日に告白すべく準備をしなくてはいけない。お母さんに頼んで明後日は家に誰もいないようにしてもらおう。

「秋、司くんなんかピクピク痙攣してるんだけど大丈夫なの？」

「大丈夫よ。竜程ではないけど、司も昔から慣れてるから授業が始まるまでには回復してるわよ。床に寝かせておくと吉川先生が不審がるだろうから机の上で寝ているように見せかけておきましょう。」

「一つずつは前にも見たことあるし、殺戮に関してはこの前舞台で見てたけど、ふたつコンボでするだけで本当に恐怖ね。」

「これでも手加減してるんだよ？それにフルコンボは空中で二激叩き込むしね。流石に全弾空中で叩き込むのは練習してないから無理だけ。」

「まるで練習したら出来るみたいな言い方しないでよ。」

「うん。今は無理だけど、また前みたいに臨死体験して身体能力向上したら不可能じゃないかもしれないわ。」

「……………」

鈴と和美は顔を見合わせると、何かをボクに訴えてきた。

「大丈夫よ。よほどのことがない限り女の子に手をあげるなんてボクはしないよ。コンボは竜と司くらいしか耐えられないしね。竜は過去最高4コンボまで経験済みだし。最近大人しくしてたからつて2コンボくらいで伸びるなんて司も修行がたりないぞ。ん？狸寝入りか？」

ビクッ

「いやあ、本当に一回は天国が見えるかと思ったよお。狸寝入りじやなくてえ、これ以上耐えられないことを意思表示しただけだよお。」

司は結構すぐに起き上がってきた。机に運ぶ手間が省けてそれはそれでオツケーだ。だいたい、手加減したはずなのに伸びたからおかしいと思っていたんだ。

「見えない速さでこぶしを当てられたのに何で平気なの？」

「和美ちゃん。秋は力の加減とお、どこに入れたら後遺症を残さないか考えて打ってるからあ。意外と平気なもんだよお。ただし、できれば何度も受けたくはないのは事実だけどねえ。」

「秋、私も一回受けてみたいわ。どんな感じなのかしら？」

和美にはこの前ボクの部屋に来た時に暗黒を使っているのだが、完全な死角からの奇襲で、すぐに起き上がったことから、ボクが何をしたのか分かって無かったようだ。

「前に暗黒はやったことあるよ？」

「ええ？記憶に無いのはカウントしないの。ね？一回だけでいいから。」

なんだか、別の意味で危険な香りがしてきたのでボクは丁重にお断りをして、吉川先生が来るまで四人で雑談をして朝の時間を過ごした。そういえば、竜の朝練に合わせて早く来たはずなのに鈴木も司も和美も結構早くから学校にいた気がする。

ボクが竜と一緒に体育館にいるのが恥ずかしくて教室に来ているのを知ってわざと来てくれたのかな？やっぱりみんなちょっと意地悪なところもあるけど、良い友達かも。

ニヤリ

「明日は麻美も早く来るってさあ。今日はあ、ちょっと朝ごはんが間に合わなかったからあ先に行つててつて言つてたからねえ。」

司・・・あんなんでボクが考えてること分かるんだ？やっぱりこの心友は侮れない。

誕生日当日、結局周りの助力もあり、竜とボクの二人だけでボクの部屋で誕生パーティーをすることになった。いきなり予定が入った司たちに、竜は困惑ぎみだったが、毎年お祝いをしてこれたわけもないのであまり気にしていないようだ。

「今日は、張り切って料理つくとか作ったんだからいっぱい食べてね。」

ボクは疑似新婚夫婦みたいな状況にちよっぴり浮かれ気分。でも、やっぱりこうして二人きりというのは恥ずかしい気持もあり、司たちを追い払ったのは後悔かも。

「すげえ豪華やな。これ全部秋が作ったんか？」

「難しいものはないわよ。シチューとか結構簡単に作れるんだから。」

今日のメニューはシチュー・ハンバーグ・オムライス・シーザーサラダあと、竜の好きなから揚げだ。これにデザートというか誕生日なのでケーキまで焼いたので二人で食べるにはちよっと張り切りすぎたかもしれない。ご飯やパンも用意してあるのだが、いったい

どれだけ食べるのに時間がかかってしまうだろう。

「どうする？ ケーキまで食べれないといけないし、先にもうすぐ消しちゃおうか？」

「秋とならこれくらい食えるやろ。まあケーキも早くみたいしもうすぐ先にしよ。」

この量を食べれると言い切る竜。竜って大食いチャンピオンか何かだったっけ？

竜が大丈夫と言うのでとりあえず安心して冷蔵庫からケーキを取り出すと、大きいろうそく一本と、小さいのを4本刺して、火をつけた。

「おお、なんか本格的やな。消してもええか？」

「うん。むしろ早く消さないとロウが垂れちゃうわよ。」

竜は一息でろうそくの火を消すと、ボクは「ハッピーバースデー」とお祝いを言って二人で料理を食べだした。

「ほんま、秋は料理もうまいな。最近俺も家の手伝いするけどこまではできやんわ。」

「そんなことないよ。お母さんが作ったほうがやっぱりおいしいもん。でも、美味しいって言って食べてもらえるなら嬉しいかな。」

ボクらは笑って話ながら、料理を片づけていった。食べられるか心配していたのに、竜は本当に良く食べられるし、会話も弾んでいたからか、時間はかかってしまったが、そんなに気にすることなく食

べ終えてしまった。

「ごちそうさま。ほんまに秋はええ嫁さんになれるわ。」

「おそまつさまです。ここまで豪快に食べてくれると作ってるボクも嬉しいよ。」

「うまかったからな。こんな料理なら毎日でも平気やわ。」

「本当に？だったら将来本当に毎日作ってあげよつか？」

「そりゃ嬉しいな。秋の手料理食べ放題なんて言ったらファンクラブの奴ら踊ってよろこぶわな。」

「ファンクラブはどうでもいいよ。竜は本当にボクの料理毎日食べたい？」

「え？そりゃ、まあ。」

「この前司たちと泊まった時竜がここで言ってくれたよね？昔から好きな子がいるって。」

「え？う、うん。」

「ボク正直竜が好きな子がいるって聞かされて応援しようと思ったんだよ。」

「馬鹿、そんな意味とちゃうわ。」

「うん。あの後、聞き耳立ててた麻美たちに同じこと言われた。昔

から竜と一緒にいて、竜が叶わなかった恋人はボクだけなんだって。」

「かなわなかったって……」

「今まで、照れて答えはぐらかして来たけど、きちんと答えるね。ボク……」

その時、ボクは窓の外を見た。どこかに遊びに行っているはずの浩太が、窓の側で聞き耳を立てていた。玄関の方にも気配があるので、おそらく浩太の合図で他のメンバーも突入してくるつもりだろう。

「はぁ。答えが聞きたかったらボクの部屋まで来てくれる？」

「え？別にかまへんけど……」

ボクは玄関のカギを司たちのために開けてからボクの部屋に竜と一緒に向かった。

ボクは、これ以上邪魔が入る前にきちんと答えようと、竜に向き合うつと、はつきりと答えを言った。

「ボク竜が好きだよ。心友としても、男の子としても。ボクと付き合ってくれないかな？」

「「おめでとう〜!!」「」

やられた。まさか、浩太がダミーだったなんて、クローゼットの中から、麻美と鈴と和美がクラッカーを鳴らしながら出てきて、勉強机の下から司が這い出てきた。こちらもクラッカーを手に持っている。

「全く、司の読みは完璧だな。」

浩太も扉を開けて入ってきた。少しタイミングは遅いがクラッカーを鳴らしている。

「秋？これはどういうこと？」

「竜は自覚無かったかもしれないけど、ボクらが両想いなのはみんなにはバレバレだったのよ。それで、ボクが告白するために二人きりにして欲しいって司に頼んだんだけど。」

「僕たちがあ。そんな楽しそうなイベント放っておくわけがないじゃないかあ。」

「そうよ。秋の美味しい料理を逃したのは惜しいけど、サプライズのためにずっと待機してたんだから。」

「思ったより簡単だったわよ。メグは愛しの竜くんのために台所にずっといたし。タイミングを見計らって浩太に窓の外に姿を現してもらっただけだったんだから。」

「それで、僕はずっと庭にいたんだから、大変だったんだぞ？」

「私たちはクローゼットの中よ？三人も入るには結構きつかったんだから。」

みんな勝つてなことを言っているが、結局ボクらがここで告白することを分かっていたかのようにだ。

「一つだけえ、問題があつただけけどねえ。告白を受けた竜が狼になる前にでるかあ。後に出るかでえためらつただけとお。あんまり長く同じ空間にいるとお。秋が気づいちゃうからあ。どうしても前に出ることになつちやつたんだよねえ。」

「狼つて、俺は何もしない。」

「チユーくらいしてもいいのよ。さあ、今すぐメグの小さな唇をうるおしてあげなさい。」

「鈴!!そんな・・・」

全員の視線がボクと竜に集中し、ボクらは真赤になつてしまつていく。ちよつと嬉しいけど、恥ずかしい。

「さあ、秋ちゃんのことだから、シチュウの残りくらいはあるでしょ?みんなでもう一回竜くんの誕生パーティーしましょうよ。あと、付き合いだしたお祝いもかねてね。」

麻美がそう言つていたずらっぽく微笑むと、みんなでリビングに戻つた。確かに夕飯分と思つてシチュウとハンバーグとサラダは残つているが、竜の大好きなから揚げとか二人分作つたオムライスとケーキは全部食べてしまつてない。

「せつかくだし、オムライスも作つてあげようかな。」

「今日は秋ちゃん張り切つてるわね。そんなに嬉しかったの?」

「まあね。あ、竜の答え聞いてない・・・」

「竜くん。きちんと答えてあげなきゃダメじゃないの。」

「いや、答える前に自分ら出てきたやん。」

「そう言えばそうだったわね。つい司の合図がある前に和美が飛び出しちゃったのよね。」

和美の方をみんなが見ると、照れ笑いをしていた。

「だって、なんだか二人の様子を見たら幸せ過ぎていてもたってもいられなかったんだもん。」

一番に声を上げたのは予想外にも和美だったらしい。祝福してくれるか心配だったが、和美は本当の意味でボクたちのことを大事な仲間として認めてくれていたようだ。

「オムライス作る前にやることができちゃったね。これ、人数分あるんだけど、みんなに配るね。」

ボクはみんなに、ミサンガを渡して行った。

「これ？引退後に作っていたやつよね？」

「うん。リストバンドって、買いに行かないといけないでしょ？でも、ミサンガなら今後ボクの味方が増えた時にすぐに渡してあげれるじゃない？色はボクのセンスで決めてあるんだ。ボクと竜は緑と赤を中心に、鈴と浩太は青色と灰色を、麻美と司は水色と黒ね。和美は赤と白にしたわ。白は和美のイメージカラーね。」

「え？赤は秋ちゃんのイメージカラーよね？本当にいいの？」

「みんなは、付き合ってるからそれぞれの色を中心にしたけど、赤もちゃんと入ってるよ。赤が中心なのはみんなボクのことを大切にしてくれてる人全員だからね。変な意味じゃないぞ。」

「ううん。それでも嬉しいわ。秋、ありがと。」

「えへへ。喜んでもらって嬉しいよ。特殊な糸使ってるから普段つけても平気だよ。ほつれたりしたら何度でも直してあげるから、大事にしまわないでつけて欲しいかな。もちろん制服から出ないような場所につけてね。ボクのせいで生徒指導に呼ばれるなんていやだからね。」

みんな思い思いの場所にミサंगाをつけて行く。ボクも竜と和美のミサंगाをつけてあげた。

「これ夏服になったら見えちゃうね。」

「その時は、足にでもつけようか。足なら靴とか靴下でうまく隠せばもんだいないさ。」

「そうね。足なら自分でつけ直せるし、そうするわ。浩太は今も足の方がいいんじゃないの?」

「これでも美術部だぞ。手先は器用な方さ。」

みんなの分もオムライスを作り、ボクと竜は流石に少しつまむ程度だったが、みんなともう一度誕生日パーティーをした。竜、これで自分の誕生日を忘れたらボクとの記念日も忘れることになるんだから、絶対に忘れるなよ。

チャプター36（後書き）

ごめんなさい。実はまだ引っ張れましたね。もどかしさを楽しんでくださっていた読者様申し訳ありません。クリスマスまでのと言いながらも司のあの脅しさえなければ高校くらいまでは余裕で引っ張れたことでしょう。

正直、ツンデレ発動させて、竜をいじめることはできましたが、竜がかわいそうになってきました。マテといわれたワンコのように見えてきたのです。

今回のテーマ“いかにして司の計画を遂行するか”でした。

え？メインは秋の告白に対する答えだろ？違います。あえてそこは重要ではないと明言いたします。だって、何度はぐらかさうとも二人は付き合う運命なんですから。だったら、司の発言にフラグを立てて、みんなでサプライズって方に力をいれたくありませんか？というか、司だけじゃなく、心友たちみんなで秋と竜を囲む様子を描きたかったのです。自転車のシーンはフラグを立てるため必要でしたが、基本周りを中心？？に書いたつもりです。

では、再転の姫君はここから、甘いムードに・・・ならないかもしれませんが、今後よろしくおねがいます。

36読んでいただきありがとうございました。

チャプター37

Happy merry X·mas

聖なる鐘の音を聞き、ボクたちの歌を歌おう

幸せを感じる時、ボクたちの時間が来る

寒い夜に震えないで、みんなで踊ろうよ

暖かい暖炉を囲んで、みんなで歌おうよ

ハッピーメリークリスマス

今日は、合宿の時から約束をしていたトリプルデートをすることになった。無事に竜とも付き合うことになり、ボクも今日は張り切っておしゃれをした。まあ、そんなことを言っても、女の子っぽい服を着て、口紅とアイシャドーだけ入れて、薄くファンデをしただけだけだね。

お母さんに竜のことを言ったらお化粧道具を一式買いに行くことになったが、まだこれだけしか手をつけていない。高校に入っても、

校則を破る気もないので、そんなに使うことはないかもしれないが、使い方くらいは理解しておかないと。

「おはよう。」

ボクは集合場所に三十分も前に着いてしまったので、一番に着いてしまっただろうと思っていたが、既に、麻美・司・浩太が来ており、ボクのことを待ち構えていた。

「秋ちゃん。今日はおしゃれしてきたんだ。本当にきれいね。」

「そんなことないよ。麻美の方がきれいだよ。」

「ふふ、ありがと。でも、女の子らしくなった秋ちゃんは本当に素敵よ。」

ボクも今日は竜とちゃんとしたデートをするのは初めてなので、がんばってきたのだ。少しは女の子らしく見えるかな？

「秋ちゃんは、お化粧までしてるのね。あら？あれは鈴かしら？」

麻美が遠くの方を見ると、鈴の姿があり、鈴もボクらを見つけると、

かけだした。

「おはよ。早く来すぎたかと思ってたけど、結構みんないるのね。」

「ああ、僕らも一緒の気持ちなんだよ。早くみんなと遊びたい。そう思ってたね。」

「そうね。メグ今日は一段ときれいね。さては、竜くんにはほれなおしてもらいたくて張り切ったでしょ。」

「別にそんなんじゃないよ。それに、鈴だって今日は可愛いよ。」

「ありがとう、メグにそう言ってもらえると嬉しいわ。」

「そうだね。今日は二人とも一段と素敵だよ。」

「彼女じゃないからって私には誉め言葉はないわけ？」

「さっき最初に会った時にいったじゃないか。」

浩太もずいぶん成長しているみたいだ。春までだったら、視界にボ

クしか入れておらず、麻美はともかくとして、鈴のことを誉めるなんてあんまりしていなかったような気がするが、きちんと彼女のこ
とを見てあげれるようになった。

「あれ？俺って遅刻やった？」

竜はみんなが揃っているところにやってきたため、時間を確かめると、遅刻していないことを確認し、おもむろにボクの方を見たかと思つと、これでもかと言わんばかりにそつぽを向いてしまった。

「ちよつと、それが彼女になった女の子に対する態度なの？何か言うことがあるでしょ？」

「秋が綺麗すぎるのがいけない。あんまりにも美人だから、直視できない。」

「はう。」

ボクが迂闊だった。せつかくおしゃれしてきたのにそつぽを向かれて怒ってしまったが、竜の性格を考えれば、素直な反応であり、そして、答えもストレートに返してくるせいで、顔の温度が上がっているのが分かる。

「はいはい。こんなところでラブラブしてないで、チケットを取りに行ってボーリング場に行きましょう。あんまり遅くなると、お昼抜きになるわよ。」

麻美の声でボクらは動き出す。実際クリスマスということもあって、予約したチケットも結構ぎりぎりで見れたため、席が少しバラけてしまい。4人席と2人席になってしまった。2人席はカップル席とかいうやつで、その席を賭けてボーリングで対決することになった。

「カップルで集まってるし、席のこともあるから、チーム戦でいいわよね？一レーンしか借りれなかったから、二ゲームして、一人一ゲームずつして、私たちは合計、秋ちゃんと竜くんのペアは平均でいいわよね？」

「ちよつとまってるよ。平均って、明らかに不利じゃん。」

「そんなことないよお。僕らはあ、どっちか片一方は運動苦手な人が一人いるからねえ。」

「そうだな。時間があるなら別の方法もあるだろうし、均等になるようにハンディをつけることも可能だろうけど、お昼ごはん抜きになっちゃうし、平均と合計でいいだろ。」

浩太の発言に一応ながらみんな納得し、先に、浩太・竜・麻美が投

げた。

「ナイスストライク!!」

ハイタッチを決めて、竜たちのゲームは終了。竜は150本倒した。前よりもうまくなってるかもしれない。

「絶対調だったね。これなら、勝てるかもしれないね。」

平均すると、半分になってしまっているので、竜の倒した本数は75本換算だが、麻美が64本・浩太が82本倒しているので、まずまずの結果と言っている。

「秋い。今日は人が多いし、僕らのこと見てる人なんていないだろうからあ、本気だしなよあ。スコア表みて気づく人がいたってチーム戦だからあ。竜がすごいってみんな勘違いしてくれるさあ。」

「そうだね。それに、勝負事だから手を抜く気なんてないよ。250はいかないと、司には勝てないからね。」

司も、150近くいくはずだ。最高がそれくらいだし、部活で筋肉も発達しているので、きっと合計200は超えてくる。

「え？メグってそんなにすごいのか？私たち勝てないんじゃない？」

「そんなことはないよお。秋には大きな弱点があるからねえ。」

「今日は、怪談話なんてしても無駄よ。こんな明るくて人が多い場所じゃ臨場感なんてでないんだから。」

そういつて、ボクはレーンに立ち、ボールを・・・

「秋い。竜が後ろからスカートの中覗いてるよお。」

「キャッ！！」

ボクのボールは無残にも、ガードを転がって行った。

「馬鹿、覗いとらへんわ。」

「う、迂闊だったわ。まさかそんな手で来るなんて。」

「作戦勝ちだねえ。じゃあ、僕らは普通に投げさせてもらおうねえ。」

鈴と司はそれぞれ、スピアという好スタートを切り、二投目も同じような手に引っ掛かり、運よく5本だけ倒すスタートになってしまった。

「分かった。竜が目隠ししてればいいんだよ。ほら、ここから動いちゃだめだよ。」

「そこまでするんか？」

「勝てば何でもいいのよ。」

「じゃあないな。久し振りに秋がやる気になったとるし、協力したるわな。」

竜がしっかりとマフラーで目隠しをしたのを確認すると、ボクは今度こそと構えて、助走をつけた。

「竜くん。なめくじですよ。」

ドカッ コロコロ ポテポテ

「麻美！！ナメクジって？」

ボクが竜の方を振り返ると、麻美が竜に濡れティッシュを押しつけてようとしていた。

「麻美、濡れティッシュなんて押しつけてなにしてるのかな？」

「いやあ。目隠しをすると、何でもナメクジと間違えるって聞いたから試してみたくなったのよ。」

「なるほど、分かったわ。守ってばかりなんてボクの症に合わないし、やっぱり元から断つことが大事よね。」

そう言っただけは、司の方を睨みつけた。

「待ってえ、暴力はいけないよお。」

「あら、残念ねえ。破壊の一発や二発ならなんとかなるかもしれないけど、これは対処できるかしら？真美子さんに、【司が邪魔したせいで、ボク何もできなくて、浴衣は来年まであきらめてください。】なんて言ったらどうなるかしら？」

司は顔面蒼白になり、真美子さんによる報復を想像しているらしい。一番酷かったのは、シャワーの途中でガスを止められて、張ってあったお湯も水にされており、凍えてお風呂を出てきたことがあったらしい。

その時は春だったので、タオルで拭いて恨み事を言っただけで済ましたらしいが、今から寒い時期が続く。それに、夕飯のおかずを減らされたり地味に痛い報復もあることだろう。

「分かったあ。麻美い、フェアに行こう。既に点差もあることだし。ここからは真剣勝負にしよう。」

「最初からそうしてよね。まあ、鈴たちのチームにとっては本当にいいチャンスになったわね。」

鈴は二本目をストライクを取った。この時点でトップに、司は無難にもう一度スペアを取ったが、最初に倒したのが8本だったこともあり、少し鈴に離されてしまった。

「よし、ここからは本気でいくわよ。」

先ほど、リリースに失敗したため、6本ほど倒れているが、幸い真

ん中の4本が残っているため邪魔さえなければスペアは取れる。

そのあとボクはミスもなく、265本というかなりの記録を出し、竜と平均を出すと、207本ほどという中々の記録となった。

司は途中ストライク後にガーターを連発するなどのもったいないミスがあり、143本で麻美と合わせると、205本となり、ぎりぎり勝てた。そして、最初好調だった鈴は、失速してしまい、108本と、浩太よりも良い成績ではあるが、合計しても190本と最下位になってしまった。

「仕方がないねえ。負けたんだからあ。あきらめるかあ。」

「そうだな。今回はメグちゃんと竜に譲るとしよう。」

「まあ、初々しいカップルだし、良いかもしれないわね。」

「秋ちゃんたちもそこまで遠くはないはずだからあんまり変なことしたら見えちゃうわよ。」

「??？」

あの、みんなは何を言ってるのかな？

「鈴と浩太が負けたんだよね？」

「そうだねえ。そしてえ、僕たちのペアもお、負けたからあ。カップル席はあ秋と竜で使ってねえ。」

司は、そう言うと、ボクにカップル席の指定席が書かれたチケットを二枚渡し、他を四人で分配した。

「ねえ麻美さん？ボクはなにかたいへんな勘違いをしていたのだろうか？」

「勘違い？最初からカップル席を賭けた勝負だったわよね？それで秋ちゃんたちは勝ったから、カップル席に座れる。どこに勘違いがあったの？」

「いやいや、こういう場合って普通は、特殊な状況って言うのは負けた者が罰ゲームでなるんじゃないのかい？」

「やあねえ。デートなんだから得点に決まってるじゃないの。勝った秋ちゃんにサービスよ。」

「ひょっとして、負けてもこの席に決まってた？」

「あら、秋ちゃん鋭いわね。」

麻美は周りに聞こえないように、耳元にそつと囁いた。

「暗いからって、あんまり変なことすると、声でわかつちやうわよ。」

「ほう。そんな、何もしないもん。」

「うふふ。かわいい。」

麻美に抱きしめられてしまった。というか、なぜか鈴に頭もなでられた。

「うう。なんか最近二人ともいじめておいてそうやって抱っこかなでなでとかするんだあ。」

「だって、本当に可愛くってその表情をみるためにいじめたくなるのよ。」

「そんなことより、お昼にしましょ。映画館の側にすつごく美味しいオムライスのお店があるのよ。秋ちゃんのオムライスも卵フワフワだったけど、ここのはトロトロなのよ。」

「麻美って、外食するといつともオムライスじゃない？」

「そうよ。オムライス大好きなもの。」

「まあいいじゃないの。さ、行きましょ。竜くんも司くんもお腹が空いたって顔してるわよ。」

女の子同士の会話に待たされてしまった竜と司と浩太だったが、麻美のおススメオムライス屋につくと、竜と司は大盛りを頼み、その美味しさに舌鼓を打つ。

「ほんまこれ上手いな。シチューがかかっているオムライスなんて初めてやわ。」

「こっちのあっさりした Dressing 風のも美味しいよ。」

「マジで？ほな丁度半分くらいやし、交換しよや。」

「いいよ。ボクシチューも好きだしね。」

「あら？アーンして食べさせてあげなくていいの？」

「麻美！！そんな恥ずかしいことできるわけないじゃん。」

「ええ？秋と竜は絶対にバカップルになると思ってただけだなあ。」

「バカップルって、仲良しカップルは目指すけど、ところかまわずつてのは・・・」

「大丈夫だよお。秋が慣れてきてえ。竜の天然が出たらバカップルの完成は近いさあ。」

何故か否定できない気がして押し黙る。沈黙は最大の肯定ということか？

「俺らそんな頭悪い風に見られとんのか？」

「竜は知らなくていいの。」

「そうよねえ。今は嫌でも将来いやじゃなくなった時に前にバカッ
プルはしないなんて約束してたら問題だから、しばらくは隠してお
くのよね。」

麻美、天才的に竜に聞こえないようにボクに恥ずかしいことを耳打
ちするのはやめてくれないか？ボクの心臓がもたないし、顔がそ
うちファンデじゃごまかしきれ無くなってしまっ。

「ふふ、既にファンデの上からでも赤いのが分かるわ。」

「はう・・・」

結局麻美の餌食になるボクだった。しかし、その感情が負の感情で
ないのは、何も起こっていないことから分かる。それに、竜に告白
してから、竜からの守護が強くなったのか、前よりもさらに不幸が
減った気がする。

「映画なんて久しぶりだなあ。どうしても暗いところって避けてた
から、レンタルショップで借りてみることも多かったからねえ。」

「せやな。それに、秋のお母さんマメな人やから、テレビで放送さ
れたん録画しといてくれるから、洋画とか秋んち行ったら大概見れ

たしな。」

「一番はジブリじゃないかな？お母さんジブリ好きだからねえ。」

そんな会話をしながら、ボクの横ではおっきなポップコーンを抱えた竜がいる。まだ映画前の予告なのに半分以上食べ終わっている。さつき特大のオムライスを食べたはずなのに、本当に成長期の男の子は良く食べる。

「そういえば、チケットって司と麻美に任せてたんやろ？今から何みるん？」

「入口のところで看板たってたじゃん。007だよ。ボクも初めてみるけど、アクション系らしいよ。」

「へえ。そうなんや。アクションやったら秋もこわがらへんとみられるわな。」

「うん。麻美たちのことだからホラーかもって恐れていたから、安心したよ。」

「あいつらの席って近くっていうてたけど、どこなんやろな？こっからじゃわからへんで？」

「たぶん、向こうはわかってるんじゃないかな？ 竜は体大きいし、司たちの方が後ろの列だったはずだからね。」

「そっか、俺らよりも後ろじゃ確認できひんな。」

「変に後ろ向かないでよ。恥ずかしいからね。」

「あいよ。」

しかし、ボクには司たちがどこに座っているのか分かる。というか、本当に近い。通路をはさんで斜め後ろから麻美と鈴の視線がからみつくように先ほどから感じられる。

「お、暗くなつたな。そろそろはじまるんかな？」

「そうだね。あんまりおしゃべりしていると怒られちゃうね。」

二人は声を落とすと、映画が始まるのをじっと見る。主演の男優がいきなりハードなアクションを展開し、迫力のある映像が映し出される。

「秋、これって・・・」

「そういうことね。だから、カップルが周りに多いんだね。」

アクションシーンが終わると、主演の男優の元に一人のヒロインが現れ、絡み合うシーンが映し出された。司と麻美の策略に乗るのは癪だが、実際竜とは小学校くらいキスもしておらず、余計に意識してしまい、今では手もつなげていない。

「手、握ってもいい？」

「ああ。」

竜は、大きな手でボクの膝の上にある手を握ってくれた。その手をボクはもう一方の手で優しく包み込むと、なんだか、それだけでほっとするような、ドキドキするようなそんな感覚になった。

「あれ以来キスしてないね。」

周りに気を使い、小さな声で竜の耳元でささやく。この時点で周りからはボクが竜にしなだれかかっているように見えるだろう。でも、暗いし、せつかくのチャンスなので、勇気をだしてみた。

「そつだな。やっぱり、付き合いだしたらキスくらいしないと変だよな。」

「もう、緊張しないでよ。ボクまで緊張しちゃうじゃない。」

「お、おう。」

竜は結局映画が終わるまでガチガチに緊張したままで、ボクは自分からキスしたこともないし、勇気も出なかったので、結局竜の手を握るだけに終わってしまった。

「メグ、健全よねえ。まあ私たちもあんまり変わらないから言えないけど、司と麻美だって映画の最中にキスしたわよ。もちろん私もね。」

映画の後、鈴にそう言われてちよっぴりショックを受けた。見られてるのは知っていたが、そこまではつきり分かっていたなんて。

「無理だよお。第一見られてるのが分かっててできないよ。」

「私達がキスしてる間とかメグならチャンスはいくらでもあったで

「しよ？」

「自分からはまだ……」

「もう、本当に可愛いんだから。」

結局鈴に抱きしめられ、鈴から麻美に伝わり、そのあと帰るまでシヨッピングなどをして遊んだのだが、ずっと二人にからかわれ続けた。

「そろそろ帰るか？」

「そうだね。もう暗くなってイルミネーションも一応とはいえ見れだし、あんまり遅く帰ると、明日のパーティがお父さんが怒って中止になっちゃうね。」

そうなのだ。イブに街に遊びにきたボクらは、明日も一緒に遊ぶ約束をしている。というか、ボクの家で今度は和美や真奈美ちゃんたちを呼んでパーティを開くのだ。六人で遊ぶことを竜がポロっと漏らしてしまい、猛抗議を受けて、明日はみんなが集まる約束をしまった。

「じゃあ、僕は電車で帰るから。また、明日な。」

「竜くん。恋人同士とはいえ、あんまり変なこととして秋ちゃんに嫌われないようにね。」

「明日はあ、料理楽しみにしておくねえ。」

「和美に取られないようにしっかり守るのよ。」

それぞれ思い思いのことを言っただけ。ボクと竜は毎度おなじみの自転車だ。行きは武兄ちゃんに送ってきてもらったが、帰りは分らないので、竜が少し遠いけど自転車できてくれて、家まで送ってくれるらしい。

お父さんにはこのことは内緒だけど、お母さんと武兄ちゃんが協力してくれてるので問題ない。お父さんは普通に遊びに行って竜に送ってもらったと思うだろう。

「なあ。こうして、秋を自転車の後ろに乗せれるんって、中学までやるな。」

「そうだね。高校にも吉川先生みたいな人がいたらいいかもしれないけど、難しいだろうね。」

「ヨッシーは見た目はあれだけど、結構ええ先生やな。」

「見た目とか言わないの。男は中身だよ。」

「じゃあ、俺のことも中身を好きになっただん？」

「ううん。全部。一番は中身かもしれないけど、生き方とか、不器用なところとかおつきい手とか、全部ひっくるめて好きだよ。」

ボクって顔見なかったら結構素直に言えるじゃん。竜の背中にしがみつきなから、思っていることを伝えたらなんだかすつきりした。

普段照れて言えなかったことが、クリスマスという特殊な雰囲気と、竜に守られて自転車の荷台で揺れているという中学に入ってから行われている日常の雰囲気融合して、饒舌になってるかもしれない。

「ありがとな。俺も、秋の全部が好きなんやろな。そりゃ見た目は世界三大美女が霞むほどの美人やからそれもあるけど、やっぱり、秋のその心に魅かれた気がするわな。」

どんなに嫌なことがあってもわらっとするその笑顔に、どれだけ俺が助けられたかわからへん。

俺さ。本当は柔道もバスケも途中で投げ出しかけたことあるんで、でもな。そんな時に限って、一緒になって稽古してくれたり、応援にきてくれたりしつつあって。まるで、俺が辛くなっただん気づいて支えてくれてる気がしたんさな。」

「そんな時もあったよ。特に一緒に練習したりする時は、竜がなんか楽しくなさそうにしてる時が多いかな。でもね、ボクが何かする必要なってなかったよ。」

一緒に練習しだすと、竜はすぐにのめり込みだして、ボクのことなんてほったらかしで反復練習することの方が多いんだから。」

「あはは、熱くなると周りみれへんくなるんは俺の癖やな。でも、秋が側におってくれるから、そんだけ、一生懸命なれるんやで。ずっと、側におってくれたら、一生俺は頑張れる気がする。」

「もう、それってプロポーズ？」

冗談めかして尋ねると、竜は自転車にブレーキをかけ、人通りの少ない、街灯の明かりしかない場所で自転車を止めた。寂れた街頭には、海良の という落書きが書かれている。

「今は、こんな安いのしか用意したれへんけど、きちんと名前と誕生日を入れてもらったんや。もらってくれへんかな？」

そう言って、竜は荷台から下りたボクに小さな箱を差し出してきた。

a k i 9 ・ 2 3 r y u 1 0 ・ 2 1

と彫ってあるシンプルな指輪が入っていた。

「ボクの指のサイズいつ調べたの？」

「この前、学園祭でいろんなアクセサリ作ってたやろ？あん時調べたのを浩太にこっそり教えてもらった。」

「そんなところで抜け目ないんだから。」

「嫌か？」

「ううん。」

ボクが箱を手にとると、竜は箱から、指輪を取り出して、ボクの右の薬指にはめた。

「左はきちんとしたのにとっとくからな。」

「うん。竜、ありがとう。」

「おう。絶対に幸せにしたるからな。」

「うん。もう一つお願いしていい？」

「なんや？」

「キスして？今の幸せな気持ちを竜に抱きしめられて、キスされて感じてたいの。」

竜は、ゆっくりと、抱きしめると、前の時とは違い、身長に差ができてしまったので、かがみこむようにしてボクの唇に自分のものを重ねた。

ボクも竜の体にしがみつくようにして竜の体温を感じていた。

「そろそろ、帰ろっか。」

「せやな。さむなってきたしはよ家に帰るか。」

ボクは、さつきまでと同じように竜の背中にしがみついていた。お腹まで回した手には、小さなシルバーリングが時々光を反射して光っていた。

チャプター37（後書き）

すみません。はしゃぎ過ぎてしまいました。

今回のテーマは、二人の思い出です。

どんな風にクリスマスをすごせば、二人にとって大切な思い出ができるのかを考えて、映画館・ボーリング場・寂れた街灯などを出してきて、指輪がキラリと光って、中学生時代の象徴である自転車の荷台のシーンを最後にもってきました。

ああああ、AKIもあんな素敵な恋がしたいです。

それでは、みなさんまた次話でお会いしましょう。

ここまで読んでいただきました本当にありがとうございます。

チャプター38 (前書き)

最終話ではありません。

卒業の証

今日は中学校の卒業式。

長かったような、短かったような中学校生活だった。ボク海良中学卒業できて良かったよ。

結局中学校での臨死体験は二年生の時の一回と三年生の受験でピリピリしている時に一回。

終わったあと、一回の三回だけだった。ボクの人生の中で臨死体験はこれで五回だけど、小学校六年間で二回だったのに比べて少し周りが早くなっている。

「ボクこのまま中学生でずっといたいな。」

「せやな。色々あったけど、楽しい中学生生活やったしな。」

「秋の場合はあ。誰かさんのおかげで苦労してたけどねえ。」

「そうよ。もつとしっかり守ってあげなきゃ私が秋ちゃん取っちゃ
うわよ。」

いつもの四人で中学校に向かっている。この風景も今後ないんだよ
ね。ボクは高校からは自分で自転車を漕いで通学する。

受験では特例的に個室受験をさせてもらえたのだが、やっぱり高校
生になると法律の拘束まで学校側が責任が取れないとのことで合格
後の学校側との交渉は、あまり良いものではない。

「竜もお。ずっとこうして自転車で秋のこと守ってあげたいんだよ
ねえ。」

「そりゃな。俺も秋の側におれへんのは辛いつていうか、さみしい
つていうか。」

「ホント素直な性格してるわよね。その調子でガンガン秋ちゃんに
アタックしてくれたら私たちは困らないのに。」

「竜う。後ろで秋がトマトになってるよお。」

「うるさい!!ボクは野菜なんかじゃない。」

「でもお。臨死体験ごとに強くなるなんてえ、本当に野菜星人みたいじゃないかあ。」

「せやな。おかげで俺らはもう、秋に勝てるのがみつからんやん。」

「身長とかなんだってあるじゃんか。ボクは異星人じゃない。」

「身長つて、それは確かにせやけどさ。彼氏をもうちよつとたてて欲しいんやけど。」

「あら？秋ちゃんはきちんと竜くんことは立ててると思うわよ。けなげな子なのよ。」

「違うもん。ボクは竜のことをお札代わりにしてるだけなんだから……」

「はいはい。付き合いだしてから私に相談した電話の時間をみんなに教えてあげたいわ。今日で中学生も最後だし内容をみんなに話してもいいんじゃないかしら？」

「だめえ〜!!」

麻美にはたくさん相談に乗ってもらった。というか、竜以外のみんなには竜とどうやって接していけばいいのか、何度も教えてもらった。

まあ、その度にからかわれていたような気がするけど、おかげでずいぶん意識せずに接することができるようになった気がする。最初のうちは恥ずかし過ぎて二人で帰ることもできなかったのだが、受験が近づいて周りの意識がピリピリしてくると、どうしてもボク不幸体質が発動しだし、結局竜と帰らないことができなくなった。

「可愛いんだから。竜くんも聞きたいわよね？」

「そりゃ、秋のことは何でも知りたいとは思っけど、嫌がってるのをわざわざ聞くのもへんやし、それに秋本人から聞きたいやん？」

「馬鹿。」

言葉の意味とは裏腹に、弱弱しい声はみんなの耳に届くと風の中に消えて行ってしまった。

「秋ちゃんの馬鹿は、愛してるに聞こえるわ。」

「そ、そんなんじゃないもん。竜が変なこと言うから・・・」

「秋があ、竜の荷台で真っ赤になってるのを見るのもお。今日で最後なんだねえ。」

「中学生としては最後まで、また時間を作って集まればいいわよ。高校からは、みんなケータイ持つんでしょ？今よりもっと、連絡取り易くなるかもしれないわ。」

「そうだねえ。ボクも早く買ってえ、連絡先教えるねえ。」

ボクらはみんな高校に入学と同時にケータイの所持を親から認められた。まだ司は買いに行っていないが、司にはすでにボクらの連絡先を教えるので買ったらずくにメールや電話をするようになってる。

「一番に電話するのは麻美でしょ？次はボク？竜？」

「ここはあ、あえて誰にもかけないよお。麻美に転送してもらおう。」

「横着な。でも、司らしいといえばそうかもね。麻美、変なアドレ

「スとかにしないように監視しててよね。」

「竜くんみたいに？」

「はうあ・・・」

竜のアドレスは司が考えた。というか、心友たちが集まって考えたらしい。酷い、というか恥ずかし過ぎる。

「アドレス変更したら、秋の唇を和美に奪わせる。やなんて変な条件無かったら今すぐかえるっちゅうの。」

「ええ？僕らがあ、二人の幸せを祈ってえ、一生懸命考えたんだよお？」

「せやからって、愛の奴隷はないんちゃうか？」

竜のアドレスは、竜の誕生日を使って 10・21・ainodo rei・memorial・day@ となっている。つまり、愛の奴隷記念日だ。

「ボクは貴族でもなんでもないんだから、奴隷なんて取らないよ。」

「うふふ、竜くんは骨の髄まで秋ちゃんに惚れているんだから、そんなこと言わないの。」

「そ、それは・・・」

結局中学校最後の日までボクは麻美と司にからかわれて学校に登校した。中学三年生になって六人は同じクラスになったので、このまま四人で学校に向かい、クラスに入っていく。

「おはよう。」

「メグー！私から離れちゃダメよ。」

「和美ちゃん。落ち着くんだ。君は高校も丁高でメグちゃんと一緒に通うことができるんだから、今そんなことをする必要はない。」

「秋、おはよう。浩太、鈴。そこをどいてくれないかな？私だって無理やりなんてするつもりはないわ。秋。お願いがあるの、帰る前に一人で体育館裏に来てほしいんだ。心友であつてもこの時は一人で来てほしいの。」

「うん。和美ちゃんが鞆の中身を持つてこないなら私たちはいいわよ。」

「ええ？麻美ちゃん。それは言わない約束じゃないの？」

「鈴と浩太の様子から想像しただけなんだけど、何を持ってきたのよ？」

「えへへ。スタンガン」

「あのね。スタンガンなんて当てないと意味がない武器じゃボクに警戒されて終わりよ。」

「でもお。それくらいしか思いつかなかったのよ。秋い。私と中学校最後の思い出を作りましょ。」

和美は、あきらめると言った言葉とは裏腹にこうしてボクを何度も誘ってくる。毎回邪魔が入り失敗しているので問題ないが、一度なんて、夜寝ている時に襲われかけ、なぜか鼻血を垂らしてしまい、ボクが一瞬早く気付かなければ、キスされかけたことがある。

「キスだけでいいから？ね？」

「ボクは一回二年の時に和美にキスされてるんだけど・・・」

「あの一回の思い出があまりにも希薄になる前にもう一度確かめたいの。」

「はいはい。生徒が集まって来る前に和美は自分の教室に戻ろうね。」

そういえば、和美は違うクラスになった。というのも、和美と仲良くなる前に吉川先生に六人を集めるように依頼していたことによつて和美は運に任せるしかなかったのだが、問題があるとはいえ、ボクら六人は成績などはかなり良い。

そんな子を六人も集めると、和美のようにクラス委員をやるくらいリーダーシップのある先生受けのする子は別のクラスに欲しいとなつてしまったのだ。

「秋、帰りにみんなで写真とるから、その時までには答えを出しておいてね。」

和美はそう言つて、自分の教室に向かつて行つた。多少声をあげていたとはいえ、卒業式前の雰囲気があるので、周りも怪しみはしても、和美の性癖までは気付かなかつただろう。

仲の良い七人で式後の約束をしている程度に聞こえたに違いない。

「秋。少しくらいなら和美ちゃんのこと聞いたつてもかまへんに。」

「竜はそれでいいの?」

「良くはないけど、やっぱり秋のことを大切にしてくれてる仲間やからな。」

「うん。じゃあ、帰りに抱きしめてあげるくらいはしてあげようかな。」

「そうしたり、秋だってそうしてあげたかったんやろ？」

「うん。竜には申し訳ないけど、心友のお願いだからね。でも、恋愛感情とかじゃないから勘違いしないでね。」

「分かってるわよ。メグは竜くん一筋だもんね。」

「メグちゃん。僕らが周りにいるのに気付いてるかい？」

「鈴おはよう。もちろん鈴のことは気付いてたわよ。」

「なんで僕は……」

「冗談だって。浩太も高校は違うところになっちゃったけど僕の心友だよ。」

「冗談でごまかそうとしても、二人の世界に入ってたのは私にはバレてるわよ？」

「はう……」

結局心友メンバーってなんだろう。すつごく大切にしてくれてボクだつてその気持ちはかわらないんだけど、隙あらばボクのことをいじめようとしてる気がする。

「麻美と鈴は本当に仲良くなつちやつたな。僕が言うのも変だけど、メグちゃん相手にある意味協定が結ばれてるからね。」

浩太の言葉にただならぬオーラを感じつつも、その答えを聞くのは怖すぎて、ボクはみんなの会話に入っていくのだった。みんな、ボクの話から三年間の思い出話になり、鈴は思い出したのか少し目に涙を浮かべた。

「一番の思い出は修学旅行のホテルじゃない？」

「そうよね。竜くんには悪かったけど、私たちの部屋はメグを独占できたし、かなり楽しかったわ。」

「あら、結局先生に見つからないようにロビーで合流しようって話になったじゃないの。」

「そうそう。メグが”竜に会いたい”ってあんまりにもこねるか。」

「ボクそんなこと言ってないよ。麻美や鈴こそ彼氏と一緒にいたかったんじゃないの？」

「私たちは、秋ちゃんと一緒に幸せだったわよ。朝までいっぱいお話できたしね。」

「それぞれの彼氏相手じゃできないような話ばかりだったけどね。」

「それを俺らに言ったらあかんのとちゃうんか？」

「竜う。そこは察してあげないとお。あえてそれを言うことによつてえ、ほらあ、秋がこうなるんだよお。」

司、あとで覚えておいてね。真っ赤になって俯いたボクの顔を竜の方に向けられた。羞恥心で死ねるならボクの臨死体験の数は今の何十倍に跳ね上がっているだろう。

「千倍は超えるとおもうよお。」

なんであんたはボクが思っていることがわかるんだ。中学校というか、

司と出会ってから一生かけても分からない謎がここにできてしまったかもしれない。高校は別だから麻美に調べておいてもらおうかな？

「麻美はわかるよねえ？」

「ええ、そこまではつきり分からなくても、秋ちゃんって顔に出やすいから。まあ、あること限定ではあるけどね。何でもかんでも顔に出ちゃつ素直な子よりはましよ。」

「それって、俺のことか？」

「竜にしては鋭いねえ。で、どっちについてえ？」

「え？司が顔に出やすいっていつたんやる？どっちって？」

竜は相変わらずの鈍感さだ。昔注意されたことを覚えることはできているのだが、何でさっきの言葉の意味がわからないんだろう。

ボクの反応が素直になるのは全部あんなことだけなんだから。それ以外のことはそつなく隠すことだってできるもん。

「はいはい。分かってくれないみたいなお顔しないの。そんな竜くんに惚れたメグがわるいんだから。」

ボクの周囲の人間はプライベートを守ってくれない人ばかりなのかな？鈴に耳打ちされて今日何度目かの撃沈をしてしまった。

「ああ、結局司には勝てなかったわね。秋ちゃんの撃沈回数。」

「一番低かったのは浩太で、私と麻美が司くんの次かな？司くんの場合私たちよりも効果的にきめるものね。」

「その分、反撃もおおいけどね。あ、でも天然で落とした回数があるから竜くんもひょっとしたら多いかもしれないわね。」

「カウントし忘れていたことに気づいたときから数えても司に迫ってるぞ。竜が一番だったかもしれないな。」

「ねね？何の話をしてるのかしら？というか、内容はわかってるんだけどね。」

久しぶりに修羅となったボクになぜか鈴は抱きついてきた。

「メグが可愛いからいけないのよ。今日は中学校最後だし、思う存分可愛がっちゃおうの。」

「う……ボクがそんなことで許すと思うの？」

「秋ちゃん。中学卒業しても心友でいようね。」

この二人にはかなわん。怒りの矛先を収めるふりをしてとりあえず、司の足を踏んでおいた。

「最近の秋はあ、フエイントを覚えたんだねえ。」

涙目でボクのことを睨んでくるが、そこは麻美という防波堤があるので何にも怖くない。麻美は麻美で、司さえ犠牲になれば問題ないとばかりに自分の彼氏を差し出して怒りが収まったボクの頭を撫で撫でしてる。

「お前ら席に着け！」

吉川先生がチャイムの前に入ってきた。普段着なれていないスーツ姿に身を包み、清潔感ある服装を目指しているようだ。

「ヨッシー。今日はカッコ良いよ。」

「ヨッシーが先生に見えてきたやん。」

「ヨッシ〜。ネクタイまがつてつるよお。」

「司、教えちゃダメじゃないの。保護者の前でこっそり教えなくっちゃ。」

「ヨッシー。メグちゃんからご褒美の投げキッスがあるってさ。」

「先生。今までありがとね。CHU」

「ああ、ありがとつな。ってかさつさと座らんかい。お前らは、この一年どれだけ苦労したとおもつとるか。」

「ん〜？金銭的には潤ったんじゃないのお？体育祭の時もお。もうかつたじゃんかあ。」

「な、なんでそのことを！？」

「先生、ボクの純情返してください。」

「秋にまで……。全く本当にお前らは卒業するまで俺のことを楽しませてくれるんだな。」

「緊張とれた？ヨッシーが緊張してるのなんて、似合わないわよ。」

「鈴の言う通りね。私もヨッシーには笑顔で送り出してほしいから。」

「鈴・麻美。」

「せやな。というわけで、このクラスは同窓会は毎回ヨッシーのおごりで開かれることになったから、やったやん。」

「ええ？竜。それはちょっと……。」

「冗談ですよ。みんな千円ずつくらいカンパしてもらったら十分ですから。」

「浩太、三万から四万飛ぶことになるんだぞ？」

「全員参加できるうちだけです。そのうち参加できなくなる人」

もいますし、年に一回くらいいいじゃないですか。」

「まあ、そういうことなら。」

吉川先生、そこで呑まれちゃいけないよ。完全に司たちのペースで進んだね。ヨッシーは今後なにかあるたびにボクらにおごらされることが決まったようなものだな。

「秋からも、何かお願いしてあげてよ。」

鈴に言われて、最後だし少し大胆なお願いをしてみることにした。

「先生。ボクの結婚式の時はスピーチに来てくださいね。その時は二年の時に貸したお金が10倍になって帰ってくるのを期待します。」

ちなみに、バスケット部の春の大会の応援に行った時に一万円貸したので10万円にもなる。

「任せておけ、十倍どころか、100倍にして返してやる。」

【任せておけ、十倍どころか、100倍にして返してやる。】

「え？」

吉川先生が音の方向を向くと、浩太がボイスレコーダーを手にこやかに笑っていた。

「ヨッシー、メグがいつ結婚するかわからないんだからしっかり貯金するのよ。」

「無理やる？ヨッシーって俺らに頼まれてパーティー開いたりしまくるからお金なくなってるんやない？」

「その分儲てるんだよお。毎回行事の度に秋を利用してお財布をふとらせているんだからあ。」

「ああ、もうわかった。スピーチは任せとけ、その代り、秋一人に100万なんてだめだから、100万はクラス全員結婚すると考えて、三万ずつでどうだ？」

「5万は必要でしょ。」

「わかった。5万で手を打とう。」

「ヨッシー大好き」

三年になって心友六人を集めることで、思っていた以上にボクの不幸は起きなかったが、代わりにこんなやりとりが一年間続いた。この前も街であった時は、車で家まで送ってくれるように司とか鈴が頼んでいた気がする。

「吉川先生。本当にありがとうございます。」

「まあ、乗せられてご祝儀が高くなっちゃったが、お前らが成長した姿が見れるのは楽しみだからな。それはクラスの全員だ。街であったり、どこかですれ違った時は声をかけてくれよ。」

「先生。そろそろ式始りますよ?」

「何?俺は式の前にお前らにこれからの話・・・あれ?したのか?」

「ヨッシー。卒業してもお別れじゃくて、元がついても先生の生徒だよ。」

浩太に締めくくられた。ヨッシーは言いたかったことをうまいこと引き出されつつも自分たちの願望までかなえられてしまい、ちょっと複雑な気持ちのまま、体育館へと移動しだした。

卒業証書を渡され、送辞・答辞が終わると、ボクたちの中で泣いていない者は数名しかいなかった。

70名ほどしかいないので、ひとりずつ丁寧に卒業証書を渡され、お世話になった先生たちにお辞儀をすることができたのは海良中学の良いところだと思う。田舎の学校だからこそできること、そんなものがこの中学には存在した。

それに、今までボクらは地元という安全な場所で勉強することがで

きたが、高校からは、最低でも隣町まで出て、社会に進出していかなければならない。

「なんもあらへん場所やけど、海良でよかったと思うわな。」

「そうだね。竜は小学校からこっちに来たけど、良かったと思える？」

「当然やろ。良いとこやし、それに秋と出会えたしな。」

「竜う。天然で口説かないであげなよお。」

「口説くってなんやねん。俺は司とも出会えてよかったとおもてるで？もちろん心友になれたみんな、それだけやなくて今までお世話になった人ら全員に感謝しとる。」

「そうだね。ボクも色々あったけど、やっぱり海良でよかったと思うよ。」

式後教室で担任の吉川先生がもう一度教室に来るまでの間、ボクらはまた中学校の思い出を話し合った。式が一段落してやっと収まりかけた涙がボクの瞳を濡らします。

ガラガラ

「最後のあいさつだ。みんな笑顔でしてくれ。」

吉川先生の言葉とは裏腹に、泣きだして止まらない子、無理やり笑顔を作ろうとして失敗する子もたくさんいたが、ボクたちはクラス委員の子の声で深々と頭を下げた。

「先生からの最後のメッセージをみんなに伝える。よばれたら立ちあがって、返事をしてくれ、先生からの話のあと、一言ずつみんなにも何か話してもらおうぞ。」

名簿順に先生はメッセージを送る。上田竜・蟹津秋・蟹津司・木村浩太とボクらは結構早めの順番なので、先生からもらったメッセージと自分たちの今の気持ちを素直に話すことで順番がゆっくりだが消化されていく。

「佐藤鈴。」

「バイ。」

鈴はすでに大泣きしており、嗚咽をかみしめながらも一言一言丁寧

に吉川先生やクラスのみんなと一緒にお礼を言った。

鈴の涙にボクからも釣られクラス中が泣きじゃくり、一旦止まってしまったが、それを面倒だと思う者はクラスの中にはいなかった。むしろ、鈴の気持ち痛いほどわかり、みんなで鈴を励ましていた。

「私、卒業したくないよ。みんなど、はだれたくないよ。」

鈴・・・本当にボクだって離れたいなんて思わないよ。鈴がいてくれてすっごく楽しかったもん。ずっとこのまま中学生でいられたらボクだってそう思うよ。

「鈴、僕たちは、卒業したって心友だよ。そんなに悲しまないでくれ。」

浩太の慰めも鈴の涙を増やすだけになってしまった。

しばらく、純番に進んで、次は麻美の番になった。

「藤田麻美。」

「はい。」

麻美は、眼に涙を浮かべながらもしつかりと返事をした。やっぱり麻美は強いな。ボクなんて泣きながらで何もできなかったのに、しつかりと吉川先生の話の話を聞いている。

「私、このクラスで卒業できるのがうれしいわ。どれだけ辛いことがあっても、支えてくれた仲間がいたもの。」

確かに鈴が言ったみたいに、今のままでずっといられたらそれも幸せだとおもう。だけど、私たちはこれから自分たちの足で歩いていくの。

そんな時、このクラスで支えあつた仲間が、何度だつて助けしてくれると思うし、私だつて助けたいと思うわ。だから、卒業できるわ。お別れじゃなくて、みんなとの思い出が本当に素敵なものであるって証明するために、私もつとつと頑張れると思うの。

みんな、ありがとう。そしてこれからもよろしくね。みんな大好きよ。

┌

麻美。ボクも大好きだよ。麻美がいてくれて、三年生になってからすごく楽しかった。高校になって学校は違うけど、麻美とボクは心友だよ。

在校生の拍手とアーチの見送りをもらって、ボクたちは校門のところに着いた。みんな思い思いに仲の良い友達と一緒に写真を撮ったり、卒業アルバムにメッセージを書き込んでもらったりしている。

ボクも何人もの人と一緒に写真を撮ったし、メッセージも書いた。当然心友の六人とはたくさん書いたし、卒業アルバムの最後のページには七人とも心友の欄がある。

「秋い、みんなの注意をそらしておいてあげるからあ。竜のボタンもらっておいでよあ。」

司は第二ボタンどころかすべてのボタンがなくなった状態になっていた。麻美の方を見ると、一つボタンをこちらに見せ、ウインクを

している。

司はきちんと第二ボタンだけは麻美に渡したのだろう。浩太も、真奈美ちゃんたちにボタンを渡していた。こちらも第二ボタンはやっぱり鈴がもらったのだろう。

「竜。お願いがあるんだけど。」

みんなの視線を感じながらも竜に近付き、こっそりと耳打ちをする。

「ん？なんや？」

竜の制服を見ると、第二ボタンを除くすべてのボタンが既になくなっていった。

「ボタン、もう一個しかないんだ。」

「ああ、そういうことか。ちゃんと秋のためにこれ残しといたんやで。」

そう言って竜は第二ボタンを引きちぎると、ボクに渡してくれた。鈍感ですぐに顔に出る性格だけど、こっやってボクのことを気遣っ

てくれていることがちよっぴり嬉しい。

「ありがと。大切にするね。」

「おう。まあ、これからも一緒におるんやけどな。」

「いいの。思い出は大事なものなんだから。」

そう。たとえたった一つのボタンでも、ボクにとって最高の思い出として残るなら、それはどんな宝石よりも大切なものだ。

「秋。私にあなたの第二ボタンを頂戴。」

「か、和美！！ボクはセーラー服なんだからボタンなんてないよ。」

「じゃあ、その唇でもいいわ。」

和美が乱入してきたが、ボタンをもらったあと、やっぱり恥ずかしくて何も言えなかったボクは雰囲気を変えてくれた和美に心の中でだけお礼を言っただけ抱きしめた。

「もう、こうして抱きしめてあげるからこれで勘弁してね。」

「うん。許してあげるう。」

さっきまでの雰囲気がちよっともったいないような気もしたが、和
美の後結局心友たちが集まってきて、七人で笑いながら過ごした最
後の中学生としての時はとっても素敵な思い出になった。

「竜。これからはこうして自転車の後ろに乗ることはできないね。」

「せやな。バイクの免許でもとつたらちやうかもしれへんけど、高
校は免許取れへんしな。」

「車の免許取るまでは我慢するよ。」

「まあ、学校と関係ないところでは、たまにこつして乗せたるから。」

「うん。」

ボクは帰りの自転車の荷台で、竜の背中に掛りながら、自分が中学生を卒業してしまったことに寂しい気持ちを隠しきれずに、少し泣いた。そして、竜の背中の温かさに、これから頑張る元気をもらった。

チャプター38（後書き）

鈴と麻美が反則でした。最初の方の楽しい雰囲気から一気に感動のシーンにもっていき、最後はちょっと泣き笑いしてもらいました。

今回のテーマは、余分なものを入れない

楽しい雰囲気とそこから一気に泣かせる仕掛け、本当に幸せな空気をすべて詰め込んだつもりです。短くても濃い内容で、できれば幸せな涙を流してもらえたら嬉しいです。

泣いた人は報告してくださいね。（AKIはいつもと一緒にです。）

これにて中学生編は最後となりましたが、次回高校編に続きますので、完結したと勘違いなさらないでくださいね。

それでは中学生編最終話読んでいただきまして本当にありがとうございました。

チャプター39 (前書き)

ついに始動 高校生編の最初です。

もったいぶって一日開けようか悩んだのですが、今まで散々お待ちた
せしたのに渋るのも申し訳ないとおいことで、投稿しちゃいました。

チャプター39

ツンデレクイーン誕生

ボクが高校に入学してから約二か月がたった。中学生の時と違い、大きな学校にたくさん生徒が学校に来ているため、ボクと竜は同じクラスになることができなかった。

和美は同じクラスになってくれたので、そこまで大きな不幸は起こっていないが、それでも不幸の数は倍増し、入学してまだ二月しかたっていないのに、臨死体験をしてしまった。

その時は屋上から物が落ちてきて、高校で初めて知り合った友人をかばって死にかけ、竜が駆けつけてくれてすぐに意識を取り戻した。しかし、ボクは中学までと違い竜が近くにいない状況が続く中、友人との距離を開けざるを得なくなってしまうていた。

「だからさ。秋ちゃんは心配し過ぎなのよ。クラスの友達と仲良くなれば、自然と不幸も減るんだから、そんな突っぱねないで、仲良くしなさいよ。」

「でも、仲良くなる前に事故でクラスのみんなが怪我したら大変じゃないか。」

「その時は、この前みたいに助けたらいいでしょ？その初めて話した子っていうのは今は仲良くしてるの？」

「えっと・・・」

「お礼を言われて向こうから仲良くなるうとしてきたのを酷いことでも言っつて突っぱねたのね？」

「ごめんなさい。」

「ダメってわかってるんだったら謝らないできちんと仲良くなりなさいよ。」

「でも、ボクに近付かなければ、危険もないわけだし。」

「秋ちゃんは危険いっぱいじゃないの。そんな消極的なこと言わないでクラス全員の前で笑顔で仲良くしてね。なんて言えばいいじゃないの。」

「ええ？そんな恥ずかしいことできないよ。」

「全く。そんなだから鈴や司にツンデレクイーンだなんて言われるのよ。」

「ボクはツンデレじゃないもん。ちょっと恥ずかしがり屋なだけだもん。」

「そういうのも一種のツンデレよ。とにかく、クラス内だけでも仲良くするのよ。そうしなかつたら高校に通うのも難しくなるんだから。」

「はあい。」

こここのところ何度も麻美や鈴たちに叱られっぱなしだ。中学までは司や竜が側にいたので何も怖くなかったのだが、竜はクラスが違いうし司においては学校すら違うので、初めて自分一人で友達を作らなくてはならなかった。

「まあ、最初はバスケット部の人たちの側にいて上手く交友関係増やすしかないわね。」

「うん。クラスにもバスケット部の人がいるから、その人たちと仲良く

「してみるよ。」

ボクは中学の時に約束した、バスケット部のマネージャーになった。竜と一緒にいられるし、行き帰りを一緒にできる良い口実となっていて、実際マネージャーになってよかった。

「あんまり、仲良くし過ぎないのよ。愛しのナイト様が嫉妬しちゃうわ。」

「はう・・・」

電話越しに話しててさえ、麻美にいじめられてしまう。とはいっても、麻美なりに元気づけようとしたのだろう。中学時代のような会話にボクが安心していても分かってるんだろう。

「じゃあ、明日も朝練で早いから、またね。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

麻美との電話を切ると、竜からメールが来ていた。

【明日のお弁当は、中華。】

もうちょっと顔文字とか絵文字とか入れられないのかな？

まあ、竜が凝ったメールをしたらそれも笑ってしまうかもしれない。竜は朝練もあるのでお弁当を二つ食べる。そのため、ボクが一つ竜のためにお弁当を作っていくのだ。

「中華か、じゃあ、ご飯はチャーハンにして、おかずには、春巻きと餃子とかにしようかな。野菜たっぷり餃子を久しぶりに作ってあげよっかな。」

朝早く起きて家族全員分の朝食とお弁当を作るようになったのだが、みんな美味しいって食べてくれるので、あまり苦ではない。武兄ちゃんは大学四年生になっているので、お弁当はボクとお父さんと竜の三つだけだね。

「お母さん。明日は中華にするから、冷蔵庫の中身確認するね。」

「どうぞ。最近夜しか私作って無いから、とつても助かってるわ。」

「部活で遅くなつて、夜は作れないからごめんね。」

「なに言ってるのよ。まだ学生なんだからお母さんにもっと甘えなさい。」

「えへへ。了解しました。」

「高校はどう？友達は増えた？」

「うん。みんな良い人たちだよ。この前事故で助けた子なんてお礼を言つてプレゼントまでくれたんだ。」

そう言つて、ケータイのストラップを見せる。実際その子からもらった物だが、一度ゴミ箱に捨てたものを放課後みんなが見ていない時にこっそり拾つた。学校ではケータイを出さないようにして突っぱねたことにしている。

「そうなんだ。でも、あんまりそんな理由で友達を増やさないで欲しいわ。竜くんがいてくるとは言え、お母さん心配なもの。」

「了解しました。まあ、ボク一人なら空から何か降ってくるくらい平気で避けちゃうから安心してよ。」

「女の子がそう言うのも、どうかと思うけど、安全ならそれでいいわ。」

お母さんには微妙に嘘をついたことになるかもしれないが、こうでも言ってお心安心させてあげないと、高校なんか行かなくていいから、となってしまうそうで怖かった。

実際お父さんは女の子なんだから、学校なんて行かなくても良いと言っている。自分は結構良い大学を出ているのだが、古風な考えで女は家庭を守るなんて思っているのかもしれない。

「おはよじさん。」

「おはよう。お弁当餃子とかだけどいい?」

「あのキャベツいっぱい入っとるやつ?」

「うん。竜っていつも肉食だから、野菜弁当にしたんだけど良いかな?」

「ええよ。あれは俺も好きやし、ってか秋の作った弁当はいつもうまいしな。」

竜ってそれがすっごいボクにとって嬉しいってわかって言ってるのかな? わかってないんだろ? うな。

竜は天然でボクの嬉しい言葉を知っている感じがする。そんな風に言われたら、どれだけ眠たくっても、一生懸命お弁当を作っちゃうじゃないか。

「どうしたんや?」

「ううん。何でもない。それより自転車だって、朝練の一種なんだし、もっと頑張って漕ぎなさいよ。」

「無茶いうなや。スピード出すんはかまへんけど、あんまり無茶したら中学ん時とちやって荷台に乗ってへんのやから危険やろが。」

「あらら。そう言えばそうだったね。じゃあ、ゆっくり漕いでね。」

「調子のええやつちな。」

「いいの。」

今は朝と帰りの時が一番楽しいかもしれない。竜に構ってもらえずし、竜と一緒になら危険なことが起こる確率が減るので安心していられる。

「おはよう。秋ちゃん!」

「いつも、がんばるね。」

「おはようございます。先輩たちも朝練がんばってください。」

体育館に到着した。入学当初はあまり朝練に参加する人はいなかったのだが、なぜか最近ほぼ全員の人に参加するようになった。そんな人たちの練習を観察しながら、マネージャーノートを書きこんだり、夕方の準備をしたりしておく。

「秋ちゃん。週末練習休みらしんだけど、みんなでどこかに行かない？」

「ええ？ボク週末実は予定が入ってて。ごめんなさい。」

「上田がそんな距離から、シュート外すなんて珍しいな。」

「すみません。ちょっとまだ寝ぼけとるみたいです。」

馬鹿竜。相変わらずバレバレだ。先輩も竜とボクがデートに行くことを知っていてボクに話しかけたのかもしれない。

バスケットには二人の関係は、帰りや行きの様子が目撃されており、

この二か月で竜の正直な性格もあってバれてしまった。それでも、高校生だからか、周りは認めてくれて、案外良好な関係が続いている。

まあ、入ってすぐは先輩から地獄のようなシゴキを竜が受けていたが、二か月もたつと、雰囲気や和らいできた。

「竜には、もつたないよな。秋ちゃんこんなに可愛くていい子なのになあ。」

「先輩。ボクはそんなにいい子じゃありませんよ。クラスでも……」

「ああ、そうだったな。坂本。ちょっと練習しなくていいからこつち来い。」

「先輩。練習ちゃんとしてくださいよ。」

「俺は良いんだよ。どうせレギュラーじゃねえんだしな。」

「じゃあ、何で朝練来てるんですか？」

「当然、秋ちゃんを見るためでしょ。仲良くして、上田と別れたら俺と付き合ってくれよ。」

「竜と別れたらですね。じゃあ、竜にそう言っておきますね。」

「秋ちゃんから、上田を振って、俺の彼女になってくれてもいいんだぜ。」

こんな会話をしていると、竜のシユート練習ははかどらないらしい。さっきからはずしてばかりだ。

「ボクは今は、竜を振る気はありませんよ。浮気でもされたら考えておきます。」

「だってさあ。上田。浮気しろ。」

「簡便してくださいよ。」

そんな会話を先輩としていると、呼ばれて放置されていた坂本君が会話に入ってきた。

「あの、先輩。俺なんで呼ばれたんすか？」

「ああ、お前秋ちゃんと同じクラスだろ？なんでこんなに可愛くて性格いいのに友達すくないんだ？」

「えっと、クラスでは性格違いますよ。この前も助けてくれたお礼につてストラップを渡した子がいるんですけど、ゴミ箱に捨てて、突っぱねたっす。」

「これです。そのストラップ。」

「ええ？蟹津さんなんでそれ持ってるんですか？」

「うん。秘密です。詳しくは、本当に仲が良くなれたら話します。」

「えっと、坂本。状況が良く分からんから、俺に説明しろ。」

「俺もよくわかりません。ただ、何となく感じたのは、ツンデレ？」

「ボクはツンデレじゃない。ちょっと照れ屋なだけだもん。」

「「ツンデレだ。」」

「なんで、みんなボクをツンデレって言うんですか。昨日友達にもツンデレクイーンって言われました。」

「坂本、クラスで秋ちゃんを呼ぶ時は、ツンデレクイーンって呼べ。そうすればすぐにクラスのみんな仲良くなれる気がする。」

「「ええ!?!」」

坂本君とシンクロしてしまった。

「坂本君。そんな恥ずかしい呼び方しないよね?」

瞳をウルウルさせてお願いしてみる。この上目使いは、今のところ、負けなしである。

「先輩、俺には無理です。」

「すまなかった。秋ちゃんがそんなに嫌なら別の手を考えよう。」

とりあえず、あんまりにも不名誉な呼び名をされることは避けられ
たが、先輩も坂本君もボクのことを思って言ってくれているのに、
自分のわがままで意見を却下したことに罪悪感を覚える。

それでも、麻美が言ったように、教室の前で仲良くして欲しいのな
んて言えるわけもなく。とにかく恥ずかしいこの状況をどうにか脱
出しなくては、クラスの平和は訪れないかもしれない。

「ところで、このことは上田は知ってるのか？」

「内緒です。というか、心配かけたくなくて。」

「そんなこと言っても、学園一の天才で、美少女が冷血女だつても
つばらの噂だぞ？そのうちバレるんじゃないか？」

「それでも、今は内緒にしたいんです。それに、和美がいるんで、
クラスでまるつきり一人ぼっちってわけでもありませんから。」

「和美ちゃんねえ。まあ秋ちゃんがそう言うなら俺も内緒にしてお
くけど、坂本もこのことは上田には内緒にしろよ。」

「了解つす。」

そう、竜には内緒にしている。噂などに鈍感な竜はボクがクラスでハブにされていることは知らない。和美がいるから大丈夫だと言っ
てごまかしているのだ。

「まあ、バスケ部の時の秋ちゃんをクラスでもやれば、きっとみんなもすぐに秋ちゃんと仲良くなってくれるさ。」

そう言っつて先輩は慰めてくれ、そろそろ朝練の時間も終わりなので、坂本君と一緒に片づけを始めた。

「秋、先輩たちと何話してたんだ？」

「口説かれてた。竜と別れたら付き合ってくれって。」

「別れねえつの。」

「竜が浮気しなかったらね。」

こうして、今日も竜にはぐらかしてクリスに向かう。ちょっと憂鬱だ。

チャプター39（後書き）

今回のテーマは「ツンデレクイーン」です。なんのこっちゃって話なんです、元々二つ名に関しては執筆を始めたころから決まっていたのです。

不幸少女 最強美少女 芸術の女神 ツンデレクイーンといった流れはもうできていました。

ただし、途中ツンデレが描けなくなって困っていたのですが、そういえば秋って底なしのお人よしだから、といった閃きにより、今回の一話ができたわけです。気持良くらいにやりたいことが繋がっていくのが楽しい一時でした。

それでは、ここまで読んでいただきましてありがとうございます。

チャプター40

クラスメイトとツンデレ

ガラガラ

秋が教室に入ると、朝練に参加していたこともあり、既に授業開始前ということ、教室にはほとんどの子たちがいたが、誰も秋に挨拶する子はいない。

「おはよう。秋、今日も朝練だったの？」

いや、和美がいた。和美は教室の後ろにある秋の机の横である。教室の席替えの時に先生から特別にこの場所にしてもらったのも、クラスメンバーから反感を買う一つの原因だ。そして、何よりも、秋の席の前に座っている女の子、川瀬 明実との出来事が原因だろう。

蟹津と川瀬という出席が近かったこともあり、秋はすぐに明実と仲良くなった。

しかし、明実が事故に合い、助けてくれたお礼にストラップを渡した時、秋がそれを受け取らず、ゴミ箱に捨ててからは、クラス内で秋に対する態度は変化し、明実の席も異様なほどに前に寄っており、教室で秋と和美のところだけ切り離されたような状態になっている。

「今日も学校に来たんだ。流石に優等生は違うわ。」

「ちょっと、勉強ができて可愛いからってお高く止まっちゃって。」

教室内からは、秋を非難するような声が聞こえる。というか、わざと秋に聞かせるために大きな声で言っているのだ。

「秋、気にしないでいいよ。秋のことを知らないからあんな風に言うだけだからさ。」

「大丈夫だよ。陰で言われるよりも、あんな風に聞こえるように言ってくるだけ、ボク的にはつらくないからさ。」

「それはそうかもしれないけど・・・」

「それより、HR始まるよ。和美も準備しよ。」

和美にそう言つて、ボクも机に一時間目の準備を出す。陰口を言っていた子は、秋の澄ました様子に余計に腹が立ったのか、教室全体に聞こえる声でこれ見よがしに秋の悪口を言っている。朝のHRが始まるまで、秋は黙って耐えていた。

昔の秋なら、悪口を言ってくるような人間には言い返していたし、クラスにいじめられている子がいれば一番にかばっていたのだが、自分に対してだとういこともあり、耐えてしまっていた。

「もう、我慢できない。」

「和美。いいの。ボクに巻き込まれないように態とこうしてるんだから。」

秋よりも先に我慢の限界の来た和美だったが、秋にそう言われては従うしかなかった。和美自身が他の心友たちと違って危険に対応することができずに、秋のことを守ってあげることができないというコンプレックスを持っているのも原因かもしれない。

麻美などは、和美と同じ条件なのだが、幼馴染ということもあり、やはり和美よりもずっと秋のことを守っているように見えてしまうのだ。

キーンコーン

お昼休みになった。午前中の授業は特に何も起こらずに、過ぎたが、ここで思わぬ出来事が起こった。

「蟹津さんと、えつと・・・」

「坂本君？どうしたの？」

「一緒に弁当食べてもいいかな？俺坂本サカモト・アツシ敦バスケット部で蟹津さんとは良く話すんだ。」

和美が警戒していたが、バスケット部と聞いて、納得したようだ。

「坂本君までクラスでのけ者にされちゃうかもしれないよ？」

「大丈夫だよ。それに、このまま放っておいたら、先輩たちになんて叱られるかわからないしね。助けると思っただけで、一緒にご飯食べてくれないかな？」

そう言って、坂本君は頭を下げてきた。

「和美。この子はバスケット部の坂本君。一緒にお弁当食べてもいいかな？」

「秋が良いなら私は構わないわ。私は長田和美よ。よろしく坂本君。」

「よろしく。」

そう言って、坂本は秋と和美がくっつけていた机に近くからイスを持ってきてお弁当を取り出した。

「それ美味しそうだね。でも、お弁当に餃子って匂い大丈夫なの？」

「大丈夫よ。ニンニクみたいな匂いの強いものは入れてないから。」

「ひょっとして蟹津さんの手作り？」

「そうだよ。竜のお弁当も作ってるんだ。」

「そうなんだ。すごいな。俺の親なんて冷凍ばかりだからさ。」

「良かったら食べる？」

「良いの？じゃあ、一つだけ。」

「秋、私には？」

「しょうがないな。和美も一つだけね。」

「わーい。」

こうして、三人でお弁当を食べていると、司や竜と一緒に食べていたころを思い出す秋だった。秋の母である好美も料理が得意で、いつも竜や司にねだられておかずを取られていた。

今は秋が作ったお弁当だが、そちらも好評らしく、二人に半分近く食べられてしまったが、秋はこうして友人と笑って食べられることが嬉しかった。

「尻軽女！！バスケット部の男全員にとって本当だったのね。」

そんな様子を見た朝、悪口を言っていたクラスメイトが、秋に悪口を言う。

「ふざけないで！！秋にはちゃんとした彼氏がいるんだから、そんなことするわけないでしょ！！」

これに反応したのは、朝から爆発寸前だった和美だった。立ち上がると、悪口を言った女の子に近付いて行く。

「和美。やめて。」

そんな和美を後ろから抱きとめる秋、しかし、座っていた位置が悪く、和美と女の子は目と鼻の先である。

「そんなにこの淫乱女が大事なんだ。長田さんってマジ変人だよ。長田さんってマジキモイんだけど、あんたちよとおかしいんじゃない。」

パチン

女の子の頬を殴ったのは秋だった。

「秋・・・」

「うるさい！！馬鹿女！！ボクのことをいくら悪く言っても平気だけど、ボクの心友を悪く言うのは許さない。そんなにボクが嫌いなら直接ボクに何でもしてきたらいいじゃないか。それとも口だけなのか？ボクは逃げも隠れもしないからいつでもかかってこいよ。」

「秋、昔の癖がでて、男口調になってるよ。」

「そんなのはどうでもいい。今ボクは本気で怒ってるんだ。なんなら、今暴れたっていんだぞ。」

「秋が暴れたら、教室が壊れちゃうから、ちょっと冷静になって、私は平気だから。」

「和美が悪口言われたんだよ。黙ってられるか！！」

秋が暴走しだしたことにより、冷静になった和美は必死でなだめようとするが、殴られた女の子は完全に切れていた。

「言ったね。覚えてなよ。明日から本気で学校に来たいだなんて思わないようにしてやるんだから。」

そう言っつて女の子は、教室を出て行つた。しばらく経つと、秋も冷静になり、自分のしてしまったことに後悔しだす。

「ボクやっちゃつたよ。いきなり暴力なんて最低だ。」

「秋は悪くないわよ。それに私をかばってくれたんでしょ。ありがとう。」

「そつだよ。蟹津さんは悪くないさ。先に喧嘩を売つてきたのは向こうなんだ。気にすることないさ。」

「でも、鈴木さんめつちやくちヤイタそつだつたよ。それに、明日から学校に来たくないようにするつて言つてたし。」

「優花はまだ高校はいつてから、友達増えてないから、大して酷いことはできないんじゃないかな？」

「といつか、秋つてあんな子の名前覚えてたのね。私なんて苗字すらわからなかつたわ。」

「鈴木 スズキ・ユウカ 優花さんだよ。一応学年が同じ子の名前は全員覚えてるか

らね。」

「え？私なんてクラスメイトもまだ完全じゃないのに、一年生全員覚えてるの？」

「まだ、全校は覚えてないけどね。中学の時はすぐに全校覚えられたんだけど、流石に高校にもなると、資料がなくて同学年とバスケット部の人だけよ。」

「蟹津さんって頭良いとは思っていたけど、すごいんだね。」

「昔から、もの覚えはいい方よ。」

「良いどころじゃないわよ。鈴から聞いたんだけど、センター試験満点って本当？」

「鈴って？」

「ああ、中学の時の友達よ。そうだね。中学に入ってから毎年自己採点では満点かな。」

三人で話しているうちに、違う方向にそれていき、優花のことは忘

れられてしまっていた。そして、放課後、バスケット部の練習に向かうと秋が教室を出ようとしたところで、優花から声がかかった。

「蟹津さん。ちょっと顔貸してくれる？」

「秋、行くことないよ。」

「うーん。このままつやむやにするのも嫌だし、鈴木さんって陰からいじめるんじゃないから、むしろ好感もてるんだよね。あんまり心配しなくて平気な気がするんだ。」

「また、秋の第六感？」

「そゆこと、だから心配しないで、むしろ鈴木さんの心配してあげて。」

「馬鹿言わないですよ。とにかく、秋が平気っていうなら信じるから、部活に直接行くだろうから体育館の前で待ってるから終わったら来てね。」

「ありがと、ついでにバスケット部の人に遅刻するって言うておいてくれる？」

「はいはい。なんて緊張感ないのかしら。ひよっとしたらキヤット
ファイトが勃発するかもしれないのよ?」

「ボク相手にそんなこと起きるわけないでしょ?」

「そっか。確かにそうよね。」

秋の発言に安心したのか、和美はのんびりと帰りの準備をすると、
体育館に向かって言った。

「偉く余裕じゃないの。とにかく来て頂戴。」

二人の会話を多少とはいえ聞いていた優花は、侮られたことに憤り、
ずかずかと足音を立てて歩きだした。

『はあ、ここで後ろを見せちゃう時点でボクに喧嘩で勝とうなんて
無理なんだけどな。でも昼間も殴っちゃったし、できるだけ話し合
いで解決しよ。』

優花は、今は放課後で使われていない美術室に着くと、鍵を取り出
し、開いた。

「あれ？美術部ってこの学校無かったんだ。人いないんだね。」

「今日は活動が休みだから、特別に借りたのよ。って、なんでうちがあんたにそんな説明しなきゃいけないのよ。良いから中に入りなさい。」

鍵を開けたことからも一対一のようにあり、人の気配もしないので、秋は堂々と中に入って行く。

「あんたね。昼間喧嘩を売った相手が人気の無い場所に呼び出してるのよ？もうちょっと警戒しなさいよ。」

「ああ、確かにそうだね。でもそんなこと言ったら鈴木さんだってそうでしょ？一対一なんて危ないと思わなかったの？」

「はあ？いつ一対一って言ったのよ。」

「え？現に誰もいないじゃん？」

「お人よし過ぎるわよ。教室内に隠れてるかもしれないし、後から来るかも知れないでしょ？」

「教室内にはいないよね？ボクこういうの分かるんだ。それに外から呼ぶなら入ったことを確認しなきゃいけないけど、視線も感じなかったし、ケータイもカバンの中でしょ？」

「どういうこと？わかったわ。確かに一対一よ。でも、今回は偶然そうだけで、次からもそうとは限らないわよ。」

「ありがと。鈴木さんってやっぱりいい人だったんだね。喧嘩相手に忠告するなんて、優しい証拠だよ。見た目金髪でギャルだから、怖い人かと思ってたけど、全然じゃん。」

「あんだ。教室とイメージ違うわね。これでも私空手やっててケンカとか負けなしだから、ボコボコにしてあげようと思ってたけど、気が変わったわ。」

「空手してたんだ。ボクも柔道してたんだよ。」

「あんだね。反応するのはそこじゃないでしょ。」

「うん。口で説明するより、見てもらった方が早いから、ちょっと待っててね。」

そう言つて、秋は美術室の端にあつた木材を持つてくる。何に使うのかは分からないが、まだ作品になつていない材料なので、問題ないだろう。木材を手にした秋をみて優花はたじろぐ。

「ちょっと、うちが空手やってるからつて、武器なんて卑怯よ。」

「違うよ。ボクだつて柔道してたつて言つたでしょ？これは殴りあひしないようにボクの力を見せるために使うの。」

そう言つて、秋は机の間に木材を置くと、破壊の右足を振り上げ、木材に落とした。カカト落としというわけだ。木材は3センチほどの厚さがあつたが、きれいに折れてしまった。

「もっと厚いのもたぶんできると思うけど、これしかなかつたから。空手してるなら、ちょっとは分かつてもらえたかな？」

「ええ、蟹津さんつて喧嘩強かつたのね。」

「そうだね。一般人ならナイフくらいなら怖くないし、銃をもつた怖い顔のおじさんをたたきのめしたこともあるかな。」

「はあ？どんだけデンジャラスなことしてんのよ。」

「心配してくれてありがとう。それより昼間はごめんね。血が上っていたとはいえ、殴っちゃって、痛かったでしょ？」

優花は、まさか謝られるとは思っておらず、先ほどの力カト落としたという意表をつかれっぱなしで、どう返して良いか分からなくなっていた。そして、一番気になっていた疑問をつい口走っていた。

「あんた、何でクラスでハブにされてんのよ？」

「いやあ。色々事情があつてね。ほら、ストラップも実はゴミ箱から回収してたりして。あはは。」

「あはは、じゃないわよ。あんたそのせいでみんなから避け者にされてるんだから、なんで黙ってんのよ。」

秋はしばらく考えて答えを出す。

「優花はいい子だってわかったから教えるね。あ、優花って呼んでいいよね？」

「べ、別にいいけど・・・」

「ありがと、優花みたいにさ。直接嫌味を言ってくる子は良いんだけど、陰でボクのこと嫌う子ってどうしてもいるでしょ？そうするとき、ボクの周りに友達がいると危険なんだ。」

これ見よがしに言っていた悪口に恥ずかしくなった優花は顔を赤らめながらも、疑問に思ったことを尋ねる。

「周りの友達が危険ってあんたこんなに強いんだったら問題ないんじゃないの？」

「うん。今詳しく説明すると長くなっちゃうから。また今度ね。とにかく、ボクってすごい不幸で、ボクの周りになると危険だから避けてるんだ。優花は空手やってて、そういうの大丈夫そうだから、明日からは声掛けるね。」

「じゃあ、あの事故も、ストラップを捨てたフリしたのも、あなたの不幸体質のせいだっていうの？」

「あんたって言うのやめてよ。こっちが優花って呼ぶんだから、秋ってよんでよね。」

「あ、ごめん。でも、癖なんだよね。名前で呼ぶのってなれなくて

わ。」

「まあ、優花の好きにしていよいよ。ってやば、もうこんな時間じゃん。ごめんだけど部活があるからボク行かなきゃ。電話番号だけ交換してくれる？」

「ああ、なんか、喧嘩しに呼んだはずなのに、仲良くなっちゃったね。」

「ボク昔っから男勝りな性格だから、むしろ喧嘩して友達増やしてきたからね。」

「なるほどね。なんかあんたに興味沸いてきた。明日からよろしくね。」

優花と番号を交換すると、アドレスなどは、明日以降交換するか、夜に電話で確認することになった。クラスで初めての連絡先を交換した友人が優花になるとは秋事態も思っていなかったが、話してみると何故か納得できるものがあつた。

『うん。優花からも運命の系の気配がするな。ボクの前世ってプレイボーイだったのかな？こりゃ転生されるわけだ。』

全く検討違いな感想を抱いている秋だったが、和也の恋人に出会うことで、クラスでの立場が改善されていく予感がしていた。

「和美にも教えて上げよ」

体育館の前では、心配いらないと分かっているにもかかわらず、遅い秋のことを心配してる和美がそわそわしながら待っていた。

「和美。ごめんね。結構まったよね？」

「それより、どうなったの？やっぱり鈴木さんボコボコにしちゃったの？」

「ううん。友達になっちゃった。前世の記憶の引っかかりがあったから平気だとは思っていたけど、本当にいい子で喧嘩相手のボクのこと心配しだすから、ボクも話し合いで解決しちゃって、そしたら色々と説明に戸惑っちゃって。」

「なによそれ。心配して損した気分だわ。」

「前世の記憶のことも言っておけばよかったね。」

「本当よ。でも、何もなかったならよかったわ。バスケット部の人には友人に頼みごとされて断れなかったって言うておいたから、上手く話し合わせるのよ。」

「了解。優花が連れて行ったのが美術室だったから、ちょうどいいよ。」

「優花って、もう呼び捨てにする仲なのね。」

「うん。あ、でもやっぱりクラスではもうしばらく様子を見るつもり、やっぱり危険があることには変わりないからさ。優花は空手やってて強いんだってさ。ボクの前世って強い女の子とばかり付き合ってるよね？どうなってるんだろ？」

「おおよその予想はつくわ。ついでに私はきつと何かで救ってもらって惚れたとかそんなんでしょうね。」

「へ？なんで分かるの？和美も前世の記憶が残ってるの？」

「知らないわよ。秋のこと見てたら、そう思ったの。っていつかさんなの分かるの？」

「うん。正確に分かるわけじゃないんだけど、ぼんやりと？でも、どれくらい仲が良かったかははっきり分かるよ。竜と司は格別だったもん。」

「はいはい。その愛しの竜くんが秋が来るのを首を長くして待ってるわよ。天井に着いちゃう前に行ってあげなさい。」

「そんな、愛しのとか・・・」

秋は和美の発言に真赤になりながらも、ただでさえ遅刻しているのに、急いで準備をするべく更衣室へと向かったのだった。

『ほんと、食べちゃいたいくらいかわいいんだから。』

和美は、とにかく心配がないことも分かって安堵して帰って行った。ここまで残ったなら部活が終わるまでいて、一緒に帰ることもできるのだが、二人の仲を割くのも悪いと考えたのだ。

部活が終わり、帰り道

「秋、俺に隠し事しとるやる？司からメールがあつたんやぞ。」

「ありや、司からバラされたか。しかも、なんていいタイミングなんだ。やっぱり司はあなどれないな。」

「ごまかすなよ。これでも怒つとるんやぞ？」

「ごめんね。心配かけたくなかつたんだ。でも、今日までなんだ。今日一番いじめて来た子とタイマンで話し合つて、友達になつちやつた。」

「はあ？どつどついじつちや？」

「今日、部活遅刻したでしょ？あれって、喧嘩の呼び出しだったんだよね。それで、喧嘩したら仲良くなっちゃったみたいなの？」

「みたいになって・・・なんや、秋らしいちゃそうやねんけど、とにかく、周りを危険にしたいくないからって、態と嫌われるんはやめろ。秋が傷ついたら俺が嫌やねんから。」

「うん。一回やっちゃったから、すぐには変わらないとは思っけど、優花と和解したし、これから徐々に友達増やしていくね。」

「そんなまどろっこしいことせんでも、秋が本気でしたらファンクラブ第二号みたいなんできるんとかやうんか？」

「竜はそうなってもいいの？」

「う・・・」

竜にとって秋が不幸になるのは一番嫌だが、中学のようにファンクラブができて、そのうち秋が別の男に走ってしまうのも嫌だった。

「秋が幸せならがまんするよ。俺にとってそれが一番幸せだからな。」

「バーカ。標準語になってるぞ。大丈夫、ボクは竜の彼女だから。浮気するんじゃないぞ!？」

「浮気みたいせえへんわ。でも、秋に不幸になつて欲しくないつてのはほんまやから、無理せんといってくれよ?どうしても不幸になるようやったら、みんなで考えて対策をせないかんからな。」

「うん。ありがと、竜はボクの側にいてくれるだけでいいよ。竜がいてくれたらそれだけで幸せだから。」

「ちよま・・・」

竜は、秋のまつすぐな言葉に赤面する。いつも真逆のことをしているのだが、そこには気づいていない。また、素直な気持ちを伝えた秋もまた、自分の言った言葉に自ら赤面するのだった。

「じゃあ、また明日ね。お風呂に入って早く寝るんだぞ。あ、でも明日は小テストあるから勉強もしてね。」

「無茶いなや。そんないっぺんに何でもできひんわ。」

「じゃあ、寝ながら晩御飯を食べて、お風呂に入りながら小テスト

の勉強して、寝たらいいじゃん。」

「んな器用なことできるか。ってか寝てたら飯食えへんやろ。」

「じゃあ、晩御飯の後勉強してお風呂は温めにゆっくり浸かると良いよ。単語帳くらいならお風呂入りながら覚えても平気だしね。」

「なんで温めなんや?」

「その方がいいからよ。40度くらいに調節してね。ぬるくし過ぎで風邪ひかないですよ。」

「了解。やってみるわな。」

「一番は、明日に疲れを残さないことがいいんだから、明日の小テストは、朝、自転車に乗りながらでも、ボクが対策してあげるから、疲れを取るのを優先してね。」

「マジか助かるわあ。ほな飯食ったらはよ寝てまお。」

「もう、朝の時間だけで足りなかったらどうするのよ。」

「秋のやまなら大丈夫やる。」

「知らない。点数低くてもボクのせいじゃないからね。」

そう言いながらも、家に着くと教科書を開いてして自分には必要ない小テストの範囲の確認をする秋だった。明日も朝早くお弁当を作らないといけないので、帰りに確認しておいたお弁当の内容を作れるか確かめるために冷蔵庫を開けようとすると、手に持ったケータイが鳴りだした。

「はい。優花どうしたの?」

「どうしたのじゃないでしょ。夜電話するって言ったじゃないの。」

「ああ、ごめん。明日のお弁当の準備しててさ。」

「例の手作り弁当?本当に作ってたんだ。」

「そっだよ。朝ご飯とお父さんと竜のお弁当はボクが作ってるんだ。」

「へえ、偉いわね。うちなんていつもギリギリに起きてるわよ。あれ？竜って弟かなにか？」

「ううん。彼氏だよ。バスケット部にいるから今度見においでよ。優花って部活は？美術部だったりする？」

「そういえば昼にもそんなこと言ってたわね。信頼されてるのかしら？もう、あんたと話してるところこっちが変な気分になるわ。」

「ああ、彼氏持ちってことでいじめられるとか考えてたの？優花はもういじめないんでしょ？そうだね。信頼っていうのも、近いけど、何よりボクの第六感って結構当たるんだ。だからボクの勘が優花に教えても大丈夫って言ったの。」

「ううん。話せば話すほど謎が増えて行く気がするわ。そう、さっきの質問の答えだけど美術部よ。うちが美術部なんて似合わないでしょ？」

「ううん。ぴったりだと思う。この前、手に絵の具のカスが付いたとか見てたからそうかもって思ってたしね。ボクも中学美術部だったから、そういうの分かるんだ。今度ボクが作ったもの部屋に置いてあるから見にくる？」

「えっと、どの言葉に反応したらいいのかしら？」

「ごめんごめん。ボクの周りってすごい子ばかりだったから、まとめて話しちゃう癖がついてるんだ。そうだな。一番言いたいのは今度うちに来ない？」

「行かせてもらおうかな。詳しく話も聞きたいしね。」

「じゃあ、今週末はちょっと用事があるから、来週の日曜空いてる？」

「ちょっと待ってね。」

優花は、手帳を取り出すと予定を確認する。フリをする。

「丁度空いてるわ。じゃあ来週末で。」

「良いこと教えてあげる。電話越しでも、手帳見てないの分かったりするから、きちんとページ開きなさいよ。テキストウ過ぎ。」

「あ、バレた？実は予定はいつてんだけど、そっちのが興味あるから、今からキャンセルするわ。」

「良いの？別に来週じゃなくてもボクは良いよ？」

「良いの良いの。どうせ大した用事じゃないんだから、うちも実は彼氏いるんだけど、毎日の様に会ってるから一回くらいキャンセルしても平気でしょ。」

「彼氏さんに謝っておいてね。」

「はいはい。んじゃ明日学校でね。」

優花はそう言うと、返事も聞かずに切ってしまった。教室でもそうだったが、さっぱりした性格で、嫌いなものには嫌い、好きなものには好きと正直に言う性格は秋としても好感を持てるどころだった。

『優花って正直な性格よね。まるで竜みたい……って何ボク竜のことなんて考えてるんだろ。明日のお弁当確認しなきゃ。』

しかし、お弁当の相手も竜であり、結局真赤になりながら冷蔵庫の中身を確認する秋の姿が好美に見つかってしまい、「青春ねえ。」

と冷やかされてしまうのだった。

『お母さん。娘をからかうなんて・・・やめてよね。』

秋の心の叫びは好美に通じることはなく、むしろ口に出したら余計にからかわれることが分かっているのので、秋はさっさと確認を済ませると、お風呂に入って寝るのだった。

『明日は、ちょっと多めに作って行って、優花にも食べてもらおう。』

チャプター40（後書き）

クラス内での秋の様子とちょっとおまけで秋と竜の関係を乗せてみました。

今回のテーマは「協力者」でしょう。つまり、優花ですね。優花のキャラクターは真剣に悩みました。優花をどんなキャラにしようか考えて夜も八時間くらいしか寝ていません。

そんながんばって考えた優花のキャラが、勝ち気で、実はすっごく思いやりがあつて、ちょっとおバカな女の子になりました。

優花は確実にこれから出現回数多くなります。そして、今後明らかになる設定の影響でちょっとしたドタバタが待っています。

40話読んで下すって本当にありがとうございます。

チャプター41

遠足パニック!? 水面下の攻防

「ふうん。じゃあ、”あんた”は、他人が不幸を願ったら、不幸になっちゃうんだ。」

「ちょっと、和解したからって、そんなことまで鈴木さんに言ってもいいの?」

「大丈夫だよ。優花はそれを使ってボクを陥れるようなことはしないよ。」

「何?それも前世の記憶ってやつ?」

「そうかもね。優花は前世の恋人だったみたいだからね。」

「女の子に前世の恋人だなんて言われても嬉しくないって。でも、前世で仲が良かったからといって、現世でも同じとは限らないんだから、あんまり言ってもんじゃないわよ。」

「うん。ボクそこら辺は分かるから大丈夫だよ。」

「ホントに甘いね。”あんた”そんなんで良く生きてこれたね。」

「ちょっと、さっきからあんたって何よ。秋には名前があるんだからちゃんと呼びなさいよ。」

「悪い。これ癖なんだ。あんまり、気にしないでよ。えっと、うちのことと呼び捨てでいいからさ。優花ね、よろしく。」

「ちゃんとクラスメイトの名前くらい覚えなさいよ。秋がそういうから仕方ないけど、呼び捨てはできないから優花ちゃんね。私は和美よ。」

「和美だって、昨日分からなかったじゃないの。」

ボクのその言葉に、和美は無理やり咳ばらいをする。お互い五十歩百歩と言ったところであるが、そこら辺はサバサバした性格の優花がさらりとスルーしてくれる。

「ちゃんとか、つけられるの微妙だな。よろしくな。和美。」

「呼び捨てにして良いのは、彼氏と秋だけなんだから。ダメ!！」

「和美、そこらへんにしとこうよ。優花はもう仲間なんだからさ。」

「まあ、よくわからないけど、和美ちゃんでもいいの?」

「ええ、よろしくね。秋のことを大切に思ってくれる仲間は大事だし、歓迎はするわ。納得はまだできてないけどね。」

「ツンケンしないの。こっに見えても優花は、美術部に入ってた気も合っただから。」

「ちよま、それは言わないですよ。こんな金髪美女が、おしとやかに絵なんて描いてるって恥ずかしいじゃん。」

「そうかな?優花には合ってると思うんだけどな。」

「先に自分で金髪美女とか言ってることに突っ込みましょうよ・・・」

そんな話をしていると、教室に着いた。昨日まで敵対していたはずのボクと優花が仲良く話している様子を見て、クラスメイトは驚い

ている。心配した和美と昨日の電話で謎ばかりだったこともあって
体育館まで押しかけて来た優花と朝練の間中話していたので、周り
から見たら、突然仲良くなったように見えるだろう。

「おはよう。明実。」

「話しかけないですよ。優花は私の味方だと思ってたのに。」

ボクの前の席で様子をうかがっていた明実に優花が挨拶をすると、
明実はそっぽを向いてこれ以上かかわるなというオーラを出した。

「前世の記憶つてのてどうにかなんないの？」

「馬鹿ね。さつき自分で前世の記憶があっても仲良くできない子も
いるって言ったんでしょ。」

「ええ！？明実も！？秋の前世はプレイヤーだったの？」

突然大きな声をあげてしまった優花に視線が集まる。前世の話など
は、あまりしない方が良く注意すると、了承して優花は自分の席
へと帰って行った。和美はまだ優花が信頼できるのか疑っているよ
うだったが、深く追求もしなかった。

「おはよう。」

「おはよう坂本君。」

「蟹津さん酷いよ。片づけ終わらしたらずくに教室に行っちゃうんだもん。俺のこと待ってくれてもよかつたんじゃない？」

「ごめんごめん。優花と和美が来てたから先に抜けさせてもらったの。」

「別に仕事はきちんとしてくれたんだから良いんだけど、俺も同じクラスなんだし、待ってくれてもよかつたじゃん。」

「竜が嫉妬するから、二人つきりじゃない時だけね。」

「お熱いことで、まあ、こんだけ美人なら危機感感じるかもしれないね。」

「坂本君だってモテるんじゃないの？」

「ああ、俺彼女いるから。ってか昨日も、朝も焦ったっつもの。」

「ああ、なるほどね。坂本君と仲良くしてたから、優花ちゃんはおんなこと言ってきたのね。」

「え？どついうこと？なんで坂本君と仲良くすると、優花が？」

昨日のケンカの原因が坂本君と仲良くしていたからといわれてもお弁当と一緒に食べていただけで、何も悪いことはしていなかった気がするのだが？

「相変わらずこういうことには鈍感なのね。坂本君の彼女って。」

そう言って、和美が指を指した。その先には優花がおり、こつちを向くと、坂本君と目があり、照れたように顔を赤らめていた。

「なるほど、納得だよ。和美ってあれだけで良く分かったね。ボクにはさっぱりだったよ。」

「まあ、伊達に悲恋を経験してないってことよ。早く私にも素敵な恋人ができないかしら。」

「それをこつちを見ながら言わないでくれないかな？こんなにたくさんクラスメイトがいるんだからさ。」

「もう、秋以上に素敵な人はいないもん。本当に食べちゃいたいわ。」

「ちよ、やめて！！」

教室の後ろで和美とじゃれあっていると、密かにこちらをうかがっている視線を感じた。昨日まで直接的に悪口を言っていた優花がいたので気付かなかったが、ボクに対する思念はぬぐいきれていないのだろう。

むしろ、昨日よりもずっといやらしい、ねっとりと粘りつくような嫌な気分がする。やっぱり優花のようなさっぱりした性格の子にじめられてる方が、気分は悪くない。

キーンコーン

朝のHRで、来週、中間テスト明けに遠足があることを発表され、班を決める段階になると、優花が坂本君をつれて班員になってくれ

た。女の子3男の子1のアンバランスな班だが、一応男女混合という条件にも当てはまっているので先生に認めてもらえた。

中学生の時の遠足はとても楽しかったし、今度もそうなって欲しかったが、ボクの第六感はそのことを告げていた。和美たちにはきちんとそのことを伝え、上手く危険が及ばない距離を取ってもらうことにした。事情を知らない坂本君は疑問を浮かべていたが、優花の説得もあり、とにかく認めてくれた。

「美味しい あんたお店ひらけるんじゃない？」

「昨日の餃子も美味しかったけど、今日のパスタも最高だね。これはオムレツ？」

「ありがと。そう言ってもらえると作ったかいがあるよ。」

お昼の時間になり、昨日は三人で食べていたが、今日は優花も一緒に四人でお弁当を囲んでいた。優花のためにと多めに作ってきたのだが、坂本君という男の子がいることを失念していて、ペロリと平らげられてしまった。

「優花もこれくらいしてくれたらいいのにな。」

「無理。この美味しさはうちには不可能。」

「そんなことないよ。来週うちに来た時に作り方教えてあげるね。」

「あ、それ・・・」

「優花？どういうことだ？確か、親戚のおじさんが死んでお葬式に行くとか言ってたよな？」

「あちゃ。優花そんな嘘ついてたんだ。ごめんね。」

「じゃあさ、坂本君も一緒に秋の家に行けばいいんじゃない？」

「え？いいの？」

「ボクは別にいいよ。どうせなら竜とかも呼んじゃう？」

来週は予定がいっぱいになってしまった。月曜日から木曜日まで中間テストを受け、金曜日に遠足にいった、土曜日に優花と坂本君がボクの家に来て、日曜しか休みがない。

「蟹津さんの部屋か。どんな部屋なんだろ。」

「ちょっと、変な想像してんじゃないわよ。」

坂本君と優花が夫婦喧嘩を始めたが、どちらも本気で怒っているというよりも、じゃれあっているように見える。

「二人って仲がいいんだね。」

「まあね。どうしようもないこいつをうちが助けてあげてるんだから。」

「そういうのは、蟹津さんみたいに美味しいお弁当を作れるようになってから言えよ。」

「良いわよ。じゃあ敦が驚くような料理上手になってやろっじゃないの。」

売り言葉に買い言葉？結局喧嘩してたのか怪しい終わり方だが、仲が悪いより良いので放置しておく。夫婦喧嘩は猫も食わぬ。ってね。

「秋も人のこと言えないわよ。竜くんとの掛け合いこんなもんよ。」

「はうあ……」

和美に竜との仲を指摘されて、真赤になっているボクの様子を、優花と坂本君に目撃されてしまった。

「敦、可愛くつても襲っちゃダメよ。」

「あほ、彼氏持ちやしこつちも優花がいるんだからそんなことはしないっつもの。でも、竜を殴りたい気分にはなつたな。」

「うちも殴りに行くっつかな?」

「優花ちゃん。気が合うわね。やっぱりあなたとは仲良くなれそう
だわ。」

良く分からないが、和美と優花は仲良くなれたらしい。真赤になつた顔を隠しながらも、二人が仲良くなれたことに喜ぶ。

遠足の行先は、旧街道を歩き、小さな山を数時間かけて歩くという内容だった。目的の街道までバスで移動したのだが、ここでも先生から特別に後ろの座席をボクら四人のために確保してもらい、その様子にクラスからの懐疑の視線が絡む。

「着いたね。秋、早く歩いてお土産屋のたくさんあるところまで行くよ。」

「ボクは構わないけど、この中で一番体力がないの和美だと思うけど?。」

「優花と俺はもともとアウトドア派だからな。和美ちゃんにはちょっときつい道のりだとおもっ。」

坂本君の言う通り、今日歩く街道はなだらかな部分が多いとは言っても、舗装されている部分とそうでない部分があり、少し山に入ると行く危険な場所まである。しかし、街道を渡り切ると、旧来の町並みが残ったお土産屋や、水場などがある場所に出ることになっている。

「と、とにかく頑張って歩きましょう。」

「無理しないでね。ボクも和美に合わせてゆっくり歩くから大丈夫だよ。」

基本的に班別での行動となっているが、竜と申し合わせて、一緒に行くことになっている。どうしても旅行先などでは、竜がいないと危険がある可能性が否定できないからである。特にクラスメイトと完全にいがみ合った今の状態では何が起こるか分からない。落石など本当に命の危険があるかもしれない。

「ありや、圏外だね。あんたの彼氏、どこで合流することになっているの？」

「上田も一緒に行動するんだろ？出発地点から移動しない方がいいかな。」

「でも、先に行って待ってるかもしれないよ。」

「とにかく先生たちをごまかす程度に牛歩で進んでみる？」

先生たちは混雑を避けるために、バスから降りたクラスから順番に点呼を取ると出発させている。竜のクラスはすでにバスがついていたらしく、先に進んでいるかも知れないと考えてボクらも移動を開始する。

もし、竜が同じ考えでいたら、途中で待つか、後から追いかけてくれるはずだ。そう考えてボクらは進みだす。

「うん。たぶん、竜は前にいるかな？」

「分かるの？」

「あんだ、犬か何か？」

「ちょっと、蟹津さん気にしないでね。優花は思ったこと言っちゃうタイプだから。」

「それフォローになってないよ。竜もそういう人間だから、気にし

ないよ。むしろ、あんな感じで陰で悪口言ってる方がボクは苦手だからさ。聞こえてないと思ってるんだろうな。」

「あんなって、どこの集団のこといってるの?」

「あれだよ。」

優花に視線と軽い動作で場所を指摘する。100Mほど先の開いた場所でおしゃべりをしながら歩いている集団があった。

「えっと、かなり距離あると思うんだけど、まさかなんて言ってるか分かる?」

「声マネ付きで解説する?」

「いや、良いわ。うちも前まであの集団にいたから、なんて言ってるのかわかるしね。」

「そうだな。大抵が”先生に優遇されてウザいとか、ちょっとかわいからってお高くとまっちゃってとか”そんな内容だろ?」

「正解。最近はずちや敦の悪口も入ってるみたいだけどね。」

「ごめんね。ボクのせいで誤解させちゃって。」

「いいよ。それより、さつさと明実と仲直りしてほしいわ。明実とうちって同じ中学出身だから、このまま誤解されたままじゃ困るからね。」

「了解。まあ、明実はすぐに大丈夫になるとおもうよ。問題はあのグループにいる。北条さんと森君かな。なんかあの二人からは関わっちゃいけないオーラが出てるんだよね。」

「ふん。というか、なんで森君なんてへなちよこが、北条さんみたいな可愛い子グループにいるんだろ？」

「そうね。北条さんってクラスでも秋の次くらいに美人よね。そんな北条さんが森君と話しているのが謎だわ。」

優花と和美の言う通り、北条さんは、鋭い目をした美人で、ちょっと怖そうないメージがある。逆に森君はなよつとしていて、どちらかというと、クラスでは目立たないタイプの男の子だ。二人とも中学も違い。共通点と呼べるものがない。

「北条さんの下僕だったりして。」

「まさか。いくら女王様オーラがあるからって下僕なんてありえないよ。」

冗談を言っているが、それに近い雰囲気は二人には流れていた。北条さんは持ってきた小さなカバンを森君に持たせ、友達と談笑しながら歩いている。先ほどから森君は近くを歩いてはいるものの、会話などには参加せずひたすら話を聞いているようだ。

そうこうしていると、前に竜がいることを、何となくわかってしまっていたボク達が、牛歩作戦をやめて普通に歩いていたため、北条さん達のグループに追いついてしまった。そして、道もせまくなってきたおり、肩が触れ合わんばかりに近付いたため悲劇は起こった。

ガサガサ

「ぶ〜!」

「危ない!」

ボクは北条さん突き飛ばし、そこを通り過ぎた物体に体当たりを

食らってしまった。

『ありやりや。猪にぶつかられたくらいで、気絶するなんて、ボクも修行が足りないな。』

『気絶じゃなくて、臨死体験でしょ。つてか、跳ね飛ばされて木に頭からぶつかったのに生き帰るなんてもう既に人間じゃないわよ。』

『霞さん久し振り。洋司さんとラブラブしてる？』

『最近構ってくれなくて、それに私もこの二年間冥界の図書館にこもりつきりだったしね。こらっ!?!?そうじゃないでしょ。もうちよっと危機感もってよね。』

『いやあ、生き帰ることが分かっていると、こんなにも気楽なんだね。』

『ああ、それで思い出したわ。ほんと、秋ちゃんは何者なの？前世の記憶が残ってる人間なんて、どの文献探しても分からなかったのよ。』

『うーん。洋司さんは教えてくれなかったの？』

『そうなのよね。何を聞いても、【エンマの奴に聞け】こればかりよ。秋ちゃん、お姉さんに教えてくれないかな？』

『お姉さんねえ。未緒さんですら、ボクが生まれる前からあの姿なんでしょう？エンマの娘で強い力を持った霞さんがそんな若くは思えないんだけど。』

『うるさいわね。これでも鬼人じゃ若い方なのよ。大戦中に生まれただから、60くらいかしら？』

『へえ、何百年も生きてるんだと思ってた。なんでまた、大戦中なんかに生まれたの？』

『それが、再転の宝玉をあまりにも乱用してしまったために、鬼人が足りなくなつたとかで、お父様とお母様は無理やり力がある者同士で結婚して私が生まれたいわよ。そのあと、洋司様の活躍で平和になつたけど、お父様もお母様も必要無くなつた私には構ってくれなかったから、さみしい思いをしたわ。』

『ひよつとして、洋司さんに育ててもらつた？』

『ええ、それはもう素敵だったのよ。私が夜泣きしたら、朝まで付

き添って見ていてくださったそうよ。』

『霞さんって洋司さんのこと好きだと思ってたけど、それって恋人じゃなくって、親に対するものだったんだね。それで、ボクが生まれて構ってもらえなくなったから嫌がってたんだ。』

『ちよ、違うわよ。昔はそうかもしれないけど、今は……』

『今は？』

『あれ？自分の気持ちが変わらなくなってきたわ。そう言えば、秋ちゃんのこと調べててこのところ会っていなかったんだけど、あんまりさみしくなかったわね。』

『自分にやることが見つかったら、親からは独立するからね。本当に親代わりだったのかもね。でも、大切な存在であることには変わりはないからいいじゃないの。』

『たかが、15年しか生きていないガキが偉そうなこと言わないの。』

『一応一回成人してるからね。社会人にはなったことはないけど、何度も臨死体験するうちに、前世の記憶もはっきりしてきたよ。』

『そうだったわ。話をそっちに戻しましょ。なんで秋ちゃんには前世の記憶があるの?』

『保存の珠玉で守ったからだよ。再転の儀式の時に洋司さん一人だけが珠玉に入って、保存の珠玉に余裕を持たしていたんだって、それで、空いた分でボクの記憶を残したらしいよ。』

『へえ、なるほどね。そこは納得したわ。あとは、人体構造を含む人間ではありえない能力について調べたらわかるかもしれないわね。』

『うん。植物のエンマ帳があったらそれについて調べてみて。ボクも詳しくは分からないけど、転生前霞さんが教えてくれたことによればそれがキーワードみたい。でも、植物って筋肉ないよね?なんで動けるんだらう。』

『植物のエンマ帳?まさか・・・分かったわ調べてみるわね。つてヤバ。そろそろ回復するわよ。身体能力と一緒に再生能力も早くなってるんだったわ。』

『えええ?病院に行かないで復活するの?』

『説明は洋司様にでも聞いてちょうだい。とにかく、記憶の処理するわよ。二度目とはいえ、まだ慣れないんだからそろそろ始めないと間に合わないわ。』

霞さんの指示のもと、ボクはゆっくりと意識を取り戻していった。

「秋!!秋!!」

「おはよう。」

「おはようじゃないわよ。」

「あれ?猪は?」

「そんなのとつくの昔に逃げ出しちゃったわよ。」

ボクが起きると、和美が泣きながらボクのことを必死に呼んでいた。坂本君は先生を呼びにいったのか今はいない。

「秋ちゃん大丈夫?」

「明実!？」

そこには優花と一緒に心配そうにしている明実の姿があった。明実と一緒に歩いていたはずの北条さんはここにはおらず、明実と森君だけがそこにはいた。

「大丈夫？」

「うん。このとおり、復活したよ。」

そう言って笑顔を作ってみたものの、起きあがることはできなさそうである。

「無理しないで、前に私を助けてくれた時もそうだったけど、普通に死んでるわよ。」

「そうだね。ボクも自力で復活できるとは予想外だったよ。これだけの怪我受けたら前だったら病院直行だったんだけどな。」

そんなことを話しているうちに、先生と竜が駆けつけてくれた。

「秋、大丈夫か？」

「動けないかも、受け身取り損ねちゃったかな。」

「そう言う次元じゃなかったわよ。」

「でも、受身とってたからこの程度ですんだのかも知れないわね。」

和美と優花が何が起こったかを竜と先生に説明する。その間にボクの怪我の具合を明実が見て、先生が持ってきた応急処置用の箱から出して丁寧に包帯などを巻いてくれた。

「あ、固定はテーピング使って、そう、そことあとそっちも止めて、刺し木とかは折れてるか分からないから、今はいいや。また帰った後で病院いくから問題ないよ。」

あんまりにも酷い事故だったらしく人だかりができていたのだが、慣れないことに四苦八苦している明実に指示をだしている様子を見て周りも大丈夫だったのかと散っていく。

「それで、その北条さんってやつはどないしたんや!？」

「あ、ボクも気になってたんだ。明実、北条さんは怪我とか無かつ

た？」

「ええ、かすり傷程度だったわ。そこにいる森君と私以外は、秋ちゃんの様子をみて、逃げ出しちゃったの。」

「そっか、大した怪我じゃなかったんだったらよかったよ。」

「どあほう。ええことあるか。」

「竜。そこから先は言っちゃダメだよ。約束したでしょ？」

「う・・・」

竜も気付いたみたいだけど、どう考えてもあの状況で敵意をもって接していたのは北条さんであり、おそらくあのグループと接していなければ、ボクは事故にあわずに済んでいたことだろう。

「先生。お騒がせして申し訳ありません。野生のイノシシなんて学校側の落ち度もありませんし、ボクもこうして無事だったので、家族もおおごにすることは無いと思います。友達もいますし、大丈夫ですから他の子の引率に行ってください。」

駆け付けた保険の先生もボクの言葉を聞いて、どうしたものかと悩んでいたが、ゆっくりながら自分の力で立ちあがったボクを見て納得したのか、先に歩いて行った。

「秋、無理すんな。人払いしたかったんは分かるけど、あれじゃあ先生も困るやろ。」

「あはは、バレた？ちよつとまだ自力で動くのは無理そうだから、どこかで座って話しようか。えっと、森君申し訳ないんだけど、竜たちと話があるから先に行ってくれかな？」

「ぼ、僕の名前知ってたんだ。」

「ええ、クラスメイトなもの。森元気君で海難中学出身でしょ？」

「は、はい。じゃあ、先に行きます。」

森君はどもりながらだが、先に行ってくれた。これで、残ったのは、坂本君・和美・優花・明実・竜・ボクの六人になった。

「うーん。ちよつと座らせて、お土産買う時間無くなっちゃうけど、話聞いてくれるかな？」

「大丈夫だよ。元々、お土産屋を期待してたのは和美ちゃんだけだからね。」

「坂本君酷い。一緒におもち食べよってバスの中で言ってたのに。」

話が脱線しそうになったが、全員が聞く体制になってボクは話し出す。

「竜と和美は中学からの心友だから、知ってるんだけど、ボクってすごい不幸体質なんだよね。昔のあだ名、不幸少女って呼ばれていたくらいね。」

「高校に入って三か月で二回も事故が起こっていたら、誰も疑わないわよ。」

「私なんて両方とも真近でみてるんだもん。」

「そうだね。それでね、不幸が起きるには理由があるんだ。竜がさつき怒ったのはそのためなんだ。明実にはちよつと辛いかもしれないけど、事実だし、これから無いと思うから気にやまないでね。」

そこで、一旦区切り、一呼吸置いて、明実に笑顔を向けながらも

一度話しだす。

「ボクに不幸が起きる時は、周りからそれを望まれた時なんだ。つまり、近くにボクのことを嫌いな人がいたら不幸が起きるんだ。逆に幸せになつて欲しいって思う人がいたら不幸は起きないんだよ。」

「それって・・・」

明実の顔から血の気が抜けて行くのが分かる。

「明実、この目を見て、ボクね。明実のことを危険に合わせたくなくて、態とあんな態度取っちゃってごめんね。竜、ボクのカバンからケータイ取ってくれるかな？」

明実は酷く落ち込みながらもボクの目を見てくれた。申し訳ない気持ちで一杯といった様子だ。

さらに、竜がストラップの着いたケータイを取り出しそれを見た瞬間泣き出してしまった。

「私、秋ちゃんに酷いことしちゃった。」

しばらく泣いていた明実が優花に慰められて落ち着いてきた時、明実はぼつりとそんなことを言った。

「すっごく傷ついたから償いとして、これからは絶対にボクの友達
でいてね。」

「秋、本気で許しちゃう気？」

「いやあ、というか、あんな態度とったボクが非難することできな
いでしょ。冗談めかして言ったけど、このことを話すのってすっご
く勇気がいるんだ。絶対に信頼できる人以外に、もし、このことが
バレて、不幸を願われたら、ボクの周りは危険で一杯になっちゃう
からね。」

「あほ。俺と一緒にあったら危険じゃないんわ、中学校の時に証明
されたやろ。」

「だって、俺と四六時中一緒にいるわけにもいかないじゃん？」

「四六時中一緒におっても俺はかまわんぞ？」

「授業どうするのよ。そう言ってくるのは嬉しいけど、高校に入
って、俺たち心友に頼り切ってたのが分かったから、遠慮しておく
わ。」

「変なところ頑固やな。」

「お父さんに似たのかもね。」

「えっと、ちょっといい？うちらそんな大事なこと聞いてちゃってよかったの？」

竜と二人の世界を作っていたボクに申し訳なさそうに優花が声をかけてきた。

「うん。ボク臨死体験する度に能力あがるらしいんだよね。だから、信頼できる人でできない人は区別つくよ。」

「それだけやないやろ。ってか、異常に回復はやくね？もう腕動いとるやん。」

「あ、本当だ。さっきまで指一本動かすのも痛かったのに。」

「敦、うち夢でもみてる？」

「俺も信じられないけど、現実だとも思う。」

「秋ちゃんっていったい何者？」

「不幸少女で、最強美少女で、芸術の女神で、最近ではツンデレクイーンなんてあだ名も着いたか？」

「それさ、やめてくれないかな？増える一方だよ。それに最強美少女ってのは無しになったじゃん。」

結局このあと、ボクの体調が落ち着くまで、持ってきたお菓子などを食べながらボクと竜と時々和美を交えながら、昔話をするようになった。初めての臨死体験の話を終えたあたりで、ボクの体調も良くなって来たので、集合時間に遅れるといけなかったので出発することになった。

「そろそろ、行かないと集合時間に間に合わないよ。これだけ前と距離があれば、歩きながらも話してできるしね。もし、誰かが近づいてきたらボクが分かるから。」

「せやな。ほれ。」

「え？竜？何してるの？」

「ん？お姫様抱っこの良かったか？秋くらい軽いつて言ってもずっとそれはきついで。」

「ちよま。その前になんでおんぶか抱っこで運ぶことが決まってるのよ？」

そう言つて、自力で歩こうとするが、先ほど打ちつけた時にあばらなどが折れているらしく、立ちあがるだけでもきついものがあった。

「むちやすんなや。揺らさんようにゆっくり歩いたるから乗れ。」

御姫様抱っこは流石に恥ずかしかったので、おんぶしてもらつことにした。周りの四人からの視線が痛い。恥ずかしすぎる。

「竜くん。つかれたら交代してあげるわよ。」

「リュック背負うのとかわからへんから、理由はわからへんけど、秋つてすげえ軽いからさ。」

「重いと言つたら絞めるからね。」

「軽いつていうたやん。こんだけ軽いんに、出るとこはどとるから不思議やわ。」

「エロいこと言っていないでキリキリ歩きなさい。」

「こら、余計に胸が押しつけられとる。」

「ね。秋ってこんな子なのよ。だから、悪気はなかったのよ。だから、これからは仲良くしてあげてね。」

「和美、こんな子って何よ。」

竜を絞める力を緩めて和美に抗議する。

「さっき、竜くんが色々あだ名を言ってたけど、一番今の状況にしっくりくるのはツンデレクイーンね。」

「ボクはツンデレじゃない!」

否定しながらも、真っ赤になった顔に、四人がくすくす笑う。

「ツンデレじゃ仕方ないわね。ストラップのこと許してあげる。」

「あんまりツンツンしてると、竜くん誰かに取られちゃうよ。」

「無いって、バスケ部でも上田の蟹津さんラブは有名だからな。」

気のせいかな？ボクが仲良くなる人って、みんなボクのことをからかって楽しんでる気がする。そんなにボクが真赤になるのがおかしいのか！！

「そんなに、可愛い表情で睨んでも駄目よ。秋の可愛さは異常なんだから。」

「可愛さって、和美の馬鹿！！」

「ほんまや、司がいつも俺に、秋が馬鹿って言うのが大好きに聞こえるって意味が今わかったわ。今の馬鹿は大好きに聞こえるやん。」

「余計なことを言うな。」

「ホント？秋は私のこと大好きなの？もっと、言って」

「秋ちゃんも変な子だけど、和美ちゃんや竜くんも個性的よね・・・」

「うちもそう思う。でも、不思議と嫌な気はしないかも。」

「確かに。」

「俺も同じだ。高校生活楽しくなりそうだな。」

「ねえ、結局あなたの昔話途中で終わってるんだから、最後まで話さないよ。」

「今私と秋の愛情を深めてるんだからちょっと待って。」

「十分深まったからもういいよ。」

そのあと、竜の背中で身動きが取れないことを良いことに和美に撫でまわされて、大変だったが、優花が話をせっついたりしたことあつて、六人で話しながら、目的地周辺へと着いた。

「ふうん。そんなすごい子だったんだね。どうりで猪に撥ねられても平気なわけだわ。」

「全然平気じゃないって、あ、そろそろ人がいる気配がするから、また明日ゆつくり話しましょ。竜もおんぶありがとね。もう平気だから。」

「ちよま、平気なわけ・・・ありえへん。」

「ほんと、自分でも人間かどうか怪しく感じてきたよ。」

自力で立って歩き出したボクに啞然とする竜に、ボクも肩をすくめて応える。気を失ったはずなのに、自力で立ち上がれるように回復したこともそうだが、なんだか最近の自分の体の構造に驚いてばかりな気がする。

「秋は女神だもの。久し振りに女神って呼んでもいい？」

「やめてよ。あんな恥ずかしい呼び方は中学までにしてよね。」

「じゃあ、メグってよんじゃおうかなあ。」

「もう、鈴じゃないんだから。あ、鈴って中学校の時の心友ね。」

「ええ、さっき話に出てきた美術部の子でしょ？それよりも”親友”と友達をさっきから使い分けてる気がするんだけど、気のせいかしら？」

「明実はするどいね。ボクらの心の友って書いて心友なんだよ。さっきのほら、あれがあるから、心友と認めた子には特別な証をプレゼントしてるんだ。優花が見たら絶対に喜んでくれるものだと思うよ。それについても明日はなぞ。」

「明日当然のように行っても平気みたいに言ってるけど、大丈夫なの？あんたさっき死にかけてるのよ？」

「うーん。たぶん平気。まだちょっと体痛むところあるけど、明日の朝には完治してるとおもうよ。ひよっとしたらお風呂入って寝る頃には元気かもね。」

「まあ、あんなだけ酷かった人が自力で歩いてる時点で疑えなくなっちゃったけどさ。やっぱうちあんなに興味あるわ。」

「そうよね。秋の秘密を明日はじっくり堪能しましょ。」

「和美が言つとエロいぞ。」

そんな風に談笑しながら集合地点まで歩いて行った。人が増え出してからは、明日のボクの家での予定に話題を変換して、心配する竜を自分のクラスに送り出すと、五人で笑いながらバスに乗り込んだ。

怪我を見ていた先生はもつと遅くなるだろうと思っただけらしい。集合時間にギリギリながらも間に合ったボクに驚いていた。先生に救急箱をもらつと、明実と優花が血に濡れた包帯などを取り換えてくれた。自分でできる場所は自分でやると言ったのだが、けが人は安静にしていなさいと言われてしまった。

実際先ほどよりも明実は手際よくなっており、優花も空手をやっていたため慣れているらしくすぐに終わってしまった。

「北条さんの包帯みた？酷い巻き方だったわね。」

「優花、あんまり大きい声出さないの。さっき、秋ちゃんに約束したばかりでしょ。」

「でもさ、悔しくない？危ないところを助けてもらつたっていうのに、お礼もなければ、むしろ、突き飛ばされたことに怒って周りに言いふらしてるらしいわよ。」

「北条さんはプライドが高いみたいだからね。まあ、それも個性だからいいんじゃない？ボクの悪い噂さえ流さなければ嫌いじゃないんだけどね。」

「あんだ、ホントにお人よしね。それが一番あんだにとって危ないことじゃないの。」

「だから、ボク一人だったら大抵の危険は怖くないって言ったでしょ。だから、今日だって、竜と合流するまでは、少し距離を置いて歩いてもらったんだから。」

「あのねえ。一人で歩いてて、嫌われてる人に近付いたとたんその人をかばって死にかけてたら、全然安全じゃないのよ。」

「動物が来るなんて思わなかったんだもん。落下物がないように木が無いところで追い抜く予定だったんだよ。」

「いいわけしないの。」

「ごめんなさい。ってなんでボク優花に叱られてるんだろう。」

「あんだが、危なっかしいからでしょ。」

「優花って喧嘩した時もそうだったけど、保護欲ってというか母性本能ってというか強いよね。」

「もう、しらん。心配してあげてるのに。」

「ごめんごめん。ありがと、優花。」

「いいわよ。それよりも明日は楽しみましょうね。」

優花の方から明日の話題に話をふってくれたので、そのまま、ボクも流れにのって、家族のことや、中学校の思い出を交えながら明日、ボクの家みんなを呼ぶ話をした。

「あれ？明実って明日来れるの？」

「今さう？」

「いやあ、なんか当然のように話してたから気付かなかったけど予定空いてるなら来てよ。」

「当然行かせてもらおうわ。」

明日が楽しみだ。

チャプター41（後書き）

お久しぶりです。

霞さんが本編に登場しましたよ。

え？それ以前の三回の臨死体験についても洋司さんを出せて？

ダ・メ

洋司さんの人気があるのは理解してるのですが、その間話をそらしたりしているだけで、特に書きたい内容がなかったのです。むしろ、遠足で遠出をして霞と話をした方が真相に迫る話だったので挿入しました。

この話があった後になら洋司さんだしても面白いかもしれませぬ。高校での秋の地位が定着してしまうと、また以前の中学生編ように臨死体験をする機会が減ってしまうので、一年生は何度も危険な目にあってしまいます。

今回のテーマは秋の正体について、前後の会話なども含めてA K I には中々うまくかけたと思います。

それでは、皆さん41話を読んでいただきまして本当にありがとうございます。ありがとうございました。

チャプター42

優花の暴走

「ええ〜???お兄ちゃんがボクに嘘をつくなんてえ。」

秋が武満に対して、奇声をあげたのは、今日友達を呼ぶから、車を出してくれるように頼んでいたのだが、真美子とのデートがあることを忘れており、朝のこんな時間にも関わらず、キャンセルをしたからだ。

「わかった。ちょっと待ってね。」

そう言うと、秋はケータイを開き、メールを打ちだす。この春買ったばかりで、使い始めたばかりとは思えない速度で親指を動かすと、メールが終わったのか、ケータイを閉じる。

「ボクとの約束を破ったことを後悔させてあげるね。」

「悪かったって、真美子との約束が入っているのを忘れてたんだから仕方ないだろ?」

「仕方がないと思うのは武兄ちゃんだけだよ。さあ、朝ご飯食べましょ。早く食べないと抜きになるよ?」

そう言つて、秋は朝食を食卓に並べると、自分も席に着いた。今日は休日なので、家族みんな揃つてご飯を食べる。

これは利也のこだわりだ。平日の朝は出かける時間がみんな違つので、それぞれ順番にご飯を食べるが、休日や夕飯などは、できる限りテーブルを囲んでたべるようにしている。

「いただきます。」

武満も、事情をつかめていないが、秋が作ったご飯を食べだす。お味噌汁、鮭、漬物といった純和食の料理に家族が箸を伸ばす。

ピーン ポーン

朝早くから、来客のようだ。普段なら率先して向かう秋が不機嫌なため、武満は食べかけのごはんを置いて、玄関に向かう。

『全く、武兄ちゃんは、新聞の料金くらいお金もって出て行かない

と、「ご飯食べられなくなっちゃっわよ。えへ。」

武満が玄関を開けると、新聞の料金の徴収で、お財布を取りに戻って、払い終わると、武満はもう一度、ご飯を食べようと、席に着いた。

ピーン ポーン

「今日は、やけに多いな。」

武満は疑問に感じながらも、もう一度玄関に向かうと・・・

「おはよう武ちゃん」

「真美子！？迎えに行くから、家で待ってればよかったのに。」

「あら？迎えに行くのは、秋ちゃんの友人じゃないの？」

「まさか、さっきのメール。」

真美子がケータイを開いて秋からのメールを武満に見せる。

「今すぐ来てください。武兄ちゃんが真美子さんの約束を破ろうと
しています。真美子さんとのデートがあるのに、ボクの友人を迎え
にいくと約束しました。一日中付き合っただけでやるなんて言っていま
した。」

「ちょま。なんじゃこりゃ!?!」

「待つてほしいのは私よ。武ちゃん? どういうことかしら?」

このあと、武満は、真美子にこっぴどと絞られ、秋は素知らぬフリ
でご飯を食べ終わると、片づけを始めた。武満の食べかけの朝食も、
ラップをして冷蔵庫にしまっってしまった。

「真美子、秋ごめんなさい。許してください。」

朝食まで取り上げられた武満はついに説得をあきらめ、泣き落とし
にかかった。秋もそれで納得したのか、冷蔵庫から朝食を取り出す
と、味噌汁を温めだした。

「真美子さん。朝早くから呼び出してごめんなさい。朝はもう食べ
ました? ボクの作ったのでよかったですら食べて行きますか?」

「あらホントに？じゃあ、いただくかしら。」

武満と真美子は食卓に着くと、秋の作った朝食を食べだし、結局真美子も一緒に遊ぶということで話はまとまった。

「中学以来じゃないかしら？秋ちゃんの友達と一緒に遊ぶなんて？」

「そうですね。今日は司はいませんけど、竜とか知ってる子も来ますよ。」

「そうなんだ。楽しみね。」

「あ、真美子さんに作った浴衣取りに行きませんか？美術部の子が来るので、ボクの作品を見たいって言うてるんです。あの浴衣も是非見せてあげたいんで、真美子さんが良ければ見せてあげたいんです。」

「良いわよ。元々秋ちゃんが作ってくれたものだよ。」

「取りに行くのって・・・」

「もちろん武兄ちゃんが取りに行くんだよ。」

「当然ね。妹と彼女でダブルブッキングしてたんだもの。それくらいしてくれるわよね？」

武満は将来、真美子に逆らえないだろう。というか、蟹津家の親戚筋はみな女性の方が強いのもかもしれない。食事のあと、一度真美子さんの浴衣を取りに行き、良い時間になったので、高校に優花、明実、敦を迎えに行く。

三人は同じ中学出身で、高校までは定期があるので電車で来て、そこから秋の家まで武満の車で移動するのだ。竜と和美は、自転車で秋の家に直接来ることになっている。

「おはよう。ごめんだけど、今日お兄ちゃんとお兄ちゃんの彼女の真美子さんも一緒に遊ぶことになったんだ。いいよね？」

「え？年上の人はちょっと・・・」

「大丈夫だよ。高校みたいに先輩後輩言うような人たちじゃないから。お兄ちゃんは特に問題ないし、真美子さんは料理上手だから、一緒に特訓できるよ。」

「秋がそういつなら仕方無いね。私たちは、電車が高校前の駅に着くわよ。」

「了解。時間通りに行けると思うから。」

迎えに行く車の中で明実とメールのやりとりをする。向こうも遅刻しないで来たみたいなので、問題なさそうだ。

「おはよう。これが武兄ちゃん、その彼女の真美子さんだよ。」

「「「おはようございます。」」」

「そんな硬くならなくてもいいよ。竜や秋にしょっちゅう足として使われてる兄だけど、よろしくね。」

「武ちゃんは、秋ちゃんのお願いをきちんと断らなきゃだめじゃないの。」

車に乗り込んだ三人に、今日武満や真美子が一緒に遊ぶことになった経緯を説明していると、緊張していたのもほぐれたのか、自然な会話をすることができるようになった。

「今日のはあなたの作品みせてくれるんやろ？うちもいくつか写メで撮ってきたよ。」

「ホント？見せて見せて」

優花のケータイを見ると、データフォルダの中に様々な絵画があった。優花らしい大胆なものから、繊細なタッチのものまで、いろいろなものに挑戦してたのだらう。しかし、絵画ばかりで、秋が作ったような装飾品や浴衣などといった物はなかった。

「優花って絵が多いんだね。」

「美術部ってそんなもんじゃないの？秋は絵以外を作ってたの？」

「ボクの中学文化部って吹奏楽しかなかったから、自分たちで立ち上げたんだ。そんな経緯もあって、芸術作品なら全部ノンジャンルで作ってたから。」

「へえ。そういう考え方もあるのね。うちも挑戦してみようかな。」

「家に着いたら色々見せてあげるよ。ところで、この秘密ってフォルダ何？」

データフォルダの中に小分けにされて、丁寧に鍵までかかっているものがあり、秋の興味を惹いた。

「ああ、それはうちと敦の写メとかがはいてるんだよ。暗証番号がわかるなら開いてもいいわよ。」

「ホントに？じゃあ……」

そう言って何か番号を押した秋は真赤になると、ケータイを閉じた。

「ごめん。やっぱりいい。」

「え？」

優花がケータイを確認すると、鍵が外されており、敦との絡みの写メが開かれていた。秋は優花と敦の誕生日くらいの情報なら知っており、ためにしに敦の誕生日を入力したら開いてしまったのだ。

「な、なんで開けちゃうのよー!!」

「そんな。ボクは開いてもいいって言ったから……。」

「ああ、秋ちゃんには刺激が強かったのね。」

二人して真赤になってしまい、その様子を明実が指摘する。敦は座席の状态的に何が起こったのかあまり理解していない様子だ。

「あんたって竜くと付き合ってるんでしょ？こづいつこと無いの？」

「そんなのあるわけじゃないか。」

「秋ちゃんと竜くんは清らかな関係だもんね。」

「ま、真美子さん。」

結局そのあと真美子と明実、復活した優花に冷やかされながら蟹津家へと向かった。車の中は武満と敦がいるにも関わらず女の子たちの独壇場となり、恋愛話で盛り上がることになる。

「へえ。これが秋ちゃんの家かあ。」

「田舎だから土地は多いからね。」

秋の家は街に住んでいる優花たちの家よりも大きな佇まいとなっていた。秋の家の周りはどこもこんな雰囲気なのでそれほど意識していなかったが、優花たちからしたらちよっとした豪邸のように見えたようだ。

「そんな口開けてないで中に入ろう。」

「上田と長田さん待たなくていいのか？」

敦は二人のことをまだ良く分かっていないようだ。

「ああ、大丈夫だよ。たぶん二人ならボクがいなくても中に勝手に入ってくるからさ。」

「そっか、中学から一緒っていったもんな。」

「和美は中学からだけど、竜は幼馴染ってやつだから、今さら遠慮なんてしないよ。」

「そうなんだ。あんたと竜くんはそんな関係だったのね。」

「昨日も遠足の時に話したじゃないか。竜と司って子がボクの幼馴染だよ。ずっと一緒にいる心友だったんだ。」

「あ、そう言えばあんまりにも元気だったから忘れてた。あんた大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だよ。あれくらいの怪我すぐ治るって言ったじゃん。」

「いやいや。あれぐらいで済むレベルの怪我じゃなかったから。」

「明実は心配症だなあ。ボクと仲良くするならもうちょっと覚悟しておいた方がいいよ。そこらへんも部屋でゆっくり話すね。とにかく中に入ろうよ。」

秋に促され、入って行く。武満と真美子はもう既に中に入っており、玄関の前で立ち話をしていた面々も中に入って行く。ところが、秋は突然止まると、先に優花たちを中に入るように促した。

「おかえり〜秋!」

「ちょっと、私よ。明実よ。」

「ちえ。やっぱり秋にこの手は通じないか。」

「真奈美ちゃんで慣れたからね。壁一枚くらいならさっちできるよ
うになったよ。」

「それは慣れで、できるものじゃないんじゃない？あんたの話を聞
いてるとほんと飽きないわね。」

「竜はまだ？」

「竜くんはまだ来てないわよ。竜くんが来るまでに料理作っちゃい
ましようよ。」

先日優花に約束したとおり、今日は料理教室も行く。また、夕ごは
んも一緒に作って一日で二回の練習をすることで、優花に慣れても
らう予定だった。

「じゃあ、部屋に荷物とか置いてこようか。優花はエプロン持って
きた？」

「うん。持ってきたよ。」

そろそろ五人でボクの部屋に歩いて行き、部屋に着いた。優花たちは初めて入る秋の部屋に興味深々といった様子だが、荷物を置くと一旦部屋を出た。

「秋の部屋ってなんだかイメージと違って普通だったね。」

「優花の中でどんなイメージを持ってたのか気になるな。」

「オカルトのマニアだったり、あとは筋トレグッズで一杯とか、美術品で飾られているのもありだったかな。」

そんな大量の需要を一つの部屋に求められても困る。実際自分で作ったアクセサリーなどもあるのだが、部屋の一角を使っているのみで、基本的には動物の本や教科書などが入っている本棚と、勉強机、ベッドなどがあるだけで、特に変わったものが置いてあるわけではない。

「オカルトの話は、リアルだから、図書館とか専門のところ調べないと資料がないのよね。あと、柔道止めてから筋トレなんてしたことないわよ。ボクの人体構造は自分でもよく分からないから。美

術品とか言われると困るけど、自分で作った作品はまたあとでゆっくり見せるね。」

「おっけ。腹が減っては戦はできぬって言うし、とにかく料理よね。」

「戦ってなによ。優花と違って私たちはただ遊びにきただけなんだから。」

優花の料理に対する意気込みに反して、明実はのんびりとした様子だ。性格も趣味も全く違う二人なのだが、何故仲が良いのだろう。

「優花が料理を覚えてくれたら、私のうちにご飯をたかりに来ることもなくなるわね。」

「そ、それは内緒って言ったじゃん。」

「そっだったけ？」「めんめん。」

どうやら、料理のできない優花は明実に餌付けされていたらしい。それ以外にも二人が仲良くなった経緯はあるだろうが、後でゆっくり聞くとしよう。

「優花、そのエプロン……」

「えへへ。家にあつたのこれしかなかったのよね。小学校の時に作つた以来だよ。」

「それにしても、そんなキャラ物エプロンを恥ずかしげもなく着るとは、流石優花だな。蟹津さん。こんな彼女ですが、どうにか料理できるようにしたって。」

「大丈夫だよ。優花は美術部で活動してるなら手先もある程度器用だろうし。あとはやる気次第じゃないかな？」

「手先が器用ねえ。ある意味器用かもよ。まだ家庭の調理実習を経験していないから秋ちゃんも余裕でいるけど、優花の料理下手を見たら驚くわよ。」

優花の実力を知っている二人からもすごく不穏な響きが届き、嫌な予感がするが、秋はとりあえず優花と二人で台所に立つことにした。

「優花がどれくらいできるのか見るね。今日のお昼はオムライスにするから、とりあえず作ってみよう。」

結果は散々だった。一人前を作りきったところで、秋がストップをかけた。

「優花、料理に興味持ったことないでしょ？いつも手順とか、面倒で聞き流してたんじゃない？さっきから明実が指示出してるのにそれを守って無かったし。」

「え？ああ、うちってどうも苦手なものになるとやる気がでんくつて。」

「じゃあさ、今からボクが作るから、それを見ててよ。ついでに、海良中学の美術部は、みんなお菓子作りくらいならできるよ。料理だって芸術の分野だつてとある部長が言ったことがきっかけで、文化祭の時に毎年ケーキを焼くからね。」

「とある部長ねえ。」

そう言つて、秋は台所を使えるように片づけると、解説を入れながら作りだす。

「玉ねぎのみじん切りは、優花がやったみたいにいきなり切りだすんじゃないくて、こうやって先に細かくしやすいうちに縦横に切つてから始めるんだよ。デッサンの時も先にどんな風に描いて行くか決

めるでしょ？おおよその目印をつけながら野菜だつて切るんだよ。」

そうして、好きな美術のことに絡めて説明して作っていたら、優花はいつもなら飽きて途中で投げ出す大嫌いな料理教室を一通り覚えてしまっていた。

「さ、次は一緒に作ろうか。その前に、武兄ちゃん。さつき優花が作ったのはペコにあげてきて、流石にこれを味見した途端天国って可能性があったから味見もしなくてごめんね。」

「いや、秋の作ったオムライスの横に置かれると、料理に見えないしいよ。うちもこんな風に作れるかな？」

「大丈夫だと思うよ。優花の本気を見せてあげましょ。」

「いやあ。さつきも本気だったはずなんだけどな。」

そんなことを言いながらも、秋についてもらって、先ほど教えられたことを、もう一度説明されながら、作っていくと、秋のものよりは劣るものの、かなり美味しそうなオムライスが出来上がった。

「ホントにこれうちがつくったん？秋が実は横で作っててすり替えたんじゃない？」

「なんでそんなことするんだよ。できないこともないけど、優花の腕をみてこれくらいは作れると思ってたからね。」

「あの優花が作ったオムライスがおいしそうだ……」

「坂本くん。彼女が作った料理にその評価はないよ。とにかく味見も兼ねてこれは食べちゃおう?」

「ええの?俺もおなかへつとつたんやつて。」

「竜。いつの間に来てたの?」

「あんたこそ、彼氏に対してその反応はないよ。」

「冗談だつて。次はコツも覚えたいし、みんなの分一気に作っちゃおうから、この二つは味見として、食べてみましょうか。」

「「いただきます」「」

結果からいえば、どちらのオムライスも美味しかった。材料も同じ

だし、そこまで違いはなかったのだが、優花のオムライスは敦と明実が驚きながらも大半を敦と竜のお腹の中にいれ、秋の作ったものは、和美が一人占めしようとしたところを周りからスプーンが舞い降りて結局みんなで食べることになった。

「優花、本当においしいよ。優花のことこれからは料理下手なんて言えないね。」

「まさかあの優花がこんな美味しい料理を作ってくれるなんて。」

「二人ともオーバーよ。まあ、うちが本気を出したらこんなもんよ。」

「調子に乗ってんな。でも、本当に美味しかったぞ。」

敦の言葉に優花はご満悦だ。今まで下手だといわれ続けてきたのが、優花にとって料理を作ることを嫌う原因になっていたのだろう。嫌いじゃなくなった料理は今後伸びて行くに違いない。

「竜くん。知ってた？前世の秋の恋人らしいのよね。あの二人、明実ちゃんも入学して早々助けてるし、優花ちゃんもこうして料理のことで仲良くなってるでしょ？たぶん本当だったと思うのよね。」

「ああ、秋は本当に女の子にもててたんやろうな。」

「それにしても、多すぎよね。」

「せやけど、秋がハーレム作ってたんやないのは分かるで、今の秋を見たらわかるやろ？」

「それは、確かにそうなんだけど、やっぱりそれだけ危険なことが多かったってわけでしょ？どう考えても昨日みたいなことがたくさんあったのよ。」

「うーん。でもな、秋から聞いたんやけど、前世の記憶とかもだいぶ甦ってきたらしくって、そうそう問題が起こるとは思えやんぞ？」

「秋一人なら、どんな危険も怖くないわよ。昨日だって北条さんをかばって無かったらきつとよけられたはずよ。」

「そこらへんは、叱つたらないかな。ほんまに自分のことをもうちょっと大切にしてくれな困るっつもの。」

「昨日も心配で寝れなかったんでしょ？遅刻した言い訳はあとで考えておくのね。」

「そんななんいらんわ。秋にどんな言い訳したってばれるんやから正直に心配させるなって言うだけやし。」

「竜くんらしいわ。そうね。その方が秋にとっても良い薬になるかもしれないわ。」

「お〜い。竜、和美。できたよお。お昼ごはんにしよう。」

食卓に着くと、先ほどまでなかった。コンソメスープだったり、サラダだったり、色々なメニューが増えていた。

「すごいでしょ。優花に指示出しながら片手間で秋ちゃんが作ったの。私も料理できると思ってたけど、秋ちゃん見てたらまだまだって思ってたわ。」

「毎日作ってたらこんなもんだって。さあ、温かいうちに食べちゃおう。」

「いただきます」

武満と真美子も入れた八人は優花と秋が作った料理を食べながら、談笑を始める。武満や真美子に昨日あったことを説明し、みんなで

秋のことを心配したり、叱つたりしたが、愛情あふれる言葉と美味しいごはんのおかげで、嫌な気分になった者はいなかった。

「さて、お腹も一杯になって、秋の説教も終わったことだし、部屋に行こうか。」

「なんで、武兄ちゃんが仕切ってるんだよ。」

「まあまあ。でも、さっきちらっと見ただけだし、あなたの部屋早くみたいわ。」

「じゃあ、移動しよつか。八人も入るなんて、中学校以来だね。」

「あの時みたいに怪談でも始めるか？」

「真美子さん。助けてえ。」

そんな会話をしながらも、ボクの部屋に移動となった。

チャプター42（後書き）

一日前に臨死体験をしているとは思えないほどの和やかな雰囲気です。本当は美術品も絡めて優花の暴走にしたかったのですが、長くなりそうだったので一旦カットします。

今回のテーマは、優花と秋の関係です。高校編での優花の存在はとっても大きくなる予定なので、ここで秋と仲良くなってもらふ必要がありました。さらに、敦が加わったことが後々大きな影響を与えます。

それでは、42話読んでくださってありがとうございます。

チャプター43

高校初の心友の証

ボクの部屋にみんなが着くと、とりあえずボクの作品を優花に見せることになった。

「とりあえず、その壁にかかっている絵がまず二年生の時のでしょ。それから・・・」

ボクは中学校の三年間で、様々な作品を作ったが、真奈美ちゃんたち後輩と校長先生をはじめとする教師たちの希望もあって、多くを学校に寄付する形となった経緯をかいつまんで話し、自宅に持って帰ったものが少ないことを聞かせた。

「なるほどね。美術部発足時の部長の作品だから、どうしても記念に欲しいって言われたのね。」

「この絵も実は学校に飾りたいって言われたんだけど、これだけはどうしても持って帰りたかったから、その代わりとなる作品を描い

たり作ったりで大変だったんだよ。」

「秋の作品はどれも素敵だったけど、やっぱりこの絵は素敵よね。どうせなら私もここに載っていてほしかったけどね。」

「そうだね。今描いたらまた違った構図ができるのかもしれないね。そうそう、それでね。」

ボクはこの絵のタイトルと、由来について説明しながら、他にも小物や、持って帰ることができた絵、あとは浩太が主に撮ってくれたアルバムなどを出してきて、中学時代について説明していく。

「へえ。中学の時はこんなだったんだ。合宿かあ。いいなあうちの中学の美術部はそんなことできなかったからね。」

「ボクたちも、学校側は許可をだしてくれただけだよ。部費は現地調達だったんだから。」

「現地調達って、このコンテストのこと？凄過ぎるわよ。」

「事前準備を怠らなかつたら、意外と採れるもんだよ。この時の浴衣は流石に学校側もお金を出していなかったから、持って帰ってきたんだ。見てみる？あと、写真にはないけど、真美子さんのために

「このあと作ったのがあるんだけど、それもどうかな？」

「見たい見たい」

浴衣の話題になると、優花よりも明実の方が話に食いついてきて、色々な質問を投げかけてきた。

「すごい。綺麗な浴衣。ねねお願いがあるんだけど・・・」

「材料費結構高いよ。」

「う・・・」

「この手の質問は何度も受けてるからね。明実がコンテストに出て賞金もらってきてくれるんだったら、喜んで作るよ。」

「それはちょっと・・・」

明実とそんな会話をしていると、浴衣にあまり興味の無かった敦が合宿の写真の一枚を指して秋を呼ぶ。

「蟹津さん。これって、合宿とはいえまじやないの？」

その指先には緑の髪をした秋の様子が写されていた。そこで結局秋の体質の話に話題が移り、遠足の時と同様に、今度は写真なども使つて今までの体験などを説明することになった。武満や真美子などは、知らなかった話などもあり、興味深そうに聞いていた。

「なるほどね。臨死体験からこんな髪になりだしたわけだ。」

「そうなのよね。この時は油断して落ち易い毛染め使ってたけど、今は色も濃くなってきちゃったから、落ちにくいものを使ってるんだよ。」

「学校側はこのことを知ってるの？」

「一応校長先生などには、簡単にだけど、体質のこともあるから説明してあるよ。つまり学校の上層部は、ボクが良く不幸なことが起きる事実を知ってるから、あまり問題を起こすと、すぐに退学とかあり得るんだよね。」

中学までの義務教育と違い、高校側としても危険分子である秋に対して冷たい態度が目立つ。それでも高校に通わせているのは、秋の成績ならどの大学でも入れるだろうと見越し、有名大学に進学してくれたら高校としても嬉しいというメリットがあるからである。

「大変ね。もういつそのこと全部公表して、保護してもらった方はやいんじゃないの？」

「ボクはあくまでも普通の女の子になりたいんだよね。それに、公表の機会は前にもあったんだけど、その時も結局ごまかしちゃったんだ。」

「ああ、最強美少女の話やな。実際公表せんくて良かったと思うぞ。武ちゃんもそう思うやろ？」

秋の小学校時代の話にもどると、優花が怪訝な顔をした。

「それさ、うちも聞いたことあったから。一時期うちの海難中学で最強美少女は有名だったんだよ。」

「あらら、こんな近くにも知ってる人がいたか。あの時、誤魔化しちゃったけど、結果として自分の身を守ることになってよかったよ。まだ未熟だったとはいえ、第六感的なものを信じて良かったよ。」

「ええ、でも森君はあんたのこと良く知ってるはずよ。あの時一番熱心に調べてたのは彼だからね。当時いじめられていた森君は、小

学生で身長も体重も無い少女が日本一になったことに希望をもってファンになっただらいいわ。」

「なるほどね。ボクが森君に感じた嫌な雰囲気はそこら辺も関係してるかもしれないね。」

「でもさ、周りから嫌われたら不幸がおきるんでしょ？だったら秋のファンである森君がそんな感情をもつとは思えないんだけど？」

「ボクは今竜と付き合ってるんだよ？可愛さ余って憎さ百倍っていうじゃない？だからだと思っよ。歪んだ愛情っていうのかな？良くは分からないけど、そんなオーラを感じたかもしれない。」

「そんな風に思うなんて、サイテーね。本当に大好きなら、その人の幸せを願うのが大事じゃないの。」

和美はその辛い恋を経験しているので言及する資格がある。和美の思いを知っている秋はちょっと心配したような顔を向けるが、和美は笑顔でウインクしている。

「やけに実感こもってるわね。和美ちゃんってひょっとして？」

「そうよ。私は秋と竜が付き合う前は好きだったの。でも、付き合

いでしたらやっぱり両想いの気持ちを尊重しようと思ってね。だから自分の好きな人を取られたって秋の心友のままでいられるのよ。」

「そうだったの。和美ちゃんってあんまり話したことなかったから知らなかったけど、すごくいい子なのね。私も仲良くしてね。」

明実は、和美が竜のことを好きで、竜を取られた秋と心友でいられると勘違いしている様だが、これについては、秋も同意の上なので、誤解させたままでいる。

「そうやったんや。俺は何も知らんかったわ。まあそれでも秋の心友でいてくれてありがとうな。」

ここにも誤解した人間がいた・・・まあ、竜の鈍さは天下一品なのでこのままでいいだろう。

「それにしても、森君については結構気をつけておかないといけないんじゃないの？秋の秘密なんか気づいたら結構危ないかもしれないわよ？」

「確かにね。でも、これだけボクの味方がいるんだから、森君一人がボクのことを恨んだって怖くないよ。前にも言ったけど、不幸を願う人と同じだけの幸せを願う人がいれば何も起こらないのが普通だからね。」

秋は楽天的にこう言ったが、数の差というものはすごいもので、それらを味方につけ今後高校生活が危険なものになるということはまだ知ることはできなかった。

「とりあえず、少しでもボクのことを大切に思っていてくれる人がいれば、それだけでも危険の度合いが違うんだ。たとえばね。」

ここからまた、中学時代の事故や臨死体験の話になって行く。心友たちが側にいる時とない時での事故の種類の違いから、できるだけ側にいない方が秋も対処しやすいといった竜や武満からの助言まで聞いた。

それぞれの力量にあった接し方が話し合われ、優花は格闘技経験者であることもあり、近づくことができるが、明実や和美などは、不穏な動きがある時は少し離れたところから見守ることになった。

「やっぱり一人でいる方が、どんな危険が起こっても対処できるからそれもいいんだけどね。」

「まあほう。そんなん言うたって嫌われてる子をかばって臨死体験したばっかやるが。」

「それは言わない約束だよ。第一何ともなかったんだから言いつこなしだよ。」

「秋ちゃんごめんね。知らなかったとはいえ、私が秋ちゃんのことを悪く思って無かったらもっと小さい猪だったかもしれないわね。」

「小さいとかそういう問題じゃない気がするけど、まあ、危険なところが少なくなるのは確かだろうね。」

「明実も坂本君も、もうそれは終わったことなんだから言わないでよ。今こうして、仲良くなれたんだからそれでボクは幸せだよ。それにさつき、できることできないことがあるって言ったばかりですよ。本当に危険察知できない人は、ボクの周りにいると危険だから気をつけてね。」

「やっぱ不安だな。俺の側におつたらなんも起こらへんのやから、学校側に掛け合ってクラス替えしてもらわへん？」

「そんなことしたら、余計な敵を増やすだけだよ。でも、二年からは同じクラスになれるように一応申告だけはしておくね。文理どちらでもボクは構わないから、竜の進みたい方向に合わせるよ。」

二年生から、文系と理系でクラスが分かれており、それを竜とそろ

えることにより、学校側に申し立てれば、同じクラスになれる可能性が出てくる。

「それって、将来についてきちんと考えて決めなくてもいいの？」

「秋は問題ないわよ。将来は家庭に入るのが決まってるものね？」

「ちよま。そんな理由では・・・」

和美の発言に真赤になる秋だったが、その様子を見ている周りはそれを楽しんでいる様子だった。

「秋ちゃんは竜くんのお嫁さんが将来の夢なのね。私も誰かさんが社会人になってくれたら、それも考えておかなくっちゃね。」

「真美子はそんな女の子じゃないだろ？社会人になってバリバリ働きそつな気がするんだけど・・・」

武満と真美子もそれぞれの人生計画があるらしく、それらについて話をしていた。真赤になった秋と状況をやっと理解してはにかんでいる竜に他の面々はやし立てる。

「竜くんは今でもお弁当作ってきてくれるんだもの。将来は三食秋のおいしい料理が食べれて幸せよね。」

「上田は幸せ者だよな。かわいい幼馴染と将来を誓い合っつてか。」

「ちょっと、うちとあんたも幼馴染でしょうが。」

「そこは、蟹津さんみたいに美味しいお弁当が作れるようになってから言っただけだよ。」

「お昼のオムライス食べたでしょ。うちだって料理上手になって見せるわよ。」

それもあり続かずいつもの夫婦喧嘩が始まった。敦と優花が痴話喧嘩を始めたことにより、余裕を取り戻した秋はとりあえず思いつく反論できる材料を見つけ、おずおずと口に出す。

「ボク、大学受験できるか分からないから、文理選択は大切じゃないんだよ。高校みたいに受け入れてくれる大学があるとは限らないし、それに、文理どっちでも受験させてもらえるなら受かると思うしね。」

「それはうちみたいな勉強ができない生徒に対する嫌味かあ。」

「優花の場合勉強ができないんじゃないかと、しなだけでしょ。優花とは近くにいるのも大丈夫なのが分かったんだから、ボクと一緒に勉強するよ。昼間の料理でも感じたけど、コツさえつかめば集中力はあるんだからきつと勉強も伸びるよ。」

「え？マジ？うちも大学とか行けるかな？」

優花は勉強が苦手で、専門に行くか、高卒で働くことも考えていたが、秋の言葉によって明るい未来が見えてきた。

「ボクの言葉が信じられない？」

「いや、あなたの言葉なら信じられる気がするわ。あんたじゃなきゃ不幸少女だつて信じてないって。」

「ありがと。じゃあ、明言してあげる。ボクと一緒に勉強すれば、優花は現役で国立文系合格くらいのレベルは確保できる。」

自身を持って言い切った秋の様子に周りから驚愕の声が上がる。T高事態が進学校なので、国立を受ける生徒もいるが、それでも学年に数名といった雰囲気だ。それを現役で合格させて見せると言った秋の言葉はすさまじいもので、クラスでもそれほど頭が良い方では

ない優花にそんなことができるとは思えない。

「坂本君も明実も一緒に勉強しようね。文理違って、ボクと一緒に勉強してほしいな。」

「するする。なんだか知らないけど、秋ちゃんがそう言つと本当にできる気がするもの。」

「信じられん。優花だぞ？」

敦は、優花の学力を知っているので、まだ信じきれていないらしい。しかし、秋の顔はそれを当然と言った様子で見つつも、棚からあるものを出して来てこう言った。

「とりあえず、一学期の期末で証明してみせるよ。それまでは暫定つてことで良いから、これを受け取ってくれないかな？これは、ボクにとって命の次に大事なものだ。」

そう言ってみんなに差し出したのは和美が仲間に加わった時に作ったミサンガと同じものだった。色は赤を中心として、白と緑が入ったものだった。

「あれ？今回ののはみんな同じ色なのね。」

そう言つて、和美は自分の持っているミサंगाを周りに見えるようにして差し出した。

「うん。それぞれの好みに合わせたものをつつても考えたんだけど、色について調べていたら、心友の証にピッタリな色つてこの三色か
なつて思つて、これからはこれで統一することにしたんだ。」

「これが噂の心友の証なのね。ねえ秋ちゃん。よかつたら私にも一つくれないかしら？」

「もちろんです。真美子さんは司のお姉さんだし、本当にお世話になつてますから。」

そう言つて秋は差し出したミサंगाの一つを真美子に渡す。真美子に渡した後に敦・優花・明実の分が残つたことから、元々真美子にも渡すつもりだつたらしい。

「じゃあ、遠慮なく。これもあなたの手作りなんだろう？うちも絵ばつかりに固執しないで、いろんなものに挑戦してみようかな。」

「うん。優花だつたらきつと素敵な作品が作れるよ。またボクも暇な時に美術部の活動に参加してもいいかな？優花に作品を紹介して

たらまた自分でも作りたくなってきた。」

「もちろんよ。その時は、この心友の証にかけて守ってあげるから、堂々と入ってきなさい。」

優花はすでに秋と心友になり、今後裏切らないことを承認したようだ。秋と出会ってからそれほど時間はたっていないが、喧嘩をしたりと、濃い時間を過ごしたためか、そこには絶対の信頼のようなものがあつた。

「私は優花みたいに守ってあげることにはできないかもしれないけど・・・」

そう言って手に取つたのは明実だった。明実には一時期嫌われていた自覚があつた秋にとって、そのことはとてもうれしいことであり、そして、今後の高校生活で楽しみに思えることだった。

「明実、もうプレゼントを捨てたフリなんて絶対しないから、仲良くしてね。」

「ホントだよ。あの時は本気で傷ついたんだからね。」

そう言って笑つた明実の顔は何かを決心した顔つきだった。きつと、

二度と手放すことはない真剣な気持ちがあったのだろう。

「二人にはかなわないな。俺もまだ納得したわけじゃないけど、なんだか蟹津さんには逆らえないんだよな。」

そう言つて、手に取つたのは敦だった。三人の中では一番納得ができていないのも敦だろう。二人と違い、自分の意思で仲良くなるうとしたわけではなかったのが原因なのか、今だに府に落ちないところがあるのは仕方がないが、出会いはどうであれ、これから仲良くなるっていけば、秋との溝も埋まることだろう。

「竜と優花がいるからあんまり仲良くなりすぎても困るんだけどね。心友は心友だとおもうよ。男女間の友情は無いってジンクスでもあるのかな？」

「優花にそれは聞いてくれ。」

幼馴染で親友だと思つていた優花と結局付き合うことになつた経緯などが、今後上手な距離を保てるのか敦を疑心暗鬼にしているらしい。

「あれじゃね？秋に手を出したら、優花と俺っていう格闘技経験者から容赦ない攻撃が待ってるから気にしなくてええんとちゃう？」

「その前にボクが許すと思う？」

「あ、なるほど、じゃあ心配ないか。」

当事者である。秋、竜、優花はそれぞれ楽天的であり、それが逆に敦の気持ちを落ち込ませる。

「冗談だって、本当に信頼してなかったらこれは渡せないものなんだから、自信を持って良いよ。」

同い年の女の子にそう言われただけなのだが、なぜかそれがとても偉い人から素晴らしい言葉を言われたかのような錯覚を覚え、安心している敦がいた。

秋のカリスマ性はこんなところでも発揮されており、秋が本気を出せばそれこそ自分に危険が及ばないくらい味方を作ることには可能なのかも知れないが、それをしようとは思わない秋だった。

「心友になったことだし、呼び方も変えましょ。」

そんなことを言ったのは明実だった。

「ええ？このままでいいじゃん。ボク的には二つ名で良い思い出がないんだけど・・・」

「でも、中学の時の心友はメグって呼んでたんでしょ？私たちだつてそうなのあってもいいと思うの。」

メグというのは、当時ファンクラブの影響で女神なんて呼ばれていたところから出ており、秋にとっては気恥ずかしい思いがした。

「メグって呼んでたのは鈴だけだし、女神なんて中学校の時は絶対に嫌だからね。」

「分かってるわよ。」　「っーちゃん」ってどっかしら？」

「なんでっーちゃん？」

「もちろん。蟹津の”っ”に決まってるじゃないの。」

「そっか、ボクはてっきり、高校から呼ばれたしたツンデレクイーンから来たのかと思ったよ。」

「ギク。」

「.....」

「ねえ、つーちゃんはやめない？」

「じゃ、じゃあ、クーちゃんってのはどう？」

「ちよま、もうツンデレクイーンから来てることを隠そうともしないつもり？」

「えへへ。でもクーちゃんなら可愛いじゃない。」

「やだやだ。ボクはツンデレなんかじゃないもん。」

「あゝ。私ストラップ捨てられた時にすっごく傷ついたんだけどなあゝ。」

「ちよま、それを脅しに使うのは卑怯だよ。」

「ねえ。クーちゃんとつーちゃんどっちがいい？」

明実の様子に拒否不可能なことを理解する秋は、とりあえず、ツンデレという響きとクイーンという響きで恥ずかしくない方を選択する。

「……つーちゃんをお願いします。」

「分かったわ。じゃあクーちゃんって呼ぶわね。」

「ちよま。さっきの質問はなんだったんだよ。絶対クーちゃん決めてたでしょ?」

「まあね。クーちゃんって響きなんだか可愛いくって気に入っちゃった。」

「じゃあうちがつーちゃんって呼ぶつか?」

「勘弁してええ。」

その後、結局明実は、クーちゃん。優花と敦はつーちゃんと呼ぶことが決まり、秋もこれまで坂本君と呼んでいたのを敦君と下の名前で呼ぶことになった。

夕ご飯も昼と同様に秋の指導のもと優花が腕をふるい、休日デートに出かけた両親を放っておいて八人で済ませると、帰る時間となってしまう。帰りは武満が一人、車で三人を送っていく。

三人が帰ったあと、部屋に残っていたのは秋、和美、竜、真美子の四人。

「なんかさ、ボクの周りってドSが多い気がするんだけど気のせいかな？」

「ドSってなんのことや？」

「竜くんには分からないわよ。秋ちゃんも苦労するわね。あ、私もクーちゃんかつーちゃんって呼んだ方がいいかしら？」

「真美子さん。それだけは勘弁してください。」

「そんな秋も可愛いわよ。」

チャプター43（後書き）

高校初の親友の証登場です。

今回のテーマ「心友」です。

優花との料理シーンからの流れで、心友の証を渡すこのシーンを思い描いたとき、なんだかひと段落したようなホツとした気持ちになりました。みなさんもそう感じていただけたら嬉しいです。

話の途中に出てきた不穏な気配は二つ、気づいた人は、こっそり個人的にメールか何かをください。ひとつは皆さん分かんと思うのですが、そちらも重要なのですが、もう一つの方がかなりやばいです。

それでは、みなさん43話を読んでいただきましてありがとうございます。이었습니다。

チャプター44

秋のお勉強会

週明けから中間テスト返却が行われ、結果が出た。それによると、ボクはクラスだけでなく、学年でもトップで学年の次席が竜だった。その次に北条さんがおり、今まで勉強で負けたことがなかったらしい北条さんの恨みを買うことになったかもしれない。

クラスでの順位では、4番に明実10番くらいに和美と敦、最後から二番目に優花といった様子だ。ボクのクラスは成績が良い生徒が集められているので仕方がないといえばそうなのだが、優花の順位は学年でも下から数えた方が早く、ちよつと問題だ。

「だいたいみんなの成績は分かったわ。和美も、受検の時にある程度レベルアップしたとはいえ、高校に来たらもうちよつと頑張らないと厳しいね。」

和美は、「高きりぎり」といった成績から余裕で合格できるほどまで、ボクとの勉強会でのばしてきたが、それでも昔からボクと一緒に勉強してきた司や竜のようにはいかなかった。

「この成績見ただろ？優花が国立なんて無理だって。」

「今のままなら確実に無理だね。でも、ボクは優花が受かるって信じてるよ。まず、ボクの勉強方法から説明するね。」

そう言つて、ノートを取り出した。ボクは期末に向けてのそれぞれに合った勉強プランを考えておいたのだ。

「まず、全員に共通しているのが、国語力と英語力の強化だね。国語が上がるとすべての教科の点数が上がるからね。」

「え？国語の勉強なんて漢字を覚えてくるだけじゃないの？」

結構こういう人は多い。というか大半がそうだから仕方がないのだが、全体の成績を引き上げるのに一番大事なのは実は国語だったりする。母国語であり、それほど勉強の必要がないので忘れがちになつているここをポイントにして説明する。

「問題つて全部国語で書かれてるでしょ？ということとは、問題を読み解く力がついて、全部の教科の底上げにつながるんだ。国語を勉強すると、国語よりも先に理科とか社会の点数があがるんだよ。あと数学も多少あがるかな。」

「へえ。そう言われてみたら、どんな問題も国語で問題出されてる

「んだから当然だよな。」

「勉強ができない子の多くは、問題の意味を理解し切れなくて落とすことが多いからね。単語などを暗記するよりも先にこれを重点的にして、その上で単語を覚えれば英語もスラスラ解けるようになるよ。」

そう言つて、それぞれに国語の問題を書き込んだノートを渡す。このノートを一冊やり切れば、それだけで人によってまちまちだが、平均10くらいは上がるはずである。

「次に大事なのが、そのノートの最初に書かれていることだね。」

そのノートには、勉強の極意が書かれていた。

「えっと。これ本気？」

「真剣だよ。というか、勉強の部分を他の単語に変えたら、そのままその極意につながるほど応用のきく言葉だけだね。」

「でも、勉強を楽しむつてそんなことができるならみんな嫌いになつたりしないんじゃないかな？」

「確かにね。その言葉は目標みたいなものだから、具体的にはそれぞれ指示を出していくよ。たとえば、家に帰ったら勉強しないでテレビばかり見ている優花は、クイズ番組みたいなテレビを見るように心がけるとかさ。」

「あらら、ばれてたのね。でもクイズ番組見ても成績あがるなら苦労しないと思うんだけど?」

「全部それだけで済ませたらもちろん成績下がるんだけど、テレビも見ないで勉強ばかりつてよりは楽でしょ?」

「まあ確かにそれはそうだけど・・・」

「大丈夫、テレビ見てる時にどうせケータイもいじるんだから、ボクにメールをくれたらいいよ。したら見終わった後にそのままずるずる勉強しないで、夜遅くまで見てるなんてこともないだろうしね。」

ボクは優花が陥りやすそうな勉強の失敗例を挙げてみた。優花もそんな経験があったらしく、素直にうなずいてくれた。

「じゃあ、私はどうやって楽しむの?」

「明実の場合は、おしゃべりとか好きでしょ？だから、休み時間とかに、問題の出しあいとかするといいと思うな。その時に優花から問題を出してもらおうようにしてくれると一番いいかも。」

「え？私がじゃなくて、優花が問題を出すの？」

「そつだよ。問題を出すのって、理解してないと出せないでしょ？だから出す方も出される方も力が付くんだよ。今回は優花のレベルアップが目的だから、明実が出してもらおうのが一番だとおもつ。」

「なるほどな。結構考えられてるんだな。じゃあ、俺はどうしたらいいんだ？」

「敦君は、一番いいのは優花からのご褒美をもらうことだね。テストで80点以上のもの一つにつき、一回何かをしてもらえるとかがうっ。」

「なんだそれ？勉強方法でもなんでもなくないか？」

「確かにそうだけど、目標があつた方が燃えるタイプの人間だから、これが一番だと思うよ。あとの細かい勉強方法については、一緒にやりながら理解してもらおうとして、大本となるのは勉強に対するやる気を出すことをみんなに話してるからね。」

「まあ、対策があるんだっいたらいいか。それなら、俺だけじゃなくって、みんな何かあった方がいいんじゃないか？」

「それもそうね。じゃあ、絶対評価的に、今の点数よりも上がったらボクからみんなに何かプレゼントするのでどう？敦くんはもちろんさっきの80点以上の数だけ優花に何かご褒美をもらってね。」

「それ私もすごいやる気出るかも、っていうか、中学時代それで秋の周りの人間みんな成績あがったよね？」

「確かにね。後輩も含めて一生懸命勉強してくれたね。勉強をする環境さえできたらご褒美なんてなくても平気だけど、今回は二か月くらいしかないし、御褒美ありにしようか。」

「何かな。秋のご褒美って私たちの好みを理解してるから楽しみなのよね。」

そのあと、中学時代にボクがみんなにプレゼントした物の話になった。話を聞いたみんなはそれぞれやる気が出たらしく、期末に向けて頑張ろうという気になったようだ。

「明実は今のもままでも点数が結構高いからこれ以上あげるのは大変

かもしれないけど、がんばろうね。クラス順位ではきつとボクの次くらいにはなれると思うよ。」

「私ってクーちゃんと違って、数学とか苦手だから、国語の勉強してもあまり意味ないかもしれないわよ?」

「クーちゃん……。まあ、一回騙されたと思ってやってみてよ。他にも期末までに色々な指示をその場に応じて出していくけど、今回だけは信じてよ。きつと明実が望んだとおりになるからさ。」

「私が望んだって?」

「優花や敦くんと一緒に進学できるとか?」

「ちよま。なんでそんな……」

「明実って面倒見いいじゃない? 優花と成績違うことを微妙にコンプレックス抱いてたでしょ? 昔から一緒にいるのに、家族から嫌味とかも言われてたんじゃない?」

「う……。確かにそんなこともあったけど、優花が頑張ってT高受かったの聞いてだいぶ薄れては来てるよ。」

「うん。その薄れてきた偏見を根本から覆してみようよ。見た目だけで判断する大人たちを見返してやるいいチャンスじゃないか。」

明実にも明実なりの苦悩があり、それは周囲との関係でとても難しい問題になっていた。昔からの友達である優花だが、金髪に染めていたり、素行が悪いこともあって、家族から反対されたり、友達だった子から優花と仲が良いと知られて離れて行った子もいるようだ。

金髪は変えなくても、勉強ができるようになるだけで、そんな周囲からの反発も薄れてなくなるかもしれないと、明実を励ますのだった。

具体的な目標ができてからの優花は今までとは別人のように勉強が楽しくなっていた。一カ月もすると、中学校時代に抜け落ちていた知識なども理解し、それによって授業が分かるようになってくると、授業にも集中できるようになっていた。

「あの優花が授業中に寝ないなんて信じられないわ。」

「今まで、わからなかったからつまらなかった授業も、わかるようになる楽しもんなんだよ。今は新しい知識を得ることに楽しみを覚えているからグングン伸びるよ。」

「クーちゃんの勉強会は本当に魔法みたいね。」

「そんなことないよ。本当にできない子を教えたりすることはできないからね。出来る子が勉強に興味を持たないでいるのが嫌だっただけだし。」

「それだけじゃないと思うな。確かに優花は高校受験の時もすごかったけど、今は勉強を楽しんでいるような気がするしな。」

「高校受験の時はボクには分からないけど、一つ悩み事が上手いくと、他のことも上手いくことってあるから、本当に充実した毎日を送ってるんじゃないかな？」

実際最近の優花は、美術部の方でもなかなか良い作品ができたらしく、中学まではありえなかつたらしいのだが、小テスト前でも勉強を欠かさず、眼に見えて成績が上がってきているらしい。

「確かにそうかもね。私だって、今は実感ないけど、中間よりも勉強がはかどってる気がするもの。」

明実は毎日予習復習をする子だったらしく、そのおかげで中間テストもかなり良い成績だったのだが、それ以上の効果がボクの提案している勉強方法で出ているらしい。今まで優花と遊ぶと家族から嫌な顔をされていたのだが、優花とボクが明実の家に行くといつも勉

強をしていることから、家族からの反発もないらしい。

「この前、クーちゃんが来たときなんて、お母さんが次いつ来てくれるのかしら。あの子といっしょなら優花ちゃんが来ても安心だわ。なんて言ってたんだから。」

「今まで明実の家でどんな風に過ごしてたの？」

「ええ？敦くんの話とか、主に恋話ばかりね。」

「今も変わらないんじゃない？ボクが行った時も竜とか敦君の話してたじゃん？」

「そうなんだけど、勉強もしているっていうことがお母さんには違うみたいよ。特に最近では優花の小テストの成績が上がりだしたって言ったら、あの子はいつかできるようになると思ってたのよ。なんて、いい気なもんよ。」

「あちら、結果的には良いんだけど、ちょっと複雑な心境だね。まあ親なんてそんなもんかもね。明実のことを大切に思って悪い友達を遠ざけていたつもりだったんだよ。きつと。」

「そんなものかしら？まあ期末前とかも私の家に来て勉強会開いて

よ。クーちゃんが一緒ならお母さんも安心して勉強会してると思っ
てくれてるみたいだからさ。」

「いやいや、本当に勉強会してるんだから、安心も何もないでしょ。
期末前に部活がなくなったら敦君も来る?」

「そうだな。このままだと、優花に追い抜かれちゃいそうだし、俺
もつーちゃんの魔法にすがろうかな。」

「敦君まで……」

先ほどから当然のようにクーちゃんつーちゃんと呼ばれている。一
か月前までは違う呼び方だったのだが、一か月もたてばボクも慣れ
てきたわけで、問題はないのだが、言葉の元を考えると、もろ手を
上げて喜ぶこともできず複雑な気持ちだ。

「秋。この前のノート全員終わっちゃったんでしょ?何か新しい問
題ないの?」

和美を含め、実は竜にもこの前のノートを渡していたのだが、二週
間くらいでみんな仕上げてしまい。その効果を知っている和美は次
の問題を求めてきた。

「あれ、手書きだと結構時間がかかるんだよね。武兄ちゃんのPC使ってプリントアウトできるようなもの作ろつかないか。」

「そう言えば、秋って今までパソコンとかあんまり使ってなかったわよね。」

「大学のレポートで使ったことで武兄ちゃんがPC買ったから、家に二台あるんだけど、どっちもインターネット繋がって無いから、パソコンの前に座る癖もないしね。」

「タイピングと違って苦手だった？」

「そうだね。今はまだ手で書いた方が早いんだけど、同じ問題をいくつも作るってなったらパソコンの方が早いかもしれないわね。」

追加の問題集を作る時に、今後はパソコンの利用も考えなくてはならず、みんなのためにできるところがまだまだあることを実感する。

「ねえ、クーちゃんって自分の時間は取ってるの？」

確かに、平日バスケット部のマネージャーで遅くまで残っていき、さらに朝早く起きてお弁当まで作っているボクの自由に使える時間はあまりない。休日も練習があったり練習がない時は明実の家に行つて

優花のお勉強会と自分のための時間はないように感じる。

「ボクの趣味ってみんなが喜んでくれることだから、これも趣味の一つだよ。あと、勉強に関しては、みんなに教えながら自分で理解しているってやつだから心配しないで、優花がそれでレベルアップしてるから納得いくでしょ？」

「一か月前まで友達いらなんて思っていた子の発言とは思えないわ。」

「違うよ。友達がいらじゃないんじゃないって、友達を危険な目に合わせたくないって思ったんだから。」

「うん。竜くんたちの苦勞がうかがえるわね。もう少し自分を大事にしてもいいんじゃないかな？」

「良く言われるんだけど、自分を大事にするからこそ、人に優しくできるんだって偉い人も言ってたから、人に何かができるのは自分に余裕がないとできないことなんだよ。だから、そんなに心配しないでもいいよ。」

昔から良くこれで叱られてきたが、その返しもボクは慣れたもので、こう返すと今までの人と同じように明実も安心した様子である。まあ、優花たちの成績があがり落ち着いたら自分の時間も取れること

が分かっているというのもあるだろう。

「それよりも、みんな成績が上が리そうだから、プレゼントを何にしようか悩んでるんだよね。時期も良いことだし、水着なんてどうかな？ 中学時代は結局作れなかったから、挑戦してみたいってのもあるしね。」

「え？ 浴衣みたいな完全手作りの水着を作るの？」

「そそ、生地とか止具がどれくらいの値段するのか分からないからまだ検討中だけど、そこらへんは優花と相談してみようかな。」

「でも、水着ってそんな簡単に作れるものなのかしら？」

「さっぱりわからない。作れるかどうかも、今から調べるから、もし作ることになったらサイズ教えてね。」

「それは良いけど・・・。私も水着新しいの買おうと思っていたら、本当に水着をプレゼントしてくれるなら嬉しいんだけど、高くないかしら？」

「うん。どうだろうね。いざとなったら止具とかも全部自分で作って安く上げてみせるよ。」

実際お店で買ったなら一着安くても2〜3千円する水着を竜の分も合わせて六つも作るのだから、結構な値段がするかもしれないが、そこは中学時代に浴衣を作った時と同様にうまくやるしかない。

完全オーダーメイドなので普通に買うよりも高くつく可能性もあるのでいざとなったらやっぱり水着コンテストという手も考えておかなくては、と考えていることは明実には今は伏せておく。

「浴衣みたいにコンテストで賞金なんてのはやめてよ？」

「あはは、そんなことするわけじゃないか。第一あの時は部活の合宿だったって言ったでしょ？それに、お金自体は結構あるから問題ないんだよ。あとはその払ったお金を罪悪感なくなるまで減らす方法を考えるだけだからね。」

実は、ボク個人の名義の通帳にはかなりの金額が入っている。小学校時代の大会の賞金だったり、コンテストの賞金だったり、中学時代に作品展などに投稿した懸賞金だったり、様々なお金が入っており、両親も自分で手に入れたお金なのでボクの名義の通帳に振り込んでくれたのは良いのだが、あまり無駄使いをしないボクとしては貯まっていくな一方だったのだ。

「クーちゃんのお家って大きかったし、実はお嬢様？」

「違うよ。実はさ・・・」

お金が貯まっていった経緯を告げると、明実から明らかにあやしむ目を向けられた。

「そういうのって、普通図書券だったり、中学生に相応しい金額のものじゃないの？」

「いやあ、出展した先は中学生用だったはずなのにいつの間にか審査員の人たちが気に入って、通常の出展会場とかに紛れ込まされたこともあってさ。そうになると金額が跳ね上がるんだよね。」

「芸術の女神ってのはそこから来てたのね。じゃあ、それでも有名になっちゃってるんじゃないの？」

「流石に本名は隠してもらったんだよ。中学生の作品だから認めてやるってのも嫌だからって言ったらすんなりペンネームを採用してくれてさ。」

「ペンネームって、漫画家じゃないんだからなんでそんなもの持ってるのよ。」

「必要は最大のなんとやらだよ。ペンネーム知ったら優花とかひよつとしたらボクのこと知ってるかもね。」

「え？ホントに？」

「うん。じゃあさ。いたずらとして、ボクのペンネーム教えてあげるから、この前握手してもらったとか言ってみてよ。」

「クーちゃん本人であることを隠して先に伝えるのね。どんな反応するか楽しみだわ。」

「そうだね。もし喜ぶ様だったら、ボクが美術部時代にお世話になった鈴さんに頼んで作った水着って言って渡すのもありかもしれないね。」

「それだと、水着について優花に相談できなくなるじゃないの。あれ？鈴って中学時代の同期の子じゃなかったかしら？」

「そうだよ。その佐藤鈴って子の名前を借りて”大木鈴”ってペンネームで作品作ってたんだ。逆に、鈴と浩太はボクの名前から、”須馬彰”って名前を出してて、こっちも一回だけんだけど、プロに交じって選考を受けたことあるんだよ。」

「私はいんまり詳しくないから聞き間違いかもしれないけど、前に優花がそんな名前を言ってた気がするわ。確かその須馬彰って人のことも言ってた気がするわ。」

「ありやりや。じゃあ本格的に知ってるかもしれないね。じゃあ、やっぱりその鈴って子と相談して水着は作ることにしようかな。しばらく会ってないからボクも会いたいしね。」

ボクが言った大木鈴と須磨彰という人物は結構知られている可能性が出てきた。というか、美術関係の雑誌などでも取り上げられており、作者が不詳であることからその話題性は一時期すごいものがあったので仕方がないかもしれない。

一応、海良中学に飾られている作品群には大木鈴の作品であることが明記されており、出身はこの近辺であることだけは公表してある。高校に入ってからスランプと称しながら、半年に一回くらいは作品を出してほしいといわれているので、そちらもそろそろ考えなくてはいけないことを思い出した。

「うん。やっぱり自分の時間足りてないかも？まあ、大木鈴はスランプ真っ只中だから作品できなくっても困る人いないからいつか

」

「それって本当に良いんでしょうね？というか、この前部屋に行っ

た時に、良く優花にバレ無かったわね。」

「大木鈴の作品として出したものは全部学校に寄付したからね。あそこに残っているのは全部蟹津秋の作品だもん。ボクだって自分つてバレたらまずいと思ってタッチとか多少変えてあるから仕方ないよ。」

「芸術家の話は私には分からないわ。」

「まああんまりそのことは気にしないでよ。中学三年の時に受験勉強が必要無くなって暇で作ったんだし、今回の目標は何と言っても優花のレベルアップなんだから、そっちの話は付属品だよ。」

まさか、この大木鈴というペンネームを明実に教えたことを後に後悔することになるとはボクは考えてみ見なかった。とことん自分に対する反応に鈍感なのかもしれない。

チャプター44（後書き）

はい。ペンネームでできましたね。出たがりな作者で申し訳ありません。

今回のテーマは小説を読んだためになる話

でお送りしてきました。後半秋の中学校での裏設定などに入ってきましたが、そちらも今後活かすことができるのでいいのです。それ以上に、お勉強会どうでしょうか？何かをするときに大切な心得と言った方が正しいのかもしれませんが、“楽しむ・自分なりの目標を立てる・継続する”これらが大切だと思います。最後の継続するというのも、楽しかったり目標があつたりすると、結構続くものですよ。

AKIは今ダイエットを頑張っています。執筆とダイエットどちらも手を抜かないように頑張ります。

それでは、ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

追伸

ブログにて発表しておりますが、作者の一身上の都合により今までのような更新ができない環境に赴くことになりました。

現在作成されているストックが存在しますので読者の皆様からの熱い要望がありましたので更新はいたします。しかし、多少今までと

頻度などが違うことをよく理解ください。

チャプター45

秋の知名度

「ええ？今度の期末で全教科平均点以上取ったら、大木鈴先生と握手できて、しかも、先生デザインの水着をプレゼント！！！！？？？」

知っているかどうか、疑心暗鬼ながらも、優花に大木鈴について話すと、肩を掴んでぶんぶんボクのことをゆすりながらそう叫んだ。

「優花は大木鈴って知ってるの？」

「知ってるどころじゃないわよ。うちがT高を受かったのだって、大木先生のおかげって言っても過言じゃないわ。あれはそう、うちが中学三年の夏だった。」

優花・回想シーン

「うちに受験勉強なんてできるわけないだろ？絵と空手しかとりえ

のないうちが、T高なんて進学校つかるわけないじゃん。」

「でもさ、もし優花がT高に受かったら、私も敦くんも一緒に高校生活できるんだよ?」

「そうだぜ。お前の好きな大木鈴って人もこの辺出身なんだろ? あんなすごい人だから進学校に進むだろうから、Y高は無理でもT高ならひよっとしたら一緒に通えるかもしれないだろ?」

「大木鈴先生は年齢不詳なのよ。同い年だなんてどこの週刊誌も言ってるわ。」

「でも、優花は同い年の人かもしれないって思ってるんだろ?」

「そうよ。だって、中学の展覧会で大木鈴先生の作品見たんだもの。絶対にあれは先生の作品だったわ。しかも、出展時期がうちとかぶってるんだから、絶対に同い年よ。」

「ほら見る。じゃあ、その先生と一緒に高校生活できるかもしれないチャンスを棒に振るのか? 今から頑張れば、ひよっとしたら受かるかもしれないんだけどなあ。」

「あんだね。絶対うちが受からないかと思ってんじゃないでしょう」

ね？わかったわよ。先生のためだもの。T高がなによ。受かって見せようじゃないの。」

回想終了・教室

「ってことがあって、うちもあの時冷静になって考えたら、先生がT高受けるって確証もないのになぜか張り切っちゃってさ。まあおかげでこうしてT高に入ることができたんだけどね。」

「そ、そうなんだ。じゃあ、優花はT高で大木鈴を探してるんだ？」

「いやあ、ところがさ。ペンネームだったみたいで、大木鈴って名前に関連のありそうな人はみんな廻ったんだけど、結局見つからなくってね。そう言えば、あんたの友達鈴って名前だったわよね？ひよっとして？」

「鈴の苗字は佐藤だよ。あと、鈴はY高に行ってるから、まあ、逢いたいなら紹介してあげるけど、鈴は大木鈴じゃないわよ。」

「そうなんだ。ってかあんた先生と握手ってのをご褒美にできるってことは、正体してるのよね？教えなさいよ。」

「だから、テストで平均以上とつたら握手もさせてあげるし、水着も、サインも欲しい？」

「欲しい。サイン欲しいわ。」

サインくらいなら書いてあげようと提案すると、優花は真剣な顔をボクに近づけてお願いしてきた。ここまで真剣に言われると照れてしまう。

「わかったから。そんなに顔を近づけないで。優花があの人の方がよかったなんて意外だったわ。」

「あんたも美術部だったんでしょ？先生の作品をみて何も感じなかったの？あれこそ芸術よ。」

「仕方ないでしょ。近すぎると分からないってことあるじゃないの。まあ、優花がそんなに喜んでくれるんだったら、とっておきのご褒美になりそうね。」

「とっておきも、とっておきよ。早くテスト来ないかな。こんなにテストが待ち遠しいの初めてだわ。」

「調子に乗らないの。今テストが来たら、優花じゃ平均点以上とれ

ないでしょ？とりあえずこのワークを解いてみて。」

そう言つてボクが優花に渡したのはプリントの束をホツチキスで止めた分厚い問題集だ。今日までに優花の期末テスト対策としてまとめてきたもので、今回の範囲だけでなく、今までの知識が抜け落ちてる優花のために、範囲の基礎となる部分なども織り交ぜたため、かなりの数量になっている。

「クーちゃんこれ全部一人で作ったの？」

「そつだよ。範囲がもう予想がついたから、この一冊をやれば結構点数取れると思うよ。ちょっとまだ全部プリントアウトしてないから、明実たちは待つてね。明日までには武兄ちゃんに頼んでコピーしてもらつておくから。」

「でも、テスト前つて学校からも課題がでるじゃない？このプリント群をしてそれもやつてなんて優花にできるのかしら？」

「うん。大丈夫だと思うよ。このプリントを終わらせた頃には学校からの課題なんてスラスラ解けるようになってるはずだから、そつちは復習を兼ねてするつて雰囲気になるとおもつしね。」

「心配しなくても大丈夫よ。秋のヤマは外れたことないんだから、実際私たちはこれで何度も救われてるんだから。」

「和美は時々時間がなくなって全部やらなくてテスト受けるけどね。」

「ちよま。それを言わないでよ。課題の方が時間がかかったら間に合わなくなっちゃったんだもん。」

和美の成績が竜たちに比べて少し低いのはこのせいかもしれない。和美はテスト前に全部片付けるため、ボクのヤマを知らずに前回の中間テストも受けていた。

「まあ、今回はみんなやる気満々だし、私も最後までやるから、私にだけくれないとかやめてよ。」

「今回は手書きじゃないんだから、そんなことならないわよ。」

流石に中学の時は全員分手書きで書くなんて無理だったから、ノートを回してたから、最後に回ってきた和美はほとんど見てない時もあった。

中学三年の時、一生懸命ボクと一緒に勉強したとはいえ、それまでもずっと一緒に勉強してきた竜や司にはまだ届かないし、浩太や麻美、鈴といった元々勉強ができたメンバーには一歩劣る成績だった。

それでもボクの心友メンバーは海良中学でトップクラスだったことは間違いない。Y高に言ったみんなも同じ勉強方法で成功していることから、今後もこの方法で大学受験まで勉強していくことができるだろう。

「つーちゃん。絶対に平均点以上とるから、これからも勉強教えてね。」

「はいはい。優花の情熱は分かったから、その問題集がんばって解いてきてね。採点自分でできるように答えも付けておいたけど、ヒントみたら解けるから最後まで見ちゃダメよ。」

「分かったわ。先生に会うためなら何だってできるんだから。」

優花のパッションが伝わってきたが、その対象が実は目の前にいるということを知ったらどうなるのか今から不安になってくる。とりあえず期末までは黙っておこう。

「しかし、秋って本当にいろんな分野で知られていたのね。」

「そうだね。最強美少女が知られていたことにも驚いたけど、まさか大木鈴まで知られていたなんて意外だったな。」

今はもう優花たちと別れて、部活に向かうために体育館に向かっており、和美と二人きりだ。

「そんな意外なことでもないんじゃないかしら？秋のやっていることって、同年代の希望みたいなことばかりじゃないの？美術を専攻すればそれで賞を取り、格闘技をすれば日本一、勉強もスポーツも芸術分野ですら大人から認められるってすごいことよ。」

「そうなのかな。じゃあ、今度は何をしたらいいと思う？オリンピックでも目指しちゃいましょうか。」

冗談めいて言ったが、本気を出せばリアルで金メダル取れそうな競

技がいくつかあることは自分でも気づいている。競技人口が少ない種目や柔道、陸上、水泳あたりなら技術的な問題も考えても金を狙えるかもしれない。

「秋がやりたいならいいんじゃないかしら？その代り、マスメディアからどんな反応があるかは私には予想がつかないわよ。」

「そうだね。競技中に不幸が起こらないとも限らないし、いろいろなことが面倒だから今は保留にしておくわ。」

「でも、一つくらい金メダル取った方が周りから良い印象があるかもしれないわよ。」

「そこら辺については、ボク一人で決めるんじゃないかってみんなに相談してからかな。特に若いうちに取っちゃうと、次の大会も出なきゃいけないから、今は時期を見るのも大事よ。」

「そつか、一回取ったらそれで終わりってわけにもいかないんだね。それなら競技人口が多い方が、次の世代に任せるなんて言えるから良いのかしら？」

「そうだね。水泳、陸上なんかがいいかもしれないね。マラソンなら年を言い訳にしやすいしね。他に日本がまだ一度も金を取ってない種目ってあったかな？」

本当に真剣になってその競技をしている人が聞いたら怒られるような会話をしていたのだが、昔とは違い臨死体験を重ねた影響か人外チックなボクの身体能力を知っていればこそその和美との対話であった。

「マラソン良いわね。競技人口も多いし、秋なら絶対に金取れるじゃないの。」

「唯一の弱点は、長い距離を走る中で不幸が起きないかだね。もしそんなことが起こったら競技自体が成り立たない可能性もあるからね。単発の100Mとかの方がそう言う意味では良いかもしれないわよ。」

「うん。全く違うジャンルの競技なはずなのに秋ならどっちでもいけそうな気がするのが不思議だね。」

「ボクも信じられなかったけど、事実だから仕方ないよ。まあ、それについてはもうしばらく待った方がいいのは確かだね。冬のオリンピックは面倒だから、夏のオリンピックにするとと思うから、早くてもあと4年後かな。」

「冬だって出られる競技あるんじゃないの?」

「雪も少ない海良出身のボクが冬のオリンピックなんかに出たら、疑ってくださいって言ってるようなもんじゃん。今年は間に合わないから、出るのは四年後よ。」

そんな会話をしていると、体育館に着いたので、和美と別れ、マネージャーとしてバスケット部の活動に向かう。

「おい、秋。今日は帰っていいらしいぞ。」

着替えて体育館に着くと一番にそう言われた。

「竜？どういこと？」

「なんでも、えらいギャラリーがおるとか言ってた。秋が中間テストで一番取った影響でやっぱり高校でもファンクラブができてたらしくって、今日はそんな奴らが体育館に押しかけてきてるみたいなんや。」

「ええ？またファンクラブ？中学の時と違って浩太がいないから、どんなファンクラブができたか分からないから、それは勘弁してほしいね。」

「間違いないな。まあ、今日来たやつの名前くらいはメモっとくから、対策はあとで考えよ。」

「分かった。先輩たちには迷惑を掛けてごめんなさいって謝っておいて。」

「ああ、大丈夫だろ。先輩達が率先して秋を守るために動いてくれたみたいやしな。」

「全然大丈夫じゃないよ。それなら余計に迷惑かけてるんだからきちんとして謝っておかなきゃね。」

「そうだな。今度、クッキーでも焼いてきたったら？」

「その手があったね。手造りお菓子でも用意しておくから、今日は本当にもう帰るね。また明日。」

「おう、あと朝の問題集ありがとうな。」

「そう言えば、竜には先に渡したんだったね。優花たちにも渡すつもりだから、竜もつかつかしてたら抜かれちゃうぞ。」

「秋がそういうと本当になりそうだからやめてくれや。」

「あはは、ごめんごめん。今んとこ見た雰囲気だと、今回の期末で竜に追いつけそうなのは明実だけかな。明実も竜にはまだ届かないかもしれないけどね。」

「ついに司に次ぐライバル登場か。分かったわ。俺も気い抜かんように勉強しとくわな。」

こうして竜と別れ、ボクは先に帰ることになり、先ほど別れたばかりの和美と連絡をとると、向こうでも体育館の様子が変なことに気づいており、待っていてくれたらしく和美と合流することにした。

「秋、こつちよ。優花たちに連絡とつたら、まだ教室にいるみたいだからそつちとも一度合流しましょ。」

「了解。ってか帰宅部の明実は良いとして、優花は美術部行かなくていいのかな？」

「私がそこまで知るわけないでしょ。とにかく、ファンクラブが自転車置き場にもいるみたいだから、一旦ここから離れて、教室でみんなと合流した方がいいわ。一応私も距離を空けて歩くわね。」

「和美も分かっってきたみたいだね。ちょっと今回は不穏な動きも感じられるから、先に行っててくれる？近くを歩くだけでも危険かもしれないわ。すぐに学校を出た方がひよっとしたら良いかもだけど、それだと竜がいないから帰り道も危険だし・・・」

「分かったわ、先に行くけどやっぱり帰り道は竜くんがいた方がいいと思うから、一旦教室に来てね。そこなら優花と明実がいるから、危険は少ないはずよ。」

ついこの前まで、和美と二人だった心友だが、一か月という時を使って和美の中にも心友という感覚が芽生えたのかもしれない。ここで帰ることを選択せずに、優花たちと合流しようと提案したのが何よりの証拠だ。

ボクは和美が教室に向かったあと、少し遠周りをしてでも人と遭遇しないように気配を読みながら教室へと向かった。

「クーちゃん大丈夫だった？まさか、クーちゃんのファンクラブができるなんて災難ね。」

「どんなところでどんなことが知られているのか分からないからね。今回のことでも分かったけど、ボクは自分で思っている以上にいろんな人に影響を与えているみたいだね。」

教室に着くと、そこには明実、和美、優花の三人だけが待っており、他のクラスメイトたちはすでに帰宅したり部活に向かったりと残っているものはいなかった。

「ん？ちよつと待つてね。今までボクのこと何か話してた？」

「ええ、少しファンクラブについてとか話していたけど？」

「とりあえず、静かにしてくれる？ボクが良いって言うまで、何も話さないでね。」

そう言つて、ボクが向かったのは、明実の机だった。ボクの席からも近く、みんなが集まりやすい場所だからだろう。

「これはないな。流石にやりすぎでしょ。」

そう言つて机の裏から取り出したのは盗聴器だった。幸い単体でデータを保存するタイプだったため、破壊してしまえば、これまでの会話はバレることはないが、それでも良い気分のするものではない。

「盗聴器？ちよつとどういふことよ？」

「静かに、もう一個あるから。たぶん、そうまでして知りたいことがあったんだよ。」

そう言つて、次に向かったのは、森君の机だった。こちらはデータどころか電源も入つておらず、何故ここにあるのか分かったのか自分でも理解できないのだが、こちらも回収しておく。

「もういいよ。幸い今までの会話は聞かれていないみたい。でも、今後もこんなことがあるかもしれないから、学校でボクの秘密に関する会話はしないようにしよう。」

「森のやつ。キモイとは思ってたけど、まさかこんなことまでするなんて。」

「まっつて、盗聴器が森君の机にあつただけで決めるのは早いよ。森君の机は優花の机から近いから、それを狙って誰かがつけた可能性もあるしね。」

優花たちが無茶をしないようにこうは言ったものの、ボクの勘は森君の仕業だと言っている。しかし、この場合はまず場所を移動することにした。

「とりあえず、この教室はストーカーのターゲットになつてることが間違いないから、移動しようか？優花、前みたいに美術室使えな

いかな？」

「あ……今日活動あるの忘れてた。」

「今まで何してたのよ？」

優花は先ほど渡した問題集を取り出すと、ペラペラと数ページ開いて見せた。渡してから30分もたっていないのに、既に10ページ近く進んでおり、最初の方は基礎問題とはいえ、その進度は驚くべきことだった。

「優花が大木鈴が大好きなのは分かったから、とりあえず移動しましょ。盗聴だけじゃなくてカメラまであったら、問題だしね。」

実際高校生で盗聴器一つを買うのも大変なことだっただろうから、カメラなんてないと思うが、用心するにこしたことはない。美術室ならば、個人の犯行であればそこまで設置している可能性は少ないだろう。

ボクらは美術室に移動することになった。T高の美術部は、二年生の先輩三人と優花しかいないらしく、美術室に行くと女の先輩二人だけが待っていた。

「すみません。期末の勉強してたら忘れてました。」

「中間酷かったもんね。それより、後ろの子たちは？」

「クラスメイトなんですけど、この子が中学の時に美術部だったみたいで、遊びに来たいって前に言ってた子です。」

「ああ、蟹津さんだっけ？海良中学出身なんですよ？大木鈴の出身校と噂されてるんだよね？ひょっとして蟹津さん知ってたりする？」

「はい。大木鈴は海良では有名でしたから、優花に期末頑張ったら紹介してあげるって言ったら、さっきまで机にかじりついて勉強してましたよ。」

「えええ？優花ちゃんそれは本当なの？是非私たちにも紹介してちょうだい。」

「どうやら、先輩たちも大木鈴を知っていたようだ。美術会ではかなりメジャーになっているのかも知れない。」

「別に紹介してもいいんですが、条件があります。」

「いいわ。どんな条件でも大木鈴先生と仲良くなれるなら問題ないわ。ひよつとしたら、一緒に作品を作ってくれるかもしれない・・・うふふふ。」

「えつと・・・。狂信的に好きなのは分かりましたが、大木鈴は目立つのが嫌いなので、ペンネームを使うくらいの人物ですから、他言無用、つまり周囲に自慢してはいけない。というのが条件です。」

「自慢なんてしなくてもいいわ。どうせ美術に興味ない人間に話したってわからないだし、先生にあえて、お話が聞けるだけでいいのよ。」

ずっと一人の先輩が、マシンガントークで話していたが、この場の雰囲気を変える人が現れた。

「こらあ！？入口で何をさわいどるか！！！」

「河合部長！！！」

美術部の部長、河合花梨先輩だ。

「突然おじゃまして申し訳ありません。ボク、海良中学で美術部をしていた蟹津秋と言います。バスケット部のマネージャーを今はしてる

んですが、事情があつて、今日は活動ができなくなつてしまい、美術部にお邪魔させていただいています。」

「ああ、君が噂の、ふうん。」

「えっと、何かボクの顔に付いていますか？」

「いや、それより、優花には君の正体まだ話してないの？是非バスケット部なんてやめて美術部に入って欲しいんだけど。」

この人、一目見ただけで、ボクが大木鈴つてわかった？まあ、美術部の人には隠すつもりもないし、後で詳しく話をしよう。

「と、とりあえず事情をきちんと話したいので中にいられていただいても構いませんか？」

「もちろんだよ。君ならこっちとしても大歓迎だからね。じゃあ、活動前に勧誘も兼ねて少し話そうか。」

そう言つて、河合部長とともに美術室に入ると、入口の鍵を閉めてしまった。こちらとしても部外者が入つてこないのが嬉しいのだが、そこまでして帰らせたくないらしい。

「先にみなさんをお願いがあります。ボクは周りに不幸を願われると不幸になる体質なので、ボクの知名度が上がると、それだけ幸せを願ってくれる人と一緒に不幸を願う人が増えるので、このことは内緒にしてください。」

「ちよま。それいきなり言っちゃっても平気なの？」

和美の心配は分かるが、ボクにも考えがあつての発言だ。というか、第六感がこの場にいるみんながボクの味方であると告げている。

「ボクには前世の記憶がある。その前世の記憶がここにいる人たちがボクのことを守ってくれたと言ってくれているんだ。お茶の場所って変わってませんか？」

そう言つて、ボクは美術部のみんながいつもお茶の葉を置いている棚に向かうと手早くお茶の準備を始めた。

「お客にお茶を入れさせてるんじゃないよ。優花、あんたがいれなよ。」

「ああ、良いんですよ。ボクがこれからする話は本当にみなさんにとって迷惑以外のなものでもありませんから。これくらいさせてください。それに、お茶入れるの得意なんですよ。」

「あんたが得意っていうものがいくつあるか分からないけど、つーちゃんに任せておけば美味しいお茶が飲めるのは確かね。部長、とにかく話を聞いてあげてください。」

お茶を入れ終わってそれぞれの前に置くと、ボクは本題を話します。その内容は、優花たちに話したよりも、短く、そして要点だけを述べた誤解を招いてもおかしくないようなものだった。

「つまり、人に恨まれると、君の周りに危険が及ぶから、そういう気配がある時は、ここにかくまって欲しいってわけ？」

「はい。あと、もう一つ、前世の記憶についてなのですが、正しくは二度目なんですけど、初めてと言っても良いのにこの部屋のお茶の場所を言い当てたのは、ボクがここで過ごした記憶が残っていたためです。」

最近では漠然としたものだけでなく、係わりが深かった場所や人に関する記憶も思い出しつつあるので、その証明になればとお茶を入れてみました。」

「なるほどね。信じざるを得ないってわけか。でも、自分の我が儘だと言いきって、なおかつ保護してくれって言うからには、この美味しいお茶以外にも何かしてくれるんでしょ？」

「ええ？可愛そうじゃないの。こんな可愛い後輩の頼みなんだから、許可してあげましようよ。元美術部だって言うんだから問題ないでしょ？」

「静香は黙ってて。とにかく、部員以外を入れるのは問題があるから、名義だけでも部員になってもらわないと困るのよ。」

「河合部長ならそういうと思っていました。中学時代からの約束なのでバスケ部のマネージャーをやめることはできませんが、兼部でもいいですか？」

「仕方がないわね。じゃあ、そういうことにしましょう。でも、まだ諦めたわけじゃないから、そのところは勘違いしないでね。」

ボクの記憶によると、この風景も前世の記憶にある。明実と優花の手伝いで訪れた美術部に引き込まれそうになり、そのころ危険を回避するために、格闘技を学んでいたボクは同じようにして断りながらも、ここに来ていたのだろう。

なんだか、この美術部の雰囲気があったかくて、本当に竜との約束がなかったら入ってもいいと思えてしまう。突然あんなことを言われても受け入れてくれる。そんな雰囲気がここにはあった。

「とにかく、君の秘密を守ること、避難場所にこの美術室を使うことは問題ないわ。それよりもそろそろ、自己紹介しましょうよ。君と優花ちゃん以外のメンバーは私も知らないしね。」

ボクのことを知っていたことの方が不思議な気もするが、大木鈴の認知度は優花からも先輩たちからもひしひしと伝わって来たのでそこはあきらめて、それぞれ自己紹介をしていく。ボクも一応きちんとして自己紹介をした。

それによると、美術室にいて、真っ先にボクらに話しかけてきた先輩は、鈴木静香さんと言い、副部長をしていて、先ほどからあまり声を出さないでおろおろしながら様子をうかがっていたのが、斉藤陽子さんだ。

名前逆じゃない？とか思ってしまったが、そこは何も言わないでいた。だって、どうせ言ってくれる人がいるから。

「鈴木先輩と斉藤先輩の名前は本当に間違ってますよね。逆じゃないんですか？」

ほらね。優花がこう言ってくれるから、ボクが突っ込みを入れる必要はない。気さくな性格の静香先輩は優花の言葉に笑い、陽子先輩は恥ずかしそうにまたおろおろします。

「花梨先輩、静香先輩、陽子先輩、これからもよろしくお願いします。期末テストが終わったら、絶対に大木鈴を連れてくるので、期待しててください。」

花梨先輩にはバレてしまっている様だが、優花もいるので、ここは黙っておこう。

「お、君は名前で呼ぶんだね。大物じゃないか。」

「嫌でしたか？ボクいつも人のことを名前で呼ぶので、そうしてみたんですが？」

「その方が、親しみやすくいいよ。これからは名前で呼びな。私たちは人数も少ないし上下関係とか気にしないから、先輩なんてつけなくてもいいわよ。」

「目上の人にはちょっと。」

そんな会話をしながら過ごしていると、案外時間が経ってしまったようだ。竜から連絡がはいり、もう帰る時間となってしまった。

「今日はこれで帰りますね。本当にありがとうございました。」

ボク言葉に続いてみんなお別れを言つと、みんなして美術室を出て、帰ることになった。

チャプター45（後書き）

避難所を作ってみました。と同時に、河合花梨先輩 e t c 登場 何故河合部長だけ特別扱いかですか？ひ・み・つ というか、今後絶対にそのシナリオ出すんで楽しみにしてください。花梨先輩の魅力をとくごとくご覧あれって感じで絶対に書きます。

今回のテーマは「エマジエンシー」です。

秋にとって最も危険な状況は、事情を知らない人物が周囲に集まることです。好意をもってくれているならば危険から遠ざけたいと感じ、憎悪を持っている人は近付くと危ないというなんとも不憫な体質です。

この話は次回にも続くのでそちらも、と宣伝をしてあとがき終了します。

ここまでご覧下さって本当に感謝いたします。

チャプター46

ファンクラブとの対決

テスト前にやらなければならぬことができちゃった。
竜からの連絡のあと、和美と優花は自転車通学なので一緒に自転車置き場に向かうと、竜と敦君が待っていた。

「おまたせ。もうほとんどの生徒が帰ったみたいだね。」

「せやな、そうじゃなきゃ三人で歩いてここに来るなんてしいひんかったんやろ？」

「あたり、また数名残ってる人もいるみたいだけど、こっちの方が多みたいだから、問題ないでしょ。それに、ファンクラブって基本はボクの味方になり易い人たちだから、数さえ少なければ怖いことはないよ。」

実際、ファンクラブのメンバーから逃れたのも、竜との関係を見せ、反感を買うのを恐れたことが要因であり、中学時代の様な雰囲気であれば問題ないと考えていた。

「今回のファンクラブの中心は秋のクラスの奴らしいぞ？森って言ったっけ？この前の遠足の時におったあいつやわ。」

「森君かあ。やっぱり注意しておいた方がいいみたいだね。ファンクラブ自体はどうにかして、距離を置いてもらうように頼んでみるかな。」

「せやな。秋のおねだりに勝てる奴みたい見たことあらへんからな。ファンクラブに入るような奴らなら、それで一発やる。」

「ちよま。おねだりってなんだよ。ボクは純粹にお願い事をしていいだけだもん。」

「あんたのおねだりか。確かにうちの時といい、美術部の時といい。相手のツボみたいなのを的確に突くし、それで行きましょ。」

「優花、人事だと思ってるのんきなこと言わないでよ。ファンクラブの人をお願いするのって結構恥ずかしいんだから。」

「恥ずかしいって、秋はどんな風をお願いするの？」

ここでそんなことを言わせる気なの？和美は中学の時を知ってるから、絶対にわざと聞いてきたな。あんな恥ずかしい思いをするのは

できれば避けたかったんだけど。。。

「秋が言わないなら、私からみんなに教えてあげようか？中学の時のファンクラブはねえ。」

「わくわく。分かったから和美は黙ってて、和美が言ったら、おヒレどころか胸ヒレまでついて話しそうだから自分でいうよ。」

ファンクラブの子たちの前では、要望に応えて結構恥ずかしいことをした記憶があるので、あまり他人の口から聞きたくはない。

「定期的に交流の場を開く条件をつけて、大人しくしてもらおうのよ。」

「その内容が重要なんじゃないの。コスプレしたり、歌ったり、秋の独壇場といたいろんなことするのよ。」

「コスプレって、冬に夏服を着たり、浴衣とか、自分で作った服着たりしただけじゃないか。歌は、お願いされたから少しうたっただけだし・・・」

「あれじゃ、アイドルよ本物よりもひよっとしたらすごいんじゃないかしら？ファンクラブ限定の時は無理だったけど、一般公開の時

に私たちも見に行つたことあつたけど、すっごい人気だったわよ。」

「ボクは普通でいたいんだ。交流会であつて、アイドルとかの公演会とはまた違うんだもん。」

「はいはい。入学して数か月でファンクラブができるような人のセリフじゃないわよ。」

「ボクに平和はないのか。」

結局最終的に、今週の土日のどちらかを使って、ファンクラブの人たちと交流を深めるために、何かすることになり、明日学校側に掛け合うことで結論をみた。浩太がいればそこら辺の段取りはすべてやってくれたので、今回は明実や和美が代わりとなって動いてくれることになった。

「ごめんね。ボクも余裕があつたら何か手伝うから。何でも言つてね。」

「じゃあ、当日歌う曲を決めておいてくれる？できれば、音響の準備とかもあるから早めにお願ひね。」

「和美の後ろに浩太の影が見える気がする。」

「気のせいよ。私だってこんなの初めてだから、浩太さんに連絡を取ってどうしたらいいか聞かなくっちゃね。明実にも動いてもらおうんだから、今夜電話するわね。」

不安が残るが、和美も学級委員長を経験しただけあって、こういった行事ごと、人を集めることは得意なので、問題ないだろう。明実も細かいところに気を配れる人間なので、浩太のバックアップがあれば心配するところは・・・

ボクが当日何をしたらいいのか決めてない気がする。それだけかな？無茶な注文をしてこなければいいけど。

不安が的中するのは、週末前の金曜日のことだった、優花の問題集も全員に配り終え、やる気満々な優花が既に半分も問題を解き終えたところだった。

「秋には、中学と同じようにオーバー・ザ・レインボーを歌ってもらうことにしたわ。あと衣装なんて高校で着たら問題なんじゃないの？それにあのころの衣装があるらしいから借りて来たわ。」

「ちょま、別にあれから身長が伸びたわけじゃないから、問題ないけど、少女の衣装なんて高校で着たら問題なんじゃないの？それに曲はボクが選んで良いって言ってたじゃないか。」

「だって、クーちゃんが選んだ曲ってどれも無難過ぎておもしろくないんだもの。あと、軽音の人をお願いしたら、そっちにもファンクラブの人がいたみたいで、快く承諾してくれたから、オーバー・ザ・レインボーの練習を今しているところよ。」

「えええ？じゃあ変更もきかないじゃないか。バックの音なんてCDで済ませればいいのに。」

「どうせだったら、ド派手にやりなさい。って学校側からの依頼だから仕方ないのよ。学校の掲示板を通して、既にライブの情報は各教室に回ってるから、今さらキャンセルできないからね。」

おいおい、学校との交渉くらい自分でやれば良かったよ。本当に任せたら当初の目的がブレてしまっじゃないか。

「ボクは、目立ちたくないし、できるだけ普通の高校生活を送りたいの。そこら辺はわかってる？」

「分かってるわよ。ちゃんとプログラムの中に、秋の普通なところを見せるところも用意したから心配しなくていいわ。プログラムについては浩太と相談したから問題ないはずよ。」

あとは中身だけなんだけど、最近の秋は本当になんでもできるから、ちょっとそれを見せたくなくなっただけじゃないの。」

「まさか、二曲目のこの沖田恵の”ちえりー”はギターを弾いて歌うとか言わないわよね？」

「あら？良く分かったわね。はい。これが楽譜で、ギターも武満さんをお願いして家に届けておいたから、帰ったら練習してみてね。」

「ちょま。ボク、ギターなんて中学校の時以来さわってないんだけど？」

ボクはファンクラブの要望でギターなどの楽器を使うこともあった

ので、触ったこともないというわけでもないが、それでも当時と違い、練習の時間もないし、第一ギターを弾くなら最低一か月くらい前から練習したかった。

「大丈夫よ。」ちえりー」なら前にも弾いたことあるから体が覚えてるわよ。それに、軽音の子に頼んでアレンジしてもらったから、それほど難しくはないはずよ。」

楽譜を確認すると、確かにバレーコードなどが極端に少なくなっており、弾けなくもなさそうであるが、それでも不安はある。

「実際に完璧に弾けなんて言わないわよ。持ってるだけでもいいわよ。衣装と思っておきなさいよ。」

「あのねえ。そういうこと言うなら楽譜もギターも渡さないでほしかったよ。明日はギターとセリフの練習だなあ。」

交流会のことはバスケット部の人たちに伝えてあるので、部活には出なくて良いのだが、それでもこんな理由で週末がつぶれるのは釈然としないものがあった。というか、よく学校側も許可だったよ。

「クーちゃん。ごめんね。大変だと思うけど、和美ちゃんに聞いたらこれが一番って言うから私も反論できなくて、でもクーちゃんならきつと大丈夫だから日曜日がんばりましょ。」

「明実の責任じゃないよ。そうだね、せっかくみんながお膳立てしてくれたんだし、精一杯やるつもりではいるよ。」

明実は天然で心配してるんだろうな。これまでボクの周りってこういうおしとやかなタイプって麻美くらいだったし、麻美も司とグルになって色々画策してたからこんなタイプの子が一人いるだけでも、純粹に嬉しいよ。

「昨日の電話で明実もノリノリだったじゃない？」

ごめんなさい。ボクの周りはやっぱりこんな人たちであふれているみたいですよ。

「だって、あの時はこんなにクーちゃんが困るとは考えてなかったんだもん。」

その気持ちだけでお腹一杯になりますよ。明実は和美たちに影響されないでね。

交流会当日

講堂でも借りるつもりだったのだが、人数が入りきららないとかで、屋外ステージとなってしまった。というか、晴れなかつたら体育館を借りるつもりだったというから問題だ。普通の週末は部活などで使っているのだから、そんなこと・・・

普段ここで練習しているサッカー部の人たちごめんなさい。そうだよな。今日も部活あったんだよね。交流会の後に普通に練習があるらしく、ユニフォーム姿の人が混じっていた。というか、他の部活の人たちも大勢練習を中断してつめかけているようだ。

「こんにちは。今日はみなさんの時間を使ってボクのために集まってくれてありがとうございます。」

ボクの声で会場がざわめく。当然だろう、事情を知らない人からし

たら、一年生でまだ学校に入りたてのボクのことなんて知らない人が大半だ。

「ボクは一年生の蟹津秋と言います。今からみなさんにお願いがあつてここに立っています。」

会場のざわつきが収まるのをまって本題に入る。

「こんな仰々しいことをしておいてするのはおかしいのですが、ボクは普通に高校生活を送りたいだけなんです。ですから、ファンクラブとかはあまり嬉しくありません。」

この言葉に、またしても会場がざわめく、「誰だファンクラブなんて作った奴。」とか「ファンクラブが嫌ならこんなことするな。」など色々な声が聞こえる。

「ごへいを与えるような言葉ですみません。ファンクラブが嫌なのではなく、注目されたり、普通の子と同じ用に生活できなくなるのが嫌なだけです。ファンクラブの人たちも節度をもって接してくれたらボクは条件はありますが認めます。」

おそらく、ファンクラブに入っていた子たちからだろう。あんどの溜息が洩れ、それとは別に、ファンクラブができるだけの人間はどんな子だろうと言った注目が集まる。

「それでは条件の発表の後、交流会を始めたいと思います。」

ボクが挙げた条件は、

- 1、自分には彼氏がいるので、恋愛関係は不可能なこと
- 2、ファンクラブ専用連絡を取れる方法を作るので、そちらを利用してもらうこと
- 3、周囲が迷惑をするので、定期的な交流会や専用の連絡先意外では執拗な接触をしないこと
- 4、脱退は自由だが、入会には蟹津秋本人の許可を取ること

などが主な条件である。その他にも細かい所は中学の時に作ったものを引用して作ってあるので、正式なファンクラブに入った人はそれを確認してもらうことにした。

「それでは、今日はまだ、ファンクラブとか関係なく皆さんで楽しんでいってください。」

そうやって、最初のプログラムである。一曲目のオーバー・ザ・レインボーが始まる。その歌を聞いてくれた人は、穏やかな気持ちになっただけで、会場の雰囲気は一気に和らいだ。

「秋、お疲れ様。それじゃあ進行をバトンタッチして心友代表の長

田和美がします。今からは、質問タイムです。」

和美が舞台上に出てきて、マイクを使っていくつか質問をしてくる。中学時代の笑える話から、臨死体験の話といった同情を引く話などを順番に振って行く。

会場の雰囲気は温まって来たので、そちらにも何か質問がないか聞き出す。

「秋さんは以前最強美少女や芸術の女神と呼ばれていたらしいのですが、その由来は？」

流石ファンクラブ、立ちあがって間もないというのに、様々な情報が飛び交っていたらしい。

「最強美少女っていうのは、新聞で取り上げられていただけで、ほとんどの人が呼んだことはありませんよ。あ、でも、柔道経験者なので、夜道で襲いかかっても無駄ですよ。」

会場からそこそこの笑いが来た。最強美少女なんて二つ名は過去のものであり、できれば今後も呼ばれたくないのが本音だ。

「最強美少女って二つ名は、できれば使って欲しくくないです。ボク

みたいな弱い女の子をそんな風に呼べますか？」

そう言っつて頭をかしげると、会場から質問者に向かってブーイングが飛ぶ。これで今後そんな不名誉な名前ではよばれることはないだろう。

「次に、芸術の女神なんですけど、ボク中学校で美術部に所属していたので、そのため女神って呼ばれていました。メグちゃんなんてあだ名がついちやうくらい中学校では定着していたんですが、これでもできれば恥ずかしいので呼ばないでほしいです。」

恥じらった表情でそう言うことで、こちらのあだ名も消えてくれたらと画策したのだが、どうやらみんなも納得してくれたらしい。メグちゃんの部分を強調しておいたので、女神様なんて呼ばないでメグちゃんと呼ぶことになるだろう。

「でも、秋には新しい二つ名ができたのはみんな知らないみたいね。」

「ちよま。和美、それは言っっちゃダメでしょ。」

和美はボクに何か恨みでもあつたかな？うん。考えたら結構あるかも、それよりも、この二つ名だけは阻止しなくては。

「そうだね。最近クーちゃんって呼ぶようになったわね。私もクーちゃんって呼ぶわよ。この子照れ屋さんだから。」

「明実まで、やめてよそんな恥ずかしい二つ名いらさないよ。」

明実まで乱入してきたということは、この流れはプログラムの中に含まれていたのだろう。さっき質問した子もひょっとしたら桜かもしない。

「実はね。クーちゃんって照れ屋で、お礼を言ってプレゼント渡したら、捨てたフリして大事に持ってたのよ。ほら、これがその時のストラップ。」

「ああ〜ん。だめえ。そんなの見せたらツンデレクイーンって二つ名がみんなにバレちゃう。」

あ・・・今ボクなんて言った？

会場を見渡すと、驚愕した顔が見られた。マイクにばっちり拾われたボクの声はみんなに届いてしまったらしい。

「えっと、みんな聞き間違えよ。ボクはツンデレなんかじゃないん

だからね。」

「もえええ!!」「」

会場から変な言葉と熱気が伝わってきた。はあ、ボクの平穏な高校生活は今終わったかもしれない。そう思って明実と和実の方を見ると、ニヤニヤしながら親指を立てていた。

「嫌だあ。そんな不名誉な二つ名なんていららないんだから。今すぐ忘れてよお。」

「クーちゃんごめんね。でも、クーちゃんのためだから我慢してね。」

「ボクのためって言ったら何でも許されると思ってるの？ボクは恥ずかし過ぎて明日から学校にこれないじゃないか。」

「大丈夫よ。私達が守ってあげるから、ね。そんな可愛い顔で睨んでも怖くないわよ。」

そう言って、和実は近づいてくると抱きしめる。

「ボクは本気で怒ってるんだぞ!!」

「よしよし、明日からみんなに秋のこと理解してもらいましょうね。ツンデレってことはそのうちデレに移行するんだから大丈夫よ。」

「デレになんてならない!!」

そうは言ったものの、和美になだめられて、落ち着いてしまうボクがいた。これが麻美や鈴だったらもっと早くなだめられてしまったことを考えるとツンデレというのもあながち間違いじゃないかもしれないな・・・

そんなことないもん。ボクはツンデレなんかじゃない・・・ハズ。

会場の話題はツンデレクイーンという二つ名で統一されており、もう逃げることはできないらしい。実際中学のファンクラブに対抗するためにツンデレクイーンというものを広めようといった雰囲気があった。

「ファンクラブ限定で秋のことを女王様と呼ぶことを許可する。ってことで今回はいいかしら?」

「良くない!!女神の次は女王様ってなによ。クーちゃんとかつー

ちゃんとか呼ばれるのが可愛く見えてきたよ。」

「わかったわ。じゃあ、つんちゃんかクーちゃんて統一しましょ。」

「さりげなくツンデレ要素を増やすな!!」

結局ボクは落ち着くことはできずに時間が来たので次の曲である”ちえりー”を歌うことになった。質問の間ずっと後ろで控えてくれていた軽音の子たちに合図を送ると、歌い出す。始めがボクのソロからスタートってあたりが問題かもしれないが、とにかく頑張ろう。

がんばって練習した甲斐もあり、ギターも上手くいった。まあ、めちゃくちゃ簡単にアレンジしてもらって右手なんてほとんど使っていないんだけどね。会場は楽しんでくれてるらしく、ボクも歌いきった感があり、交流会も成功とっていいだろう。

そのあと、もう一度質問コーナーと次回の交流会を希望するか、また希望するならばどのような内容が良いかなどを会場のみんなに聞いて行く。マイクを持って走り回る和美と明実は次々と処理していく。

「あの、もちろん次回の交流会を希望するんですが、その時は沖田恵じゃなくて、幸田咲を歌ってくれませんか？ギターを持ったつんちゃんも良かったんですが、やっぱりツンデレといったら幸田咲か

なってる。」「

先ほどからの雰囲気からいっても次回開催は間違いないからそれはいいんだけど、ツンデレに関するお願いや質問が多い気がする。

「ちょま、ボクはツンデレじゃないし、しかもなんで幸田咲さんとツンデレなの？」

ボクに理解していないところで、ツンデレというものがあるらしい。

「ツンデレが良く似合うから？ツンデレの女王は確かいたよね？あれの真似とかでもいいよ。」

「ちょま、ボクはそんなの知らないから。周りが勝手に言ってるだけなのに。」

結局次回はツンデレキャラを演じることになりそうだ。そこはかとなく不安を抱えながらも次の質問に移っていく。

「あの、つんちゃんは苦手なものとかありますか？」

「ゴキブリは苦手です。食べ物好き嫌いはありませんから、食べ

物で苦手なものはありませんよ。」

「ゴキブリ苦手だったのね。でも、もっと大事なものを隠してないかしら？」

絶対に来ると思ってたよ。というか、浩太の考えたプログラムならきっと入ってると思ったよ。そのとき、BGMが流れ、お約束の展開となった。

「ひゅ〜ドロドロ」

「ごめんなさい。本当にもう隠したりしないので、どうかそれだけはやめてください。」

とにかく和美に謝った。何も悪いことはしていないかもしれないが、こればかりはと、真剣に謝った。

「秋は何も悪いことをしてないわ。大丈夫今からちよつとした音声を流すだけだから。」

そう言って和美が合図すると、鈴の音が聞こえてきた。

『「一問目は、七月二十六日とはある芝居が初上演されたことにより、特別な名前が付いています。その名前とは？」

「幽霊の口よ。」

「正解！」

「ひゅ〜ドロドロ。」

「さあ、次の問題を早くだしなさい。というかさっさとしなさいよ。」

「うふふ、ドロシーちゃんたら。そんな半泣きですごんだって可愛いだけよ。次の問題ね。ドラキュラ伯爵のモデルとされている、15世紀ルーマニアのワラキアの人の本名は？」

「ブラド二世だ。」

「正解〜!!!第三問目にいくわよ。」

「次は僕の番だ。」

「学校には、様々な怪談話がありますが、海良中学に存在する七不思議を六つ答えなさい。」

「簡単だよ。開かずの間・独りでに鳴り出すピアノ・毛伸びの井戸・動く絵画・夜中に揺らめく人魂・亡者への階段ちなみに七つ目は、蟹津武満って人に聞けばわかるらしい。」

「パーフェクトよ。七つ目に関しては私も知らなかったわ。」

「なんでライオンくんはそんなことをしているんだい？」

「さあ、最後の問題よ。海良中学きつての美少女と噂され、美術部に所属していることから、芸術の女神と呼ばれる少女の弱点は？」

「幽霊だよ。お化け屋敷に一人で入れないからねえ。」

「いやああー!!」

「いやああああ!!」

ボクは音源の最後と被るか被らないかといったところで悲鳴を上げてしまった。

「というわけで、秋の弱点はお化けよ。みんなも、秋が怖がるから怪談とかを教室の近くでしないでね。ちなみに、秋と仲良くなりたかったら、お化けの話をしない方がいいわよ。このあと、お化けの話をした人達は、大変な目に逢いましたから。」

「お願いします。お化けだけは、お化けだけはやめてください。」

涙を流しながら、会場の人たちをお願いすると、一部の方々を除いて、守ってあげようと思ってくれたみたいだった。

まあ、一部の人はきつとボクのトランス状態を知って終わりだから、別にいいんだけどね。校長先生、学校の備品が壊れてもボクの責任じゃないので責めないでください。

ボクがそんな的外れなお祈りをしていると、第一回の交流会は閉幕を迎え、時間になると二時間くらいだったのだが、大筋はみんなに伝えたいことも伝えたいし、あとは交流会後に小さなブースを作って、ファンクラブ入会の受付をするだけになるだろう。

チャプター46（後書き）

すみません。完全暴走回だなと思いつつも、楽しく書かせていただきました。

秋と言ったら、といった部分をすべて盛り込もうとして、多すぎて流れがつかめないからこんな位がちょうどいいといった雰囲気です。とまったと思います。

二つ名に関しては、決まっていました。というネタは以前にもお話ししますたよね。

今回のテーマは「ファンクラブ」です。秋のファンクラブを完全な敵形ファンクラブにしようか悩んだのですが、きちんと仲良くなってもらいます。というか、学校良く許可だったのでか思いながらも、こんな場を作らないと仲良くできなさそうなので許可だしちゃいました。

それでは、46話読んでくださってありがとうございました。もしお時間が許しましたなら、評価・感想などにも足を運んでください。

チャプター47

優花の変貌

期末テスト前に面倒なことが起こったとはいえ、優花にはテスト勉強に集中してもらったし、あとのメンバーは元々そこまで成績を気にする必要もなく、テスト週間に入った。

ボクの予想した問題が出たし、この問題ならすべて配った問題集に同じ方法で解けば出来る問題ばかりだから問題ないだろう。暗記問題についてはもちろん完璧に当てた。先生が授業中に二回も同じ単語を言ったりと、大事なところを把握できていたためだろう。

「今回のテストはかなり良いわよ。これなら、私たちクラスでもトップとつちゃうんじゃないかしら？」

和美がテスト終了と同時に話しかけてきて、そう言った。実際ボクも先ほど同じ様に思っていたのでうなづいておく。

「私も、信じられないくらいできたわ。いつも落としていた応用問題も、ひよっとしたらできたかもしれないわ。」

前の席から、明実もそう言っている。今日はテストなので出席順に座っているのだが、先生の配慮でボクの周りだけはこの二人がいて、端に座らせてもらっている。二人とも普段から成績や授業態度が良かったため、ボクの答案を写すなんてことはしないだろうと言うのもあった。

そして、成績不振のため席が離されてしまっていた優花が歩いてくる。

「やばい。うち天才になったかもしれん。答えが分からなかった問題が数個しかなかった。」

「そりゃ、秋の問題集やったんだもの当然じゃないの。むしろ、時間がなかったり、ケアレスミスといった問題がなければ満点とれる問題集だったわね。」

「そこまで言われると恥ずかしいからやめてよ。でも、優花もできたみたいだね。問題用紙は手元にあるんだから、どこが分からなかったか言ってくれたら教えられるよ。」

今回テストがみんな良かったみたいだが、実はテスト後というのは大事である。一回受けて終わりとしてしまうと、実力テストなどの時に忘れてしまっており、テストを受けた意味が半減してしまうので、こうして自分にどこができてどこができなかったのかを確認する作業はとっても大切なのだ。

優花も、普段なら空白だらけなので終わったそばからゴミ箱に捨てていたらしいのだが、今回は取っておくように言ったところもあり、自己採点に参加できた。

「なるほどね。じゃあ、ケアミスとかがなければ、平均以上ありそうね。この前の中間が平均60点くらいだったから、大丈夫だと思うわ。」

「ケアミスなんてこのうちがするわけじゃないじゃない。ってのは嘘で、今回はかなりできたもんだから、普段なら書き終わったあと寝てるんだけど、見直してたのよ。たぶん問題ないと思うわ。」

優花のテストに対する態度が良い方向に大きく変わってくれたことが嬉しい。実際の話は数学などは時間ぎりぎりになったので見直す時間がなかったらしいが、全体をとおして今までなおざりだったテストに対して、テスト前、テスト中そしてテスト後でさえも楽しんで挑んでいるようだ。

「優花が一番勉強の極意を会得したかもしれないね。すっごくテストが楽しそうだよ。」

「まさか勉強嫌いの優花がこんなに楽しそうにテストについて話するとわね。中学からこうだったら、この高校だって余裕で入れた

んじゃないの？」

「いや、うちもびっくりだよ。実際今回は何でか知らんけど、途中であきらめたりしなかったんだよね。これも、ツンのおかげかな？」

「ちょっと、その略し方はやめてよ。」

「いいじゃないの。”あんた”って呼ばないってことはそれだけク
ーちゃんに心を開いてる証拠なのよ。あだ名とはいえ、固有名詞を
避ける優花が名前で呼ぶってことはそれだけの価値があるのよ。」

「そうなんだ。でも、やっぱりツンは困るなあ。」

「大丈夫よ。きっとツンなんて秋のことを呼ぶのはこの一週間くら
いのものよ。」

和美の言っているのは、大木鈴のことだろう。テストが帰ってきて
成績を配布されたら優花にはボクが大木鈴であることを伝えるため、
大木鈴に関するあだ名が付くと言っているのだろうが、それはそれ
で何となくやな予感がする。

「ん？どういうこと？」

「良いのよ。優花ちゃんも時が来れば自然にわかることだから。」

和美はそう言っつてこの場はおさまり、そして夏休み前の一週間で成績などが返つてきて、正体を伝えるとそれが真実となった。

「え？マジで？」

「うん。今まで隠してきてごめんね。」

今は美術室だ。今日もバスケット部の部活があるのだが、部長に諸々の事情を伝え美術部の方に顔を出したいというと、絶対にバスケット部のマネージャーを辞めないという条件のもと、美術部に顔を出すことを許可してもらえた。

「優花にも伝えたことだし、蟹津さん？いえ、大木鈴って偽名を使つてもいいわ。本腰を入れて美術部に入らない？」

「バスケット部の方からも、絶対にマネージャーを辞めないという条件のもと今日はこちらに顔をだしているの、申し訳ないのですが、兼部という形は変えられません。」

「もつたないわ。ねえねえ。絶対に美術部に入った方がいいよ。」

花梨が直接勧誘するなんて滅多にないことなのよ。陽子も入って欲しいよね？」

静香先輩もボクを熱烈に勧誘してくれ、静香先輩の言葉に陽子先輩も首を縦に振る。優花も元々一緒に美術部にと言ってくれていたので、これで部員全員から勧誘を受けたことになる。

「優花とは心友ですから、何度も訪れると思いますよ。それに、以前もお願いしたようにここを避難所にさせていたきたいので、その時もただ避難するだけじゃなくって、作品を作ったりもできると思います。」

「それは勿論歓迎するんだが、週に数回とかでも良いから、もっと本腰をいれて美術部に来てほしいっていう話なんだよ。」

そのあと、河合部長からの熱烈歓迎をバスケット部のマネージャーを盾にしてどうにか断っている、放心状態からやっとのことで解放した優花が後ろから抱きついてきた。

「ちょま。優花どうしたの？」

「今までのご無礼をどうか水に流して、美術部に入ってくれませんか？ツンいや、ツン先生のお力が必要なのです。」

「ちよま。まず、無礼とか何にもしてないじゃん。それと、その先生っていろいろの辞めて。」

ある程度覚悟していたが、優花がこれほどまでに大木鈴に傾倒していたとは、美術好きの優花らしいとは言えるのだが、これはいきすぎだ。

「そんなことはありません。入学以来色々な生意気なことを言ってしまったこともそうだし、先生と知っていれば、あのようなこと絶対にしなかったのに。本当に申し訳ありませんでした。」

そう言って、優花は抱きついて腕を離すと地面に頭がつかんばかりに下げ謝ってきた。土下座なんてされても困るボクはただ動揺するばかりだった。

「やめてよ。あれはもう喧嘩して済んだことですよ？お願いだから頭をあげて。」

ボクは優花の側に膝をつくと、優花の肩を抱いて頭を上げさせる。

「優花が心友になってくれて、本当にうれしいんだよ。そんな態度を取って自分から壁をつくらないで欲しい。美術部に入らないのは、バスケット部のマネージャーをすることを昔から竜と約束していたから

だから、優花の責任じゃないよ。」

「でも、うち本当にツン先生の作品が好きで、ファンだった。だから、一緒に美術部で活動できたらって夢に見てきたの。」

心友の言葉が効いたのか、敬語はなくなったが、それでも先生という呼称はやめず、しかもうつすら涙まで流しだしてしまった。ボクは優花の頬に伝うそれを指で拭くと、ゆっくりと落ち着かせるような声で語りだす。

「ボクはね。優花の願いを聞いてあげることができないんだ。美術部に所属しているって周囲に知れたら、絶対に美術部のみんなに迷惑がかかるでしょ？」

それでも、優花に大木鈴の事実を伝え、美術部の人たちにボクの正体を明かしたのは、優花のことが大好きだからだよ。ボクにとってここは絶対な憩いの場になると思うんだ。

だから、美術部員じゃないからって悲しまないで、教室と一緒に勉強することもできるし、今回みたいに、バスケット部の許可を得て遊びに来ることだってできるんだからさ。」

ここまで、言い聞かせて、優花の頭を撫でてあげる。普段はボクよりも少し身長の高い優花だが、地面に座り込んでいる優花と膝を立

てているボクとでは少しボクの方が高い位置にあった。

「まるで、別れを惜しむ女性となだめる男性みたいだな。このまま二人とも動かないでくれるか？絵に残したい。」

「河合部長。やめてくださいよ。ただでさえボクには男性だったころの記憶が残ってるんですから、困ります。」

「禁断の愛……」

その一言に全員がガバッと振り向く。そこには既にキャンパスに筆を走らせている陽子先輩がいた。ボクが美術室に訪れたのは二度目だが、ここまでではつきりとした声を聞いたのは初めてかもしれない。

「陽子……こういうの好きなの？」

かろつじてといった雰囲気だが、静香先輩がそう言うと、注目されたことと、自分の趣味をばらしてしまった羞恥からか、キャンパスで顔を隠した陽子先輩は、筆は動かしたまま答えた。

「描いたり読んだりするだけなら好き。秋ちゃん。この前来た子ともう一度来てほしい。モデルになって欲しいの。」

小さい声だったが、意味は理解できた。この前来た中で、陽子先輩の需要をかなえると云ったら和美しかない。というか、初見で見抜いているところを見ると、観察眼はものすごいだろう。この人は美術で成功するかもしれない。

「ボク個人にというのならお受けします。しかし、本人に確認してみないと分からないので、もう一人の方は何とも言えません。」

「え??? ちょっとまって、この前来たって、明実と和美ちゃんだよね? どういうこと?」

「明実って女の子の子してるからかな? 陽子先輩もあんまりそんなことは言わないください。本人はすごく気にしているかもしれないんですから。」

「そう。ごめんなさい。でも、モデルについてはお願いしてみて、恥ずかしいというなら誰もいないところで個人的に描くことにするから。」

あれだけ話さなかった陽子先輩だったが、この話になると、小さい声ながらもきちんと話て来れる。それだけ好きなのかもしれないが、和美がこのことを知ったら怒るかな? ボクは和美に絶対に内緒にするって約束してるのに。

河合先輩の方を見ると、フムフムと納得したように頷いており、この人も侮れないから、和美のことがばれたかもしれない。どうせバしてしまうなら口止めをした方が安全なので、和美と相談して、来ることになるだろう。

「と、とにかく。ボクやその周りについてはしばらく内緒にしておいてください。事情は以前話したようになり深刻なものなので、絶対に夏休み中もバスケット部の活動で暇ができれば、遊びに来るのでそれで許してください。」

「まあ、事情があるんだから仕方がないな。それはいいとして、いつまで陽子のためにモデルをやってるつもりだ？」

河合部長のその言葉で、優花を慰めた状態で止まっていたことに気づくと、ボクと優花は真赤になりながら立ち上がった。

「大丈夫、眼に焼き付けたし、もうほとんど描きあがってる。」

「やめてください。その作品は発表しないでくださいね。」

そのあと、陽子先輩の描いた絵を見たり、この前の時間じゃ話切れなかったボクの記憶についてや体質についての話をした。

途中陽子先輩が竜との男の子同士の絵も描きたかったなどと言ったためもう一度全員で啞然としてしまったが、概ねの内容は伝えることができ、そして最後に。

「そんなに大木鈴つて人物に憧れをもっていたいたのは意外だったので、ちょっと渡すのは恥ずかしいのですが、よかつたらもらっていただけませんか？」

そう言つてボクが出したのはミサンガだった。この先輩たち三人ならば大丈夫と考えて今日は持つてきていたのだ。そしてミサンガを渡したあと、優花に。

「こつちはボクの新作だよ。お揃いのものを明実と和美の分も作つたから、一緒に海にでも行こうね。」

そう言つて、水着を渡した。テストまで何かとあつたため、昨日出来上がったばかりなので、どんな感じなのか分からないが、つけてほしいと渡した。

「これ本当に手作りなの？すっごい嬉しいよ。先生の作品を身に着けられるし、作品自体もすっごくおしゃれだし。」

喜んでもらえたようだ。美術室での目的も一応終わったし、そろそ

るバスケット部の方も終わって竜から連絡が来るので今日は帰ることにした。

美術部の人たちも夏休み前ということもあり、これ以上残っていく人たちもおらず、一緒に自転車置き場まで向かうことになった。

チャプター47（後書き）

今回多少短くなってしまうました。というのも、次回の話と一つだったのですが、あまりにも内容が変化していることから、ふたつにわけた方が良いのではないかと思いました。

今回テーマは秋の信者を増やすです。優花と秋の仲はもう最高潮といった状態、中学の時の友人、特に竜と司にはさすがに及ばないものの、高校に入って一番の心友となってくれることが確定しました。

次回：なんとあの人と対決します。え？なんであそこで避けちゃうんだ？

えっと、バトル物っぽく次回予告したかったのですが、残念ながらなくなっていませんね。次回もバトルではありませんが、ついに直接対決をします。

チャプター48

直接対決!?

「ちょっと、優花そんなにひっつかないですよ。」

「だって、憧れの先生に会えただけじゃなくて、先生からサインも新作までもらえたのが嬉しいんだもん。」

「本人にそういうこと言わないでよね。」

そう言っつて、ボクが赤くなっていると、

ポロリン

「よ、陽子先輩?何をしてらっしゃるのでしょうか?」

「優花ちゃんが攻めもありですね。」

「「……………」」

「は、離れて歩きましょう。」

「そ、そうね。うちが悪かったわ。」

こうして、距離を取ったのはいいのだが、先ほどからボクの第六感
が何かを訴えている。このメンバーに囲まれているため今は何も起
こっていないが、自転車置き場に近付くにつれ、その予感濃くな
ってくる。

「あ、あの。このあと自転車置き場では彼氏もいるので、できれば
一人で帰りたいんですが、ダメでしょうか？」

「まあ私たちは電車通学だから、その角まで一緒に行くわよ。そ
れとも何？一緒にいたら困ることでもあるのかしら？」

「実は……………」

上手く引き離してしまおうとしたが、河合先輩の目を見て隠してお
すことが不可能と感じたのできちんと説明をして距離をあけてもら

うことにした。今回は優花には三人の先輩の側にいてもらう。それは、ボクの側にいると危険というよりも、先輩たちに何かがあった時に対処できるようにだ。

そして、先ほど河合先輩が言った、自転車置き場と駅への別れ道になっっている角のところには、予想外の人がいた。

「遅かったわね。こんな屈辱を受けたのは初めてよ。」

「ほ、北条さん。どうしたのこんな時間まで？夏とはいえ、そろそろ冷え出すから帰った方がいいよ？」

「そんなことはどうでもいいわ。これを見なさい。」

「学年順位4位北条美香。今回ボクと一緒に勉強した明実が北条さんを抜いたから、4位になったんだね。次は頑張つて明実を抜いてね。北条さんが望むなら今回明実たちに渡した問題集は無料で渡すよ？」

「ふざけないでー！ー！」

プライドの高い北条さんが中間の時にボクと竜に負けたことを根に持っていることは気付いていた。そして期末こそはと一生懸命勉強

したのに今度は明実にまで負けたことで心底腹が立ったのだろう。

「ふざけてるのは、北条さん。あなただよ。今回の敗因は、順位にこだわるばかりで先生が出した基本問題をおろそかにしてケアレスミスを連発したんでしょ？問題を見ても北条さんができないような問題はなかったから、ケアレスミス以外に考えられないんだけど、どう？」

「た、確かに今回はケアレスミスが多かったのは認めるわ。でも、川瀬さんの点数の伸びは異常よ。問題集以外にもなにかしたんじゃないの？」

「ボクは先生のところに行って先に問題を見せてもらうなんて悪いことはしてないよ。知らないと思ったたら大間違いだぞ。ボクはそういう裏でコソコソとするのが嫌いなんだ。」

「な、そ・・・それは・・・」

「別に誰かに言いふらしたりはしないよ。ただ、次にこんなことしたらタダではおかないから覚悟しておいてね。あと、先生が教えた問題なんて、北条さんなら自力でできる問題だったんだから、卑怯な真似なんてしないでテストに望んだらもつといい点だったかもね。」

後ろに優花たちがいるのだが、北条さんの声は流石に聞こえてるかもしれないが、ボクの方は優花たちに聞き取れないように配慮しているので北条さんがやった不正については分からないだろう。

「あくまでも上から目線なのね。そういうところが気に入らないのよ。」

「そう？ボクは北条さんのことそこまで嫌いじゃないよ。今回不正をしたのは許せないけど、クラスでも中心になって色々な行事とか進めてくれてるし、頼りになる、なんて言うのかな？お姉ちゃんみたいな雰囲気じゃない？」

「へ？な、何言ってるのよ！！」

「ボクって、結構誤解されやすいから、変に嫌われちゃったみたいだね。できれば、みんなと仲良くしたいんだけどな。もちろん北条さんとも仲良くしたいんだよ。」

「あなた。自分が言ってることの意味を分かってるの？」

「特に難しい言葉を使ったわけでもないし、わかってるつもりだけど？」

「今さっき私はあなたに喧嘩を売ったのよ？なんで仲良くしたいと言えるわけよ？」

「仲良くしたいから。あ、そろそろ優花たちに声が聞こえちゃうから、変なこと言わないでね。」

「え？一緒にいた人がいるの？」

その瞬間だった。おそらく、仲間がいることで自分の秘密がばれたと感じ、先ほど言いふらさないと断っておきながらといった感情が爆発したのか、ボクに対する憎悪が増したのだろう。

こちらから見えない角度から夕方でライトをつけていない車が学校に乗り込んできて、北条さんとボクの方へと突っ込んできた。

「危ない!!！」

ボクは体が勝手に動いており、間一発と言ったところで北条さんを抱きかかえると、車を避けた。

キキキィィィドカン!!

ボクと北条さんを避けようとしたのか、ハンドル操作を誤った車は学校の門の側に突っ込む。

「優花、車に近付いちゃダメ！！ガソリンがもれてるから、爆発しちゃうよー！！」

事故にかけつけようとしていた優花に牽制の言葉をかけると、抱えていた北条さんを下ろし、車に駆け寄る。ドアの鍵もかかっておらず、急いであけはなつと、そこには血まみれの運転手が一人気絶していた。

「大丈夫ですか？」

一応声をかけるも、意識がないことを確認すると、運転手の命を救っただろうシートベルトを外すと、車から引きずり出し、先ほどからガソリンのにおいにする車から距離を取って地面に横たえる。

「優花。119に電話。ハンカチ持つてる人は貸して、血に触っちゃダメだよ。」

駆け寄ってきた先輩や優花に指示を出すと、応急処置をしていく。出血が激しいことから心臓が動いていることがわかり、傷口の止血をしていると、意識も取り戻した。

「大丈夫ですか？」

「お、俺は人を轢いてしまったのか？」

「いえ、轢きかけたのはボクたちですよ。こうしてあなたの応急処置ができるくらい元気なので大丈夫です。それよりも意識をしっかりと持ってください。もうすぐ救急車が来ますから。」

「そうか、じゃあ、俺は一人で事故してこんな状態なんだな。」

「そうですね。でも人を轢いていたよりはずっと良かったじゃないですか。もしボクが轢かれていたら今頃まだあの車の中ですよ。」

そう言って指を指した方向には先ほど乗っていた車があり、気が付くちょっと前にガソリンに火が引火して爆発を起こしており、大破した様子がうかがえる。

「あんな事故をしたのに、俺は生きてるし、誰も轢いていないなんて、奇跡みたいだな。」

「奇跡なんかじゃないわ。全部蟹津さんのおかげよ。」

「ほ、北条さん。」

「これで二度目ね。あなたに助けられるのは、これじゃああなたのことを恨んでいた私が馬鹿みたいじゃないの。それに、さっきの救出といい、応急処置といい。あなた何ものなの？」

「ちょっと待つてね。応急処置だけ全部終わってからきちんと話すことにするから、動かないでくださいね。シートベルトのおかげで命は助かりましたが、逆に背骨を痛めているみたいなので、首を固定します。」

自分も前にこうして竜に応急処置してもらったのかなとか考えながらだが、的確に応急処置を施していく。ボク自身が臨死体験をした時は不可能だが、こうして周囲の人が巻き込まれてしまうことも何度かあったのでその手際は悪くないはずだ。

首やハンドルに打ちつけた腕などを固定し終わると、救急車が到着し、ボクと北条さんも一応病院に行くことになった。

「悪いんだけど、竜と一緒に帰れないって言うといってくれる？ボクが事故で怪我したわけじゃないから安心してってそれも伝えてくれる？」

「どあほう！！何が安心してやねん。俺も一緒に行く。付き添いさせてください。昔からの幼馴染なので、家族との連絡もできるのので絶対に一緒に行った方がいいと思います。連れて行ってください。」

あちゃ〜。応急処置とかに忙しくって事故に集まってきた野次馬の中に竜がいることに気付かなかったよ。というか、竜の気配だけは時々気づけないんだよね。いつの間にかボクと同化してるっていうか、いるのが当たり前になってさ。

救急隊の人も同意してくれて、ボクと竜と北条さんは運転手の人とは別で駆け付けた先生の車にのって病院に向かうことになった。優花たちが心配そうにしていたので、笑顔で手を振ってあげた。

「秋。左足見せてみる。」

車の中に入ると、竜に言われた。

「ちょっとぶついただけだよ。」

「きちんと一から十まで説明してくれ、心配なだけなんやから。」

そう言っつて、竜は鞆からコールドスプレーを取り出すと、ボクの左足に振りかける。

「冷たい。っていつか、見る前にやらないですよ。きちんと思えるからさ。」

そのあと、車の後部座席で北条さんと三人並んでいるにも関わらず竜の膝に足を上げ、コールドスプレーをかけられた。北条さんを抱えて跳んだ時に打って、その足で大人一人を車から引きずり出したことを伝えると、思いつきり叱られた。

「んな無茶なことすんな。足を怪我してるんやったら、優花ちゃんとかおったんやから手伝ってもらえば良かったやないか。」

「だって、ガソリンが漏れてたから、危ないと思って。」

「その危ないところに自分はなんのためらいもなく駆け寄ったんやろっ。」

「うっ。それはそうだけど・・・。」

「今さら危険なことをするなって言えへんのやけど、お母さんと約束したんやないのか？自分の命を大切にすってさ。」

「違うもん。【どうしてもじやない時を除いて絶対に自分の命も大事にする】そう約束したんだもん。」

「今回の場合はどうしてもってのには入らへんかったんか。まあ、こうして無事やったからええけど、俺の寿命縮むかとおもったわ。」

「全然良くないわよ。あなた蟹津さんの彼氏なんでしょ？止めなさいよ。」

ボクと竜の会話にずっと耳を傾けていた北条さんがここにきて口を挟む。事故を目の当たりにしたにしては落ち着いていると思っていたが、やはり動揺しているようだ。

「彼氏やから、秋のこと良く知ってるから止めないんや。見とって分かったやろ？秋の場合脊髄反射的に自分を犠牲にして人を助けようとしてるんかと思うぐらいのお人よしやねんて。俺だって、こんなことがなければええと思うけど、既に七回も臨死体験するくらい不幸な人間やからな。」

「七回！！た、確かに高校に入ってから既に二回も大きな事故にあってるけど・・・」

「実際はもっと多いで？秋じゃなかったら死んでるような大きなものだけカウントしとるだけで、細かい事故とかはそんな数え切れ

へんな。」

「あんまり不幸って強調しないでよ。ボクだって一生懸命努力してるんだから。」

「せやけど、その結果がこれやる？この前の猪と一緒に原因はこの北条さんなんとちゃうの？」

「いや、確かに北条さんをかばって怪我したんだけど、ちゃんと仲直りしたから大丈夫だよ。」

「ああ、じゃあ、そっちの話もしてもええん？」

「うん。それは後で三人になってからね。」

ボクと竜の会話に疑問符を浮かべながらも、先ほどと一緒にできちんと話すことを後回しにされたことに多少不満のようだ。しかし、さつき二人で話していた時と違い、あからさまな嫌悪がなくなっており、どちらかというと自分だけ知らないことに拗ねているみたいなお雰囲気がある。

「後できちんと説明するから、拗ね無いでね。」

「す、拗ねる！！そ、そんなわけないでしょ。私は、隠しごとされているのが嫌なだけよ。」

「おいおい、あんまりからかうなよ。車の中で不幸が起こると思わへんけどさ。」

「そうだね。とにかく、事情は複雑だから落ち着いたら話すから、もうしばらくまってね。」

プライドの高い北条さんをいじるのは面白いのだが、竜の言ったとおり、あまりあおり過ぎても危険なので、病院も近付いてきたし、このあたりでやめて大人しく座席に座っていることにする。

「ところで、いつまで彼氏の膝に足を乗せておくつもり？」

「あ……」

ボクは真赤になると、おずおずと足をおろしてスカートの裾を直す。その様子に今度は北条さんがニヤリとする番だった。

チャプター48（後書き）

成績を返されたその日です。まだ夏休みには入っていません。

北条さんがなんだか可愛くみえてきました。AKIはツンデレキャラ好きかもしれませんね。いえ、好きなんでしょうね。男の子のツンツンしている可愛い子も欲しいなあ。あ、そういえばあの子の裏設定そうだったなあ。そろそろあの子の裏設定が分かるような話を書き出さないといけませんね。

今回のテーマは「和解決」です。

北条美香という人物は悪役的立場で出てきたのですが、AKIにとって本格的な悪役の出番はもう少し後になりそうです。え？悪役いらぬ？話の山がなくなるので、流石に悪役は出します。その代りハッピーエンドが目標にあるので、きちんとそこら辺も構想はねってあります。

それでは、48話読んでいただきまして誠にありがとうございました。

チャプター49

美香の世界

なんで私がこんな子と一緒に病院なんているのかしら、しかも、なんで向こうだけ彼氏同伴なんて、私だって一声かければ男なんていくらでも集まるんだから。

「北条さん説明を先送りにしてごめんね。今からきちんと説明するね。」

「早くしてくださる？大した疑問でもないとはいえ、隠しごとを私にするなんて苛立つだけですわ。」

「ううん。話を最後まで聞いても同じことが言えるか分からないけど、きちんと説明するね。ボクつてすっごい不幸体質で、今日の事故もこの前のイノシシもたぶんボクのせいなんだよね。」

「はあ？じゃあ、私はあなたの不幸に巻き込まれた犠牲者じゃないの、じゃあ、先ほどまでの感謝の気持ちは無意味？ってことかしら？」

「それでもないんが、一大事なんやけどな。秋？もう、教えたってええんか？」

「うん。大丈夫だよ。北条さんはプライド高いけど、悪い人じゃないからね。」

二人にしか分からないような会話をまだ続けるつもりなのですね。本当にこの二人は何かイラつきますわ。というか、車の中からずつとですけど、その男との間に態と体を入れないでくださるかしら？まあ、顔は悪いとは言えませんが、私はそんな男のことなんてどうでもよくつてよ。

「プ、プライドなんて、全く、どこまでもイラつく人ね。」

「まあ、そういうなや。秋がこんな態度とるん珍しいんやけどな。そんなことより、本題にはいるで、秋はな、相手に憎まれると不幸が起こる体質やねん。この意味分かるか？」

「え？相手に？」

「つまり、今回も前回も、北条さん。あんたが秋のことを恨んだから事故がおこつとるんで、せやから、確かに巻き込まれたつても言えるんやけど、原因はあんたにもあるつちゅうこつちや。」

この男ムカつきますわ。先ほどから蟹津さんの味方ばかりして、それではすべて私が悪いって言いたいのかしら!?

「ちよつと、待ちなさいよ。それじゃあまるで私が悪いみたいじゃありませんか。私そんなことしらなかったのに。」

「もう、竜はそんな言い方してあげないですよ。北条さんの言う通り、知らなかった北条さんに責められる理由はないんだから。とにかく、ボクのことを恨むと、今回みたいにその分北条さんに返ってくるから、気をつけてね。」

私を脅すなんて、良い度胸してるじゃありませんの。次に不幸が起こった時はあなたのたすけなんて借りずに自分で回避してみせますことよ。

「ちよま。お前ちゃんと仲直りする気あんのか？俺の言った言葉よりもひどいんじゃないか？」

「もう、鈍感なら最後まで鈍感でいてよね。変なところだけ鋭いんだから。ボクは北条さんと仲良くするつもりはないかもね。だって、北条さんとはライバルだからね。」

「はあ？ライバルってどういうことや？」

「とにかく、北条さんとは永遠に争いあう仲ってことだよ。でも、今度からは陰で悪さしたり、足を引っ張り合うような関係じゃなくて、正々堂々戦いましょ。ボクは絶対に負けないんだからね。」

「ええ、私もその方がいいですね。いきなり仲良くなれなんて言われるよりも、それに私は今日あなたに宣戦布告をするつもりであそこで待っていたのですもの。バスケットの方に顔を出したら、あなたはいないし、帰ったかもしれないと思って自転車置き場に行ったらあなたの自転車はまだあるんですもの。」

「それで、電車と自転車置き場の別かれ道でボクを待ってたの？本当に電車で先に帰ってたかどうか？」

「そ、その時は川瀬さんにも連絡先を聞いて家まで押し掛ける気でしたわ。」

「プライド高いとは思っていたけど、そこまでだったんだね。竜はこんな子のことどう思う？」

「せやな。俺も昔あんな感じやったんかなとか思うと微妙やわな。」

「ふん。」

どういうことかしら？先ほどからやけに私に突っかかってくるかと思えば、彼氏に私の話題をふるなんて。しかも、昔の彼と私が似ている？

「なによ。私がこんな男と同じと思わないうでいたきたいわ。今回の期末でわたくしは学年4番、今はまだ知られていないかもしれないが、せんが、運動だつて秋の競技大会では私のすごさをみせてあげましてよ。」

「ああ、竜はボクに張り合つて切磋琢磨してきた人間だから似ているつて意味だよ。あと、学年で二番の上田竜だよ。ついでに運動の方も、夏の大会から一年生ながらバスケット部のレギュラーになるくらいできるよ。」

「え？上田？・・・が、学校の成績だけがすべてではありませんわ。わ、わたくしは私生活だつて・・・」

「はいはい、負けず嫌いなのは分かつたから、張りあつのはそこら辺にしてね。それよりも、さつきから看護婦さんが北条さんの名前を呼んでるよ。」

「北条さん、検査しますよ。」

「は、はい!!」

私としたことが、会話に夢中で周囲への配慮を怠るなんて、蟹津さんと一緒にいるとこちらの調子が狂ってしまいますわ。

「北条美香さんだね。こんな綺麗な子が怪我なんてしたら大変だ。事情は担任の先生から聴いているから、そっちのベットに横になってゆっくりしてね。担当の看護婦が少しみるだけだから、一応レントゲンとかも撮るから、検査が終わったら移動してね。」

なんなのですか、これだから田舎の医者はいやですわ。馴れ馴れしい態度なんてとっちゃって、まあ私のことを綺麗と誉めたあたりは見る目だけは確かの様ですね。

「先生久しぶりです。」

あら？蟹津さんも入ってきたみたいね。

「また秋ちゃんか、全く今度は事故だって？運転手が秋ちゃんの可愛さに見惚れて事故したんじゃないだろうね？」

「そんなわけないじゃないですか。角を曲がってきたところにボクたちが立ち話をしていて事故してしまっただけですよ。」

「そうか、秋ちゃんみたいな絶世の美少女がいたら先生なんて運転に集中できないもんだが。」

わ、私には綺麗としか言っていなかったのに、絶世の美女ですって？
やっぱりこの医者目はあまりあてにはなりませんわ。

「もう、お医者さんがよそ見運転で事故して自分の病院で入院なんて笑い話じゃないですか。先生も気をつけて運転してくださいね。」

「ああ、もちろん気をつけるさ。入院している間に秋ちゃんが怪我をしたら、誰が秋ちゃんの治療をするんだい。」

「そうですね。先生には本当にいつも助けてもらって感謝してます。」

そうなの、そう言えば不幸少女って言ってたわね。じゃあ、さっきのは常連の客に対するリップサービスみたいなものなのね。

「いやいや、ところで、秋ちゃんの回復力について論文を書きたいのだが、やっぱり許可は出してもらえないだろうか？」

「それはちょっと、自分でも異常なまでの回復力に驚いていますし、先生以外の人に体を見られるのもちょっと。」

「秋ちゃんもそんな年になったんだね。今は彼氏もいるんだっけ？ 今日外でまってるのかな？」

「はい、学校の帰りだったので、診察を受けている間に両親に連絡をしに行ってくれたので、お母さんも来ますよ。」

「あの美人のお母さんだね。しかし、秋ちゃんも日に日にお母さんに似て綺麗になっていくよね。前までは、可愛い感じだったけど、今はもう大人の女性っぽくなってきたね。」

そ、それにしても、やけに蟹津さんの診察だけ長くありませんこと？ 私の診察の時はこの看護婦に任せてさっさと次を呼んでくせに、この医者もなんだかムカついて来ましたわ。

「北条さん。異常は見つかりませんでした。一応レントゲンを撮るので、その角を曲がった撮影室に向かってください。部屋の前に着替えなども置いてありますので、それに着替えてください。」

私は指示された部屋へ向かうためにベットから降りて、診察室を出ようとする。すると、まだ蟹津さんとの会話は続いているらしく、笑い声が聞こえてくる。

「もう、ボクはまだ中学生ですよ。結婚なんて考えてませんよ。」

「いやいや、今どきの子は早いつていうじゃないか。秋ちゃんが16歳になったら先生と結婚しないか？」

「だから、彼氏いますつて。」

やっぱり何だかムカつく。

レントゲン室に向かって歩き出すと、そこに上田くんがいた。先ほど連絡に行ったと言っていたが、ケータイをいじっていることをみるとそれで済ませてしまったらしい。

「ちょっと、院内ではケータイの電源を落とすのがマナーですわ。機器に障害がでたらどうしてくれるのよ。」

「ああ、わりい。高校に入って持ったばかりやから、ケータイって慣れんくつてな。今からレントゲンか？」

「ええ、異常はないみたいだけど、念のためって言われてね。」

「そりゃそうやる。秋が抱えて跳んだんや、秋本人がどこかに当たることはあっても、あんたの体は確実に守ったやろうからな。」

「そ、それは・・・」

確かに足に怪我をした蟹津さんに比べて五体満足でいる私に疑問を持ちましたけど、それが彼女がかばったためであると現場を見ていなくても理解している二人の関係はどれほど強いものなのかしら。

「それより、先ほど誰かとメールをしていたみたいでしたが、何の話？」

話題から逃げたくなった私は卑怯だとは感じながらも、違う話題を彼にふっていた。

「ああ、今回の事件のことを中学の時の心友たちにメールしたんや。そしたら、あいつらこの前の期末でY高のトップ4独占したらしいわ。」

「Y高のトップ4？Y高ってT高以上の進学校じゃありませんこと？」

「せやで、自分でいうのも変やけど、俺や秋もY高受かるレベルはあるからな。特待生制度があったから、俺と秋は無料で通えるT高受けたんやけど、Y高受けてたらトップ6は俺らで埋めとったやろうな。」

「そ、そうなの。自信過剰もそれくらいにしておかないと、私がすぐに抜き去ってごらんにいれますわ。」

「ああ、がんばれよ。秋がライバルに認めたんやったら、ほんまに俺と同じかそれ以上になるかもしれへんしな。秋のライバルとしての助言やけど、そんじょそこの努力じゃ秋に追いつくのは無理やで。」

「私が努力を惜しんだことなどありませんわ。それに、私だけじゃなく、勉強だけなら、私たちのクラスの森君や川瀬さんがいますしね。」

「ああ、川瀬ってのは心友やろ？絶対に伸びるな。森ってやつなんやけど、どんなやつなんや？この前の遠足の時におったってことは多少話したりはしとるんやろ？」

「森君？そうですわね。私もよくわかりませんわ。一時期蟹津さんについて良く聞いてきたことがありますが、それ以外に話したことはありませんもの。」

「なるほどね。あくまで秋狙いやったってことか。しかし、その話し方、まるでどっかの御姫様が貴族のご令嬢みたいな話し方やな。」

「わ、私の家は本当に明治華族の旧家ですわ。」

「そうそう、そのわたくしって言うのが高貴な身分っぽいねんな。華族ねえ。家のことでなんや大変なんやろうけど、秋に対して悪いように思わんといてな。ライバルなんて言ってたけど、本当は仲良くしたいんやから。」

「そ、そんなことは解ってますわ。こちらだって、良きライバルとして共に高めあいたいとおもってますよ。」

「ああ、それは無理や。秋の成長速度は異常やし、現在でも置いてかれとるんやから、背中を追いかけるんで一杯一杯やで、小学校の時から見てきた俺がいうんやから、間違いあらへんわ。まあそれでも頑張つてれば秋の方から手をのばしてくれるけどな。努力する人間好きやからな。」

「あなた、蟹津さんが努力している人が好きなのを知っていて、そういう風に見せて蟹津さんの気を引いたの？サイテーね。」

「結果的にそうなるかも知れへんな。秋に認めてもらいたかったん

はほんまやしな。でも、努力したのは成績を見たらわかるやろ？本気で追いつきたかったんや。」

そう言った彼の顔は男の子の顔をしましたわ。なんていうのかな、無茶して登らなくても良いはずの山に挑戦して、それを登り切った後のような。そんなんだか良く分からない感覚ですわ。

「そ、そろそろレントゲンを撮らないと、蟹津さんが来てしまいますわ。」

「せやな。まあ、同じクラスなんやろ？頑張つてな。」

「と、当然ですわ。」

私は何か分からないこの胸のドキドキから逃れたくて、レントゲン室に入っただけでした。そこには専用の服とかがおいてありましたわ。服を着替えて、撮影室にはいると、そこには蟹津さんがもう既に来ていました。

「ありや？診察室を出たのがずいぶん前だったからもうおわってると思ったのに、ひよっとして外にいた竜と話してた？」

「ええ、少しあなたについて話をしていましたわ。」

「ふん。じゃあ、やっぱり、恋の方でもライバルだね。ボクは竜のこと大好きだから譲るつもりはないからね。」

「そ、そんな、あんな男のことなんて……」

「まあ、竜が浮気するとは思えないけどね。こうなると思ったから、極力遠ざけてたのになあ。先生の話長いんだもん。」

「か、勝手に結論を出さないでくださる？」

「じゃあ、竜のこと嫌いって言いきれる？無理しなくてもいいよ。きつと別にカツコ良い彼ができるよ。竜についてはあきらめてね。」

「あなたって、本当に私のことを馬鹿にしていますのね。」

「ボク嫌いな人は無視するよ？北条さんのことは嫌いじゃないよ。でも、竜のことがあるから、やっぱりライバルかな。絶対に負けな
いけどね。」

「ふふ、なんだか上田君のことなんてどうでも良くなってきましたわ。あなたと正式にライバル宣言をしますわ。絶対に追い抜いてみ

せましてよ。」

「ふん。とりあえず、ここはボクの勝ちかな？」

「ちょっと、いきなり何をするのよ!!！」

いきなり、蟹津さんに女性の特徴を揉まれてしまいました。私としたことが、触られるまで反応すらできませんでしたわ。今日のことといい、テストのことといい、確かに超えるのは中々大変そうですわ。

「私がやらねばなしで終わるとでも？」

「ちよま。ダメえ〜!!！」

私がお返しにと蟹津さんの物を揉むと可愛い声を上げだした。あら、思っていたよりも柔らかい。癖になりそうかも。

「ぼ、ボクはそんな性癖はないんだから、うう……」

「ふふ、私でもこれは勝てるようね。あなたよりも忍耐力があるってことですね。」

あとで友人に聞いたら、むしろ男性からしたら、良い反応を返した蟹津さんの方がポイントが高いことを聞いてしまいましたわ。

つ、次こそは勝って見せましてよ!!

チャプター49（後書き）

AKIは物語の中にツンデレ要素と百合表現をいれないと生きていけないのでしょうか？

色々執筆に関する疑問は残るものの、今回で北条美香との絡みは終了です。レントゲン室を出た後の竜の反応は皆様のご想像にお任せすることにいたします。まあ、鈍感発言で秋を真っ赤にさせたり、北条さんとの絡みについて秋が言い訳をする様子など、様々な妄想をしてあげてください。

今回のテーマは「北条さんと秋をライバルにする」でお送りしてきました。

そのため、北条さんの気持ちを二重カットで多量に出すか、北条さん目線にするかで迷ったのですが、あまりにも『』が多くなったので、目線を北条さんにしました。ライバル視した表現がいくつか出てきて、AKIとしては中々面白いキャラが増えてくれたと思っています。いるのですが、いかがでしょうか？

北条さんは悪役ではあります。今ここに宣言をします。
皆さんからの御意見・御感想楽しみに待っています。

それでは、49話にお付き合いしていただきまして本当にありがとうございました。
ございました。

チャプター50

夏休み突入

北条さんの体にも異状がないことが判明して、安堵したボクたちは、ひとまずみんな帰宅することになった。北条さんが別れの間際に言った言葉が印象的だ。

「蟹津さん。絶対にあなたに勉強も運動も勝って見せますわ。その時は、潔く負けを認めなさい。」

ボクとしては、竜のこと以外、どっちでもいいんだけどなあ。でも、あんな風に言われたら、勉強や運動で負けたら、竜のことを奪うとか考えそうだし、負けられないけどね。

「秋って昔から、負けず嫌いやよな。まあ、中学くらいから、何かについて誰かより劣っていると思うことがあらへんかったから、忘れかけとったんやけどさ。」

「女の子には引いてはいけない時があるんだよ。絶対に北条さんだけには負けられないよ。まあ、高校を卒業した時に、真奈美ちゃん

に個人的に会っちゃダメだよって言ったのと同じ理由だよ。」

「ん？真奈美ちゃんと北条さんがなんや関係あるんか？ひよっとして、北条さんってレ・・・グハツ。」

どうしてこの子は気付かないかな。真奈美ちゃんは強い人が好きなだけで、本来はノーマルだったなんてことはみんな知ってることなのに。そして、前世ではボクは男の子で野球をやったため、格闘技なんてできずに、つまり、海良中学で一番強かったのが誰のことを指しているのかわかるだろうに・・・

解らないんだろうなあ。だって竜だもんね。

「いきなり、肘打ちとは酷くね？」

「気にしないの。そう言えば、ここのところ司たちとも遊んでないから、暗黒も残酷も出番がないね。体がなまるといけないし、フルコースで逝ってみる？」

「ちょっと待て、何かおかしくないか？行くってどこに行くのかわからんぞ？」

「大丈夫だよ。竜ならきつと、天国に行けるから。」

「いやいや、俺はまだこの世でやり残したことが多すぎる。美味しいごはんもまだまだ食べたいし、それに秋と結婚したいし……」

「……」

「秋ちゃん。竜くん。お母さんのことは心配しなくてもいいから、ブチューってやっちゃっていいわよ。」

「ちよま。そんなことしないもん。」

「流石に、それはちょっと俺も……」

「あらあら？ 将来を誓い合った仲じゃないの。お父さんには内緒にしておいてあげるわね。」

「はう……」

明らかにお母さんはからかいモードだ。ボクのことを秋ちゃんなんて呼んでいたのがいい証拠だ。竜も竜だよ。お母さんがいるの忘れ

てあんなこと言うなんてさ。でも、竜の中でボクとのがすごく大切なことが分かって嬉しいかも。

「でも、竜くんも成長期の男の子よね。まず始めに食べ物のお出でなんて、あれ？そう言えばお弁当って・・・」

「竜うー？あんたの頭の中にはご飯の心配しかないのかなあ？？」

「ちよま。そ、そんなことはないって、と、とりあえずその握りしめたごぶしをおろしてくれ、いえ、おろしてください。」

「じゃあ、絶対に浮気しないって誓う？ボク以外の老若男女問わずに心奪われないって誓って？」

「誓います。絶対に浮気しません。」

「うん。許してあげる。」

ボクはそう言って、掲げていたごぶしを下ろす。竜のことを信じていないわけではないが、北条さんは美人だし、やっぱり心配だった。でも、竜は約束を守ってくれるから、大丈夫だよな。

「勢いでいつちまったけど、大丈夫やって、俺が秋以外の女の子好きになるわけないやろ？」

ボン！！

「あらあら。本当に二人は仲がいいのね。そろそろ、学校に着くから、秋は荷物車の中に入れておいていいわよ。」

「う、うん。」

やばい、早く学校に着いてもらわないと、心臓がもたないかもしれない。北条さんに対して嫉妬していたから、竜に色々言っていたが、そのすべてをストレートに返されてボクの心臓は悲鳴を上げている。

「もう外もくらいから、後ろからライト照らしてついて行きましょうか？それとも、二人の邪魔をしたらいけないから、先に帰りましょうか？」

「自転車の速度に合わせていたら、事故すると危ないので、大丈夫です。俺が側について絶対に危険な目に合わせませんよ。」

「そう、竜くんがそう言ってくれるなら安心ね。昔から竜くんは秋のナイトだものね。」

「もう、お母さんもからかうのやめてよ。とにかく、二度も事故にあいたくないし、お母さんは先に帰っててよね。」

「はいはい。お邪魔虫は帰りますよ。」

そのあと、車は自転車置き場の側に着き、ボクと竜は明日から夏休みとはいえ、部活もあるので自転車を回収するのだった。

「秋のナイトか、俺って秋のこと守ってやれて無いやん。」

「ううん。そんなことないよ。肉体的には守ってもらわなければならないんだから良いんだけど、精神的には、すっごく守ってもらってるよ。もちろん心友みんなに言えることなんだけど、やっぱり竜が側にいてくれるのが一番うれしいよ。」

今日は事故もあつたし、たくさん心配をかけて我がまましたい放題だったから、最後まで素直な気持ち伝えてあげた。

「秋・・・」

「竜・・・」

「キスしていい?」

ボクは小さく頷く。

竜が体を寄せ、大きな体で包み込むようにして、そして、ボクが目を閉じようとした時、気づいてしまった。

「お母さん?」

「へ?」

「そこで止めちゃダメじゃないの。」

「いや、なんでそこで止めもしないで、凝視しているのか、そっちの方が気になるんだけど。」

「カバンに着いていた反射材を持っていかなかったじゃない?夜道は危険だと思ってるね。でも気にしないで、どっぞどっぞ続けて。」

「どつぞじゃない！！もう、自転車にだってたくさん反射材はついているんだから問題なかったのに。」

「確かにそうね。おほほほ、じゃあ、お邪魔虫はこれで・・・」

「待って、反射材はもらうよ。心配してくれたんでしょ？ありがと。」

夕方事故にあったボクのことを心配で迎えに来てくれたのは事実だし、反射材だって本当にボクのことを思って、態々車を止めて持ってきてくれたのだろう。受け取らないわけにはいかない。ただ、ちよつと間が悪かったただけだ。

「本当に気をつけて帰ってくるのよ。じゃあ、お家でね。」

「うん。」

お母さんが帰ったあと、とりあえず、ボクは自転車に向かって歩き出す。

「えっと、続きしても？」

「ダメ。お母さんが心配するから早く帰らないとね。」

「そんなあゝ。」

なんてね。ちょっと意地悪しただけだよ。

「チュツ」

「ちよま。いきなり!!」

「本当に早く帰らないと心配するだろうから帰ろ。」

「お、おう。」

一瞬触れあうような、そんな短いキスだが、心配してくれたことへの謝罪と、一緒にいてくれることへの感謝をこめてキスをした。

そのあと、ボクらは二人並んで自転車に乗って家に帰った。もちろん、ボクの家の方が近いので、竜はボクの家まで送ってくれて、ボクを一人ぼっちにさせないでいてくれた。

「今日はありがと。また、明日終業式と夏休み部活でね。」

「おう。おやすみ。」

「おやすみ。」

竜が帰ると、ボクは玄関から家に入っていく。

「あ、お弁当洗ってくれたんだ。ありがとう。明日終業式だけど、午後から部活あるから、帰りは夕方になるね。」

「ええ、わかったわ。今日は遅くなっちゃったし、朝のお弁当はお母さんが作ってあげようか？」

「久しぶりにお母さんのお弁当を食べたいって気もするけど、やっぱり自分で作るよ。今日は迷惑をかけた人がたくさんいるから、その人たちにも何か作ってあげたいんだ。」

「もう、そんなに張り切っちゃって大丈夫なの？」

「うん。今日は美術部にお世話になって、マネージャーの仕事してないから、体力的には有り余ってるしね。」

「うん。秋がそう言うならいいけど、武もそうだけど、あなたたちって、自分のことになると、配慮が足りないところがあるからお母さんは心配よ。」

「ごめんね。でも、ボクが自分のことを気につけない分、お母さんや竜たちみたいな心友がボクのことを気にかけてくれるから。大丈夫だよ。」

「秋には負けるわ。それじゃあ、お母さんは秋のことをきちんと思わないといけないわね。今日はもうご飯を食べて、お風呂に入ったら寝なさい。成績表はさっきお弁当を出した時に見たから、心配はないわ。というか、本当に手のかからない子なんだから、偶にはお母さんに甘えなさい。」

そう言っつて、お母さんは暖かいごはんを自分の分と一緒にボクの前に出してくれた。帰っつてすぐにボクのために準備してくれたのだから。夕食を作り終わるくらいに竜から連絡をもらったので、武兄ちゃんとお父さんは先に食べたみたいだ。

「いただきます。」

「いただきます。」

二人揃ってご飯を食べだす。作ってからだいぶ時間がたっているためか、味が染みすぎて濃い味付けになってしまっているが、それでも暖かいごはんがボクの心を癒してくれる。ボクはいま家に帰ってきたんだ。

翌朝

ボクは昨夜遅かったのにも関わらず早起きをした。実質睡眠時間は5時間ほどしかとれなかったが、それでも、昨日迷惑をかけた人にクッキーを焼いて行ってあげよう、といつもよりも早く起きたのだ。

朝食の準備とお弁当のおかずを作りながら、クッキーがオーブンの中で焼きあがるのを待つ。美術部の先輩や優花の分。バスケット部の人たち、あとは明実と和美にもプレゼントしよう。学校にお菓子を持って行くことになるけど、それくらい許してもらえるよね？

今日は夏休み前最後ということもあり、朝練はないので、みんなと同じ時間に登校するべく竜が迎えに来てくれた。

「おはよう。」

「おはよう。ん？秋からなんか甘い匂いがする。」

「あんたは犬か。これだよ。」

まず、竜にクッキーをプレゼント。竜はその場で袋を開けると、朝ご飯を食べてきたばかりのはずなのに、一つ口に入れる。

「うま！！昨日のお礼って感じて他の人にも配るん？」

「そそ、みんな喜んでくれるといいんだけど。」

「大丈夫やって、こんなにおいしいクッキーもらって喜んでくれる人はおらんわな。」

いつつもこの笑顔に負けてる気がする。竜にそう言われたら、早起きした甲斐があったって気がするよ。竜の笑顔とストレートな誉め言葉で浮かれながら学校に向かう。

「ありがとう、じゃあ学校に行こうか。」

学校に着くと、昨日メールで平気だったと伝えておいたにもかかわらず、明実・優花・和美に囲まれて質問攻めにあってしまった。クッキーを渡すと笑顔で受け取ってくれたが、竜と違いお昼に食べると言って優花以外はその場では食べなかった。

「うまああ。ねね、今度はこのクッキーの作り方教えてよ。」

「いいよ。中学の時もそうやってクッキーの手作り教室ひらいたなあ。美術部の人にも持って行くんだけど、今日って美術部の活動あるの?」

「ああ、今日はないわよ。だったら、うちが持って行くの?先輩らの教室には何度も行ったことあるから、一緒に行く?」

「うん。やっぱり直接渡したいから。」

終業式のあと、通知表をもらったら優花と一緒に先輩たちの教室に向かうことになった。二年生の教室は階が違うので、あまり訪れることはないのだが、優花と一緒に行ってくれるならば心配はないだろう。

そのあと、事故のことはあらかじめ説明し終わったので、優花の話題へと変わった。中間の成績をしかった両親に期末の成績を見せたら、

家族総出で祝いだしたとか。勉強嫌いの優花はもう卒業だね。

今まで赤点ギリギリアウトの優花が、平均点ギリギリとはいえ以前よりもかなりのレベルアップをした。周りから認められるとやる気も違ってくる。きっと夏休み中は勉強しないで良いと思うので、そこだけボクが注意して見ていれば、優花はきっと成長できるよ。

終業式は、特待生と一学期に賞などを獲得した人への授賞式が行われた。学年でトップ5になった、ボク・竜・北条さん・明実・森君が壇上に呼ばれる。入学の試験の時に既に学費が免除のボクと竜と北条さんには特別に毎月首席のボクは5万・他の二人には2万ずつ支給されるらしい。

ボクはこの首席のご褒美を盾にして、みんなに水着をプレゼント

した。勉強のご褒美は勉強でといった風につまく言いくるめたりなのだが、元々資金に関して大量にあることを知っている子もいたので、すんなり受け取ってもらえた。

賞状の方は、学校を通して取ったのが英語の検定試験だけだったので、美術作品に対する物やスポーツでの賞は今回はない。いや、むしろ中学生の時が多すぎた。多すぎたために、吉川先生からクラスで渡される時に、全部まとめておめでとうといった雰囲気になってしまったのは懐かしい。

「あら？学年順位では負けましたが、認定試験などは私の方がたくさん賞を取っているようですね。あなたはそっただけかしら？」

「うん。今回はね。北条さんは秘書検なんて受けたんだ。すごいね。」

「淑女のたしなみですよ。おーほっほっほ。」

「あんなあ、からかうんもそのくらいにしといたれて、こいつの場合、中学で全部つけちゃって受けられる検定がないだけやわ。秘書検だって自分3級やろ？凄いいん分かるけど、こいつはもっと上やで？」

「な、じゃ、じゃあ。漢字は？私今回2級を合格しましたよ？」

「さっきこれ以上受けられないって言ったでしょ？」

そういつて、ボクは人差し指を一本立てた。

「い、一級をもってるのね。う・・・」

北条さんは他にも一学期のうちに受けた検定をいくつか持っていたが、そのどれもがボクよりも低い級であることが理解できると、沈んでしまった。

「ま、まあ。これ以上、上がないから、追い抜くことはできないけど、追いつくことならできるんじゃないかな？数学検定とか、結構簡単だったしすぐに北条さんならおいつけるよ。」

「まあ、級や段だけならな。そのすべてを満点で合格しとる時点でおいついとるって言えるんか？」

「北条さんなら大丈夫だよ。がんばってね。」

北条さんは今さらながらボクの中学時代の異常さを理解したらしい。検定に関しては、部活引退後に何もやることがなくなった鈴木と浩太

の三人で端から順番に受けて行った結果だ。

浩太たちは中学卒業レベルを受けていったのだが、鈴の悪戯で漢字検定の一級を飛び級して受けたらうかったことから、それ以降は飛び級できるものは全部していったらこうなってしまった。

「ま、まだ私には勉強以外にも運動というジャンルが残されてますわ。わ、私こう見えても、護身術として、空手の段をもってますよ。」

「へえ。優花も持ってたし、みんな格闘技の段を持ってるんだね。海良では柔道の道場しかなかったし、ボク小学校までしかやってないから、段はもってないな。」

そういうと、北条さんは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「その代り、日本で一番強い女の子やけどな。最強美少女ってこいつのことやからな。」

「わ、私としたことが忘れていましたわ。格闘技であなたよりも強い人間はいなかったのでしたね。」

「ちよま。空手とか型の稽古したことないから、リアルでそこは北

糸さんが勝ってると思うよ。格闘技って全体のくくりで見たら流石にねえ。」

「ふん。そのようなところで勝っても嬉しくありませんわ。あなたが同じことをしてそれでも私の方が優れていると証明しなければ、本当の勝ちではありませんことよ。」

「はいはい。ホントプライド高いね。とりあえず、もう授賞終わってたから席に帰らない?」

「ええ、夏休み明けを楽しみにしてらっしゃい。」

完全に敵意むき出しなのだが、今までのように一方的に嫌っているという雰囲気ではなくなった。こうして切磋琢磨して若者は成長していくんだな。うんうん。

「なにたそがれてるのよ。私たちも早く帰りましょ。」

明実にそう言われ、自分たちのクラスの場所に戻る。竜とはここで一旦お別れだ。ボクがいなくてもさみしがらんじゃないぞ。

って言っても、受賞の効率化を図るためにクラスの一番前に座るボクらは結構近くにいるんだけどね。教室と違って壁がないので本当

にすぐ隣だ。

前の方には竜、明実、北条さんが中立？森君がおそらく悪い感情は持っていないといった様子であれば、問題ないはずである。実際終業式終了まで無事何事もなく終わった。

「いぶつしゃい。」

「昨日はご心配をおかけしました。これはご迷惑をおかけしたお詫びです。みなさんで食べてください。」

事前に優花にメールをしてもらってあったので、教室に着くと花梨部長に迎え入れられた。

「花梨！！いつの間に秋ちゃんと仲良くなってやがったんだ。」

「昨日、美術部にお邪魔するって報告したじゃありませんか。まさかキャプテンから聞いてないんですか？」

「ああ、そういえば、秋ちゃんが来ないって言うから、帰っちゃったんだけど、あのあと学校で事故があったらしいぜ、知ってたか？」

「先輩、一つ目に、ボクは練習を真面目に頑張ってるような人が好きです。二つ目にその事故にあったのボクです。」

「なにいい！！花梨のせいで秋ちゃんに嫌われちゃったじゃないか。そのクツキーをよこせ！！」

そこで花梨部長の肘打ちが先輩に炸裂する。

「このあほのことは気にしないでいいぞ。それより本当になんともないのか？今日はマネージャーなんて力仕事のあるバスケット部なんかにかかないで、一緒に美術部で作品を書かないかい？」

体の心配をしてくれるのは嬉しいのだが、美術部に誘うあたり、したたかな花梨部長の言葉に苦笑いしながらやんわりと断る。

「車に接触したわけでもありませんし、お気づかいなく。それよりも、陽子先輩と静香先輩は？」

「ああ、ちょっと係の仕事で呼び出されてるだけだよ。優花ちゃんもそんなところに立っていないで教室の中に入ってきたらいいさ。」

「え、でも、ボクたち学年も違いますし。」

「ええって、河合部長はこのクラスのドンだから、部長がええっていったんだから大丈夫よ。じゃあ、お邪魔します。」

そういつて、優花は中に入って行く。前にも何度か訪れた時も今日みたいにこうして教室の中まで入って行って、くつろいでいたらしい。

「お、お邪魔します。」

「さあ、どうぞどうぞ。秋ちゃんは俺の席使って良いよ。」

「椅子までとっては申し訳ありませんし、大丈夫です。」

「いや、立っていると、男子連中から質問攻めにあうと思うけどいいの？ファンクラブに入りたいて子は結構このクラスにもいるからね。」

「じゃ、じゃあ失礼します。」

おそらく、席に座ること、花梨部長のテリトリーに入ったと認識され、周囲の男性から声をかけられることがなくなるのだらうと納得している。

「ね、ね。君が一年生で有名な蟹津秋ちゃん？ぜひうちの茶道部に来ない？」

「ダメよ。秋ちゃんは運動神経抜群なんだから。テニス部に入りましょ。」

「ええ？男子バスケット部のマネージャーなんだから、女子バスケット部の助っ人をするって決まってるのよ。ね、秋ちゃん？」

花梨部長も女性に対しての障壁にはなってくれないらしい。二年生といえ、夏の大会後、部活を引っ張っていく一番部活に力をいれている時期であり、どのクラブからも勧誘を受けてしまった。

「本当に申し訳ないのですが、ボクはそんなにすごい人間ではありません。みなさんのご期待に添えなくてごめんなさい。」

「そうよ。蟹津さんは、もう既に、バスケット部のマネージャーになっているんだから、他の部活に入ったりはしないわ。ついでに、学校の時の事故の影響で、お医者様から運動部への入部は許可が下りないから、私だって蟹津さんを独占したかったのに諦めたんだから。」

花梨部長は、ボクの話聞いていたとはいえ、ここまで上手くみんなを納得させる理由を作るとは、確かにこれならば、ボクが運動部からの勧誘を断ることに違和感がない。

美術部も勧誘をあきらめたといったニュアンスで、美術部を避難所に行っていることもバレにくく、美術部員の優花と仲が良い程度に周りから見えるだろう。

「本当にごめんなさい。実は小学校の時にバスに轢かれて、その時まで柔道をしていたのですが、それ以降は運動部などには所属していないんです。」

小学校の時に小さい子をかばってバスに轢かれた時の話をすると、涙を流しながら励ましてくださる人までおり、マネージャーががんばってねと応援されてしまった。そんなことをしていると、陽子先輩

と静香先輩も帰ってきて、二人にもクツキーを渡す。

バスケット部の先輩も欲しそうにしていたのだが、部活の人用に別で焼いてきたことを伝えると、いそいそと部活に出る準備を始めた。

「じゃあ、ボクは準備がありますので、これで。また何かあったら連絡します。」

ボクは教室を後にした。二年生の先輩たちに、ボクの協力者が増えた気がする。

チャプター50（後書き）

記念すべき50話なのですが、特別な話というよりも、区切りの話になりました。終業式の際に北条さんとの話はちよつとした裏設定を出す時に楽なので、出させていただきました。まあ、AKI自体が検定試験とかどんなものがあつてどこまでとることができなのか理解していないので、曖昧な表現でばかりしているのですが、それでも秋のすごさだけは理解していただけるかと思います。

臨死体験も増え、魂の融合が完成にちかづいてまいりました。そんな秋が今後どのような障害を乗り越えるのか、それを書いていこうと思います。

今回のテーマは「秋のお礼」です。秋から見た周囲への感謝を秋らしい描写で描いたつもりです。いかがだったでしょうか？事故後のほっと一息といった雰囲気味わっていただけたら、成功だと思います。

それでは、ここまでAKIの作品にお付き合いくださって本当にありがとうございます。

チャプター51

真夏の体育館は食中毒を誘う？

ボクが花梨先輩の教室をでて、バスケット部の先輩と共に体育館について最初に目にしたのが、黄色い応援団だった。

「きゃあ〜。ダンク決めてえ。」

「竜くんこっち向いてえ。」

高校に入ったばかりで、知名度も低かった竜に、終業式など、周囲に竜のことを教えるイベントがあったため、中学と同じ様に竜の追っかけができてしまったようだ。

「練習の邪魔になるので、ギャラリーから見物をお願いします。あと、体育館は掃除をしているので、体育館シューズの着用をご協力ください。」

「あんた何様よ？部外者はどいていてくれる？」

「ボクはバスケット部のマネージャーです。見物を許可するので、練習の邪魔をしないでいただけますか？」

夏休みに本格的にはいつてしまうと、授業もないので見物にこれないだろうと、今日ぐらいは許してあげているんだぞ？さつさとギヤラリーに移動しろ。

「なんか、感じ悪い。まさかあんた竜くんのおっかけでマネージャーになつたんじゃないの？」

「そうでないとは言いつてもいいですね。竜はボクの彼氏ですから。まあ公私混同はしていません。先輩、啞然としていないでユニフォームに着替えてきてください。ボクもこの人たちを見物席に連れて行ったら、着替えてきますから。」

「はあ？んなもんここから見てるから良いわよ。あんたもさつさと着替えてきなさいよ。着替えてる間に竜くんのハートはうちらがいとめておいてあげるからさ。」

「はいはい。練習の邪魔になるようでしたら、強制的に退去していただきますので、その点だけはご注意を、それではお言葉に甘えてボクも着替えに行かせてもらいます。」

「ふん。なによ。ちょっとかわいいからって調子に乗ってんじゃないな

いわよ。」

そのあと、ボクが着替えに向かうと、女の子たちはボクの悪口を言いだした。ボクのことを知っている子たちもいたようで、クラスでの出来事についてなども話していた。

「全く、こつという時に耳が良いって損だな。聞かなくてもいいことまで聞こえてきちゃうんだよね。」

着替え終わって体育館に着くと、結局女の子たちの半分以上はその場に居座り、ギャラリーに向かった子もいたようだが、出入口を完全封鎖し、ゴールの側にも数名はみ出していた。

「川本さん。どうしますか？」

「そうだな。とりあえず、河野と二人でどこかしてきてくれるか？マナージャーの仕事はそれが終わってからでいいよ。」

「ボールとかほとんどみんなが出してくれたので、ボクの仕事ありませんよ。片づけの時は手伝いますね。」

「良いんだよ。昨日あんな大きな事故があったのに、良く来てくれたね。本当にみんな感謝してるんだから、これくらいはさせてくれ

ないとね。」

「いえいえ、怪我も用事も無いのに休むわけにはいきませんよ。昨日休ませていただいたお礼に、これ、クッキーを焼いて来たので、あとで皆さんで食べてください。」

川本さんは、二年生のエースで、夏の大会後には部長になるだろうといわれている人物だ。実際既に二年生以下の部員は彼を中心に動いている。

チームのリーダー的資質をもっているので、彼からの指示を基準に動けば問題ない。マネージャーは三年生の人とボクの二人しかいないので、ボクの仕事も彼から依頼されることが多い。

川本さんにみんなの分のクッキーも渡したので、ボクは先ほど一緒に来た先輩と女の子たちの排除にかかる。

「さて、ボク一人の意見ではなく、他の人たちも迷惑を受けていることをしっかり認知したので、強制的に排除しましょうか。」

「秋ちゃんって普段は天使みたいに可愛いのに、今は小悪魔みたいに見えるよ。」

「なんでそこで小悪魔なんですか？もつと残忍な雰囲気の方が威圧感があつていいとおもつんですが？」

「いやあ、その可愛さで小悪魔以上は無理でしょ。」

「う、そのうち美人になつて見せます。」

「いや、悪い意味でいったわけじゃないんだよ？」

「え????」

容姿が幼いといわれた気がしたのだが、とにかく、そんなことを気にしている場合ではない。今は一刻も早くバスケット部の練習をするために、このゴール前で群がっている女の子たちをギャラリーに移動させなければならぬ。

「みなさん。先輩たちから邪魔になつているとの報告を受けましたので、ここにいる人は見学を許可できません。申し訳ないのですが、お帰りいただくか、今すぐギャラリーに移動してください。」

「ちょっと、あんたさつきから偉そうに言つてるけど、どこが邪魔になつてるのよ。あんたが勝手に言つてるだけじゃないの？」

ボクの話聞いていたのかな？聞いていなかったんだろうな。今だって反対側のゴール前で準備運動を始めた竜たちに視線がいつて、ボクの顔なんて見ようともしない。

体育館の中に入っている子は、全部で5人、他の子はギリギリ体育館の外で様子をうかがっている。そのことを確認すると、先輩にお願いをする。

「先輩、合図をしたら扉閉めてもらえますか？」

「え？扉？」

「この一枚くらい閉めても暑くて死んじゃうわけでもありませんし、締め出されても見学したいなら、流石にギャラリーに言ってくれろと思いますので。」

ボクはそう言うと、一番近くにいた子の背後に回ると、さっと体を抱くと、扉の外に移動しておろした。一瞬の浮遊感のあと下ろされたのは体育館の外でその女の子も啞然としている。

そのチャンス逃さずに、残り二名ほど扉の外に連れ出すと、流石に向こうもボクが何をしたのか分かったらしく、急いで体育館の中に戻ろうとします。

まあ最後に残った二名を外に連れ出して、先輩が扉を閉めた方が早かったのだが。

「ちょっと、あんたいきなり何すんのよ!!」

「皆さんが忠告を聞いてくださらなかったもので、強制的に一旦出ていただきました。みなさんが陣取っていたゴール下も練習に使うので、練習が見たい人はギャラリーに移動してください。」

あくまで、マネージャーとして当然のことをしたという態度を崩さない。ここで喧嘩腰になったり、なだめようと余計なことを言うよりも、その方が相手に反論しにくくさせる。

「あんたね。こんだけの人数を敵に回して平気なわけ？」

「敵対したつもりはありません。ただ、選手の方から、練習の邪魔になると報告を受けたので、移動してもらおうようにお願いに来ただけです。」

先ほどから、ボクに話しかけてくるのはこの目の前にいる女の子だけだ。他の子はボクのことを睨みつけるだけで何も言っていない。

「それでは、ボクはマネージャーの仕事があるので、これで失礼します。今度練習の邪魔をなさったら、見学も許可できなくなってしまうので、御注意ください。」

ボクは言いたいことだけいって体育館に戻っていく。閉められた扉ではなく、正面にぐるりと回って入らなければならない。

「面倒だなあ。でも、ボクのアナウンサークラブもああして誰かがストッブ掛けてくれてるんだよね。ボクも浩太を見習わなくっちゃね。」

浩太のように友好的にすることはできなかったが、今度からはきちんと話し合っ解決をしよう。

「おかえり、すごい手際だったね。そんなに上田のことを他の女の子が見てるのが嫌だったかい？」

「ちょま。ボクは嫉妬であんなことをしたわけではありません。」

「ふうん。秋ちゃんなら、もっと穏便に済ませることができたとおもうんだけどなあ。」

「そ、そんなことはありませんよ。り、竜のためにそんなことボクが

するなら、公私混同じゃないですか。」

「まあ、確かにそうなんだけど、普段の秋ちゃんを見てると、もうちょっと公私混同してもいいと思うんだけどね。」

「それはできません。バスケット部の一員なんですから、みんな平等に扱うのは当然です。それに、実際ボクは登下校など公私混同しているところもありますから。」

「まあいいや。秋ちゃんが上田といちゃついているところなんて見たいとも思わないしね。」

ボクだってみんなの前で竜と仲良くしているところなんて恥ずかし過ぎて絶対に見せられない。司たちにもそっけなさ過ぎるといわれ続けているが、これは変えるつもりはない。

練習が本格的に始まると、レギュラー陣は真剣な顔つきになる。今日はギャラリーがいるのだが、夏大会も近いので集中しているのかもしれ・・・

女の子の黄色い声に手を振っている先輩たちもいた。というか、彼女たちの先輩以外ほとんどの人がニヤケている。まあ、やる気が出ているのはいいのだが、女の子たちに良い所を見せようといった雰囲気がある。

「河野先輩、あんまり女の子の方ばかり見て練習に集中していない。」

「あら？そんなところまでマネージャーノートに書き込んでるの？」

「あ、はい。試合中に女の子がいたら集中できないと困るかもしれないじゃないですか。」

「流石にそれはないと思うわ。試合になればみんなそれに集中するものよ。」

マネージャーの先輩に笑われてしまったが、ボクだってこれを中心に考えるわけではないので、一緒に笑ってしまう。もう三年生の彼女は、この夏大会で先輩たちと一緒に引退してしまうので、今後一人でマネージャーをするボクに色々なことを教えてくれた。

「お疲れ様です。片づけの前に、クッキーを焼いて来たので食べてください。運動して足りなくなった糖分と水分を補給したら片づけを手伝ってください。」

練習が終わると、ボクはキャプテンの許可も得たので、クッキーを全員に配り、牛乳を用意すると、片づけに向かう。

「本当に色々なところに気が付くし、良い子よね。蟹津さんが私の後を継いでくれるなら心配はいらないわね。」

「ひょっとしたら既にお前よりも部のことを知ってるかもしれないな。」

「確かにそうかもしれないわね。今日のマネージャーノート見てよ。こんな細かい所までチェックしてるのよ。」

「先輩、キャプテンも、ボクのノート見てないで片づけ手伝ってくださいよ。」

先輩は部長と付き合っている。というか、大体エースの子がキャプテンの子とマネージャーが付き合うというバスケ部のジンクスがあるらしく、それでボクが竜と付き合っているも周りの先輩たちも普通に納得しているらしい。

「蟹津さんも自分で作ってきたものなんだから、食べないの？すごく美味しいわよ。」

「ありがとうございます。じゃあ、この器具だけ片づけたらボクも休憩します。」

ボールを片づけて、テーピングセットなども、もう使わないのである。この練習用の器具を片づけたら、モップをかけて今みんなが飲んでいる牛乳やクッキーの袋を回収するだけだ。ボクはこれだけ片づけたらあとはみんなにやってもらうつもりだった。

「本当に良く働くわよね。みんな暑さでバテバテなのに。」

先輩が労ってくれたが、暑さはそんなに気にならない。それよりも先ほどからギャラリィで見ていた子たちが練習終了と同時に下に降りてきたり、選手の子たちと接触を持つてくる方がボクにとっては疲れる。

先ほどボクに対してケンカ腰に話してきた子も竜に駆け寄っている。確かあの子は竜と同じクラスの子だったはずだ。バスケのルールも知らないのに応援していたらしく、会話は支離滅裂だった。

「お疲れ様、クッキーと牛乳よ。とっても美味しいわよ。」

「ありがとうございます。ってボクが作ったのに何故か先輩にももらったような感じになっているのは何ですか？」

「うふふ、蟹津さんは本当に面白い子ね。」

「さっきは良く働く子で今度は面白い子ですか？ボクの評価はどっちが正しいんですか？」

「どっちも誉め言葉のつもりよ。」

マネージャー同士のコミュニケーションをとりながらボクは牛乳を飲んでクッキーを食べる。自分で作ったのもなのでクッキーに関しては問題なかったのだが、牛乳は片づけをしている間ずっと体育館の暑い場所でおかれていたためちよっとヤバい味がした。

「この牛乳・・・」

「はじめまして、蟹津秋さん。私は鬼人の未緒と申します。」

「はじめまして、でも、ボクには前世の記憶があるから、未緒さんのことは知っているからかしこまらないでもらえませんか？ボクのこと鬼人の皆さんは注目しているから結構しられてるんですよ？」

「はい。あなたのデータは私のところにも渡され、高校周辺であったが臨死体験をする場合私が出ることになっております。」

『そうなんだ。再転前とはずいぶん違うんだね。再転前はここも洋司さんの管轄だったからね。』

『洋司様は当時極東管理官でいらっしやいましたので、しかし、今は保存の鬼人としてのお仕事もあるので、こうして私がサポートをするように指示が出ております。』

『そうなんだ。でもそれって本当なの？むしろ、ボクと会つのを洋司さんが避けただけなんじゃ？』

『洋司様が秋さんを避ける理由がありません。』

『そうかな？だったら、なんで霞さんじゃなくて未緒さんなの？本来洋司さんのサポート役は霞さんのはずでしょ？』

『そ、それは・・・』

『あ、ごめんね。ちょっと現実世界で嫌なことがあったもんだから、未緒さんに当たっちゃったかも・・・。未緒さんは上から命令されているだけで、ボクにどこまで話していいのか分からないもんね。今からはのんびり昔の話でもしよ？』

『申し訳ありません。私に与えられている権限の限りご協力するよううにと言われているのですが。』

『もう、相変わらず未緒さんは堅いんだから。』

そのあと、ボクは再転前未緒さんがどんなことをボクにしてくれたのかを話した。現世での記憶はまだ完全に回復していないが、こうして冥界に来ると記憶の糸が綺麗に残っていることから、こうして冥界と接触することは前世の記憶を呼び戻すことにもなるらしい。

さらに言うなら、洋司さんが以前教えてくれたように臨死体験を重ねて魂の結合がはつきりしてくれば完璧人間になっていくようだ。

『私が昔そんなことを？私は再転の儀式で完全に以前の状態に戻ってしまったのでわかりませんが、以前の秋さんとの関係もとっても楽しそうですね。』

『楽しいなんて言わないですよ。ボクが未緒さんに会うためには死ぬような思いをしなきゃいけないんだから。』

『そうでしたね。私としたことが申し訳ありません。』

『気にしなくてもいいよ。霞さんなんてもっと酷いんだから。あ、

それよりも時間大丈夫かな？ボクって結構早く回復するようになったはずだけど？」

『はい。しかし、秋さんを担当するために記憶の操作の特別訓練を受けてきておりますので、時間ギリギリまで大丈夫です。』

『そっか、前の再転の時もそう言えば末緒さんの技術はすごかったもんね。でも、流石に一秒前は無茶だったよ。確かあの時は微妙に残っちゃって次の臨死体験の時にめっちゃめっちゃ謝られたんだから。』

『え？じゃ、じゃあそろそろ始めましょうか。記憶が残るのはあまり良い事とは言えませんからね。』

『今回もそんなギリギリにするつもりだったの？時間にきっちりしてるのは良いんだけど、不確定要素は考えてね。』

末緒さんはあわてて記憶を操作すると、結局20秒もたたずに現世へと帰る時間だったようだ。本当に1秒前にする気だったかもしれない。

「ちよま。人工呼吸は必要無いですから。先輩やめてください！！」

「うわー！！」

ボクが起きると、竜の顔が目の前に迫ってきていた。急いで顔をそらして、真っ赤になりながらも文句を言う。

「ちょっと、乙女の唇をそんな簡単に奪おうとしないでよ。」

「すまん、先輩が。」

「蟹津さんもう起きちゃったの？眠れる森の美女は王子様のキスで目覚めるのが普通なのよ。もう少し寝てていいから、さあ、上田君。ブチユツと。」

そんないい笑顔で恐ろしいことを言わないでください。こんな大衆の面前でそんなことできません。

「ところで、今回はどうしたんや？何も事故とかあったわけやないんやろ？突然倒れたって先輩も言うつとったけど？」

「牛乳に当たったかな？」

「ちよま。それめっちゃきつついな。」

「ところで、そろそろどいてくれないかな？そこにいられると、ボク起き上がれ無いんだけど。」

「先輩が頭を話してくれやんと俺も動けへんのや。ってかキャプテンも手離してくださいよ。」

「上田って柔道経験者だろ？俺が離したら逃げ出すじゃないか？」

「逃げるとかじゃなくって、じゃあ、秋のこと保健室に連れて行っんで離してもらえませんか？」

「なるほど、流石にみんなの前ではキスもしにくいわよね。仕方がないからそれで許してあげるわ。」

先輩はそう言っつて竜の拘束を離し、部長さんも手を離したようだ。これでボクも動けると思ったら、手を解放された竜にそのまま横抱きに抱えられてしまった。

「ちょま。キスよりある意味恥ずかしいから。おろして、ボクは自分で歩ける。」

「無理。きちんと確保しとかんと、保健室行った振りして部活の片

づげが気になるからもどろつとか言つのが落ちやからな。これで保健室まで逃げれへんやろ？」

「う・・・」

竜は鈍感なキャラなはずなのに、なんでこんなところお見通しかな？って、小学校から一緒にいるんだもんこれくらい分かって当然か。ボクって解り易いらしいしね。

そのまま竜に連れられて保健室に行くと、夏休み前にもかかわらず担当の先生がいてもう少して帰るところだった。

「ごめんなさい。ボクのせいで帰りが遅れてしまい。」

「そんなの気にしなくていいのよ。夏休み前で浮かれて怪我をしたりする子がいるから残ってたんだけど、まさかバスケット部のマネージャーが食中毒で運び込まれるとわね。」

「お恥ずかしい限りです。」

「そんなかしこまらなくていいわ。あなたまだ一年生だけど、何度も保健室にはくることになるんだから、気さくに話しかけてくれてもいいわよ。」

「えっと、何でボクは何度も訪れることになるのでしょうか？」

「あら？これでもう三回目よ？」

「一回は応急セットをいただいただけで、保健室には来ていません。」

「まあ確かにその通りね。それにしても、こんなに頻繁にそれも大きな事故に巻き込まれる子も珍しいわ。昨日の校門の事故でもあったが関係していたって聞いたけど？」

「耳が早いですね。そうですね。もう夕方だったので、保健室ではなく病院に行きましたが、時間次第では保健室にあの時も来ることになったかもしれませんか。」

「何かストーリーとか、気になることがあるんじゃない？先生はそういう相談にも乗るから、何かあったら相談に来てね。あんまりできることは多くないかもしれないけど、秘密は絶対を守るし、相談するだけでも違うことがあるわ。」

「ありがとうございます。じゃあ、ストーリーは実際いるので、被害が出だしたら先生に報告に来ますね。今のところ何にも害がない

ので大丈夫ですけどね。」

「さらっと、言ったわね。まあいいわ。私の名前は石川雪よ。呼び方は、雪ちゃんでもゆっこちゃんでも好きに呼んでいいわよ。」

「じゃあ、雪先生でお願いします。流石に35の女性にゆっこちゃんは恥ずかしいです。」

「な、何で年齢を？は、あなたさっきの聴いてないわよね？」

「えっと、35歳なんですか？とても見えませんね。」

「う・・・いいこと？このことはみんなには内緒よ？内緒にしてくれたら先生もあなたたちの秘密を絶対にバラさないわ。」

「保健室の先生なんですから、生徒の情報を飲み会で話したりはやめてくださいね。まあ、ボクらは先生の味方なので秘密にしておきますよ。」

「そ、そう。あなたとは後でゆっこり話す必要がありそうね。」

雪先生の顔が引きつったが、とりあえずお腹の薬をもらつと、竜に

は秘密を守るようにだけ行って先に帰ってもらった。

そのあと、二人の女性どおしの秘密の会話が続き、帰れるようになったのは、荷物などを竜が持ってきてくれた一時間後のことだった。

チャプター51（後書き）

車を避けられる秋が牛乳にノックアウトされました。

今回のテーマは、洋司さんの秘密です。もちろん臨死体験について書いたのですが、臨死体験は今後どんどん、核心に触れて行くことになります。思春期？の少女が鬼人とどのように接していくのかを描けていけたらと思っています。

洋司さんの秘密と書きながら未緒さんに登場してもらったのは、決して未緒さんの出番がないことに対して危惧したからではありません。洋司さんを出さないための手法で会って未緒さんに久しぶりに会いたくなったださみしがり屋の作者がいるわけで決まてないのです。

みなさんここまで読んでくださいます、本当にありがとうございます。

チャプター52

食中毒の理由

帰り道、竜と自転車に乗りながら、今日のことについて話し合う。

「困ったね。あの様子だと、学校の中では自分が作ったもの以外を口入れたら死んじゃいそうじゃない？」

「今回は体育館で牛乳なんて特殊な環境やったとはいえ、自動販売機の飲み物なんかでもひよっとしたらあぶないな。」

「そうだね。同じ牛乳を飲んで同じクッキーを食べた人がみんな元気なのに、ボクだけ倒れたってことは明らかにボクの不幸補正が付いているよね。」

「あの時秋は気絶してたから、知らへんのやけど、秋の飲んだあと残ったクッキーを河野先輩が食べて、牛乳を川本先輩が飲んだんやけど、牛乳はちょっと不味かったけど腹を壊すほどでもなかったで。」

「

「な、何でそんな危ないことをしてるんだよ。ボクが倒れたってことは本当に危険だったかもしれないじゃないか。」

「せやけど、女の子達が、秋のクッキーにイチヤモンをつけたんが許せへんかったんやろ。先輩らが原因は牛乳にあったことを証明してくれへんかったら、今後秋が持ってくるもん全部没収されるんめちゃうか？」

「う・・・確かにそうかもしれないけど、それにしても無謀だよ。」

「先輩らなりに秋の好意に応えたかったんやからそう言ったんなや。また大会の時とかレモンとか持ってきてくれよな。」

「う、うん。」

ボクが気絶している間にそんなことがあったなんて知らなかった。確かにあの場合クッキーが原因か牛乳が原因かなんて、実際にボク以外の人間には分からないだろう。それは竜ファンの子たちにとって、ボクを悪く言うための良い材料になっていたに違いない。

「何で、こんなにもみんなボクに良くしてくれるかな。」

「それはちゃうで。秋がみんなに良くしとるから、先輩らも恩返し
したいだけやねんて。本当に秋はマネージャーとしてがんばつとる
と思つて。」

「ありがと。でも、腐った牛乳を飲むのはやりすぎだから、先輩た
ちにどうやってお礼を言ったらいいか分からないよ。」

「ええねん。秋の気持ちそのままぶつけたれば、先輩らだつてわか
つてくれるつて。」

竜はいつも自分の気持ちそのままだから、良いかもしれないけど、
ボクもそれでいいのかな？でも、確かにそこが竜のいいところでは
あるんだから、ボクも見習つた方がいいのかもしれない。

「ところで、体に変化とかあらへんか？前は異常な回復力がつい
とつたやろ？今回もなんや変化しとるんやない？」

「うん。どうやら究極の舌を手に入れたかもしれない。牛乳に含ま
れていた成分から、クッキーの成分まで結構細かく分かるかも。こ
れなら、有名料理店の食事とかお菓子とかを食べたらレシピも見な
いでそのまま作れるかもしれない。」

「な、なんちゆう特殊能力ついとんねん。つてか、それマジ？」

「ちよつぱり冗談も入ってるけど、舌の感覚がすごいことになってるのは確かだね。さつき保健室で薬を飲んだ時に気づいたんだけど、薬をコーティングしている糖質が理解できちゃった。」

流石に水で流しこんだから、薬の成分までは分からないけど、一瞬でも舌に触れた物はそれが何からできているのか分かるかも。」

「神の舌ってやつか？食中毒で死にかけたんやから結構自然な流れやねんけど、それってすごい助かるな。今後食中毒になる確率がぐんと下がるんやないか？」

「そうでもないと思うよ。においで分かるならまだしも、一度食べないと分からないんだから、口に入れただけで判断しても遅いものとか、成分が分かってても意味がないものとかいろいろあると思うからね。」

「ま、まあ確かにそうやな。せやけど、それにしてもええ能力がついたな。」

「うん。明日からのお弁当は期待してくれていいかも。もっと美味しいものを食べたかったら、竜がボクに美味しいものを食べられるところに連れて行ってね。」

「任しとけ、夏休み余裕ができたらうんと美味しいところに連れてつたるわな。」

そんなことを話していると、自宅に着いた。明日は部活が体育館の関係で午後からと言うこともあって、竜は夕ごはんをボクの家で食べて行くことになった。

「ただいま。」

「おじゃま・・・」「おかえりい〜。」

「和美??？」

「そうよ。愛しの和美よお。」

ボクと竜を迎えたのは、お母さんでもお父さんでも、お兄ちゃんでもペコでもジジでもなく、和美だった。

「どうしたの??っていつか他にも来てる??」

「そそ、相変わらず勘がいいのに、入ってくるまで気づかなかったってことは、竜くんに夢中だったのかしら??」

和美はニヤリと笑うと、中で待っていたメンバーが見えるように道を開けてくれた。

「鈴！麻美！それに司と浩太も！！どうしたのよ急に。」

「久しぶり。いてもたってもいられなくなつて来ちゃったわよ。ちようど明日から夏休みでみんな暇だったのもあるけど、昨日今日と散々だったみたいじゃないの。」

「面目ない。やっぱりみんながいないと、ボク不幸率は急激にあがるみたい。」

「もう、そんなこと言われたら余計にほっておけないでしょ。早く上がって来なさいよ。秋ちゃんの家なんだから。」

麻美に促されて、ボクと竜は玄関から居間に上がっていく。まだ仕事の中のお父さんはいないが、そこにはお母さん。お兄ちゃん。中学の時の心友メンバーが揃っていた。

「なんだか、そうそうたるメンバーだね。ボクを守ってくれてる人が一気に集まったような感じだよ。」

「じゃー!」

「そうだね。ジジもボクのこと守ってくれてるよね。もちろん外にいるペコもね。」

まだ制服なのだが、ソファアに座ったとたん膝の上に甘えてきたジジに自己主張されたので撫でてあげる。

「それで、今回はどういうことになったの？竜と一緒になら何も問題なかったんじゃないっけ？メグのことだから、また変な誤解で恨まれたんじゃないでしょうね？」

「そのメグって呼び方懐かしいね。なんだか本当に中学校の時に戻つたみたいだよ。」

「いつも鈴とは電話で話してるでしょ。誤魔化すと、武満さんがいることを忘れてないかしら？」

麻美の言葉に素直にすべて洗いざらい話すことにした。武兄ちゃんはいつでもボクを怖がらせる怪談話のストックを絶やさないように日々精進しているらしい。そんな努力はいららないと思うのだが、こっぴつたボクがみんなに心配させないように隠そうとしている時などにはそれが効果を発揮する。

「ってわけで、北条さんって子とは和解したから大丈夫んだけど、竜のファンクラブの子と森君に関しては全く対処してないわ。」

「なるほどね。中学までと違って、竜くとメグが幼馴染で仲がいいってあんまり知られていないから、どうしても両方とも恨みを買いたいそうね。その森君って子は竜くんにも秋ちゃんにも今のところは何もしてこないの？」

「うん。一回友達の人に盗聴器らしきものが見つかっただけで、そのあとは何にも問題が起こってないよ。和美、森君ってファンクラブ入ってる？」

「一応ね。同じクラスの子だし無碍に断ることもできなかったのよ。でも、浩太と違って抑制作用があるわけでもないし、正直いらないわ。」

「ちよま。それは言いすぎだよ。ファンクラブの規約についても浩太に相談したかったし本当に今日はみんなが来てくれて助かったよ。」

そのあと、高校で起きた出来事について色々と話し合った。その結果一つの事実が判明した。

「夏合宿の時もそうだったし、メグが何かを食べてお腹を壊すのっていつつ嫉妬の目を向けられてる時じゃないかな？」

「え？嫉妬されるとご飯が腐るの？」

「そういうとんだか嫌な気分ね。でも、確かに鈴の意見も正しいと思うわ。秋ちゃんがお腹壊す時っていつつ恋愛関係だったりするもの。女性から嫉妬されると、その嫉妬の力で食べ物も腐敗するのかもしれないわね。」

「なんやそれ、女は怖いな。食べ物を粗末にしたらいかんって習わへんかったんやろか？」

「いや、相手も自分の嫉妬で食べ物が腐るなんて普通は考えないから。でも、確かにメグちゃんってファンクラブの子からの贈り物とかでお腹を壊すことが多かったよね。」

特にそのファンの子に彼女や好きな子がいる時に多発していたことから、あながち間違いじゃないと思うよ。」

この結論は認めたくない何かがあるが、これだけ状況証拠を突きつけられたら流石に疑い切ることできない。今度恋愛がらみの贈り物などでお腹を壊したら確定だろう。

「つつことは、恋愛が絡みそうな送りもんの時だけは秋は食べないようにすれば不幸を減らせるんかな？」

「そうとは言い切れないんじゃない？食中毒にならなかつたら、別の不幸がまってるかもしれないじゃないの？秋ちゃんの不幸は、起こらないことの方が少ないのよ？」

むしろ、お腹を壊してでも事故や事件を避けたいときはそっちを優先するのもありね。」

「それはダメだよ。自分が食中毒になれば。誰も痛い思いをしなくて済むなんて考える人間だよ？竜が積極的に止める必要があるねえ。」

司はボクの性格をよく理解している。他のみんなも、司の発言にうんうんと頷く。

「ま、まあ、そっちの方が被害が少なそうな時だけにするよ。」

「はあ……」

みんなして溜息を吐かれてしまった。むしろボク的には良いことを知ったと思ったのだが、心友メンバー的には、不要な真実に行き当たってしまったといった様子だ。

「で、でもさ。お家で食べたり、みんなと一緒に食事するときには本当に安心して食べれるんだから気にしないでよ。やっぱり今日は数が多かったから仕方がないけど、それでも即死しなかったのは、竜やバスケット部の人たちが一緒にいてくれたからだろうしね。」

「牛乳で即死ってそんな死に方嫌やる。」

「た、確かにそれってすごい恥ずかしかったかも。今度から、部活後の牛乳には手を出さないようにするよ。みんなにはアレルギーかもしれないから決められた牛乳しか飲めないとか言っておいて。」

「せやな。アレルギーなら上手くごまかせるかもしれないな。」

そんなこんなで、牛乳事件に関する話し合いが終わると、高校に行つてからのお互いの近況報告が始まった。新しくできた友達の話、勉強の話、部活の話など、普段からメールや電話で連絡を取り合っているにもかかわらず、話題が尽きることがない。

「はいはい。それくらいにしておかないと、お腹と背中がくっついちゃうわよ。」

「お母さんごめんね。夕ごはんの手伝いもしないで。」

「秋はもつと甘えなさいって言ってるでしょ。友達が来たときくらいお母さんの手料理を披露させて頂戴。最近では夕ごはんしか作っていないから、このままだとお母さんの料理の腕が落ちちゃうわ。」

「なに言ってるんですか。お母様の料理はいつも美味しいですよ。」

和美とお母さんはすごく仲がいい。というか、和美、いつもおばさんとか絶対に言わないでお母様と呼ぶのはまだボクの隣をあきらめてないのか？

「まあ和美ちゃんったら、和美ちゃんは絶対に良いお嫁さんになるわね。」

「そんな、お嫁さんだなんて早いですよ。三月までは15歳なので結婚もできませんし。」

いやいや、三月の誕生日で16歳になったら誰のところにお嫁に行くつもりですか？そしてお母さんも和美の誉め言葉に弱すぎる。明らかに取り入ろうとしているのが見え見えじゃないか。

「仕方がないよお。おばさんもお、和美ちゃんがあ、秋を狙ってるなんてこれっぽっちも考えていないだろうからねえ。ガードが甘くなってるんだよお。」

「相変わらずね。なんでボクが思ってることを分かるの?」

「じゃああ、もう一つ。」 竜にもガード甘いけどねえ。これって竜のことを認めてくれてるのかなあ”って思ってるでしょお?」

「ちよま。」

ボクは司の発言に真赤になる。竜は浩太とファンクラブ関係の話で盛り上がっており、今の会話は聞いていないが、それでも意識してしまう。

「大丈夫だよお。女の子は16だけどお。男の子は18だから、まだ二年ほど猶予はあるよお。」

「そ、そんな急ぐわけないでしょ。第二十歳を超えてない場合は親の承認が必要なんだよ?」

「承認がもらえないと思うっ?」

「う・・・で、でも家お父さんが頑固だから、働いてもいない男のところになんてダメってなるに決まってるよ。」

「確かにそうだねえ。でも、秋がどうしてもって言えばあ、婚約くらいはできるんじゃない？」

「ど、どうしても、なんて言わないもん。」

結局司とボクの様子を見ていた麻美や鈴木も加わってボクのことをからかいた。先ほどからチラチラ浩太の視線があることから、浩太は竜を抑える役を買って出ていて、この展開も計画されていたようだ。

ご飯を食べ終わると、お皿を洗うのは流石に手伝うと言って、台所に立つと、麻美や鈴木も手伝ってくれてすぐに終わってしまい。少しの間トランプなどをしながら過ごしたが、司と竜は明日も部活があり、浩太も帰ることになって、女の子三人だけが泊まっていくことになった。

「秋の家に泊まるのっていつ以来かしら？」

「受験の追い込みで勉強合宿した時依頼じゃないかな？結局メグの

恋愛話で一晩中語り明かしちゃったけどね。」

「ホント久しぶりね。でも、家の家族も秋ちゃんの家泊まるのだけは許してくれるのよね。」

「私も一緒よ。和美とは幼馴染だから平気なんだけど、その他にはメグの家以外はやっぱりお泊まりは許可出ないのよね。」

そんな会話から、やっぱり中学時代の懐かしい話になっていき。お風呂に順番で入ると、結局夜中まで四人でワイワイ話をする事になった。しまった。

夏休み最初の日はこうして懐かしい中学の心友たちと共にスタートした。

「ところで、竜さんと秋ちゃんはお泊まりとかするの?」

「そんなわけないでしょ。秋がそんなこと許すわけないじゃないの。」

「メグって相変わらずずづぶよね。」

「はうああ・・・」

そんなこんなで夜が更けて行く。

チャプター52（後書き）

久し振りの心友たちの登場いかがでしょうか？実はこのメンバーだけリストバンドをもっており、他のメンバーとは区別していることから、本当にこのメンバーと一緒にいると何にも怖くないといった補正がかかっております。

だって、中学生編を書いていてみんなを大好きになっちゃったんです。AKIが悪いわけではありません。AKIが書いたキャラたちが悪い（それってやっぱり・・・）

こ、今回のテーマは心友たちとの和やかな雰囲気を描く〜でした。目一杯羽を伸ばして息抜きをしている秋の様子がみなさんに伝わるように書いたつもりです。

それでは、中々誤字も減らず、申し訳ない限りではありますが、チャプター52を読んでくださってありがとうございます。ありがとうございました。

チャプター53

夏合宿〜サイド秋〜

夏休みが入って一週間後、ほとんど入ってすぐにバスケット部は夏合宿が始まった。

夏の大会が地区予選で敗退が決まり、全国への強化合宿ではなく、先輩たちからの引き継ぎのための合宿となったのは残念なことだが、それも仕方ないだろう。バスケット人口は多く、地区予選といえども中々勝ちあがることは難しいのだ。

「おはようございます。」

ボクは挨拶をして体育館に入っていく。合宿は、今回は引退合宿のため、学校で行われる。もし地区予選に勝ちあがって全国にいったら、顧問の先生との約束で、海の近くに行けたらいい。

「荷物は全部部屋に置いてきた？」

「はい。今年は先輩と二人ですが、来年からあの部屋ボク一人なんですか？」

「そうね。後輩でマネージャーが入らなければ、そうなるわね。」

そうはいつでも、真奈美ちゃんはT高を受けると言っていたし、美術部か、バスケット部のマネージャーになってくれるだろうから、ボクが誘いさえすれば来年からも一人ぼっちじゃないかな？そうはいつでも、三か月ちょっとしか一緒にいられなかったけど、この先輩には色々とお世話になっており、さみしいことに変わりはない。

「そんな心配そんな顔しないの。来年私も余裕があったら少しくらい顔出してあげるから。合宿中はBOやOGの先輩達がいっぱい来るからそれは賑やかなものよ。」

「そう言えば、昔はバスケット部の女子も一緒に合宿していたんですね？なんで合同でしなくなっただんですか？」

「昔ちょっとしたことがあってね。合宿中に女子バスケットと男子バスケットの子が赤ちゃんを作っちゃって、それからは他の部活も別に合宿をするようになったらしいわよ。」

「そ、それは大変なことがあったんですね。」

「まあ、学校側も合同合宿だけやめることにしたんだけど、この学校って体育館を使う部活多いじゃない？」

「そうですね。第二体育館とか欲しいくらいですよね。」

格闘技系の部活は専用の道場があるので良いが、バスケット・バレー・バドミントン・卓球それぞれの部活が交代で練習を行っている。その中でバスケットだけが女子バスケットが無いが、他は男女両方あるため、練習のスペースは毎回取り合いである。

「仕方がないわよ。特待生制度とか、勉強には力を入れているけど、部活動の方にはあまりお金をかけたくないのよ。」

「そうですね。↑高くて全国行ったりする名門の部活とかないですよね。」

「男子バスケットは昔は強かったみたいよ。その影響で、部費が少し周りの部活よりも多いのは前に教えたでしょ?」

「そうですね。」

ここまで話しながらも、練習の準備を進めている。男の子たちは、初日は体力作りとしてまずマラソンをしている。この夏に体力作りをしておくことが、試合中に最後まで走るためにとっても重要なのだ。

準備が整うと、まだ帰ってこない男子たちを待ちながら先輩と話を
する。出発のタイムだけ記録してあるので、到着するまではボクら
は結構自由だ。こんな時間は結構あるのだが、先輩と二人だと昔の
話やマネージャーの仕事について話せるので退屈したことはない。

「そういえば、いつも私の話ばかりね。たまには蟹津さんの昔話と
かも聞きたいわ。」

「そんなこと言っても、ボクの話なんて面白いものはありませんよ。」

「そんなことはないわ。三年生でもうわさになってるわよ。一年生
に現れたツンデレクイーンは不幸少女で、とつても濃い人生を送っ
てきたってね。」

三年生にまで一年生の話がされているということは、ボクの噂は学
校中に広がっていると考えた方がいいだろう。

「そうですね。この前体育館で倒れたのも合わせて、臨死体験の数
が、8回かな？小学校の時に2回、中学で3回高校に入ってから3回で
すからね。」

「そ、そうなの。不幸って聞いていたけど、そんなに多いのね。」

「臨死体験の数だけ数えたら8回ですが、サメに襲われたり、こわ面のおじさん達が銃をもって恐喝してきたり、交通事故や事件に会ったのは数え切れませんね。」

「確か海良町出身よね？海辺に接したのかな田舎だったと思うんだけど。」

「そうですね。友達と遊びに隣町に出かけるといつつも不幸が起るんで、竜を含む心友たちとしか街には遊びに行けないんです。」

「隣町って、ここは平気なの？」

「近くに竜がいなければ、こんな危ない場所にはいれませんね。って泣かないでください。これでも上手く付き合っていれば幸せなことも多いんですから。」

「け、健気なのね。本当に神様はなんでこんな良い子に試練を与えられるのかしら。」

あまりにもシヨクな話先輩は涙を浮かべだしてしまった。

「先輩、そろそろ男の子達が帰ってきますよ。ボクが何か悪いこと

した気分になるので涙を収めてください。」

「む、無茶言わないでよ。というか、よくそんな濃い人生送ってきて、笑っていられるわね。」

「ボク一人で不幸に会ってきたわけではありませんから。先輩を含むいろんな人に親切にしてもらってるんで、それほど人生つらくありませんよ。」

「うう・・・ひよんなこと・・・」

本格的に泣かせてしまったらしい。ボクはとりあえず先輩の分の記録帳も抱えて体育館の前のゴールで男子たちのタイムを記録していく。半分くらいゴールしたところで最初にゴールした部長さんや竜たちが手伝ってくれたが、先輩が泣いている理由については質問されなかった。

「大変やな。どうせ昔話でもしとったんやろ？」

「う、うん。まだ全部話す前から泣かれちゃったら、全部知ったらきっと一日中泣いていることになっちゃうね。」

「せやな。でも、この合宿がいい機会やし、きちんと話した方がえ

えんとちやうか？」

「そうだね。みんなにも、やっぱり話してそれでもマネージャーを続けてほしいって言われたらマネージャーとして頑張れると思うよ。」

今まで部長さんにも簡単にしか説明してこなかったが、三年生達が引退して本格的にボクスのマネージャーとしての仕事が始まる前に事情をみんなに知ってもらおうというわけだ。

「はい。河野先輩が最後ですよ。ちゃんと今のうちに体力付けておかないと本当にレギュラーなれませんよ。」

「そんなこと言って、今でもレギュラーは無理だろ？」

「え？河野先輩ってガードもフォワードもできるすごく器用な選手だから、実力はあるんじゃないんですか？あとは毎回体力がなさ過ぎて最初から出せないだけかと思ってました。」

最近では朝練もさぼらずに来てるから、技術ではバスケット部でもかなり高い方だと思いますよ。三年生が引退したらレギュラーだと思っ
てたんですけど？」

「本当か？色々なポジションに転向しすぎてどれもいまいちだと思っただけけど、そういう考え方ができるのか。」

「確かにセンターとかは無理かもしれませんが、試合が始まったら器用な選手って一人いるとすぐく助かると思っんですよ。」

「この合宿頑張ってみるかな。本当に体力がいたらレギュラーになれるかな？」

「はい。先輩のネックは体力なんでいつも控えですが、ベンチからは外れたこと無かったじゃないですか。」

河野先輩はこうやっておだてた方が実力を発揮する。技術的には結構高いにもかかわらずレギュラーじゃなかったのは体力のこともあるが、いまいちやる気がなかったことが大きいので、ここらでやる気を注入しておくのは大切だ。

「さて、先輩の記録も着け終わりましたから、体育館の中へ移動しましょう。河野先輩は体力をつけるためにそれほど休憩を必要としないみたいですので、すぐに始めましょ。」

「そ、そんなあ。」

実際は一番遅かった河野先輩は体力が切れているというよりも、やる気を出して走っていなかった感じなので問題ないだろう。他の子たちは河野先輩が戻ってくるまでにストレッチをして準備を整えている。

「蟹津さんが言うんだから反論しないの。マネージャーはみんなの状態を見て言ってるんだから信頼しなさい。」

泣いていた先輩もそう言っただけ押しをしてくれる。というか、完全にボクの保護者といったオーラが出ており、ボクに文句があるなら私を通しなさいと言わんばかりだ。

「なあ、あいつ何で泣いていたの？」

「ボクの昔話を少ししていたんです。みなさんにもきちんと話をしますね。」

「ああ、何か悪いことがあったわけじゃないならいいよ。」

部長さんも実は気になっていたらしく、みんなが体育館に入ってからボクにそつと耳打ちしてきた。彼女のことだもん気になって当然だよ。

それでも、部長さんは公私混同しないように、みんなに配慮しているところはバスケット部のメンバーのことをきちんと考えているようだ。

「まあ、あいつが泣くのは良くあることだから、みんな慣れちまつたつてもあるんだけどな。相談とかにいくとすぐに自分のことのようにして泣くからな。」

「でも、それって相手のことを真剣に考えていないとできませんよ。本当に先輩みたいなマネージャーになりたいです。」

「おう。俺らも応援するから、がんばってね。」

「はい。」

部長と一緒に体育館に入ると、練習の前にみんなが整列していた。部長もその様子を見て、納得したのか、みんなの前に立つ。ボクは先輩に呼ばれてマネージャー二人で列の端に加わる。

「この合宿で俺たちは最後だ。合宿中に部長と副部長を含めた今後のメンバーの役割を決める。今年もマネージャーが一人になるので、レギュラー以外はできるだけ蟹津さんをサポートしてもらうことになる。レギュラーを取りたかったら、人の倍練習しろ。」

あれ？ここはみんな部長さんの声に燃える所じゃないのかな？なんだが、やる気がそがれているような気がするんだけど。

「ボクもレギュラーになった子たちが試合に向けて集中できるように目一杯サポートできるように頑張ります。努力する男の子ってかっこいいので、ボクにみんなの努力する姿を見せてください。きちんとマネージャーノートで評価します。」

「「おおー!!」「」

ボクと部長さんは目を合わせて笑ってしまった。三年生の子たちもそれぞれ後輩たちの現金な態度に苦笑しているが、それでも微笑ましいといった様子だ。

合宿初日の今日は準備もあって、午後にシュート練習千本ノック的なことをしたら終了だった。みんな腕が上がりなくなるまでゴールに向かってシュートの練習をしていた。

「おーい。晩御飯を食べたらミーティングをするぞ。」
「飯前にシャワー浴びて来い。」

実際に部長さんがこの部活を取り仕切るのは今日までだろう。今夜のミーティングか明日の昼くらいには部長と副部長だけは任命されるらしい。

「綺麗に洗ってきてくださいね。ボクと先輩で一生懸命作った晩御飯を汚い手で食べたら怒りますよ。」

「はあ〜い。」

シャワーに行った男の子たちを送り出すと先輩と一緒に料理を再開する。

「蟹津さんすつごく手慣れてるわね。この前のクッキーの時も思ったけど、普段から料理とかするの?」

「はい。朝はもちろんですが、お弁当も自分で作ってますから。それに、心友がボクの家遊びに来るとみんな良く食べるのでこんな風にいつも大勢で食べる食事も作るんですよ。」

「そう。本当に良いマナージャーを獲得したわ。上田君に感謝しなきゃね。上田君がいなかったら美術部に入っていたかもって聞いたわよ。」

「中学の時は美術部でしたから。今も時々絵とか描いてるんですよ。」

「そうなんだ。また今度私たちにも見せてね。」

「解りました。でも、ちょっとわけあって色々な問題があるので、現物を用意できなかったらごめんなさい。」

実は夏に入る前に、いつも作品を出展している展覧会場の人から、作品の著作権の話が来て、作品を見せる際に色々な規約を作るかもしれないと連絡があった。

その関係で、写真集にしたり、いろいろな方法でボクの手元に作品を残す工夫もしてくれるようだが、基本的に作品はその展覧会の際にしか見せられないようになってしまいかもしれない。

「良く分からないけど、楽しみにしてるわね。」

「そんな大したものではありませんけど、先輩たちの様子なんかも後でスケッチさせてもらえたら嬉しいです。今年の分の出展がまだなので、生き生きとした生徒の様子なんかを描ければきっと採用してくれると思うんです。」

?????

先輩の頭に疑問符がたくさん浮かんだが、それらについてもミーティングの時にきちんと話すことにしよう。先輩は特別ボクのことを大事にしてくれたけど、やっぱりみんなの前できちんと話した方がいいと思う。

二人で分担して調理すると、みんながシャワーを浴びて揃う頃には立派な晩御飯ができていた。大人数の時はサラダの野菜を切るだけでも大変なので、やっぱり一人で作るのは大変そうだ。

「なんだかほとんど蟹津さんが作っちゃったわね。」

「そんなことはありませんよ。ボク一人だったらこんなにたくさん料理をこんな短時間で作れませんから。」

「私は配膳とかをしただけよ。私が引退したら配膳なんかは部員の子たちに手伝ってもらいなさい。蟹津さんって自分で何でもしてしまうところがあるでしょ？」

「すみません。中学の時に何度も注意されたんですが、癖になってるみたいで中々人に何かをしてもらうのって慣れなくて。」

「大丈夫よ。今年のバスケ部はそういう気配りができる子そろってから、蟹津さんが困ってる様子を見せたら、何も言わなくてもきつと助けてくれるわ。それでも、自分からお願いすることを学びな

さい。」

「はい。」

確かに、重たいものを運んでいるときなど、男の子が声を掛けてくれることが多かった気がする。本当にみんな気配り上手なんだな。

「さて、料理も部員もそろったことだし、食べようか。いただきます。」「

「いただきます。」「

部長さんの合図でみんな食べだす。みんな運動してお腹が空いているのか、勢いよく食べた。」「

「秋、おかわり。」「

「はやー！竜ちゃんと噛んで食べてる？消化不良起こさないでよ。」「

ボクはお茶碗を受け取るとちょっと多めにご飯を盛ってあげる。」「

「蟹津さん。こっちもおかわりちょうだい。」

「はい。」

「つーちゃん。おねがい。」

坂本君まで、バスケ部のみんなは早食いなのかな？ボクはそのあとお茶碗を掲げるみんなの間を順番に回って給仕を務めた。やっとみんなが落ち着くと、先輩と一緒にボクも食事を取る。

「みんな蟹津さんばかりに頼むんだから、お味噌汁を担当していた私には三年生の子たちしかおかわり頼まないのよ。」

「お味噌汁残っちゃったんですか？」

「大丈夫よ。蟹津さんが作ったって言ったらみんな我さきにおかわりしだしたから、こっちも完売。」

「そ、そうですか。なんだか良く分からないけど、ボクの料理が気に入ってもらえて良かったです。」

「・・・そうね。蟹津さんの料理はとっても美味しいわよ。私もお

かわりしちゃおうかしら？」

「ごめんなさい。もうご飯もおかわり残って無いんです。」

「そうなの。みんなこんなに食べて平気なのかしら？」

「その分運動してるし大丈夫ですよ。それに食べすぎたら胃薬も用意してありますから。」

そのあとは先輩とゆっくり食事をした。先輩の好意で男子たちは自分たちの分の食器などは洗うように指示を出してくれたので、ご飯を食べ終わったらその食器を水を切って片づけるだけだ。

「食器を洗ったら、ミーティングをするから、3・Bの教室に来るよつに。」

部長さんが指示を出している。ボクらも片づけが終わったら行かなくてわ。

ミーティングをしている3・Bの教室に入ると、既に部長が決まっていた。部長は当初の予定通り、川本先輩がするようだ。副部長には管崎先輩が奨められて、今みんなで説得をしているようだ。

「私たちも後ろの方に座りましょ。」

「はい。」

ボクと先輩は後ろにあって席を見つけて座る。三年生が多いので教室は空きが少ないが、二年生が6人、一年生も8人とあまり多くないので、三年生が引退したら教室内はさみしくなってしまうかもしれない。

結局管崎先輩も副部長になることを承認して、部長と副部長が決定した。その他の子たちもそれぞれサポート役をしっかりとするよう言われている。

「部長になった。川本拓真です。ポジションもPGをすることが多く、試合中でも練習中でも全体を見れるような選手になりたいと思います。」

「副部长にならせてもらいました。本当に自分なんかで大丈夫なのか不安ですが、部長を支えていけるように頑張ります。ポジションはセンターなので、ポジションと同じように中心になれるように頑張ります。」

先輩達が自分のポジションに合わせたこれからの目標を言っていく。二年生の先輩たちもそれに続く。

「河野光輝です。シューティングフォワードやシューティングガードなど幅広いポジションをするので、今年は幅広い分野でがんばっていきましょう。」

河野先輩はそう言ってボクにウィンクした。昼間に言ったことを覚えていて、オurlラウンダーとして頑張ると言ってくれたのだ。ボクは親指を立ててぐっと合図を送ると、周りから変な目で見られてしまった。

そのあとは、ガードの山田聡史先輩・鈴木純先輩・フォワードの佐藤大貴先輩が挨拶をしていく。一年生のみんなは中学の時のポジションと、今後目標にしていくポジションを言いながら、ちょっとだけ自分の目標を入れて行く。

「上田竜です。ポジションはセンター・フォワードです。二年生の先輩からレギュラーを取るつもりで頑張ります。先輩たちの胸を借りて一生懸命練習します。よろしくお願いします。」

もう既に竜はレギュラー取るんじゃない？管崎先輩がいるから今年はフォワードかな？でも、今日のマラソンで分かったけど、高校に入ったら上には上がいることが分かったから、努力をやめたら竜も危ないかな。

「上田はすでにレギュラー入り決定だろ。あの部長にマラソンで着いて行ったんだしな。」

「いえ、中学出たばかりの俺がまだだっってことを痛感しました。本当に死ぬ気でレギュラー目指します。」

部長さんは特にすごかったらしい。それでもマラソンで負けたことがない竜が部長さんに負けたことが悔しいらしく次こそは勝と闘志を燃やしていた。

「坂本敦です。ポジションはガードです。先輩にガードが多くてレギュラーの層が厚い部分ですが、上田にだけ良いかつこさせられないので、俺もレギュラー目指して頑張ります。」

坂本君かつこいい。ちよつと見なおしちゃったよ。今までこんなにライバル意識をむき出しにした坂本君を見たことがなかったけど、竜に対しても先輩達に対しても宣戦布告って雰囲気だね。他の一年生の子たちとはちよつと違うね。

毎日欠かさずに朝練に来ていたことを知っているから先輩たちも焦ってるよ。バスケット部の朝練は自由参加だけど、今度からはレギュラー陣は来ないとすぐにレギュラーなれ無くなりそうだね。

「蟹津さん出番よ。」

「はい。」

ボクはみんなと同じように壇上に立つと、みんなを見渡して話します。

「ボクは、この三ヶ月間マネージャーをしてきましたが、皆さんの結論次第では実はやめなければなりません。」

そこでみんなが一気に驚いた顔をする。しかし、ボクにとっては仕方がないことなのだ。

「ボクの昔のあだ名を知っている人も多いと思いますが、ボクは本当に不幸少女です。ボクの周りには不幸が絶えません。その理由について、ここにいるみなさんにだけ公開します。これについては、絶対に誰にも言わないでください。その訳もきちんと話します。」

そのあと、不幸が起こる理由も含めて今まで遭遇してきた不幸についてみんなに説明をする。一つ一つの話にしつかりと耳を傾けて、真剣に聞いてくれた。

「そんなわけで、皆さんがボクのことを大切に思ってくださいるのなら、不幸は起きないので、マネージャーを続けることができるのです。」

もし皆さんがこんな子と一緒にいたらいつ不幸に会うか分からないと思われるのでしたら。今すぐマネージャーをやめなければなりません。」

少し長くなってしまったが、みんな最後まで聞いてくれた。先輩は昼間と同じように涙を流しながらもきちんとして受け止めてくれたし、引退する三年生の方たちは、後輩たちの意見を尊重するといった様子だ。

ガタン

「んなの決まってるぜ。俺たちは秋ちゃん的笑顔に一杯助けられるんだ。今日の晩御飯もすごく上手かったじゃないか。みんな秋ちゃんを助けるよな？仲間だって認められるよな？」

「河野の言う通りだ。部長になった俺が蟹津さんを認める。もし蟹津さんを厭う奴がいたら、仲間を見捨てるやつだ。そんな奴はバスケ部員じゃない。」

河野先輩と川本先輩が立て続けに声をあげる。大きな声だったので視線が集まっているが、その視線はみんな納得したような顔をしている。

「あ、ありがとうございます。ヒック」

「泣くな。秋ちゃんは何も悪いことしてないじゃないか。秋ちゃんを嫌う奴がいたら。俺たちがそいつを秋ちゃんに近づけない。秋ちゃんの不幸を願う奴がいたら。みんなで説得してやる。だから、一緒にバスケ部に残ってくれ。」

「ふえええん。」

ボクは涙をこらえきれ無くなって泣き出してしまった。先輩たちの温かい言葉に心の中にずつとあった自分がここにいるのかという疑問が解けだし、みんなに甘えたい気持ちが加速する。

「秋はいつも自分を犠牲にしてきました。甘えん坊の癖に誰にも甘えられへんかった時期もありました。そんな時、俺ら心友は今まで支えてきました。今度からはバスケット部のみなさんにも秋のことを支えてやって欲しいんです。」

これは、秋と秋を守ると心から決めた人たちに配るミサंगाです。同意してくださった人はこれを手にとってください。もちろんまだ考えたいって思う人は考え抜いてください。さっき秋が言ったように、本当に危険なことも起きるかもしれませんが。

軽はずみに手に取るんじゃないで、一生のものだと思ってください。ちなみに、ファンクラブにも公開してない極秘事項なので、このミサंगाを持った人たちには特別に連絡を入れることがあるかもしれませんが。」

竜が泣きだしたボクの代わりにつないでくれた。そして、竜の手からはミサंगाがすぐに消えて行った。

「さ、三年生の人たちまで。」

「当然だよ。俺たちは引退しても丁高のバスケット部員だからね。蟹津さん。辛いこと一杯経験してきたんだね。俺らは仲間だから、絶対に一人で抱え込まないで相談するって誓ってくれ。そうしたら、俺

らもきつと蟹津さんの力になれるよ。」

ボクはただ頷くことしかできなかった。引退した元部長さんの言葉をみんなも頷きながら聴いていた。たったの三か月だけど、その三ヶ月間にみんなに信頼してもらえる絆ができていたことが嬉しくて、自分勝手なわがままだと分かっているのにこの優しさに甘えてしまった自分がいた。

チャプター53（後書き）

A K I 的に超感動作といった話がありました。

テーマは「秋にとつてのわがまま」だったのですが、そのわがままを包み込む周りの人たちの様子を描いているうちに涙がほろり。なんでこんなことで泣いたりするんだよ。釣られるじゃないかと場違いな突っ込みをいれたり、優しい先輩たち仲間意識の強いバスケット部の結束を描いているうちに、A K I 的おススメ話になりました。

53話をお送りいたしました。最初のサイド秋のタイトルで分かるように、別目線からも書かせていただきます。さて、その人物とは???

また次回もよろしくお願いいたします。そしてここまで読んでいただきまして本当にありがとうございます。

チャプター54

夏合宿〱サイド河野〱

合宿はきつい。俺みたいに根性のないやつにとって、合宿みたいなイベントはやる気の起きないものの一つだ。まあそれでも今年、参加したのには理由がある。

お、ゴールで天使が微笑マイエツンジェルんでいる。ってなんで上田の奴が手伝ってるんだ？公私混同しているわけでもないが、上田と天使の仲が良いのは見ていたら分かる。二人とも隠そうとしているのだが、上田の様子を見ていたらそんなのは一目瞭然だ。

天使は、俺のタイムを書き込むと、タオルを渡してくれた。この時にみんな一言ずつだが話ができるのがうれしい。

「はい。河野先輩が最後ですよ。ちゃんと今のうちに体力付けておかないと本当にレギュラーなれませんよ。」

「そんなこと言って、今でもレギュラーは無理だろ？」

「え？河野先輩ってガードもフォワードもできるすごく器用な選手

だから、実力はあるんじゃないんですか？あとは毎回体力がなさ過ぎて最初から出せないだけかと思ってました。

最近では朝練もさぼらずに来てるから、技術ではバスケット部でもかなり高い方だと思いますよ。三年生が引退したらレギュラーだと思ってたんですけど？」

まさか、天使がそんな風に思っていてくれたなんて、俺のことを結構しっかりみてくれてるんだな。彼氏にくつついてバスケット部に入ってきた時は怪しんだが、今では天使がきちんとした子で、俺らのことを平等に見てくれてることを理解している。

「本当か？色々なポジションに転向しすぎてどれもまいちだと思ってたんだけど、そういう考え方ができるのか。」

「確かにセンターとかは無理かもしれませんが、試合が始まったら器用な選手って一人いるとすごく助かると思うんですよ。」

「この合宿頑張ってみるかな。本当に体力がついたらレギュラーになれるかな？」

「はい。先輩のネックは体力なんでいつも控えですが、ベンチからは外れたこと無かったじゃないですか。」

そうか、体力をつけたら、俺もレギュラーなれるのか。天使はいつとも俺らのことをきちんとして見てくれてたから、この言葉は間違いないだろう。

「さて、先輩の記録も着け終わりましたから、体育館の中に移動しましょう。河野先輩は体力をつけるためにそれほど休憩を必要としないみたいですので、すぐに始めましょ。」

「そ、そんなあ。」

「蟹津さんが言うんだから反論しないの。マネージャーはみんなの状態を見て言ってるんだから信頼しなさい。」

天使のこんな飴と鞭の仕打ちも悪くはない。実際文句を言いながらも、天使の言ったとおり体育館に向かう。俺はストレッチなどを軽くしながらも天使の言葉と今後の課題について考える。

俺らは準備を整えると、部長を待つ。合宿の時はいつもこの部長の挨拶から始まるのでこれは決まったパターンといったやつだ。整列をして部長の言葉が始まる。

「この合宿で俺たちは最後だ。合宿中に部長と副部長を含めた今後

のメンバーの役割を決める。今年もマネージャーが一人になるので、レギュラー以外はできるだけ蟹津さんをサポートしてもらうことになる。レギュラーを取りたかったら、人の倍練習しろ。」

おいおい、これじゃあ今年はレギュラーを目指す奴は一人もいなくなっちゃうぞ？天使と一緒にマネージャーなら悪くはないな。そんな風に思っていると、天使からありがたい一言が舞い降りた。

「ボクもレギュラーになった子たちが試合に向けて集中できるように目一杯サポートできるように頑張ります。努力する男の子ってかっこいいので、ボクにみんなの努力する姿を見せてください。きちんとマネージャーノートで評価します。」

「「おおー!!」「」

うんうん。これこそやる気がでるってもんだぜ。天使マイエンジェルきつと君のために俺はレギュラーを取って見せるぜ。

そのあと俺たちは練習を張り切った。先ほどの天使の発言により、どれだけ頑張っているのかを見せるために普段以上に練習に熱が入っていたため、途中でへばるやつも現れたくらいだ。

「おい。晩御飯を食べたらミーティングをするぞ。ご飯前にシャワー浴びて来い。」

部長の言葉で俺たちは練習を切り上げようとする、もうみんなへトへとになっており、その場でへたり込みそうになる。

「綺麗に洗ってきてくださいね。ボクと先輩で一生懸命作った晩御飯を汚い手で食べたら怒りますよ。」

「はあ〜い。」

くそつ、良いタイミングで言葉を掛けてくるぜ。あんな風に言われたら夕ご飯が楽しみで仕方がないじゃないか。早くシャワーを浴びて、天使の隣の席を取らなくてわ。

俺は急いでシャワーを浴びに向かう。前までならこんな時もただらと過ごして周りに合わせていたような気がするが、いつになく積極的に合宿に参加している気がする。

シャワーを浴びて食堂に向かう。俺たちの高校には学生食堂があり、合宿の時はその施設を利用して三食を取るのだ。

「先輩、配膳手伝いましょうか？」

「もう終わりだから良いわ。それに、河野君に任せたら蟹津さんが
かわいそうだから、私と蟹津さんは二人で座ることにするわ。それ
よりも、終わった後に洗い物を各自でやってよね。そうしたら蟹津
さん喜ぶだろうな。」

「任せてください。女の子だけが家事をする時代なんて遅れてます
よ。洗い物は俺らに任せてください。」

「去年はそんなこと言ってくれなかったじゃないの。」

「いや、去年は一年生は強制的に手伝わされたじゃないですか。」

「あら？そうだったかしら？」

この先輩は油断できない。なんだかんだ言っ、俺たちのことを一
番上手く操っている気がする。まあ天使からの好感度があがるなら
皿洗いくらい全然しちゃうけどね。

部長がいただきますを言ったところからは戦場だった。俺はまず、
天使が給仕しているご飯から食べだす、当然ご飯をおかわりすれば、
天使があの小さな手でおかわりを自分のためによそってくれるから
だ。

もう少しで食べ終わっておかわりというところで、声が聞こえる。

「秋、おかわり。」

「はや！！竜ちゃんと嘔んで食べてる？消化不良起こさないでよ。」

上田ああ！！貴様あとで覚えていろよ。俺が一番におかわりを頼もうとしていたのに、給仕のことに気づいた連中が我さきにとご飯を掻き込みだした。

「蟹津さん。こっちもおかわりちょうだい。」

「はい。」

「つーちゃん。おねがい。」

俺が上田を睨んでいる間に川本と坂本の奴が立て続けにおかわりをお願いしやがった。坂本の方はおかずなども多少手をつけているので早食いなだけかもしれないが、川本は間違いなく俺と同じで天使の給仕をお願いするためにご飯から食いだしたな。

あ、今川本の奴俺に流し眼をしてきやがった。絶対に気づいてやが

る。それじゃあ俺も、

「おかわり!!」

「あんたら、お味噌汁も頼みなさいよ。こっちだって蟹津さんの手作りですっごく美味しいんだから。」

しまった、そつちから攻める方法があつたか、天使からの直接給仕してもらえるとこの魅力に負けて気づいていなかった。ご飯のあとはお味噌汁も、う、上手い。これはご飯だけ食べるよりもおかわりを食べながらの方が逆に箸が進むかも。

このあと俺も含めたバスケット部員たちは、天使の手作り料理を堪能した。ちよつと食べ過ぎたかもしれんが、とっても美味しかったし、大満足の俺がいた。

食事が終わるとミーティングが始まる。以前から川本の奴は次期部長にと言われ続けていたのですんなり決まったのだが、副部長に推薦された管崎が渋る。

「そんなに気負う必要ないぜ。俺たちだって部長と副部長に全部任せたりしないでサポートすっからさ。」

「そうだよ。俺も管崎が副部長になってくれたら、部長の仕事をサポートしてくれるとおもってから、推薦したんだから。」

川本と俺で説得をする。三年生の先輩たちはその様子をのんびり見物といった雰囲気だ。

管崎がやったのことで納得をしてくれると、最後に新生バスケットしてみんなが一言ずつ言っていく。これも毎年のことだ。

「上田竜です。ポジションはセンター・フォワードです。二年生の先輩からレギュラーを取るつもりで頑張ります。先輩たちの胸を借りて一生懸命練習します。よろしくお願いします。」

一年生の最後の方に上田が話した。上田は実際に技術でも体力でも去年まで中学生だったとは思えないような域に達しており、レギュラー確定といった雰囲気にも関わらずまだまだ上を見ている様子だ。

「上田はすでにレギュラー入り決定だろ。あの部長にマラソンで着いて行ったんだしな。」

「いえ、中学出たばかりの俺がまだまだってことを痛感しました。本当に死ぬ気でレギュラー目指します。」

あの部長にマラソンで着いて行ける奴が、中学卒業したばかりの間だという時点ですごいんだぞ？管崎が渋るのもわかるぜ。確かにこいつがいたら、レギュラーが危ぶまれるから、副部长なんて大任を任されるのはつらいかもしれないな。

「坂本敦です。ポジションはガードです。先輩にガードが多くてレギュラーの層が厚い部分ですが、上田にだけ良いかつこさせられないので、俺もレギュラー目指して頑張ります。」

今年の一年は上田だけじゃないってか。上田は超級の逸材だと思っていたからその陰に隠れて目立っていなかったが、確かに坂本も二年生の補欠連中をしのごく実力を持っている。本当にこれじゃあ俺のレギュラー入りはかなり難しいぜ。

一年生が全員話し終わり、マネージャーがみんなに話をしてくれる。もちろん天使の出番だ。

「ボクは、この三ヶ月間マネージャーをしてきましたが、皆さんの結論次第では実はやめなければなりません。」

は？何を言ってるんだ？？天使は今まで何にも俺らに悪いことしてないだろ？上田と付き合っているのがそんなに後ろめたいのか？それでも俺たちは天使を応援してきたぞ？

「ボクの昔のあだ名を知っている人も多いと思いますが、ボクは本当に不幸少女です。ボクの周りには不幸が絶えません。その理由についても、ここにいるみなさんにだけ公開します。これについては、絶対に誰にも言わないでください。その訳もきちんと話します。」

どうやら、上田とのことは関係ないらしい。それ以上に天使の過去についての興味が俺たちの耳を天使の言葉に集中させた。

「そんなわけで、皆さんがボクのことを大切に思ってくださいるのなら、不幸は起きないので、マネージャーを続けることができるのです。」

もし皆さんがこんな子と一緒にいたらいつ不幸に会うか分からないと思われるのでしたら。今すぐマネージャーをやめなければなりません。

せん。」

天使はそこまで話すと、本当に申し訳ないといった様子で周囲を見渡す。天使の言葉に涙を浮かべている奴もいる。いてもたってもいられなくなった俺は気が付くと立ちあがってまくしたてていた。

ガタン

「んなの決まってるぜ。俺たちは秋ちゃん的笑顔に一杯助けられるんだ。今日の晩御飯もすごく上手かったじゃないか。みんな秋ちゃんを助けるよな？仲間だって認められるよな？」

俺の言葉に川本が同調する。

「河野の言う通りだ。部長になった俺が蟹津さんを認める。もし蟹津さんを厭う奴がいたら、仲間を見捨てるやつだ。そんな奴はバスケ部員じゃない。」

俺と川本はそう言いきると、みんなの顔を見渡した。確かに言葉を発したのは俺たち二人だけだが、その気持ちはみんなも同じらしい。もう、彼氏がいることから、天使のハートを射止めることはできなくても、彼女は俺たちにとって既に仲間であり、大切に守るべき存在だ。

「あ、ありがとうございます。ヒック」

泣き出してしまった天使に、俺は言葉を掛ける。なんて言ったらいいのかわからなかったが、俺たちが仲間として歓迎していることを精一杯伝える。

「泣くな。秋ちゃんは何も悪いことしてないじゃないか。秋ちゃんを嫌う奴がいたら。俺たちがそいつを秋ちゃんに近づけない。秋ちゃんの不幸を願う奴がいたら。みんなで説得してやる。だから、一緒にバスケ部に残ってくれ。」

「ふえええん。」

天使の涙を見たくなくって言った言葉が、逆にとどめを刺してしまつたらしい。嗚咽混じりに言葉を発しようとするが、上手くいかず、とうとう完全に泣き出してしまった。

「秋はいつも自分を犠牲にしてきました。甘えん坊の癖に誰にも甘えられへんかった時期もありました。そんな時、俺ら心友は今まで支えてきました。今度からはバスケ部のみなさんにも秋のことを支えてやって欲しいんです。」

これは、秋と秋を守ると心から決めた人たちに配るミサンガです。

同意してくださった人はこれを手にとってください。もちろんまだ考えたいて思う人は考え抜いてください。さつき秋が言ったように、本当に危険なことも怒るかもしれませぬ。

軽はずみに手に取るんじゃないで、一生のもだと思ってください。ちなみに、ファンクラブにも公開してない極秘事項なので、このミサガを持った人たちには特別に連絡を入れることがあるかもしれませぬ。」

上田が泣き出して言葉を発せられなくなった天使の代わりに、みんなに言葉を紡ぐ。お前らの友情、愛情は絶対に俺たちが守ってやるよ。俺は川本と一緒に奪うようにして上田の手からミサガを取り上げると、左の手頸に巻いた。

「さ、三年生の人たちまで。」

「当然だよ。俺たちは引退してもT高のバスケット部員だからね。蟹津さん。辛いこと一杯経験してきたんだね。俺らは仲間だから、絶対に一人で抱え込まないで相談するって誓ってくれ。そうしたら、俺らもきつと蟹津さんの力になれるよ。」

流石、俺たちの先輩だけ、一年間この人たちの下でバスケット部をやってきて本当に良かった。先輩たちのその意思を俺たちは絶対にないがしろにしたりしない。そうやって、仲間を大切にしてきたバスケット部だからこそ、めんどくさがり屋な俺がこうして一年間続けられて

きたんだしな。

その恩返しを後輩を守る。マナージャーだって俺たちの仲間として迎え入れることで、返させてもらっぜ。

そのあと、天使が落ち着くまでみんなで今後のバスケット部のあり方について話し合う。今まで以上の結束をそこに見た気がする。そういう意味では、天使が問題を持ってきてくれたことは感謝すべきかもしれない。

先輩達が引退して、右も左も分からない俺たちに、一つの指針のようなものを作ってくれた。

「もうこんな時間が、そろそろ明日の練習もあるから寝るぞ。」

「初日くらい良いじゃねえか。部長はせっかちなな。」

「部長って呼ぶなよ。なんだか変な気分だ。」

「これから呼ばれるんだから、今のうちに慣れておけよ。まあせっかちではあるが、川本の言うことも一理あるな。」

川本との掛け合いも終わると、みんな解散して部屋に戻ることに
なった。三年生は受験もあるので、部長とマネージャー以外は明日か
らは合宿に参加しないので、最後のお泊まりとなる。部屋に帰って
も、少しの間去年を懐かしがって話すことになるだろう。

部屋で思い出話をしていると、上田がこっそりと出口から出て行く
のを見つけた。他の奴は気付いていないみたいだったので、俺もみ
んなにバレないように後を追いかける。

「竜!!なんでここに?」

「いや、何となく、秋がいるようなきがしたんや。」

「そっか。今日ありがとう。ボク途中から何も言えなくなっちゃった。」

「気にせんでええよ。ホントみんなええ人たちばっかだよ。よかったな。」

「うん。面と向かってお礼をいうのも恥ずかしいけど、やっぱり何度お礼を言っても足りないよ。ボクのがままに付き合ってもらってるんで、ホント申し訳ないよ。」

「どあほう。秋がわがままなんやったら、世界中にわがままじゃないやつみたいおらへんわ。」

俺は、決定的な場面を目撃してしまったのではないか？上田と天使の合びき現場を影からみてしまっている。今更声をかけることもできずに、扉に隠れて二人の会話を聴いてしまっている。

「そんなことはないよ。本当だったら、みんなを危険にさらすかも知れないって解ってるんだから、マネージャーなんてやつちゃいけないと思うんだ。それでも、残りたいてって思ったのはボクの甘えなんだよ。」

そんなことない……！

「んなわけあるか。普通の高校生が普通に部活に参加するんにそんなこと考えるやつおらへんわ。」

俺も叫びかけたが、どうにか抑えることができた。俺が言いたいことはおおむね上田が言ってくれた。

「普通の高校生か。確かにそうだよな。ボクも普通に高校生活送ってたかったよ。」

天使の言葉に上田が、抱きしめた音が聞こえる。扉の陰になってみることができないが間違いないだろう。

「秋は普通だ。普通に傷ついて、普通にこうして悩んどるやないか。悩み事が少し人とちやうだけや。」

「ちよま、竜。待って。」

「いや、待てない。」

「そ、そうじゃなくて、そ、扉の陰。」

どつやら見つかってしまったらしい。

「すまん。盗み聞きするつもりじゃなかったんだけど、出て行くタイミングをうしなっちゃってな。」

「い、いえ、所でどこから聞いていたんですか？」

「さ、最初からかな。」

「それって盗み聞きする気満々やないですか。」

上田はそう言うと、天使から体を離して、あきれたような顔を向ける。

「まあそう言うなって。だけど、上田の言う通りだぜ。秋ちゃんはなんでも一人で背負い込みすぎてるんじゃないか？高校に入ったばかりで、頼れる人が見つからなかったのは仕方がないけど、バスケット部のみんなくらい信用してくれよ。」

「ごめんなさい。」

天使は謝っているが、今後改善されることはあまりないだろう。そ

れだけ、自分が何でもできる人間というのは、自分以外の人間に何かを任せることが苦手なのだ。

「それよりも、何で体育館なんだ？それにボールって、秋ちゃんってスポーツしたらまずい体なんじゃなかったっけ？」

「そういえば、そんな誤解がありましたね。ボクはスポーツができない体じゃなくて、スポーツをして目立つと不幸が起きてしまう体なんです。」

そう言うことが、不幸な体質がこんなところでも天使の行動を制限していたらしい。ということはバスケもひょっとして？

「当然、できますよ。竜と一緒に1on1をしたりもしましたから、竜にはまだ負けたことはありません。」

「え？上田が負けるって、そんなに上手いのかい？」

俺の気持ちを察したかのような発言に反応してしまった。上田はバスケ部でもかなり上位に入るくらいの上手さだ。その上田に負けたことがないといった言葉が信じられなかった。

言葉で言っても信じられないと天使も分かったらしく、ボールを軽

くドリブルすると、スリーポイントの位置からシュートをする。その動きは流れるように滑らかで、思わず見入ってしまった。

「信じてもらえました？」

「ああ、すっごく綺麗だった。まるでボールが秋ちゃんの思うままに従ってゴールに吸い込まれていくような気がしたよ。」

俺はこの天使が決めたシュートを目に焼き付けた。今まで見てきたどんなフォームよりも、美しく、限りなく無駄がないそのフォームは俺の今後の目標となった。

「みんなには内緒にしておいてください。でも、バスケをしらないわけじゃないので、マネージャーからの助言はきちんと聞いてくださいよ。」

「おう。さあ、秋ちゃんも明日早いんだからもう寝なさい。上田も、抜け出したのは俺が連れ出したことにしておいてやるから、一緒に帰るぞ。」

「はい。」

俺は上田と共にみんなが寝ている部屋へと帰って行った。多少何を

していたのか聞かれたが、俺が上田に話があったというみんなも納得して寝る準備を始める。

俺は、先ほどみたフォームを何度も頭の中でイメージしながらその日眠りについた。

チャプター54（後書き）

河野先輩はちょっとナンパキヤラ的な立場なんです、それでも信念をもって接してくれていたんですね。

秋を毎回のように口説く河野先輩・秋を狙う目線は実は他にも？といった話ではありましたが、結局のところ、心が高校生になってみんな成長して自制を聞かせることができるようになっていくんですね

今回のテーマは、あの特別の人から見た、という表現方法をどのようにして書くかです。

今までも何度も挑戦してきたテーマではありますが、高校生になって、同じ場面を違う人から見た時に、どれだけその人の空気を出せるかというのはとても難しいです。

それでは、再転の姫君をここまで読んでくださって本当にありがとうございました。

チャプター55

夏だ！！海だ！！サ　だ？？

無事合宿が終わると、ボクらは少し休みが入った。合宿中はPB・OGの先輩たちがたくさん来てくれて、みんなのレベルがグングン上がっていきのがわかり、ボクもマネージャーとしてバスケのことは頭になかったが、それが終われば、優花たちと約束していた遊ぶ約束が待っていた。

「クーちゃんこっちこっち。」

「ごめん。待った？」

「そんなことないよ。こっちも優花が寝坊したしね。」

今日は海難町の浜辺に行くことになっている。海良町にもビーチはあるのだが、小さいし、田舎なのであまり整備されていないため、サーファーの人が寄ってくるくらいだ。

それに比べて海難町は海に面している部分は少ないが、とっても大きくて、人が集まるビーチがある。

「昨日遅くまで寝れなくて。ツン先生の作った水着を着て泳ぐかと思ったら興奮しちゃってさ。むしろ泳がないで浜辺でショーウィンドウよろしくずっと見せびらかそうかな？」

「ちよま。それじゃあ水着である意味がないじゃないか。せつかく活発な性格の優花に合わせて泳ぎやすいデザインにしたんだから海に入ってよね。」

「一人ずつデザインが違うの？流石ツン先生だね。じゃあ、明実や和美ちゃんはどうなデザインなの？」

「二人だけじゃないぞ。竜や敦君のデザインだって別にしたんだから。」

ボクはそう言って胸を張る。そうすると、優花が早く水着がみたいと駄々をこねだしたので、5人でビーチに向かって歩き出す。集合場所になっていた駅からビーチまでは歩いてすぐの場所だ。ここまではみんな自転車で来た。

「わあ。すごい人だね。」

「ちょっと多すぎないかしら？秋？大丈夫？」

「たぶん大丈夫だよ。これだけ人がいたら、ボクのことなんて注目する人もいないだろうし。」

「……」

え？何？何でそこでみんなボクのことを見るの？その憐れんだような瞳をボクに向けないで。

「ま、まあ確かにボクの作った水着は特殊なのが多いから目立つかも知れないけど、大丈夫だよきっと。」

「良いわ。クーちゃんに言っても無駄みだいだから、とにかくクーちゃんはみんなから離れちゃダメよ?」

「う、うん。」

ボクはひたすらはてなマークを浮かべながらもみんなについて行く。ビーチパラソルを刺して、荷物をおいたら、みんな下に着てきた水着に変身する。

「相変わらず、うらやましい体をしてるわよね。」

「ちょま。和美、そんなにしげしげと見ないでよ。」

「じゃあ、触って良い?」

「だ、ダメに決まってるでしょ!」

「ちょっとしたスキンシップじゃん。女の子同士なんだから、照れないの。」

「やだあ。和美がやるとエロいんだもん。」

というか、和美はボクのことを好きなんじゃ？完全に周りに内緒にするという約束をボクが守っていることを盾にして言い寄ってきてるよね？卑怯だあ。

「和美ちゃんじゃないけど、本当にうらやましいわ。これ、天然？」

「優花まで、って明実？鼻血出てる。ティッシュティッシュ。」

和美と優花と会話していたら、明実が鼻血を吹きだしてしまった。最近和美の影響なのか、明実もなんだかおかしくなってきた気がする。

「い、ごめん。ちょっと暑かったのと、あまりにも二人の会話が刺激的だったから。」

「明実って結構つぶなんだね。ツン先生のこと言えないじゃない。」

「そ、そうね。あはは。」

そう言えば、明実って彼氏がいたとかいう話を聞かないな。というか、明実って可愛いのに周りに女の子しかいつもいない気が……。

「和美、明実ってこんな子だったっけ？」

「わかんないけど、ちょっと私と同じオーラをさっきは感じたかも。」

優花が明実の鼻にティッシュを詰めてあげている間にこっそりと和美と会話をする。どうやら和美も同じように感じたらしい。

「大丈夫か？明実って今まで彼氏とかいなかったから、こういうのに慣れてないんだな。今日はそんな可愛い水着を着てるんだしナンパされるかもよ。」

「敦は馬鹿なこと言わないの。水着はそりゃ可愛いけど、ナンパ男についてく見ないに明実は軽い女じゃないんだから、前にもナンパつばい男に告白されて断ってたの知ってるでしょ。」

「まあ確かにそうか。」

優花と敦君の会話はそこはかとなくボクを不安な気持ちにさせた。それってナンパな男じゃなくって男からの告白を軒並み断ってきたんじゃないよね？

「もう、大丈夫。血とまつたみたい。ホントごめんね。それにしても、水着は確かに可愛いわよね。これを全部クーちゃんが作ったなんて信じられない。」

明実も優花もボクがデザインした水着を気にいつてくれたみたいだ。

「それにしても、竜くんも敦くんもすごい筋肉ね。普段は制服を着ているからわからなかったけど超マツチョじゃん。」

お？やっぱり男の子の体にも興味があるのか？明実の真実がわからなくなってきた。和美の方を向くと、ウインクを返してきた。どうやら、今から確かめる必要があるようだ。

「ねね、話してばっかりじゃなくて、せっかく海に来たんだから泳がない？って言ってもさっき鼻血を出したばかりだから、明実ちゃんは無理よね。秋も水着で長くいると危険だから、上着をきて荷物番してもらってもいい？」

「うん。分かったよ。明実はいいよね？」

どうやら、ボクが明実と話して確かめるといふことらしい。ボクはさっき脱いだばかりの上着を着ると、頷いてくれた明実と一緒に荷物番をすることになった。

竜たちはボクから離れるのを心配していたが、明実も一緒だからと言って送り出す。二人つきりになったところで、明実にストリートに話を切り出す。

「ねね、さっき今まで明実は彼氏いなかったって言ってたけど、ひよっとして男の子がダメなの？」

「え？何でそれを？」

「明実みたいに可愛い子が彼氏がいなかったらひよっとしたらって思うよ。ボクの周りにもそんな子がいたしね。よかったら相談してみない？力になれるかもよ。」

ここで言う相談とは和美のことと考えてのことだ。明確に和美の名前はまだ出していないが、同じ気持ちの人間が側にいるとわかれば、明実だって楽になるかもしれないので、今後相談して和美のことを打ち明けるのも悪くない。

「そっか、クーちゃんにはお見通しなんだね。実は昔ちょっとしたことがあって男性恐怖症なんだ。その時は未遂だったから、何ともないんだけど、トラウマになっちゃったらしくって、それからどうしても男性と仲良くなれないのよ。」

「どうやら、和美とはちょっと毛色が違つらしい。女性が好きなのはなく、男性を好きになれないだけのようだ。」

「そつか、辛いこと思い出させちゃった？ごめんね。でも、竜や敦君みたいに平気な子もいるんだね。」

「実は竜くんはまだちょっと怖いかも。でも、きつとそのうち平気になるから心配しないで。敦くんの時もそうだったんだけど、慣れみたいなものだもん。」

「うん。でも、無理しないでね。嫌だったら、ボクに言ってきて、上手な距離を見つけてあげるからさ。」

ボクがそう言って明実の頭を撫でてあげると頷いて嬉しそうにする。明実はボクよりも体がちっちゃいので本当に妹みたいだ。

「ねえ。二人だけ？俺ら旅行で来てるんだけど、一緒に遊ばない？」

嫌なタイミングでナンパされてしまった。明実はビクツと怯え、ボクの体の後ろに隠れる。

「ボクらは友達と来てるから一緒に遊べない。ついでに男の子もい

るからね。」

「いいじゃん。こんな可愛い子を置いて行くような男のことなんて放っておいて俺らと遊ぼうよ。」

ナンパをしてきた男はそう言って視線を仲間の方に向ける。向こうは三人もいるらしい。こちらがか弱い女の子二人なのを見て、逃げられないように三角形を作るようにしてボクらの周りを囲んでいる。

「サルには興味ないから。ボク彼氏いるから近づかないでくれる？」

ボクは威圧的に言い放つ。この手のナンパは下手に出るとつけ上がつて来るので、こちらが興味ないことをきちんと伝えないといけない。

「サル？君面白いこというね。サル顔って結構言われるんだよね。彼氏がいるんだ。まあそんなのはどうでもいいけどね。後ろの子はフリーなわけ？」

「理解できなかつたみたいだからもう一度サルでもわかるように説明してあげるわ。あなたたちに興味はないから、どっかに言って頂戴。近づかないでくれる？それとも人間の言葉はサルには難しすぎた？」

ちよつと言いすぎかもしれないけど、明実もいるので、どうしても去って欲しかった。視線を一周させてみるが、竜たちがこの状況に気づいた様子はなく、ここはボクがどうにかするしかなさそうだ。

「そんな風に威圧しようとしても無駄だぜ。頼みの彼氏も近くにいないみたいだし、さっさと来いよ。」

どうやら選択肢を間違えたらしい。ただのナンパではなく、ボクらを強引に連れ去ろうとする。明実を人質に取られてボクも仕方がなく着いて行く。

「あ、サメ！？ほら、あそこみて。あんた早く係委員のところに行ってサメが出たことを伝えてきて。」

「は？サメ？そんなわけないだろ？」

ボクらをパラソルの下から海の方に連れて行ってくれたので、ボクは沖の方向に向かってそう言う。ボクは態と指の先から血を一滴海に垂らす。

「あんたら目が悪すぎるのよ。あそこ見なさいよ。背びれが見えてるじゃないの。さっさと係員に知らせないと手遅れになっても知らないわよ？」

そう言って、沖の方を指さす。そうすると、本当に背びれが見える。

「ま、マジかよ。やべえ。」

男たちは急いで海から離れて行った。そしてボクと明実はまだ浅いとはいえ、海の中に取り残されることになった。

「ちょっと、クーちゃんやばいって私たちも急いで逃げましょ。」

「そうだね。ボクもすぐ行くから、明実の方が遅いでしょ？急いで浜辺に上がって。」

ボクは明実を急かせると、明実に気付かれないように沖の方に向かい直る。以前と同じならば、サメは遊泳しているお客たちには構わずにボクの方に向かって泳いでくるはずだ。

浜辺や海の中は混乱しだした。突然サメが現れたことでパニックが起きているのだ。ボクはそんな周囲に目も向けずに、こちらに向かって一直線に泳いでくる背びれを睨みつける。

背びれがボクの近くに来た瞬間、ボクはジャンプして、海面の遙か

上空へと逃げる。サメは目的物を見失って急停止しようとする。しかし、蛇足で多少前に進んでしまい、ちょうどボクの真下へと来る。ボクは重力に任せて落下し、そのままサメの頭に思いっきりカカトを打ちつける。同時に、エラを狙って手刀もたたきつける。

「秋。何があったのかしらへんけど、無茶すんな。」

浜辺に戻ったボクに待っていたのは竜からのお説教だった。竜は以前にもボクがサメに襲われたことを知っており、サメが出たと聞いた時からボクの事を探していたらしく、すぐに駆けつけると、横抱きに抱きあげ海面から離すと浜辺に全力で走ってくれた。

「ごめんね。いきなりナンパされて、殴り飛ばすわけにもいかなかったから、態と血を一滴だけ海に落としたんだ。」

「明実ちゃんがおったから、無茶はできひんかったってことか？ナンパ男よりもサメの方が対処しやすいとか馬鹿なこと考えたんやないやろな？」

「だって、サメの方が本当に楽だったんだもん。」

「どんな神経しとんねん。」

明実が男性恐怖症であると聞いたばかりだったので、どうしてもナ
ンパたちを如何こうするのではなく違う対応をしてしまった。しか
し、一滴血を垂らしただけで本当にサメが来るなんて、どれだけボ
クの体はサメにとって魅力的なんだろう。

というか、絶対に血の匂いが届く前にサメは現れたよね？何か不思
議なことが起こって、ボクはどう説明したらいいのか分からなくな
ってきた。

「まあ、何にもあらへんかったからええけど、これ以上ここにおっ
たら、また面倒なことが起こりそうやから一旦退避すんぞ。」

竜の言葉に従ってみんな移動を始める。サメ騒動があり、海の中に
入っていた人がビーチに上がっており、逆にビーチは人込みとなっ
ていた。こんな場所に長居しては次はサメどころではなくなるかも
しれない。

後で聞いた話によると、今回ビーチに現れたサメは人食いサメでは
なく、無害なものだったらしい。ボクもとっさのことで攻撃してし
まったが、ちょっとかわいそうなことをしてしまったかもしれない。

「ごめんね。ボクのせいでこんなあわただしくなっちゃって。」

「そんなことないわ。私をかばってくれたんでしょ？それより、怪我はない？」

「サメを呼ぶ時に自分でつけた傷だけなんだけど、もうふさがっちゃったみたい。」

「相変わらずの回復力やな。せやけど、サメに食われたら秋でもただじゃすまへんのやから、こんな無茶もうやめてくれよ。」

「うん。ボクもちよっとやりすぎたかなって思ってる。」

「っーちゃん。ひよっとして君ってサメを呼ぶことができるんじゃない？というか、ひよっとしたら、他の動物も自由に呼べたりして？」

「まさか、以前海に来た時に足を貝殻で切ったことがあって、その時に今回みたいにサメが来たから、ひよっとしたらって思ってやっただけで、偶然だと思っよ。不幸体質と同じようにある一定の条件を満たせば発生する災害みたいなもんだよ。」

ボクは不幸体質に関しても非科学的にしか証明できないことを盾にして反論する。

「信じられないんだったら、今から何か動物を呼んでみる？犬とか猫でいい？」

そう言って、ボクはワンコよ来いと念じる。

「ワンワン！！」

「明実。ボクはこんな人間みたいなワンコを見たことないよ。」

明実が犬の鳴きマネをして場を和ませます。それでみんなも笑顔になる。

「動物の鳴きマネには自信があるのよ。猫もやってみる？にゃ〜。」

「あはは、上手い上手い。明実ってTVでいつも動物番組見てたもんね。」

「ボクも動物番組大好きだよ。動物好き過ぎて、ペコやジジを飼出すくらいだからね。」

「この前クーちゃんの家に行った猫ちゃんだよな？うちも猫欲しいなあ。」

そんな会話をしながらボクたちは浜辺を離れる。ボクたちの後ろを本物の犬や猫が通っていったことには誰ひとり気付かなかった。

チャプター55（後書き）

かなり、真相に迫る回だったのではないのでしょうか。

どこかでこんな場面を見たことがあるという読者様がおりましたら、その方はかなりの想像力をお持ちの方だと思います。

今回のテーマは、明実と秋の設定をどのようにしてみなさんに伝えるか、でした。

秋においては主人公ということもあり、皆さんの中でだいぶイメージが出来上がっている事とは思いますが、この物語中最も謎を持っている人物ですので、まだまだ隠れていた、設定が出てくるかと思いません。

明実に関しては、中学までにいなかったキャラを出したいという作者の気持ちから、優花敦以上の特別な立場が出来上がったらと思っています。

それでは、55話までお付き合いくださって、本当にありがとうございました。

チャプター56

秋の失敗

夏休み中部活があるとはいえ、秋は普段の学校生活よりものんびりと過ごすことができていた。中学校の時の仲間に出たり、そのメンバーとならお祭りや花火大会に参加したり海に行ったりしても以前のようにサメが現れることもなく本当に平和に過ごしていた。

「河野先輩最近スリーの制度があがりましたよね。先輩のポジション的にも本当にこれはすごいですよ。」

「ありがとう。すごくいい手本があるからね。毎日イメージしながら一本ずつ丁寧に練習しているんだよ。」

「へえ、手本ですか。何をお手本にしてるんですか？」

秋がそう言うと、河野は人差し指を顔の前に突きだした。

「え？ぼ、ボク？」

「そそ、この前一回だけ体育館で見たけど、本当に綺麗なフォームだつて言っただろ？あれを真似してるんだけど、そしたらどんどんシュートが入るようになってき。秋ちゃんのシュートは力がいらな
いから、コントロールが定まり易いんだよ。」

「そうなんですか。でも、なんだかそう言われると照れますね。」

そう言つて、ずっと突き出されていた指を小さな手で包み込むとはにかむ秋だった。

「二人は何をしてるんだい？いきなり手と手を握りあつたり・・・」

「か、川本部長。ち、違うんです。河野先輩がボクのことを指さすので、嫌がっていただけです。」

秋はしどろもどろになりながらも、そう言い訳をした。

「河野、さぼってないで練習しないと本当に上田にポジションを取られるぞ。」

「上田のポジションはセンターかパワーフォワードだろ？俺のポジションはスモールフォワードかシューティングガードだから被らないぜ。」

「上田ならシューティングガードもできるんじゃないか？確かにあの突破力はフォワードに欲しいし、制空権の強さからセンターと、どちらかが有力なのは確かだな。」

「敦君がまだいますよ。河野先輩のポジションと、完全に被ってま
すからね。竜みたいにFGC全部できる人間は理想的ですが、河野
先輩や敦君みたいにガードとフォワードができる選手や川本部長だ
ってPGと言いながらも突破力ありますからね。」

「でも、結局センターの管崎と合わせて俺より上手いの四人だろ？
残り一枠は俺に決定だな。」

「もう、合宿前までレギュラー無理とか言っていたのに、ちょっと
上手になったらすぐに調子に乗るんですから、そうやって自分や周
りの限界を決める人は好きじゃありません。」

「そんなあ。秋ちゃんに嫌われちゃ俺バスケ部でやっていけないよ。」

「じゃあ、真面目に練習してください。」

河野先輩との会話は特殊だが、それでもこうやってマネージャーと

コミュニケーションをとりながら、みんな自分の課題や長所などを把握していく。

秋のマナージャーノートにはそれこそ膨大な情報が書き込まれているのだが、多すぎて秋が個別に解り易いようにと整理したものをみんなに見せていなければ、読破するのも大変だろう。

個別のノートを作ったことは選手のレベルを底上げしてくれたが、他のメンバーの情報が微妙に見にくくなってしまったため、どの選手がレギュラー入りをするかなどは個人でコミュニケーションをとったり秋に聞かないと分からなくなってしまうた。

「言うておきますが、河野先輩がさぼったら、確実にベンチスタートです。体力が足りていないので、ポイントでスリー要因としてちよくちよく出るだけですから。」

「しまった。その問題がまだ残ってるんだった。やっぱり山田や鈴木や佐藤の方が、体力があるからレギュラー入りしそうか？」

「二年生の先輩たちは、全員ベンチには入ると思いますが、スタメンとなったら体力のある山田先輩をシューティングガードに持つてくるのが一番理想形でしょうね。」

河野はおだてたら伸びるタイプの人間だが、自分が一番と勘違いし

たらまた同じようにやる気を
無くすので、秋は飴と鞭をうまく使い分けて練習メニューを指示し
ていく。

「ってことは坂本はフォワードか。確かにそのポジションは今のと
ころ理想かもしれない。蟹津さんは本当に良くみんなのを見て
るんだね。」

川本はここで秋の機嫌を取っておく。周りから見たら秋のことを好
きなオーラ丸出しなのだが、秋は恋愛に関して、竜と同じか、竜以
上に鈍感なため気づかない。

「待て、スリーがあるんだから、シューティングガードは俺だろ？」

「バテバテで守備に戻れないバックがいるよりも、堅実な守りをし
てくれる方がチーム力はあがりますから。シュートも入って守備も
できるんだったら、間違いなく河野先輩がレギュラーなんですけ
どね。」

とはいっても、短期間で河野の体力が上がるわけでもないの
で、きつと河野は交代をしながら状況に応じて出すことになるだろう。川
本は体力には自信があるので鉄板だが、管崎は体力にちょっと問題
があるので、センターを竜と交代してと考えるとやはりフォワード
の選手が足りない。

ドリブル突破力のある選手、ゴール下に強い選手が限られるという、T高のバスケット部の今後の大きな課題が浮き彫りになった。

「まあ、河野の体力が心配だが、去年のことを考えると蟹津さんのおかげで全体としてのバランスはいいよ。」

「ボクのカじやありませんよ。でも、確かに中学の時は竜のワンマンみたいなチームだったので、それを考えると、今年は竜も頼れる仲間がいて伸び伸びプレーしてますね。」

結局そのあとの練習は体力を底上げするようなメニューを考え、走り込みや縄跳びなどを多様するメニューを河野に渡し、その他のメニューにも最適のメニューを考えてお開きとなった。

「秋、最近ちよつと髪の毛緑っぽく見えるぞ。夏休みやけど、どこに目があるかわからへんから、きちんと染めへんでええんか？」

「う、このところ確かにさぼってるかも、頭のとっぺんとか緑になってる？」

「せやな。バスケット部のメンバーは確かに信頼してええけど、登下校中はどんな奴にあうかわからへんのやから染め直した方がええぞ。」

「そつだね。今日帰ったらきちんと染めるよ。」

そんな会話をしている時ほど周囲に目があるものである。秋と竜が体育館から自転車置き場に向かう間に、既に緑の髪色をした、秋の様子を写真に収められていた。

そのことを後悔するのは夏休み中に高校生にもなつて存在する登校日のことだった。

ガヤガヤ

登校日、面倒だとサボる生徒も多数存在する中、秋は毎日部活にいつていることもあり、きちんと登校し、そんな秋のことを知ってい

るメンバーはみんな学校に来ていたのだが、どうやら様子がおかしい。

学校にある、全校生徒に連絡を入れるための掲示板に多数の生徒達が集まっている。

「どうしたのかな？何か特別な連絡でもあったの？」

「いや？俺はそんなんはきいとらへんよ？ちよつと見に行ってみるか？」

いつものごとく竜と連れだって登校してきた秋はその様子を不審に思いながらも掲示板に近づいて行く。すると、掲示板に群がっていた生徒が秋が登場すると同時に、一気に掲示板から離れ、ジロジロと見てくる。

「ちよま。すつごいやな予感がする。」

秋と竜は掲示板をのぞき込み絶句してしまった。掲示板には二人が仲良く歩いている様子が写真に取られている。そこまでは知られて困ることでもなく、ファンクラブなどには情報公開している内容なので問題がなかったのだが、写真には頭のところを目立つように印をつけられていた。

「学校のアイドルA・Kさんの真実

「高一の美人と噂される彼女にはまだ秘密が、頭の部分が緑になっているのは染めたものではない？」

タイトルと副題を読むだけでも記事の内容がわかるものだが、秋と竜は一応記事の方にも目を通す。

それによると、髪の毛を毎日黒く染めていることなど、かなり秋のことを知っている人物でなければ知らない毎日の日課などについても書かれていた。髪の毛以外にも、臨死体験についてや、その他ほんの一部の人間でしか、知り得ないような細かい内容についてまで詳しく書かれたその記事には一つだけ欠点があった。

「これって、秋や俺らの証言が一つも書かれとらへんよな？ってことは心友や秋が相談した人が漏らしたんやなくて、自分でストーリーして観察したって言うようなもんやぞ？」

「ということは、犯人は限られてくるね。」

「てか一人しかおらへんのやないか？」

「一応ここは推理ゲームを楽しもうよ。ファンクラブの規約などを知っているだろうことから、まず高校のファンクラブだね。」

「せやな。ついでに言つと、身長はちつこいな。上からの写真もあるけど、普通に立って撮ったと思われる写真が秋よりも視線が低いからな。」

「かがんで撮ったかもしれないから、その推理は犯人が解つてないと成立しないよ。」

「せやつたら、同じクラスってのはどうや？この記事から、遠足の時に同じバスに乗ってたことがわかるやろ？」

「それも誰かから聞いたり、盗聴器って可能性も否定できないんじゃない？」

「秋だつて犯人決めつけて言つとるやないか。盗聴器ってあいつのことやろ？」

「確かにそうだね。まあそんなわけで、ちょっとボクは職員室に行つてくるから、その間童は掲示板に誰も近付かないように見張つてくれる？」

「一人で大丈夫なんか？」

「こんな近い距離で問題も起こらないでしょ。それにしてもいつもの癖で早めに学校に来ていて助かったよ。一部の生徒の噂だけなら今後対策が練れるからね。」

「了解。さつさと報告してきてはがしてもらってこい。それが終わったら俺はこれ以上犯人が勝手なマネをしいひんように確保しに行くわな。」

「あ、だったら優花たちにも連絡入れといてくれる？ボクは先生たちの手前ケータイを出せないからさ。」

竜は言われたように敦に、優花・明実・和美に連絡を入れてくれるように頼むと、ついでなのでバスケット部のメンバーにも連絡を入れた。敦から連絡を受けた優花は、美術部の先輩達に同じように連絡を入れている。

こうして、T高の秋を守るメンバーたちが集結して犯人確保に乗り出す。秋はその間、みんなの行動を妨げかねない、職員室の先生たちの目を自分に向けさせる。

今までの秋だったら、自分で犯人を捕まえてしまうところだが、我がままを言える人たちができたことによって、自分が裏方に回ることにしたようだ。

犯人を探していた心友メンバーに意外な人物から連絡が入る。

「川瀬さん？良かったわ。つながったみたいね。私が犯人を確保して体育館にいたので、こちらにみなさん来てくださるように伝えてくださるかしら？」

「え？犯人ってわかったの？」

「ええ、あなたたち心友が蟹津さんを売るとは思えなかったの、私なりに考えてこの人しかいないと確信を持っていますわ。のうのと教室にいたところを確保して、話しにくいこともあるだろうと体育館まで連れ出しておきましたわ。」

「了解。」

明実は協力者からの電話を切ると、隣にいた優花にそのことを伝え優花と協力して犯人探しに学校中に散らばっていたメンバーを集める。

「この人数で困んでは彼もおびえてしまうでから、ここは君たちだけで体育館にむかってはどうだい？」

河合部長の発言により、今にも犯人を袋叩きにしようと血気盛んだ

ったバスケット部のメンバーが不参加となり、体育館には、明実・優花・敦・竜・和美の五人だけが向かうことになった。

確かに報復することも良いかもしれないが、秋の気持ちをくみ取るならば五人で説得することが一番の方法に思った。

「しかし、あいつが協力するやねんで、どんな風の吹きまわしや？」

「彼女はとっても良い人よ。確かにプライドは高いし、クーちゃんに突っかかったことはあったけど、今はきつとライバルとして認めているのよ。」

「うちもそうおもうで、確かに前は違ってたみたいだけど、明実もちもあのグループにいたときもツン先生の悪口はいっぱい言ってたけど、きちんとまとまったグループだったしね。」

「上田が心配するのも無理はないけど、確かに明実ちゃんにかかってきた電話の内容から察するに彼女は味方で、犯人を確実に確保しているとおもう。」

敦の言葉に皆が頷き、一行は体育館へと向かう。そこに待っているのは……

チャプター56（後書き）

体育館に呼び出した協力者とは、また、掲示板に写真を掲載した人物とは？みたいな感じで書いたのですが、すつごくわかり易いですか？

もう少しミステリー風にしたかったのですが、高校生編をきちんと読んでくださっている読者の皆様にとって謎解きでもありませんね。

今回のテーマは「緑」です。

高校生くらいになると、染めたくありませんでしたか？AKIは夏休みに少し友達と遊んで染めたくらいで、学校ではきちんと黒くしていく子でした。秋は逆に、みんなと合わせるために黒く染めて行っていたようですが、それがみんなにはれてしまいました。このあとどんなことが起こるのでしょうか。

次回も楽しみにといったところであとがきを終わらせていただきます。

ここまで読んでくださってありがとうございます。ありがとうございました。

秘密の開示

体育館で待っていたのは、北条美香と森元気の二人だった。

「森、お前なんでこんなことしたんや？」

竜は言葉こそ選んだようだが、その様子は怒り心頭といった雰囲気
をだしていた。

「ちょっと、いきなり喧嘩腰なのはやめなさいよ。ただでさえ秋に
とっては危険な状況なんだから慎重になりなさい。」

「和美ちゃんの言う通りね。森くん。私たちはクーちゃんの味方だ
からあえて言うわ。あなたもきちんと秋ちゃんの味方にならない？」

「明実、流石にそれはちがうんじゃないの？」

「そんなことないわ。クーちゃんだったら自分にどんな酷いことを
してもこうして相手のことを許すと思うの。それを私たちが代わり

にするだけよ。そうよね？竜くん？」

「せやな。確かに腹はたつたけど、秋なら許すやろうな。ほんで、最後にはみんな仲良くなつてまうんや。」

「お前も苦勞してるんだな。種類は違つても、特殊な彼女を持つと大変だぜ。」

哀愁を漂わせる竜と敦を置いておいて、明実と和美が森君に近づいて話をする。

「さつき味方について言ったけど、いろいろと問題があるのよ。あなたは何であんな写真を掲示板に張つたのかしら？」

「秋にとって、自分のことをみんなに知ってもらつのはとっても勇気のいる行動なの。そのことをきちんと理解せずにあんなことをすると、ひょっとしたら秋は死んじゃうかもしれないのよ。」

和美の死んでしまうかもという一言に元氣は驚愕する。

「ぼ、僕はただ、さ、最強美少女に、ふ、振り向いて欲しかっただけなんだ。」

「それだったら、教室で話しかけたらいいわ。確かにこここのところ私たちが周りにいて話しくかつたかもしれないけど、あなたが真剣な気持ちをもって仲良くなりたいうて言えばクーちゃんはきちんと気持ちを受け止めてくれるわ。」

「でも、彼氏がいるじゃないか。僕なんか絶対に振り向かないに決まってる。」

「確かに俺は秋の彼氏やけどな。残念ながら一人占めしたくてもできひんのだ。秋はどんなに忙しくつても、心友のために朝早く起きてお弁当を作ったり、テスト対策のために重たいプリントの束を持つてくるような奴やからな。」

「一人占めなんてしたら、心友が黙ってないわよね。ひよっとしたらファンクラブに暗殺されるんじゃない？」

「和美、怖いことをいうなや。俺も柔道やってたり鍛えとるから大丈夫やおもうけど、流石にその可能性も否定できひんわ。」

「クーちゃんを不幸にしたら、まず竜くんの命はないわね。」

「ちょっと、あなたたち！！私がここにいることを理解してますの？まず何か言うことはないのかしら？」

ギリギリまで我慢していた美香だったが、犯人を見つけて体育館まで呼び出したというのに、労いの言葉どころか、完全に無視といった雰囲気について堪忍袋の緒が切れた。

「北条さん。ありがと。しかし、北条さんもちよつと前まで同じ立場だったの気づいてるかしら？」

「あら？それを言ったら川瀬さんだってあまり変わらないわ。坂本くんや鈴木さんは早くから蟹津さんの味方だったみたいですが、川瀬さんだって私と同じ失敗をしたのではないかしら？」

「う・・・確かにそうんだけど、北条さんにそれを言われても・・・」

「北条さんにも明実ちゃんにも秋のことについて色々あったのはしってるけど、中学からの心友である私と竜くんが保証してあげるわ。」

秋は絶対に二人のことを恨んでないよ。むしろ、こうして秋が困ったことがあったのに任せてくれたことから、かなり信頼していると思っいいわ。」

「確かにそうね。彼女なら真つ先に教室に飛び込んでくると思って、

私も体育館に移動したんですもの。あいにく彼女の連絡先をしらなかつたから川瀬さんに連絡をいれましたわ。」

美香が皆さんと言った中に、秋のことも本来は入っていたようだ。しかし、来たのは心友達のみで彼女なりに驚いていたようだ。

「秋は職員室で先生たちの目をそらしてくれとるみたいやで、掲示板の方もきちんと生徒に見られないように回収してたわ。そつや、あの写真と記事つてもうあらへんやろつな？」

一応バスケット部の先輩たちに見つけたら、回収してもらおうようにお願いしてきたんやけど、無いってわかつたら伝えるんやつたわ。」

「あれ一つだけだ。僕も大勢に彼女のことを知られてファンが増えたら嫌だったから。」

「あんなあ。せやつたらあんなもん作らへんかつたらええねん。」

「お前には分からない。モテない男がどんな風に考えてるかなんて彼氏のお前になってわかるもんか!!」

「せやな。残念ながらわからへんわ。せやけどな。ひとつだけ分かることあるで?こんなことをして秋の気を惹くのは不可能やな。」

勉強で頑張ってるお前を見て、秋は夏休み明けに話しかけようとしてたん知らんやろ？あいつは努力する人間を最大限に評価する奴やねん。」

「まさか、あの最強美少女が僕のことを気にかけていたなんてそんなわけ……」

「無いと言い切れへんやろ？秋について、こそこそ調べてた自分やったら、わかるんやないか？秋が本当に認める人間がどんな奴らか俺や司は偶然秋と幼馴染やったけど、そんなん言ったら小学校から同じ奴はたくさんおる。」

せやけど、そんな中でも俺や司に対して秋は特別な存在やおもってくれとる。それは、秋に張り合って一生懸命努力したからや。」

努力する姿って正直恥ずかしいことの方が多いんやで？せやけど、秋はそんながむしゃらになる人間が好きなんや。」

「がむしゃらになる人間か。確かにそうだ。バスケット部のみんなも蟹津さんの影響ですっごい練習を頑張るようになったからな。」

「竜くんも意外と良いこと言うじゃない。いつも鈍感って思ってた

けど、きちんと見るところは見てるのね。」

みんなの認識の中で、竜は鈍感でみんなから非難されることも多かったので、これらの意見には驚きだ。

「あんなあ。俺ってそんなに鈍感キャラやったんか？こんな鈍感とかいう問題やないで、秋のことは見とったら誰でもわかることやん。実際この森も理解したわけやろ？」

竜の言葉に森に視線が集まる。

「か、蟹津さんがそういう人ってことは理解できたよ。でも……」

「はいはい。俺を恨むのもお門違いやで、秋を本気で振り向かせたいなら、今回みたいな失敗を反省して積極的に秋に接していかなあかんぞ。」

「竜くんが相手の気持ちをくみ取った……」

「シリアスな雰囲気の際にぼけるなや……」

「いや、本当にどうしたの？私中学から一緒だけど、こんなに鋭い

竜くんは初めてよ？明実が驚くのも無理はないわ。」

明実と和美が驚いているが、敦はあまりそうは思っていないようだ。というよりも、バスケットでの様子を見ていたら、鈍感というよりも、むしろ気遣いなどをきちんとしてくれるようなイメージがあったので、むしろ今までのの方が不自然だったくらいだ。

「うちは何となくわかるよ。竜くんにとって、興味がないことに対しては全くの鈍感になってるんだとおもうな。恋愛に関しては、近くにツン先生がいたから仕方がないと思う。」

今回自分の大切なものを守るために状況を把握しようとしてたら、理解力が早いのは納得がいくから。」

「俺もそうかも、上田は決して鈍感なんじゃなくて、興味がないことが多くだけだとおもう。」

「興味がないって言われるとなんや嫌やな。俺の場合、バスケットか柔道とかそんなんにはっかかり興味がいつとつたんは事実やな。ひとつのことに集中したら周りがみえへんくなるんは誰だってあるやん。」

「解りましたわ。つまり、恋愛に関しても、蟹津さんのことばかり見ていたから、他の女の子が目に入っていなかったというわけです」

わね？」

「ちよま。そんな秋のことばかり・・・」

そこで赤面しては説得力がない。一同から”はいはい。あんたら二人は一途でしょうね”といった目をされた。森はかなり悔しそうにしていたが、それでも二人の関係を調べていて穴がないことを理解していた。

「僕はそれでもあきらめない。方法は確かに間違っていたみたいだけど、絶対に彼女を手に入れてみせる。」

「そっか。じゃあ、これだけは約束してくれや。秋の場合今回みたいに一方的に秘密をばらされたりするんは確実に命にかかわることやねんで。せやから、きちんとファンクラブの規約とか読んで秋のことについて理解した上で行動してくれ。」

「解った。僕も不幸になつて欲しいわけじゃないからね。」

体育館での会談はこれにて終了となり、各自教室に向かう前に森以外のメンバーは職員室に寄っていき、秋と合流することになった。途中メールで体育館に行くことなどは連絡を入れたが、場所も悪いので確認をできているとは思えない。

ガラガラ

「失礼します。」

明実が代表して入室すると、そこには見慣れないというか、日本に
いる限りあまりにも不自然な生徒と、秋が仲良く何やら話している
様子が見られた。

「クーちゃん？その子は？」

「ああ、秋から一緒に勉強する留学生のケイティだよ。」

そのあと、秋はケイティに明実のことを紹介したのか、英語でペラペラと話します。とてもリスニングだけで覚えたとは思えない滑らかな発音にびっくりする。

「おう。あなたあが、アケミでえすねえ。こんにちは。」

「日本語御上手ですね。はじめましてアケミ・カワセです。」

「アキのイングリッシュ、もっと上手でえす。ヘアカラーも不思議でえす。」

「え？どうゆうことじゃ？」

痺れを切らした竜が明実の後ろから状況の説明を求めてきた。

「ケイティは、ボクの英語を聞いて、ネイティブくらい上手だから、本当に日本人なのか疑ってるんだよ。」

タイミング的に良かったから、ひよつとしたら家族の中に北欧出身の人もいるかもなんて言っつて、髪の毛の色もそっこの家系かもとか言っつたら、自毛なら隠すのはそれこそ良くないとかいうことになっちやっつた。」

「ってことは、今度からは黒く染めやんくってええってことか？」

「そういうことだね。ちょうどケイティがいるから、色々と難癖をつけて説明したら自毛って信じてもらえちゃった。」

ある意味平和に解決したといえはその通りなのだが、体育館に向かった面々は一番の問題である、秋の秘密をどのようにして今後隠すか職員室に来るまで話し合っていたのに、それがいつの間にか解決をしていたことにあきれる。

「結局クーちゃんは自分で一番大変なことは解決しちゃうのね。」

「今回私何にも秋にしてないかも。ポイント稼ぐチャンスだったのに。」

「あんだそんなこと考えてたの？もつと純粹にツン先生を助けたいと思わないの？」

「優花、長田さんもお前にだけは言われたくないと思うぞ。今回つーちゃんを助けたご褒美に美術部に参加してもらったり、一緒に絵を描いたりしたいか思ってるだろ？」

「そ、そんなことは・・・」

「あ、でもそれは叶うかも。ただし、ケイティも一緒だけどね。日本の大和絵に興味があるらしいから、二学期に入ったら一緒に美術室に行く約束しちゃったから。」

「ホント？ツン先生と一緒にキャンバスを眺められるなんて・・・」

優花の秋に対する信仰もここまで来ると異常としか言いようがないのだが、みんな以前の優花よりも秋の影響で良い方向に向かっていると感じているので指摘しない。

全員が和やかなムードになっている中、納得できないものが一人いた。

「あなた。当然のように英語を話すことができるとおっしゃいましたが、私だって社交界には英国の方もいらっしやるのですから。当然話すことができますよ。」

美香はそう言って、ケイティに英語で話しかける。

「この学校はすごいですね。でも、慣れないイングリッシュを使

わないでくださあい。私も日本語話せませう。」

「慣れない……」

「まあ、秋の発音が綺麗すぎて違和感があっただけやろ。そんなに落ち込まないでええって。」

「フオーしないでくださるかしら？夏休み明けには蟹津さん以上に綺麗な発音を身につけて見せましてよ。」

負けず嫌いここに極まるといった様子だが、秋はそんな様子すら楽しげだ。ケイティとは一旦お別れをすると、先生たちに挨拶をして教室に向かっていく。竜も隣のクラスなので廊下まで一緒だ。

「森君完全には納得してくれなかったでしょ？」

「せやな。絶対に手に入れるとか言うとなわ。秋は物じゃないっつうの。」

「偉い偉いちゃんと我慢したんだね。」

そう言って秋は竜の頭をなでる。

「俺はガキやないんやで頭なんて撫でるな!!」

「そんなこと言ってるわりには、秋に頭を撫でられて鼻の下が伸びきってたわよ。」

「ツン先生。うちも我慢したよ。」

「優花も偉いね。」

秋が今度は優花の頭をなで出す。そうすると、猫のように秋になつてしまっていた。

「優花、そんなにツーちゃんが好きか？」

「うん。」

ここで敦は俺とどっちがとは聞かない。というか、今の状況で聞いたら確実に負ける気がした。

「美香ちゃんもして欲しいの?」

「み、美香ちゃんですって？わ、私をそのように馴れ馴れしくよばないでいただけるかしら。」

美香は赤面しながら反論する。

「じゃあ、ミーちゃんがいい？ミーちゃんが森君を体育館に連れ出してくれたんでしょ？教室で喧嘩したり、ボクの秘密に関して話すわけにもいかないし、本当に助かったよ。ありがと。」

「べ、別にそれくらいのこと構わなくってよ。」

「ううん。やっぱりライバルとしては借りを作つたままじゃいけないから、きちんと返さないとね。これ、夏休み明けのテスト対策として作ってきたんだけど。もらってくれないかな？これくらいしか返せないけど。」

「そ、そういうことならもらってあげないこともなくってよ。」

実際には美香の分も用意してきた問題集なのだが、どうやって渡していいか分からなかったので、ちょうどいいと秋などは感じていた。

「ツン先生。うちには？」

「優花の分はもちろんあるよ。ボクにとって初めての生徒だしね。今までの心友はお互いに教え合う仲だったけど、優花は今後びびし指導していくから。」

「お手柔らかにお願いします。」

「うん。成績が上がって勉強の指導が必要がなくなっても、今度は絵の指導をしなきゃいけないし、本当に優花はボクの生徒みたいだね。」

「絵の指導ですって？たかが高校生がそんな上から目線でいい絵が描けるわけがありませんわ。」

「でも、ボクプロの芸術家だよ？展覧会なんかにも展示してるからね。ミーちゃんみたいな人にはひよっとしたら知られてるかも知れないくらい有名なね。」

「ま、まさか。最近若手のホープと噂されている。大木鈴・・・」

「大正解。やっぱり社交界では有名になってるんだね。この前北条さんって人が是非次の作品ができた時には買い取りたいって言うて

たからひよつとしたらと思っただけど、あれって親戚か何か？」

「わ、私のお父様ですわ。」

美香は完全に負けたといった表情をした。学校で良い成績をとつても、スポーツの大会で優勝してもまだ若いからという理由で認められない父親が唯一若いのに本当に良いと絶賛していたのが実は大木鈴の絵だったのだ。

「まあそういうわけで、ボクは優花にとってはお師匠様みたいなものかな？」

「一生付いて行くわ。」

「いらら、きちんと独立してくれないとボクが困るよ。」

「やだやだ。ツン先生と離れるなんて絶対にやだああ。」

冗談か本気が分からないような会話だが、実際に優花はここどこどこに行くにも秋の側を離れたがらない。そんな様子を見て竜はそっと溜息を吐くのだった。

「体育館で言っていた独占できないってのは本当なのね。」

「せやる？秋の周りにはこんな感じでいっつも人が集まるからな。俺一人で独占なんてとてもしゃないけどできひんのやわ。」

彼氏の苦悩もなんのその。結局美香と優花にばかり構う秋に和美までじゃれつきだして、秋は教室に着くまで三人にからまれながら歩くのだった。

「竜、さっきミーちゃんに渡したテスト対策部活前に渡したいから、教室に迎えに来てくれる？」

「ええよ。今日はあんまり秋と離れると危なそうやしな。」

「うん。竜がいてくれて本当に良かったよ。」

別れて隣の教室に入ろうとした竜に秋が声をかけた。この言葉で竜も秋に放置されていたわけではなかったことを実感し、ニヤケ顔で教室に入って行った。

「ラブラブね。」

「そ、そんなことは、やっぱり竜と一緒にの方が危険が少ないんだし。」

「私も秋とラブラブするう。」

そう言っつて抱きついた和美、便乗して優花も抱きつくとなぜか明実まで抱きついた。先ほどから様子を見ていた明実もじゃれつきたかったのかもしれない。

「北条さんは抱きつかないの？」

「わ、私が出ような真似をすと思っつて？」

「でも、こつこつ関係もつらやましいでしょ？」

「ま、まあ確かに悪くはなさそうですわね。」

敦と美香はそんな四人の様子を眺めていた。教室の目の前でじゃれあう四人が大人しく教室に入つていくのは、朝から問題が起こつてドタバタしていた担任の先生がケイティを連れて教室に着いてからだ。

チャプター57（後書き）

中学校までのメンバーと少し違った接し方をする高校生メンバーを描いてみました。

テーマはもちろん「秋を守りたい気持ち」です。

一話で完結できなかつたので、3話構成になっており、間の回という形ですが、次も同じようにほのぼのした感じも出していきたいと思います。

皆さんに読んでいただきAKIは幸せでございます。
本当にありがとうございます。

チャプター 58

認めてあげて

秋の髪の色については、教室での話題の的にならなかった。

いや、実際に担任が教室に入るまで噂や憶測が飛び交っていたのだが、それを吹き飛ばすような話題が先に上がったので、話題が変換されてしまった。

「こんにちはあ。わあたしの名前はケイティ・キティー・ラスケットでえす。」

担任と一緒に入って来たケイティはアクセントが所々おかしいものの、十分流暢な日本語で自己紹介をする。

なんでも、日本人のホームステイを毎年受け入れており、自由会話も普通に出来るまで練習していたらしい。その影響で是非一度日本に、来てみたかったのだということだった。

「ケイティはほとんど日本語を話すことができるから、みんなも積極的に話かけてあげなさい。異文化交流も大切だ。」

担任の先生はかなり無責任に生徒たちに交流を持つように促す。実際英会話などやったことがない人間も、ケイティの日本人とは違った魅力に声をかけようと思案していた。

「わたあしの席は何処ですか??」

「蟹津さんの近くは席があいていたよな??そこに机を持って来て座ってもらう。今は席がないけど、全校集会の後に誰かとって来てくれるか?」

クラスの男子たちが一斉に挙手をして立候補する。

ケイティの気をひこうと必死だ。

「ケイティ、一緒に体育館に行こう。ボクらならさつき職員室で顔を見たから問題ないでしょ??」

「アキが学校案内してえくるですか??ありがとございませす。」

「ボクだけじゃなくてこのクラスの子たちみんながケイテイのことを歓迎してるから何か尋ねたいことがあったら言ってみてね。あと、くれる”だよ。」

「わかりました。もう覚えまあした。」

ケイテイの口癖は”もう覚えました”だ。日本語を学んだ時に何度も繰り返し教えられて、それに対して反応しているうちに何に対してもその様に言うようになった。

「ケイテイの覚えましたは怪しいからな。もう一回ボクがなんて言ったら言ってみて。」

「アキが歓迎してくれて何でもたずねていいです。あと、案内してくれるでえすよね?」

「間違っていないけどちょっと違うよ。クラスみんなが歓迎してるからみんなにもいろいろきいて良いからね。」

「もう覚ええました。」

クラスのみんなから本当に覚えたのかな?といった疑問の視線を浴

びながらもケイティは秋たちと全校集会に参加する為に体育館に向かうのだった。

秋は朝から職員室に行ってしまう、英話を話せることを先生達に重宝されたため、体育館でもケイティの側にいるように言われているので調度良いと連れ立って向かう。

体育館につくと、朝の掲示板を見た人が秋に視線を送るが、横にいるケイティに視線が集まっていた。

秋にとつても心友にとつても都合が良いのでそのままケイティを上手く隠れみのにして不幸の発生を防ぐ。

秋にとって幸だったのはケイティのおかげで自分に対する視線が減ったこと、そして不幸だったのはケイティの側にいたため、自分一人や竜と一緒にの時のように対処出来なかったことだ。

ケイティは全校集会で留学生として壇上で挨拶をするために、階段を登っており、当然その後ろについていた秋だった。

ケイティは階段の一番上で足を滑らせると、側に置いてあった大きな花瓶向かって倒れて行く。

「危ない!!」

秋はケイティを後ろから抱き寄せると、自分の体に頭を包み込むようにして階段を落ちる。

ガン!!

階段を落ちたままでは秋もなんとか受け身をとって大きな怪我も無かっただろう。

グラグラ

ガコン

花瓶の置いてある台座にぶつかった反動で揺れ、最期にはあわれ秋の頭上に落下するのだった。

『こんにちは。未緒さん。』

『こんにちは。秋さん。』

『毎回洋司さんは来なくて未緒さんが来るんですね。』

『ええ、でも今回はもう一人来ますよ。』

未緒さんの言うもう一人は少し遅刻したらしく、未緒さんがエンマ帳をだすと同時に、飛んで来た。

急いで来たのではなく文字通に飛んでやってきた。

和服姿に赤いポニーテールをゆらゆら、ボクのところまで来るとハイテンションに話出す。

『秋ちゃん！！私凄い事実が解っちゃったの。』

『はいはい。あまり時間もありませんし、要点をまとめて説明してもらえますか??』

『解ったわ。秋ちゃんの体はマリン様と同じ肉体の構造をしているらしいのよ。』

ボクはマリン様と言われても何のことだかさっぱりだった。

『ま、マリン様と同じ構造!?!』

末緒さんはそれだけである程度理解できたらしい。

『要約し過ぎだよ。ボクはそのマリンって人を知らないから。』

『そうよね。いくら秋ちゃんでもマリン様を知っているわけではないわよね。マリン様は世界を作ったと言われる人の一人よ。』

『神様??.』

『そう言っても差し支えないわ。マリン様は世界を自由に造り、操ることの出来る魔法を持っているお方なの。』

『え??.どういうこと??.何でも叶えられる魔法を持っている人ってことかな?。』

『ほぼその考えで間違いはないわ。いくつか出来ないことも存在するみたいなんだけど、マリン様の体と同じということは、最強の体を手に入れたと言っても過言ではないわ。』

『しかし、霞様マリン様は男性では？？エスカ様ならまだしも、女性である秋さんの体がマリン様と同じ構造というのは違和感があるかと…』

『そうなのよ。だから私も気付かなかったんだけど、以前の秋ちゃんは男性でしょ？恐らくマリン様の完全なコピーを作りたかったんだと思うわ。』

ところが何故か上手くいかなかった。そのため、女性に再転したら、女性であることを除けば全てマリン様と同じ人間が出来たってわけよ。』

『それってやっぱり凄いことなのよね？？』

秋は理解が追い付いておらず、一つずつ霞から聞き出そうとした。

『凄いなんてものじゃないわ。ひょっとしたら魔法の力も少しくらいなら使えるんじゃないかしら？』

『世界を操る魔法？？』

『そうよ。秋ちゃんが願えばどんなことだって叶っちゃう魔法なのよ。』

『あの…大変申し訳ないのですが、そろそろ準備をしないと、間に合いません。その話は次回ということ…』

『そうね。こんな重要機密を現世に持って帰っちゃったらそれこそ大変なもの。』

霞はそんな風にいうと、秋の記憶操作の補助を申し出た。

霞と未緒という、優秀な鬼人二人に見送られて、秋は現世へと帰って行く。

『そんな重要機密なら教えなくて欲しいな。ボク本当にどうなっちゃうんだろ…。』

「ただいま。」

「おかえり。」

いつもおはようとかボケて起き上がる秋がただいまと言って目が覚めたことに周りは違和感を覚えなかった。

「何で普通におかえりって言うかな?？」

「じゃあないやろ? 死の淵からの帰還って言うても、何回もあったら、生き返るって言うよりも帰って来たって感じやねん。」

「じゃあ今度からはただいまって毎回言った方がいい?」

「今度がないんが1番やっちゅうねん。」

「あはは、面目ない。」

「アキい。だいじょうぶでえすか？わたあしを庇って倒れた時は本当に心配しまあした。」

「ケイティ。大丈夫だよ。それよりここは？保健室？」

「そうだよ。あなたにとっては保健室というよりも、帰って来る前に立ち寄る門出の場所かも知れないけどね。」

「毎回お世話になります。雪先生、ケイティがいるから難しい言葉を使おうとしてますが、使い方間違ってますよ。」

「う、うるさいわね。それだけ元気ならもう心配なさそうね。さっさと教室に帰りなさいよ。」

「「はあい。」」

秋と秋を心配して保健室に集まっていたメンバーは雪先生に促されて教室へと戻って行く。

「ゆっこちゃんも、あんなにせつつかなくてもいいのにね。」

「そうだね。保健室だってそんなに忙しいわけでもないし、ゆっく

り話して行きたかったよ。」

和美の言葉に明実が同調する。女の子たちはみんな保健室の先生とかなり親密に話しており、仲が良いのだ。

「仕方がないよ。ボクが雪先生の弱点を知ってるからね。それに、雪先生英語話せないみたいだし。」

「わたあしは、日本語話せまあす。そんなこと気にしなあい欲しかったでえす。」

「そうだね。それよりも、ゆっこちゃんの弱点ってなに？秋には教えて私たちには教えてくれないの？」

「教えてくれないんじゃないよ、ボクが勝手に気付いたただよ。ついでに、内緒にしてって言われてるから教えられないけどね。」

「クーちゃんその言い方は一番気になる言い方だよ。教えて欲しいなああ。」

明実はそう言って、秋の背後から抱きつくとき、お腹のあたりを撫でまわす。

「ちよま。明実やめて!!」

「そうそう。明実ちゃん。秋にそんなことしちゃダメでしょ。」

「和美が天使のように見える。」

「秋をいじめる時はちゃんとここを触ってあげなきゃ。あ、柔らかい」

「きゃ、いや・・・」

和美は背後から押さえている明実に、正面から加勢する。当然のごとく優花も右横から秋に飛びつくと、朝はいなかったケイティが秋の左から攻める。

「四面楚歌？」

「確かに朝よりもすごいことになってるけど、つーちゃんはさっき倒れたばかりなんだから止めなくていいのか？」

「坂本が止めるよ。俺にはできひんわ。」

「あなたたち、それでも蟹津さんと鈴木さんの彼氏ですか？」

「じゃあ、ミーちゃんがとめてや。俺にはこの空間に入っていく勇氣はあらへんからさ。」

「み、ミーちゃんと呼ばないでいただけるかしら？」

美香は反論すると、秋たちの方へと歩いて行き、胸を鷺掴みにしている和美の手をどけようとする。

「北条さんも触ってみる？マシユマロみたいだよ？」

「わ、私は以前触ったことがありますから、御心配なく。」

「え？北条さんもクーちゃんの胸を触ったことあるの？じゃあ、私も。」

「うちも」

「わたあしも。」

ケイティは自身もかなり大きな胸を持っているにもかかわらず、その場の雰囲気と話している。しかし、美香の行動と発言が完全な藪蛇になって秋を取り囲む四人の行動を助長させたことだけは間違いないだろう。

「な？言つたやろ？俺らにはどうしようもあらへんって。」

竜が美香にそう言つと

「竜、あ、あんた。ひゃ、助けなさいって。」

必死になって助けを求める秋がいた。

「じゃあないな。優花ちゃん。あんまりやり過ぎると一緒に絵描いてもらえへんぞ。明実ちゃんと和美ちゃんを止めたら許してもらえないかもしれへんな。」

「ツン先生の胸はうちのだから三人は触っちゃダメ！！」

「ええ？秋の胸はみんなのものだよ。」

「そつだそつだ。優花だけずるい。」

「ずるいでえす。」

抗議の声を上げた三人だが、その油断が秋を解放する。優花と三人が言いあっている間に、竜は秋を回収すると落ち着ける場所へと座らせる。

「た、助かったよ。ありがとう。」

「どういたしまして。和美ちゃんと優花ちゃんには拳骨でよかったんじゃない？」

「それすらできない状態だったの。よく分からないけど、すっごく感度が上がったかも。」

「じゃあ、ちょっと触っただけでもまずい？」

「竜ならたぶん大丈夫。あの四人と違って安心するから。」

「そ、そっか。」

「ちょっと。なに二人でいちゃいちゃしてるのよ。秋を一人占めなんて許さないんだから。」

竜に連れ出された秋に真っ先に気づいた和美はお門違いな言い分で竜に詰め寄る。

「ボクは誰のものでもない。ボクの体はボクのものだ。」

「そうよ。クーちゃんの体はクーちゃんのものよ。」

「明実、わかってるならあんなことしないでよ。」

「だって、クーちゃんが倒れて心配だったんだもの。」

つまり、明実も和美も優花も秋が倒れて心配になり、そこに秋が生きていることを確かめたくてあのような行動に出たのだという。

「なんや、中学校の時とはちゃうけど、これはこれで苦労しそつやな。」

竜の言葉に激しく同意して秋は一行を促して教室へと戻っていくのだった。

『ふむふむ。あのように反応すればみんなから人気がでるのね。』

「北条さん。つーちゃんを真似するのは悪いことじゃないけど、難しいとおもつよ?」

「ひ、人のメモを勝手に覗かないでくださる?」

教室に着くと、心配そうに見ているクラスメイト達がいた。

「た、ただいま?」

「クーちゃん、間違っただけじゃないけど何が違うよ。」

「心配をかけてごめんなさい。」

教室内の重たい雰囲気は秋が耐え切れ無かったようだ。

しかし、秋の元気そうな様子に次第に雰囲気が柔らかくなって行く。

「いつまでも入口に立っていないで、席に座りなさい。ケイティさんの分も男子が運び込んでくれたからそこに座って。」

「はい。」

担任に促されて席に着くと、普段から優等生の面々にとって、今更
必要の無い夏休みの過ごし方についての話が始まる。

いや、約一名程頭を抱えている人物がいた。

「優花、夏休みサボって成績下がったら、ボクが勉強対策で美術部
に行けないって解ってる？」

「ど、努力します。」

「明美にきっちり、監視してもらわないとね。」

「任せておいて、伊達に幼なじみしてないわ。優花が勉強しないでテレビを見そうな時間にメールすればいいんでしょ？」

「月曜の9時とかね。」

「ツン先生。あのドラマだけは見せて下さい。」

「解ったよ。月9のドラマ以外は我慢するみたいだから、それ以外にしてあげてね。」

「は？まさか、うち今、嵌められた？」

「優花、良い先生を持ったな。」

そんなこんなで、夏休みの登校日は、優花のテレビ時間というおとい犠牲を払って無事に終えたのだった。

チャプター58（後書き）

タイトル通りに、秋の髪の毛などを周囲から認めてもらう話にしようとしていたのですが、臨死体験をもらうことにしました。

テーマは「秋の体などの説明」です。

秋にクラスの前で、髪の毛の話をしてもらって認めてもらうか、鬼人たちに出てきてもらって体の構造について説明してもらうかで悩んで、結果として鬼人たちにできてもらいました。

これで合計臨死体験数9回となりました。全体の四分の一を消化して、臨死体験の時のシュチュエーションが大変だと感じているAKIです。

森君にもう少し頑張ってもらって不幸増加と思っていたのですが、森君意外と良い子になりそうだし・・・

課題は多いですが、これからがんばって執筆したいと思います。ここまでお付き合いくださってありがとうございます。

チャプター59

緑の妖精は甘えるのが嫌い？

夏休み中練習試合なども消化し、バスケット部の活動ばかりしていたボクが9月1日、二学期初めての登校をする。

「おはよう。」

「おはよう。クーちゃん。染めるの辞めたんだね。」

「うん。少しまだ毛先は黒いけど、半年もしたら全部緑になっちゃうよ。」

「緑のポニーテールをゆらゆらさせてるクーちゃんを見られるのね。」

「秋の髪の毛って生きてるみたいね。黒染めもそうだし、半年で緑になるの?」

「たぶんなるよ。だって、染めてたはずの場所が夏休み中に緑に変わって来たからね。」

「え？それって大丈夫なの？そんな簡単に色落ちしないやつ使った無かったかしら？」

「和美ちゃんはクーちゃんのことになると、詳しいわね。ひよっとしてストーカー??？」

「違うわよ。前に言っていたのを覚えてただけよ。」

和美がそんな細かいところまで覚えてるのってボクのことくらいじゃないっけ？まあ物覚えの悪い方ではないけどね。

「緑の髪になって竜くんはなんて言ってたの？」

「何にも言われなかったよ。第一、みんなと違っていきなり変わったんじゃないかって、毎日部活で顔を合わせていたからね。」

「でもキャプテンや河野先輩はつーちゃんの髪の毛見て綺麗だねって言ってたぞ。」

「先輩はプレイボーイだから良いの。」

川本部長はプレイボーイでも無いが、河野先輩が女の子の特徴を誉めることは日常茶飯事だから挨拶みたいなものだ。

心友達と話をしていると、森君が登校してきた。

「おはよう。ちょっと問題はあったけど、森君のおかげで髪の毛染めなくて良くなったよ。ありがとう。」

「え？あ、うん。」

「そんな緊張しないでよ。ボクはもう怒ってないよ。でも、これからはあんなことしないでよ？」

「わ、解ったよ。」

「こら、悪いことしたらちゃんと謝らないといけないんだぞ。」

ボクはそう言って、森君のおでこを人差し指でつつ突く。

「え？うん。ごめんね。」

「いいよ。」

真赤になりながら謝る森君を許してあげると、心友たちの視線が絡みつく。

「な、なんだよ？ボクが何かした？」

「ツン先生は甘いなあって。」

「それ以上に、そういう行動は誤解を招くから気をつけた方がいいわよ。」

「そうね。秋から優しくされたら、男の子なんて一発で惚れちゃうんだから、罪な女よね。」

「もう、ボクはそんな風に言われるのは嫌なんだからやめてよ。こっつ、殴りあったあとに、笑顔で握手して友情を確かめあうみたいな？あんな感じが好きなの。」

「つーちゃんは男の子みたいな友情の作り方をしたいんだね。」

「だって……」

それ以上はここでは何も言えない。高校に入ってから、前世の記憶についてなど、中学の時と同じように話していた。

しかし、投稿日の森君の事件で、どこに目があるのか分からないことが認識できたので、今後は安全な場所でしかその話題はしないことにしたのだ。

「まあ、そんなところも秋のいいところよ。私はそんな秋が好きよ。」

「あ、ありがとう。」

和美の好きには、どのような意味が込められているのか分からないので、素直に感謝できないところがあつたが、それでも和美から好きといわれることに違和感がなくなってきた。

ガラガラ

「おはようございます。皆様。」

「ミーちゃん、おはよう。」

「その呼び方ができるのも今日まででしてよ。今日と明日のテストで蟹津さん。あなたを完膚なきまでに叩きのめして差し上げてしまよ。」

「無理じゃないかしら？クーちゃんっていつも満点よね？同点以上は無いわよ？」

「そんなはずは無いわ。きつと、何問かは間違えるはずですよ。それに全統模試と違って範囲が狭いとはいえ、時間も限られている今回のテストで満点なんて滅多に取れるものではありませんわ。」

「じゃあさ、もしボクがミーちゃんに勝ったら一つお願いをきいてくれる？」

「私が負けることなど、絶対にありえせんわ。」

「すごい自信だね。それじゃあ、ボクが勝ったら、ミーちゃんの別荘に冬に遊びに行かせてよ。もちろんみんなも一緒に招待してね。」

「良いですわ。もし私が負けたらあなたとあなたの心友を私の別荘に招待して、パーティだろうと何だろうと開いてあげましてよ。」

「え？じゃあ、今からドレスを作らないとね。優花も一緒に作る？」

「え？ツン先生が手作りするの？うちも挑戦してみようかな。」

「ドレス作りはテストが終わってからにしないよ。北条さんが不機嫌オーラ出しまくってるよ。」

明実の言う通りで、ミーちゃんはボクが勝つ気であることに大変立腹のようだ。

「そうだね。でも、テスト終わったら部活が始まっちゃうから、デザインだけ今日の放課後一緒に考えちゃダメ？」

「今日は美術室も空いてるから、そこで描こう。部長にお願いしてうちが鍵を借りてくるからさ。」

「優花は美術関係になると止められないんだから、明日もテストがあるんだから、早めに切り上げるのよ。」

「大丈夫だって、明実のおかげで優花は宿題全部やってきたんでしょ？宿題の範囲からテストなんだから、それほど勉強必要ないって。」

「普段なら優花のために勉強をというボクだが、夏休み中に、自分の力で、一生懸命宿題を終わらせた優花にご褒美を兼ねて、今日の放課後は息抜きをさせてあげたいのだ。」

「クーちゃんはテストできるから良いかも知れないけど、優花は前日まで勉強した方がいいんじゃないかな？」

「一夜漬けで覚えた内容では、次のテストにつながるから、テストが終わった後にきちんとテスト直しをした方がずっといいはずだよ。夏休み明けのテストで満点を取るよりも、夏休み明けのテストで出たことをきちんと覚える方が大切だからね。」

「クーちゃんにそう言われたら、勝てないな。俺や上田も放課後体育館で自主トレしてるから、終わったら体育館に来てくれよ。一緒に帰ろうぜ。」

「うん。明実と和美はドレスのデザイン見においでよ。二人の希望とかも聞きたいからね。」

こうして、ボクらは午前中に休み明けのテストを受け、午後から美術室に集まることになった。ミーちゃんにも声をかけたのだが、自分の分は持っているということで、参加しないようだ。

というよりも、今日のテストが終わったら明日のテストの勉強をして是が非でもボクに勝ちたいといった様子だった。

「ツン先生。本当に勉強しなくて大丈夫？」

「大丈夫じゃないよ。もちろんきちんと勉強するのが一番いいことには変わりはないからね。だけど、今さら勉強するって言っても集中できないでしょ？」

「確かにそうかも。」

「集中して勉強しないと、頭には入らないからね。優花も、デザインを描き終えたら、勉強するんだぞ？」

「了解しました。」

「まずは午前中のテストだね。これで成績が落ちたら、流石に美術室に行くのを明実や和美に怒られちゃうから、午前中はテストに集中だね。」

テストは一学期の期末までの範囲の問題と宿題から出たので、優花もかなり納得のいく出来栄えだったらしく、ニコニコ顔で合流し、美術室へと向かった。

「あれ？今日は部活無いんじゃないかなかったんでしたっけ？」

「君たちが来ると聞いて私が参加しないわけがないだろ？静香と陽子も後で来ると言っていたよ。」

「なんだか、気を使わせてしまったみたいですね。花梨部長も何か作品を作っていきますか？」

「いや、今日は君の実力をこの目で見てみたいから、見学させてもらうよ。」

美術室に行くと、花梨部長が既に来ており、鍵を開けていつでも作品に取り掛かれるように準備をしておいてくれた。

「ツン先生の分のキャンバスや筆も用意しておいたから、ここ使ってね。」

「ボクは兼部だから、そんなの良いのに。優花が用意してたの？」

「だって、一緒に絵を描けるんだったら、きちんとしたのを用意したかったんだ。」

「優花のクーちゃん鼻肩は本当に異常なほどね。これだけ期待をかけたんだから、きちんとしたドレスを作らないと、納得してもらえないかもしれないわよ。」

「そんなことを言っても、冬までに4着も作るんだから、あまり凝ったデザインは無理だよ？」

「そんなこと言って、秋はいつつも素敵な作品を作るんだから良い

わよね。私にも何か才能があつたらいいのに。」

「そんなこと言わないの。クーちゃん早くデザイン作らないと、本当に明日のテスト勉強できなくなっちゃうわよ。」

明実に促されて、ボクはキャンバスへと向かう。筆も用意してくれてあつたが、今回は下書きの鉛筆のみで十分だった。

「手慣れてるわね。それに、前から構想を練っていたのかしら？」

「はい。自分の分と和美の分は既に構想ができていたんです。明実と優花の分だけ二人と相談しながら一から作るつもりです。」

ボクが何の迷いもなく鉛筆を動かしたことに花梨部長が反応した。

「ツン先生が描いているんだから、部長も邪魔しないで下さいよ。」

「今は大丈夫だよ。構想を練っている時と違って、作業だからね。この絵も芸術にしたいならあとで、もう一度描き直さなきゃだね。」

「それでも、上手ね。さつき描きだしたばかりだというのに、もう形ができてるじゃないの。」

「ボクは全体のイメージから描きだすからね。あとで細かいところも作業していくから、その時は、またこんなにしゃべっている余裕ないかも。」

そうは言うものの、既にどんなデザインにするのか決めてあったために、ボクの絵は30分ほどで出来上がった。

「どうかな？胸元がちょっと開き過ぎかもしれないけど、パーティ用のドレスならこれくらいしてもいいよね？」

「すごい。今にも飛び出してきそうなりアルな絵になったわ。」

「優花は言いすぎだよ。まだ下書きだから、陰とかも鉛筆で軽くつけただけじゃないか。これを布で表現した時に上手にできるかが大事でしょ？」

「でも、そこら辺も当然考えてあるんだろ？」

「花梨部長はボクのことを何でもお見通しなんですか？一応布の発

注先くらいまではすでに考えてありますけど・・・」

「そうか、君の弱点がやっとわかったよ。確かに君は絵も上手いし、おそろくこのデザインをそのままドレスにできることだろう。しかし、すべて自分でやるうと考えていないかい？」

「え？まあそうですね・・・」

「どんな布が欲しいのか言ってくれたら、私が注文してあげよう。糸やその他必要な器具なんかもありストアップしてくれたら私が手伝うことはできるだろう。しかし、君は全部自分でしようとしたね？」

河合花梨という人物を過小評価していたわけではないのだが、ここで以前までの評価を上方修正する必要があるだろう。絵を目の前で描いて、これからのプランを少し言っただけで、ボクの弱点ともいえる、人に頼ることが苦手なところを言い当てられてしまった。

「確かにそうよね。秋って何でもできちゃう代わりに、何でも自分でやっちゃうのよね。」

「そんなことないよ。ボクはみんなに頼り切って生きていると思うよ。」

「それでいいのよ。心友なんだからもつと頼りなさいよ。秋は頼ることが当然だなんて思わないでしょ？確かに頼ることになれて努力しない人間よりは良いけど、人を信じられないことにも繋がるのよ？」

「ご、ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんだよ。じゃあ、布だけはこだわりもあるしみんなで買いに行かない？注文するよりも間近で見決めての方が絶対いいと思うんだ。」

「そうだな。君のドレスは君自身で作ったら良いだろうけど、みんなのドレスは各自で協力しながら作った方が良いだろう。」

花梨部長は、一方的なプレゼントという形ではなくて、それぞれにできることを割り振って、みんなで作ったという事実を残すことを大切と思っているようだ。

今までプレゼントしてきた作品はすべてボクが一から作ったものが多かったので、こうして協力して作るのも楽しさそうだ。

「じゃあ、デザインは四人ともボクが担当しようかな？その代り、布を買って製作に入ったら、ボクは補助はしても自分たちで作るって言うのはどう？」

「うちはそれでいいよ。ツン先生オリジナルを着てみたかったって

気持ちはあるけど、それは水着の時に叶っているし、次はツン先生のデザインを自分で作ってみるってのもいいかも。」

「ちょっと、私お裁縫なんてしたことないわよ？明実だって秋に作ってもらった方がいいでしょ？」

「うん。私もそれほどできるわけじゃないけど、隣にクーちゃんがいってくれるなら自分で作ってみるのもいいかもしれない。」

「ええ？明実まで、仕方がない私も頑張るか。」

「和美だって、中学の時の家庭科実習の時お裁縫できていたじゃないの。」

「あれは、みんなの前で恥をかかないように家で猛特訓してきたんだから。得意なわけじゃないのよ。」

そんな話をしていたら、静香先輩と陽子先輩も部室へやってきた。

「今日は賑やかなね。私たちも仲間に入れてよ。」

「みんな来てる。うふふふ。」

静香先輩の発言はともかく、陽子先輩の発言に和美とボクは冷や汗を垂らす。

「前に言っていたモデルも今日します？」

「今日はやめておくわ。」

言葉すくな目だが、それでも、ボク達がやることがあってきていることを伝えてあったので、遠慮してくれたことが分かる。

「そのまま、意識しない状態の方が良い絵になりそうだし。」

そうでもなかったようだ。和美には陽子先輩の趣味を伝えてあり、三人だけの鑑賞ならばということに納得してもらっているので問題はないだろう。

先輩達が来ても、やることには大差無かった。ボクが三人の希望を交えながら、先ほどデザインした絵などを参考にデザインに起こしていく。

「私はもうちょっと控えめな方がいいわ。フリルなんかも少ない方

「がいいかも。」

「じゃあ、襟元だけ少しふわっと浮かせるのがいいかな？スリットは短めにデザインしておくね。」

明実のドレスのデザインを描き終えて、すべて終了した頃には、もう夕方になっていた。

「ツン先生。本当にこのデザインのドレスを作るの？」

「当然でしょ。デザインの他に注意書きなんかも作らないとね。ボクが作るわけじゃないから、どこがどうなっているのか分からないところもあるでしょ？」

正面からと後ろからのデザイン画だけでは表せられないような細かい部分もあるので、それらの裁縫の仕方は、一緒に作る時に一つずつ丁寧に教えて行くつもりだ。

「しかし、大木鈴の實力はたいしたものね。このデザインのドレスが本当に出来上がったなら、私だって欲しいわ。」

「花梨部長も作ってみたらどうですか？」

「こんなデザイン私じゃとてもじゃないけど作れないわ。ドレスが出来上がったら是非作品展も兼ねてモデルショーを開きましょう。」

「勘弁してくださいよ。ただでさえ、ここのところボクの認知度が上がってきてるんですから、もしやるなら、この美術室で、仲間うちだけにしてくださいね。」

「解った。じゃあ、冬までにこのドレスが完成するのを楽しみにしているよ。ところで、半年に一度は作品を提出するように展示会の人から依頼を受けているんじゃないのかい？」

「そっちの方はもう提出してきました。夏休み中にバスケット部の人たちをスケッチさせてもらって、それを全部油絵にしてみました。中々好評らしいですよ。10月くらいには全部の作品を小冊子にしていただけみたいなので、持ってきますね。」

夏休みに描いた絵は、展示会で大木鈴の名前で展示されているらしい。二年生の子たちに協力してもらって描いたので、8枚なのだが、どれも臨場感あふれる絵になった。

「良いのだが、人物画だと、この高校つてばれてしまうのではないかい？」

「大丈夫ですよ。横顔が描かれている人もいますが、基本は後ろからの絵が多いですし、絵のピントをすべてボールに合わせているので、ユニフォームも練習用のあえて違う種類のものにしてもらったので、どこの学校のかもわかりませんしね。」

「なるほどな。しかし、抜かりないと思っていたところに意外と穴があるものだ。気をつけるに越したことはない。小冊子が出来上がったらあまり人には見せずに、内々のものだけに留めておきなさい。」

花梨部長の鋭さは異常だが、同じ様に鋭く見抜く人物がいないとに限らないので、良い教訓かもしれない。自分の尺度で測ることが間違いだと感じて一般の人に合わせようと心掛けてきたことが、逆に間違った解釈になっていたのかもしれない。

確かにボクなら描かれている人物が見抜けるような絵もあった。

「解りました。協力してくれたバスケット部のこともありますし、心友の証を持った人以外には見せないようにします。」

「それがいいだろう。」

「それじゃあ、そろそろ竜や敦君も待っているし、帰ろうか。帰っ

たら優花も勉強するんだぞ？冬まで時間はあるんだから、ドレスのことで頭がいつぱいで勉強をおろそかにするんじゃないぞ？」

「え？あ、うん。分かってるわよ。」

「無理みたいね。今の優花はクーちゃんにデザインしてもらったドレスを着てダンスでも踊っているわ。」

「そんなことないわよ。うちだって勉強のこと少しは考えていたんだから。」

以前だったら間違いなく頭の隅に追いやられて考えもしない勉強のことを思うようになってくれただけでも成長と言えるのだろうか？翌日のテストに不安を残しながらも今日は解散となった。

チャプター59（後書き）

もう少し和美との絡みを作りたかったと後悔しているAKIです。今回のテーマは「次回への繋ぎ」です。

美香の家、ドレス作り、髪の毛を含む秋の不思議 e t c
次につながりそうな話をまとめてみました。二学期は陸上競技会や文化祭があるんですが、それだけでは何となく心もとないので、このような話を挿入していきたいと思います。

ここまで読んでくださった読者の皆様に心からの感謝を送ります。本当にありがとうございます。

チャプター60

暴露まさかの大暴走

夏休み明けのテストも終わり、平和な日常生活が送られる中、秋たちのクラスは陸上競技会の話でもちきりになった。

T高の二学期は陸上競技会を10月の初めにし中間テスト、11月の末に文化祭、文化祭終了後期末テストとかなり忙しい。

「今年は優勝できるかな？」

「あなたが私の足を引っ張らなければ優勝できるに決まっていますわ。」

「ミーちゃん。陸上競技会はチーム戦なんだから、いくらボクやミーちゃんが頑張ってもダメなの。」

「そ、そんなことわ解っていますわ。でも、ポイントの高い競技に私たちが出来ることは可能ですよ？」

「そうだね。じゃありレーをボクらでやるつか。一番得点高いし、これに勝てれば、優勝は無理でも、三位以内は確定したようなものだしね。」

「男子の方はどうなってますの？」

「敦がりレーでるみたいだよ。うちのクラスは部活してる子が多いから有利だよな。」

確かにボクらのクラスは部活に入っている子が多い。というのも、T高で一番頭のいい子たちを集めたのがボクのクラスと隣の竜のクラスなのだが、文武両道といったところか、この二つのクラスは部活への加入率がかなり高い。

「ライバルは当然上級生と隣だね。とれる所は全部ポイント取っちゃおう。」

「そうね。じゃあ、秋は走り高跳びもお願いね。優花ちゃんは走り幅跳びね。北条さんは砲丸投げかな？」

「ちょっと待ちなさい。トラック競技とフィールド競技を兼ねるのはもちろん構わないですわ。しかし、私が砲丸投げというのはおかしくなってますか？」

「ミーちゃん得意なのある?」

「私は走り高跳びを希望しますわ。」

明らかにボクと一緒にの競技に出て競いたいといった様子がありありと浮かんでいるのだが、ボクはこっそり耳打ちする。

(ボクの記録世界新超えてるけどいける?優勝したらそこでとめちやうつもりだったから別にどっちでもいいけど。)

「な・・・わ、わかりましたわ。でも砲丸は苦手ですので、交代したださるかしら?」

「良いよ。ミーちゃんは背が高いから走り高跳び得意そうだもんね。」

「鈴木さんの方が高いですわ。でも、砲丸よりは良い結果を出せると思いますわ。」

こうして出る種目が決まると、体育の時間を使ってみんなで練習をしていく。ボクはバトン渡しの練習以外は、他の子の手伝いをして

「蟹津さんあなたやる気があって？リレーの順番が三番というのも納得いかないわ。」

「アンカーはミーちゃんに任せるよ。優花と和美がトップで渡してくれると助かるんだけどなあ。」

「私が全員抜き去ってご覧にいれるから、そんな心配はよろしくてよ。」

「なんだか最近ミーちゃんの扱い方が分かってきたかもしれない。ボクが不安そうにすると、あんな風に尊大な態度で励ましてくれてるんだね。でも、ボクが心配しているのは、下手に早い人を抜いちやうって足が速いことを、気づかれなければ良いのについて意味なんだよ。」

「それよりミーちゃん飛んだ後に足をあげるタイミングがちょっと遅かったよ。あと、助走で力を入れ過ぎているから、もう少しリラックスした方がいいよ。」

「解りましたわ。次こそはあなたの記録を超えて見せましてよ。」

「ボクの記録超えるって、オリンピック選手にでもなりたいの？」

「そ、そんなわけないでしょ。物の弾みですわ。ところで具体的に足の速さなど聞いてませんでしたわね。どれくらい速いんですの？」

「そうだね。一度みんなに隠れて測ってみたら、男の子と同じくらいの記録が出たよ。女の子では負けたことはないね。」

「そうですよ。それなら十分に速いですわね。」

まあ男の子ってオリンピック選手級と比べてるんだけどね。このこととは言わない方がいいかな？」

「まああれだよ。日本にはボクに勝てる子は今のところいないかな。でも、体質のことがあるから、内緒だけだね。」

「そうでしたわね。だからリレーも二番を走るんですしたわね。砲丸も優勝しない方がいいのでは？」

「大丈夫。女子の部門で優勝したくらいではそんなに注目されないよ。柔道の時もそうだったけど、男の子に勝っちゃうと、どうしても注目を浴びるみたいだから、それだけは注意してるんだよ。」

ミーちゃんってこうして二人で話していると結構いい子だよな。みんながいる時にはどうしてもプライドが優先しちゃってるみたいだけどね。

「じゃあ、ボクは今度は優花の走り幅跳び見てくるね。男子は問題ないみたいだけど、女子はボクらがポイント取らないとダメみたいだからさ。」

「ええ、いつてらっしゃい。」

『悔しいけど、蟹津さんがアドバイスをしだしてから、10センチも高く飛べるようになってしまったわ。彼女の实力は認めないといけないみたいね。』

陸上競技大会まで、ボクはこんな風に、選手の子たちのサポートをしていた。

そんなとき、陸上競技大会も来週と迫った時に、優花から一つの依頼がきた。

「ツン先生。お願いがあるんだけどいいかな？」

「どうしたの？」

「陽子先輩が、どうしても絵のモデルをして欲しいって言うんだけど、ツン先生に聞いたら分かるっていつてただけど、良いかな？」

「ああ、あの話ね。そう言えば、夏休み中に行く予定がいけなかったから、確認取ってみるね。」

ボクは、和美にメールを入れると、和美からも、元々了承を得ていたので、明後日の放課後に行くことになった。

「「お邪魔します。」」

「いらつしゃい。」

「あれ？陽子先輩一人じゃないんですね。」

陽子先輩からは、みんなに内緒にと言われていたのだが、どうやって知ったのか、花梨先輩も美術室に来ていた。

「私がこんな面白い話を逃すと思う？それよりも、もう一人は明実ちゃんって子じゃなかったの？」

「え？」

ボクと和美が顔を合わせて驚いていると、陽子先輩もコクリと頷いた。

「えっと、中学から同じなんで……ごめんなさい。みんなには内緒にしてもらえますか？」

ここまで来て誤魔化すことが不可能と悟ったボクはとりあえず、これ以上の拡大を抑えることにした。

「それは、構わないと言いたいのだが、実はもう既に明実ちゃんを呼んであったり。」

ガラガラ

「失礼します。」

「……」

このタイミングの良さにはボクも和美も頭を抱えるしかなかった。陽子先輩にモデルを頼まれたこと、そして、それを受け入れたことが思わぬところで、今までずっと隠しておしてきた秘密をばらす結果となってしまった。

「と、とりあえず。みんな座りなさい。私としても、事情が呑み込めなくて困っている。」

花梨部長に促されて、ボクらは椅子に座ると、落ち着いて話をすることになった。

「じゃあ、陽子先輩が描きたかったのは、ボクと明実の絵でいいんですか？」

「うん。」

「私は、それじゃあ、帰ってもいいかしら？」

「いや、ここまで来たんだ、隠すのではなく、きちんと事情を説明してから帰って欲しい。」

花梨先輩が和美を引き留める。その目には、説明をしなければ帰さないという意味が読み取れた。

「そうね。出来るだけ隠したかったけど、秋が認めた人たちだもの、きちんと説明しても問題はないわ。」

いや、たぶん問題あるな。というか、明実にだけは教えない方がいいような気がすつごくする。明実の性格を考えたら、ここはどうにか明実にだけは誤魔化したいかもしれない。

「私は、秋のことが好きよ。それは、友情じゃなくて恋愛関係で好きだったわ。でも、中学の時にフラれて今は心友として大切に思っているわ。」

引き止める隙も無く言っちゃったよ。どうしよう。花梨先輩は陽子

先輩は納得したといった顔をして、頷いているが、そう思わない子が一人いた。

「そんな・・・」

「それなら、今日は陽子のモデルは和美ちゃんと秋ちゃんにお願いしたらどうだい？陽子もそれでいいだろ？今だけは恋人の様に接してもらえたら、君も本当の意味で諦めがつくんじゃないか？」

「ええ、私の思い出に残る一枚にしてください。」

花梨先輩は、和美をフォローしたが、今一番にフォローしないとイケないのは明実だ。

ガタッ

「待つて、最後まで話を聞いて。」

ガラガラ

ピシャンー！！

明実は、ボクの声が聞こえていたはずだが、耳をふさいで走り去ってしまった。

「ごめんなさい。ちょっと、明実のことを追いかけます。きっとまたモデルはするんで許してください。」

ボクは陽子先輩に頭を下げると、明実を追いかけて走りだす。明実は運動は得意な方でもないのに、すぐに追いついた。

「こんな場所に来ちゃって、先生に見つかったら怒られちゃうぞ。」

逃げ出した明実が向かったのは、美術室から近い学校の屋上だった。本来は鍵がかかっているはずのだが、今日はモデルをするために花梨部長か誰かが空けておいたのだろう。

「許可は取ってあるから問題ないもん。それよりも、さっきの話はどういうこと？」

「ここで話をするよりも、みんながいるところできちんと話をしない？」

「はぐらかさないで、つーちゃんから聞きたいの。海での会話も和

美ちゃんに関係あるんでしょ？」

「う……」

ボクは明実の言葉になんと応えていいのか返答に困る。

「私ね。海でつーちゃんが助けしてくれた時、本当にうれしかったの。でも、それがこんな形で裏切られるなんて思ってたなかった。」

「裏切ってたなんか無いよ。解った、ボクが話せる分は全部話すから、とりあえず落ち着いて。」

ボクは何とか落ち着かせようと試みるが、明実の怒りが、最高潮に達した時、事件は起こった。

ギシ！！

「きゃー！！」

明実が先ほどから寄りかかっているフェンスが何故か崩れ落ち、体重を乗せていたこともあり、フェンスと一緒に明実の体が落ちて行く。明実を刺激しないようにと距離を開けていたボクは助けようと

駆け寄るが、間に合いそうにない。

ガッコー！

ガシャン！ズドン！！

『相変わらず、無茶するわね。』

『あれ？霞さん。今日は未緒さんじゃないの？』

『私も、こちらに。』

『二人ともお久し振り。夏休み以来だね。』

『普通の人間は、こんなに頻繁に鬼人と会わないわよ。』

『それは面目ないかぎりです。ところで、明実は？』

『問題ありません。秋さんが落下の途中で、壁をキックしたことで、体を使ってクッションになったことでただ気絶しているだけで、怪我はたいしたことありません。』

『本当に、秋ちゃんは無茶するわね。そこまで高くないとはいえ、屋上からダイビングなんて普通怪我じゃ済まないわよ。』

『本当だね。これが美術室のある特別塔じゃなかったら、もっと高かっただろうしね。』

『さて、二人とも無事なのは理解してもらったから、本題へと入るわよ。』

『鬼人にあっている時点で無事じゃ……。どうぞ本題に入ってください。』

突っ込みを入れようとしたのだが、霞さんの目が、以上な輝きを見せたので、ボクは続きを促した。

『率直に言うわ。秋ちゃんが臨死体験をするのは、誰の責任でもなく、秋ちゃんが原因よ。』

『え？どういふこと？』

『前の臨死体験の時に、世界を操る魔法を使えるって言ったわね？』

秋ちゃんが望さえすれば叶わない夢はほとんどないとも言ったわね
『?』

『う、うん。』

『秋ちゃんは、人に恨まれた時に、自分なんて居なくなれば良いと思わなかった?それが臨死体験を起こしている一番の原因よ。』

『ええ?』

『つまり、心の片隅で、自分なんかって思った度合いが大きければ、臨死体験をして、小さければ、軽い病気や怪我なんかをするのよ。』

霞さんの言葉に驚愕する。つまり、今までボクが不幸体質だったのは、ボク自身が自分の不幸を願っていたからに他ならない。

『じゃ、じゃあ、ボクはどうしたらいいの?』

『自分を好きになればいいのよ。自分がこの世界で生きていて、価値がある人間だと気が着けば、臨死体験なんてしなくなるわ。それどころか、エンマ帳に記載されている寿命なんか軽く超えるくらい生きていられるはずよ。』

『でも・・・』

『そうよね。秋ちゃんの性格だもの。自分のせいで人が傷ついたり、悲しくらいなら自分がいなくなってしまうばって思っちゃうわよね。』

『霞様、そろそろお時間です。その話は次回に。』

『そうね。どっちにしろ、ここで話した内容は現世には持って帰れないんだもの、とにかく、今回はこのまま帰すけど、次回までに私の方でも対応策を考えておくわ。』

『はい。』

ボクは、霞さんに言われた内容を自分で深く考えながらも、どうしていいのか解らずに、頷くことしかできなかった。

「ただいま。」

「つーちゃん。えええん。良かった。ごめんね、ごめんね。」

ボクが目を覚ますと、そこは保健室のベッドで、側には泣きながら謝る明実と花梨部長、陽子先輩、和美がいた。

「どっつなっただの？」

泣きじゃくる明実ではなく、この中で一番落ち着いていそうな花梨先輩へと視線を向けると、微笑みながら答えてくれる。

「屋上から落ちて、二人とも気絶して保健室にかつぎ込まれた。明実ちゃんはずぐに目をさまして、私と和美ちゃんから事情を聞いて今泣いているということさ。」

「そうなんだ。和美ごめんね。隠してあげるって言ったのに、結局

バラす結果になっちゃって。」

「そんなことは良いわよ。それよりも、どこか痛いところはない？」

「とりあえず、手が痛いかな。明実、もう大丈夫だから離して。」

泣きながらギュッと手を握りしめている明実に優しく声をかけると、おずおずと離してくれた。

「明実、今まで隠してきたごめんね。でも、和美は本当に今は心友だから、嫌わないであげてね。」

明実小さくうなずくと、まだ泣きながらなので、ゆっくりと話します。

「私、ヒック。つーちゃんのこと、大切に守るってグスッ。約束したのに、つーちゃんは、ヒック、約束を守って、いただけなのに。」

「ううん。それでも、和美ときちんと相談して、明実たちには教えることもできたんだから、明実は悪くないよ。」

「そんなことない。誰にだって隠し事はあるんだ。君は罪をすべて

自分で背負いこもつとするが、良くないぞ。それぞれに今回は悪いところがあったんだ。みんな反省しようじゃないか。」

「はい。」

花梨部長の言葉にボクが返事をする、みんなも頷いてくれた。

「雪先生。そんなところで聞き耳を立てていないで、中に入ってきてもらえますか？」

「ごめんね。盗み聞きをするつもりじゃなかったんだけど、それでも、気になっちゃったから。」

カーテンの後ろですつと話を聞いていた雪先生が中に入ってくる。

「先生に聞きたいのですが、目撃者は何名ほどいますか？ボクはこの事件で有名になるのは嫌なんです。」

「たぶん、あなたたち以外いないわ。あなたの体もここにいる河合さんが運んでくれたし、川瀬さんは斉藤さんと長田さんが運ぼうとして気が付いたみたいだしね。」

「それは良かったです。では、このことは先生も誰にも言わないでください。」

「そうはいかないわよ。病院にもいかないといけないし、そうなら、学校としても隠しておくのは不可能よ。」

ボクは寝かせてもらっていたベッドから立ち上がると、笑顔で病院に行くことを断る。

「病院にはボクが自分で行きます。学校としても、放課後のことだったので、知らなかったと雪先生が言えば問題ないのではないですよっか?」

「本当に屋上から落ちたの?」

「屋上のフェンスが崩れ落ちて、その側にいたので保健室に来ただけです。そうみんなには説明しておいてください。」

実際に屋上から飛び降りているし、フェンスも崩れ落ちてしまっているんで、何もなかったことにすることは難しいが、目撃者がいないのであれば、逆にフェンスを原因にして、上手く言い逃れをすることができると思った。

「良いだろう。君たちはまだ書類上は美術部に所属していないから、私たちは屋上で模写をしていたらフェンスが崩れ落ち、落ちた先にいた君たちを発見して駆け寄ったことにしよう。」

花梨部長からも、同意を得た。あとは雪先生が承諾してくれたら、この事件は解決する。

「仕方がないわね。でも、体を少し見せてもらおうよ。流石に何もなかったら保険医としてというよりも、私個人として後悔が残るわ。」

雪先生も許可してくれたので、ボクは先ほどのベッドに腰掛けると、雪先生に体を調べてもらう。全身の打撲は以前から飛躍的に上がっている回復力のおかげで、ほぼ完治しており、見た目も擦り傷程度しか残っていない。

「うーん。これだと、上から落ちてきたものに驚いて転んだ程度にしか私も診断できないわ。これだったら、事情を聞いていなかったら、本当に騙されていたかもしれないわね。」

「なに言ってるんですか、本当に屋上から物が落ちて来たので転んだだけですよ。」

冗談めかしてボクがそう言うと、雪先生は納得したのか頷くと、治

療を終える。

「問題ないわ。これだったら、すぐに治るわ。フェンスは職員室に
いって修理してもらってから、あなたたちはもう帰っていいわよ。」

あまりにもあっさりと帰る許可が出たのを不思議に思いながらも、
ボクらは一旦荷物を置いてある美術室へと帰る。

チャプター60（後書き）

もう、秋死にすぎ・・・

今回のテーマは、和美と秋の秘密暴露です。

和美の事情をバラす時に秋に臨死体験をしてもらうことは前々から考えていたのですが、いつだそうと考えている時に、スランプになつてしまったので、もう出してしまいました。陽子先輩や明実には良い感じで演出をお願いしました。

明実にはまだ活躍してもらう予定です。というか、秋にはもう少し不幸になつてもらわないと、45歳までに臨死体験の数が足りません（汗）

さてさて、裏設定ばかり面白いものが出てきて、今回も実はといった内容がたくさん盛り込まれていましたが、そこら辺も頑張ってみなさんに伝えるべく、次話からも一生懸命執筆をつづけたと思います。

ここまで読んでくださって本当にありがとうございました。

花梨部長

「今日はご迷惑ばかりかけて本当に申し訳ありませんでした。」

「君はそうやっていつも、自分ばかり謝る。滅多に体験できない経験をさせてもらったんだ。それほど気にすることはない。それよりも、体の方は本当にもう大丈夫なのかい？」

「はい。もう痛みも残っていませんし、ほら。」

ボクは先ほど肘に貼られたばかりの絆創膏をはがす。そうすると、既に傷が小さくなっており、先ほどまでであった事故の面影はなくなっていた。

「うん。君には本当に驚かされてばかりだ。陸上競技大会が終わったら、正式に君と川瀬明実さんを美術部の部員として登録しておくから、何かあったらここに来なさい。」

「え？私も美術部に入るんですか？」

「優花から以前から頼まれていたのだが、機会がなくて伝え忘れていたね。永田さんも入るかい？といっても、活動をしろと言っているわけではなく、君たちが訪れやすいようにといった配慮だからどちらでもいいんだがね。」

「じゃあ、私もお願いします。その代り、やっぱり秋の名前を入れるのは待ってくれませんか？名簿に載ってしまつと、秋の追っかけなんかを押し寄せる可能性があるかと思つんです。」

「なるほど、ここを隠れ家にしたと言つていたね。なら、心友たちを人質に取る代わりに、名簿に載せるのはあきらめよう。」

「悪い魔女にとらわれたお姫様を秋が救うんですね。」

「おいおい、私は悪い魔女ではないさ。まあ、君たちがここに集まつてくれたら、きつと足しげく通つてくれることだろう。」

「花梨部長には負けます。じゃあ、ボクは和美と明実と優花という人質を救うために、これからここに来させてもらいますね。」

みんなの冗談に合わせてボクもそう言つと、お互い笑いあい、荷物をまとめだす。

「陽子先輩。今日は無理でしたが、今度絶対にモデルするんで許してください。」

「うん。明実ちゃんと和美ちゃんもモデルになってくれる？」

「「は、はい。」」

明実と和美は顔を引きつらせながらも、今回色々と迷惑をかけたこともあって、了承する。

「ところで、少し気になったことがあるんですが、質問させてください。」

「何だい？私たちが答えられることでよければ応えるけど？」

花梨部長はさわやかに微笑むと、ボクの方を見る。

「花梨部長はどうやってボクを保健室に運んだんですか？屋上から落ちるのを見て駆け付けたにしても、女の子一人でボクのことを抱えられるとは思えないんです。」

「ふふ、乙女にはたくさん秘密があるものだよ。」

「答えになってませんよ。」

ボクはそう言って、陽子先輩の方を向く。

「先輩は現場にいたし、答えてくれますよね？」

「えっと、二人が落ちて、えっと・・・」

陽子先輩は自分の趣味のこととなると雄弁に語りだすにもかかわらず、こつした話題を語るには少し役者が違うようだ。

「和美、きちんと説明してくれる？」

「私もそうしたいんだけど、どうすることもできないわ。屋上の入口であなたが落ちたのを確認した私と斉藤先輩が駆けつけた時にはすでに、河合先輩が秋を運び去った後だったんだもの。」

「え？三人一緒にいたわけじゃないの？」

「途中まではそうだったんだけど、で、私が二人に説明をしている途中で花梨先輩が駆け出して、私たちはそれで屋上に何かあったと思って、崩れ落ちたフェンスから下を覗いたのよ。」

なるほど、花梨先輩は状態を確認する前に下に走りだし、和美と陽子先輩は屋上から一度確認しに行ったため、同じタイミングで駆けつけていないというわけね。

「まあそう言うわけだ。私は君たち二人の状態を見て、君の方が重体だと感じたから、君だけを担いで保健室へと駆け込んだというわけだよ。」

「解りました。今回は引き下がりますが、花梨部長はまだボクらに隠していることがありますよね？」

「そうだね。君が心から望めば、きっと答えは見えてくるだろう。」

花梨部長に言いくるめられた感がぬぐえないが、助けていただいた先輩の隠し事をここでこれ以上暴くのも悪いと感じ、引きさがる。

『相変わらず、勘は良いのに、そこで引き下がるのは君らしいね。』

「花梨部長、今ボクのことをお人よしとか思っていないませんでした？」

「被害妄想だよ。そんなに気にすることはないさ。」

花梨部長はそう言って、ニヤリとほほ笑むと、事故もあつて帰りが遅くなったボクらに帰るように促した。

帰り道、体育館にいる竜たちに連絡をいれ待つことになったボクらは、校門の前で話をする。

「明実ごめんね。よく考えたら、明実も一緒に落ちたんだから、病院行きたかったよね？」

「ううん。大丈夫よ。だって、クーちゃんが守ってくれたんでしょ

「？」

「それは、まあそんなんだけど、後でちゃんと病院に行った方がいいよ。」

「本当に大丈夫だって、私ね。クーちゃんを信じることにしたの。」

「え？信じるって？」

「私のせいで今回事故が起きちゃったでしょ？それでも、ためらうことなく救ってくれたクーちゃんを見て思ったの。和美ちゃんが好きになっちゃうのも無理ないなって。クーちゃんを男の子とか女の子とかじゃなくて好きになっちゃう理由がわかったのよ。」

明実はそう言って、ボクに微笑みかける。

カシャ！

明実とボクをシャッターの音と、フラッシュの光が照らす。

「陽……何してるんですか？花梨部長。」

「いや、陽子のためにとまって使い捨てカメラを持ってきていたのだが、使わなかったので今出したんだけど、二人の笑顔がとても素敵だったから記録に残しておこうかとおもってね。」

「まあ、別にかまわないですが、変な解釈をしないで下さいよ。」

「それについては、そこで鼻息を荒くしている陽子に言ってくれませんか？私は純粹にいい笑顔の写真を収めただけなんだから。」

「……」

「やっぱり今度きちんとモデルしてね。」

「りよ、了解しました。」

陽子先輩は承諾しなければ、今からでも美術室に連れ出そうといったオーラを出していたので、引きつりながらもボクは承諾すると、一人でうんうん頷きながら、何かをメモしていた。

「明実、秋はノーマルなんだから、そっちの世界に引き込まないの。」

「和美ちゃんにだけは言われたくないわ。私だって一応ノーマルよ。クーちゃんが特別なだけ。」

「まてまて、それじゃあボクが男女混合のハーレムでも作ろうとしているみたいじゃないか。」

「その時は私も入れてね。」

「和美は黙ってて!!」

こういう話題になると、元気になる和美を黙らせるが、今日は陽子先輩も和美を応援したいらしく、中々収集がつかなくなってしまった。

そんなこんなで、五人でおしゃべりしていると、バスケット部の人たちが校門へとやってくる。

「秋ちゃんをたぶらかしたのはやっぱりお前か。河合、お前は秋ちゃんに二度と近づくな。」

「あら？今回呼び出したのは陽子よ。それに、彼女たちは陸上競技大会後は美術部の部員でもあるんだから問題ないはずよ。」

「今はまだバスケット部のマネージャのみなんだから、許可は出さない。」

「じゃあ、来週からはこっちに呼んでもいいってことね。」

「う……」

練習が終わったあとこっそり先輩達に見つからないように敦君と二人で抜け出した竜だったが、河野先輩に見つかり、川本先輩も含めて四人でここに来たようだ。

「河野、いい加減にしないか、蟹津さんが困ってるじゃないか。確かにバスケット部としても手放すことはできないが、蟹津さんは俺たちの所有物じゃないんだから、束縛することはできないよ。」

「すみません。でも、できる限りバスケット部の方を優先するので許してください。」

「いやいや、蟹津さんが気にすることではないよ。もし、絵が描きたいというなら、前みたいに、俺たちを題材にしてくれてもいいから、できるだけこっちに参加してくれ。」

「はい。わかりました。」

「ふん。いつかバスケット部から引き抜いてあげるんだから。」

花梨部長と河野先輩は、バチバチと火花を散らさんばかりににらみあうと、そっぽを向いてしまった。仲がいいのか悪いのかよくわからない二人だ。

「きつと、仲がいいのよ。だって、同じ人のために言いあってるんだもの。」

「また声に出していた？高校になってから減ったと思ってたんだけどな。」

「そうね。でも、それだけ秋がリラックスしているって証拠じゃないかしら？中学の時も、心友の前でしか思っていることを声に出すことはなかったでしょ？」

「そっか、それだけ、ここにいる人たちにボクが甘えているってことなんだね。」

「せやな。やっと秋らしくなってきたんとちゃうか？」

竜と和美に頷くと、先ほどまで言いあっていた花梨先輩や河野先輩までがボクの方を見て目を点にしていた。

「君って、甘え上手なのか下手なのかわからないな。」

「秋ちゃんに信頼されて、俺たちもしつかりしないな。」

二人の言葉にボクがクスクスと笑いだすと、こらえきれなくなった竜と和美が笑いだし、釣られてみんなで大笑いしてしまった。

「本当に仲がいいんですね。」

「「そんなことない。」」

二人のセリフが被ったことにもう一度みんなで笑うと、今度は花梨部長と河野先輩も笑いだす。

「さあ、笑ってばかりいないで、そろそろ暗くなってしまつから、帰ろうよ。」

「そうですね。ボクと竜と和美は自転車なんで、角まで一緒に行きましょう。」

「俺も自転車通学にしようかな。秋ちゃんと一緒に通学してみたいぜ。」

「君で彼女を守りきれぬのかい？私こそ自転車で来ようかな。」

「ダメですよ。私だって、二人に誘われない時は遠慮してるんですから、ラブラブしながら通学してくるのを邪魔しちゃ悪いでしょ？」

「確かにそうかもしれないわね。でも、今度一緒に帰りましょう？私もクーちゃんのファンになったばかりだしね。」

「そ、そんな。普通に通学してますから、和美が朝も夕方も一緒じゃないのは、部活していないからでしょ？」

「じゃあ、今度からは、美術部で残っているから、夕方は一緒に帰ってもいいの？」

「別にボクは構わないけど、事故とか結構起こるけど平気？」

「平気よ。秋が助けしてくれるもの。」

「どあほう。そんなことなったら俺の身がもたへんわ。」

「冗談よ。最近通学中の事故が減ったんじゃないの？」

「そうだね。中学の時に竜と一緒に登校していた影響か、このところ大きな事故には巻き込まれなくなったね。」

そう言って、ボクが和美が夕方一緒に帰ることを許可すると、竜からジト目を送られた。

「大丈夫よ。私の方が学校から家に近いんだから、そのあとは二人つきりでしょ。」

「いや、そういうわけじゃ・・・」

竜の馬鹿、ボクまで恥ずかしいじゃないか。

「二人の顔が赤いのは夕日のせいだけじゃないでしょお。」

「そ、そんなことないもん。」

「はいはい。蟹津さんが困ってるから、そろそろ行くぞ？通学に関してはまだ今度はなしあってくれよ。」

川本先輩の提案によってボクらは帰宅するが、竜のせいで恥ずかしい思いをしたが、それ以上に、心の中になんだかほっとするものが残った。

そのあと、方向は違うが、自転車通学の優花・敦君と一緒に帰る竜・和美と自転車置き場に行くと、会話を楽しみながら自転車に乗って帰った。

チャプター61（後書き）

竜の登場少ない・・・

ここのところ竜の登場が少なくて、恋愛関係で秋のことをいじれなくなってしまうたAKIです。

今回のテーマは「花梨の秘密」です。

タイトルのまんま・・・。まあそんなことは気にしないでいきましょう。花梨部長の正体？役割？が解りましたら、こっそりメールをください。この時点で分かる人がいたら、尊敬いたします。

それでは、ここまで読んでくださってありがとうございますございました。

チャプター62

対決竜VS秋

陸上競技大会の当日がやってきた。秋と竜は同じクラスではない体育祭はこれが二度目となるが、前回中学校の時は司などが竜と張り合っていたこともあり、秋と竜が久しぶりのことだ。

「今日はお互い頑張ろうね。」

「せやな。どうせやったら何か賭けるか？」

「そうだね。ここのとこるこつやって競い合うこともなかったし、何か賭けようか。」

「自分のクラスが勝ったら、次の週末デートで、何でも言うことをきくってのは？」

「小学校の時に同じことをやったじゃん。」

その時は個人戦だったが、それでも、同じ様な内容になることが秋

には不服だったようだ。

「ええやん。正直良い罰ゲームが今おもいつかへんから、来週までに考えられるやん？」

「仕方がないな。」

秋はそう言っているが、自分も特に何も思いつかなかったようだ。学校に着くと、それぞれのクラスに入っていく二人だった。

「おはよう。」

秋が入っていくと、既にクラスのほとんどの生徒が揃っており、心友たちも準備万端と言った雰囲気だった。

「クーちゃん今日は絶対に優勝しようね。」

「明実が一番の戦力外なの解ってる？」

「うん。だから人事みたいに言えるんじゃないの。応援は任せておいて。」

「うちらの中で明実だけ唯一運動からつきしたもんね。和美だってテニス部で足だけは鍛えてるのに。」

「まあまあ、人には得手、不得手があるんだからしかたないさ。それより、今日は随分とゆっくり来たんだね。」

「バスケ部の朝練がないからって、竜がギリギリまで寝てたんだよ。」

「なるほどね。竜くんも気が効くじゃないの。朝早くお弁当を作っている秋を少しでも楽にさせようと、遅く出発したのね。」

「和美、それは言いすぎだよ。まあおかげでゆっくりお弁当は作れたけどね。」

イベント事の時にはいつもお弁当をみんなの分まで作る秋のために竜が気を効かせたのかは定かではないが、秋の荷物はお弁当で膨れ上がっていた。

「優花の分はもちろんないからね。」

「ええ？ツン先生のお弁当楽しみにしてきたのに。」

「冗談だよ。でも、優花も今回は頑張ってお弁当作ったんでしょ？」

「そうだけど、やっぱりツン先生の方が上手でしょ？」

「料理は愛情。ボクは毎日作ってるから上手なだけだよ。優花だつてきつと上手になるよ。今日はおかず交換してくれる？」

「うん。」

「なあ、俺と優花って付き合ってるよな？」

「何を今さら？」

「秋と優花ちゃんの方がなんだか恋人みたいって言いたいのね。」

和美の言葉に秋と優花が硬直する。

「最近こんな話題が多い気がするんだけど気のせいかな？」

「気のせいじゃないと思うわ。」

そんなこんなで、お弁当を腐らないように保冷剤を入れ、ロッカーにしまつと運動場に出ていく。

秋に、和美が耳打ちをした。

「あれで敦君も優花のこと好きなのよね。」

「そうだね。最近覚えたんだけど、あれも一種のツンデレなのかな？」

「そうかもしれないわね。普段は男の友情とか言いながらも、秋を相手に嫉妬してるんだもの。」

「嫉妬か、お弁当腐らなければいいけどなあ。」

「一口目は敦君に食べてもらえばいいんじゃない？」

「それって毒味？それは悪い気がするんだけど。」

「違うわよ。彼女の手作りお弁当を他の人が先に食べちゃ余計に嫉妬するでしょ？だから、一口目は敦君に食べてもらうのよ。」

「そうなんだ。竜なんていつも司たちに先に食べられていたから、気づかなかつたよ。」

「相変わらず恋愛に疎いわね。今度竜くんを”あなたのためだけに作ったの”なんていって、ハートのお弁当でも渡したら？」

「そ、そんな恥ずかしいことできるわけじゃないか。」

「あなたたちの関係が進展しないわけがわかったわ。竜くんが鈍感つての大きいけど、それ以上に秋が純過ぎるのよ。」

「いいの。ボクのお父さんは古風な人だから、そこら辺も昔風なの。」

「あら？昔は一二歳で成人よ？秋たちもそろそろ成人したら？」

「どれだけ昔の話なんだよ。とにかく、結婚するまでは、何もしないの。」

秋は真赤になりながらクラスの列に加わると、一学期とは違い仲が良くなったクラスメイトに招かれた。まだ学校全体に秋のことを守る雰囲気はないが、それでも暖かいクラスメイトに安堵するのだった。

「さあ、今日は絶対に優勝しましてよ。みなさん覚悟はよろしくて？」

「おう。」

学級委員長でクラスのまとめ役である美香が皆に激励を飛ばすと、良い返事が返ってくる。あまりスポーツに力を入れていないT高は、二年生以降は文理選択と成績でクラスを分けてしまっているため、一年生が一番優勝しやすいらしい。

そして、対抗できるクラスといえば、隣の竜たちのいるクラスとなるので、ここに勝つかどうか勝負の分かれ目になる。

陸上競技会は、トラック競技とフィールド競技が同時に進行するため、秋たちリレーに出るメンバーは午前中から予選に大忙しだ。

「フィールド競技の方はもう良くなったの？」

「うん。砲丸の予選は一定距離を一回なげたら終わりだからね。リレーがあるからって先に投げさせてもらった。ミーちゃんはリレーが終わってから高跳び？」

「ええ、私は逆に順番を飛ばしてもらって後から飛べるようにしてもらってきたわ。」

「うちはツン先生と一緒に飛んできたよ。とりあえず予選はクリアしたよ。」

「あなたたちの話を聞いていると、本当に私が何もできない子に思えてくるわ。」

「そんなことないよ。和美だって女の子で早い方だからってリレー

の選手になるくらいなんだから自信を持って良いよ。」

「足だけね。秋みたいになんでも優勝できる運動神経が欲しいわ。」

「うん。譲れるなら譲ってあげたいよ。」

こんな会話をしていたが、そろそろスタートの時間になったので各自散らばっていく。予選とはいえ、予戦のグループでも一番を取るとクラスの得点になるので、ここで手を抜くわけにはいかない。

「みんながんばってね。」

そんな四人をのんびりと送り出す明実、明実は1000M走で既に予選敗退しているので、これからものんびり応援だ。

「位置について用意……」パンツ!!!」

スタートの合図とともに優花が走りだす。一番外のコースを走っているのだが、予選ということもあり、その差は離れているように見える。

和美も引き離すことはできなかったが、1番で秋にバトンを渡すと、

秋は本人は軽く流すような走り、周囲から考えたら突き放される速度で走り美香へとつなく。

「ミーちゃんお疲れ様。予選は一番でバトンが渡ってきたし、見せ場がなかったね。」

「そうね。それじゃあ私は高跳びの予選に行ってきますわ。」

美香はリレーを力を抜いて走ることができたこともあり、丁度いい準備体操になって高跳びの会場へと向かった。

「優花と和美が頑張ってくれたから、ボクも楽だったよ。」

「私はそれほど速くはなかったわよ。それにしても、美術部なのに優花は速いわね。」

「元々アウトドア派だからね。それに美術部の先輩があんな人たちだから、良く外に描きに出かけるから、椅子に座りっぱなしってわけでもないのよ。」

陽子は人間観察に、静香と花梨は風景画にと、美術部の人間にはあり得ないほどの屋外での活動が多く、元々空手をしていた優花などはその雰囲気も悪くないらしい。

「次男子の予選だよ。竜たちと、被って無くて良かったね。」

「そうね。でも、あそこで手を振ってるのバスケット部の先輩じゃないかしら？」

「うん。あの人体力はないけど、リレーのアンカー選手になったんだね。絶対に目立ちたかったんだろっなあ。」

秋たちのクラスの男子はサッカー部とバスケット部が集まっており、負けることはないと思うが、二年生のクラスで河野たちが一緒に走ることが何だが不安だった。

「敦!!!負けるなよ。」

アンカーの敦にバトンが渡された時、河野と敦は並んでおり、優花も声を上げてしまうくらい応援にも力が入った。

「お疲れ様でした。先輩も惜しかったですね。」

結果から言うなら、敦の勝ちだ。しかし、決勝はタイムで進むので、おそらくもう一度河野たちのクラスと闘うことになるだろう。予選

の第二走者が走っている間に、秋たちはゴールの近くに寄ってきて、走り終わった敦と河野を激励する。

午前の予選が終わると、予選までの結果が張り出される。予想したとおり、秋たちのクラスと竜たちのクラスとさらに二年生の文系クラスが上位にいた。

「あそこで俺が坂本に負けなければ、俺たちのクラスが勝ってたのに。」

「日頃の練習不足がたたりましたね。午後も頑張ってください。」

「しかし、竜たちのクラスって意外と予選残ってるのリレーと少ししかないのね。」

「ああ、くじ運が良くて予選で一位だった子たちも、タイムで落とされたみたいだな。」

「なるほどね。じゃあ、午後からはボクらのクラスが有利ってわけだ。」

「解らないわよ。私たちが勝つかも知れないわ。」

「花梨部長のクラスこそ午後はダメなんじゃ？花梨部長と少しの子しか午後から勝てそうな種目がないですよ。」

「そうなのよね。リレーは一年生がいるし、フィールド種目は女子しか残らなかったから、あなたたちと完全に被っちゃってるのよね。」

「うちのミーちゃんはやればできる子なんで、花梨部長もつかうかしれられませんよ。」

花梨の出ている種目は100Mと高跳びなのだが、午前中とは違い、順位がつけられるフィールド競技は、今後差が出てくることだろう。さらに、リレーに関しては、女子は秋たちのクラスがタイムがダントツ高く、男子も結構接戦である。

タイムや予選通過者を確認し終えたそれぞれは、お昼ごはんを食べるべく、散らばっていく。

「いっぱい作ったからたくさん食べてね。」

「いただきます。」

ボクらはお弁当を囲んでいる。本来なら竜は自分のクラスで食べるべきなのだが、お弁当をボクが持っているので、こっちに呼んだ。

「上手そうやん。いただきます。」

竜はそう言つと、一番にから揚げを食べた。

「んまいー!」

「良かったよ。どうしたの？みんなも食べて良いんだよ?」

「いや、流石に彼氏より先に食べるのは悪いかと思って。」

明実まで、先ほどの和美と同じことを言っている。さらに明実の隣では、敦が優花の作ったお弁当の一口目を食べようとしていた。

「どうかな？今回は上手くいったと思うんだけど・・・」

「普通に上手いぞ。優花も料理上手になったな。」

「良かったね。今度からは優花も自信をもって料理を作って良いよ。」

ボクも一口もらってもいい？」

「うん。先生にレシピもらって作ったお弁当だし、食べて。」

優花にとって、勉強、絵、さらに料理まで秋に教わる先生という立場は違和感がないかもしれないが、周囲からは、怪訝な顔をされる。

「ねえ。その先生っていうのやめない？料理に関しては、もう十分ボクの指導がいらなくらい上手になっただしさ。」

「いやいや、それはないでしょ。秋の料理は私だって教わりたいくらい上手よ？」

「明実い。ボクを助けると思ってそこはフォローしてよ。先生って呼ばれ方はなんだか嫌なんだよ。」

「良いじゃないの。おかげで優花ちゃんという時は不幸知らずなんでしょ？それだけ、愛されて必要とされてるってことよ。」

「まあ確かにそうなんだけど、敦君はそれでいいの？」

「俺は別に、っていうか、今さらって感じがするしな。」

「そうね。結局私と優花が仲が良くって、一人占めなんてできなかつたものね。」

明実の発言に、敦と竜はお互いに顔を合わせると、深い深いため息をつくのだった。

「女の子を一人占めしようなんて考えが間違ってるんだよ。」

「いやそれはちやうやる。秋と優花ちゃんがあまりにも特殊過ぎるだけやって、鈴や麻美のこと思い出してみ？」

「う・・・確かにそうだけど、でも、鈴も麻美も心友でいることが多かったよ?」

「秋と比べてどうや?きちんと彼氏優先やったんとちやうか?」

「そんなことはない・・・ハズ・・・だ、だって、ボクだって竜を優先することはあるよ?」

「はいはい。そこでラブラブモードに入らないの。」

真赤になっている秋に和美が待ったをかける。

秋は秋なりに竜のことを大切に思っていたのだが、どうしても前世の記憶に引つ張られて、男友達的な対応をしてしまうことが多いことが、一番の原因だろう。

「もう、お弁当のことはいいから、午後からも頑張るわよ。」

誰もお弁当の話などしていなかったような気もするが、秋の強引な態度に、お弁当を片づけられては困ると食事を再開すると、午後からの競技についての話題に変更される。

「そっか、じゃあ、やっぱり竜たちのクラスとボクらのクラスが対決するんだね。」

「せやな。男子は悪いけど勝たせてもらうで、タイム見た感じ俺らのクラスの方が早いみたいやったからな。」

それもそうだろう。アンカーの竜以外はほぼ変わらないが、竜に関しては、100Mを11秒台程で走る。バスケをやめて陸上選手になっても、かなりの好成績を残せるかもしれない。

「あいかかわらず、つーちゃんに隠れて普段は気付かないけど、竜くんもお化けみたいな身体能力よね。」

「オバケ!！」

「どあほう。変な比喻を使うな。秋がおびえとるやないか。」

秋のお化け嫌いはもう病気のレベルに達しているかもしれない。和美のお化け発言により、竜に疑惑の目を向ける秋だった。

「せやけど、なんやおかしいねんな。秋と一緒に練習する度に身体能力が上がってる気がするし、秋と勉強するとわからなかった問題もすぐに解けるようになるんてな。」

「なるほどね。竜くんは、クーちゃんが見てる前だと自分の実力以上が引き出せるのね。愛の力ね。」

「ちよま、それは・・・」

実際は、確かに秋の前でがんばったことも大きかっただろうが、それ以上に何か不思議な力を感じていた竜だが、そのことにはまだ気づくことはできない。

「まあ、ボクの周りって確かに異常に成績が良かったり、運動神経が良い子が集まってたきがするのは確かだよな。」

「せやな。というよりも、秋の影響でどんどん周りの人間の基本能力が上がってるような気がするわな。」

「悪い方向に向かっているわけじゃないんだからいいじゃないの。そっか、ボクもみんなの役にたっているのかな？」

「役立つなんてレベルじゃないわよ。秋がいないと寂しいって人間なんて今じゃ両手じゃ数え切れないわよ。」

「和美、膝を撫でないでそれを言うてくれたらもつと説得力あるんだけどなあ……」

「えへへ。スキンシップよ。スキンシップ」

そんなスキンシップいらないとばかりに、竜の後ろに逃げる秋だったが、残念なことに、秋の周囲で起きている変化には誰も気付かなかった。

臨死体験を繰り返すことによって劇的な変化を遂げている秋だが、

それは自分一人のものではなかった。とくに、陸上競技大会では、実は秋のクラスの方が竜のクラスよりも運動が苦手な子が多かったにも関わらず、午前の結果では、みんな少しずつではあるが成長しており、結果として秋のクラスが少し優位に立っている。

「とりあえず、午後も負けへんからな。」

「俺だって、上田にはかり良い格好させておくわけにはいかないからな。」

敦と竜はお互いに火花を散らしているが、男子が負けても、女子が勝ち、フィールド競技で差がつくので、秋のクラスが負けることはもうないだろう。

午後の競技は午前よりもかなり過酷なものになった。というのも、リレーの決勝とフィールド競技の決勝が被っており、リレーを走る寸前までフィールド競技の待合にいる選手が多くなったのだ。

運動が苦手な子は一種目しか出ておらず、しかも予選で敗退しているため、応援席はのんびりとしているが、逆にトラックとトラックの中はかなり大慌てである。

「調子はどじい?」

「あなたは本当楽そうね。」

「だって、高跳びと違って、一回投げて記録を取ったら優勝決まっちゃったからね。」

「うちも、うちより遠くに飛んだ子がいなかったから、リレーが終わった後にベストの更新だけになったよ。」

「高跳びは、まだ150CMを飛び終わってたばかりですよ。まだ三名ほど残っているので、入賞は決まっても順位は出ておりませんわ。」

その三名のうちの一人が花梨部長であることは、遠くの方で見ている秋には理解できた。こうしてリレーの前にみんなが集まることのできたものの、中々打ち合わせもできないでいた。

「とりあえず、ミーちゃんが花梨先輩に勝ってくれたら、ボクらのクラスは優勝決定だから、がんばってね。」

予想以上に二年生の文系クラスは運動のできる子が集まっていたらしく、砲丸や幅跳びでも優勝こそ逃したものの、入賞者がいたことから、美香の優勝で突き放しておきたいのが現状である。もしこれで、リレーで敦たちが負けることがあれば、ひよっとしたら順位が

逆転するかもしれない。

「さて、メインの男子リレーの前に、女の子たちの戦いに行きますか？」

「私がアンカーを務めるのに、敗北などありえませんわ。」

「うん。期待してるよ。」

秋としては、リレーという団体競技のタイムなので、自分の実力も隠せることから、かなり伸び伸びと走ることができ、いざという時はアンカーの美香の責任に押し付けるつもりでいた。

「位置について、よい……」 パアンツ！！」

女子のリレーが始まると、予選とは違い、優花もそれほど引き離すことができずに、和美へとバトンをつなぎ、和美のところまで二位と三位の子との距離が近づいてしまった。

『ありゃ、こりやまずいな。ちょっと引き離しておかないと。』

秋としては少し引き離す程度のもりだったのだろう。だが、残念

なことに、秋の隣のレーンを走っていた子は竜のクラスの女の子で、以前体育館にもやってきた子だった。彼女は足の速さに自信があり予選ではアンカーを走っていたのだが、秋たちのクラスを見て三走者目を買って出た人物だ。

竜たちのクラスとの差は大きく開き、美香へとバトンが渡される。隣であり得ない速さに翻弄された竜のクラスの女の子は実力の半分も出せずに、さらにバトン渡してもたついてしまったため、竜たちのクラスは3位になってしまう。

「なんだか良く分からないけど、特したね。これで竜たちのクラスとの差が一気に離れたよ。」

「そうみたいね。うちの敵は二年生のおそこのクラスに絞られたかな？」

走り終わって少し休憩と四人と明実のもはやいつものメンバーで集まり、男子のリレーの決勝の様子をうかがう。アンカーを走るのは、竜、敦、河野とさらに川本部長の姿までであった。

午前時には確か200Mかなにかを走っていた川本が何故あの場にいるのかが分からないが、秋には嫌な予感がするのだった。

「位置について、よい……」パンツ！」

綺麗にスタートをする。フライングをした選手はおらず、どのクラスも一走者目ではあまり差がないように感じる。

第二走者になって、差がはっきりと見えだした。やはり部活などで足の速い子を四人集めきれ無かったクラスはあったようで、四人ほどが前に出て、他のクラスは少し置いて行かれる。

第二走者が第三走者にバトンを渡すとき事件は起こった。

「あ……」

応援していた秋たちは口を開けて驚く。なんとバトンを落としてしまい、なんと秋たちのクラスは最下位まで落ちてしまったのだ。

その後、敦の検討により、何とか最下位は免れたものの、得点圏内からは大きく外れ、竜・河野・川本の順にゴールに入って行った。

「敦!!!なにやってるのよ!!!」

「ちよま、俺は何も悪くないやん。」

「いや、リレーの負けは全部アンカーの責任だよ。ミーちゃんはきちんと一位でゴールしてくれたよ?」

「敦くん。もっと頑張らなきゃ。」

「そんなああ。」

そう言っつてうなだれる敦だったが、順位はもう変更されるはずもなく、竜や二年生のクラスに大きなアドバンテージをあたえることになった。

「やばいね。一位でなくても、入賞さえしてくれたら、何とか勝てると思っつてたけど、これだとミーちゃんが優勝しても二位かもしれない。」

それだけリレーの得点は高く、午前までの順位を考えると、竜たちのクラスには既に追い抜かれており、花梨達のクラスには美香次第と言っつた様子だ。

「私が負けるはずありませんことよ。」

美香は自信満々だが、花梨部長の能力は未知数だ。秋たちのクラス

が見つめる中、フィールド競技最後の高跳びが行われる。

「惜しかったな。せやけど約束は約束やで。」

「解ったよ。来週末は何でもいうこと聞いてあげるよ。」

結果は、美香は無事に高跳びで優勝した。ところが、高跳びでも三位に竜たちのクラスが入っており、その他も予選を通過した人数がかなりいたため、秋のクラスは竜たちのクラスに続いて二位となり、惜しくも優勝を逃した。

「でも、エッチなお願いとかはやめてね？」

上目遣いで竜にそう懇願する秋に、竜は頷く。竜はどんな罰ゲームを用意するのだろうか。

チャプター62（後書き）

たまには秋に負けてもらうのもいいかなと思いました。というよりも、団体戦でも少し秋の方が有利だったりするんですが、そればかりで秋崇拝者にとって信仰のレベルに達してしまいそうだったので、一旦ワンクッションを置きますね。

今回のテーマ「魔法使い」でお送りしました。

結果的に負けてはしまいましたが、秋の魔法の効果が少しずつ発揮されようとしております。おそらく前世では竜も他の心友たちもこれほどまでに能力の高い人物ではなかったかもしれませんが、秋が覚醒に近づくにつれ、どんどん周りも影響されていきます。

それでは、またのご機会に、ここまで読んでくださって本当にありがとうございました。

チャプター63

迷子のエマジエンシー

竜が提案してきたことは、普段二人きりでデートなどの機会がなかったこともあり、ボクと二人で出掛けることだった。

さらに、念には念をと、町中などに出てしまうと、どこでボクらの知り合いに出会うか分からず、さらにどんな不幸に巻き込まれるか分からないので、山登りに行くことになった。

「おはよう。約束通り、唐揚げの入ったお弁当作って来たわよ。」

「サンキュー。じゃあ、さっさと登って湧水の出るところでお弁当と行くか。」

「了解。ってその前に言うことは？」

「え？ん？。そんな恰好で山登り大変じゃないか？」

「いい。さっさと出発しよう。」

竜の馬鹿。二人っきりのデートって言われたから目一杯おしゃれしてきたのに、言うことはもっとあるだろ。確かに見慣れてるかもしれないけど、やっぱり誉めてもらいたいじゃん。

『やっぱり服装可愛いねくらいいわないかんかったかな？せやけど、秋の可愛さは異常すぎて注視できひんのやけど・・・』

「ほら、そんなにゆっくり歩いてると、お昼までに頂上につかないぞ。」

「そんな高くないやろ。ゆっくり歩いても二時間程度で着くやないか。」

「確かにそうだけど・・・」

普段学校に行くのと違い、わざわざデートのために二人っきりになっているというのが、恥ずかしい。特に今回は竜の方から望んで二人っきりになりたいといわれ、いつも以上に意識してしまう。

「せやけど、秋とこうして二人っきりでデートって久し振りやな。」

「そうだね。一学期の時以来じゃないかな？最近は優花や和美がいつもボクの側にいたからね。」

「せやな。優花ちゃんは勉強の方はもう心配あらへんの？この前の中間はどうやったん？」

「週明けに全部の教科が返ってこないとわからないけど、できていたみたいだよ。一学期と違って授業に追いついているから、対策プリントも完璧にこなせていたみたいだしね。」

「しかし、丁高って勉強に力いれとんのどうかわからへんよな。陸上競技会があったかと思ったら、中間やる？次の期末やかて、文化祭から二週間くらいしか間があらへんって言うしな。」

「二週間あれば、普段から真面目に勉強してる子には問題ないですよ。でも、中間はおかしいよね。むしろ陸上競技会を無視してるって気もしなくもないけどね。」

「なるほどな。丁高が部活に力入れてへんのは思ってたけど、陸上競技会まで力入れてへんかってんや。」

実際に三年生の子などは、競技そっちのけで、応援席で参考書を開いているような子までいた。準備期間も何もなく、これではただクラス対抗にただだけの記録取りだ。

「来年はミーちゃんが生徒会になっておもしろくしてくれるんを楽しみにしてこようぜ。」

「そうだね。陸上競技会を春にしてくれるようにお願いしておかないかきや。」

そんな風にしゃべりながらも、ボクらの足は普通に進んでいく。体力のある竜は当然のことだが、ボクも臨死体験のおかげで身体能力が上がっており、これくらいの登り坂は平気で登って行く。

「今回は勝たせてもらったけど、来年は一緒に戦えるとなええな。」

「そうだね。ボクもやっぱり竜と同じクラスがいいよ。」

「心友たちも同じクラスになりたいんとちゃう？」

「文理選択で別になるかもしれないよ。竜は理系に進みたいんだよ？」

「せやな。秋は合わせてくれるん？まあ理系のクラスは毎年一つやから、理系を取ったら一緒のクラスになるんは間違いないやろな。」

「高には、進学クラスと一般のクラスがある。ボクらはその中でも進学クラスに分類される。優花が何故進学クラスなのかは謎だが、今の成績なら問題ないだろう。」

そして進学クラスが3クラスある中で、二年生の文理選択をした時に、国立文系コースと私立文系コースと理系コースの3クラスに分かれることが多いので、自然に理系を選択すれば同じになる。

「まあ、私立文系コースを選択する子はいないから、直前までは文系って言うておこうかな。ボクが理系を選択することがばれて理系クラスが二つになっても嫌でしょ？」

「あんなあ。それって秋と同じクラスになりたいって奴が大量におるって言うとりょうなもんやで？」

「言ってるようなじゃなくてそう言ってるんだよ。優花や明実や和美の性格考えてみてよ。無理にでも理系を選択するでしょ？」

「うん。確かにそうかも、ん？ミーちゃんは？」

「ミーちゃんは元々理系じゃないかな？薬学部とか受けたみたいだしね。」

「そっか、せやったらミーちゃんも同じクラスやな。」

『これで、秋を守る人が増えて秋も嬉しいやろな。』

「そんなにミーちゃんと同じクラスが嬉しい？」

「そりゃ当然やろ。」

「知らない。」

ボクは竜に背を向けると、スタスタを歩き出し少し小走りに走った。竜がギリギリ追いつけないような速度で、さっさと頂上を目指す。

「おい、秋。待てって。」

「良いからほつといて。」

「ちやうって、話をきけや。」

「何のこと？別にもう話すことなんてないよ。」

「いや、俺はあるんやって。」

竜もしつこいな。でも、依怙地になってせつかくのデートが台無しになっても竜に悪いので、立ち止まり振り返る。

「なによ。聴いてあげるから、きちんと話しなさい。」

「はあはあ。」

相当早いスピードを出していたらしい。あの竜ですら息を切らすほど、夢中になって進んでいたようだ。

「まず、落ち着いて聞けよ。」

「良いわよ。最後まで聞いてあげるわ。」

「迷子になった。」

「えっ？」

竜の言葉にあたりを見渡すと、そこには道がなかった。こんな短距離を進んだだけで竜が息を切らすわけだ、ボクは軽々と進んできたが、竜は道なき道を掻き分け、木の間をすり抜けてやっと追いついたのだ。

「ごめん。ボクのせいだよ。本当にここがどこかわからない？」

「無理やな。秋を見失わへんようにすればっかりで道を覚える余裕みたいあらへんかったわ。」

「そんなあ。今来た道をとりあえず引き返してみる？」

「秋もしつとるやろ？ここは迷子になったら中々抜け出せへんの。」

今日は地元から近い山に来ているので、何度も登ったことはあったのだが、登山用の道を外れると、そこは整地されていない場所で、木なども雑木が多く、迷うことで有名な場所だった。

「どっしりよっつ？」

「このまま頂上に登って登山道に戻るか、下山するか二択やろな。」

「どっちがいいと思う？」

「どうせ体力ある二人なんやから、登らへん？ 雑木だらけで、秋の服装やと辛いかな？」

「服は大丈夫だよ。こう見えても、結構動きやすいし、自分で作った服だから、邪魔になるレースとかは取り外しが効くんだ。」

そう言つて、ボクはレースなどを外してカバンの中に入れておく。

「へえ。秋の手作りやつてんや。ほんまに可愛かったから、有名なデザイナーの服かとおもたわ。」

それを言うのが遅いよ。だった時に言ってくれたら、ミーちゃんのことでも過剰な反応だつてしなかったかもしれないのに。ダメだね。竜の責任にしたらいけない。

「ごめんな。俺のせいでこんなことなつて。」

「竜は悪くないよ。ボクが暴走して迷子になつたんだもん。」

「秋が走り出したんは俺のせいやる？あん時、俺はミーちゃんが一緒やったら秋が安全やから嬉しいって言ったつもりやってんけど、言葉が足りひんかったな。ごめんな。」

「ううん。」

ボクは真赤になってうつむき。少しだけ首を横に振る。ボクの盛大な勘違いによってこんな結果になってしまったこと、竜に一番に考えてもらえていたことすべてに恥ずかしくなった。

「またそうやって自分を責めるなって。俺は秋のナイトなんやる？お姫様を守るのが俺のしごとなんやから、秋はなんも悪くないんやで。」

「ありがとう。」

竜の言葉にほつとすると、なんだか、このままもう少し竜に甘えていたい気分になった。

「登る前にちょっと休憩していい。」

「せやな。秋も流石に疲れたか？」

「ちよつとね。」

ボクはカバンからレースの塊をどけると、奥にしまっていたビニールシートを取り出すと、二人で小さなビニールシートに腰かけた。

「ねえ知ってた？今日のデートを家族に話したら、武兄ちゃんから真美子さんに真美子さんから、司に連絡がいつて、あの四人も来たがってたんだよ。」

「なんでやねん。あいつらは俺らの邪魔をどれだけする気やねん。」

「邪魔って酷いな。司たちがいなかったらボクは竜の告白を無かったことにしてたかもしれなぞ？」

「せやつたな。他の奴らはともかく、司には感謝しないかな。」

「うーんそれも微妙かな。小学校の時にキスしたの覚えてる？」

「あのナメクジ事件の時やろ？あれから司たちに散々笑われて、忘れたくても忘れれへんっつもの。」

「記念すべきファーストキスなんだから、ちゃんと覚えておいてよ。」

「正確には二回目やけどな。」

「もう、それは良いの。それより、その時さ。実は付き合つのもありだったんだけど、司がいたから、心友でいよって言ったからね。あの時からかな。竜に惚れたのは。」

「せやっただんか。俺なんて初めて会ったときから、秋に惚れてたんだ。」

「初めてって、小学一年生だよ？どれだけマセガキだったんだよ。」

「ちやうちやう。今思えばあの時から、秋意外の女の子に興味無かった気がするってだけで、あの時はそんなん気づいてへんって。」

「へえ。小学一年生ってことは初恋だよな？」

「せやな。秋も初恋なんやろ？」

「違つよ。」

「え？」

「初恋はペコだもん。」

「嘘つけ、さつきキスした時って話してたやん。ペコが家に来たんはあのあとやろが。」

「えへへ。」

ボクと竜は狭いビニールシートの上で寄り添いあう。隣り合ったボクと竜は、自然と手を繋ぎ思い出話をする。少し休憩のつもりが、いつの間にか随分と時間が過ぎていた。

すると、竜のお腹がぎゅぐゅとなって、このままお弁当もここで食べてしまうことにした。

「本当は湧水と一緒につもりだったけど、お茶で我慢してね。」

「ええよ。ってか、湧水よりも秋のお弁当の方が俺にとっては大事

やしな。」

「おだてたってから揚げくらいしか出てこないぞ。」

「俺から揚げすきやもん。」

竜はそう言つと、いただきますの挨拶もそこそこから揚げを一口に入れる。

「んま。」

「今日は誰も取る人いないんだから、ゆっくり食べなよ。」

「そうしたいのは山々なんやけど、上手すぎて箸が止まりそうにあらへんわ。」

竜は狙つて言ってるんだろつか？そうじゃないんだろつな。本当においしそうにお弁当を食べる竜の様子にボクは笑顔になりながらおにぎりをパクリ。

「本当においしいね。たまにはこうして外で食べるのもいいね。」

「せやな。バスケット部の活動は体育館の中やから、こうして屋外に出るんはいいもんやわ。」

そんなことを言っているが、竜は夏休み中何度も近くの海に行っており、結構肌が黒い。逆にボクも一緒に行っていたはずなのだが、真っ白だ。海良の海は田舎なので人が少なく、心友達だけでのんびりと午後を過ごす良い場所だった。

「そろそろ行くか？」

「そうだね。ちょっとゆっくりし過ぎちゃったかな？」

「ええんちゃっつ？そこまで高い山でもあらへんし、今日中には帰ってこれるやろ。」

「うん。」

ボクって不謹慎かも、このままもつと二人でいたいなんて思ってる。こうして二人でのんびりできるのって中々無かったし、竜から言われたこととはいえ、ボクも望んでいたことかもしれない。

ゆっくりと進みだす。普段は照れて繋げない手も、誰もいない山の

中なら平気だ。

「とりあえず、電波もあらへんし、困ったな。遅くなりそうやあらへん？家の人ら心配するやる？」

「そうだね。山頂に着いたら、電話借りないといけないね。」

ボクらが上っている山は日本一というほど高くもないのだが、残念なことに元々田舎の環境もあってケータイの電波の届かない場所のようだ。

特に危険もないのでゆっくりすることは構わないのだが、家族への連絡だけは入れたい。

「ねね。さっきから同じところを回って無い？」

「俺もそんな気がしとったんで。しゃあない、小さい山とあなごらへんと、きちんと印をつけながらあるこか。」

「うん。」

竜は、ポケットから小さなナイフを取り出すと、目立ちそうな木に

印をつけて行く。

こんな印あつたらすぐに山を降りちゃえるじゃん。もう少しこのままでいいのにな。竜に言うのが早すぎたかな。

ボクと竜は印を付け終わると、進みだす。竜の背中は大きく、二人で迷っているにも関わらず、全く不安な気持ちにならなかった。

「竜、そんなに急がなくてもいいからね。電話さえかけたら、明日も休みなんだし、山頂の山小屋とかに泊まって行つたって両親も怒らないと思うんだ。」

「いやいや、男の子と二人きりなんて、親父さんは許さんのとちやうか?」

「お父さんはちょっと文句を言うかもしれないけど、竜だったら大丈夫だと思うよ。」

そうなのである。以前は流石に無かったのだが、いつ頃からか、お父さんも竜ならばと認めてくれるようになった。

その代り、節度ある付き合いをと念を押されているが、外泊しても竜と一緒に、麻美や鈴と一緒にならそれほどうるさく言わなくなった。

「大丈夫。竜と一緒になら、絶対に危険から守ってくれるでしょ？」

「しゃあないな。そんな風に言われたら、男として守らないかんやろ。」

一番の狼がボクに従順なら、怖いものなんてないもんね。

竜とある程度進みだした時に異変を感じた。印をつけたはずの木に何故か印が付いておらず、またグルグルと同じ場所を回っていることがわかったのだ。

あかんな。どう見てもこの木に印をつけたはずやねん。

「間違いないね。だって、少し進んだところに印があったのに、この木になかったもん。」

「ひょっとして誰かが俺らのあとつけとるんか？」

「無理だよ。監視されていたとしても、ナイフでつけた傷を消すなんて魔法みたいなこと、できるとは思えないしね。」

「せやな。秋も人の気配を感じひんのやろ？」

「全くね。というか、さつきから生き物の気配すらしないんだよね。まるで、二人つきりにするために、山事態が協力しているかのよう。に何にも周りにないよ。」

「ふうん。とにかく歩きづめで、ちと疲れたし、山小屋なんか見つけたいな。電話がつかなくて、できれば川の近くとかがベストなんやけどな。」

「確かにずっと歩きっぱなしだもんね。でも、さつきからグルグル同じところを回ってたらそんな場所行けるわけないよ。」

「よし、俺が前を歩くと、なんや山が外に出してくれへんっていうなら、秋が前をあるこ、秋がお願いしたら、それこそ山だって通してくれるかもしれへんやろ？」

「ちょっと、古い山だからって、まるでそれじゃあ人格があるみたいじゃないの。」

「さあなあ。人格があるかどうかは、わからへんけど、例えどんなものでも、秋のお願いオーラに勝てる奴みたいおらへんからな。」

「なんだよそれ。とにかく、ボクが前を歩いて、山小屋に連れて行ってくださいって念じたらいいの？」

「そそ、ってか、俺が疲れてへんかったら、おんぶしたつてもよかつてんけどな。」

「お、おんぶなんて・・・」

「人も見とらへんのやし、恥ずかしくはないやろ？ちょっとだけおんぶしたるか？」

「え・・・」

ボクは何故童がそんなことを言い出したのかわからない。

「いいよ。自分で歩く。」

「あかんな。今日一日は俺の言うこと聞く約束やろ？秋に拒否権はあらへん。」

「そんな。ずるいよ。って、大丈夫なの？疲れてるって言ってたじ

「やん。」

「せやな。じゃあ、山小屋じゃなくても休憩できそうな場所が見つかるまでな。川とかが見えたら、それに沿って歩けば頂上行けるんやしさ。」

「解ったよ。疲れたら言ってね。」

「了解。」

ボクは竜の言うがままに竜の背中へと乗る。誰も見ていないとは解っていても、ちょっとだけ恥ずかしく、早く山小屋が見つかることを祈る。

「お、あれって川とちゃう?」

「本当だ。川岸で少し休憩していいんか?」

「いや、川が見えたらなんや元気が出てきた。このまま登ってこか。」

「ええ?ちょっと、さっき休憩できる場所に出たら、休むって言っ

たじゃん。」

「せやな、山小屋みたいになって言うたな。秋は一日中歩いて疲れたやろ？ええから背中はやすんどり、たまにしかこんな機会あらへんのやからぞ。」

「もう、強引なんだから。」

そうはいつでも、ボクの顔を竜に見せることはできない。休憩をきっかけに、恥ずかしい状況から解放される気持ち半分ともう少しこうして竜に甘えていたい気持ち半分がある。

しばらく進むと、本格的に竜が疲れただしたことが背中にいて解る。

「竜、もう流石に無理じゃない？ボクは大丈夫だから、おろして？」

「いや、このままでええんやよ。秋が俺の背中に乗ってくれたら、俺らは山小屋に着くんやから。」

「なに言ってるんだよ。確かに偶然川は見つかったけど、山小屋まで同じ様に見つかるとは限らないじゃないか。」

「いや、俺の体力が限界近くになってきたんやから、そろそろ見え
てくるはずや。」

竜の言葉は意味が分からない。さっきから、無理ばかりしている
ような気がする。そして、そんな竜に甘えてしまった自分を許せな
くなってきた。

「あんな。確かに疲れたけどな。秋と一緒に山登れて嬉しいんやで、
山小屋見つけたら、目一杯奉仕せえよ。」

「う、うん。」

馬鹿竜。鈍感の癖に変なところだけ鋭いんだから・・・

竜の望みどおり、甘えていると、すぐに山小屋が見えてきた。ボク
は竜の背中から飛び降り、山小屋へと向かう。

「すみません。誰かいませんか？」

使われた様子の無い山小屋だった。ボクはそつとドアノブを回すと、
意外にも扉はすんなりと開き、ボクは中の様子をうかがう。

「埃っぽい。ずいぶんと使われてないのかな？でも一か月前には誰かがいたみたいだね。」

ボクは壁にかけられたカレンダーの日付を確認する。人が最近出入りした様子はないのだが、一か月前には誰かが中に入っていた。少し矛盾するような気もするが、そこはあまり気にせずに竜を呼ぶ。

「竜！誰もいないみたい。しばらくここで休憩しよう。」

「おう。もうすぐ夕方っていうのに、現在地もわからへんから、今日はこの小屋で泊まらせてもらおうか。」

「そうだね。ちょっと川で水を汲んでくるよ。」

「その前に、どんなものが小屋の中にあるか確認してくれへん？もし電話とかあったらラッキーやろ？」

「うん。竜はそこで座ってて。」

「あいよ。」

竜って本当にわかり易いんだから、ほら、ボクが後ろを向いた途端

動きだした。水を汲みにいくのはボクだと大変だろうなんて思ったんだらうね。ボクがそこまでひ弱じゃないこと知ってるくせに、昔から変わらないんだから。

ボクは少しクスリと笑うと、竜が水を汲んでくるまでにできる準備をしだす。とりあえず、電気なども通っており、幸い電話も使えた。今はまだ家族へは電話せずに、先に食糧などの確認をする。

保存食などもあったので、水さえあれば、特に困ることはほとんどないのだが、一つだけ問題があった。

小さな小屋と言うこともあって、すべてのものが一人分しかないのだ。器にしても、箸にしてもそこら辺のもので応用は効くので問題ないのだが、ベットが一つしかなく、布団も薄い毛布だけという状態だ。

「おかえり、竜。お水ありがとう、今から電話するから、竜も自宅にかけるでしょ？」

「おう。」

竜は一言しか言わなかったけど、見透かされていたことと、お礼を言われたことに照れているのが良く分かる。

こうしてボクらは、山小屋に一晚泊まることになった。

チャプター63（後書き）

この話、最後を書きあげたのは、本日投稿日なのですが、5千文字くらいまで出来上がっており、ラストのみ書きあげるのに苦労いたしました。

テーマは竜の気づきです。

竜が何に気づいたのかは読者の皆様ならわかりかと存じます。

さて、それとは別に、読者様からの感想を読んでのAKIの嬉しかったことと、驚いたことを述べさせていただきます。

まず、読者の皆様から、評価感想をいただく時は、本当にいつも嬉しい気持ちでいっぱいです。感謝しても感謝しきれません。感想などを書いていなくても、毎日のように見に来てくださっている読者様もいらつしやるみたいで、アクセス数が安定しているのもそのためかと思われます。本当にありがとうございます。

次に驚いたことです。読者の皆様にとって、すごくAKIの仕掛けたものに敏感な方が多数おられるご様子です。と、言いますのも、AKIが次にこんな話を書きたいと思った内容のリクエスト等が届くことが多くあるのです。そんな時、読者様と一緒に作っていているのだと実感すると共に、AKI自身も読者目線という初心の時の心が残っていたような気持ちになります。

このように、読者様からのメッセージ・評価で天にも昇るような気持ちになれる単純な作者ではありませんが、どうかこれからも再転の姫君をよろしく願います。

ここまでお目を通してくださいますと本当にありがとうございます。

チャプター64

二人の夜

あかん。絶対に今日はヤバイ。

俺は今、人生最大のピンチを迎えているかもしれない。

というのも・・・

「竜、あ〜んして。」

「・・・」

俺は何も言わずに口を開けると、そこに保存食と近くに生えていた山菜のみで作ったとは思えないほど美味しい料理が入れられる。

「どっつ？美味しい？」

「おっ。」

「もう、普段だったら、もっとちゃんと言ってくれるのに、今日はどうしたんだよ。」

「いや、それより、眠くならへんか？」

「まだ、夕日が落ちたばかりで、眠くなるわけじゃないじゃないか。それに、今日は月がきれいだよ。今から少し外に出ようか？」

「せやな。夜風に当たると良いつて言うもんな。」

「夜風が体に良いなんて、聞いたことないよ？でも、すっごく気持ちよさそうだし外に少し出ようか。」

「うん。そうしよう。」

「でも、ご飯は食べてからね。」

秋はそう言って、立ちあがろうとした俺の腕を引くと、座らせる。そして、先ほどと同じように、俺の横に座ると、箸をおかずと俺の口、時々自分の口とを往復させる。

「はぁ・・・何で「」になるかな。」

「電話するんはええねんけど、何で俺が水くみに行くのをまっとうたんや?」

「一応、竜と一緒にっていうのを証明しないとお母さんが心配するからね。」

「いやいや、お母さんは俺と一緒に安心するかもしれへんけど、お父

さんは逆の心配するんとちゃうんか？

「まあ、電話してみたらわかるよ。ちょっと電話の側に来て。」

プルルル、プルルル・・・ガチャ

「もしもし、お母さん？実はさ、ちょっととした問題が発生して、今日竜と泊まってくることになったんだ。それでさ、お父さんには上手に言っておいてくれないかな？

ん？竜の声？ちょっと待ってね。竜、代わって欲しいってさ。」

俺は秋から渡された受話器を取る。

「はい。代わりました。」

（あ、もしもし、竜くん？ついに決心したのね？）

「は？何がですか？」

（またまた、照れちゃって、家のことは心配ないから、ゆっくりし

てくるのよ。全てお母さんに任せておけばいいんだから。(

「え？あ、はい。」

(風邪には気をつけるのよ。きちんと服を着て寝るのよ。)

「了解しました。」

ガチャ・・・ツーツー・・・

「なんか、風邪をひかないように気をつけてって言われたんやけど・・・？服をきちんと着て寝ろってことは、悪いことしたらいかんってことやな。」

「はぁ・・・まあおかげで上手にいったから良いんだけど、相変わらずだね。」

「ん？何のことじゃ？」

「竜のお家にもボクが電話してあげるよ。竜がかけたら、無駄なことが起きそうだからね。」

「ん？まあようわからへんけど、秋からなら家の親も安心すると思
うで？」

秋の言いたいことはよくわからん。とりあえず、俺が水を汲んでい
る間に、いつの間にか取ってきた山菜を俺が汲んできた水の中に入
れられているものを眺め、秋と俺の親との電話を聞く。

「あ、もしもし、秋です。どうも御無沙汰してます。はい。実は、
山の中で迷子になって今日帰れそうにないんですよ。いえいえ、心
配いりませんよ。竜と一緒に山小屋を見つけて、そこから電話して
るんです。」

ええ？もう、お母さん、心配し過ぎですよ。竜のおかげで、何も起
きてませんよ。あ、はい。今から火を起こして食事を作るんです。
幸い山小屋にはある程度の荷物が置いてあつたんです。」

あははは、そんなことできませんよ。第一、それだったら一緒に下
山してますって。はい。はい。大丈夫ですのでご心配なく。また今
度お邪魔しますね。あ、はい。おやすみなさい。」

秋と親との電話はそれからしばらく続いたが、親の声が聞こえてい
ないはずなのに、そのおおよその内容は分かってしまった。

「はい。それでは、また。」

「あんなあ。どんだけ俺は親に信頼されてへんのや。」

「そんなことないよ。親は自分の子を心配するもんなんだからさ。」

「秋の家はどうなつとんねん。あつさりしとつたやないか。」

「家に電話した時は、お母さんに誤解してもらおうように態と濁したからだよ。遭難してるなんて言ったら、警察とか呼んじやいそうだったからね。それで、竜のお母さんにきちんと事情を言うておくことで、あとで安全な場所に着いてから、話をする事ができるってわけ。」

「そつか。ようわからへんけど、上手いこといったんやったらええわ。」

秋の話で時々こんな会話が出てくる。というのも、俺と違って、秋は他人を傷つけるのを極端に嫌がるため、こんな風にいるんな隠すことがある。そんな時、叱っていいのかわからないので、とにかく俺にだけは隠し事をするなと目で言うておく。

「ボクが竜に隠し事したことあった？」

ジーンと見る。ここで負けたら、この先も秋は俺のために何かを隠すだろう。

「解ったよ。竜にだけはきちんと言うようにするから、そんな目をするのはやめて。」

「絶対やな？」

「うん。」

秋がこんな風に頷く時は、約束を守る意思がある時だ。誰に似たのか、結構頑固なところがあるので、自分が絶対にしたくないことはどんなことがあっても首を縦に振らない秋だからこそその了解の仕方だ。

「ほんなら、さっさとご飯にして休むか。明日は山を降りやなあかんからな。」

「そうだね。調味料とかも、ちょっと期限ギリギリのもあったけど、あるから、美味しいご飯つくるね。」

「サンキユ。こうしてると、まるで新婚夫婦みたいやな。」

「バ、馬鹿。」

お？司いわく好きの馬鹿やな。照れとるんがよう分かるわ。真っ赤になっちゃって、新婚夫婦みたいっていうた・・・だけ？

俺まで真赤になってしまい、困惑するも、秋が備付のコンロに向かい料理を始めたことによりなんとか解決する。ガスなど通っているわけもなく、ボンベ式なのだが、どうやらきちんと火も着いたらしい。

「竜、疲れているところ悪いんだけど、薪になりそうな木を拾ってきてくれるかな？流石にボンベの中身もあんまりないから、その火鉢で火を起こした方がいいみたい。」

「せやな。料理が終わったらコンロは使わずにおいとこか。」

俺は、そう言って、外に出ると、適当に薪を拾う。秋になってこのところ雨も少なかったので、乾いた薪はすぐに集まった。

そして、山小屋に入っていくと、異変が起こっていた。

「竜う。さみしかったよお。」

「え???どないしたんや??」

帰ってくるなり、秋に抱きつかれて、ウルウルと目を潤ませて、甘えられた。

「料理ができても竜が帰ってこないから、心配だったんだよお。」

「料理ができてって、十分くらいしか外におらへんかったで?もうできたんか、早いな。」

「竜は料理のことしか興味が無いの?女の子が一人で山小屋にいたんだよ?心配とか思わないの?」

「そりゃ、心配はするけど、秋のこと信じとるからな。それより、ちよつと離れてくれへんか?薪をそこに置きたいねんけど・・・」

「そうだね。薪を置いてご飯にしよ。」

秋はそう言うと、配膳を済ませる。俺が薪を置いて、火鉢に火をつ

けよつとするのも待ってくれずに、小さな丸いテーブルの前に座ら
され、食事が始まる。

「上手そつやな。どうやって作ったんや？」

「山菜はアクが強いから、水で丁寧に洗って、少しお酒を入れて煮
たんだよ。どうかな？ やっぱりまだアクが強くて食べられないかな
？」

「いや、10分間煮ただけとは思えへんくらいうまいぞ。」

「良かった。一応味見してみたんだけど、お酒を少し入れ過ぎたみ
たいで、ちよつと失敗しちゃったかと思っただよ。」

なるほどね。つまり、急いで作ったため、アルコールが飛ぶ前に味
見をしてもたから、酔っ払ったってわけか。しかも、少量だったか
ら、意識とかもしっかりしとるんやな。

「御馳走様。やっぱり秋の手料理は何時くっても、どこでくっても美味しいわ。」

「ありがと。ずっと竜の為に作ってあげるね。」

「おう。」

え？俺、おうって言うてもたけど、これって軽く結婚する的な会話じゃね？まあいつか、夏合宿の時も秋はお酒に酔った後の記憶無くなつてたみたいやし、大丈夫やろ。

「ほな、ちよつと星でも見にいこか。」

「うん。でもちよつと待って、このままだと寒いから毛布もってい

「こ？」

「せやな。体冷やしてもあかんしな。」

夏が終わったばかりとは言え、やはり夜になると冷えるようになってきた。俺は火鉢に小さな火を起こすと、帰ってきた時にあったかのように火事にならない程度に火を小さくして秋と二人で外に出た。

「綺麗。月が出てるから星はあまり見えないかと思ってたけど、やっぱり山だと綺麗に見えるね。」

「せやな。季節もちょうど見やすい季節やしな。」

「このところ晴れてたもんね。」

しばらく、二人で星座などを探しながらしゃべっていると、秋の瞳が段々を重たくなっていく。高校に入って、前よりも寝るのが遅くなっていたとはいえ、陸上競技会、テスト、さらに今日は長い時間を山歩きしたせいか思った以上に疲れていたようだ。

「竜。ギョツとして。」

「こつか？」

毛布の上から秋を抱きしめると、最初はニヤケ顔だったが、なぜか不満顔に戻る。

「ボクばかり毛布にくるまってたら、竜が寒いでしょ？一緒に入ろうよ。」

「いや、秋は体が小さいからええけど、俺は身長あるからな。」

「じゃあ、こつすればいいんだよ。」

秋はそう言つと、俺の腕の中からスルリと抜けだすと、昼間と同じように俺の背中に乗ると、毛布で自分の体ごと包み込んでくれた。

「温かい。」

「でしょ？竜の体ちょっと冷たいぞ。でも、なんだか気持ちいい。」

秋はそう言ったかと思つと、毛布が落ちそうになる。

「おい、しっかり持ってへんと、落とすぞ？秋？」

秋は、俺の背中に顔をうずめるようにして寝てしまった。俺はそんな秋を起こさないように、山小屋へと戻ると、ベッドに寝かせ、火鉢の火をもう一度確認する。

「これだけ部屋があったかかったら風邪ひかへんよな？」

俺は独り言をつぶやくと、最後に秋の寝顔でも見ようと、ベッドに近付く。

さて、秋は寝とるんやから、これはあかんことや。

寝顔を見たのは間違いだったかもしれない。秋の幸せそうな寝顔を見たら、少しだけ触りたくなってしまった。

「ちょっとほっぺたつねったるくらいの悪戯、秋もおこらへんよな？」

そう自分に言い聞かせると、秋のほっぺをプニプニと触る。

「ん。優花、やめてえ。」

おいおい、そこは俺の名前だすところとちゃうんか？ってか、優花ちゃんも秋にこんなことしてたんかな？じゃあ、ほつぺた挟んだら誰なんやろ？

「やあ。和美しい。ボクに盾突こうとは言い度胸じゃないか。」

あ、これは俺も記憶にあるぞ？和美ちゃんが中学校の時に、秋のほつぺをはさんで何か言うつとったな。結局あれはなんやったんやろ？

おもしろくなって来たので、今度は鼻でもつまんでやろうと思った時に、秋が目を開けた。

「あ……」

俺は、全身硬直、手は鼻のすぐそばにあり、何かをしようとしていたことは一目瞭然。普段からこういうことに硬い秋に、怒られると覚悟を決めていると、俺のその手を秋が手に取った。

「竜の手だ、ちょっと冷たいぞ。ちゃんと布団の中に入らないと風邪をひくぞ。」

いや、ここには毛布それ一枚しかあらへんから。俺がそんな突っ込みを心の中でしていると、秋も寝ぼけたままそれに気づいたらしく、俺の手をひっぱった。

「ちよま。」

どうやって体がもっていかれたのか分からなかったが、俺の体はベツドの上であり、その俺の体の上に秋その上から毛布がかぶさっていた。

「秋、流石にこれは・・・」

「竜。好きだよ。絶対にボクのこと守るって約束してくれてあ。。。」

「寝よった。」

秋は言葉を最後まで発音できずに、寝てしまった。しかし、眼の前にあった口はそのあと、ありがとうと続いていただろうことを思わせる。

「こんな風に言われたら、襲うこともできひんやないか。」

そのあと俺は、秋を乗せたままいつの間にか寝てしまっていた。不思議と重たいとも思わなかった。

翌朝

「竜、いつまで寝てるの？そろそろ起きないと、山を降りれないよ。」

「ふあゝ。おはよう。いつの間に寝てたんやろ？」

「知らないよ。ボクも朝起きたら毛布の隅に竜がいてびっくりしたんだから、まあ毛布を自分ひとりで使っていたよりも良かったけ

どね。」

「毛布の端？」

「そうだよ。そ、そんなことよりも、朝ご飯作ったから食べて、昨日の晩と一緒に山菜しかないけどね。」

「え？昨日全部くっちゃったんじゃないか？」

「朝取ってきたんだよ。今日は時間もあつたから、少し果物なんかも見つけたから、それも後で食べよう。」

「ホンマか。秋は実りの秋っていうもんな。意外と食べるものあつたんやな。」

「秋・・・あんまりボクの名前と同じ季節を連呼しないでよ。」

「ん？どうしたんや？顔が赤いぞ？」

「何でもない。それより、早く食べないと、全部ボクが食べちゃうぞ？」

「解った解った。今食べるって。」

俺は秋が新しく汲んで来たらしい水で手を洗うと、小さなテーブルに座る。秋も一緒に座ろうとするが、テーブルが小さいし円卓なので、どこに来て俺の側か正面になってしまい、なぜか恥ずかしがり、結局正面に座って一緒にいただきますをした。

「んまい。相変わらず秋の料理は上手いな。」

「あ、ありがとう。」

「ほんま、ずっとくっついてたいわ。」

「馬鹿。」

「え？」

????良く分からないが、秋の様子がおかしい。とりあえず俺たちはご飯を済ませると、一晩お世話になった山小屋を次の人が来ても使えるように後片付けをして、出発した。

昨日の予定通り、まず川に沿って山頂を目指し、山頂からきちんとした登山道を下って帰り、お昼頃には山を降りることができた。

「ホンマびっくりしたけど、結局なんも問題あらへんくって良かったな。」

「そ、そうだね。何もなかったよね。」

「何もあらへんかったわけやあらへんやろが。」

「え、う、うん。」

「こんな冒険久し振りやったわあ。また来よな。そんな時は、山小屋の場所ちゃんと印付けといたから、迷ったんじゃなくて行きたいな。」

「そ、そうだね。」

川に沿って登りだしてからずっとだが、秋の様子がよそよそしい。まあお酒を飲んだ後の記憶がなくなっているし、男の子と二人つきりて山小屋で泊まったのだから、仕方がないだろう。

「今度来るときは、ビワの大きな木がはえとるかもしれへんな。」

「うん。きつと生えてるよ。」

山小屋で食べた果物はビワだった。食べ終わった俺たちは、記念として、小屋から少し離れた場所にその種を植えた。世話などをするわけでもないし、立派な木になるとは限らないが、もし生えていたら、大きな木になっていたら嬉しい。

俺と秋は登山道の入口に停めてあった自転車に乗ると、忘れものがないことを確認して自宅へと帰った。もちろんいつもの様に、俺は秋を家まで送り、そこでバイバイをした。

チャプター64（後書き）

覚えていらっしやる人いますか？

もし、忘れてしまったという人は、もう一度合宿編の秋がお酒に酔った時の話をご覧になってみてください。

今回のテーマは竜目線での鈍感さです。

あえて『』などを使わずに竜の鈍感さだけを表現してみました。お酒に酔った秋の行動はもう、竜に対する愛情であふれており、自分という人間を必要としてくれる人間に対する執着のようなものまで見えますね。しかし、電話から始まる竜の鈍感さによって、嫌らしいくないように表現したつもりです。周りから好かれている人間。周りを大切に思う人間。それでもぽっかりと空いてしまう心の隙間。その隙間にじんわりとしみこむ二人の愛情を楽しんでください。それでは、ここまで読んでくださってありがとうございます。次回もどうか遊びにいらしてください。

チャプター65

秋の彼女!?

中間テストが終わると、T高は文化祭の準備が始まった。ボクらのクラスは、お化け屋敷をすることに決定しそうだ。

「嫌だ!!!」

「そんな、子どもみたいな駄々をこねないの。」

「そうですね。ふふふ・・・」

「クーちゃん。クラスでみんなが決めたことなんだから、ね?」

「そんなこと言っても、明らかにボクが嫌がることをみんな知ってたじゃないか。」

そして、ボクは断固抗議をしている。お化け屋敷なんて、絶対にやりたくない。今まで、脅かされてばかりだったが、脅かすなんて無理だと言い切れる。

「蟹津さん。あまりにも我がまま過ぎましてよ。学級委員長の明実さんが困っているではありませんか？」

ミーちゃんは春学期で学級委員長を解任され、生徒会の執行部に入った。一年生ながら副会長を任せられ、学校の体制と闘っている。

「でも・・・そんなうすら笑いを浮かべながら説得されても説得力がないよ。」

「うすら笑いとは人間が悪いですわ。私はクラスのためを思ってあなたにみんなに協力してほしいと言っているだけですわ。」

ミーちゃんはそう言いながらも、ボクが苦手なお化け屋敷にしり込みをしている様子にどこか嬉しそうだ。

『蟹津さんがこれほどまでに嫌がる姿なんて、滅多に見れるものではありませんわ』

「ねえ？明実？どうしても、お化け屋敷じゃなきゃダメ？」

ボクは明実を泣き落す作戦に・・・

「明実？」

「明実は、上田から秋のお願いを断る極意を授かって来ているんだよ。今は何を話しかけても無駄だよ。」

それはそうだろう。イヤホンを耳に、外まで漏れるほどの大きな音で音楽を流している。それだけならまだしも、視線は上を向き、絶対にボクの方を見ようとはしない。

これで、担任の先生などがいれば、どうにかできるかもしれないのだが、頼りの先生もクラス委員に任せっきりで、教室にすらない。

「ケイティはもっと、日本の文化っぽいものがないよね？」

最後の頼みの綱としてケイティに話題を振る。ケイティがボクの意見に賛成してくれたら、留学生を立てるということで、変更されるかもしれない。

「もちろんです。ジャパニーズカルチャーを代表する。妖怪モンスターを是非とも体験したいです。」

ダメだ。この前和美から妖怪アニメのDVDを借りてすっかり日本の妖怪に興味が出ていて、やる気満々だ。

そもそも、ボクが投票した茶道部屋以外全員がお化け屋敷に投票していることからして、明らかに背後に誰かの陰謀だろう。

「せっかく、ボクが和服姿でみんなにお茶をたててあげようと思ったのに……」

ゴクリ。

「もう、変更は効かない？」

「いやあ、たしかに……（ギロリ）いえ、何でもありません。」

クラスの男子が一人ボクのことを考えて反論を出そうとしてくれたみたいだが、大多数の人間から睨まれ、あえなく撃沈する。

「じゃ、じゃあ。せめてつーちゃんは、中のお化け役だけは外すってのはどうだろう？」

「え？中に入らなくていいの？」

「当日は受付か何かをしてもらって、当日まで製作の方ががんばってくれたらいいよ。それだったら、つーちゃんも良いだろ？」

「うん。絶対にボクは中に入らないからね。」

ボクはお化け屋敷に入らなくても良いという言葉にウキウキ顔になる。そんな様子をクラスのみんなはどこか嬉しそうに、何故か残念そうに見守るのだった。

「秋、不憫な性格してるわね・・・」

「ん？何が？」

今はボクらは文化祭に向けて衣装やセットの作成をしている。美術部出身のボクと現役の優花・和美・明実は当然中心となって作っていくのだが、その出来栄えが気に入らなかった。

「だって、秋が一番怖がるのはわかりきっているのに、こんな凝った衣装や背景まで作っちゃうんだもの。」

「だって、ボクは中に入らないんでしょ？ボクは受付って決まってるもん」

ボクは鼻歌を歌いながら、グロテスクな仮面に色をつけて行く。

「はぁ・・・当日が思いやられるわ。」

「ん？何か言った？」

「何でもないわ。とにかく、がんばって作りましょ。男子が看板を作ってる間に、衣装を仕上げて、衣装合わせもしなきゃ。」

「そうだね。といっても、もうほとんど出来上がっちゃってるから大丈夫だよ。」

そうなのだ、今仮面に色を塗っているが、それを済ませれば、おおよそ人数分の衣装は完成する。明後日の文化祭前までに衣装合わせを済ませたかったこともあり、ボクがみんなから依頼を受けて、今日までに作ってきたのだ。

「衣装だけなら、怖くないの？」

「うん。お化け屋敷だって、前ほど怖くはないんだよ。中学校の時に竜と一緒に何度か入ったこともあるしね。」

「そうだったの。じゃあ、何であんなにも嫌がったの？」

「それはね。本物のお化けが和美の後ろにいるからだよ。」

「ぎゃーーーーーーーー！！！」

和美が振り向くと、そこにはボクが今作っている仮面の前に作った目玉が飛び出しているお面をつけた明実がいた。

「もう、脅かさないでよ。びっくりしたじゃないの。」

「だって、クーちゃんが怖がる様子を見たくて毎日脅かしているのに、脅かす前に気付かれてちっとも面白くないんだもの。」

「明実もしてたのね。というか、クラスの子全員がきつとしてるわ。」

「そうなんだよね。自分で作った衣装や仮面で驚くはずがないじゃないか。それに、みんな気配で何となくわかつちやうんだよね。」

その時、ポンポンと肩を叩かれた。ボクは後ろを振り返る。

「あ・・・」

ボタン！！

「秋！秋！起きて。」

「ん？ボクはどうして？」

「すまん。まさか気絶するほど驚くとはおもってへんかってんで。」

「竜？？なんでこんなところにいるの？」

ボクが起きると、そこには心配そうにしているクラスメイトと、何故か隣のクラスの竜がいた。

「こっちのクラスでおもしろいことしてるって聞いたから、見に来てんだけど、秋が作った仮面があったで、つけて秋を脅かしたんや。そしたら、秋が気絶するし、びっくりしたわ。」

「び、びっくりしたのはボクだよ。なんでそんなことするかなー！」

「い、いや。ちょっとした悪戯やないか。そんな怒るなや。」

「ひ、ふえええん。」

ボクは羞恥心と先ほどの怖さで涙目になり、教室を抜け出すと、屋上へと駆け出した。

「秋、待って。」

「落ち着いた？」

「うん。」

屋上は今、ボクと和美の二人きりだ。和美はボクのことを後ろから

抱き締めて、頭を撫で撫でしてくれている。

「どうしちゃったの？私達がいくら脅かしても、平気だったのに、竜くんの時だけは急に気絶しちゃうんだもの。びっくりしたわよ。心臓も少しだけ止まってたんじゃないの？」

「また短かったとはいえ、臨死体験したのかな？これで、10回目？」

「そうね。ついに二桁に突入しちゃったわね。それよりも、どうしたの？あの仮面も秋が作ったものでしょ？」

「うん。さっきね。竜の存在が、見えなくなったの。なんとなく、希薄で、ここにいるはずなのに、つかめないような。なんだかとても怖い気分になったの・・・」

「そうなの。秋にとって竜くんは本当に特別なのかもしれないわね。」

「ごめんね。和美にこんな話、辛いよね？」

「そうね。時々嫌になることもあるわ。でもね。やっぱり私は秋が好きよ。世界で一番大好きなの。秋以上に愛せる人を今はまだ見つ

けられていないわ。」

「和美……」

「ねえ？わがままは言わないわ。こうして抱きしめてあげたいの、時々で良いから私に甘えて、そうしたら、私はいつでも秋が泣きやむまでギュツとしていてあげるわ。」

「ありがとう。でも、ちゃんと和美にも素敵な恋人ができるはずだから、ボクはいつまでも甘えてはもらえないよ。」

「そうね。その時はちゃんと心友として向き合いましょ。」

「うん。」

ボクが落ち着き、和美がボクの体を離して立ちあがった時に、屋上の扉が開いた。

ボタン！！

「大変！！」

大慌てで走ってきたのは、明実と敦君と優花だった。

「どうしたの？三人ともそんなに急いで？」

「クーちゃんと和美ちゃんの会話、全部教室で流れちゃった。」

「へ？」

「そのフェンス。前に壊れたでしょ？そこに森君が盗聴器を仕込んだのよ。それで、屋上にむかつたみたいだから、ひよっとしたらって思っで、スイッチを入れたら声が拾えたの。」

興味本位で私たちも途中まで聞いていたけど、やばいと思って、駆け付けたの。」

「明実はどこまで聞いてから走ったの？」

「臨死体験の話よ。とにかく、今ミーちゃんが森君に電源をきってもらってるはずだから、大丈夫だとは思っけど、それでもクラスのみんなが聞きたがっていたからわからないわ。」

「とりあえず、ここから離れよう。あそこに隠れよう。ミーちゃんには、クラスをどうにかしてもらおうように、できれば口止めしてもらえるように電話するね。」

無理だろうな。森君も周りから言われたら弱いし、ミーちゃん一人でクラスの全員を説得できるとは思えない。

ボクはケータイを取り出すと、ミーちゃんに手早く電話をかける。同時にここにいる全員で美術室へと避難する。

「もしもし？ミーちゃん。事情は明実から聞いたよ。ボクも動揺してて、失敗したみたいだね。」

「あなたの責任ではありませんわ。今やっと、盗聴器の受信機をクラスの男子からとりあげたけど、ほとんどの話は聞かれてしまいましたわ。」

「そうか、とりあえず、全員に口止めをお願い。本当は今すぐ教室に行ってみんなを説得したいけど、ボクの場合それも危険が伴うから、しばらく避難することにするよ。おって連絡するね。」

盗聴器から離れたとはいえ、美術室に行くことなど詳しい内容は口にしない。動揺をされていてミスをするなんて、ボクはサイテーだ。和美が隠していたことを、ボクが直接言いふらしたわけではないが、

みんなに知られてしまった。

「和美。ごめんね。」

美術室につくと、一番に和美に謝る。

「ううん。秋が悪いわけじゃないわ。あんなことがあった後だもの、誰だって動揺して周りが見えなくなるわ。それに、盗聴器なんて秋くらいしか見つけられないのよ。その秋が見つけられなかったんだもの、仕方がないわ。」

そんなことはない。ボクは前にも盗聴器を発見できたじゃないか。

なんで今回に限って見つけれなかったんだろう。

「盗聴器の内容を最後までできかないでこちらは走ってきたから、どんな秘密をいつちゃったのかわからないんだけど、結構やばいことなの？」

「そうね。私も盗聴器を止めるか、もつといい方法があったかもしれないんだけど、ごめんなさい。」

「おいおい、待てよ。どんな状況になってるんだ？」

「簡単に説明しようか？」

「「え？」」

ボクらは美術室の奥の準備室から現れた人物に驚く。

「何を驚いているんだ。今日と明日は文化祭の準備日だろ？美術部の部長が美術室にいてもなんにも不思議じゃないだろう？」

「そうですね、花梨部長なら、不思議じゃないかもしれません。今回何があったのか分かっていますか？」

「もちろんだとも、私に君のことわからぬことなんてないんだよ。」

「じゃあ、花梨部長への説明を省きますね。敦君・優花聞いてね。」

ボクはここで一呼吸置く。花梨部長はボクが軽く無視した形になったことに眉を寄せるが、それ以上に緊迫した雰囲気にも口を挟まないでくれた。

「まず、ボクは竜と付き合ってるのは知ってるよね？これは真実だよ。」

「え？あ、うん。」

「和美、ここにいる人ならきちんと説明していいよね？」

「いいわ。どうせクラスにはばれちゃったんだし、きっと学校中に噂が広がるわ。」

ボクは渋々ながら頷くと、説明を再開する。

「だけどね。ボクのことを好きと言ってくれている子は他にもたくさんいたの。それは男の子だけじゃなく。女の子も沢山いたんだよ。」

「まさか……」

「そうよ。私が好きだったのは竜くんじゃないわ。秋よ。私は秋に告白しているわ。さっきも、屋上でその会話をしてしまって、おそらくクラス中の人々がそれを聞いてしまったわ。」

「ずっと、隠していたんだけど、前に明実にはバレちゃったのよ。その時も、事故があつてボクは死にかけているから、きっと今回も危険だと思うわ。」

明実・敦君・優花の三人が押し黙る。明実は以前の事故を思つて、他の二人は新たな事実を思つて考へてしまつたのだろう。

一番最初に声を出したのはやはり優花だった。

「うちも、敦と出会つて無かつたら、たぶんツン先生に惚れてたと思う。だって、優しくつて、頼りがいがあつて、うちのことをいつも気にかけてくれてたし……色々なこと教えてくれたんだから。」

「そうね。実際、屋上から落ちた私を抱きしめて命を救ってくれたわ。入学してすぐだって、危険から守ってくれたし、いつだって私たちはクーちゃんに守られていたもん。」

「ボクがいなかったら、無かったかもしれない危険だよ？」

「そうとは限らないでしょ？本当に偶然起こった事故から守ってくれたかもしれないじゃないの？」

「その考えは正しいな。実際に君たちはこの子といることで、かなり救われている。それこそ、エンマ様が頭を悩ませるくらいに死ぬはずだった人を救うことも多いだろう。」

「エンマ様は大袈裟だと思いますよ。花梨部長からそんな非現実的な言葉がでるとは意外ですね。」

「そうかい？私には君の方がもっと非現実的なことを言っているよ。うな気がするんだが？君のせいで誰かが危険になる？」

「そんなはずないじゃないか、君は毎回偶然にも危険な場所に居合わせているだけで、それを君が救っているようにしか私には見えないか？」

「そうだったらいいんですけど、実際に、ボクがいなければ起こらなかった事故はあったんじゃないですか？」

「この前の事故があったフェンスを実は調べてみたんだ。何物かによつて細工された跡があり、壊れやすいようにされていた。」

「え？細工？」

「そつだ。つまり、君の気づいていないところで、何者かが、君が屋上から落ちるように色々と画策をしていた人物がいるかもしれない。」

「そ、そんな・・・」

「じゃあ、誰かが、秋の命を狙っているかもしれないということですか？河合部長。おしえてください。」

「私だつて、確証はないさ。だけどね、君が危険なことに出会うのは、君だけが悪いわけじゃないんだよ。むしろ、君は人の命を救えることに喜びはしても、危険に出会うことに劣等感を感じる必要なんかないんだよ。」

「そう……ですか。」

ボクは頭の中がぐちゃぐちゃになってきた。そういえば、以前の臨死体験後から、なぜかボクは自分が生きていることに不安があり、自分がいなければと思うことが多かった気がする。

「ふむ……全く、あいつらときたら……」

「花梨部長。ボクはどうしたらいいんですか？」

「胸を張って生きなさい。こんなにも君を愛してくれる仲間がいるんだ。きつとこれからも君ならみんなも守っていけると信じて、自分の運命から逃げないことだ。」

「運命から逃げない……」

花梨部長の言った言葉は、奥が深く、理解できない部分も多かったが、自信を持つことはできた。きつと、これからも不幸なことが起こるかもしれない。

でも、そんな事故や事件から逃げずに立ち向かうことができるだろう。

「さて、みんなが状況を理解できたことだろう。次にすべきは、クラスの生徒の説得だな。といっても、完全に防ぐことはできないだろうから、和美ちゃんには逆に自分の秘密を隠さないことをお勧めする。」

「隠さないですか？でも、そうしたら、余計な混乱が生まれませんか？」

「それでもないさ。君のことを愛してやまない女性なんて星の数ほどいるんだ。和美ちゃん一人が苦しむ必要なんてないんだよ。」

「いや・・・それはそれでなんだかすごく不安なんですけど・・・」

ボクらは花梨部長の送り出されて教室へと帰ることになった。少しだけ不安な気持ちがあるとはいえず、やっぱり怖い。

教室に着くと、クラスのみんなが、神妙な顔つきで席に座っていた。

「ただいま。」

とりあえず、何を言うかを話し合ってこなかったボクらは、挨拶をしながら入っていく。

「おかえり。あなたたちが雲隠れしている間こっちは大変でしたのよ。」

「ごめんね。ミーちゃんに全部お願いしちゃって、じゃあ、クラスでどんな話し合いになったのか教えてもらってもいいかな？」

「そうね。簡単に言ったら、女子専用のファンクラブを立ち上げることでみんなが納得しましたよ。」

「「は？」」

ボクらは一斉に啞然とした顔をしたことだろう。特に敦君なんて、理解しきれずに固まってしまった。

「やっぱりそうだったのね。じゃあ、ファンクラブの代表は私がしてもいいのかしら？当然昔から、私が一番秋のことを好きだったんだもの。今だって、こんなに愛してるのよ。」

和美に後ろから抱き締められ、ボクは復活する。

「ちよま。どういづこと？」

「要するに、男子は、敵が増えて、女子には可能性ができたってことですね。あなたも大変ね。」

「えええ？ボ、ボクはノーマルだよ？」

ガタン！！

教室の女の子が一人、大きな音をたてて立ちあがった。

「関係ないわ。蟹津さんのこと見ていたら、そんなことは百も承知だもの。それでも、私たちは好きなの。長田さんも言っていた通り、好きって気持ちは止められないわ。」

「えっと、どうしよう？」

「認めるしかありませんわ。そうすれば、あなたの心友の長田さんはクラスでもちゃんとした地位を認められるんですもの。」

「いやいや、なんだか拒否権がない気がするんだけど・・・」

「そんなものは、最初からありませんわ。中学の時に存在したファンクラブを森君が調べてきた結果。」

女性も多数存在していたものの、確約した地位がなかったことに危惧していた女性たちが立ち上がったんですもの。」

「そんなあ。ボクはノーマルだあ・・・」

教室内にボクの奇妙な声がこだまするも、男子とは別のファンクラブの成立に待ったをかけることは叶わず、和美を中心に、またクラスメンバーを幹部としたファンクラブが設立される運びとなった。

「女性同士でしかできないいろんなことをしましょ」

「え、、、遠慮したいんだけど・・・」

「もう、そうやって照れる所も可愛いわ」

「アキは人気ものでえすね。わたあしの故郷にも、こんな人がいまあした。」

ケイティ・・・絶対に状況を理解してないよね？ただの人気ではなく、恋人としたい人の集まりだよな？どう考えても・・・

「クーちゃん。私、みんなに負けないように頑張るね。」

「明実、そこはみんなからボクを守ってくれると解釈していいのかな？」

「もちろんよ。二人っきりでデートにもいきましょ。」

「ちがあああうー!!」

結局、変な雰囲気のまま、決着してしまうことになった。ボクってある意味不幸かも。

「蟹津さん。わ、私が会員に入るのは、あくまであなたに負けないためであって、変な勘違いをなさらないでくださいね。」

「ボクに勝ちたいなら、ミーちゃんのファンクラブを作つてよ。」

「わ、私にはそのようなことはできませんことよ。女性にまでこんな理由で人気を獲得するなんて、人間技では不可能ですわ。」

おいおい、だったらやっぱりファンクラブに入らないでくれたらいいのに、お化け屋敷のことはほとんど出来上がっているのですつちのけにしてしまった。

女性のためのファンクラブの話し合いでクラスの女性陣が盛り上がり、ボクは男子をまとめて衣装合わせなど、文化祭の準備をする。

チャプター65（後書き）

これで良いんでしょうか？いいはずがないですよね……
秋の彼女というタイトルをつけた瞬間は、秋に臨死体験をしていた
だくために作ったはずなのに、和美の秘密をバラす際に使っていま
ったため、クラスでのけ者にされるのも微妙であることが判明。
じゃあ、どうするか……

“女性専用・蟹津秋ファンクラブ設立”となってしまうました（汗
今回のテーマは和美の秘密です。どうやって和美の秘密を暴露
するか悩みに悩んだ末に、明実に口を滑らせてもらうという案と森
君の盗聴器の案が出現し、結果このような形になりました。ついで
に、秋のクラスファンクラブ会員加入率は100%でございます。
優花・和美は当然のことなのですが、明実もちよつとそれっぽいオ
ーラが今まで垣間見えたとおりに、秋に惚れてしまっており、美香
に関しては竜という前世の恋人なんて完全に放置でございます。
こんな話でいいのでしょうかと思いつつも、自分自身に良いのだ
と言いつつ聞かせながら執筆しております。
まあ、秋も竜も本当に浮気をする気はございませんので、そこら辺
はご安心を、では、次回は、秋が女性にモテてしまったことによっ
て、竜との関係が……！！

次回もお楽しみに

ここまでお付き合いくださって本当にありがとうございます。

チャプター66

誤解とすれ違い

文化祭の前日、今日は午後の練習はないものの、朝練はあるのでとおもっていつものようにお弁当を用意して待っていたにもかかわらず、竜はボクの家を迎えに来なかった。

時間ぎりぎりになって、風邪でもひいたのかと家に電話すると、お母さんにいつもと同じ時間に家を出発しており、学校に着いているはずだと教えてもらった。

「おはよう。」

「秋が遅刻なんて珍しいね。朝練で準備が遅くなったの？」

「今日は朝練に行っていないんだよ。川本部長にあとで謝りのメールを入れておかないと・・・」

和美とそんな会話をしながら、お昼には竜のところに行つてきちんと事情を聴かなければと思つていると、ボクのケータイにメールが入った。

「上田と別れたのかい？俺との約束通り、フリーになったら、付き合ってね。」

河野先輩からのメールに啞然とする。

「別れていませんよ。ごめんなさい。」

急いで誤解を解くためにメールを返信する。

すると、送信している間にメールがもう一通来ていた。

「上田とのことがあったばかりでこんなことを言うのは本当はいけないことなんだろうけど、君の場合、フリーになったら、たくさんの人が君との交際を申し込むだろうから、俺もきちんと気持ちを伝えておこうと思う。」

蟹津さん。君のことをずっと前から好きだったんだ。直ぐに返事をくれとは言わないが、よかったら、考えておいてくれないか？」

性格が良く分かる。河野先輩は、ストレートに気持ちをぶつけてきて、川本部長は、ボクのことを思いやりながらもメールしたのだろう。

しかし、二人に共通していることは、ボクと竜が別れたと思っ
ていいことだ。

「川本部長の気持ちに今まで気づけずに申し訳ありません。そんな
風に思っていたことはありがたいのですが、ボクは竜と
別れていませんので、お誘いを受けるわけにはいきません。」

先ほど河野先輩からも同様のメールがあったのですが、どうしてバ
スケ部のみなさんはそのようにおもってらっしゃるのでしょうか？」

疑問を解決するべく、朝から連絡を入れても返事が来ない竜を置い
ておいて、川本部長に事情をきく。

そのあと、ファンクラブの専用連絡先を確認すると、大量の求愛メ
ッセージが届いており、さらに、ケータイのメールにも男女問わず
連絡がひっきりなしに届くようになり、ケータイの充電が一気にな
くなってしまった。

「敦君。悪いんだけど、川本部長にメールしてもらえるかな？メッ
セージやメールが大量に来ちゃって、電池がなくなったから、メー
ルを敦君経由でお願いしますって。」

「ああ、いいけど、本当にどうしたんだい？」

「ボクが聞きたいよ。なんで、竜とボクが別れたって噂が流れてるんだろ。」

「え？別れてないの？」

「は？」

どうやら、川本部長に事情をきくまでもなく、敦君に教えてもらえるようだ。そういえば、敦君のことをすっかり失念していた。

「今日の朝、つーちゃんが上田と一緒に登校してこなかったことが、学校中で噂になって、上田の奴がどうしたのか周りに聞かれても、【あいつのことはもうええねん。】って悲しそうに言ってたってもっぱらの……。」

ガタン！！

ボクは遅刻してHRにほとんど参加できずに、一時限目の授業が始まるちよつと前になっていたにもかかわらず、教室を飛び出すと、竜のところへと向かう。

「竜……！どついでのこと？」

「授業はじまるぞ？教室に戻れや。」

「そんなことは良いの。竜にとって、ボクはどつでも良い存在なの？」

「そんなわけあらへんやないか。」

「じゃあ、何で・・・」

「何でか聞きたいんはこつちやわ。」

キーンコーン

教室にかけ込んですぐ、言いあいを始めたボクらをチャイムが止める。釈然としないものを抱えながらも、ボクは自分の教室へ戻らざるを得なくなってしまう。

「どつしたの？喧嘩なんて珍しいじゃないの？」

授業が始まり、先生も入ってきてしまったので、大人しく授業を受

けているボクに明実から声がかかる。今は横に明実・前に和美・左前に優花となつているのだが、他の二人の耳もこちらを意識が向いていることがわかる。

「朝突然竜が迎えに来てくれなくて、そうしたら、竜と別れたって噂がたっちゃったみたい。さつき教室に行った時も、すつごく不機嫌できちんと話もできなかったよ。」

「それはお互い様でしょ？クーちゃんだって、きちんと事情を聴いてあげなかったんじゃないの？」

「う・・・確かに・・・」

ボクはさっきの失敗を反省して、お昼にはきちんと竜の話を聞くことにした。朝から竜にかけたり、大量のメールが来たりで連絡することができないので、明実をお願いして、お昼休みに美術室に来てもらおうようにする。

明実にメールをしてもらったとはいえ、授業の休み時間になると、
なんだか、お昼にと言ったことに後悔をしてしまう。今スグにでも
逢いに行きたくなる。

そういえば、こここのところ、文化祭の準備で、忙しくって、きちん
と竜と話をしていないな。そういえば、午後からはボクがやらなき
やいけない仕事なんてないんだし、ほとんど教室を暗くしたりする
だけなんだから、竜と少し話をしてゆっくりするのも大丈夫かな？

どうしよう。そんなことを考えているうちに、逢いたくて、逢いた
くてたまらない。何かいい訳を作って逢いに行こうかな。そんなこ
とを考えていて、ぼーっとしていたのがまずかったのだろうか、反
応が遅れる。

「和美！！危ない！！」

ボクは一メートルほど先の窓際でくつろいでいた和美に飛びつくと、
突き飛ばす。

パリーン。

野球の球が窓を破ると、和美がさっきまでいた場所、つまり、今ボクがいる場所に飛んでくる。ボクは避けきれずに、頭を強打すると昨日と同じように気絶する。

割れた鏡で体中を切断されるかもしれないが、それを感じている余裕もなく、意識は暗転する。

『秋さん。大丈夫ですか？』

『ええ、大丈夫よ。前回の気絶は、時間が短かったから、記憶を完全消去したのかな？』

『ええ、そのように対処させていただきました。それよりも、先に謝罪をさせてください。』

『ああ、いいよ。それよりも、あの人はひょっとして?』

『ええ、御想像の通りの人物かと思います。しかし、本人ではなく、あくまで体を借りての憑依体のような形ではありますが。』

『なるほどね。ところで、霞さんは?今回は来ないのかな?』

『なんでも、現世の人間に情報を与えすぎたことによってエンマ様から謹慎処分を言い渡されたとかで、現在反省文を書かされております。』

『冥界にも反省文なんてあるんだね。』

『はい。鬼人として生まれてから今までの生活の様子まで一緒に提出させられるとかで、一年程かかるようです。』

『生まれてからって、50年以上も生きてるんだよね?それは大変だね。』

『はい。なので、しばらくは私と洋司様でサポートする形になるかと思われます。』

『了解それでいいよ。それよりも、前の魔法のことなんだけど、制御する方法はあるの?』

『はい。もちろんです。しかし、前回伝えたことで霞様が謹慎をもちかたっていることもあり、お伝えすることは叶いませんので、また中央議会の採決を待ってお伝えすることになるかと思ひます。』

『そつか、エンマの娘だからって霞さんは好き勝手にしていたところもあるもんね。でも、やっぱり霞さんが教えてくれてよかったと思ひよ。』

『しかし、あれはかなり間違ひがあつたらしいです。今回の事故も、明らかに秋さん本人ではなく、本来ならば和美さんが当たつてゐるはずですよね?つまり、秋さんは巻き込まれた事故や事件も多数存在するのです。』

『なるほどね。本当にボクが死にたい気分になつて起こつた事故もあるけど、基本的にはそうじゃないことが多いってことかな?』

『申し訳ありません。少ししゃべりすぎたみたいですね。では、そろそろお帰りの準備をさせていただきます。』

しゃべり過ぎたのは本当だろう。本来もう少し余裕があるだろうことは、普段は知らないはずの呪文を唱えていることから明白で、これ以上話してしまつては今度は未緒さんが大変なことになるかもしれない。

ボクとしてもそんなことは望んではないので、ゆっくりと構え、未緒さんに迷惑をかけないようにこれ以上の質問を控えた。

「ただいま。」

「おかえり。」

ボクが目を覚ましたのはまた保健室のベッドだった。

「秋？大丈夫か？」

「うん。ここまでは竜が運んでくれたの？」

「おう。あと、和美ちゃんから事情は聞いた。俺の勘違いやったらしい。」

「ん？どついでのこと？」

授業中らしく、今この場には竜しかおらず、雪先生は相変わらずカ―テンの後ろでボクらの会話を聞いている様だが、それ以外に人気もないこともあって、竜に事情を教えてもらっつ。

「はあ？じゃあ、ボクが浮気をしたとおもったの？」

「す、すまん……」

「和美に告白されたただだよ。それも、前からあったんだけど、ずっと告白され続けても断ってきたんだから。」

「いや、だからごめんって。昔から好きだった子と浮気をして話を聞いて、おかしいとは思いながらも・・・」

「ボクのことを疑うなんて許さないんだから。」

「だから、ごめんって。」

「一生つぐなってもらうんだからね。」

「解った。一生やな。って？プロポーズ？」

「はうあああ〜・・・」

ボクは顔まで真赤にして、うつむく。

しばらくして、ボクが復活すると、竜と一緒に保健室をでる。午後から暇があることを言うと、美術室の鍵を借りて二人で抜け出すことになった。竜も最近クラスのこと色々あったようで、ボクに話

したいことがたくさんあったみたいだ。

ついでに、今回は雪先生に口止めするような話はしていない。二人は残り一時間しかなくなった午前の授業を受けると、それぞれに上手く教室を抜け出す。

ボクの場合は、明実たちにすべて任せると、優花から借りた鍵を使ってもちろん、ボクが作ったお弁当を持って美術室に向かい、竜が来るまでにお茶を入れておく。

「おまたせ。ちと人をまくのに時間がかかったわ。」

「竜って嘘をつけない性格だから、ボクと会うことなんてみんなにバレバレだったんだろっね。」

「せやな。でも、前よりは鈍感やなくなったやろ？和美ちゃんのことだって、ずいぶん前からしてたんやしな。」

「え？知ってたの？いつから？」

「いつからって・・・中学二年の文化祭くらいとちゃう？言っとくけど、俺もそやけど、秋だってそうとう解り易い性格してるで？」

まさか、竜にまでバレていたなんて、ということは、今までは上手く話しにあわせてきていたのか？

「ねね。遠足の後に優花たちがボクの家遊びに来たときあったじゃん？あの時和美は竜のことを好きって誤魔化したのに、竜は納得したよね？あれは演技だったの？」

「んにゃ。本当にそうなんかと思ってた。告白して断られたんやから、あきらめとるとおもってたしな。」

「もう、恋ってそんな簡単なものじゃないんだから、好きで好きで仕方がないって時は、周りなんて見えなくなつて、逢いたくなくて、どうしようもなく自分が抑えられなくなるんだから。」

「せやな。そんなもって、どれだけ一緒にいても、満たされることがないんやんな。」

「そういうこと、だから、和美だって、ずっとずっとボクのことを思ってくれてたんだよ。」

「でもな。悪いけど、譲る気はおきへんな。昨日、今日、秋が俺よりも好きな奴ができたかもしれへんと思っただけで、こんなにっらかってん。俺には秋しかおらへんわ。」

「ば、馬鹿・・・」

「二人つきりなんやから、そんなに恥ずかしがるなって。」

「う、うん。」

ボクは真赤になりながらも、竜に手まねきされるまま、抱きしめられた。

「離れられへんな。一生。」

「美味しい料理を毎日作ってあげるって約束したんだから、もう、浮気だなんて勘違いしないでよ。」

「せやな。ん？それってお酒に酔った時の話やなかったっけ？？」

「あ・・・」

そのあと真赤になったボクは竜に言い訳をしまくった。お酒の時の

前にも絶対に言ったと言いきり、お酒の時とは何の話？としらを切るど、竜がその時の様子を語りだし、ボクはそんなことは絶対にしていないとまたしらを切るのだった。

チャプター66（後書き）

じゃ、ジャンルはファンタジーでございます。秋は最強ですし、鬼人との会話だって盛り込んでファンタジー色を出したつもりです。

今回のテーマは「鬼人との会話を終わらせる」です。

前後の内容は、秋と未緒との会話で秋の秘密を今後出さないというのを伝えるためのプラスアルファだったはずなんです。どうみてもラブコメ的な一話になってますよね？AKIの神経を疑います。もう少し未緒との絡みを押し出したいと思うものの、臨死体験が長引けば、当初の設定である両親が心配し過ぎない程度のことだったものが揺らいでしまい、では、文字数を少なくして伝えたいことを完璧に・・・文章力が足りなくて伝えきれなくて無かったらごめん下さい。

これにて、鬼人から秋の秘密を暴露するお話を一旦休止したいともいます。高校時代にどうしても秋が臨死体験をする理由などを皆様に伝えたかったため、物語も長く、さらに秋の臨死体験も膨大な数になってしまったことをお詫び申し上げます。これにて、高校生編を・・・

どうなるかは、次回をお楽しみを。

ここまで読んでくださった皆様に感謝を本当にありがとうございます。

チャプター67

世界の危機

あわただしく走り回る冥界の鬼人たち、そんな中、ひとり霞は自分の今までにあった出来事を一つずつ思い出しながら、静かな部屋で手を動かす。

コンコン。

小気味の良い音を鳴らし、ノックをすると、入室の許可も出さないうちから一人の鬼人が入ってくる。霞はエンマの娘という立場であり、こんなことが可能な人物は一人しかいない。

「突然どうしたんですか？現世の方は良いのですか？」

「ああ、保存の鬼人とはいえ、あまりにもハードなスケジュールをこなしたこともあり、久しぶりの休暇が出たんだよ。」

ノックをして入ってきたのは、洋司だった。育ての親であり、極東管理官という大役をつとめ、今は保存の鬼人として活躍している洋司のことを拒むことは霞にすらできない。

もつとも、霞本人も機会があれば話をしたいと思っていたので、招かれざる客というわけでもないのだ。

「そうだったんですか。ところで、私の知らない間に、冥界がかなり忙しくなったみたいなんですが、どうなさったのでしょうか？」

「それはね。シュミレーターの誤差ができたんだよ。」

「え？今回のシュミレーションはほぼ完璧だったのでは？」

「その、ほぼつてあたりが大きかったみたいで、特にあの子たちに関しては、鬼人にも止められないほどの大きな力をもっているからね。」

「そうですね。私も最初は驚きました。そろそろ、真実を聞かせていただけませんか？」

「いいよ。その代り、君にとっては辛い話になるかもしれないけどいいかな？」

洋司はそう言うと、部屋に置かれていた大きなソファアームに腰掛ける。

霞は一旦今までしていた作業の手を止めると、洋司のためにお茶を入れる。

「ああ、ありがとう。」

「いえ、しかし、冥界がこんな状態であるにもかかわらず、保存の鬼人とエンマの娘である私がゆっくりと歩いていていいものなんですよっか?」

「問題ない。むしろ今こうしていることも、仕事の一つだと考えてもらえばいい。」

「そうですか。」

霞の心情は複雑だろう。自分のことを思って休日を使って逢いに来てくれたのは紛れもない事実のだが、それでも洋司の頭の中には一人の人物のことが浮かんでいることがわかる。

洋司は、霞が座り、話を聞く体制になるのを待つと、説明を始める。

「彼女は、再転の姫君となる人物だ。」

「再転の姫君ですか？それは、マリン様の伴侶であるエスカ様の別名ですよね？」

「いや、正しくは、あの再転の宝玉を作った人物のことを指して再転の姫君というんだ。」

「はい。存じ上げております。」

「実は、今の再転の宝玉は、あと400年ほど経つと、どれだけ大切に扱おうとも、消えてしまうんだよ。」

「そ、それは一大事ではありませんか？」

「そうだな。特に冥界よりも現世にとってはかなり大きな打撃となるだろう。今まで大きな失敗を繰り返してきた人類が滅亡しないようにと様々な手助けをしてきた冥界のシステムの要である再転の宝玉がなくなるんだ。今後一切の失敗は許されなくなることだろう。」

洋司の発言は、かなり大きな波紋を冥界・現世、それぞれにもたらすことだろう。

「では、どうしたら良いのでしょうか？」

「本来は、再転の宝玉を失った世界は、破滅への道を歩むらしい。」

「そんな・・・世界の終りがそんなことで起きるなんて・・・」

「最後まで聞きなさい。本来はと言ったが、それぞれの世界でその再転の宝玉の消滅に対するたくさんの方策を練られてきた。」

「じゃあ、生き残った世界があるんですか？」

「いや、ない。どうしても、星の寿命であったり、隕石の落下であったりと、様々な理由で再転の宝玉の消滅のあと、その世界は滅亡してきた。」

「そ、そうなんですか。」

霞の心中は複雑であろう。400年という歳月は長いように感じるかもしれないし、鬼人でさらに力のある自分にとっては短い時間になるかもしれない。

この400年間で再転の宝玉の消滅を防ぐ方法を模索しなければならぬのだ。そして、それを実行するだけの時間がはたして残されているのかも解らない。

「あれ？400年？何かで聞いた気が・・・」

「そうだよ。冥界は既にその危機に対する手を打っている。蟹津秋ちゃん。彼女には、再転の姫君として、再転の宝玉を作ってもらおう。」

霞はここでやっと納得した。本来鬼人としての能力で不可能な再転の宝玉の作成という大きな仕事、この世界は、再転の宝玉の作成を鬼人ではなく、人間たちに託したのである。

「秋ちゃんにそんな過酷な試練を与えるのですか？」

「ああ、彼女ならば、きつと成し遂げてくれると、信じているよ。」

「しかし、再転の宝玉は400年後に消滅するんですよね？秋ちゃん
の寿命と同じくらいと言うのには、理由があるんでしょうか？」

「そこまではエンマ帳にも記載されていない。」

エンマ帳というシステムは、とても大きな役割を果たしているのだろう。滅び去った世界の多くは、自分たちの力を過信した鬼人たち

が、進化の止まった世界を独占し、自分たちの私有物のようにして扱っていた。

そのような世界では、冥界を知り、反逆する人類を幽閉するためにエンマ帳というシステムが使われていた。

そのような世界とは違い、友好的な世界では、逆にエンマ帳の存在すらなく。人類と鬼人は全く別の存在として扱われ、互いに不可侵条約を結び無関心であったり、逆に交流があったりと様々な世界が存在した。

しかし、今の世界のように、鬼人が人類の進化を影から支え、自分たち力のあるものが完全に冥界に引きこもり、人類のために現世を明け渡しているような世界はあまりなかった。

そして何よりも、蟹津秋という、マリンの複製ともいえるほどの力を持った人類を作り上げることなど、どの世界も不可能だった。

「鬼人は、人類にかけているんだよ。今までの世界は、調べられる範囲を見る限り、鬼人が中心となって世界の危機を救おうと働きかけてきた。しかし、この世界は、鬼人の補助をできるだけ少なくし、人類自らの力で危機を乗り越えてきたんだ。」

「なるほど、鬼人に存在する多くの条約の中で、一番気になってい

た内容がこれではつきり分かりました。」

「そうだな。あの条約は、鬼人の存在を人類から隠すことによって、争いを起こさないことと、人類の成長を妨げないという二つの意味が存在するんだ。」

その条約とは、”鬼人からの人類の支援の制限”という内容が書かれており、どのような手助けも不可能であり、守れないものにはかなり厳罰な処罰が下されることでも有名だ。

「人類には、あと400年ほど、成長を止めてもらっては困るんだ。そのためにも、支えになるものは最小限でなくてはならない。」

「そうですね。私は秋ちゃんに良かれと思って真実を伝えてしまったのですが、それが彼女の成長に歯止めをかけるかもしれないのですね。」

「それについてはまだ分からない。というよりも、不確定要素が多すぎる。」

「どづいづことですか？」

「彼女の魂の結合を促進するためには、どうしてもまだまだ多くの臨死

体験してもらおうしかないはずなんだ。ところが、臨死体験をした後に、彼女が自分の記憶を現世に持っていきたいと思ってしまったらどうなるだろう？」

「魔法の力について理解してしまい、彼女が魔法の力で臨死体験をしなくなるかもしれませんね。」

「その通りだ。未緒にはくれぐれもそのあたりは注意するように伝えてはあるが、どうしても彼女の場合何度か死んでもらわなくてはならないはずだ。」

「ひょっとして、秋ちゃんが臨死体験をするのは、鬼人からの攻撃を受けているのですか？」

「いや、それはない。少なくとも、この世界の鬼人はすべて彼女を守るために動いている。しかし、世界の滅亡よりも、再転の姫君の能力に興味があるという人物は、さまざまなところにいるから、注意しなければならぬ。」

「そうですね。これで、洋司様の秘密はすべて教えていただいたこととなるのかしら？」

「ああ、おおむね今まで隠していたことは話したはずだ。君の失敗によって大きな不確定要素が発生したため、これ以上馬鹿な真似は

しないようにという意味もあったのだが、それ以上に……成長を見て、エンマから許可が下りたというのもある。」

「私が成長ですか？」

「ああ、以前の、再転前の君は、どちらかというと傲慢で力に執着していたところがあった。エンマの娘として育て、再転の姫君の候補者とすら言われていたのだから当然といえば当然なのだが……」

洋司のセリフには、大きな意味が込められていた。

「そうだったんですか。私は、今、人が大好きです。秋ちゃんは特に大切に思っています。秋ちゃんの周りの人たちも、とっても好きなんです。」

「そうだな。本当によく成長してくれたよ。その大好きな人たちが成長できるように、見守ってあげようじゃないか。君には君のいいところがある。無理をしないで、背伸びをしないで、見守っていい。」

再転前の霞の様子を知る者は、今は洋司と秋の二人だけだ。しかし、洋司の顔を見る限り、以前とは大きく違った良い成長を遂げ、鬼人として立派になったことがうかがえる。

「再転前の君からは信じられない言葉だね。やはり、蟹津秋ちゃんとの出会いは、人類だけではなく、鬼人にとつても大きな一歩になったのかもしれないね。」

「そうですね。彼女は本当に不思議な子です。男の子の時もそうだったようですが、自分の身を危険にさらしても、人のことを思いやる、中々そんなことはできませんよ。」

「しかしな。それが本当にいい結果につながるとは限らないんだよ。彼女を失うことは、それこそこの世界の未来を失うことに等しいんだから、他にも様々な方法に対策会議で練り続けているにも関わらず、結局マリン様と同等の魔法の力無くしては不可能であるという結論に達したのだからな。」

「マリン様は私たちの始祖なんですよね？何故私たちの中ではなく、人類にマリン様の能力を持った人間が現れたのでしょうか？」

「さあな。そのあたりについては、僕なんかじゃ解らないんだよ。それこそ、神様にしかわからないんじゃないかな？」

「神様ですか・・・私たち鬼人は、人類から、時に神とあがめられ、恐れられています。そんな鬼人でも不可能なことを成し遂げる人物となるのならば、秋ちゃんこそ本当の神の存在なのかもしれませんね。」

「それはそうだろう。再転の姫君ともなれば、それこそ僕たちでは足元にも及ばないほどの地位と名誉が約束されているんだから。」

「・・・あまりうれしそうじゃありませんね。」

「そうだね。君には隠し事はもう止そう。僕はきつと、蟹津秋という人物と魂に恋をしてるんだ。彼女が再転の宝玉を作る時と、彼女の寿命がエンマ帳で記載されていることから、僕はひよっとしたら止めてしまいかもしれない。」

「不可能ですよ。どれだけあなたが愛しても、彼女の好きな人は竜くん一人と決まっているんですから、それに、再転の宝玉だって、命と引き換えと言ったって彼女はしてしまうでしょうね。」

「解ってるさ・・・。」

洋司は優秀な鬼人だ。だからこそ、自分が鬼人であることを煩わしく思うことがある。現世のサポート役として憑依する時に、あえて女性の体を使ったのもそのためだった。もし、男性の体で現世に降りてしまったら、間違いなく自分を制御できないと思っていたのだ。

和美など、様々な問題はあるものの、女性という立場ならば、いろ

いろな面でもサポートしやすいと考えてはいるのだが、そんな日々を送ることに疲れることも当然ある。

「僕は、鬼人失格だな。」

「そんなことはありませんよ。洋司様だからこそ、お父様はこの計画を任せていらっしやるのでしょ？お父様の性格ですもの、人に何かを頼むなんて、洋司様で無かつたら絶対にいたしませんわ。」

「エンマの奴のこと、理解しているんだな。流星は家族だ。僕もそろそろ、きちんとした家族を作らないといけないな。」

「そんな、お顔で言っても説得力がありませんよ。まだ、秋ちゃんのことをあきらめられないのでしょ？だったら、あと30年ほど、我慢しても遅くはありませんわ。鬼人の寿命は長いんですもの。保存の鬼人となつた洋司様ですもの。あと500年は生きていられますわ。」

「そうかな。鬼人にもエンマ帳のようなシステムが欲しいものだよ。」

「あら？本当はないという証拠はありませんわ。あのマリン様のことですもの。鬼人たち総出の事業であつてもひょっとしたらお一人でごなしてらっしやらないとは限りませんもの。」

「ははは。じゃあ、マリン様の手元のエンマ帳に、僕の死亡日と秋ちゃんの死ぬとき、同じ日が記載されていることを祈ろうかな。せめて僕の方が先に死んでいてくれると嬉しいんだけどな」

弱いところを見せる洋司は珍しい。それほど保存の鬼人としての任務は過酷で、現在の置かれている立場は、洋司にとってもつらいものなのだ。

「愛する人より先に死にたいなんて、酷いことを言うんですね。」

「ああ、僕にだって、自分勝手なところもあるんだよ。」

「そんなことはありませんよ。ただ、本当に愛しているなら、相手を悲しませたくないと思うものではありませんか？」

「君も彼女の影響をたくさん受けているみたいだね。普通の人は、相手よりも、自分のことを優先するものだよ？」

「そうでしょうか？確かに見ず知らずの他人に愛を注げる秋ちゃんのような人物は少なくても、愛する人のためなら、自分の命すら顧みない、そんな人はたくさんいらっしゃるように感じたのですが？」

「そうだね。鬼人には少ないけど、人類には、愛する者を愛する考えがすごく多いかもしれないね。だから、鬼人を超える人類が生まれてくるのかもしれないね。」

「愛の力、素敵なものです。私たちも見習いたいものです。」

鬼人と人類との愛の形は違う。確かに容姿もよく似ており、子孫を作り、増やすなど、同じ所はたくさん存在するのだが、寿命が違い過ぎる。

人類と違い、その力量から寿命が多い時では500年以上も違うことがある鬼人は、一生涯を共にするという感覚はなく、その時好きなものや家族となるといった雰囲気があり、さらに力の強い洋司や霞などは、自由に結婚することよりも、力の強いもの同士で寄り添いあうことが多い。

そのため、形の違う愛は存在するものの、人類のような愛の形を羨む鬼人も多く存在するのだ。

「マリリン様の魔法の名前を知っているか？」

「“世界を操る魔法”としか、私にはわかりません。正式な名称など存在していたのですか？」

「そうだな。私も以前文献で読んで初めて知ったのだが、それは通称であり、真実の名前があるんだということだった。そして、その真実の名前を知った時、世界は救われる。そんな風に聞いたことがある。」

「洋司様は、マリン様と直接対談したことが、おありなのではないのですか？」

「ああ、残念ながら教えていただくことはできなかったよ。しかし、再転の姫君のは大変な興味を抱いておられた様子だったのだ、きつとまたどこかでお会いできるような気がするよ。」

「まあ、鬼人といえども、マリン様と生きている間に二度も会うようなお方がいらっしやったら、歴史に残りますよ。」

「残念ながら、その歴史どころか、世界ごと残るかどうかの瀬戸際に立たされているんだよ。」

「そうでしたね。秋ちゃんが再転の姫君になってくれることを祈りましょう。」

「そうだね。そのためにも、冥界は万全の準備をしておかなくては

いけない。まず、君はその書類を一年と言わずに半年で完成させてくれなくては困るよ。」

「が、がんばります。」

洋司の言ったことはたとえ霞といえどもかなり不可能に近いものであった。睡眠時間をぎりぎりまで削ってすら半年なんて時間で書きあげられるとは到底思えないほどの書類を抱え込んでいる。

さらに別件で飛び込みの仕事が入ることはよくあることで、それらをすべて終わらせて一年でも足りるかどうかと言った雰囲気だったのだ。

「君が帰ってくるまで現世のことは任せてくれ、きつと君が帰ってきたころには魂の結合率を90%を超して見せるさ。」

こうはいつでも、臨死体験を重ねる秋の様子を観察しながら鬼人たちの手腕で色々な術式を使って体に負担をかけないように慎重に行ってきた結果として、やっと60%を超えたところだとい
うのに、半年という短い間でそれを30%も押し上げることは難しい。

「何か秘策がおりなのですか？」

「これはまだ憶測でしかないのだが、彼女はきっと次かその次の臨死体験の時に記憶を持って帰るだろう。そうなれば、きっと彼女の魂の結合率は跳ね上がる。」

「え？そ、そんなことをしたら冥界は大変なことに。」

「まだ憶測の段階であり、さらに、そうなったからと言って、悪い結果になるという保障もないから、誰にも言ってははいない。」

「そ、そうなんですか。御父様にも秘密なんですか？」

「ああ、君に話したのが初めてだよ。」

とはいうものの、エンマには霞との会談のあとに相談するつもりではいた。しかし、少しの差とはいえ、この事実は霞のやる気を促進する。父よりも先に自分に相談してくれたこと、そのことにも大きくやる気を出させたし、さらに、もし事実そうなった場合に秋のことが純粹に心配だった。

「もうわけありません。私そろそろ書類に取りかからないといけません。」

「ああ、邪魔して悪かったね。秋ちゃんの次の臨死体験は半年後、さらにその次はそこから3か月後に予定されている。最悪9か月後の臨死体験までには間に合って欲しい。」

「解りました。」

霞は軽くお辞儀をすると、書類の整理に取り掛かった。今まで現世のことが気になって遅々として進まなかった書類が、今は現世を気にするためにスラスラと進んでいく。

『君も、再転の姫君にとってはいなくてはならない存在なんだよ。』

霞の様子を確認した洋司は、先ほどの報告も含め、エンマとゆっくりと話をするために執務室へと足を運ぶ。

『まあ、書類提出の理由が最近娘が構ってくれないからという事実をしっいたら、今度は家出どころじゃ済まないだろうな・・・』

チャプター67（後書き）

久しぶりにちよつと真面目に設定を出してみました。洋司と霞。この二人の役割はとっても重要なところにいます。というか、裏で設定があつたところを全部押し出してしまいましたね。そろそろ新しい設定を練っていかないと、本当に約束された道を進むような話になつてしまいそうです。

今回のテーマ「霞の謹慎の理由」です。

まあつまり、洋司の『』の部分を出したいがための話だったわけなんです。それまでの話の流れがあんまりにも深刻なものになりすぎて、落ちとしてはいまいちだったように感じております。

というわけで、次回の目標ははっちゃけた文章を作るにしてみたいと思います。

秋ちゃんの文化祭をどうぞお楽しみください

それでは、読者の皆様におきましては残暑厳しい今年の秋、お忙しい時間を私の作品のために時間を割いていただきまして本当にありがとうございます。

チャプター68

「高・伝説の文化祭一日目

「あつういい。」

「もう、ボクの横でそんなセリフ良く言えるよね。」

ボクたちのクラスは、お化け屋敷の発表に向けて準備を始めた。ボクは白い着物姿なのだが、お化けらしさを出すために薄い布を使っており、正直この時期にこの格好ではかなり寒い。

それとは対照的に、大きな着ぐるみを着ている優花はかなり熱そうだ。

「うちもツン先生みたいに、幽霊にしておけばよかったよ。今からでも交換しない？」

「クラスのみんなを敵に回してもいいなら、ボクは全然かまわない

よ？」

そう言つて、準備をしているクラスメイトたちに目線を送る。当然ボクと優花の話聞いていた子たちもその中にはおり、優花の方を見て首を横に振っている。

丁高の文化祭の初日は午前中までが準備時間となっており、実際に始まるのは午後からなのだが、既に噂となっており、教室の前には長蛇の列が並んでもいいように、列を整理する係まで作られた。

このあたりの情報はどこからかもたらされたものなのだが、以前の浩太の時と違い、ボクには良く分からない。

「うち、中に入るわけじゃないんだから、こんな着ぐるみ着なくてもいいんじゃないかな？」

「そうだね。ボクも普通の服に着替えたいよ。」

ボクは絶対に中に入らないと言つてあるので、当然受付係なのだが、そうになると、ひとりでは心配だとクラスのみんなから提言もあり、ボク・優花・明実・和美・ミーちゃんの5人でローテーションを組んで受付等をする事になっている。

「ねね。入場料ももう少し高く設定しない？」

「そうだね。あと、外では待ち時間の間、暇をしないように、お化けの写真なんかを売るから、その撮影を今のうちに撮らないとね。」

クラスのメンバーを一人ずつ森君がデジカメで撮っていた。森君は機械系が得意みたいで、プリントアウトも結構簡単にできるんだとか、なぜかボクの写真だけは数枚色々なアングルで撮ったりとこだわりがあるようだが、まあいいだろう。

「森君。今回はクラスのために写真を許したけど、それで前みたいな悪さしないでよ？」

「も、もちろんだよ。ぼ、僕も、クラスみんなに貢献したいだけだよ。」

冷や汗を垂らしていたあたりは信用ならないけど、まあ自分で鑑賞するくらいなら許可するよ。変なところに出したりしなければ良いんだからね。

「お待たせ」

先に着替えたボクと優花の元に、和美達が見れる。

「「・・・」」

ボクと優花は口をあぐり開けて啞然としてしまった。

「どうしてミーちゃんはドレスなの？」

明実には、魔女の衣装、和美には猫娘の耳と衣装・そしてミーちゃんにはメドウーサの衣装を渡していたのだが、ミーちゃんはメドウーサというよりも、ただの美人だし、和美にいたっては何故か猫耳メイドさんになっていた。

「えつとね。メドウーサの髪被ってみたらわかるよ。」

明実がそう言って、ミーちゃんの頭にボクが作ったヘビの桂をつける。

「ひゃ・・・」

「はまり過ぎるのも問題なんだね。」

ボクと優花はそれぞれ、反応を示す。というよりも、ボクは純粹におびえているだけだけど・・・

「そうなのよ。やっぱり、これじゃあ本当に石化しちゃいそうだから、貴婦人の霊ということで、メデューサはやめておこうって話になったの。」

「う、うん。ボクもその方がいいな。ミーちゃんは切れ目だけど、まさかこんなに鋭いとは思わかったよ。」

普段はその切れ目は美人に見えるチャームポイントになるのだが、妖怪の格好をしたミーちゃんの姿が頭から離れない限り、今後チャームポイントとして見ることはできないだろう。

「明日はお稲荷さんの狐の耳でも作ってくるから、今日はそれで我慢してね。」

「おーほっほっほ。蟹津さんも私の妖怪っぷりには勝てなかったようですわね。私と比べても全く怖くありませんわ。」

「うん。ミーちゃんの怖さには完敗だよ。」

「ヒソヒソ（あんな笑い方するやつ初めて見たぜ。それにしても、

おっかなかつたな。」

「じによじによ（ああ、それに比べて、ツンちゃんは幽霊の姿しても可愛いよな。）」

「ヒソヒソ（間違いないえ。あんな幽霊だったら、夜中に出てきてもギョツと抱きしめたくなくなるぜ。）」

「じによじによ（メドウーサにあつたら速効逃げるけどな。）」

後ろの方で男子の音が痛いよ。ミーちゃんは喜んでるし、ボクは耳がいいから聴こえちゃったけど、聴かなかつたことにしておこう。

「そ、それじゃあ、そろそろボクらは受付の準備の方に行くね。」

「え？受付の机とかも男子がさっき出してくれたわよ？開会式までここで待ってましょよ。」

「あ、そういえば、竜にちょっと話があるんだった。」

ガシッ

「あの？和美さん・・・何でしょうか？」

「もうすぐケイティの着替えも終わるんだし、もう少しここでゆっくりとしていきましょうよ。」

「いや、竜のこと待たせるのも悪いし・・・」

「そういえば、ケイティが丁度半分だし、そろそろ部屋の中が普通の制服の子よりも妖怪や幽霊の方が多くなるわね。」

和美！！あんた確信犯でしょ。ボクが妖怪が増えてきたから、脱走しようとしているのを知っていて、態と足止めしてるな・・・

「和美・・・ボク怖くて仕方がないの。屋上で二人つきりにならない？」

「グハッ・・・わ、私が悪かったわ。竜くんのところへ行ってらっしゃい。」

「。っ。」

ここから逃げられるのならばと思い、和美にお願いをすると、鼻血を垂らした和美から退出の許可が出た。

「じゃあ、開会式の体育館でまたね。」

ボクはそう言って、教室から逃げ出すのだった。

ボクは教室を出るとぶらぶらと歩きます。竜に話があったといった手前、少し隣のクラスも覗いたのだが、竜はいないみたいだった。

「ツンちゃんのクラスはお化け屋敷なんだって？絶対に行くからね。」

「蟹津マナージャー！！俺絶対に行くから、優先して通してよ。」

「蟹津さん。女子専用のファンクラブできたって本当？私も入りたいんだけど・・・。」

ボクが一年生のクラスの前を通ると、いろいろな子から声をかけられた。

やっぱり、幽霊の衣装じゃ目立ち過ぎるから、少し人目のつかない

ところに移動しよう。文化祭をきっかけとして色々な人と接する機会があるのは嬉しいことだけど、やっぱり色々な不安があるのだ。

「お？秋もサボりか？」

「こんなところで何してるのよ？」

美術室か屋上で悩み、今、美術室に行くとボクの隠れ家がばれてしまふような気がしたので、屋上へと足を運んだのだが、そこには竜がいた。

「俺はサボりやわ。どうも、今のクラスにおると、いろいろと面倒でな。」

「そうなんだ。ボクも今クラスの中にいることはできないんだよ。」

「クラスの奴らとは仲良くなったんやなかったんか？」

「いやあ、ほとんどの人がファンクラブ会員だし、敵対はしてないんだけど、ボクにとってあそこは安息の地ではないんだよ。」

そこまで言って、竜はボクの格好を見て納得した。

「自分で作った衣装とセットにこわがっとなるんか？」

「仕方がないじゃないか。手抜き衣装を作るわけにもいかなかったから、仮面だって竜がみても驚くようなすごい怖い仮面作ったんだよ。」

「明るい所で見ても怖がるんは秋くらいのもんやって、というか、開会式どうするんや？みんな衣装のまま開会式に行くんか？」

「そんなことしたら、ネタバレになっちゃうから、受付のボクら以外はみんな一旦上からジャージとかを着るんだよ。着替えに時間が、必要無い子は普通に制服で行くけどね。」

ミイラ男の子などは、今のうちに全身に包帯を巻いておかないと、開始と同時にお化け役をすることはできない。そのため、ジャージの下などにある程度の準備をしておくのだ。

「そっか、それでも秋にとっては恐怖やわな。そろそろお化け嫌いの卒業できたらええんやけどな。」

「良いんだよ。完璧すぎたら嫌だもん。最強美少女で芸術の女神なボクも、お化けには弱いんだもん。」

「もう一つ弱いもんがあるやる?」

「ん?」

ボクが首をかしげると、竜はボクのことを抱きしめる。

「心友にお願いされると断れないだろ?もつと自分を大切にしろ。秋はもつとわがままになつてええとおもつよ。」

「うん。」

ボクは小さくうなずくと、顔を見上げる。ボクよりもずっと大きな竜の体だから、晴れた空にぽっかりと竜の顔が見える。

そして、ボクと竜が唇を重ねるのだった。

「もしもし、二人の世界に入っているとこ悪いんだけど、会話全部筒抜けだったわよ。」

「ひゃー!」

ボクは真赤になって竜の体から離れる。そして、声を掛けてきた和美の方を向く。

「ここには森君の盗聴器が設置されてるのを忘れたの？」

「でも、受信機の方を回収して、今はミーちゃんが持つてるんじゃないの？」

そう言うと、和美が受信機をヒラヒラとさせた。

「どうせ二人つきりになるなら屋上か美術室だと思って、スイッチを入れたらこれだもの。ミーちゃんから借りておいてよかったわよ。それよりも、そろそろ開会式行くわよ。」

「う、うん。」

「竜くんも残念そうな顔しないの。文化祭期間中は秋を一人占めできかないことは決定事項だけだね。」

「せやな。受付するんやもんな。」

「そういって、わかったらさっさと行くわよ。」

「え？え？どういってこと？それより、竜、クラスで問題って言うだけど、どうしたの？」

ボクの相談ばかり聞いてもらっている気がしていたので、ボクは体育館に向かう間だけでも、竜の相談に乗ろうとした。

「そんなの決まってるじゃないの。竜くんのことを好きな子が秋ちゃんが悪口でも言ってる喧嘩したんでしょ。昔から竜くんも秋も自分のことになるよと平気なのに、お互いのことをけなされたりすると怒るんだから。」

「え？本当？」

「・・・」

竜は小さくうなずいた。中学の時までは浩太が色々な情報をボクや竜に伝えてくれていたので、こういうた情報に困ることはなかったが、今は竜がきちんと話をしてくれないと、ボクは解らないんだという、今度からはきちんと何でも話すと約束してくれた。

「うん。その方がボクも楽だよ。誰に好かれていて、好かれていないのか解り易いしね。」

「あんたら相変わらず相手を信頼してるのね。」

「ん？竜はおバカなこと言うことはあっても、約束は絶対に守ってくれるからね。」

「おバカなことってなんやねん。俺は頭はええ方やないか。」

「ん〜。なんかそれとは違うおバカさが竜にはあるんだよ。まあそれが可愛いんだけどね。」

「男が可愛いとか言われても嬉しくないっちゆうの。もつとええところを見るよ。たとえば、スポーツ万能なところをカッコ良いとかあるやん。」

「ボクと勝負する？相変わらず学習しないね。そんなところがおバカなんだよ。」

「秋個人と勝負して、勝てる奴みたい、おるんか！！陸上競技会俺が勝ったやないか。」

「そういえば、陸上競技会の罰ゲームなんだったのよ。秋に聞いても教えてくれないのよ。」

ここで和美が横から口を挟む。ボクはあんな恥ずかしい思いをしたこともあり、終わった後なら教えても問題がなかったにもかかわらず、誰にも何をしたのか教えていない。

「ああ、二人で山登りしたんやよ。それは大変やったんやから。」

「罰ゲームで山登り？しかも勝った竜くんが大変ってどういうことなの？」

「まあその話はまた今度にしようよ。ほら、体育館も近付いてきたし、竜は自分のクラスに行きなさいよ。」

「ちょっと、もっと詳しく聞きたいわ。」

和美を遮り、ボクらはそれぞれのクラスの列に向かう。といっても、ボクと竜は隣のクラスで出席番号が近いので、結構近くにいるんだけどね。

ついに、文化祭の開催だ。ミーちゃんは執行部として前に出ていたけど、まだ一年生ということもあって、開会式は現二年生の先輩に譲り、裏方として活躍しているようだ。それでも美人なミーちゃんに視線が集まっているのが分かる。

「ミーちゃんの人気は上々だね。来年が楽しみだよ。」

「クーちゃん。それ本気で言ってるの？」

「え？だって、ミーちゃんの人気は確かだし、ミーちゃんにお願いして部費UPと陸上競技会を春にしてもらおう予定だもん。」

「いいわ。私が間違っていたわ。」

川瀬と蟹津ということ、近くにいた明実が何故か頭を抱えてしまっている。そして、ボクらのクラスはお化けの衣装ということもあり、かなり注目されているので、ボクも自重して大人しくしていることにした。

『あなたが一番注目されてるのよ。お化けの衣装がなくなつて、絶

対に私たちのクラスに視線が集まっているの解ってるのかしら？絶対に自分が好意的な意味で注目されてるのには気づいていないわよね。

□

ボクの後ろから溜息が聞こえる。すると、何故かとなりのクラスの竜も同じように溜息を吐きだした。

竜と明実がシンクロ？最近仲良くなっては来たけど、ボクを通してのはずだったんだけどな。

本当に無難で何の面白みもなかった開会式を終えると、ボクらは各自の持ち場へと向かう。T高の文化祭は学校外からの訪問もあるの
で、かなり大々的な文化祭である。

「いらつしゃいませ。こちらはお化け屋敷のブースとなっております。冥界への道を進みたいお方は、列にお並びくださいませ。もし、列からはみ出しますと、そのまま冥界から帰って来れなくなるかもしれない。その時は私どもも責任を一切とることはできません。」

長すぎじゃない？受付の決まり文句を言いながら整列させているのだが、セリフが多すぎて、優花なんかは、適当に省略しているので、冥界に行っちゃってるお客様もいる。

「きゃあああああ！！！」

ビクッ！！

また一人のお客様が冥界へと旅立たれました。

「クーちゃん・・・悲鳴が上がるたびに私の服をつかむのやめてくれないかしら？最初は綺麗だった魔女の衣装がしわだらけになっちゃったわよ？」

「ごめんね。でも、それはボクの責任じゃないよ。か、壁が薄いのがいけないんだ。」

「悲鳴が聞こえるようになって、態と窓を少し開けて音を漏らしてるのよ。聞こえて当然じゃないの。」

「そ、そんなことボクは聞いてないよ。」

そうなのだ。既に10組以上の人が中に入っているのだが、ことごとく全ての生徒が途中で悲鳴をあげるため、ボクは毎回おびえながら受付の仕事をしなくてはいけない。

「結局最後まで声を上げずに通り過ぎた人は一人もいないわね。どうなってるのよ。明るい所で見ていた時はそれほどでもなかったけど、私も今自分のクラスの出し物に参加する気は起きないわ。」

「こんなに列になってるんだもん。ボクらがお客として参加する必要はないさ。それよりも、さつきから、写真の売れ行きがヤバイかも、そろそろ森君に追加をお願いしてくれるかな？」

「嫌よ。私だつて中に入るの怖いって言ったでしょ？頼みのミーちゃんも執行部の仕事が忙しいからってまだ交代に来れないみたいだし……」

今受付のところにいるのは優花とボクと明実の三人だ。一番動きや

すい格好をしているボクは脅えて動けず、明実はボクの手が離してくれそうにない。こんな場所で一人つきりなんて絶対にやだ。

「優花、ごめんなんだけど、森君に写真の追加を頼んできてくれる？」

「いいわよ。じゃあ、最後尾にツン先生言ってくれる？」

「解ったわ。」

ボクは声の聞こえない最後尾に行けることに軽く安堵しながら、優花と持ち場を交代して、中に行ってもらおう。

「きゃー！！」

クラスの子たちは、優花と知っていて驚かせたんだろうな・・・みんなお化けの着ぐるみ着てはいつてくるお客はいないって解ってるじゃないか。

おそらく優花の空手でコテンパンにのされた生徒がいるだろうが、そこに関しては、まっ直ぐ冥界に行けることだし、心配いらないだろう。

「秋ちゃん!!」

最後尾に着くと、見知った人がそこにはいた。

「花梨部長。来てくれたんですね。嬉しいです。」

「君たちがやっているからというのもあるんだけど、それ以上に私は昔からお化け屋敷というものが好きだから、楽しみにしているわ。」

「きっと満足していただけですよ。今まで入った組は声を上げなかった人は一人もいなかったんですから。」

「なるほど、それは楽しみね。」

「あの・・・先に声をかけたのは俺だよな？何で花梨とばかり話をするんだい？」

「先輩も楽しんでくださいな。」

「お、おう・・・」

そう言つて、お辞儀をして立ち去るつとすると、泣きそうな顔をす
る河野先輩だった。

「ちょっとした冗談ですよ。せつかくですから、おしゃべりしてい
きましようよ。」

「びつくりしたよ。俺だけ除け物にされたかと思つたよ。」

「そんなことするわけないじゃないですか。ところで河野先輩、中
が暗いからつて、花梨部長にいたずらしちゃだめですよ。」

「そ、そんなことするわけないじゃないか。」

「当然よ。第一、そんなことを私が許すと思つているの？」

「それはそうなんですが、なんだか今日の花梨部長はいつもよりも
少し何かが違う気がして……」

そうなのだ、先ほど会話している時も何か違和感があったのだが、
今日の花梨部長は普段ある絶対の守護のような雰囲気薄い。

それに、言葉使いがいつもと少し違う気がする。気のせいかもしれないが、ちよつとした違いにも最近敏感になってきたボクの第六感が変化を感じ取ってしまったている。

「大丈夫だ。毎回失敗して懲りたからな。」

「え？前にもやろうとしたことがあつたんですか？セクハラで訴えられますよ。」

「勘弁してくれ、ただでさえ、花梨の奴隷みたいな扱いになつてるんだから、これ以上酷使されたらたまつたもんじゃない。」

どうやら、花梨部長と河野先輩の仲は友人というよりも主従関係に近い存在になつているようだ。これならひと安心と思つてしていると、河野先輩から聞きつてならない話題が上つた。

「そういえば、かなりレアな写真を配つているみたいだけど、大丈夫なのかい？柔道着を着た小学校のころの写真かな？かなり高価な値段とはいえ、秋ちゃんの写真ともなれば購入する奴もいるだろ？」

「あんたが言わないの。さっき優花ちゃんから買ってたじゃないの。」

「どんな写真ですか？」

河野先輩から写真を見せてもらつと、そこには小学校の大会の時だと思われる写真があった。その他の写真は今回ボクが許可したものだ、その一枚だけは値段も高く1万円という値段で裏メニューなんて言われているそうだ。

「森君・・・ちよつと、”用事”ができましたので、申し訳ないのですが、失礼させていただきます。」

ボクの用事に花梨部長が反応したものの、ボクはそんなことに構つてはおれずに、入口の方へと足を向ける。

そこには丁度写真をもらつてきた優花が出てきており、明実と何やら話をしている。

「優花？ちよつと話があるんだけど来てくれるかな？」

ボク的笑顔に隠された黒い部分に優花が軽く悲鳴をあげる。しかし、断ることもできずに、この大量のお客を明実に任せると、優花を連れ出す。

「とりあえず、今回もらった分の写真を全部見せてくれるかな？」

「は、はい。」

優花は写真を封筒から出してボクに見せる。そこには予定していた分の写真しか入っていないかった。

「ポケットの方も見せる。明実がかわいそうだから早いこと戻らなきゃいけないから手間をかけないの。」

「じめんなさい。」

優花は誤魔化すことをあきらめて、ボクの小学校の時の写真を数十枚取り出す。

「取り分はいくらだったの？」

「三割あげるって言われて、しかもうちには特別に拡大コピーしたポスター版をくれるっていうから・・・」

「三割ね。ということは一枚三千円ももらってるじゃないの。それでいくら儲けたのよ。」

ボクがそう言くと、優花は先ほど写真を取り出したのとは逆のポケットから、3万もの大金を取り出した。

「まさか、もう十枚も売れちゃったの？」

優花はコクリと首を縦に振ると、申し訳なさそうな顔をする。

「とりあえず、このお金は没収ね。あと、森君からもお金徴収しておいて、そのお金で新しいデザインの服でも作ってあげるから、でも、これ以上の販売は禁止よ。守れないなら、その他ボクの写真はすべて販売禁止にするからね。」

「わかった。」

優花はしぶしぶお金を渡すと、写真をすべてボクに渡してバレたことを森君に報告にいった。しかし、ボクが売れたお金で服を作つてあげてことを思つてか、微妙にニヤケ顔になっていた。

「相変わらず甘いわね。まあ、今回は優花ちゃんも悪いと思つているみたいだから良いけど、もっと厳しくした方がいいんじゃないの？」

「和美、聞いていたんだ。」

「ええ、受付に行ったら、二人ともいないんだもの。まあミーちゃんがいるから問題はないけどね。」

「そっか、交代の時間近かったんだっただね。まあ罰として優花にはもうしばらく受付してもらいませよ。」

「そうね。ただ、変な写真を売らないか私がチェックしておくわ。」

「よろしくね。」

「それくらい良いわよ。じゃあ、その写真は私が預かっておくわ。秋はちよっと休憩してらっしゃいよ。」

ボクは和美に先ほど優花から受け取った写真を渡すと、少し休憩も兼ねて美術室へと向かう。教室はお化けで一杯だし、こんな人が大勢いる時に屋上になんていけないので、唯一休憩できそうなのが、美術室だったのだ。

チャプター68（後書き）

最後に森元気くんの陰謀を軽く止めた秋ですが、お化けは出てくるわ、ドジはする。そんな感じで、ちよつと今までよりも日常路線に近いお話を書けたかと思えます。

今回のテーマは「日常の復帰」です。

え？AKIにとって再転の姫君の世界の日常ってあんな感じですよ。竜と秋はラブラブしてるし、秋の回りは秋信仰であふれているのに、秋は気付いていない的なそんな毎日を送っています。

ゆ・・・あははは。高校に入ってから多くなってきた女性からの絡みも少し今回は抑え気味です。

さて、今回は、読者様からのリクエストに一つ応えることができるかと思えます。といいましても、完全に応えるわけではなく、ちよつと懐かしい風景を楽しんでいたただく形になるんですけどね。

大半の読者様はどんなことが起こるのか予想がついてしまったとは思いますが、よろしければ次回も再転の姫君の世界に遊びに来てください。

それでは、今話も読んでくださいますと本当にありがとうございますとごうございました。

チャプター69

文化祭二日目

秋たちのクラスは一日目、観客動員数NO1を取り、さらに写真の売り上げも好調で、T高の文化祭は有名とはいえ、それでもかなりの記録を出した。

「な、何故私の写真が売れていないのですか？」

「まあまあ、予想していたことじゃないか。つーちゃんの写真がトップになるのは当然さ。」

「それは解ってますわ。蟹津さんだけでなく、川瀬さんや長田さん、さらには着ぐるみの鈴木さんにまで負けているのはどういふことですか？」

一日目の写真の売り上げ結果は、秋の写真がダントツで売れ、さらに魔女の格好をした明実や猫耳メイドの和美をしのご勢いで優花の写真が売れていた。

その次に美香の写真となり、受付を任された5人の写真の売れ行きは好調で、その次にクラスのメンバーが少しずつ売れているといった様子だ。

「まあ、今日はお稲荷さんの衣装も作ってきたから、ミーちゃんの写真も売れると思うよ。昨日はお化け屋敷なのに普通にドレス着ただけだったからね。」

秋はそう言っ、お稲荷さんの狐耳をとりつける。美香は、確かに昨日の自分は妖怪ではなく、ただのコスプレだったと、納得するのだが、そこに一人のメイドが現れる。

「さあ、今日もがんばりましょう。」

「長田さんは、妖怪というよりも、コスプレですわよね?」

猫耳メイドの和美は今日も元気だった。実は秋にはれないように先日の写真を押収という形で数枚手に入れており、とつてもご機嫌なのだ。

「今日はわたあしも、受付をします。」

「そうだね。ケイティがどうしてもお化け役をしたいって言うてい

たから、昨日は中に入ってもらってたけど、やっぱりケイティは外の方がいいと思うよ。」

昨日は中で十分人を脅かせて楽しんだケイティも、今日は巫女さんの格好で受付を行う。日本の伝統を見たいと留学してきたケイティに間違った教育をしているような気がしてならない秋たちだったが、とにかく本人が喜んでいるので問題ないだろう。

『今日は、ケイティの写真もかなり売れるだろうなあ。』

中で驚かしているクラスメイトと比べて、外で受付をしている子たちは、たくさんのファンができやすく、秋の影響で見に来た男子も女子も、いつの間にか受付の子たちの写真を手に取っているのだ。

「今日はボクと和美は午前中だけ受付したら、用事でいなくなるから、後はみんなに頼んだよ。」

昨日の半日と今日の午前でクラスの仕事は終わりにして、あとは秋と和美は文化祭を楽しむつもりでいる。

お化け屋敷で脅かすことにはまって、一日中ここにいると言うものも中には存在するが、基本的にはローテーションを組んで休んだり、他のクラスの出し物を見にいたりしている。

「ツン先生がいなくなったら、うちらすっごい寂しいよ。」

「それに、クーちゃん人気で繁盛しているところはあるとおもっもん。」

「最初はそうみたいだったけど、中に入った人の口コミで、すっごい怖いって有名になったから、そればかりじゃなくなってきたんじゃないかな？」

「なんでボクがいるとお客が増えるの？」

「ファンクラブの子たちが見に来てくれるでしょ？まあ、午後から秋がいなくってもおそらく文化祭の売り上げのNO1はいただいたも同然よ。」

「模擬店よりも売り上げが高いなんて、滅多にないことだから、ひよっとしたら何か特別な賞をおくるかもしれないわ。昨日の執行部の反省会でも、ここのお化け屋敷の話題はでていましたもの。」

美香の発言により、クラスのやる気が一段と上がった。実際しよほい遊園地のお化け屋敷と比べても怖いくらいのかなり本格的なお化け屋敷に、T高文化祭に来たら、ここにまず行けといった案内がされているらしい。

二日目は、開会式ではなく、それぞれのクラスで準備ができ次第始まる。そのため、秋たちのクラスは急いで衣装を着替え、証明を落とすと、受付を始める。

「何で先頭に花梨部長が並んでるんですか？」

「いやあ、昨日すっごく面白かったから、今度は美術部のメンバーで来ようとおもってね。」

受付の席に着いた秋は、朝一番から並んでいたであろう花梨を見つけると、あきれて良いやら、喜んでいいやらと言った顔をする。

「しかし、中々面白いものを作ったわね。秋ちゃんも一緒に中に入りましょうよ。どこを自分で作ったのか教えてほしいわ。」

「静香先輩、それはできませんが、あえて言うなら、ほとんどがボクと今美術部に所属しているメンバーの作品ですよ。この衣装や被りものも、ほとんどボクらが作りましたから。」

「ボクらねえ。寝る間も惜しんで針仕事していたのは秋くらいのもよ。私たちは、基本的に一人一着と前日からのセットの作成くらいなもの。」

「うん。うちもツン先生みたいに手先が器用だったらもつと手伝えたのかもしれないけど、ほとんどツン先生が作ってくれたよね。」

優花と和美によって秋の作ったものが多いことがバラされる。といっても、別に隠すようなことでもないのだが、秋的には、以前花梨に言われたみんなに頼るということを実行したつもりだったのだ。

「まあ、できるものがするという考えも悪くはないが、それで君の体調が悪くなったらいけないんだ。ある程度は妥協も必要だよ。」

「妥協なんて、優花たちの作った衣装もすっごく良いものができましたよ。今日は二度目ですし、ゆっくりそのあたりも注目して楽しんでください。」

お化け屋敷に二度目はいるということは、どこでお化けが出てくるかがわかるということだ。花梨はそう言った意味でも心のゆとりがあることだろう。

ただし、出てくるお化け等は、時間帯によって違うし、多少のパターンも用意しているので、全く同じにはなっていない。

『それに、今日は昨日よりもなんだか、守護の力が強いみたい。こ

れなら、いつもの花梨先輩だ。やっぱり河野先輩の影響だったのかな？」

「それでは、”用意”がありますので、これで。」

「ああ、早く開いてもらえると私も嬉しいよ。」

「秋ちゃんの商品早く見てみたいわ。」

「・・・」

陽子はお化けにはあまり興味がないらしい。静香と花梨と比べると口数も少なく、かと言っておびえている様子も見られない。

10分ほどたつと、中から、準備ができたと言図があり、秋たちはお客を順番に通す。

「いらっしやいませ。こちらはお化け屋敷のブースとなっております。冥界への道を進みたいお方は、列にお並びくださいませ。もし、列からはみ出しますと、そのまま冥界から帰って来れなくなるかもしれません。その時は私どもも責任を一切とることはできません。」

お約束となつたセリフを秋が言うと、それまで雑然としていた列がきれいになる。秋は冥界に行くのがそんなに怖いのかな？という的外れな感想を抱いていたが、秋の言葉に聞き入ってそれに従っている者が多くいることは気付いていない。

午前は昨日と同じように大量のお客が押し寄せ、午後からもその列は減る様子も見えず、中でも受け付けでも、休憩に中々入れずに、順番に休憩をとるしかない。

特に、中は3分後に次の客を入れるようにしているのだが、怖がりな子とスタスタと進める子ではどうしても差が出てしまつらしく、狭い教室を一回りするだけだというのに、中々客が引き切ることがない。

「とりあえず、秋と私はそろそろ抜けるわよ。このままじゃちが明かないわ。中でお化けやつてる子から受付にまわってもらえるみたいだし、さつさと休憩に入っちゃいませよ。」

「う、うん。ちょっと、和美、待って。」

秋は和美に多少強引に引つ張られてお化け屋敷を後にする。和美は秋の性格からして、忙しいあの場を離れることに罪悪感が湧き、中々離れられないと考えたのだ。

実際は、秋が離れることによって、少しだが、客足が減ったことにより、落ち着いてお化け屋敷をすることができるのだが、そのあたりは秋には黙っておく。

「とりあえず、この衣装を着替えましょ。美術室なら誰にも見られずに着替えられるかしら？」

「うん。じゃあそこに行こうか。」

秋と和美は美術室に向かう。美術部員でない秋は鍵を持っていないのだが、文化祭中は何があっても避難できるようにと花梨の計らいで鍵は開きっぱなしになっている。

二人はここでお化け屋敷の衣装から制服に着替える。秋は準備が整うと、電話をかける。

「ごめんね。ちょっと待ったかな？今から合流できるから、今どこにいる？」

（お疲れ様、竜さんと一緒に体育館の側の模擬店にいるわよ。）

「解った。今から和美と一緒に行くから、そこで待っててね。」

(はいはい。約束のもの持ってきた?)

「もちろんだよ。じゃあ、すぐに着くと思うから。」

秋は電源を切ると、和美と一緒に体育館の方へと歩いて行く。

秋と和美が体育館の側に着くと、そこでは演劇部の子たちが今日上演される舞台の看板とピラを配っており、中々の人気を誇っているようだ。

「メグ遅いぞ。」

「ごめん、おまたせ。」

「今から、ご飯を食べて演劇でも見に行こうと思うんだけど、良いかな?」

「うん、それは別に良いけど。ボクの学校なのに、案内する必要がないなんて、不思議だね。」

「相変わらずの情報通だからね。でも、最近面白いことが起こらないから、廃業しようかなんて言ってるのよ。」

「そうなんだよ。中学までと違って、メグちゃんと同じ学校じゃないから、どんな情報も一歩後れをとるから面白くなってるね。」

「そこで何で秋が出てくるのよ。自分の学校の情報屋してればいいじゃないの。」

「和美ちゃんは解ってないね。メグちゃんの情報は、Y高でも高く売れるくらい知名度の高いものなんだよ。もし僕らが、幼少期の写真なんかを売りさばいたら、それこそ何十万というお金を手に入れられるはずさ。」

昨日、実際に写真が売られ、一万円という学生にはかなりの高額にも関わらず飛ぶようにして売れてしまったことを話す。

「そうだろ？しかも、僕らは、それ以上のレアな写真だって多数持っているんだ。それこそ、いくらだって儲けれるさ。」

「やめてよ。誰か知らない人が、ボクの写真を持つてるなんてなんだか嫌だよ。」

「そうだね。僕らもそれはしないようにしているぞ。」

「それよりい。早くお昼ごはんにしようよ。」

「そうだね。じゃあ、ここだと目立つし、少し移動しよう。」

「何で私たちT高の生徒よりも前を歩くかな・・・」

「当然、お昼をゆっくり食べられる場所を事前に調べておいたからだよ。」

浩太の後に続いて、ぞろぞろとみんなが歩いて行く。もう会話で気づいているかもしれないが、T高の文化祭に集まったのは、秋の中学からの心友メンバーだ。

文化祭の喧騒から少し離れた場所に、浩太の言うゆっくりとできる場所があった。秋もその場所のことは知っていたが、文化祭という日に上手いこと人が通らない場所があるなんて思っておらず、驚く。

「やっぱり、浩太がいるとこういう時に便利だね。ボクなんて自分のクラスと隣のクラスが何をしているかと、そんなくらいしか調べて無かったもんな。」

「確かにそうよね。私たちだって、浩太くんに全部任せて、後は自分たちの準備さえしてくればいいんだもん。すっごく助かるわ。」

麻美も今回は何にも調べずに来たようだ。麻美や司は、裏で画策をするときには事前に色々と準備を怠らないが、最近ではこうして遊ぶ時全て計画を浩太に任せることが多くなっていた。

「麻美と司の場合は、そういう計画はしないもんね。いつも麻美と司にはめられてたけどね。」

「はめたなんて、人間の悪いこと言わないでよ。私たちは一緒に楽しんでいただけよ。」

「楽しむ内容が全部ボクたちのことをからかう内容だった気がするのは、ボクの気のせいかな？」

「当然よ。ね？鈴だってそうでしょ？」

「うん。メグには幸せになって欲しいもの。からかうなんて以ての外よ。」

鈴はそうは言いながらも、口元を手で隠していた。秋はそんな二人

の様子に何故か顔をほころばせるのだった。

「なんだか、すつごく久し振りな気がするわね。こうしてみんなで集まるの。」

「そうだね。夏休み中も何度か会ってはいたけど、こうして全員が集まったのは春以来じゃないかな？」

「そうかもしれないわね。それで、春からどうなってるのかしら？」

「クラスにも馴染んだし、もうほとんど問題ないよ。それは夏休みに逢った時にいったじゃないか。」

「そつちじゃなくて、竜くんとの進展。」

「ちょ、べ、別に何も無いよ……」

先ほどから、竜と司はずっと何かについて話こんであり、秋の方には話題を振ってこないし、何も聞いていない。しかし、自分自身がこれくらいの距離なら会話を認識できるので、秋は竜にも聞かれていると思ってしまう。

「あのね。秋ちゃんは結構特別なのよ？そこら辺を理解してるかしら？」

「え？へ？」

「普通他人と会話をしていて、自分の名前が呼ばれでもしない限り、人はそつちに注意を向けることはないのよ。それで、今さっき名前を言ったのに話こんでいるということは、こつちの会話なんて聞こえていないの。」

「ああ、カクテルパーティー現象だっけ？」

「そこまでは知らないけど、今あつちが別の話をしてるんだから、心配しないで全部話しちゃっていいわよ。」

相変わらずの麻美だった。秋が何かを隠していること、何かを心配していることを鋭く読み取ると、周りに配慮しながらも胸の内を聞いてくる。

秋はみんなまで話して問題ないところは後に回し、とにかく今一番相談したいことを話した。

「え？じゃあ、秋と竜くんは結婚しちゃうの？」

「ちょっと、声が大きいわよ。」

状況を察した浩太が竜と司の方に加わり、こちらの話を聞こえないようにしてくれているとはいえ、和美の声は聞こえてしまっただろう。

「ん？どないしたんや？」

「何でもないわ。それよりも、そろそろご飯にしない？つまり話はあるだろうけど、お腹がすいたんじゃない？」

麻美のフォローにより、竜の意識はお弁当へと向かう。

「そうだね。久しぶりにボクら美女三人が腕を振るうんだから、残しちゃダメだぞ。」

秋もひとまず麻美の提案に乗る。しかし、秋自身は毎日のように作っているのだが、こうしてみんなで集まってお弁当を持つてくるのは久しぶりだった。

「せやな。鈴ちゃんの和食や麻美ちゃんのデザートも久しぶりに食

べさせてもらわないかなでな。」

「秋ちゃんと違って、私たちは毎日作ってるわけじゃないんだから、そんなに上達はしてないわよ。」

それでも、麻美や鈴の作ってくれたお弁当もすごく美味しそうだった。秋は自分と家族以外が作った料理でこんなに安心して口にできる料理は他には無い。

「「いただきます。」」

それぞれ思い思いに食べ始めたかに見えるが、きちんと彼女の作った料理を彼氏がまず食べている。このあたりは、昔からの習慣なのだろう。そして、次に箸が伸びるのが秋の作ったお弁当で、全員の箸が集中するのもまた、いつものことだ。

「美味しい」

「ありがと、そう言ってもらえると、作った甲斐があるよ。」

「私ももう少し練習しないよいけないわね。秋ちゃんにいつまでも任せっきりじゃいけないもの。」

「そんなことないよ。麻美が作ったサンドイッチもすっごく美味しいよ。」

そう言っつて、秋は嬉しそうに麻美のサンドイッチを頬張る。

「ありがとう。前に食中毒を起こしてからは、あんまり他人が作ったものを口にしてないんでしょ？」

「そうなんだよね。でも、麻美や鈴が作ったものなら絶対に平気でしょ？」

「信賴つていうのかしら？嬉しいわ。そんなに喜んでもらえるなら、毎日でも作ってあげたいわ。」

「女の子ってそんなもんなんか？前に秋もそんなこというてたよな？」

「言葉のあやよ。本当に毎日作るのはすっごく大変よ。でも、それくらい嬉しいってことなの。竜くんは本当に毎日常ちゃんにお弁当作ってもらってるんでしょ？感謝しなきゃダメよ。」

「そっか、いつもありがとうな。」

「う、うん。」

秋は真赤になりながら頷く。秋としては高校に入ってから毎日していることなので、今さら感謝されても当然のことになってしまいつつある。

しかし、こうやって改めて感謝されるのも悪い気分じゃない。その様子が顔に出ていたのか、麻美に耳元でささやかれてしまった。

「どうせ、喜んでもらえるなら毎日作ってもいいよか思ってるんでしょ？」

「はう……」

真赤になった秋に視線が集まるものの、竜以外はそれだけで理解すると、また談笑にもどっていく。和美と鈴は幼馴染ということもあり、二人で話。

竜と司と浩太は男の子同士の話があるようだ。そして、麻美と秋は先ほどの続きを話します。

「なるほどね。相変わらずお酒に弱いのね。でも、竜くんはそれで良いつて思ってくれたんでしょ？だったら何も心配することないんじゃないかしら？」

「ボクつてすつごく不幸体質だから、この前も死にかけたり、事故にあったりしたし・・・」

「そんなことは、昔からじゃないの。それでも良いつて思ってくれてるから、竜くんは秋ちゃんと呼き合ってるんでしょ？そんなことで嫌気がさすなら、中学の時に別れてるわよ。」

「だって、中学の時とは比べモノにならないくらい一杯不幸なことが起こってるんだよ？」

「確かにそうね。高校に入ってから、急に増えたわよね。どうしちやったのかしら。」

「それは簡単だ。今まで君たちの側にいたから起きなかつた不幸が、一気にしわ寄せとして高校に入ってから起こっただけだよ。」

「そうだったの。じゃあ、もうしばらくしたら、安定するかもしれないわね。」

「確かにそうだね。じゃあ、これからは少しは安全になるのかな？」

「そうとも限らないさ。何よりも、君が自分の周りの人間を守りたいと思っっている以上事故や事件に巻き込まれることは決してなくなることはないからね。」

「どうにか、ならないんでしょうか？」

「さあ。そこまでは私にもわからないね。ところで、驚かせるつもりだったのだが、どうして二人とも自然に会話を続けているんだい？」

「前からあなたのことは聞いていましたから。河合花梨先輩ですよ。ね？はじめまして、私は藤田麻美です。」

「は、はじめまして。」

「花梨部長。麻美たちを驚かせたかったら、それこそ大きな事故や事件の一つくらい持ってこないとだめですよ。」

「いや、普通の人は十分驚くくらいのタイミングだったと思うんだが、流石は君の心友たちといったところだね。ところで、その事故なんだが、起こったらしいぞ。」

「本当ですか？どこで？」

「なんでも、演劇部のメンバーが午前の公演で問題があったとかで一人出れなくなって、午後の公演は中止するそうさ。つまり、君たちのプランは変更せざる得ないというわけだね。」

「ん〜。じゃあこのまま話しても良いんだけど、せっかく文化祭に来たんだし、どこか廻る？」

「そうね。浩太くん。どうしたらいいかしら？」

「屋外の場合は、メグちゃんを待っている間にほとんど回ってしまったし、屋内の展示でも見て回るうか？」

「そうね。どうせだったら、秋ちゃんのクラスにも行ってみたいわ。」

「え？あそこに行くの？」

麻美たちは秋のクラスがお化け屋敷をしていることを知っているため、わざとそう言ったのだが、そこに花梨が食いついた。

「あそこは素晴らしいぞ。高校生であればどのクオリティを出すお化け屋敷は今までに見たことがない。是非とも行くべきだ。そうだが、私も一緒に行こう。」

「花梨部長。何度あのお化け屋敷に行くつもりですか？」

「実はこれで四回目になるな。君と一緒になら、あの長蛇の列を並ばずに済みそうだし是非とも一緒に行こう。」

秋たちのクラスのお化け屋敷はかなりの人気で一日に何度も入れるようなものではない。それを既に三回行ったということは、朝一番に入ってまた入ってきていたのだろう。

秋の休憩のシフトを考えると、おそらく秋が抜けてすぐくらいにお化け屋敷に入ることができたといった感じだろう。

「できるか分かりませんが、クラスの子に頼んでみますよ。」

「あれ？あんまり怖がらないんだね。」

「お化けも怖いですが、一番怖いのは暗い所で予期せぬ事故が起こ

ることですから、このメンバーがいれば、そんなことも起こりませんし、そこまで怖がる必要はありません。」

「なるほど、あくまで君自身の心配はないわけなんだね。君はもう少し自分のことを大切にした方がいいと前にも言ったよね？君が君自身を大切にすることは、周りを救うことにもなるんだ。そのことを学んだ方がいい。」

「ボクがボクを？周りを守る？」

「まあ、そのことはまた今度でいいさ。さあ、今からは楽しいお化け屋敷だ。」

花梨はそう言うと、自分が先頭になっていこうとする。しかし、秋たちは先ほど広げたお弁当を片づけなくてはならず、急いで包みをしまう。

「話には聞いていたけど、本当に独特な人ね。」

「うん。何て言うのかな、不思議と悪い気はしないんだけど、どこが見透かされているようなきがするんだよね。」

「そうだねえ。でもお、秋の考えてることなんてえ、僕らだって解

るんだからあ。あんまり気にしない方がいいよあ。」

「司の言う通りかもしれないわね。秋ちゃんってすっごくわかり易いもの。竜くんもだけどね。」

「そ、そんな、ボクらを単純カップルみたいに言わないでくれないかな？」

「実際そうじゃないの？お化け屋敷に行くって解ったとたんにはさあ。秋の心配しだすんだよ。自分が一番被害を受けることには全く気付いてないからねえ。」

「ボクの心配？」

「ほら、今も秋が考えてることが解ったあ。」ボクの心配してくれるなんて嬉しい。やっぱり、竜はボクのこと一番に考えてくれてるんだな。””ってところでしょう？」

「そ、そんなことは・・・無くはないけど・・・」

「付けくわえましょうか？」ボクの心配ばかりしないで、自分のことも心配して欲しいよ”なんてのも考えたでしょ？自分のことは棚において人の心配ばかりする秋ちゃんらしいけどね。さっきの

河合先輩の言っていたこともあながち嘘じゃないわね。」

「か、勝手に決めないでよ。ボクがいつそんなことを言ったんだよ。」

「じゃあ、違うの？」

「ち……違うないけど……」

「秋ちゃん。本当に私たちは秋ちゃんが心配よ。もう少し自分を大切にしているのよ。我がままになって良いのよ。中学までは側に我がままを言える私達がいたかもしれないけど、高校にはいつてから誰にも甘えていないんじゃない？」

「そんなこと、高校生になって甘えるなんて。」

「高校生って、体は大人っぽくなってるけど、まだ子どもよ。甘えて何が悪いの？物わかり良い子で過ごすのもいいかもしれないけど、もう少し自分に正直になって良いんじゃないかしら？」

「別に、自分に嘘を付いているわけじゃないよ。ただ……」

「そうね。いきなりは無理かもしれないけど、クラスの子とも仲良くなっただんでしょ？竜くんもいいけど、そのクラスの子たちにも少し甘えてみたらいいんじゃないかしら？」

昔から麻美はどこか秋のお姉さんのような雰囲気があった。司や竜と一緒にいる時に感じるほっとするような感覚と麻美と一緒にいるときに感じる感覚は全く違うものだったが、それでも悪い気分はない。

むしろ、女の子同士ではやはり一番安心できるものを持っているような気がする秋だった。

そして、もう一人安心して接することができるのが鈴なのだが、鈴は今日はあまり秋に話しかけてこない。秋はそれが何故だか解っていた。鈴も高校生になって、成長している。

高校に入りたてのころ、秋が中学時代の心友たちがいないことを寂しがったことと同じことを鈴も感じ、何度もくじけそうになった。そんな時に浩太を中心として支えてくれ、やっと秋がない生活に慣れてきたのだ。

そんなことから、秋に依存していた自分が成長したんだと秋に見せたくて、秋に自分の姿を見せているのだ。秋なら気づいてくれると信じ、そしてその信頼をきちんと秋は受け止め応えていた。

チャプター69（後書き）

更新が遅くなつてしまい本当に申し訳ありません。

しかも、まだ納得ができていないため、次回に続きます。

今回のテーマは、変わらぬものの変つたもの、です。心友たちの出現に伴い、一番に出したいものは、昔の心友たちとの変わらないものだったので、書いていくうちに、それだけではいけない。そんな風を感じ、変わった部分をテーマと内容につけ足しました。本当はもっとドタバタコメディ風にしたかったのですが、まとまり切らず、一万文字を超えてしまったため、次回に持ち越させていたきたいと思えます。

ここまで読んでくださりまして、本当にありがとうございます。このような作者ではございますが、これからもどうかよろしくお願ひいたします。

チャプター70

心友達の対面

ボクらは、花梨部長に剛引に引つ張られるような形で、ボクのクラスが開いているお化け屋敷へとやってきた。そこには、午前中あれほどの長蛇の列が並んでいたとは思えないほど、短い列があった。

「この列どうしたの？午前中はあんなにたくさん人がいたのに。」

受付をしていた明実にボクはどうしてこんなにも人数が減っているのかを尋ねてみる。

「おかえり、あんなに人がいたって、何度も見にくる人はそこまで多くはないから、昨日と今日の午前中で大半の人が一度入っちゃったんじゃないかしら？」

そう言われてみれば、隣にいる花梨部長だって、これで四度目と言っているくらい、回転率の早いお化け屋敷だ。当然あんな長蛇の列が続くはずもなく、こうして時間がたてば人が減るのは納得がいく。

「そうだったんだ。午前中で抜けさせてもらって申し訳ない気分だったけど、そんなに気にすること無かったんだね。」

「ええ、クーちゃんは文化祭を思いっきり楽しんで来ていいわ。ところで、後ろにいる人たちは??見慣れない顔だけど・・・」

長蛇の列が消えていたことに驚いて、紹介するのを忘れていた。ボクは和美と竜の二人以外の心友達を明実に紹介する。

「みんなの話も前にしたから知ってるでしょ?みんなボクの心友なんだよ。前にアルバムなんかも見せたことあるから、わかるでしょ?」

「ええ、私はクーちゃんと同じクラスの川瀬明実です。よろしくお願いします。」

「そんなよそよそしい挨拶はいらないわよ。同い年でしょ?これからも秋ちゃんのことよろしくね。」

「あ、はい。」

麻美が代表して明実に返事をする、明実は少し驚いたように返事

を返す。麻美は絶世の美女で、今日は外着でおしゃれもしているの
で、その姿に見惚れてしまつのも仕方がない。

「君が噂のストラップの子お？僕らも秋から話だけは聞いてるよお。」

「えっと、司君ですよね？噂って言つのは？」

「何度も命を救われているとかあ。あとはあ、明実ちゃんがすつこ
く秋のことを好きだつてことかなあ。」

「ええ、何度も命を救われて、こんなにも大切にしてくれるんだも
の。私はクーちゃんのが大好きよ。」

「そうだねえ。でもお、大切な相手だからこそ、大事なことはきち
んと言わないといけないと思うよお。秋は鈍感だから特にねえ。」

「隠し事なんて何にもしてないわ。私たち心友だもの。」

「そうなんだあ。ところでえ、男性恐怖症つてきいてたけどお。一
人で受付していて、たくさんの男の人が来たみたいだけどお。大丈
夫だったのお？」

そう言えば、ボクはこのところ忙しくて、男性恐怖症の明実のことも気遣わずにいた気がする。ボクがお化けを怖がっている横で、明実も受け付けをしながらたくさんさんの男の人たちが来る受付にずっと一緒にいてくれた。

「え??ええ、さっきまでみーちゃんがいたし、列の整頓で優花もいるから。」

「ごめんね。ボク、自分のことばかりで、明実のこと全然気遣ってあげれてなかったんだね。ずっと怖かったの?」

そう言って、ボクは明実のことを抱きしめる。小柄な明実は座っていることもあって、立っているボクが抱きしめると頭が胸のところに来る。

「ううん。気にしないでいいわ。クーちゃんもお化けが怖いのに受付で一生懸命頑張ってたんだもん。」

ボクが明実のことを抱きしめていると、ボクが帰ってきたことに気づいた優花が列の方からやってきて、ちょうどケイティも中から出てきた。

「ツン先生。帰ってきてくれたの?」

「クラスの手伝いに帰ってきたわけじゃないわよ。といつても、これだけ列が短くなっていけば、ボクの手伝いなんて必要ないだろうけどね。今は中学の時の友達と再開して文化祭を回っていたのよ。」

「ああ、うちは鈴木優花だよ。よろしくね。美術部で、ツン先生の大大大ファンなんだ。」

「あなたがメグの一番弟子ね。話は聞いているわよ。私と浩太もメグと一緒に海良中学では美術部をしていたの。メグの作品の良さを分かってくれる子がいて私たちも嬉しいわ。」

「二人の話はツン先生から聞いているわよ。すっごくうらやましいよ。うちも海良中学に通いたかったしね。」

「確かに、海良中学でメグちゃんと作品を作ったのはすっごく自分たちの力になったよ。僕は正直そんなに上手でもなかったんだが、メグちゃんのおかげで今でも美術部に所属して作品を作ったりしているんだよ。」

「へえ。やっぱりツン先生の影響力はすごいねえ。でも、今はうちが同じ学校に通ってるんだから、ツン先生は渡さないよ。」

「大丈夫よ。今でも時々連絡はとってるし、心友であることに変わりはないんだから、優花ちゃんが心配するような奪い去るような事はしないわ。」

でも、優花ちゃんみたいなのがメグの側にいてくれてすつごく嬉しいわ。メグってどうしても自分のことを大した人間じゃないって思うところがあるから、自分に自信を持ってほしいのよ。」

「そうだねえ。あんな素敵な作品を作る先生が社会に要らない人だなんて誰も思わないっていうのに、自分がいなきゃ誰かを傷つけることはないなんて思うからね。それでも、うちは先生のこと尊敬してるけどね。」

優花と鈴と浩太は同じ美術部ということもあってすぐに打ち解けたようだ。話している内容がボクの話でなんだか恥ずかしい内容な気がするんだが、初めて出会った三人にとって共通の話題なんてボクのことしかないだろうからそこはあきらめよう。

「アキの友達でえすか？わたあしにも紹介してくださいさあい。」

「うん。この子たちはジュニアハイスクールの心友たちだよ。今優花と話しているのが鈴と浩太、この可愛い女の子が麻美でこのボケっとした子が司だよ。みんなボクの大切な人なんだ。」

「はじめまして、わたあしの名前は、ケイティでえす。アキのフレ

ンドでえす。」

「よろしくね。本当に日本語上手なのね。」

「はい。わたあしの家は毎年日本人の人が来てまあす。日本語一杯勉強しまあした。」

みんなを紹介して談話に入ってしまったのだが、花梨先輩が不機嫌になっていたので、そろそろお化け屋敷に入らないといけない。明実にお願いすると、ボクが中に入ることに心底驚いていたが、クラスメイトだからということですぐに入れてもらえることになった。

「割り込んでしまつてごめんなさい。」

「いえいえ、つんちゃんとその友達のためなら全然大丈夫。」

割り込んだ列の子に謝ると、快く通してくれた。そうはいつても、人数も多いので4組分も遅くなるのだから申し訳ない気持ちになったが、麻美や鈴は当然といった雰囲気ですぐに列に加わっている。

「まあ、メグだしね。」

「そうね。秋ちゃんなら当然よ。」

「なんでそうなるんだよ。やっぱりちゃんと後ろに並んだ方がいいんじゃないかな？」

「良いんだよ。君が望むなら、こんな列くらい一番に並ばせてもらうことなんて当然なんだ。」

花梨部長までさも当然のことであるといった様子で並ぶと、浩太・鈴のペアから順番に入っていく。司と麻美が中に入った後、ボクはもう一度花梨部長と和美の後ろになってしまった子たちにお礼を言うと言と竜と一緒に中に入っていく。

お化け屋敷の中は当然だが真っ暗だった。自分たちで教室の中から新聞紙などを使って光が入らないように窓からの光を遮ったので当然なのだが、それだけでボクは不安になる。

「とりあえず、手は離すなよ。秋にとってこんな暗さ大したことあらへんかもしれへんけど、やっぱり危ないからな。」

「うん。」

竜もくらいのがちょっと危ないと思ってるんだね。言葉が標準語になってるあたりも、今の状況に不安か何かがあるのかもしれない。ボクは竜の腕にギュッと捕まるとくらいこともあって竜の鼓動だけがやけに近くに聞こえた。

「ちょ……それはひつつきすぎじゃない？」

「そんなことないよ。離すなって言ったのは竜じゃん。」

「せやな。秋がそうしとりたいんやったら、そうしとき。」

竜はそう言つて、足を進めて行く。ボクは真つ暗で見えているか分からなかったけど、頷いておく。そうすると、密着しているおかげで気づいたみたいで、つかんでいる腕とは逆の手を使ってボクの頭を撫でてくれた。

しばらく道なりに歩いていたらのだが、気配でおおよそのタイミングが分かるボクと竜はそれほど驚くこともなく、むしろ笑顔でクラスメイトに挨拶をしながら進んで行った。その様子にクラスメイトたちが逆に驚いている様子が暗闇の中から伝わってくる。

正直二日間の中で驚かすことに失敗した人間はゼロ人で、リピーター達でさえ何度も驚かせてきた自信があつたみんなは、開始前一番怖がっていたボクを驚かせることができずに落胆しているようだった。

「ねね、驚いたフリだけでもした方がいいのかな？」

「ええんとちやう？調子に乗つて来年もやりたがるよりも、この程度のお化け屋敷じゃ秋がこわがらへんことを解らせてあげた方がええと思うしな。」

「そっか、確かにそつだね。」

ボクと竜はそれほど長くはない教室内に作られたお化け屋敷を抜出すと、司たちと合流しようとする。

「おめでとついでいませすー!!」

外に出たとたんに、明実と優花とさらにミーちゃんにまで捕まってしまうた。

「おめでとついでとついでとついでと?」

「蟹津さんが休憩に入った後に、新しい催しごとを組み込んだんですわ。みんなもご存知の通り、このお化け屋敷で声を上げなかった組は一つとしてありませんでしたので、それを利用して、初めて声を上げずにクリアした組に、記念として写真を撮ってプレゼントすることにしましたの。」

「そうだったんだ。それで、ボクらのペアが初めてだったの?」

「当然ですわ。今の今まで、誰一人として怖がらなかった人なんていませんでしたもの。まさか初めてが蟹津さんになるなんて誰ひとりとして予想してはいませんでしたわ。」

まあ確かにそうだろう。外にいた時の方が中にいる時よりも怖がる

子なんて滅多にいないだろう。ボクの場合お化けというものに対して恐怖観念があるが、お化け屋敷の中には本物のお化けはいないわけ、怖がる要素が無いということは心友たち以外知ることはできない。

「まあしゃあないわな。お化け屋敷よりも墓地とかの方が秋は怖がるもん。これで今後お化け関係で周りから脅されることがなくなつたんやしええんとちゃう？」

さつきまで臨戦態勢だった竜も外に出て、ボクが腕を離してからはのんびりとしたもので、竜にとっても怖いのはお化けではなく、暗闇で起こりうるボクの不幸だったみたいだ。

「状況は理解してもらったみたいだし、写真撮るよ。どうせだったら、中学の友達みんな写真にする？」

「そうね。じゃあ、もうちょっとまって、和美も出てくるまでまって、みんな撮りましょ。」

ボクはそう言って和美と花梨先輩のペアが出てくるのを待ち、司たちも呼んでみんな撮ってもらうことにした。優花の手には使い捨てのカメラが構えられた。その場で写真が出てくるとしても便利なやつだ。

「じゃあ、いくよ。はいチーズ！」

パシリとフラッシュがたかれ、ボクらのことを撮ると、優花は写真をヒラヒラさせながらボクらに見せてくれた。

「これって・・・」

ボクはその写真を見たときに記憶を失ってしまった。

「秋？大丈夫か？」

「うん。」

気絶した後ボクは竜たちによって保健室に連れてこられた。臨死体験とは違ってただ気を失っただけなのだが、それでも普段から臨死体験を何度も繰り返しているボクを心配して連れてきてくれたのだ。

それにしても、お化け屋敷の前で心靈写真なんてとんでもないことが起こった。ボクたちの後ろにいるはずもない男性の顔が写真に映っていたのだ。

「秋は本当にいろんなものを引き付けるけど、まさか本当に幽霊にまで好かれてたなんて、難儀な体質やな。」

「笑い事じゃないよ。あの男の人竜の方を見てたよ？」

「げ……まさか……」

ボクの言葉を聞いて不安になったのか、竜はもう一度写真を確認する。というか、そんな気味の悪い写真さっさと捨てて欲しいのだが、きちんと調べてみると言って誰も捨てようとはしない。

「確かに竜の方を向いてるかもしれないねえ。何か幽霊に恨まれることでもしたんじゃないのお？」

「あほ言つな。俺は何もしとらんわ。きちんとお墓参りもしとらんやぞ。」

「お墓から連れてきたんじゃないでしょうね？早く神社が何かでお被いしてもらおうよ。」

そんなボクらの様子を花梨部長は何とも言えない表情をして見守っていた。そのことに何か感じたボクだったが、とりあえず今は気付かなかったことにする。

「みんなごめんね。せっかく文化祭に来てくれたのに、ボクのせいで保健室になんて来ちゃうことになって。」

「秋ちゃんが気にすることはないわ。病院じゃなかったの嬉しいくらいよ。」

麻美に励まされたのか、良く分からない言葉を受けて渋面を作ると、周りにいたみんながなぜか笑顔になり笑いだす。

「ちよま、それじゃあボクが不幸体質でいつつも病院のお世話になつてるみたいじゃないか。」

「メグっていつも病院にいるものね。ひよっとしたら若いお医者さんが目当て？あその病院にカツコ良いお医者さんなんていたかしら？」

そんな人はいない。いつもボクの担当をしてくれているのは40過ぎのおじさん先生だし、第一ボクには竜が・・・

そこまで考えてボクが真赤になってあたふたしていると、不穏な視線を感じる。

「ほうほう。その反応はまんざらでもないって反応かい？」

「ち、違います。」

「そうよね。秋ちゃんの思考はとある人物まで飛躍しちゃったんだもんね。」

「メグは相変わらずよね。何かあるたびにそんな風にあの子のことばかり考えるんだから。」

「たまには私のことを思い出して赤くなって欲しいわ。」

ちよま。さつきからなんだかボクの気持ちを勝手に代弁しないでほしい。本人がいる前でそんなことを言われたら恥ずかしいじゃないか。

「秋……」

「竜、これは違うんだよ。」

「浮気しいひんっていうてたやん。」

そう言っつて竜はへこみだした。おいおい、さつきまでの会話をきちんと聞いていたのか？竜の思考回路を覗いてみたいと本気で悩んでしまうような発言を残して竜は浩太と司に励まされながらカーテンの向こう側へと行ってしまった。

「あいかわらずのニブさね。こんなんじゃ先が思いやられるわ。」

「メグもそんながっかりした顔しないで、あなた以外に好きな男なんていないって言ってあげたらいいのに。」

「ちょ、まだすぐそこにいるって。」

「大丈夫よ。さっきの発言で撃沈してるから、それよりも、最近二人の様子を見ていなかったけど、あんまり関係は進んでないのかしら?」

「それがそうでもないらしいのよ。私にも教えてくれないんだけどね。この前山登りではかなり発展したみたいなのよ。」

和美の発言により、女の子集団の会話は激化し、竜が司と浩太に励まされて戻ってくるまでボクは山登りの時にどんなことがあったのかを追求される。その矛先をかわそうとがんばるが、ボクの考えていることなどお見通しといったメンバーに囲まれてはほとんど隠しているようで隠していないようなものだった。

「竜、あんたからも誤解を解いてよ。」

戻ってきた竜に逃げようとする。

「二人つきりで山登りしたんでしょ？その時の話を教えてよ。」

「ああ、あん時は大変やったで、道に迷うわ、秋は酔っぱらうわで罰ゲームになつたらへんかったしな。」

「酔っぱらうって？ひよっとして、山で遭難して山小屋で一泊なんてドラマでしかありえないような状況になったわけじゃないわよね？」

「ち、ちがうよ。そ、そんなことないよね？竜？」

「やっぱり酔うと記憶がとぶんか？確かに一緒に山小屋で寝たやんか？」

しまった。酔っぱらって記憶が飛んでいると言ったのはボクなんだが、それでこんなことになるなんて、竜に話題を振ったのが完全に間違いだったと気づくが、今さらだろう。そのあとは鈴と麻美に酔った状態のボクが想像できたらしく、今後すべてを白状させられるのは決まっただろう。

「そんなことよりもお、秋も元気になったんだしい。そろそろ外に行こうよお。」

おお、ここでまさかの司から救いの一言が出るなんて、流石はボクの幼馴染で心友第一号だ。しかし、そのさわやかな笑顔に何か不穏な響きがある気がしたのに、その時ボクは気付いていたのにも関わらず、この場から逃れられる一心ですがりついてしまった。

「もっとゆっくりじっくり話ができる場所に移動しましょうか。」

「そうだねえ。その方が秋も白状するよお。」

裏切りものお〜。

ボクは司を睨みつけるが、こんな時のかわし方はそれぞれ心得ているらしく、結局ボクは文化祭の喧騒から少し離れた場所で麻美たちに追及されることになり洗いざらい白状させられるのだった。でも、気絶したボクを心配して人込みを避けてくれたことにも気づいていたので、やっぱりこの心友たちを本気で憎むことはできないのだった。

チャプター70（後書き）

テーマ発表！心友たちの「高進出」です。正直本当に執筆に苦労させられる回でした。

麻美たちの雰囲気を出すためにも以前までの話を全部読みなおしついでに修正作業をしますと一杯あり過ぎて^^；

そして何よりも、高校からのキャラたちとの接点の作り方がまた難しく、特に河合花梨との絡みは本当に書いていてこれで良いのか分からなくなつて削つたりつけ足したりを繰り返しました。

優花たちとの絡みについては本当に自然に指が動いてくれたのですが、どうしても一話に登場するキャラが増えると話をしていないキャラがたくさん出てきてしまつて寡黙なキャラもいないわけであり乱雑な文章になつていられるかもしれません。

一応書き分けでどのセリフがどのキャラがしゃべっているのかはご理解いただけるかとは思いますが、解り難かったら申し訳ありません。

再転の姫君チャプター70を、読んでくださつて本当にありがとうございます。

チャプター71

秋の一日

文化祭は久し振りに中学時代の心友とも遊べたし、ボクの中ではとつても満足だった。それが終わると、期末テストまであと一か月と迫り、ボクたちはまだ一年生といっても進学校で通っているT高は一年生の時からかなり広い範囲のテストが待っている。

そんなわけで、手を抜くことはできないのだが、まだ一年生ということもあって、あまりきちんと勉強をしない子もいる。

「竜、もうすぐ期末なんだから、きちんと勉強してるの?」

「まだ一か月もあるやん。流石にそんな早くから勉強はじめとらんって。」

「そんなこと言ってまたボクの対策プリントをあてにしているんじゃないでしょうね?」

「そりゃそうやる。秋の対策プリントやっとならば満点とは言わへんけど、高得点は間違いあらへんからな。」

「もう、またそんなこと言って。」

そうはいうものの、頼りにされるのは嬉しい気持ちもあり、既に作成済みのプリントの束をカバンの中から出す。

「お、もうはいできたんや。ほんま助かるわあ。」

「竜はこのプリント渡すと二回くらい解いてくれるからいつも早めに渡すでしょ?」

そうなのだ。竜は中学の時から対策用のノートやプリントを渡すと一回自分の力で解いてみて、解けないところをもう一度といった方法で解いている。解るところを飛ばせるのでかなり効率の良い方法ではあるが、それでも時間がかかるだろうといつもボクは竜には早めに渡している。

「二回で済む時はな。秋の対策を完全にしとけば困ることはあらへんから、この問題集を満点取れるようにだけしとくんて。」

「まさか学校の課題やらすにだしてたりしないでしょうね。」

「一応答え書いて出しとるけど、対策プリント終わってたらそんな時間かからへんからな。ほんま秋には感謝やわ。」

きちんと学校の課題も提出していることを確認してボクは竜にプリントの束を渡す。中学時代よりもプリントに代わってやり易くなったと言っていたので、その効果は意外とあるようだ。

竜に朝一番にプリントを渡せるのには理由がある。竜とボクは毎日一緒に学校に通っており、バスケ部の朝練に参加しているからだ。ここのところ毎日朝練に行くことが普通になっていたのだが、普通の生徒よりも30分以上早く学校に着く。

「おはようございます。」

ボクと竜が学校に着くと、既に朝練を始めている人が数名いる。部長の川本先輩と副部長の管崎先輩だ。二人は毎日一番に来てストレッチなどをしてシュート練習をしている。この二人がいつも頑張っているのを知っているので、ボクも二人の頑張りに笑顔になる。

「今日も早いですね。」

そして、夏休み以降もう二人ボクらよりも早く来る人がいる。それが河野先輩と、同じ学年でボクと一緒にクラスの敦君だ。敦君は最近めきめきと実力を伸ばしており、先輩たちに負けない練習量とセンスでレギュラー確定と思われる。

「フーちゃんたちだって、俺らが来たのはついさっきだから。」

「秋ちゃんより先に来ると、時々秋ちゃんお手製のクッキーがもらえるって解ったしな。」

努力家の敦君は純粋に朝練に参加している様だが、河野先輩は以前ボクよりも先に来た時にボクよりも早く来た先輩と竜と一緒にクッキーを食べていることを知って早く来るようになったみたい。それ

でも練習にきちんと参加してるんだし、ボクとしても問題はないんだけどね。

「じゃあ、御期待に応えて明日は何か作ってこようかな。みんなには内緒ですよ?」

「もちろんだよ。秋ちゃんの手作りお菓子をあいつらにまでごちそうする気はないしね。」

「少しくらい人数増えたからって、先輩が食べられる量が変わったりしませんよ。朝からあんまりたくさん食べて授業中に寝ないでくださいね。」

「秋ちゃんは解ってないなあ。男っていうのは独占したいものなんだよ。秋ちゃんからもたらされる幸せを独占したいって気持ちは誰だってあるんだよ。」

「そうなんですか?」

ボクは河野先輩の言葉の意味は分からなかったけど、とにかくあまり朝から大量のお菓子を持ってくるのも大変なので、少数にしかこの事實は教えていない。ボクは明日のお菓子を何にしようかと考えながらも、朝のうちにできることをしておく。

夕方の準備をしていると、他の部員の子たちも続々とやって来る。放課後と違って自由参加としているのだが、ほぼ全員が参加して、中にはボクのことを手伝ってくれる子もいる。

「そろそろ、HR 始まっちゃうよ。」

ボクがみんなに朝の練習の終わりを告げると、みんな思い思いに片づけをはじめ更衣室に行き制服に着替えると教室へと向かっていく。

「おつかれさん。いこっか。」

練習が終わった後は基本的には、いつも竜と敦君と一緒に教室に戻る。基本的にはといったのは、優花たちが朝から体育館まで押しかけてくることもあり、そうなるボクは着替えが必要ないので先に教室にいくこともあるからだ。

「最近二人とも調子良いみたいね。これならレギュラー入れるわよ。」

「本当？つーちゃんのお墨付きがあれば安心だね。顧問の先生も部長でさえもそのあたりはつーちゃんの見解を取り入れてるみたいだしね。」

「部員の様子を見るのがマネージャーの仕事の一つだからね。そのあたりは信用してもらってるわ。」

「それだけじゃないやろ。川本部長も先生も秋には鼻の下のばしまくつとるからな。」

「そんなことないよ。川本先輩はもうボクのことにはあきらめてるみたいだしね。」

そうなのだ。竜と別れたという噂が学校中に広まったことが一度あったため、その時はたくさんの人から告白を受けたのだが、誤解だったことをみんなにきちんと説明して、告白を全員から断ったことよって、ボクのことを好きだといってくる人はずいぶん減った。

「いや、絶対にあきらめとるのはちゃうと思うぞ?」

「そう?確かに優しくはしてくれるけど、先輩とは適度な距離を保ててると思うよ。それよりも問題なのは女の子たちだよ。最近減ってきたとはいえ、やっぱりまだ告白してくる子は絶えないからね。」

「せやな。男は諦めが入った奴が多いけど、女の子の方は、ダメ元って感じな子が多いから余計に増えたよな。まさか前世の話がバレ

とるとは迂闊やったわな。」

度重なる屋上での盗聴器による会話漏れと森君からの情報によって女の子たちの中ではボクの前世が男の子だったことがばれてしまっており、最近には本当に女の子からの告白ばかりを受けている。そして何度断つてもファンクラブに所属し、何度でもアタックしてくるのが彼女たちの特徴だ。

ボクもはつきりと女の子との付き合いはできないと言っているにもかかわらず、和美との仲を知ってる人などから、あきらめなければ可能性があるのでは？という考えが出ているらしい。

そんなことを話、考えているうちに、いつの間にもやらの教室の近くまで来ており、竜は隣のクラスに入り、ボクと敦君と一緒に教室へと入っていくのだが、ここでも問題が起こる。

「秋。」

「今日は女の子たちががんばった日だったんだね。」

ボクは被害を受けた敦君に同情しつつも、毎回ボクの代わりに被害を受けているにも関わらず、文句ひとつ言わない敦君に奇異の目を向ける。

「いや、そこはフーちゃんが悪くないのは解ってるんだけど、冷静に状況を確認めていないで対処して欲しいかな。」

「でも、毎日のようにこんな悪戯がされているのに、むしろ嬉しそうじゃない？ひょっとして敦君ってエムなの？」

「違うから。というか、今回は痛いわけでもないのに何でエム呼ばわりされなきゃいけないんだい？」

中学時代にボクが入ってくると野球ボールなどが飛んできたこともあり、そう言った飛来物程度ならボクが投げ返していたのだが、今日みたいな女の子が入口で待っていて抱きついて来たりする時は、下手に避けて怪我をしたら可愛そうなので、敦君をクッション代わりに使っている。

「だって、このあとの展開はいつものことじゃないか？」

そういつて、ボクは教室の隅の方でゴウゴウと怒りの炎を燃やしている女の子に指を指示してあげる。

「ちよま、優花。これは俺が悪いんじゃない？」

そこまで言って敦君は逃げようと試みたが、授業ももうすぐ始まる時間なので、外にいけないうちにボクが邪魔をする。

「つーちゃん。頼むから俺を逃がしてくれ。」

「授業始まつちゃうから今から廊下に出るのはダメだよ。さ、和美酒も、敦君がかわいそうだからそろそろ自分の席に戻るうね。」

ボクが避けたせいで敦君に突っ込んで行った和美は、ボクの顔を見ると恨みがましそうにずっとその場で止まっていたのだが、ボクが笑顔で席に着くように言うと、顔を赤くして自分の席へと帰っていた。

「あ〜っ〜し〜。あんた私の友達を抱きしめて何をニヤニヤしてたのかなあ?」

「ちよ、だから、和美ちゃんはつーちゃんに飛びついたんだから、俺は何にも悪くないだろ?」

「そうねえ。だから和美ちゃんにはなあんにもおとがめなしよ。」

そう言っつて、優花の右ストレートが敦君のみぞおちに当たる。あ、優花は空手をしてるんだからこれは正拳突きなのかな?まあどちら

にしても敦君はこうして毎朝被害を受ける可愛そうなキャラなんだよ。

敦君のかわいそうな状況も教室内ではもう見慣れてしまった。クラスのみんながクスクスと笑いながらも誰も手を貸そうとしない中、明実だけは一応優花に可愛そうだから許してあげなさいといった発言をして席について行く。

ボクもHRがすぐ始つてしまうので、自分の席に着くと、優花がボクの隣の席へと移動してきて、前の席の明実と三人で今日はどんなことをしようかと話しだす。

そうそう、ボクの席は、ボクの周りを心友達で固めることが決まっている。一番後ろの廊下側の席をつかっているのは小学校の時からだが、前と後は昔は竜や司が座っていたけど、二人とも今はいないので、その他でもボクが安心できる人が座ってくれるように担任の先生にお願いしている。

先週まで敦君が隣で和美が前だったのだが、そうなると和美がボクに必要以上のスキンシップを図り、その度に敦君は被害を受けていた。（主に嫉妬した優花の鉄鎚が下りていたのだが）そんなわけでボクの周囲の席は和美・優花・明実・敦君が多い。

あと、あんまりにも優花や和美がボクとべったりしていると、クラスから文句が出て来るので、森君とかミーちゃんが隣や前に来るこ

とがある。森君はボクの近くの席に座ると勉強に全然集中できないので、そのことを叱ってあげたら、至上命令と勘違い？最近はその席に来たいといわなくなってきた。

そうそう、一時期ストーカーで大変だった森君だけど、最近では引込み思案な性格を考えて、ボクの方から時々声をかけてあげてるんだ。そうすると、今までみたいに陰から覗いていることは少なくなかった。でも、まだ時々ボクらの輪の中に入るのが恥ずかしいのか、教室の陰からボクの方を見ていることはあるけどね。

「ねね、今日のお昼はドレス作るんでしょ？」

「そうだね。じゃあ、みんなで屋上でお昼ごはん食べて、そのまま美術室に行こうか。」

年末にミーちゃんに招待してもらってパーティーに出席することになっているボクらは、ドレス作りをしなければならぬ。といってもボクの分はもうずいぶん前にできあがっているんだけど、文化祭の準備の時に針仕事を教えたとはいっても、普段から慣れていない三人はまだ時間がかかるみたいで、まだ半分ほどしか出来上がっていない。

「そうしよつか。じゃあ、みんなにはれないように、竜くんと敦君も呼んで屋上に集合ね。」

美術室によくボクは行っているのだが、そのことはまだバレていないようだ。というのも、花梨部長への必死の説得もあって、まだボクは書類上美術部には所属していない。ボクが美術室に行っている間はボクの存在は学校中から隠されている。

「じゃあ、ツン先生はいつもと一緒に現地集合ね。」

「了解。」

こういった方法も美術室を隠しておけている大きな要因かもしれない。ボクと竜は毎回お昼や放課後に美術室に行く時は、基本的にみんなと一緒にいたりしない。時々優花と一緒にいたりすることもあるが、一番多いのは竜と二人で体育館の方に走ってとりまきの子たちを振り切って美術室に向かう。

そうすると、ボクと竜は体育館に向かったといったうわさは流れるが、美術室に行っているとは誰も思わないのだ。まあボクや竜みたいな人並み外れた運動神経があつて初めてできる荒業だけだね。

午前の授業が終わると、ボクはお弁当を持って竜の教室に向かい、いつものように体育館に向かうと見せかけてダッシュしてから、屋上へ行く。

「お待たせ、あら？まだ食べて無かったんだ。」

「ツン先生が来るまでまってたんだよ。うちも今日は自作のお弁当だから、見てもらおうと思ってね。」

「そうだったんだ。よっと。」

ボクはフェンスを飛び越えると、スカート裾を直す。というか、当然のように現れたけど、ボクは今入口とは違う場所から入ってきた。

「秋、お前早過ぎやわ。どうやってたらそんな素早く木登りできるねん。」

「鍛え方が足りないんじゃない？柔道をやめてから竜も鈍ったか？」

「んなわけあるかい。むしろあん時以上に運動に関してはやっとなちゅうの。」

確かにそうかもね。ボクと一緒にフアンクラブをまいたり、朝練も放課後の練習も小学校の時とは比べモノにならないくらい運動している。そういえば、良く体がもつよね。

「そんなの、クーちゃんの愛妻弁当を食べるためだもの、一生懸命運動するに決まってるじゃないの。」

「べ、別にボクのお弁当を食べてるからってそんなに運動できるよ
うになるわけじゃないよ。」

「そうかしら？でも、食事のバランスがいいのは確かよね。医食同源、竜くんの体調が常にベストに保たれているのは秋のおかげだと思うわよ。中学の時の友達だって秋のお弁当を食べて元気だったもの。」

「なるほど、ということは、竜にバスケで勝つにはクーちゃんのお弁当を食べればいいのか。」

「ちょっと、うちのお弁当が不満ってわけ？せっかく作ってあげたけど、敦にはあげない。」

「そんな。ごめん優花俺が悪かったって。」

今日も優花と敦君は仲良く夫婦ゲンカをしている。この二人はこうして定期的にケンカをしないとお互いにストレスがたまるみたいだね。

「よつと。」

そんなことを話している間に竜も木登りを終えて屋上に入って来たので、ボクは手に持ったお弁当の包みを開くと、みんなでお弁当を囲む。木登りをしてきて手が汚れている竜にはおしぼりを手渡す。

「サンキユ。んじゃ、早いとご飯にしようか。」

「みんな、あんたを待ってたんだから、もう。」

そうは言うものの、みんなで揃っていただきますを言えるのは嬉しいので、顔はニヤケ顔かもしれない。さっきからボクと竜の様子を横で明実がニヤニヤしながら見ているのが分かる。

「いただきます。」

ボクらはお昼ごはんをみんなで食べだす。相変わらず竜は食べるのは早い、きちんと噛んでいるみたいで、ノドに詰まらせているところを見たことはない。作ってきたボクとしてはもう少し味わって食べて欲しいところだが、昔から変わらないので今さらだ。

「もう少しゆっくり食べられないの？」

今日は優花が竜と敦君に突っ込みを入れた。敦君も竜もボクらに比べたらすごい勢いでお弁当の中身を消化しており、明実などはまだお弁当の10分の1も食べ終わっていないにもかかわらず、二人は半分以上食べてしまっている。

「そうしたいんやけどさ。秋の料理っていつつも美味しいから、箸がとまらへんねんな。」

「ありがとう。」

ボクが美味しいと言ってくれた竜にお礼を言うと、竜はウマイものはウマイと当然のように言ってまた高速で箸を動かした。その隣で敦君は……

「俺元々早食いなだけやし……」

あわれ敦君はお弁当もあと少しといったところで優花にお弁当を取り上げられて涙目になっている。優花に最近料理が上手になってきてお弁当が美味しいと言って謝っていたが、しばらくはお説教のようだ。食べモノを前にマテをされているワンコの用でちょっとかわいかったので誰も助けようとはしない。

みんながお弁当を食べ終わって片づけが終わると敦君と竜以外はドレス作りのために美術室へと向かう。屋上から美術室はすぐ近くなるので、誰にも見つかることなく移動すると、さっそく作業に取り掛かる。

「ねね、このレースはどうやって縫うの？」

「前にも教えてもらってたでしょ。たまには自分でしなさいよ。」

「ツン先生がいない時は自分でしてるわよ。」

優花がボクに作業の質問をしてきて、明実がそれを咎める。これも毎度のことで、優花はボクが側にいると何でもボクに頼ってしまう癖がついてしまったかもしれない。それでも、ボクは丁寧にやり方を教えてあげると、お昼の短い時間だけしかボクと一緒に作業ができないが、三人の分のドレスもずいぶん完成に近付いてきたみたいだ。

「クーちゃんって本当にすごいわよね。自分のドレスだけじゃなくって、竜さんと敦君の分までもう終わっちゃったんでしょ？どうやったらそんなに早く終わらせられるのよ？私たちの方がドレスを縫ってる時間は絶対に多いと思うわ。」

「そうだね。ボクは家に帰ってからもちよくちよくやってたからね。」

それに、慣れてるっていうのがあると思うよ。中学の時から何度も針仕事してるからね。」

明実や優花は結構できるのだが、和美は本当に自分で言っていたとおりかなり苦手らしく、中々進まないなので、ボクがついてあげながら進める。優花がボクに質問をしてくるといつても、和美ほどできないわけじゃないので、基本は和美に教えてあげるのがメインで、お昼はいつも集まっているようなものだ。

「和美ちゃんもそろそろ猫かぶりやめて仕上げなさいよ。三人でパティ前に写真とれなくなっちゃうわよ。」

「ええ？秋につきつきりて教えてもらわないと私間に合わない。」

「嘘言わないの。私たち三人でやった時普通にできてたじゃないの。」

「和美？いったいどういことかな？」

「えへへ。ごめんなさい。」

和美が実はボクにつきつきりて指導してほしいためにドジをしていることを聞き、ボクが叱ろうとしたら、先手を打って謝られてしま

った。こうなつてはボクも強く叱ることができずに、今度からはちやんと自分でやるように言いつけると、そろそろお昼の休み時間も終わるので美術室から出る。ボクは屋上でのんびりしているだろう二人を呼びに屋上へ行き、こうしてまた美術室にいたことを隠ぺいすると教室へと戻っていくのだった。

「お疲れ様でした。水分補給だけしっかりしてくださいね。」

放課後のバスケット部の練習が終わると、人数分のタオル等を用意してボクは片づけを始める。用具などをしまつて戻ってくる頃にはストレッチを終えて水分補給をしている部員たちにモップがけをお願いして、マネージャーノートを一人ずつ手渡していく。

「今日分です。明日の朝練か放課後の練習の時に渡してください。」

「いつも思うんだけど、どうやって毎日こんな大量のノートをつけているんだい？」

「授業中とか休み時間を使ってる時もありますね。」

「そうなんだ。蟹津さんも大変だろうし、本当に要点だけで構わないからね。蟹津さんだけに負担をかけるんじゃないかって、自分たちで気づいていかないことにはレベルアップしないだろうしね。」

「解ってます。本当に気付いたことを少し書いているだけですから、そんなにきにしないでください。」

ボクのノートはだから基本的に一日遅れの情報になることがおおい、朝ノートを渡してくれた人に、夕方までに書き込む場合は朝練の様子を見た結果もきちんと残せるのだが、夕方だけ参加したりノートを渡され忘れた時はどうしてもノートに書く内容が減ってしまう。

あと、ノートを見ていないだろう人には口頭で伝えるようにしている。特に怪我をかばっていることがバレバレな人などにはできるだけ早めに治療をするようにしている。

「秋。そろそろ帰るで。」

「うん。先に着替えてて。」

竜に呼ばれた。モップがけが終わっているにもかかわらず部長の川本先輩と話していたボクは先輩達に挨拶をすると、更衣室でジャージから着替えると、竜が外で待つており、一緒に自転車置き場へと歩いて行く。

「さっき、部長と何を話してたんや？」

「ん？マネージャーノートのことで質問されてたんだよ。」

「そっか、そういうえば、俺だけマネージャーノートあらへんよな？
なんでなん？」

「だって、竜とは一緒に登下校してるんだから、直接話をすればいい

いでしょ？それとも、自分だけマネージャーノートが無いのがさみしい？」

「いや、なんか俺だけのけ者にされとるみたいで、何となくな。」

「のけ者にしてるんじゃないよ。俺だけ特別なんだよ。」

「なるほどな。物は言いようつてわけか。確かにそう言われたら悪い気はしいひんわな。」

「ホントだよ。だって、俺はボクの・・・」

そこまで言つて、自分の言葉に恥ずかしくなつて俯いていると、俺がどうしたのか覗きこんできた。ちよま、顔。近すぎ・・・

「あれ？二人先に帰つたんじゃないの？」

「あ、敦君。ちょっと話したいことがあって、少し話をしてたんだよ。」

真赤になつてあわてて言いつくろつているボクに敦君がフムフムとわけしり顔で頷いて立ち去つていくと、ボクはそのあとを追いかける。

て三人で自転車置き場へと行く。

自転車置き場で自転車にのって、敦君とお別れをすると、当然また竜と二人つきりになるわけで、さっきのことは話題に出さないようにと部活中に気づいたこととかを竜に伝えながら自転車をこぐ。

「確かに、これだけ部活の話題を自転車に乗りながら話しとればマネージャーノートいらへんわな。」

「そうでしょ？だから、竜の分は無いの。解った？」

竜が話題をマネージャーノートに戻そうとしたので、ボクはそう言っつて、さっさと話題を切り換えようとしたが、今日の竜は意外と鋭かった。

「ほんでさっきは何を言おうとしたんや？」

「え、んつと・・・」

「そんなに真赤になるほど恥ずかしいことなんか？」

「だって、特別なのはさ、ボクと竜は・・・ゴニョゴニョ。」

「秋にとつて、俺と付き合ってることつて、そんなに恥ずかしいことなんか？」

「そんなことないよ。ボクは竜と付き合えてうれしいよ。」

「だったらさ、そんな毎回恥ずかしがらなくてくれや。いつつもあるんな態度ばかりだと、俺ってそんなに魅力ないんかとなんや不安になるやん？」

「だって、竜の顔見るとなんだか恥ずかしいんだもん。」

そう言つて、うつむいて自転車をこいでいると、竜からあきれたような溜息を吐かれ、了承の言葉が聞こえた。いつだってそうだ。ボクがこんな態度をとつても、どんなことをしたって竜は最後には許してくれる。自分でも考え直さないと思つてはいるのだが、どうしても竜の側にいることを理解してしまつと、胸の中から何かキュンキュン音がして、心臓を鷲掴みにされているような不思議な気分になつて、上手くできない。

でも、そんなに苦しいのに、絶対にその苦しみを話したくなくつて、胸は苦しいはずなのに竜と一緒にいるとなんだか安心できて、そんな自分がどうなっているのか自分でもよくわからないけど、今のこうした関係を大切にしたいとおもっている。

「秋は秋のままであり、そしたらずっと俺が守ってやるからさ。約束、しただろ？」

「うん。」

そのあとボクらは言葉は交わしていないが、日も短くなって暗くなつた道を二人で自転車にのって家まで帰っていく。

「んじや、また明日な。いつもお弁当作ってもらって悪いし、明日は一緒に学食でも行くか？」

「そういえば一回も行ってないもんね。でも、優花たちも一緒じゃないと前みたいにお腹壊して倒れちゃうかもしれないから、明後日にしよ？」

「せやつたな。んじや、明日はお弁当期待しとるわ。」

「うん。気をつけて帰ってね。」

「おう。またな。」

ボクは竜が見えなくなるまで手を振ってから、自宅へ足を向ける。おっと、家に入る前に少しだけペコちゃんの様子を見て行こう。最近休日しか一緒に遊んであげてないから、拗ねてるかな？

制服姿なので、抱きしめてあげることにはできないけど、頭を撫でてあげると、嬉しそうにしっぽを振る。ペコも小学六年生の時からだから、四年の付き合いになる。ペコが満足するまで撫でてあげると、ボクは家の中に入っていく。

「ただいま。」

「おかえり。ペコの毛ついてないかしら？」

「あら、バレてたんだね。大丈夫ペコも分かってくれてるから。」

そう言って、ボクは鞆からお弁当を出して洗い物をしようとかがんだとたんに一匹の毛玉がボクの膝の上に現れた。

「あらあら、ペコの毛を心配しても無駄だったわね。」

「ジジ、お姉ちゃんは制服にあなたの毛がついちゃうから、着替えるまで甘えるのは待ってって前にも言ったでしょ？」

ボクはそう言つて、ジジを床に下ろすが、ペコと違つて本当に解つているのか分からない。というか、わざと知らん振りをするかのよ
うに、顔を洗いだした。

ボクはジジの黒い毛がこれ以上付いてしまわないように、着替えてからお弁当を洗おうと、自分の部屋に向かうことにした。着替えを済まして、リビングに降りてくると、既に晩御飯が用意されており、お弁当もお母さんに洗われてしまっていた。

「もう、置いておいてくれたら自分でしたのに。」

「勝手にカバンを開けてごめんなさいね。まあたまには私にも家事をさせてちょうだい。秋はまだ学生なんだもの。」

「お父さんが聞いたら怒るんじゃない？女の子は家事を手伝うものだっていつつもいつてるじゃない？」

「お父さんは今日は残業で遅いから良いのよ。さ、晩ご飯にしましよ。秋が大好きなから揚げよ。」

「ボク別にから揚げ大好物じゃ・・・」

「あら？そうだったかしら？その割にはお弁当のメニューにから揚げが多い気がするんだけど、それは何でかしらね？」

お母さんは解って言ってるね。ボクが自分の分と竜の分のお弁当を作っていることはお母さんもきちんと理解している。週末の買い物などは一緒について行くが、基本的にお買い物はお母さんをお願いしているので、ボクのお弁当のメニューは筒抜け、その上でどれがボクの好みでどれが竜の好みかバレバレなのである。

「ボクもから揚げは大好きだよ。さあ、食べよっか。」

「そうねえ。秋ちゃん”も”から揚げ大好きよね。」

その、「も」ってところにアクセントをつけるのやめてくれないかな。そんな感じでちょっとボクらの仲をからかわれながらも、お母さんと一緒に晩ご飯を食べ終えると、ボクは明日の準備をしてお風呂に入って自分の部屋へと行く。

コンコン

「開いてるよ。」

とつか、鍵なんて付いていない。特に隠し事も無いのに、家族の中で鍵なんて必要ないとおもっている。家族全員鍵なんてつけていない。ボクの言葉が入室許可と受け取って、武兄ちゃんが入ってくる。

「おう。一応妹とはいえ、女の子の部屋だからな。」

「こんな時間にどうしたの？」

「いやな。今度の週末大学の友達と遊びに行くんだけど、秋も来るかなと思ってさ。」

「ごめん、週末は部活の練習があるんだよ。」

こんな会話は良くされる。ボクと武兄ちゃんは仲がいいので、こうして遊びに行く時に誘ってくれたりすることは良くある。六つも年上のお兄ちゃんだから、どこかに誘うことはお兄ちゃんからが圧倒的に多いけどね。

「そっか、じゃあいいや。もう寝るん？」

「うん。明日も朝練があるからね。武兄ちゃんはまだ起きてるの？」

「せやな。卒論そろそろ書きあげないといけないからな。」

「そっか、体壊さないようにね。おやすみなさい。」

「おやすみ。」

武兄ちゃんが出て行くと、ボクは部屋の明かりを消して、良い夢が見れますようにってお願いしてから瞳を閉じる。

チャプター71（後書き）

最近ストックを残しながら執筆する余裕が無く申し訳ありません。
今回のテーマは「ほのぼの」です。

秋の一日を追いかけるような一話を書いてみなさんにリラックスしていただければと思います。

相変わらずな秋の周りの人間たちを書いてきたのですが、一つ後悔していることは、登場人物を総出演することができなかったことです。

と、言うのも、何度文字数を確認しても一話分には長すぎるのです。これでも凝縮してほのぼのする部分だけ抜き出したつもりなのですが、こんなキャラが出てないじゃないかといった不満もありません。思います。

そんなキャラたちが一回でも出番が多くなるように次からの話もがんばって書いてまいりますので、どうかこれからも応援をお願いいたします。

ここまで再転の姫君にお付き合ってくださいまして本当にありがとうございます。
ございました。

チャプター72

わ、わたくしと踊って頂けません？

今日はクリスマスイブ、ボクらはミーちゃん主催のダンスパーティーに参加するためにミーちゃんの持つ別荘の一つにきている。しかし、ボクはミーちゃんの家への恐ろしさを理解していなかった。

「蟹津さん？何をそんなに固まっていますの？今日は個人的な友人を招いてのささやかなパーティーですので、そんな硬くならず楽しんでらしてください。おっほっほ。」

ミーちゃんのセリフをきちんとボクらの解る言葉に翻訳すると、

「これでも、人数や招待した人を選んで気さくなものにしたんだから、安心してね。まあそれでもあなたたち庶民にとっては敷居が高いかもしれないけど。おっほっほ。」

といったところだろう。そう、ボクらにとっては広い邸宅にたくさんの人があふれているこの状況も、ミーちゃんにとっては小さなパーティーなのだ。実際先ほど確認した情報によると、招待客の量は普段の半分にも満たないらしい。

「うちら浮いてないかな？やっぱり、自作のドレスなんてまずかつたんじゃない？」

「そ、そんなことないわよ。さっきも北条さんのお母さんに褒められたばかりじゃない。」

「そうだぜ。自分の分もお願ひしたいって言ってたあの顔はマジだったぜ。」

優花と明実と敦君もかなり緊張しているらしい。入口でミーちゃんのお母さんに挨拶をした以外は先ほどから誰にも話しかけずに部屋の隅の方でできるだけ目立たないように固まっている。しかし、ボクらみたいな人間が部屋の隅にいれば逆に人々の目はこちらを向くわけで、注目をあびてしまっているかもしれない。

「あんなあ。注目されてる一番の理由がんなこと言ってもしやあないやろ？あいつらを楽にさせたりしたいんやったら、少し離れたれつて。」

「うるさいな。せつかくボクがこの状況を説明してあげているのに。」

そういえば、竜はあんまり緊張していないみたいだ。神経が太いボクですら結構緊張しているっていうのに、先ほどからボクの隣で堂々と胸を張っている。うん、ボクが作ったタキシードもすごくく似合ってる。。。いかにいかに。こんなことを考えてるせいできから顔の熱が引かない。

「テレビ中継でも緊張しなかった秋が緊張しとるなんて、大丈夫か？顔真つ赤だぞ？」

ちよま、顔が赤いのは緊張のせいだけど、たぶん竜は緊張の理由間違えてるから！ってか顔近い！心配ないからお願いだからもう少し離れて！

「ほらほら、竜くんも秋もそんなところでいちゃいちゃしないの。人が多くいる場所で秋の不幸が起きないか心配なのは分かるけど、もう少し二人は離れた方がいいわよ。あきらかに嫉妬の対象になってるわよ。」

そうそう、こんな状況にも関わらず、あまり緊張していないのが、和美だ。和美は先ほどからボクらに話しかけてくる男の人たちを相

手にしてくれている。主に男性恐怖症の明実あたりが被害を受けるので、和美が上手くかわしてくれるので本当に助かっている。

「もう、秋は本当に、自分のことになると解ってないんだから、ほら、そんな顔していると悪いお姉さんに食べられちゃうわよ。」

そうやって和美はボクのことを抱き寄せると、軽く髪に口づけをする。文化祭前に同性愛者であることを暴露してしまっただけは、こつしたスキンシップが増え、竜の前でも女の子という立場を利用して結構大胆なことをしてくる。

「ちょ、和美。やめてよ。みんなが見てるじゃないか。」

「あら？みんなじゃなくて竜くんが見てるからでしょ？大丈夫よ。竜くんが浮気して他の女に目を奪われでもしたら、放っては置かないけど、これだけ綺麗な女の人が集まっただけでも秋以外に見向きもしないんだもの。私もそろそろ諦め時かなって思いだしたわよ。」

「ちょ・・・べ、別に俺は・・・」

「あら？私なんてさつきからドツキドキよ。あんな綺麗なお姉さま方に声をかけられたらうれしくてなびいちゃうわ。」

和美が緊張してないわけじゃなかったんだね。緊張の方向がボクらとはずれていたみたいだ。先ほどから男しか話しかけてこないのが問題なかったが、和美の趣味に走りだしたら、暴走しないとも限らないので、きちんと見ておかないと。

いろいろと間違った状況の中、ボクがここに来た目的の一つが向こうから声をかけてくれた。

「こんばんは。美香から友達を紹介したいと言われた時は驚いたけど、こんな素敵な人とはね。」

「北条美香さんのお父様ですか？はじめまして、蟹津秋と言います。それとも・・・大木鈴と自己紹介した方がよろしかったでしょうか？」

「なに？いや、そうだね。君が噂の子か、美香はいつも君のことを話しているよ。あのとおり、跳ねっ返りなもので、こんなに仲良くなくなった友人は君が初めてなんだ。これからも、仲良くしてあげてくれるかな？」

「はい。もちろんです。今日も私から彼女にパーティーに参加したいと言ったら、快く招待して下さいましたよ。」

ふっふっふ、はっはっはとお互いに笑いあっているが、互いに牽制しあった状態をこのまま続けても意味がないので、ボクの方から踏み込んだ話題を出す。

「そういえば、以前絵を一枚描いて欲しいと依頼したことがありますよね？少し私のお願いを聞いて下さるのですしたら、引き受けようかと思えます。」

「なに？それは嬉しいね。それで、願い事というのは？」

「まず、描き上がった作品は一度展示場の人に許可をもらいに行かせて下さい。これは、私の願いというよりも、展示場の管理をしている人の願いです。」

「ふむ、1番に見れないのは残念だが、仕方が無いだろう。君の若さではバックアップ無しでは辛いこともあるだろうからね。」

「ミーちゃんより何倍も手強いよ。言葉に隠された真意を読み取られるかも、まあ、問題ないんだけどね。」

「もう一つは、絵のモデルをして下さい。この二つの願いを聞いて下さるなら、描きましよう。」

「まさか、絵のモデルとは・・・一本とられたね。構わないだろう。君と美香に日取りは任せるから、いつでも遊びにおいで。」

そういつて、ミーちゃんのお父さんはニコリと笑うと、他にも挨拶があるらしく、優雅にお辞儀をして立ち去ってしまった。

「ちよ、ちよつと。蟹津さん！？お父様に何を言ったのですか？いきなりわたくしの挨拶まわりを中断させると、「今夜はいいから、友人と楽しみなさい」なんて言われてしまいましたよ？」

「前に北条さんつて人が絵を描いて欲しいいつて言つて来たのを話たでしょ？絵を描く約束をしただけだよ。」

嘘は言っていない。実際表面だけを見ればそのとおりなんだから仕方がないよ。ミーちゃんは納得がいかないといった顔をしたが、それよりも重要なことがあつたらしく、その話は打ち切りとなった。

「まあいいですわ。それよりも、わ、わたくしと踊つて頂けません？」

・・・いきなり何を言い出すんだこの子は、和美の視線が物凄く危ない物になつてから止めて欲しい。

「先に理由を聞かせてよ。普通女の子同士で踊るのはおかしいですよ？」

「そ、そうですね。実はパーティーの最初に踊るパートナーは婚約者と決まっていますのですが、わたくしはまだそんな相手を作りたくありませんの。自分の可能性を狭めるような気がしませんこと？」

「なるほどね。だったら、ボクには竜がいるから、誰か別の人に頼んでよ。」

「私達は無理よ。秋と一緒に特訓したとはいえ、いきなり踊れる自信なんて無いわ。」

「そういうことですわ。それに、あなた達は今回初めての参加ですもの、そういった制約がかかるのはわたくしだけですわ。」

「だ、そうだけど、竜が決めて良いよ。」

確かにボクら一般市民にとって全く関係のないことなので、最初に誰と踊っても問題ないだろう。その一回でミーちゃんのことを助けられるならそれも悪くない。

「どうせ、ミーちゃんのためになるならとか思っとなるんやろ？俺とは二回目からでええよ。その代わりに、二回目以降と最後は俺とやで

「？」

いや、確かにそう思ってたけどさ？竜がいなければって気持ちだったあるんだよ？まあ二回目から一緒になって言ってくれたからいつか。

「ダメよ。ミーちゃんの次は私達と踊ってくれなきゃ。特に明実ちゃんには男性恐怖症なんだから、秋と一緒に踊ってくれないとね。」

「ちよま、それは流石に酷ないか？」

ボクも竜と一緒に踊ってみたいって気持ちがあったけど、確かに男性恐怖症の明実を放置する訳にもいかないだろう。結局、竜の順番は後の方にまわされてしまった。

音楽が鳴り響き、ダンスの始まりだ。結局ミーちゃんははじめ、女の子たちに負けてボクはまずミーちゃんと踊ることになる。

「男性のステップなんてよくできますわね。」

「まあね。何度も優花たちの練習相手をやったから、自然にできるようになったよ。それにしても、ミーちゃんはやっぱりこういうのに慣れてるんだね。すつごく踊りやすいよ。」

「それほどでもありませんわ。むしろ、このような場所が初めてとは思えないほど蟹津さんのダンスは様になってましてよ。」

「今まで一緒に踊った中で一番踊りやすいほどですわ。本当に、この人は女性が惚れる女性というのが嫌でも理解できてしましますわ。」

「おほめにあずかり光栄です。お譲様。」

「お・・・いえ、本当にパートナーに選んで良かったですわ。」

女の子なら誰でも良いというわけにもいかず、ある程度踊れる人が良かったのだろう。ミーちゃんも恥をかかずに済んだのでボクを選んだことは間違いじゃなかったのかもしれない。本人たちの申告どおり、こんな場所でのダンスは初めての優花・明実・和美の三人だったら、婚約者云々はごまかせても、別の場所で問題があったことだろう。

「そろそろ、一曲目が終わるね。次は男性たちからのダンスを断るためにも、明実とおどってあげないとね。」

「そ、そうですね。周囲に婚約の意思がないことを伝えるためとはいえ、このようなダンスをしてもらい本当にたすかりましたわ。そ、それに、とっても楽しかったですわ。」

「ふふ、ボクも、初めてが慣れているミーちゃんだったおかげですごく楽にダンスをさせてもらえてよかったよ。ありがと。」

一曲目が終わると、次のダンスパートナー探しをするもの、もう一度踊るもの、二曲目から参加するもの、二曲目は休む者と様々だが、そんなボクの元へ明実が寄って来た。

「ボクと踊ってくださいますか？」

「喜んで。」

緊張している明実に、少しだけおどけた態度でダンスを申し込む。すると、明実は最上級とはいかないまでも、笑顔をくれた。

ボクと明実は軽く会話しながらダンスを踊る。正直ミーちゃんと踊ったようにスムーズに躍ることはできなかったが、それでも楽しく踊れたと思う。それに、ボクらが失敗するよりもはるかに多くの回数足を踏み、もつれあう二人がいたことも影響されて、周りの目を気にする必要がなかったのも大きい。

「ふふ、またあの二人、喧嘩してる。」

「いいんじゃないかな？優花と敦君は、ああやって仲良くしてるんだもん。それに、曲が進むにつれてだんだんリズムが合ってきた気がするしね。」

「そうね。喧嘩してたと思ったら、仲良くなっちゃうんだもん。どうしてかしら？」

「喧嘩したから仲良くなったのかもね。お互いに言いたいことをいって、やりたいことをやっても認めあっているから、だから二人の仲は良いんだと思うよ。ボクと明実だってそうでしょ？最初から解りあっていたわけじゃないじゃない？だけど、今はこんなに仲が良いんだもん。」

「きゃー！」

そういつて、少し体を引き寄せて振り回してみる。明実は少し驚いたみたいだけど、すぐにニコリと笑うと、ボクに体を預けてくれた。

「そうね。喧嘩したから、仲良くなれるのかもしれないわね。」

優花と敦君がダンスにずいぶん慣れてきたころ、二曲目は終わり、今度は和美がやってくる。まだ曲が終わったばかりだというのに、人込みを抜けてボクのところへ一直線といった様子だ。

「本当に、今日初めてダンスを踊ったなんて知らなかったら分からないわね。」

「そんなことないよ。がんばってはいるけど、やっぱり慣れた人と比べたらちよっと浮いちゃってるんじゃないかな？」

「浮いてるかどうかって言われたら確かにそうんだけど、全然変じゃないわ。さあ、私のことも、エスコートしてちょうだい。」

「はいはい。明実は竜のところに来てくれる？竜なら他のひとより

「もは安心でしょ?」

「うん。クーちゃんが嫉妬しない程度に竜くんの側にいるね。」

「もう。」

明実とお別れして、和美の手を取る。和美は本当にうれしそうに体を寄せてくると、一生懸命練習したステップを何度も間違えながらも、ボクと踊れるというそれ自体に楽しみを感じているらしく、始終笑顔だった。

「きゃ!」

何度目かの転倒、和美は普段よりも10センチも身長が高くなるハイヒールを履いているので、仕方がないのだが、ダンスもあることをきちんと理解していたボクは動きに支障の出ない程度のヒールを履いているので、きちんと受け止めてあげる。

「ありがとう。」

「大丈夫?そんな高いヒールを履いてくるからだよ。今日はボクよりも身長が高くなっちゃってるもんね。」

「いつもは、秋に抱きつく時は下からだったけど、これなら上から見えるでしょ？竜くんがどんな風に秋のことをみているのか体験してみたかったの。上目遣いの秋は最高よ？」

「もう、そんなことばっかり言うんだから。ダンス中に会話を聞いている人なんていないとは思うけど、そういう勘違いしそうな発言はやめてほしいな。」

「あら？そんなこと言ったらもう遅いと思うわよ？三曲続けて女の子と踊ってるんだもの。そっちの趣味のある人からみたら、秋は既にそういう対象よ？」

「それが解ってるなら、和美だけでも竜の後に踊って欲しかったよ。っていうか、ボクを餌にして自分と同じ趣味の人を見分けようとしてない？」

「それもちよつとだけね。でも、一番は、竜くんに独占されるのが嫌だったんだもん。秋の気持ちはわかってても、嫉妬しちゃうんだから仕方がないでしょ？」

「ボクの気持ちを分かってくれてるなら、余計に助けてよね。ボクはノーマルでいたいんだよ。」

「秋って普通にこだわるけど、元々普通じゃないんだから、そんなにこだわる必要ないんじゃないかしら？前世の記憶があるから女の子を好きってなっても誰もダメだとは言わないわよ？」

「確かにこだわってる部分はあると思うけど、竜を好きなのは、前世とか関係ないよ。いつも一緒にいて、守ってくれた人を好きになるのはいけないことじゃないでしょ？ボクだって気にしている前世の影響だけじゃなく、自分の気持ちに素直になった結果なんだもん。」

和美は少し残念そうな顔をしたけど、また笑顔にもどると、ダンスを目一杯楽しんで、三曲目が終わる。周りに合わせてペコリとお辞儀をすると、今度こそは竜が来てくれると思って期待していたら、優花に阻まれた。

「みんなとは踊ってもうちと踊ってくれないなんて言わないよね？」

「優花は敦君と踊ってたじゃない？そろそろ竜と踊りたいんだけど？」

「一曲くらい竜くんは待ってくれるわよ。そうじゃなくても普段からマテをさせられてるのを知ってるんだからね。」

ボクは呆れと諦めを込めて竜にアイコンタクトを送ると、相手

が優花では仕方がないと思ってくれたらしく、楽しんで来いと送り返してくれた。

「解りあってるって素晴らしいわね。」

「解りたくない時もあると思うけどね。」

優花は敦君と二曲踊ったことにより、随分と余裕があった。それでも何度も躓いてしまうことはあったが、先ほどの敦君とのダンスと比べたら随分上達している。あまりにも待たせてしまったので、申し訳なく思い竜の方を確認すると、敦君と二人で明実を男たちの手から守っていた。和美はどこかのお姉さんと何やら話こんでいるので、あまり戦力にならないらしい。

一曲目の時はずっとボクとミーちゃんが踊っているのを見ていたのに……

「ツン先生って本当に何でもできるよね。さっき敦と踊った時よりもずっと踊りやすいよ。」

「一番最初に慣れてるミーちゃんと踊ったからね。もう、この会場の雰囲気慣れてきたよ。そうそう、さっき北条パパに絵を描く約束をしたけど、優花も一緒にくるでしょ?」

「うん。絶対に行く。どんな絵ができるのか楽しみだし、先生が絵を描くのを近くでみれるなんて得点見逃せないよ。」

優花も笑顔になってそのあとダンスを楽しめた。明実や和美と違って運動が得意な優花なのでちょっと難しいステップなんかをしても着いて来れたので、ボクも結構無茶な要求をしてみたが、良いアクセントになったらしく、十分に楽しめた。

「お譲さん。ずっと女性とばかり踊ってますが、良かったら僕と踊ってくださいませんか？」

ダンスが終わったあと、竜が来てくれるのを待っていたら、お金持ちのボンボンって雰囲気男性にダンスの申し込みをされてしまった。優花は竜が来るまで隣にいてくれたので、不幸が起きる予兆ではないと思うが、それでも竜と踊りたいので丁寧に断る。

「先約がいますので申し訳ありません。今までは全員友人だったので彼も許可してくれましたが、ずっと一緒に踊りたいと思っっている人がもうすぐ来ますから。」

ボクはできるだけ相手を刺激しないように言っただつもりだったのだが、相手は断られることを念頭に置いて話していたのか、引きさがつてはくれない。

「君のような綺麗な人がずっと相手を決めずに踊っているのはもったいないよ。そういう趣味じゃないんだろ？きちんと男の人を相手に踊った方がいいよ。」

図々しい。おそらくどこかで和美が誰かの会話をきいていたのだろう。ボクがノーマルであることは間違いないのだから良いのだが、確かに見た目は悪くないが、こういう軽い男は趣味じゃない。

「待たせたな。優花ちゃんは明実ちゃんのところに行ってくれへん？坂本一人じゃどうにもおさえられへんみたいやねんて。俺らはパーティーに参加したのは初めてやし、秋の作ったドレスの効果で全員一級の美女になつとるから目立ってしゃあないわ。」

「うん。ツン先生も竜くと楽しんでね。」

「じゃあ、パートナーが来たので私はこれで。」

ボクは竜が着いたことに安心して、ナンパ男を遠ざけ、ダンスフロアの中央に逃げるように竜の腕を引いて行った。

「来るのが遅いよ。まあ、明実のことがあるから仕方がないんだけど、おかげでボクは大変だったんだからね。」

「悪かったな。にしても、俺は初めておどるんやで？中央は流石に目立ち過ぎやないか？」

「ボクが初めて女性のステップを踏むんだから、これくらいで丁度だよ。それとも、自信がないの？」

「しゃあないな。俺は秋の彼氏やねんから、これくらい乗りきってみしたるわ。」

やっぱり、今日の竜はいつもと違って全然緊張してない。なんでだろ？運動神経が良いから、あんまりダンスの練習も必要ないだろうと、ちょっとだけしか練習してこなかったのだけど、まるで踊れることが当然のようにしてふるまっている。

「この一曲は俺のために踊ってくれるんやろ？お姫様のエスコートが遅くなったことは許してくれよ？」

「う、うん。」

曲が始まり、体を近づけると、竜の心臓の音が聞こえてくる。見た目よりも緊張してたのかな？すごくドキドキしていて、でも、なんだかボクと同じってことに安心しちゃった。せっかく竜と一緒に踊れるんだから、楽しみたい。

ボクたちが動き出すと、そこだけ別の世界になったような気がした。音楽も周りで踊っている人も、ボクたちを引き立てるためのものではない。竜はボクが望んだとおりに足を動かしてくれるし、ギュッと握った手はまるでボクを違う世界へ導いてくれるような気さえした。

「秋、やっぱり俺って嫉妬深いのかもしれんわ。女の子相手にカツコ悪いんやけど、嫌やった。秋が男に声をかけられたのみて、相手のことブン殴ってやりたい気持ちになってもた。」

「ごめんね。優花も、竜はいつも我慢してるって言ってた。そんなにボクって竜のこと我慢させてるかな？」

「我慢っていつたら確かにそうなんかもしれへんけど、秋のためやったら、意外と平気やぞ？それに、俺がどうしても無理になったら、秋は俺のために手を差し伸べてくれるんやろ？」

「うん。だから、我慢しないで何でも言っただけ。ボクは竜のためなら、結構いるんなこと、できると思うよ。」

「そっか、じゃあ今度……ゴニョゴニョ。」

「ば・・・う、うん。考えておくよ。」

竜に耳元でささやかれた言葉に真赤になってしまったけど、優花が我慢してると言っただ意味も理解できたし、実際に悪いと前から思っていたので、否定だけはしないでおく。そのあと、竜はさっきの言葉をごまかすように無理やり大きなステップをしたりしたので、意識をダンスの方に持っていかれる。

そのあとボクたちはパーティ会場から抜け出すと、ミーちゃんに呼ばれて別荘の見学に出かけた。ドレス姿のままだと、問題があるので、ボクたちはそれぞれお泊まりセットを持って来ているので、普段着に着替えてしまった。

「ドレス姿の秋はすごく綺麗やったけど、その方が落ち着くな。」

「ありがと。竜もタキシード似合ってたよ。」

「おう。秋が俺のために作ってくれたんやから、当然やる。」

「もう、変なところで自信過剰にならないの。」

「ツン先生、今夜は一緒にお風呂はいる。夜もみんなと同じ部屋だし、楽しみ。」

「今夜は寝かせないよ。」

「ちょっと、和美ちゃんが言うとなんだかエロいわよ。あ、でもク
ーちゃんは夜苦手なんだっけ？」

「最近は大いぶ遅くまで起きていられるようになったけど、やっぱり夜更かしは苦手かも。」

こうして、クリスマスイブの夜、ミーちゃんの家と呼ばれてのパーティは一旦落ち着くのだった。あとに、大きな課題を残して。

チャプター72（後書き）

お久しぶりでございます。

この話はクリスマスが近づくまで更新を控えようと以前から考えていました。しかし、なんだかクリスマススイブの夜はまだ続きそうな内容ですね。

今回のテーマは、秋のダンスと新たなライバル、でおくりしました。前半こそ美香の父との会話などを入れましたが、美香と一緒に踊ることになったあたりからは完全にあの一人のナンパ男を出すために、今後の展開のために書いてあります。

年末年始と忙しくてまた次回投稿が遅くなります。読者の皆様には大変ご迷惑をおかけします。そんな作品でも良ければ、また遊びに来ていただけたら幸いです。

ここまで一緒にいただけまして本当にありがとうございます。

チャプター73

サンタさんに逢いたい

秋たちの別荘見学は予想外の人物の登場でいきなりの波乱の予感がした。

「あら？要さん？パーティの方はもうよろしいんですか？」

「僕もこっちの方が楽しめそうな気がしたからね。美香ちゃんは日に日にきれいになっていくね。来年こそはダンス相手が現れるよ。」

「あら？今年だつて色々な方からお誘いはありますよ。でも、今はそういった方々と踊る気にはなれませんでしたの。要さんだつて、誰とも踊っていなかったのではなくって？」

「僕の場合は本命に断られてしまっただけの話だよ。そこにいる、きれいな女性にね。」

「先ほどはどうも。」

秋は竜の隣で体を半分隠しながらもきちんと挨拶だけはしておく。先ほどパーティ会場で声をかけてきた男性はどうやら美香と仲の良い人物のようだ。

「そんなに警戒しないでくれないかな？僕は無理やり何かをするような人間じゃないよ。美香ちゃんからも、僕のことを弁護してくれよ。」

「まあ、そうですね。要さんは私の親戚になるのですが、それほど悪い方ではありませんことよ。今は御実家のあとを継ぐべく、叔父様の経営しているおもちゃ会社で働いていますの。傾きかけていた経営を彼が入ってから持ち直したって財界では噂で、将来有望な方ですわ。」

「ミーちゃんの親戚の人だったんだ。ボクの名前は蟹津秋です。よろしく願います。」

美香の親戚と聞いて警戒を緩めた秋を筆頭に他の者も自己紹介をしていく。パーティ会場でいきなりダンスを申し込んでくるような人物だったので積極的な性格の人間なのかと秋は思っていたが、実際の要はそんな人物ではなく、謙虚な態度が見られ、他のメンバーもそれほどいやな顔はしなかった。

一人の人物を除いては、

「はじめまして、長田和美です。秋とは竜君といっしょで中学から一緒なんです。竜君の場合は小学校から秋と同じで幼馴染ですけどね。私も小学校、いえ、それ以前から秋と一緒にいられたらうと思うことはありますが、それは不可能なことですよね。竜君と秋の絆は強くって、二人の仲を裂く方法なんてないんですもん。」

「ちょ、和美、いきなり何を言うのよ。ボクはノーマルだから、つて要さんに変なことを吹き込まないでよ。」

「あら？本当のことを伝えただけよ。要さんは秋のことが気になっているみたいだけど、あきらめた方がいいって早めに教えてあげるのはやさしさよ。秋はこういった話には鈍いから、心友として秋のためを思っただけだよ。」

「手厳しいね。確かに彼と踊っている蟹津さんの様子を見ていたら彼との絆を感じさせられたよ。でもね、和美ちゃんだったっけ？幼馴染だから、過ごしてきた時間が長かったからって、愛するとは限らないと僕は思うんだ。もう少しだけあきらめないでいさせてくれないかな？」

「無理よ。同じことを考えて頑張ってきた私が保証してあげるわ。二人の絆を裂くことはできないわ。だって、秋にとって一番大切な

ものを彼は持つてるんだもの。」

「一番大切な物？・・・それは？」

「誰よりも、何よりも、秋を大切に思う気持ちよ。私、負けてないつもりだった、だけど、竜君の秋への気持ちは私なんかとは比べ物にならないくらい大きくって、広くって、越えられないとはじめて思ったわ。私、すつごく悔しかったけど、諦めがついたもの・・・。」

和美の独白に秋は驚く、和美にとって、愛する相手というのはかなり特殊な意味を持っていると感じていた。そんな相手に自分が選ばれたことも、複雑な気持ちもありはしたが、誇っていいものだと思っていた。そんな和美が竜に対してそんな風感じていたなんて思っていなかったのだ。

「竜・・・そんなに・・・。」

「誰かと比べたことなんてないからわからないよ。」

「そこでなんで標準語なのよ。何を隠してるの？」

竜は困ったような顔をして要をチラリと確認すると、今度は普段と

同じちよつと関西弁の混ぜつた竜独特の話し方で話し出した。

「え・・・まあ、またあとでな。隠し事ってほどのことでもあらへんのやけど、ここではちよつとまずいんやわ。」

「解つたわ。」

秋は竜の言葉に自分の不幸に関することかもしれないと辺りを付けることができたので、それ以上は追及しない。竜の視線から自分に話したくないのだと理解できた要は、元々消極的な性格が彼女に対してだけなぜか放っておけない自分に複雑な心境になる。

「と、とにかく、ミーちゃんの別荘見学しようよ。みんなで行っても問題ないでしょ?」

「そうだね。要さんも一緒に行きますか? 態々抜け出してきたみたいですし、このまま追い返すのも悪いですから。」

優花が場の雰囲気を読んでその場にとどまるのではなく先に進むことで話題をそらす。秋も同意し、一応年上らしい要のことも気遣って誘う。要も無理に追求するよりも先に警戒を解いて仲良くなっておくほうが得だと感じたらしく、快く承諾すると、何度も来たことがあるらしく、美香と一緒にあって別荘内の色々な部屋やその他の施設について説明しながら一緒に歩き出す。

「すごい広いお風呂だね。」

「それほどのこともありませんわ。以前は近くに温泉が湧いていましたので作ったものの、地殻変動で今では普通の露天風呂となつてしまいましたもの。」

「ミーちゃんにとって普通はどんなのを言うのよ。ボクの家のリビングがまるごと入っちゃうよ?」

北条家の財力は一般人である秋たちにとっては理解できないレベルであった。美香が謙遜?したように彼女にとって大したことでは無いものも、秋達にとっては十分過ぎるほど凄いものばかりなのだ。

「良かったら君のために僕が温泉つきの別荘をプレゼントしようか?」

「もらっても使う機会がありませんよ。それに、ミーちゃんと仲良しのボクらはミーちゃんにお願いすれば使わせてもらえるでしょ?ね?またここでみんなが集まったりしても良いでしょう?」

「私は構いませんわ。手入れが大変なだけで普段はあまり使いませんもの。友人達が集まる場所としてなら私も喜んで提供いたしますわ。」

鼻歌でも歌い出さんばかりに美香が許可を出したことに秋達高校の友は喜び要は頂垂れる。先程から何か喜ぶものはないかと秋が反応する度にプレゼントしようと思し出れば秋は自分の身の丈にあった物で良いと断ってばかりだ。

「最後に見せるこの部屋は絶対に気に入ってもらえますわ。蟹津さんと鈴木さんはまたここに来ることになるはずですね。」

そう言つて美香が扉を開けた時、一部の者には嗅ぎ慣れた、一部のものには少し異臭に感じる匂いがした。

「わく凄。ひょっとしてミーちゃんの先祖に芸術家の人でもいたの?」

「私の祖父の代には専属の芸術家を雇つて家族の絵を描かせていたらしいですわ。この別荘はそのためのものだったらしいもの。」

「そうだったんだ。だから、ミーちゃんのお父様に絵の話をしたらあんなに驚いていたのかな?意外なことを言つたと言うよりも、希望どおりの答だったから驚いたのか…。」

秋達は今までの部屋とは違い乱雑に筆やキャンバスが置かれた部屋へと入って行く。優香はそこにある物を見て何やらふむふむと嬉しそうにしているが、名前だけに近い形で美術部に所属している明実や和美はもちろんのこと、竜や敦はさっぱり解らないようである。

「気に入って頂けたかしら？」

「うん。すっごく良いよ。絵を描くときここを使って良いの？」

「是非使って頂きたいわ。ここにある物は全て使ってもらって構いませんし、何か必要なものがあればある程度の物でしたら準備しますわ。」

「ここにある物って、クーちゃん。これは何に使うの？」

明実が机の上に置いてある物を手に取って質問をしてくる。

「そんな物まであるんだ。だからここは掃除あんまりしてないんだね。正直何が必要で何が不必要かわからないでしょ？」

「ええ、私をはじめ、家の者ではどこをどう弄ったら良いのか皆目

検討がつきませんわ。ただ、川瀬さんが持っている物はあまり手に取りたい物では無かったような…。」

「そうだね。たぶんそれは鳥の糞を乾燥させたものだと思うよ。」

「キヤ！」

明実は軽く悲鳴をあげると持っていた物を机に落とした。乾燥したそれは少し砕けたが特に問題無いようだ。

「な、何でそんな物が…」

半分涙が出そうな顔で抗議の声を挙げる明実をなだめながら秋は先程砕けた物を片付け、説明をする。

「今の時代は絵の具とかいっぱい種類があるけど、昔は自分の理想の色を出すために沢山の自然の物を使ってたんだよ。例えば、マリ―ゴールドの渋染めとか、聞いたことあるでしょ？宮廷画家なんかだと宝石を砕いてなんて話も聞くわ。」

「凄い！じゃあここにも宝石があったりするの？」

「ここで絵を描いていた人は自然画を好んで描いていたみたいね。だからより自然に近い色を出したくてそういった物を集めてたみたいだから、宝石とかはないと思うわよ？」

「ツン先生はそういった物で絵を描いたことがあるの？」

「うん。あつたにはあつただけどここまで種類を集めて描いた訳じゃないし、背景の一部に使った程度よ。優香も一緒にここに来るなら使ってみたら解るけど、個性が有りすぎて使い所が難しいのよ。」

秋と優香の二人で話が盛り上がっているが他の5人には解らない会話へとどんどん移って行く。こうして何か自分たちが解らない会話になっても聞いているだけで平気な者は問題無いが美香は我慢が出来なくなつたため秋たちの会話を止めるとこの場を離れることを奨める。

「ごめんね。でも、これならミーちゃんに驚くような素敵な絵を描けるかも知れないよ。構想に腕がついて来てくれたらだけだね。」

「それなら大丈夫やる。秋が描きたいと思ったんやったらきつと上手く行くんじゃないかな。」

「竜…ありがとう。」

「何を赤くなってるの？今日のクーちゃんはなんだか可愛いわ。何かあったのかしらあ？」

竜の発言に過剰に反応している秋に対してすかさず明実が突っ込みを入れる。益々顔を赤くする秋に要を除くみんながいつものように呆れたりニヤ着いたり、微笑ましく見守ったりとしていたが、もう随分な時間になったと言うことで最後にみんなで美香の部屋に着くとそこからは美香の部屋に置いてあった昔のアルバムなどを見て過ごした。

「お嬢様。お風呂の準備が出来ております。本当にあのような形でよろしいのですか？」

「あら、もうそんな時間に？解りましたわ、さあ、皆さん一緒に行きましよう。」

案内をしてくれたあの大浴場でお風呂に入れるとあって喜ぶが、秋と事情を知っている和美だけが心配そうな顔をする。

「どづかなさったの？蟹津さんも長田さんも早く行きませんこと？安心なさって、覗きなど絶対に来ないようにきちんと対策はしてありますわ。」

覗きなど心配していなかったのだが、言われると気になるもので、後に入ることになっていいる男たちに嚴重注意をするとお風呂へと移動を始める。

「ミーちゃん、あのね……」

「大丈夫ですわ。蟹津さんのことを考えて万全の準備をしていますの。」

秋が言おうとした言葉を遮って美香が自信満々といった様子で言葉を発してしまったので何も言うことが出来なくなってしまうた。

「大丈夫よ。私が一緒にいるんだし、パーティーに出席していた人たちはもう帰ったって言うてたから、今夜は何も問題なんて起こらないわよ。」

「う、うん。」

それでも不安をぬぐい切れない様子秋だったが、好意からの誘いを断りきることもできずに美香たちに連れられて脱衣所まで来てしまった。そして、渡されたものに啞然とするのだった。

「これなら、蟹津さんも安心して入れるのではなくって？」

「た、確かに、そうかもしれないけど、こういうものを使ったことがないから何とも言えないわ。」

秋がたじろぐのも無理はない。秋の隣では優花たち三人もそれぞれ自分用に渡された物を見てやはり戸惑っているようだ。しかし、秋ほど抵抗なく受け入れると、さっさと服を脱ぎだして浴室の方へと移動を始める。

「ツン先生。一緒に入ろうよ。これなら男子たちが来ても平気だし、何よりも怖いあそこでじーっと見つめてる子に対して防壁になつてくれるでしょ?」

優花の視線を追いかけると、そこには和美の姿が、明実は初めての体験にそれどころではない様子だ。和美が暴走する前にさっさ湯船につかった方が不幸が起きないかもしれないと考えて秋も服を脱ぎだす。

「秋い。私が手伝ってあげようか?こんな初めてでしょ?」

「上から被るだけなのにはじめても何もないよ。それより、変なことしないでよ?ボクも早くお風呂に入りたいんだから。」

和美の返事は微妙だったが、それなりに温泉などが好きな秋は先ほどの北条家案内ツアーの中で広い浴室を確認しており、入ってみたという誘惑に負けてしまった。優花に促されるまま服を脱ぐと、準備を整えて浴室へと足を踏み入れる。

「わ〜。すごいねえ。」

先ほど見た時はお湯がまだ入っていなかったのだが、この短時間に入れてしまったらしく、元々近くにあった温泉を引つ張ってきていたということもあって、かけ流しのお湯が滝のように流れ出ている。

「気に入っていただけたようですわね。私もあまり使わない別荘の中でもここだけはお気に入りですの。」

「うん。こんな素敵なお風呂があったら、ボクだったら一日に何度も入りたいと思っちゃうよ。温泉がでなくなっただって言ってたけど、なんでお湯が濁ってるの？」

「今日は特別なお湯を流してもらおうようにメイド達にお願いしていたからですわ。さあ、そんなところで突っ立ってないで中に入りになって。暖房がきいているとは言っても、そのような格好ではお寒いでしょ？」

美香に誘われて秋は掛け湯をすると、湯船の中に入っていく。長い

髪は今日はドレスを着たのでアップにしてまとめてあるが、湯船に少し入ってしまう。

「うん。これは生き返るみたいだよ。最初にこれを渡された時はどうやって入って良いのか解らなかったけど、別に気にならないね。」

「服を着ながらお風呂なんて初めてだったけど、それほど違和感なく入れるものなのね。」

「日本ではあまりしませんが、湿度の低い地方でお風呂に入る時などはこうやって入る場所があるみたいですね。私も海外に旅行に行った際に一度経験していても、日本ではあまりしませんが。」

美香が言っていた対策というのは、この服と濁り湯のことだった。和美などは逆に色気が増したとか心中思っていたりするのだが、秋は一枚あるというだけで少し安心して入ることができているようだ。お湯が濁り湯であることも湯船の中に入ってしまえば他人からの目を気にしなくて済むことが秋にとって楽になっているようだ。

「それにしても、なんでこんな方法を思いついたの？」

「以前からきいていた話から、私なりに考えたのは、蟹津さんは周りの目を気にしすぎているように受け取ったのですわ。私の様に自

分の道をひたすらに信じて突き進めとは言いませんが、もう少し自分勝手になってもよろしいのではなくって?」

「そつだよ。あんたもたまには良いこと言っね。私もずっとツン先生は気にしすぎだと思ってたよ。敦から聞いたバスケ部の話でも、あれだけ周りから必要とされてるのに気がつかないかと思えば、周りの人に嫌われていないか不安だったからじゃないの?」

「それは・・・」

反論する言葉が思いつかなかつた秋にさらに明実や和美が追い打ちをかける。結局秋が思っている以上に周りとの関係は良好なのだから、気にするなということで落ち着くと、次は別の話題が秋を襲う。

「今日はクリスマススイブでしょ? 私と和美ちゃんとミーちゃんは良いとしても、優花とクーちゃんは本当は彼氏と過ごしたいんじゃないの?」

「そんなことないよ。だって、こうしてパーティにも一緒に出られたんだし、今年はこれで十分だよ。ボクとしては“今夜だけ”は二人つきりになりたくないんだよ。」

「ほほう。“今夜だけ”ということは、ダンス中でも何か約束をしたんじゃないの?」

「え……そ、そんなことは……」

慌てふためく秋にみんながバレバレだと言って話を聞き出す準備を始める。逃れられないことを理解した秋はしぶしながら、ダンス中に竜とかわした内容を説明する。説明を聞いた面々はそれぞれ応援するもの、意外そうな顔をするもの、複雑そうな顔をするもの、真赤になって身もだえるものと様々な反応をする。

「ツン先生としてはどうなの？やっぱり自分でも嬉しいんでしょ？」

「もっと進んでいると思ってましたわ……そうでしたの……」

「秋が決めることだけど……」

「クーちゃんも大人の一步を……」

「ちょ、ちょっと待ってよ。みんな、ボクはまだOKを出してないんだから、特に明実！そんなんじゃないから。」

「ええ？でも、これってそういう意味じゃないの？私にはそういう風にしか解釈できないけど？」

「そうよね。私でもそういうことだと思っな。ツン先生としても何も無いんだったら即OKだしてたでしょ？」

「そ、それはそうなんだけど・・・」

ガールズトークが盛んになってきたが、明実がそろそろのぼせそうになってきたこともあって話は一端中断され、女の子たちの部屋に集まってこの話の続きをすることになる。秋としてはこれ以上過激な話になる前に辞めてしまいたいところなのだが、優花の様子を見る限り決断するまで許してくれそうにない。

時間は深夜、竜は大きなお風呂に敦と二人で入ってすっきりすると自分たちのために用意された部屋へと入って寝るための準備をしていた。要も泊っていくのかと思っていたが、大事な用事があると言ってお風呂に入る前に帰ってしまったので、この部屋には敦と二人きりのはずだったのだが、その敦も先ほど優花と明実によって部屋から連れ去られてしまったので誰もいない。敦がいればもう少し起きていても良いかと思っていたのだが、一人住みなれない部屋でもすることがなくなっただので、眠ってしまおうかと思っていたところだった。

コンコン

「ん？どうぞ。」

ノックの音に敦が帰ってきたのかと一瞬思ったが、敦だったらノックなどせずに入ってくることだろう。扉の向こうの気配を読むと数人感じ取れたので、女子たちが寝つけずに遊びに来たのだろうと考えた。

ガチャ

「起きてたんだね。」

扉の先には秋が一人、先ほどは何人かの気配がしたはずなのだが、小さく開かれた扉の向こうに他の人の姿は見えない。

「ああ、敦もおらへんし、これから寝るところやったんやけどな。どしたん？入ってきてええよ？」

「ね、寝るところだったんだ。じゃあ、悪いか、キヤ！」

バタン、ガチャ

どうやら竜の感覚は正しかったらしい、明らかに遠慮しようとしていた秋がなぜか自分の力じゃない力によって扉の中に押し込まれると、扉を閉められてしまった。

「あいつらは何をやったんや？まあええわ。敦もおらへんし話し相手がほしいと思ってたんや。どうせしばらくは出してもらえへんのやろ？」

「う、うん。さっき鍵がかけられる音がしたから、ひよっとしたら朝まで出れないかもしれない。」

「まったたく……まあこれもあいつらなりに、秋のためにやっとなる

んやろうから強くしかれへんのやけどな。」

「そうなんだよねえ。これで相手が悪人だったら、楽なんだけどねえ。」

秋がそういうと、竜は笑って、秋に中に来て椅子にでも座るように勧める。こういった自分の良く分からない状況にされることは、中学の頃に司や麻美たちに良くされていたので今更驚くことはない。

「ほんで、高校の心友たちは何を俺らに期待しとるんや?」

「実は……」

優花たちと話していた時はあれほど緊張して話をしていたというのに、竜の呆れたような、どこか慣れ切ってしまった態度を見て緊張を解くと、お風呂からのいきさつを説明する。すると、もう一度竜に大きな声で笑われてしまった。扉の外にはまだ優花たちがいるのだから、その大きな声は確実に届いているだろう。

「せやったら、十分やな。秋としても、こうしてみんなで馬鹿やってほんで俺とこうして笑ってられるんやから十分やろ?」

「ふふふ、そうだね。優花たちの望みとはちょっと違うかもしれな

いけど、せつかくなんだから、クリスマスイブらしく、プレゼント渡さないよね。」

「せやったな。ちょうど前に話してたのにいんとちやうどこうなったら俺も半分手伝おか？」

「そうと決まったら、みんなには早く寝てもらわないよね。」

二人は小声で扉の向こう側にいるみんなに聞こえないように約束を交わすと、寝る準備を始める。しばらくたって何の音も聞こえなくなったことを残念に思いながらも扉から離れた心友たちは自分たちの部屋に着いて絶句する。

そこには、メッセージカードと共に秋が自分で作ったのだろうプレゼントが置かれていた。

(夜更かしをするとサンタさんに会えないぞ)

メッセージカードには秋の綺麗な字でそんな風に書いてあった。扉の前で張り付いていたが音が聞こえなくなったのは当然だろう。竜の部屋の窓から秋と二人して脱出してこうしてプレゼントを配っていたのだから、そのことに気付いた心友たちは秋の手ごわさに舌を巻くのだった。

「しかし、「プレゼントはリボンを巻いた秋」だなんて言っておいてこれは竜君は相当な奥手なのかしら？」

「ちがうとおもっな・・・」

敦がそう言っても女子たちはその後竜がどれだけヘタレかという議論に終始し、明実が寝むそうにし始めたのを見て自分たちも寝ることにした。優花と敦は議論の途中でちよつと用事があると言って出て行ってしまったので、別の部屋で寝ていることだろう。

敦の言葉を気にしなかったことを後で後悔するとは思わずにそれぞれ眠りに着くのだった。

チャプター73（後書き）

大変遅くなりました。

サンタさんはもちろん秋サンタさんです。竜と一緒にみんなにプレゼントを配っている様子が秋らしいですね。

今回のテーマは秘密です。

たくさんのお秘密を隠してたくさんのお幸せを隠してみました。竜からのメッセージから始まって、すぐにバラしてしまうものからまたまた次回以降に持ち越すものまで中には幸せじゃない秘密があるかもしれないかもしれません。それらについてはまたこれから解って来ることと思います。

クリスマスが随分過ぎてしまっています。ここまで読んで下さってありがとうございます。

チャプター74

それぞれの距離

北条家の別荘にて清々しいクリスマスの朝を迎えているボク、夜中までずっと話し込んでいた者、さっさと寝てしまった者、それぞれだったが、朝食の時間になったのでみんな眠たい目を擦りながら起きだしてきた。

この中で唯一寝むそうにしていないのは竜と敦君くらいのものだろう。

「おはよう。みんなちゃんと寝たの？眼の下がクマだらけだよ。」

「おはよう。昨日は結局遅くまで話し込んだから、あまり寝てないのよ。秋はきちんと寝たみたいね。」

「ボクもみんなとそれほど変わらないと思うよ。結局竜と一緒に遅くまで話していたからね。」

「その割には、上田君と坂本君は元気そうですわね。私なんてたしなみとしてこらえているものの、今にも欠伸が出そうだというのに・
・・」

「二人は毎日の朝練で早起きには慣れてるからね。ボクも朝は強い方だとおもってたんだけど、流石にあんな遅くまで起きてたから少し辛いよ。」

「大丈夫か？秋の場合体調悪い時が一番危険なんやろ？朝ご飯の後もう一度寝て来るか？」

「もう、昨日寝かせてくれなかったのは竜でしょ。」

ボクはそう言って口をとがらせるが、全然怒っていない。そのことが伝わっているのだろう。竜も笑って流している。
と、そんなボクに何やら怪しい視線が降り注ぐ。

「ん？どうしたのみんな？」

「良く考えたら、部屋を抜け出したことはプレゼントが置いてあったことから解ったけど、その後の足取りを知らないのよね。秋と竜くんは私たちの部屋にプレゼントを置いた後どこに行ってたの？」

そう言っつて和美がボクにずいっと顔を寄せて来る。キスされそうになるまで近づいてきたので軽く顔を引いてボクは応える。

「しばらくはまた竜の部屋にいたんだけど、その後は優花と敦くんと一緒にいたわよ。ね？」

「うん。私とツン先生は“一緒に布団で夜を明かしたのよ。”うらやましいでしょ？」

「またそういうことを言う。優花がボクの膝の上で寝ちゃって離してくれなかったんでしょ。あの時狸寝入りしてたの解ってるんだぞ。」

「えへへ。だつて、ツン先生がプレゼントをくれたし、色々嬉しいことがたくさんあったから、つい。」

「あんなあ。つい、であんなことしてたら、俺らの立場はどうなるねん。なあ敦？」

「そうだね。これ以上俺のところには災いを持ちこまないでくれないかな？特に嫉妬的な意味合いでの災いだらけだ。」

「たまにはこうして刺激を与えないと、マンネリしちゃうわよ。ねえ、ツン先生？」

「いやいや、その話は昨日の夜に散々聞かされたから、もう満足よ。でも、確かにいつもと違うところに来ると、普段できなかったことができるようになったり、新鮮な気持ちになるのは本当かもね。」

「うんうん。」

優花と昨夜の話の続きで盛り上がっていると、和美たちから非難の声があがる。主に優花がボクのことを独占したことによる抗議の声が多いような気がするのはいのせいだろう。

「そうでしたの。私ももっと蟹津さんと話せると思っていたのに残念ですわ。今度いらしたときには是非私にも色々な話をお聞かせになってくださいね。蟹津さんの場合、私の想像しないような面白い出来事があったと長田さんから聞きましたよ。」

「ボクの秘密をバラしたの？もう・・・」

昨夜女の子たちの部屋での話題にボクの過去の話が上がっていた様子だが、和美が手を合わせてごめんなさいをしてきたので許してあげる。ボクの中で昨夜からミーちゃんも心友の仲間入りなのだ。

「そろそろ飯食べやん？お腹すいてもたわ。」

「そうですね。せっかくのスープが冷めてもいけませんし、食事にしましょう。」

竜は食べ物にうるさい割にこうしてみんなが食べ始めるまではしを伸ばさない。食べる時も必ずいただきますを言うなど時々マナーが良いなと思う時がある。まあそのおかげで司にお弁当をかすめ取られたことが何度もあるんだけどね。

朝食を取りながら昨夜渡したボクのプレゼントの話題になる。

ミーちゃんがミサンガをもらったことを言うと、全員の顔に何とも言えない安らいだ雰囲気 flowed。

ミーちゃんも昨夜のうちに和美や明実からそのミサンガの意味を聞いていたので、どこかほっとしたような恥ずかしそうな顔をしながら喜んでいた。

「あんなにライバルだつて言つてたのに、どうしてミーちゃんにミサンガを渡す気になつたんや？」

「ライバルつて言つても、心友には変わりないからね。色々な好きがあつても良いと思うんだ。どんな形の好きでも、ボクにとつては掛け替えの無い宝物だから、そんな純粋な気持ちには応えて行きたいんだよ。ミーちゃんからの好きは特殊過ぎて気づくのに遅くなつちやつたけどね。」

「わ、私がい、いつ、蟹津さんのことをす、好きだなんて・・・」

「こんな風にミーちゃんが言う時はいつも照れてる時なんだよ。ライバルとして認めてるつて証拠だとボクは思うんだ。だから、こんな形の好きも良いかなつて。」

ボクはそう言つてバツチンとウィンクをミーちゃんに送る。そんなボクにみんなが呆れた様なやさしいような笑顔をくれて、ミーちゃんは慌てふためいていた。先ほどまで眠気に負けないで完璧だったマナーが微妙にくるつてしまったらしく、喉に食べ物詰まらせたみたいで、水に手を伸ばしている。

「そんなに動揺されるとは思つてなかったよ。最近では仲良くなつてきてたし、今回だつて別荘に呼んでくれたり、それなりに打ち解けてきてると思つてただけど・・・」

ボクがそう言っただけで悲しそうな顔を見ると、今度は違う意味でミーちゃんがあわてだす。ミーちゃんの目を少し上目遣いで見て最後の駄目押しをする。

「ボクの心友じゃ嫌？」

「そ、そんなこと、ありませんわ。私も蟹津さんとこれから仲良くしたいと思ってましてよ。」

「わーい。ありがとう。」

そう言っただけで笑顔になる。先ほどの雰囲気演技だったことに驚いているのか、ミーちゃんはボクの顔を見てボーっとしてしまっている。なんなんだか、ミーちゃん以外もボーっとしてない？

「みんなどうしたの？」

「「かわいいいいいいい！」「」

その場にいた女の子全員から声が上がリ、隣に座っていた優花からは抱きしめられてしまった。背の高い優花に抱きしめられるとぬいぐるみの様に、ギュッと包み込まれてしまうので、ボクは苦しくな

って抗議の声を上げる。

「ツン先生がそういうことをすると、本当に可愛くって仕方がないわ。どうしてそういう乙女心をくすぐるような行動を取るのかしら。」

「ボクは何もしてないよ。それより、ちょっと苦しいから。」

「うん。離してあげない。ツン先生があんなことをあんな顔で言うからいけないんだよ。」

中学校の時に、ボクの周りにいてくれた子たちはみんな、どちらかというとお姉さんのような立場だったが、高校に来てからはそれがどうやら逆転してしまっているようだ。唯一ミーちゃんは妹的な立場じゃないが、優花にしろ、明実にしるボクのことを頼りにしてくれているような感じがする。

ボクが中学の時よりも大人になったのかもしれないが、それだけではなく、個々人の関係の成り立ちや、立場の違いがそうさせるのだろう。こうして抱きしめられる時も、中学までならやさしく包み込まれるような感じだったのに比べて、懐かれている感がぬぐえない。

「優花。そろそろ離してあげないとっーちゃんが苦しそうだぞ？それにしても、っーちゃんは今すぐ舞台女優になっても売れる気がす

るね。」

「うんうん。ツン先生のあの目を見たら誰だって一口口よ。」

そう言つて優花は離してくれた。ちよつと酸欠で顔が赤くなつてい
るかもしれない。抗議の意味を込めて下からにらもうとしたのだが、
目に少し涙が貯まっている状態ではあまり意味がないかもしれない。

「あ、あつし……これ以上私耐えきれないかもしれない。」

「う……我慢するんだ。隣で竜がすごい勢いで見てるから……」

「え？」

ボクは先ほどから優花に抱きしめられていたために優花の方ばかり
見ていたので竜の様子は見ていなかった。

敦君に言われて竜の方を見ると、複雑そうな顔で見ている。

「あ、えつと……ごめんね？」

「かまへんよ。それより、これからどうするん？昼くらいまで遊ん

でから帰る予定だったやんな？秋と優花ちゃんはお目当ての場所があるからええけど、俺や敦はなんもすることあらへんのとちゃう？」

「うん。そういえばそうだね。」

竜が言ったお目当ての場所というのは、昨日紹介してもらった部屋のことだろう。ボクや優花が行くとなれば女の子たちはみんな来るだろうから、そうなると竜と敦君にはやることがない。

どうしたものかと考えていると、それとは関係のないところで和美が声を上げた。

「ねね。そういえば、さつきから竜くんも敦くんもお互いのこと名前で呼んでるよね？今までは苗字だったのに、どっという心境の変化？」

「そういえば・・・」

ボクと優花は昨夜からずっと聞いていたにもかかわらず、余りに自然に使っていたので気付かなかった。二人もなんだか今更といった雰囲気があり、どう説明していいのかわからないようだ。

「それだけ打ち解けてきたってことじゃない？呼び方がちょっと変わったくらいでびっくりしすぎだよ。」

「まあそれはそうなんだけど、敦くんって、普段は優花と一緒にいるから気がつかなかったけど、アレじゃない？」

「ん？アレ？」

「背も高くてバスケットをしてるから体つきもがっちりしてるんだけど、顔が中性的っていうか、なんというか・・・」

明実のアレという発言も和美の言葉も良く解らなかった。どうやら昨夜、女子の部屋で話されていた内容に関係があるらしく、そのあたりも含めてミーちゃんにきちんと話してもらおう。

「その・・・上田君が余りにも蟹津さんになにもしませんので、男性に興味があるのではという話になり、それで相手はどなたかという・・・」

「「ぶはあー!!」「」

ちょうど水を手にしていた竜と敦君が同時に吐きだした。そして、ボクと優花はそれぞれの人物に疑いの目を向ける。

「「竜（敦）そうだったの・・・」」

「ちよま!..!」

「ちが・・・」

ボクの方は竜がそんなことを知っているのだからかつて
言っただけだったのだが、優花と敦君の方はそれだけでは収まりが
つかなかった。濡れ衣であることを主張しよと言葉を発する前に、
優花の右フックが敦君のわきばらに突き刺さり、それ以上の言葉を
ださせてはくれなかった。

「まあ、竜はこれでもプレイボーイだから、そんなことはないよね。
敦君、男の子が好きでも竜は駄目だよ。」

「いや、だから、俺は違うって、勝手に言われて俺が本当にそうか
どうかも確認しないで殴るなよ。」

「良いの。敦は私以外の男の子も女の子も好きになっちゃだめなん
だから。」

「そしたら、優花はついちゃんのこと大好きだろ？それは良いのか
？」

「それはいいの。」

そこから優花と敦君の言いあいが始まった。

とはいっても、優花も最初の一撃が悪かったと自覚しているようなので、今回は敦君に謝って終わってしまいそうだ。

「ああ、今日は結果帳部屋に置いてきちゃったわ。」

「後でつけたら大丈夫よ。たしか、敦くんが9勝で優花が75勝よ。敦くんが年末までに二桁勝利を飾れそうね。」

和美と明実がそんなことを言っている。ケンカに夢中な二人は気づいていないが、和美と明実の中で二人のケンカは日常となっており、二学期の始めくらいから勝ち数を数えており、どちらが勝つかで菓子をかけているのだとか、ついでに敦君が勝つことが少ないことを把握したあたりで、敦君に賭けて勝った時は大穴でかなりのボーナスがあるんだとか、今回は和美が先に言いだして笑顔になったことから、敦君に賭けていたのだろう。

そんな風に脱線しながらも、クリスマスを北条の別宅で過ごすことはすでに決まっております、今後どうしようか悩んでいたところに、一通のメールが到着する。

（昨日の晩は楽しめた？私たちもささやかだけど、パーティーしたんだよ。来年はメグも一緒にクリスマス過ごしたいね。）

文字だけ拾うとだいたいこんな感じだが、最近の鈴からのメールは絵文字がたくさんあって読みにくい。

ボクはメールよりもできるだけ直接会いたいタイプの人間なので、あまり凝ったメールをしないが、鈴も麻美も最近ではケータイの機能を存分に発揮したメールをくれる。

「ん？ひよつとして鈴ちゃんか、麻美あたりからメール？」

「うん。良くわかったね。」

「司か浩太だったらそんな顔しいひんからな。そういえば、昨日の晩の話、司達にも教えておくぞ？」

「ええ？だって、あんなのおかしくない？竜がそういつならちよつとあたってるかもしれないけど、流石に現実離れしすぎてるよ。」

「そうか？まあ解らんからこそ相談しといたほうがええと思っし、司たちには俺の方から言っとくわ。」

竜がこう言ってくれるのは良くあることだ。高校に入ってから、ボクにとって不安定な日々が続いた時、竜は自分なりにボクのことを守るためにどうしたら良いのかを考えてくれ、その結果として、中学の時に大切だった仲間たちと何度も相談をしていたようだ。

今は高校が違うから、中学までのようにいつも一緒というわけにはいかないが、それでも心の支えになってくれている頼れる心友なのだ。

「なあ、俺と敦はテニスでもしとるから、みんなは秋と一緒にあの部屋行っててくれてええぞ？俺らは体動かせれば別にかまへんからな。」

「それなら、私達も、外にいきませんこと？蟹津さんたちの邪魔をするのも悪いのではなかつて？」

「いや、ミーちゃんはツン先生と一緒にいた方がいいと思うよ。私とツン先生だけだと解らないことがたくさんありそうだしね。」

優花はそう言ってくれたが、それ以上にボクがミーちゃんと竜と一緒にいるのを嫌がっているのを理解しての言葉だろう。

優花にはなんだかんだ言つて全てのことを伝えてしまっているかもしれない。

優花にせがまれるとなんでも許してしまうのは先生としてはいけないかもしれないが、優花は見た目に反して人懐っこい性格なので、どうしても色々世話を焼きたくなり、そうしているうちに色々聞きだされているのだ。

「それもそうですわね。私もせっかくですし、蟹津さんが絵を描いているところを見てみたいですね。」

ミーちゃんは最近ボクのことを敵視しなくなってきた。純粹にすごいと思うことに関しては褒めてくれる。ただし、テストや体育の時間などはやはりまだボクとの対戦を願うような態度が目立つので、その時は正々堂々と戦っている。

「私たちはどうするの？」

「明実も和美も一緒においでよ。せっかく美術部に入ったんだから、絵が描けるようになった方がうれしいでしょ？和美はテニスって言われてちょっと久しぶりにやりたくなっちゃった？」

明実は優花と一緒にできることもあって今では美術系の物に興味があるらしい。最近ではちょっとした作品を描いたり作ったりして美術部としての活動にも積極的に参加しているらしい。

それとは逆に、和美は美術部に入ったとはいっても、ボクが行かないときには全く顔を出さない状態で、今回も竜たちに付いていつて

テニスをしようだ。

「それじゃあ、ボクたちもある程度やったら外に行くことにするね。今日は一日晴れてるみたいだから、お昼は外でお弁当にしようか？ボクと優花が美味しいお弁当を作ってあげるから、期待しておいてね。」

「フーちゃんのお弁当食べれるん久しぶりだね。期待してなくつちや。」

「あ〜っ〜し〜!〜!」

「優花が美味しいお弁当を作って敦君を見返してあげたら良いんだよ。さ、なにはともあれ先に絵の方を済ましちゃおう。今度いつ来れるか解らないから、今日のうちにある程度進めておきたいからね。」

「うう・・・良いもん。ツン先生と一緒に作ってくれるなら今日は絶対美味しいお弁当作ってやるんだから。」

敦君は拗ねている様子の優花にまたしてもチョツカイを出しているが、敦君なりの愛情表現なのかもって最近は思い出した。実際に敦君は文句を言うことはあっても、優花が作ってきたお弁当だったりお菓子だったりを残したことはない。空手をやっていたとはいえ、

優花は女の子だ。本来なら殴り合いのケンカなどになった時に敦君が力で負けるはずがない。それでも優花が一方的に殴ったりしてもちろんと仲直りをしているところを見ると、敦君は優花のことが大好きなのだろう。

まあ、素直じゃないのは人のことを言えないからそのあたりについてはあまり突っ込んではいないけど、敦君と竜の仲が良いのは敦君のその態度がボクと似ているからかもしれない。

「さあ、それじゃあ予定も立ったことですし、移動しましょう。」

「うん。」

ミーちゃんは普段から慣れているから違和感がないかもしれないが、屋敷の使用人の人たちが何もかもしてくれているのを居心地悪く感じてしまったボクたちは朝食のお礼と昼食は自分たちで作るからということを伝えると、各自移動を始める。

しばらくはボクと優花で話しながら絵を描く準備をしていたのだが、昨夜寝ていないというミーちゃんと明実がソファで折り重なるようにして寝てしまったので、優花が毛布をもらってきてかけてあげた。

絵を描きだすと集中しだしたことを理解した優花も隣で黙って見ていてくれたので、部屋の中は鉛筆を動かす音だけが静かに流れる。

「こんな感じでどうかな？」

「うん。すごく良いと思うよ。ミーちゃんが見たら驚くかもだけだね。」

「ふふふ、じゃあ、完成するまで見ちゃダメって言ってこのキャンパスは持って帰ることにしようか。」

「良いかもね。でも、この休みに描いちゃうんでしょ？」

「そうだね。ここに来てから湧きだしたイメージがあるから、できるだけそのイメージが鮮明なうちに描きたいしね。」

「うん。でも、急いで描かなくても大丈夫だから、ツン先生のペースで描いてね。」

「了解しました。さて、それじゃあこの子たちはちょっとこのままにしておいて、お昼の準備に行こうか？」

「そうだね。まだ時間もあるみたいだし、二人ですれば七人分くらいすぐでしょ。」

「若干二名ほどたくさん食べる子がいるから多めにつくらなくっちゃいけないけどね。テニスで体を動かしていたから、余計にお腹がすいているだろうしね。」

ボクと優花はそう言ってキッチンの方へと移動する。七人分も作ると言っても、それほど凝ったものを作るわけでもなく、ボクと優花は材料が十分あることを確認すると、手分けをして作り始めると、一時間ほどで完成する。

「ちょうど良い時間になったね。それじゃあ、優花は寝ている二人を起こしてきてくれる？ボクはこれを持って先にコートの方に行ってるよ。」

「はい。敦に先に食べないように言っておいてね。」

「三人が来るまでボクがお弁当守ってあげるから、安心して良いよ。」

ボクがお弁当を持ってコートに着くと、ベンチでぐったりしている和美と元気に走り回っている二人が見えた。

「和美、大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも、秋が膝枕してくれたら少しは大丈夫になるかも。」

ボクが和美に駆け寄って声をかけるとそんなことを言い出した。どうやら和美も昨夜遅くまで起きていてあまり寝ていないらしく、そんな状況で運動をしたのでここで休憩していたのだからか。

「お〜ほっほっほ。長田さんもその程度でダウンするなんて、その程度ではテニス界にこの人ありとうたわれた私には勝てませんことよ。」

誰も勝ちたいとは思っていないだろう。優花は明実を起こすのに苦労しているのかまだ来ていないが、ミーちゃんは先に来たらしい。それにしても、さっきまで寝ていた自分は差し置いてそんなことを言っているあたりまだねぼけているのかもしれない。何よりもボク以外の人間に挑発している辺り通常ではないだろう。

「ミーちゃんってテニス得意だったの？」

「私これでも中学の時には学校では一番でしたのよ。」

「ミーちゃんが行っていた中学って？まあいいや、じゃあお弁当の後に一緒に打とうか。優花たちも来たみたいだし、竜と敦君もお腹がすいたでしょ？」

絵のこともおおよその見当がついたので、午後からはボクもみんなと一緒に外で過ごすことにし、みんなでお弁当を食べたら、ミーちやんとも試合をすることになった。

中学の時のメンバーとは違った雰囲気はあるが、あの時の場面を写した絵のように、暖かい時間を過ごすことができた。

チャプター74（後書き）

この後の展開は皆様の予想どおり？敦と優花はじゃれあい、和美は秋に甘え、竜は独占できないことにさみしさを覚え、明実はいつものようにほんわかしていて、美香はテニスも勝負を挑み、秋がテニスにおいても才能を発揮してくれることでしょう。

これにてクリスマススイブならびにクリスマススの北条家別荘の話を終わります。

今回のテーマは、秋から見た心友たちの様子です。

最近タイトルから書くとテーマとタイトルが被ってしまうAKIです。かといって、インスピレーションを大切にしているAKIは一度決めたタイトルを変更するのも違和感があり、趣向に合わない判断した場合を除いて変更しておりません。

皆様には、タイトルと誰目線での話しかを見ていただいて、こんな内容ではないかと思いつながら読んでいただけると安心して読んでいただけるかと思いません。

あまりにも違和感あるタイトルで読者の皆様がちょっと待てよと感じなければ十分と思っております。

そんな目標の低い作者ではありますが、ここまでおつきあいくださいまして本当にありがとうございます。

チャプター75

「最近、アレが来ないの・・・」

冬休みの間心友たちと遊んだり、部活に行ったりと結構忙しく過ごしていた俺やつたんやけど、三学期が始まって秋の様子がおかしいことに気がついたんや。元旦にみんなで初もうでに行った時は何も変わった様子なんてあらへんかつのに、どうも最近秋の様子がおかしい。何でもない時に俺の側によって来たり、優花ちゃんたちが何かを隠してとるみたいや。

「秋、今日は部活休むか？なんや最近様子へんやろ？体の調子でもおかしいんやないか？」

「そんなことないよ。ただ、ちょっと最近気になってることがあつてね。竜には内緒つくらないって約束したし、後できちんと話すね。」

「ん？今やとまずい話ってことか？」

「う、うん。ちょっとね。」

そう言いながらも、秋は俺の側を離れようとはしいひんから、よっぽどの理由があるんやろう。今は朝練の時間やから、この後二人きりになるのはお昼の時間までまたないかん。今日は冬休みに描いた絵のことでミーちゃんが来とるから、先に教室にいくらしい。

秋のことばかり考えていせいか、朝の練習にはあまり力が入らへんかったけど、普段から頑張つとるから一日くらい身の入らない練習をしとつても誰からも怒られたりはしいひんかったけど、様子がおかしいのはバレとつたらしい。

「上田、どうしたんだ？今日はやけにシュート外すな。」

「すみません。キャプテン、ちょっと考え事してました。」

「まあ、上田だって人間だから、調子の悪い日くらいあるだろうけど、秋ちゃんが一緒に教室に行ってくれないくらいで調子を落としたりしたらいけないぞ。」

「ちやいますつて。秋のことで心配があるのは事実ですが、大したことやないんで心配線といてください。何かあったら先輩たちにも相談します。」

「なに？秋ちゃんに何かあったのか？」

「いえ、ほんまにたいしたことやないと思うんで心配せんといってください。最近是不幸も減ってきて、秋の周りの人も安心して接してるんでたぶんなんもないと思います。」

「そうか、一時期はどうなることかと気をもんだものだが、最近不幸が減ってきてるんだね。だったらなんでそんな顔をしてるんだ？お前がすっかりしてやらなきや秋ちゃんが不安がるぞ。」

この先輩は基本的に良い人だし、俺も尊敬してるんやけど、言葉の端々に秋のことを狙ってるんが伝わってくるのが困る。今も俺を励ましてくれるんは本心なんやろうけど、その立場に自分がいられへんのを齒がゆく思ってる節がある。

「大丈夫です。相談したいことがあるから、またあとでって言われてるだけなんで。」

「そ、そうか。まあきちんと話を聞いてやるんだぞ。」

ほら、今もなんや残念そうや。前に俺と秋が別れたって噂が立った時に河野先輩と一緒に告白了ことから、秋のことを狙っとるのが解る。まあ、河野先輩とちゃって表にださへんだけ大人なんかもしれへんけどな。

「本当に大きなことで俺らの手にあまるようならまた相談させてもらいます。」

「ああ、俺たちは同じバスケット部の仲間なんだ。遠慮せずに相談して来い。上田は特に来シーズンからはレギュラーになるんだらうから、

部活以外に心配ごとを増やして集中できない状況にならないように、きちんと悩みは解決するんだぞ。」

秋を狙う男やっつていうのに、こんなに良い人だと嫌いになりきれへんから困るわ。秋を好きになる人ってどうしてこんなに良い人ばっかなんやる。というか、どうしようもない奴で俺が間に入ったりして退けた奴以外、秋と接するうちにどんどん良い人になってるよな。こうして俺は秋を独占できなくなってくんや・・・

「大丈夫か？」

「はい。川本キャプテンがほんまに良い先輩やっつてのを再確認させてもらてました。」

「おだてても何もでないぞ。まあ、上田には期待しているから、頑張ってくれ、体調が悪いなら今すぐに休めと言うところだが、放課後の部活までに解決しそうならきちゃんと参加するんだぞ？」

「はい。参加できるとおもいます。」

秋の話次第ではあるが、おそらく問題ないだろうと思えば参加する意思をつたえとく。

朝の練習が終わり、俺は敦と一緒に教室へ向かう。俺の教室は体育館からだ隣とはいえ秋のクラスよりも近いところだが、敦もいることだし、少しだけ秋の様子が気になったので覗いていく。

ガラガラ

「おはよ。」

敦は当然自分のクラスやからすんなり中に入ってくんやけど、俺は違うクラスやから中には入らへん。なんとなくやねんけど、隣とはいえ自分とは違うクラスに入るんは違和感がある。友達も何人かおるんやけど、教室とちゆうんはそのクラスのメンバーが集まる場所やから、よそ者である俺が入るんは場違いな気がする。

「え？最近アレが来ないの？」

「ちよ、優花、声大きいよ。」

「でも、ツン先生・・・」

「秋も大人になったから、来ないんじゃない？」

「いやいや、大人になったら普通は来るんじゃない？それがこないつてことは、何かあるんじゃない？」

「そっか、クーちゃんは大大人になって、さらにその第一線を越えちゃったのか・・・」

俺は廊下で秋たちの話ているのを聞いて絶句した。おそらく秋が朝相談したいと言っていたのはあの会話のことなんだろう。俺は自分のクラスに帰ると、先ほどの会話の内容をもう一度考えなおした。

『女の子が大大人になるときて、さらにもう一段階大人になると来ないもの・・・』

和美ちゃんと明実ちゃんの言葉が俺の胸に突きささる。ひよつとしてアレってアレだよな？中学に入る前に秋が言っていた。最初のうちは俺も良く解らなかったが、俺も高校生だ。今はきちんと意味が解っている。

「どうしたの竜くん？」

「いや、何でもねえ。」

「そんな何でもないって顔じゃないわよ？」

「ええからほつといてくれる？今俺は考え事してるんやから。」

教室に入って席に着くと、いつもの女の子から声をかけられる。こいつは俺が秋とつきあつとるんを良く思っでないらしい。何かある度に俺に付きまどつて秋と別れるつて言っでくるから俺はあんまり好きやない。

「またあの彼女のこと？」

「そうや。お前には関係あらへんから引つ込んでくれるか？」

「そんな竜くんに心配ばかりかける彼女別れちゃえば良いのに。」

「ええかげん聞きあきたわ。俺と秋は別れへんから、次その言葉言つたら無視するつて言つたよな？」

「解つたわよ。次からは言わないわよ。」

自分でも失言に気づいたらしく今回は引き下がったが、このやりとりももう何度目やという状況やからまた同じことが繰り返されるんやろう。面倒な奴が引き下がったことで、気心の知れた友人と話す

チャンスが訪れたと思つて周囲の席を見渡すやけど、友達に話しかける前にチャームが鳴つて先生が入つてきてまつた。相談するのは次の休み時間にしよう。

秋の周りもたくさんさんの友達が集まるけど、俺の周りにだつてそれなりに友人はできとる。秋みたい不幸の問題が絡まつてへん分浅く広くつて感じなんはしゃあないけど、それでも高校に入つてそれなりに自分の胸の内を話せる友達もできた。今話してるんはそんな友達の一入や。

「どうおもつ？ やつぱ正月に酒飲んだ時やと俺はおもつて。」

「お前が酒で記憶飛んでるつてのが想像できないし、そんな時の記憶ははつきりしてるんだろ？」

「ああ、寝る前まではあるんや。せやけど、さっきも言った通り寝て起きたらみんな床で転がつてた状態やで？ しかも、隣には秋がおつたからな。」

「うらやましいぜ。あの蟹津秋ちゃんだろ？ 噂のつんちゃんとそんな状況なつてみたいぜ。」

「あほう。ちゃんと話聞いてたんか？ 二人ともきちんと服は着とつたちゅうの。」

「だつたら何も無かつたんだろ？ 火の無いところに煙は立たぬ。うらやましすぎるぜ。」

「だあかあらあ。何度も言うけど、俺は火も煙も立てた覚えはないつちゅうの。」

「だつたらお前の聞き間違いか何かだろ。そんなもん本人に確かめるしかないやないか。」

「それはそうやねんけど・・・」

結局友達に相談してもなんの解決にもならなかつた。こいつには秋の特殊な不幸体質のことは話してないので、というか勝手に話すこともできないので当然なのだが、噂程度の秋の情報ではなんの解決にもならないらしい。むしろ変な噂が立たないように今の話は無かつたことにしてもらつて、それで終わりそうやつた。

「まあ、お前の良い分も確かやな。きちんと話聞いてみるしかなさそうやな。この話は誰にも言わんといてな。そしたら、後できちんとうなつたか話たるからさ。」

「ああ、しかし、俺も彼女さえいなきゃファンクラブに入りたいくらいの美女を彼女にしてるのに、何も無いなんてお前どうなってるんだ？」

「お前なあ。お前に彼女おらんかったら、俺はここまで仲ようなつてへんかったかもしれへんぞ？とにかく、俺と秋の関係は複雑やねんで、まあ秋以外の女に興味もあらへんから、別れることもないんやけどな。」

「まああれだけの女は滅多にいないからな。巨乳でロリ顔で頭が良くてスポーツ万能で、性格も良いつてどれだけ完璧なんだよ。」

「お前の彼女も結構良い女なんだろ？」

「まあな。聞いてくれるか？この前な・・・」

こいつは秋のこと以上に自分の彼女にゾッコンだ。こうしてこいつの彼女自慢を聞くのも何度目かになるのだが、その旅に俺は最後まで聞かされる。こいついわく俺以外の人間に話すと妬まれたり僻まれたりするのだが、俺は秋がいるので最後まで聞いてくれる唯一の人間なのだとか。目新しい話はほんの少しであとは前にも聞いた話だったりするのだが、ここでこいつの話の腰を折るのは得策じゃないことを経験で知っている。秋の話をした時はトイレで誰もいないことを確認して話したのだが、このままこいつとこの話をしながら教室に戻れば周りはずっとこいつが惚気ていたのだと勝手に勘違いしてくるので、こうして会話を続けるのが一番なのだ。

キーンコーン

「チャイムなつてもたぞ。またあとで話きいたるから、席に戻れ、昼はまた体育館に行くから、また今度な。」

「了解。今度俺も一緒に体育館行っても良いか？」

「ああ、じゃあそこらへんのことと一緒に食べる敦たちと相談するけど、たぶん大丈夫やおもつで。」

「あいよ。」

お昼を屋上や美術室で食べていることはこいつは知っている。あえて体育館と言ってくれているのは俺と秋の事情を少なからず理解してくれているからだ。秋の方はファンクラブがあるし、俺の方は朝声をかけてきた苦手な女を撒いていることを解ってくれているのだ。こいつは来年理系を選択すると言っていたし、来年も同じクラスになる確率が高いから、今年のうちには秋たちと仲良くなっておいても問題ないだろう。

午前中やはり秋のことが気になってあまり身が入っていない授業を受け終わると、俺は体育館へと移動を始める。休み時間のうちにメーイルで合流場所を聞いてあったので、問題なく屋上へとたどり着く。俺のクラスの友達も誰にも疑われることなく到着した様子で、自己紹介なんかしてる。

「遅くなったな。秋はまだか？」

「クーちゃんももうすぐ着くよ。今日は木登りするのが嫌だったから、ちょっと撒くのの時間がかかるみたい。」

木登りが嫌って、やっぱり朝のアレはアレだったのか？確かに木登りをするのは問題があるよな。

「そ、そうか。とにかく、もう自己紹介してたみたいやけど、俺のクラスのツレな。毎日そっちのクラスの人間ばっかやったし、こいつも一緒に飯食いたいって言うてたから今度からちよくちよく一緒に来るかもしれへんでよろしく。」

俺がそう言っただけでクラスの奴を紹介していると、ちょうどそこに秋が屋上に現れた。

「遅くなってごめんね。江崎直弘くんだよ。俺から話は聞いてるわ。よろしくね。」

「ああ、よろしくね。」

「秋、よろしくってあなた大丈夫なの？」

「大丈夫じゃなかったら俺が呼んだりしないよ。それに、前々から俺から話だけは聞いてるから、どんな子かだいたいだけど知ってる

からね。一個下に可愛い彼女がいて、その子が来年T高受けるんでしょ？一緒に通えるようになるといいね。」

「そうなんだよ。やっぱり君と竜みたいと一緒にラブラブ登校したいじゃないか。でも、T高は結構レベルの高い学校だからね。彼女は良いんだけど、勉強はあまりできないから、どうなるか心配なんだよ。」

「でも、とつてもガンバリ屋さんなんでしょ？きっと合格するわよ。信じてあげなきゃ。」

「その通りだね。正月に一緒に合格祈願のお守りも買いに行ったし、きっと合格すると信じてるよ。」

「あのお。お二人さん？江崎くんの彼女さんがとつてもガンバリ屋さんで江崎くんがその子のことをすっごく大好きなのは解ったんだけど、そろそろお弁当を開いてあげないとマテしてるワンコたちがかわいそうだよ。」

「ワンコって俺のことか？」

「あらそうよ？敦と竜くん以外の誰がいるのよ。さ、食べましょ。」
優花ちゃんにワンコ扱いされたが、お腹が空いてきたのは確かやから、止めてもろて助かった。直弘の彼女自慢は際限があらへんから、どこかでとめなお昼休みなんてあつという間に終わってまう。俺たちはお弁当を開くと、それぞれいただきますを言って食べ始める。

「そうそう。それで、朝話してたなんやったん？ひよっとして直弘おると話せん内容？」

俺はご飯を食べ終わると、気になっていた朝の話を訪ねる。そういつた意味では今日直弘を呼んだのは失敗だったかもしれない。

「うん。でも竜がせっかく呼んでくれた友達だし、少しくらいならボクの秘密話しても良いと思うんだ。」

「まあ、色々な事情があるって程度には教えてるから、それなりに話したって。」

「うん。簡単に言うなら、最近、アレが来ないの……」

「ぶ……アレって、アレ？」

「ん？うん。」

「そ、そうか・・・解った。秋はとにかくできる限り俺の側におりな。他の奴も秋のこと守ったってな。家族には俺の方からきちんと話しするわ。」

「え？あ、うん。確かにそれは嬉しいんだけど・・・」

俺は秋のことをしつかりと守ると約束した。幼い時にしたたわいもない約束だったかもしれないが、今もその気持ちには変わりはない。その後しばらくその話題には触れずに休み時間を過ごす、俺たちはそれぞれのクラスへと帰っていく。

「そっか、竜がパパになるんだな。がんばれよ。」

「まだ高校生やってのに、向こうの親にはド叱られるやろな。特に秋のお父さんってかなり古風な人やから、何発か殴られるんは覚悟しなかんわ。」

「うわあ・・・どうすんの？高校辞めて働く？」

「それも考えないかな。まあとりあえずまずは両親に挨拶に行つてからやな。」

俺はこの時アレの意味を完全に履き違えているなんてことは解らずにただこれからのことについて真剣に考えていた。

「すみません。本当に申し訳ないのですが、諸事情により今日は早く帰らせてください。秋とちよつと二人で用事があるんです。」

「え？朝言っていた問題ってそんなに重大なことだったのか？」

「はい。申し訳ありません。」

俺は授業が終わるとまっすぐ体育館に来て川本部長にさういうと、秋を連れて帰ろうとした。そして、教室で何か用事をしていたらしく俺よりも少し遅れて体育館に来た秋を連れて帰ろうとする。

「秋、今日は帰るぞ。」

「え？どうしたの急に？」

「ええから、今日は秋の両親にも話があるから、帰ろ。」

「ん？まあ、竜がさういうなら。すみません突然。」

「いやいや、いつも二人が一生懸命してるのは知ってるから気にし

ないで、大事な用事があるんだろ？」

「はい、そうみたいです。本当にごめんなさい。」

秋はなんだか煮え切らない様子だ。確かにあのお父さんにこのことを話したらどうなるか解らないから先延ばしにしたいという気持ちも俺にはあるが、こういうことは早めに済ました方がいいと思う。

秋が帰る準備を終えるのを待つて二人で自転車置き場へと向かう。

「ひよつとして今日話した内容そんなに心配してくれてるの？」

「心配するにきまつとるやろ？」

「で、でもさ。やっぱり来ないにこしたことはないんだから、そんな心配するようなことでも無い気がするんだ。」

「来ないってのは大問題やろ？」

「え・・・そ、そこまで言わなくても・・・確かにボクは来るのが当たり前だったけど、よくよく考えたら来る方がおかしいんだし、優花たちもそう言うて励ましてくれたのに・・・」

「ん？来る方がおかしい？」

「ちよつと待つて、竜何か勘違いしてない？」

ここまで話が進んで俺は秋が言っていたアレの意味を理解してしまつた。

「ああ、そうみたいやわ。ずっとアレってしか聞いてへんかったけど、ひよつとしてアレって不幸のこと？」

「う、うん。」

「なるほどな。確かに最近来てへんな。ほんでもって大人になると増えてたな。」

「大人になると？」

「実はな・・・」

ここで俺は朝教室に行つて秋たちの会話を拾い聞いていたことを伝える。そして、そのことが完全な勘違いだったことに二人で笑つてしまう。

「あははっは。どんな勘違いをしてるんだよ。まさかそんな風に伝わってるなんてボクも思わなかつたよ。」

「俺かてあんな言葉だけじゃわからへんつの。第一、全部聞いてた優花ちゃんたちは絶対勘違いに気づいてたやろ？」

「うん。確かにそうかもしれないね。でも、だからこそ黙ってたのかもね。」

「ん？なんでや？」

「だって、優花にはもう一つ相談したんだもん。」

「もう一つ？不幸が減ったことはええことやろ？何を相談するんや？」

「確かに不幸が減ったこと自体は良いことだよ。でも、それで嫌になることもあるの。」

「不幸が減ったと思ったらしわ寄せで大きな不幸が起こるとか思っ
てへんか？そんなことあらへんやろ。まああつたとしても俺らがつ
いとるんやから切り抜けられるって、安心しとき。」

「違うんだ。確かにそれもあるかもって考えたんだけど、もつと単
純なことで悩んでたんだよ。」

「ん？もつと単純なこと？」

「俺はボクを不幸から守ってくれてるって約束してくれたよね？」

「当たり前やろ？」

「でも、不幸がなくなったら、俺がボクの側にいてくれる理由がな
くなるんじゃないかなって・・・」

俺は秋の心配してる理由が全く解らなかつたらしい。こんなことで
秋が悩むなんて考えてもみなかつたんや。

「馬鹿やな。俺は秋が不幸やから守つたるんやないで？秋が好きや
から不幸でも守つたるんや。俺は秋と違って嫌いな人まで守つてや
ろうなんてやさしさはもつとらへんからな。俺の側におり、秋が不
幸でも幸せでも、ずっとおつたらええねん。」

「ちよ・・・」

秋は俺の言葉に真赤になってしまった。今は体育館に寄つて着た分
少し、下校する生徒たちの集団から外れているとはいえ、いつもよ
りもそれに近い時間なわけで、当然周りにはかなりの生徒たちがい

るわけで、今の場所はそんな生徒たちが通る自転車置き場と電車へ向かうための曲がり角だったりして、簡単に言っならすごく目立ってしまっている。

「秋、とりあえず、この場所は離れようか。ちょっとばかり人が多すぎるわ。」

「う、うん。」

秋もそのことに気づいたらしく、俺に促されて移動を始める。今更部活に出る気も起らなかった俺たちは今日は勘違いから生まれたとはいえそのことは後日先輩たちに謝れば済むということで、久しぶりにデートに出かけてきちんと俺が秋のことを大切にしていることを証明することになった。

チャプター75（後書き）

クリスマスからいきなり一月に飛ぶのかよと思った皆様申し訳ありません。

正月などイベント事があったにも関わらずそれより重要なイベントがあるので一月まで進めてしまいました。

今回のテーマは勘違いです。アレってなんだよと思った皆様、本当にありがとうございます。アレについていち早く気づいた皆様、素敵でございます。竜のセリフなどにさりげなく隠してみたのですが、AKIの文章に慣れている人だと、ひよっとしたら一瞬で見抜けたかもしれません。

それにしても、アレって本当に大変ですよ。一か月遅れたりしたらもう・・・ちよつとしたストレスなんかで遅れていてもひよつとしたら？なんて考えてしまうものです。竜が勘違いしたアレについて解らない人は解らないままもうしばらく大人になるのを待ちましよう。

ちよつとR15タグ付けた方が良かったかもと後悔しているAKIでおくりいたしました。

それでは、ここまでお付き合いくださいまして本当にありがとうございます。

チャプター76

突然の出来事

最近クーちゃんの周りで不幸な出来事が起きなくなったの。みんなは心配することないと言っているけど、それでもやっぱり心配してしまうわ。特に、最近美術部に行くようになって、河合部長と話すことが増えたから余計に不安なの。以前部長は、

“ 今まで中学時代の心友たちの側にいたから起きなかった不幸が、一気にしわ寄せとして高校に入ってから起こったただけだ。”

と言っていたということを知っている。どうしてその現場にいなかった私が知ってしまったかは秘密なの。そういうわけで、私は最近クーちゃんの周りで不幸が起こらないのは、側に誰かがいるからだと思うの。河合部長は本当に言うことが未来予知みたいにズバズバ当たるから、このことに関しても、信用しても良いと思うの。そうなるってくと怖いのは、しわ寄せとして起こるかもしれない大きな不幸が心配なの。

「おはよう。」

クーちゃんは今日も元気に登校してきたわ。高校に入っただばかりの時は一りでいることの多かったクーちゃんだけど、最近では滅多なことがない限り一人でいることはないのよ。朝は竜くんと一緒に登校しているし、教室までの道のりだって竜くんがいないときも誰かが一緒にいるわ。教室に入ってから、女の子も男の子も特に用事が無い時だってクーちゃんの席の周りに集まっているわ。こんな風に誰かが側にいることが、クーちゃんの不幸を退けているみたいなの。

「おはよう。クーちゃん。今日は部活が休みなんだって？」

「そうなのよ。だから、優花に頼まれてちよつとだけね。そういえば、ミーちゃんの家に完成した絵を渡す準備があるから、今日はミーちゃんも呼ばないとね。」

「完成したのに展示場に持っていったから仕方がないんだけど、ツン先生の作品を見て驚くミーちゃんの顔が早く見たいわ。」

優花は本当にいつもクーちゃんにべったりって感じよね。朝教室にクーちゃんが着いてから体育館に向かう敦くとクーちゃんと竜くんを見送るまで四六時中一緒にいたがって、甘えん坊將軍よろしくクーちゃんに付きまとってるわ。」

「それにしても、最近ボクが教室に着くと同時に優花と明実が席に寄ってくるのが当然になってきたよね。明実なんて本当の席は教室の逆側でしょ？もうすぐチャイムがなっちゃうわよ？」

あ・・・私も優花のことをとやかく言えないんだったわね。確かにどうしてかクーちゃんには色々な人を呼び寄せるような雰囲気があるって、私も一緒にいないと他の人に取られちゃいそうで不安なんだもん。」

「グッドモーニング秋い！」

「おはあようござあいませす。」

英語であいさつをしてクーちゃんに飛びついて行ったのは和美ちゃん。相変わらず過剰なまでのスキンシップにクーちゃんは困っているみたいだけど、横にケイティを連れてきたので無下に断れないみたい。ちよつと抑揚がついちゃってるけど、きれいな日本語で挨拶をしたのはケイティよ。彼女はこの一月で留学を終えて帰っちゃうんだけど、欧米風のスキンシップに慣れているためか、和美ちゃんと一緒にあって抱きつくことが多いわ。こうなってしまうと、優花も同じ様に抱きついちゃうから、クーちゃんはタジタジなのよね。」

「明実・・・た、助けて・・・」

「はいはい。挨拶は終わったんでしょ？そんなにみんなで一気に抱きついたらいくらクーちゃんでも圧死しちゃうわよ？」

「そんなこと言って、またポイントを稼ごうとしてるんでしょ？この前いつも助けてくれるお礼に、って特別に中学校時代に作ってたのと同じアクセサリーを秋からもらってたの、知ってるのよ？」

「ええ！明実だけずるいい。ツン先生、私には？」

和美ちゃんは抜け目なく気づいていたらしいわ。みんなにばれないようにって思ってた学校には持ってきてないけど、お気にいりのネックレスで、休日には首から下げて買い物に出かけているの。

「しょうがないな。今度作り方を教えてあげるよ。」

クーちゃんは基本的に甘い方だと思うわ。優花がああして上目遣いをしてお願いをしたことを断っているところを見たことはあまりない。というよりも、優花が本当に望んでいることをくみ取って、ただプレゼントをするという形ではなく、一緒に作るうと言っている辺りは流石だと思うわ。

「やったあ。じゃあ、今日はミーちゃんの絵のために集まるんだから、今度教えてね。」

優花はまたクーちゃんが美術室に来てくれることを喜んでいるみたい。クーちゃんもそんな優花に笑顔だから、悪い気はしていないと思うわ。そんな話をしていたらチャイムがなっちゃったので、私は自分の席に戻る。授業中なんかはクーちゃんの席が一番後ろだし、見ることはできないけど、お昼は一緒に食べれるし、今日は美術室に来るって言うってたから、放課後も一緒にいられるわ。

「ヤバイ。今日の英語の訳をしてくるの忘れてた。お願いツン先生。ノート見せて。」

後ろの方で優花がまたクーちゃんにおねだりをしている。そういえば、こういう勉強に関してはクーちゃんが優花のお願いを聞いてる所って見たことないかも。今回もノートを見せる代わりに、ヒントを上げながら自分で解かせているみたい。まあ、これも優花のためを思ってたささてるみたいだから、周りから見てもほほえましいみたいだけどね。

お昼も一緒に過ごしたけど、やっぱりこうしてクーちゃんが美術室に来てくれるのは嬉しいの。私も随分美術関係に詳しくなつて優花とばかりしていたお話ができるようになったから、こうして絵を描いているクーちゃんを見るとほんとうにすごい上手なのが解るわ。

「すごい。どうしてこの部分がこんなに立体的になるの？」

「ああ、これはね・・・」

クーちゃんが美術室に来るところとして私や和美ちゃんのように絵を描きだして間もない人間に丁寧に教えてくれるわ。河合部長もすごく教え方が上手だけど、クーちゃんと描くときは自分でも信じられないくらい絵が上手になるし、何よりもすごく楽しいの。

「君がこうして来てくれるとみんなのレベルが上がってすごく助かるよ。今後もこうして来てくれると嬉しいよ。そうだ、いつそのこととバスケット部のマネージャーを週一くらいにして基本はこっちに来るようにしたらどうだい？」

「以前にもお断りしましたが、ボクはバスケット部でも必要としてくれる人がいるのに、あちらをないがしろにするつもりはありません。

今日は用事があったので来ましたが、基本はバスケット部のマネージャーをさせてもらいます。」

河合部長の勧誘はこの半年近く止むことが無い。むしろ最近では簡単な用事などを理由にして美術室にいる時間を増やそうと、以前よりも執着しているような気がするわ。クーちゃんもバスケット部を辞めるつもりはないみたいだけど、河合部長の熱心な勧誘に少しずつだけ美術室を訪れてくれる頻度が増えた気がするわ。

「どうしたの？今日の明実はなんだか変よ？いつもちよつとぼーっとしたところがあるけど、今日は何かを考えてるみたいにな、ずっと集中してないでしょ？」

色々考え事をしてたこと、クーちゃんにはお見通しだったみたい。私も直接クーちゃんの不安になるようなことは言えないから、言葉を濁すしかないんだけど、それでも最近のことについて考えていることは伝えなきゃいけないわ。

「ちょっとね。もうすぐ進学だし、クーちゃんとみんなと一緒にクラスになれるとも限らないし、センチメンタルになってるかもしれないわ。」

「確かに、進学したら文系クラスは二つに別れちゃうからね。特に今年はボクが文系に進むって公表したら、文系希望者が増えたみたいだから、一緒にクラスになれる確率さがつちやっただかもしれないね。」

「そういえば、ツン先生は文系で本当にいいの？竜くんはたしか理系に進学を決めてるんでしょ？」

「そのあたりに関しては色々考えておくよ。ボクと竜が一緒にクラスにいた方が安全ならそっちにするかもしれないしね。勉強よりもまずは安全な高校生活が優先だから、文系の方が優花たちと一緒にクラスになる可能性が高いでしょ？」

「そりゃ、私は理系なんてちょっと無理だとは思っけど、ツン先生と同じクラスになれるなら、頑張るよ？」

「コラコラ、文理選択は大学に関係するってことは、自分の将来に関係してくるんだから、友達と一緒に行くからなんて理由で決めたら一生後悔するぞ。」

「うーん。確かにそれはそうなんだけど・・・」
実のところ、優花以外はクーちゃんの本当の気持ちに気づいているの。優花のために文系を選択フリをしているってことにね。だって、クーちゃんはそういう子だもん。私は優花と一緒に文系を選択するつもりだけど、和美ちゃんはやっぱりクーちゃんを追いかけて理系を選択するみたい。うちのクラスではミーちゃんと森くと敦くんがクーちゃんと一緒に理系を選択するから、クーちゃんの周りに友達がいなくなるわけじゃないけど、私と優花が文系を選択してクラスが違うのはちょっと不安だわ。

「明実、そんな不安そうな顔しないで、ボクは大丈夫だからさ。さあ、絵も仕上がったしちようどミーちゃんも生徒会の仕事が終わったみたいよ。」

廊下を誰かが歩くような気配がしてクーちゃんが言ったように、ミーちゃんが現れる。

「あらみなさん？私の顔に何かついてまして？」

入口にみんなが注目していたので、ミーちゃんも驚いたみたいで、ちよつと赤面しながらも、中に入ってくる。

「何も無いよ。それより、早くこっちに来てよ。優花も大絶賛してくれたから、きつとミーちゃんも気にいってくれると思うんだ。」
優花がクーちゃんの絵を絶賛するのはいつものことだと思っただけだ、素人同然の私から見ても素敵な絵だと思っただけから、別にいいんだけどね。クーちゃんは美術室の奥に立てかけられている大きなキャンバスを持つてくる。

「アトリエで描いてくださったら良かったのに、結局最後の方は持つて帰ってしまいましたし、途中だつて私が部屋を訪れると二人して隠してしまつて、しつかりと見れたことなんて無くつてよ。」

今まで見せてもらえなかったことに対する不満を言いながらも、ミーちゃんの目は布がかかったキャンバスに釘付けになっているあたり、怒りよりも、期待の方に心が向いているのが解るわ。

「じゃじゃ〜ん！」

クーちゃんがかわいらしく布を取り去ると、ミーちゃんの目が点になつちやつたわ。ミーちゃんよりも先に見せてもらつていた私たちはそれほど驚かなかつたけど、それでも目が話せないような絵になっているの。

「す、すごいですわ。」

「どう？きにいつてもらえたかな？」

ミーちゃんは言葉が上手く出なかつたみたいで、先ほどの一言の後はずつと首を縦に振つて応えているの。確かにクーちゃんの絵は素敵なもの。これくらいのリアクションがあつて当然よね。

「北条くんにはこの絵の素晴らしさが解るみたいだね。蟹津くんが一番の特徴は、絵の題材たちが生き生きとしていることだろう。女性を描いても男性を描いてもその表情から心の奥底に隠された特徴

が浮かび上がっているような、そんな絵を描ける人物は中々いないさ。」

「中学の時の秋はどっちかというと男性目線の絵が多かったわよね？高校にはいつてというか、誰かさんと付き合いだしてから、女性からの目線にも磨きがかかったわよね？」

「ふむふむ、それは誰なの？ひよつとして？ひよつとすると？」

私と和美ちゃんがクーちゃんを冷やかすと、真赤になりながら反論しようともゴモゴと口を動かすが、上手く言葉がでてこないみたい。こうなった時のクーちゃんはみんなの格好的なわけで、悪戯心満載な私たちはしばらくクーちゃんをいじって過ごすの。

「そろそろ、帰ろうか？結構大きな絵だけど、どうやって持って帰るの？」

「問題ありませんわ。絵を持って帰ると言ったら迎えに車をだしてくださいさるそうですの。」

「そういえば、ミーちゃん家ってお嬢様だったんだっけ。」

「そういう言われ方は侵害ですわ。普段は皆様と同じように電車で通ってましてよ。」

ミーちゃんは電車の乗り方なんて知らないみたいだから、ちょっとみんなと同じことをしていることに優越感を感じているみたいだけど、本来なら乗り継ぎなんかをしないと通えない場所から、学校のひとつ前の駅まで車で送ってもらっていることを私たちはこの間しっただわ。どおしてもみんなと同じ方法で学校に通いたいというミーちゃんの我がままに両親がこの方法をとったみたいなの。

「あの車かな？ちょうど来たみたいだし、今日はこのくらいにして帰ることにしようか？」

「そうですね。」

河合部長の進言もあって私たちは正門に向かう。そこには意外な人物がいて、ミーちゃん以外のみんなが驚いてしまった。

「やあ！久しぶりだね。あれから何度も連絡しようと思ったんだけど、忙しくてね。」

「お久しぶりです。迎えの車って要さんのことだったんですね。」
「ああ、君に一目会いたくって、美香ちゃんが重い荷物を運ぶために学校に迎えを頼んだことを聞いて、その役目を代わってもらったんだよ。」

「そうでしたの。じゃあ、願いも叶ったみたいですし、行きますわよ?。」

「ミーちゃんが無情にも車に戻るように要さんに言っているけど、ここで引き下がるようならまずこの役目を買って出るなんて大胆な行動すらとらなかつたはずよね?」

「ちよつと待つてもらえるかな?良かつたら、連絡先を聞きたいんだけど、美香ちゃんに聞いても本人に直接聞きなさいって言われちゃってね。」

「うーん。ボクには彼氏がいるので、彼氏の許可なしに男の人に連絡先を教えることはできません。」

「クーちゃんはきつぱりと断った。竜くんの話題になるとあんなにしどろもどろになるのに、他の男の子の前では全然へっちゃらみたいで、クールなイメージがすごく良いわ。」

「僕はまたフラれてしまったみたいだね。でも、まだあきらめるつもりはないから、きつと連絡してね。」

「そう言つて、要さんは自分の名刺をクーちゃんに渡すと、車に絵を積み込むと颯爽と乗り込み、走り去ってしまった。」

「悪い人ではなさそうなんだけど・・・。」

「だったら、私が代わりに連絡しようか?お金持ちっぽいやから、ちよつと遊ぶくらいならしてあげようかな。」

「ダメ。文化祭の時みたいにボクの写真とかを売ってお金儲けするつもりでしょ?」

「えへへ。バレたかあ。」

「クーちゃん是要さんに興味は無いらしく、今日は竜くんと一緒に帰らずに和美ちゃんと一緒に帰るみたいで、私は電車通学だから、正門のすぐ先の角で別れたの。」

この時、竜くんがいないでも平気だと思っていたのは本当につかつ
だったわ。

チャプター76（後書き）

書き終つてから後悔。明実視点とか無理。絶対におかしい。ああ、なんでこんな視点で描いちゃったんでしょか。

今回のテーマは「秋の周りの様子を描き切る」というテーマのもと明実視点で、普段ではありえない状況や今後の展開を予見するような内容にしたつもりだったんですが、ひたすらに難しかったです。といいますのも、中学時代のキャラたちとの違いを演出しなければならぬという使命感があったからです。中学時代のキャラたちは麻美も鈴もすつごく書きやすかったのですが、明実ってどんなキャラだったけ？ちよつとオトボケで、勘違いが激しい系だったはずだけど、でもおつとりとした雰囲気言語尾に出したら司と被るし・・・うきやあああ！

って感じで悩んで結局このような形でまとめました。皆様にとっては読みにくい回になってしまったやもしれませんが、どうかご容赦いただきたいと思います。

今回は、きつと書きやすい視点でお送りしたいと思います。

それでは、ここまでお付き合いくださいまして本当にありがとうございます。ごさいます。

チャプター77

ピンチ！記憶喪失！チャンス？

秋は学校の帰り道、和美と二人きりで自宅へと向かっている。いつも竜と二人で帰るわけでもなく、こうして和美と一緒に帰ることも最近では増えてきていた。ただし、和美と竜と秋の三人で帰ることが多く、和美と二人きりというのは滅多なことがない限り、あまりしない。

「今日は秋と二人きりなんて、このまま夕日でも見て黄昏たい気分だわ。」

「もう、いつつもそうやって危ない世界に誘うんだから。」

「うふふ。でも、本当に秋と二人だったら、どこにいても幸せなですよ。それだけ、私は秋のことが好きなんだから。」

和美も秋がどんなタイプの人間が好きなのかを知っているので、自分の気持ちを隠したりしない。秋自身が少し自分の気持ちに正直じゃないところがあるので、周りの人間はどちらかというところと自分の欲望に正直な者が多い。その筆頭は竜なのだが、竜の場合は誰かに与えられたものでは満足しない人間なので、秋との相性は抜群なのかもしれない。

「それにしても、今日は普段と帰る時間が違うから、いろんな人とすれ違うね。」

「うん。あんまりボクとしては嬉しくないんだけどね。誰かに見られていたような気がして落ち着かないんだ。」

緑の髪をポニーテールにし、それでいて優しい眼差しが擦れて染められているわけではないことを物語っている。そんな人物はこの近辺に

は秋以外にはおらず、あと十分も自転車を漕げば海良町に入るので、見慣れた人たちばかりだが、今は隣町なので、奇異の目と感嘆の目が半々と言ったところ。

「秋はそういうのに敏感よね。どうしても秋と一緒にいると、そういった目線は仕方がないもの。私の方が先になれちゃったわ。」

「どういうこと？ やっぱりこの髪目立つかな？」

確かに髪の毛も目立つのだが、それ以上に目立っているのが、存在そのものだろう。たとえこれで髪の毛が黒という周りと同じ色であっても、今と同じように周りからの目線は減ってはいないだろう。今もすれ違った車に乗っていた若い男性が目を奪われていた。秋の周りで不幸が起こる原因の一つがこう言った不注意であることは間違いないのだが、今の若者はすれ違っただけなので、すぐに前を見て事なきを得た。

「それだけじゃなくって、やっぱり秋ですごく可愛いじゃない？ だから、周りの男も女も放っては置かないのよ。だから、注目されるのは仕方ないわ。」

「麻美や鈴にもよくそういうこと言われるけど、なんだか実感がわかないのよね。だって、麻美や鈴の方がボクよりもナンパされる確率が高いんだよ？ 和美だってボクよりもいっぱいナンパされてるでしょ？」

「だ、か、ら。それは全部本当の目的は秋なんだってば。私たちが一人でいたってそれほど男たちは寄ってこないわよ。秋と一緒にいると、ナンパしてくるんだから、秋が目当てに決まってるじゃないの。」

麻美や鈴はもちろん。和美など高校で一緒にいる者たちも秋の周りにいる女性たちは一定以上可愛いのは事実だ。そしてそんなメンバ―に囲まれているからか、秋には自分よりも周りの子たちの方がモテると思っている。竜や司や浩太と話をしている時でさえ、自分がモテていることにあまり実感がわいていない状況なのだ。

そんな秋に対して和美は今更ここで説明しても理解してもらえない

ことが解りきつているので、諦め半分といった様子になり、そこからたわいもない会話が続く。もう少しで海良町といったところで、事件は起こった。時間的に小学生などの小さな子どもが登下校する時間帯だったのが、秋の不幸を呼び寄せてしまったらしい。

「あ、危ない！」

公園で遊んでいた小学生の子どもがボールを追いかけて車道に飛び出してしまった。そこからはまるで映画のワンシーンを見ているようだ。車はとある人物の顔を見ていたために、子どもに気づくのが遅れる。自転車を飛び降りた秋は、持ち前の運動能力を発揮して、子どものもとに駆け寄ると、公園の周りに植えられている植木の方に向かって投げ飛ばした。多少の怪我はするかもしれないが、これで子どもは安全だ。

「キキ〜！！」

ブレーキの音が鳴り響くが、残念なことに完全に止まることはない。そのあと大きな音をたて、秋の体は宙に舞うことになる。

『流石に、これは危険なんじゃないの？』

『大丈夫ですよ。和美さんも随分場慣れしてきましたから、冷静に対処して、すぐに救急車が駆けつけます。』

『お久しぶりです。未緒さん。』

『はい。ご無沙汰しております。』

『今回の臨死体験は生き返ることが確定しているから、確かにそこまで不安は無いんだけど、それでもあの怪我はちょっとやばいと思うよ？』

『大丈夫です。あれだけの切羽詰まったタイミングで受け身がとれるようになってますので、見た目よりも怪我は大したことないんです。』

『全然大丈夫じゃないよね？柔道をもしやっつていなかったらって考えたら、物すごい危険だったんじゃないかな？』

「ブレーキを踏んでいたと言っても、あれほどの衝撃ですからね。しばらくの入院は免れません。」

『そっか・・・そうだよね。』

秋も流石に臨死体験には慣れてきたわけで、そのあたりについては諦めが入っているのだが、それでもこうして何度も冥界のお世話になるのは辛いらしい。落ち込んでいる秋に何か話題はないかと奮闘する未緒だったが、秋をもっと苦しめてしまうような話題しか持ち合わせておらず、口から出てしまう。

『そ、そういえば、今回の事故でちよつとした変化があります。簡単に説明するなら、記憶喪失みたいなものです。』

『えー？き、記憶喪失？』

『は、はい。』

秋の驚き方に話題に失敗したことに気づいたが、ここでやめてしまつてはいけないと未緒は続きを説明する。

『でも、安心してください。完全に記憶がなくなるというわけではありませんから。どちらかというところ、記憶の復元にも一躍かいますから。』

『記憶の復元って？ま、まさか・・・』

『はい。和也さんの時の記憶が顕著にあらわれ、次の臨死体験まで、秋さんとしての記憶が封印されることになりました。』

『ちよ、ちよつと待ってよ。それって、体は女の子だけど、心は男の子って状態になるんじゃないの？』

『そうですね。でも、大丈夫ですよ。元は同じ人ですから。』

『全然大丈夫じゃないと思うんだけど・・・』

未緒の説明はかなり問題のあるものだったが、病院に向かう救急車の中で意識を取り戻すと説明されて、秋は不安を抱えたまま冥界での記憶を処理してもらって現世へと帰っていく。今こんなにも明瞭な記憶が、いきなり変化してしまう辺りに不安を感じながらも、自

分の力ではどうすることもできずに、未緒の促すままに帰っていく秋だった。

『ぼんやりと、何かが見えだす。俺は何をしてたんだっけ？ そうだ、子どもをかばって車道に飛び出したんだ。あの子怪我してないかな？ 大丈夫だったかな？』

意識がもろろつとする中、和也は自分の心配よりも、他人の心配をしていた。自分のこそ車にひかれて大変な怪我を負っているにもかかわらず、他人のことを考えている辺りに、こういった経験に対する慣れが感じられる。

酷い事故だったにもかかわらず、秋は一命を取り留めたばかりではなく、すでに意識があると聞いて、安心して病院に向かう好美と武満。利也は仕事が忙しいらしく、少し遅れるらしい。

「調子はどうなの？」

「母さん。大丈夫だよ。事故に会ったっていうのに、むしろ体が軽いくらいだよ。」

「そうか。本当に心配ばかりかけて。和美ちゃんから連絡が来た時には本当に心配したんだぞ。お父さんも仕事が終わったら顔をだししてくれるみたいだから、それまでゆっくりしているといいよ。それとも、竜たちが来てくれた方がうれしいか？」

「竜と司も来てくれるのか？ でもあいつらも忙しいだろうし、別にいいよ。大した怪我でもなさそうだしね。」

「車にひかれた人間のセリフじゃないな。もっと自分を大事にしるよ。」

「解ったよ、兄さん。」

秋のそのセリフで、好美も武満も違和感を感じる。秋は普段武満のことを武兄ちゃんと呼んでいなかったか？ そういえば、好美を呼ぶときも普段のお母さんではなく、母さんと呼んだ。そして、何よりも、小学生の時以来で忘れていたが、男言葉に戻っている。

「秋？ どうしたんだ？ なんだか・・・」

「ん？ 今の季節は冬だろ？」

違和感の正体はつきりとした。好美と武満は、秋に少し席をはずすと言うと、医者のところへと急いだ。医者の説明によると、外傷は大したことはないのだが、頭を強く打った影響で一時的な記憶障害が起こっているようだ。生活にはなんら支障はでないらしいが、二人が来るまで何度もCTなどを撮って脳などの神経系の精密検査を実施していたらしい。

「先生、秋は大丈夫なんでしょうか？」

「あれだけの事故ですから。私どもとしても何とも言えません。今は安定していますが、神経は一度傷がついたら治るのが難しいので、ひよつとしたら後遺症が残るかもしれません。今は大丈夫でも、後々問題が起こる可能性もありますので、しばらく入院することを勧めます。」

「はい。お願いします。」

一生の問題であることもあり、秋には無断で入院を決める。保険がきくので、金銭的にそれほど負担がかかるわけでもない。もちろんタダで入院できるわけではないので、辛いのはそうなのだが、秋が高校も特待生で入ってくれたので、生活に困るほどではない。

「お母様。本当に申し訳ありません。」

秋の病室に戻ろうとしたら、目を真つ赤に腫らせて謝ってくる女の子がいた。先ほど蟹津家に電話をくれた和美だった。好美も武満も和美に対して、救急車を呼んだり連絡をくれたりと、感謝の気持ちこそあれ、攻めるつもりなど毛頭なかったため、笑顔で迎えると、その気持ちのままを伝えた。

「そんなことはありません。私が一緒に帰ろうって誘ったばかりに、秋は竜くんの部活が終わるまで、残ろうとしてたんです。私が無理やりさそつたばかりに・・・」

もう一度泣き崩れる和美に、自分たちでは何もしてあげられないことを理解した二人は、和美を連れて秋のところに行くのが良いのか、それとも事故の影響で記憶喪失になっている秋に合わせるのはまずいのか判断に困る。

「母さん。ここで秘密にしても、いずれ解つてしまうことだと思つ。それに、どれだけ記憶を失つていても秋は秋だよ。きつと元気な様子を見たら、和美ちゃんも泣きやんでくれるさ。」

「そうね。」

二人は結局和美を秋の寝ている病室へと招き入れることにした。一人で入ることにためらっていた和美は、二人に促されるまま、病室へと入つていく。

「和美。心配かけてごめんね。和美が助けてくれたんだろ？ありがとう。」

「ううん。本当にごめんね。」

「なんで謝るんだよ。俺は和美に助けられたんだぞ？看護婦さんの話では、しばらく入院することになったみたいだけど、体はこんなに元気だから、すぐに退院するから安心してくれよ。」

「ええ、秋だつたら平気よね。」

「秋？だから、今は冬だつて、そういえばさつき母さんたちもそんなこと言つてたよな？ひよつとして、気づいてないだけで、一年近く寝てたのか？そりゃ心配されるわな。」

「え？どういうこと？」

「いや、自分では事故のあとすぐに起きたつもりだつたけど、実はかなり長い間寝てたんじゃないか？思つてな。でも、それだと救急車に乗つてた意味が解らないか。」

「一年も寝たきりなんてなつてないわよ。秋はちよつと頭を強く打つたみたいで、記憶がおかしいみたいなの。秋つてさつきから言つてるのは自分の名前よ。」

「え？自分の名前？」

「そうだろ。お前の名前は蟹津秋。他にも記憶がおかしくなつてるところがあるかもしれないが、今は無理して思い出さなくて良いから、とにかく安静にしてる。」

「何言つてるんだ？俺の名前は和也だろ？記憶喪失？うそだろ？」

「もう、本当に混乱しちゃつてるのね。和也だなんて、男の子に着

秋の言葉を遮って和美は言葉を続ける。

「はいつて言ったわね。彼氏がいても、彼女がいなかったら付き合い
つてくれるのね？」

「え？ちよつと待ってよ。前に付き会った時もそうだったが、強引
すぎるって、ちよつとは考えさせてくれよ。」

「ダメ、真実を知っちゃったら、絶対にノーに決まってるもの。今
つきあうって言ったこと絶対に守ってね。」

「まてまて、俺は付き合うなんて一言も・・・」

「じゃあ、お母様を呼ぶから、今日は帰るわね。明日もお見舞いに
来るから、私は秋の彼女よ。良いわね。」

「ちよま・・・」

和美は言いたいことを言って病室を出てしまった。その顔には廊下
で泣いていた少女と同一人物とは思えないほどの満面の笑みをたた
えて。

「どうなってるんだ？」

「秋？和美ちゃんとの話をしたの？」

和美と入れ替わりで入ってきた二人は余りにも嬉しそうな和美の様
子に良く分からない顔をしながら秋にことの真相を訪ねる。

「なんか、俺とやり直したいって言った。」

「あら。それでゆるしたの？」

「かなり一方的にだったけど。まあ、明日も来るって言ってたか
ら、大丈夫だろ。」

和美について良く知らない好美は秋のその言葉で仲直りをしたと勘
違いをして、事情を知っている武満は、ヤバイと感じた。

「まあ、竜がもうすぐ来るみたいだから、その時事情を説明したら
いいよ。今は記憶がいまいだからよく解ってないだけだろ。」

「確かにそうかも。てか、なんで俺女なんだ？」

「はあ・・・やっと女の子らしくなってきたと思ったのに、まさか
男の子にもどつちやうなんて、本当に竜くんが来た時大丈夫かしら
？」

体が元気なのを理解した好美は、あながち間違っていない心配を始めた。和美も、竜が来る前に先ほどの会話をしておかなければならぬことを理解していて、告白というよりも強制的な承諾を得たのだから、竜たちが来た時には大問題になっていることだろう。

入院が決まり、色々と準備があるので、好美は武満を置いて一端家に帰ることになった。武満はつい最近卒業論文を出し終えたので、あまり忙しくないのです、ここにどまって様子を見ていることにしたらしい。好美が帰ってから、10分ほどたち、竜と敦が現れた。敦から優花たちには連絡が行っており、竜から司たちにも連絡がしてあるので、明日にでもみんなでお見舞いに来てくれるという。

「しかし、秋が男っぽいのは久しぶりやな。」

「なんだよ。竜まで俺がまるで女の子してたみたい言い方するなよ。」

「記憶が無い間に秋は女の子しとったんやで？体は完全女の子やからな。」

「うっせ。それでも俺は男だって言ってるんだろ。この調子じゃ司が来ても同じことがおこりそうだな。」

「そりゃそうやる。小学校の時をしつとる奴らはみんな秋の男勝りを覚えとるからな。にしても、女だった記憶が全くなくなるなんて、どんな事故したねん。」

「だから、子どもを助けてだなあ。」

「なあ、竜。俺にはこんなつーちゃんは違和感だらけなんだが・・・」

「せやろ？俺も男勝りの秋なんて久しぶりやからな。でも、昔はこんなんやっただんやで、その影響か未だに女の子から告白されるからな。」

「ああ、そついや、さつきも告白されたぞ。和美がなんかやり直したいって言いだして、結局無理やり彼女になって言った。」

秋は先ほどあった事実をサラリと言ったつもりなのだが、竜と敦からすればそれは大問題だった。特に竜の顔が真っ青になったことに

チャプター78

和也の暴走

秋の記憶が元に戻ることはなく、脳に異常が見られないため、退院できることになった。記憶以外に問題がないので、学校などにも通うことができるらしい。秋は喜んでいたが、竜をはじめとする心友たちはかなり心配している。

「あきい。おはよう。」

「コラコラ。鈴にこの前叱られたんやろ？少しは自重しろよな。」

「そんなこと関係ないわ。今は秋は心は男の子なんだもの。私の方が付き合う権利があると思うの。」

「っても記憶障害が出るからやろ？第一、秋は告白に対してOK出してないっていつてるやん。」

今日は久しぶりに秋が学校に来ると言うことで、竜が迎えに来たのだが、その場にちゃっかりといた和美と三人で登校することになったのだ。

「和美と竜ってそんなに仲よかつたっけ？俺の記憶とは本当に違う世界にいるみたいだ。」

「そうそう。そのことなんやけど、やっぱり男として生きてきた記憶だけがのこってるんやんな？」

「そうだけど？てか、竜の高校時代ってこんなだったっけ？」

「前にもいうたやん。おそらく前世の記憶が復活しちゃうとるんやわ。ほんで、女の子として生まれた記憶は封印されとるんやないかな。」

「前世の意味解つとるか？なんで同じ時代に同じ行動をしてる前世

があるんだよ。」

「確かにそうやねんけど、それでも今の秋は和也って人格が出て来とるんやろ？前にアルバム見せたけど、秋って人格でずっとこれまで過ごしてくれたんやで？」

「そうだったな。まったく、それでもまさか竜と付き合うことになっちまってるなんてな。」

「おま、どう見ても女やねんから別に問題あらへんやろ。」

「でもさ。俺には男の記憶があるんだぜ？男が男と付き合うなんて。」

「そうよね。だから、私と付き合えば万事解決よ。」

「いや、そうなら見た目的には女の子同士やろ？結局問題あるんやから、どうしようもないやん。」

「まあ、しばらくは記憶失ったってことで通すからどっちとの関係も明確にしないから問題ないだろ。和美は同じクラスなんだよな？フォロー頼むぜ。」

「うん。秋のお願いだもん。手取り足とりフォローしちゃうわ。」
不安がぬぐい切れない竜だったが、以外にも秋が嬉しそうに高校に向かっていることにごまかされる。ただし、今までとは少し違ってしまうことは確かだろう。

バスケット部の朝練はマネージャーの仕事をする必要もなく、むしろ退院をみんなで祝ってくれたことに安心するが、教室に着くといきなり事件が発生した。

「お、ほっほっほ。蟹津さん。記憶喪失におなりになったんですって？こんなことでは、三学期の期末試験が思いやられますわ。ライバルとしては本当に残念でしてよ。」

「げ、北条・・・ひょっとして、俺ってこいつとも仲が良かったりするの？」

「ええ、ミーちゃんなんて呼んで、結構仲が良い方だと思っわ。特に、今年の冬はパーティーと一緒にダンスまで踊って、ミーちゃんのために一枚絵を描いてあげてたわよ。」

「そっか、悪いな。俺は今記憶がないから、前みたいに接してやることはできねえかもしれねえけど、仲良くしてくれよ。」

そう言つて、秋が美香の頭をポンポンとなでる。その何気ない行動で美香の顔はみるみるうちに真赤になり、先ほどまでの強気の姿勢はどこへやらといった様子になつてしまった。

「まずかつたか？」

「ある意味ね。女の子なんだから、あそこは頭をなでるんじゃないよ。ギョツと抱きしめないと、ほら、私に一回してみて。」

「ごうか？」

「幸せえ〜。」

パコン！

秋に大ウソを教えて自分の欲求を満たしていた和美の頭を優花がはたく。

「もう、あなたは嘘ばかり教えて、秋が困つてるじゃないの。秋も秋よ。いつもだつたらその程度の嘘すぐに気づくでしょ？」

「いやあ。気づいてはいたんだけどさ。ちょっと冗談に乗つてみたくなつてね。優花、おはよう。お見舞いサンキュな。」

「ツン先生が入院したんだもん。一番に駆け付けたかつたわ。病院でも思つたけど、意外と元気みたいね。安心したわ。」

「ああ、記憶喪失つていても、大したことじゃないみたいだからな。周りからみたらへんな状況みたいだが、俺からしたら、そんなに違和感無かつたりするんだよな。」

「記憶喪失の人つて情緒不安定になつたり、結構大変つて聞いてたけど、案外そうでもないのね。」

「秋は特別よ。だって、記憶に関しても昔から変なところがあったんだから、今更男の子の記憶しか無くなつたつて全然不思議じゃないでしょ？」

「いやいや、自分に都合が良いからつて、それはないでしょ。男の子の中では結構違和感があるつて噂だよ。」

「お？敦。もう朝練は終わったのか？」

「う、うん。」

「今日は敦と二人で秋の様子を見に行きたいって言ったなら、早く抜けさせてくれたんや。しかし、やっぱり朝から問題起こりまくりやな。」

「ん？問題って？竜も敦も心配しすぎだろ。ちょっと雰囲気が変わったくらいで、結局俺は俺やからさ。」

「そりゃそうやねんけど、問題は、そう思ってくれへん女の子たちが大勢おるってことやないんか？男どもに関してはもう今更俺にケンカ売ってくるような奴らはおらへんやろうけどさ。」

「あ、またケンカしたのか？そついやケンカ早かったもんな。良く一緒にケンカしたけど、あんまり無理するなよ。」

「ああ。最近俺の強さ知った奴らはケンカしてこんくなったから安心しとき。」

「ええ？竜くんってケンカなんてするんだね。」

「ん？しよつちゆうやで？主に恋愛がらみのケンカばっかやけどな。」

「ふ〜ん。昔つから変わらないね。あんまり女の子泣かすんじゃないぞ。」

「それはあらへんで安心しとき。」

「そつかあ？白状してみる。今まで何人の女の子を泣かせてきたんだ？」

そつ言つて、秋は竜の頭を抱えると、ヘッドロックをかける。今までの秋だったらそんな行動をとらないことを理解していた心友たちは唖然とし、また、竜が本当のことを言っていることを理解している分、不憫に感じた。

「ほんまにあらへんって、俺はお前以外の女と付き合っへんのやから泣かせようがあらへんやろ。」

「へ？あ、そつか。そついやそつだったな。わりいわりい。」

少しも悪そうではない態度だが、その様子はむしろ仲の良さが現れており、周りの人間に二人の関係を知らしめる効果を発揮した。

「おま・・・こんな公衆の面前でこういうことするなよな。」

「硬いこと言うなって、司と三人で良くじゃれあつてたじゃねえか。つてそういや司はY高だったんだっけ。あの司がねえ。」

和也の記憶がある秋にとつて、司は成績の良い人物ではなかった。確かに頭の回転は速かったのだが、使い方を間違えているところがあり、結果としてT高でも優花と同じくらいの成績だったように記憶している。そんな司がY高というT高よりも高いレベルの学校に行つてしかもその中でも優秀な成績にいたることが信じられずにいる。「秋の記憶が混乱しとるんはしゃあないけど、もうちよつと今の生活に慣れるよ。」

「ああ、あの話な。解つたつて、今日の夕方はちゃんとバスケット部の方にも顔だすから、安心しとき。」

「ほんまやろうな。心配やわ。」

竜は納得していない様子だったが、チャイムが鳴り、自分の教室に戻る必要が出てきたので、仕方なく引き下がる。周りを見渡してフオローを頼めそうなのが敦一人しかいなかったため、敦に秋のことをお願いすると、自分の教室へと帰つて行つた。

「全く、いつからあんなに心配症になつたん？竜はもつとどっしりとした性格やつたとおもつただけだな。」

「仕方が無いわよ。本当に事故の前と今とではすごい違いだもの。」

まあ、私たちとしては、小学校までのクーちゃんとお会いしてみたいで、新鮮で良いけどね。」

「明実の言う通りかもしれないわね。ツン先生が男勝りだったつて話だけ聞いてたけど、ここまで性格が入れ替わっちゃうと、本当に面白いわ。」

「お前らな・・・まあええか。そのうち落ち着いてきたら、俺も今の状況がわかるだろうしな。」

「そうね。でも、このままでも良いのよ。」

「それはあんただけでしょ。確かにツン先生がこのままだったら、あんたはツン先生の彼女つて言い張れるから良いかもしれないけど、

ずっとこのままじゃ大変でしょ。」
そうなのだ、今まで秋は病室と家でしか生活していなかったのも、女の子の体で男の子の心を持っていたとしても何ら問題なかったが、学校という新しい場所に来たため、多くの問題が待っていた。

「ちよま、マジダメやって、まって、お願いやから。」

「ダメよ。秋は女の子なんだから、当然こつちに来なきゃ逆に変わしょ。」

「せやけど、俺の心は今男なんやから、な？頼む。待ってくれ。」
何が起きているかというところ、午前最後の授業が体育なのだが、秋は体操着に着替えるために更衣室へと優花・和美・明実に連れ出されている最中なのだ。むしろこの三人がいなければ、男子たちと一緒に教室で着替えようとしており、当然男子たちの視線が秋に注がれることになり、大問題に発展しかけていたのだ。

「解った。私たちが更衣室の前で待機してあげてるから、秋は一人で着替えなさい。それなら問題ないでしょ？」

「確かに問題ないかもしれへんけど、それじゃあ迷惑じゃないか？」
「教室のど真ん中で着替えられるよりも平気よ。クーちゃんも女の子なの。それだけは自覚して頂戴。」

「わ、わかった。」

和也はしぶしぶながらも女子更衣室に入ると、そこで着替えを始める。早くしなければ優花たちの着替えの時間が無くなってしまふので、結構急いで外に出たのだが、なぜかそこには体操着姿の面々がいた。

「ちよま。なんで着替えちゃってるんだよ。」

「そんなに私の着替えシーンが見たかった？今からやり直そうか？」

「いや、そんな趣味はないから、てか俺には人目のつかない場所ですって言っておいて、それはないんじゃないか？」

「私たちは慣れてるから、上手に見せないように着替えるくらい簡

単よ。それより、授業が始まっちゃうわよ。」

納得がいかない様子の秋だったが、女の子たちに囲まれて自分の主張を貫くこともできずに、流されてしまうのだった。体育の時間は男の子としては張り切ってしまいたいところだったが、秋の身体能力は異常なので、自重するようにと周りからプレッシャーをかけられてそれどころではなかった。そこそこに楽しんで、そこそこに参加するという形を取りつつ、もちろん美香にだけは負けない程度にやりきったので、いつもの秋となんら変わりはない。

「う、運動では負けましたが、勉強の方では負けませんことよ。何せ記憶を失ってらっしゃるのですもの。私が負けるはずがありませんわ。」

「いや、俺別にそこらへんの記憶は抜けてないから、それほど問題ないとおもっぞ?」

「へ?」

「まあ高校生くらいの問題なら、軽く満点はとれるはずだからな。」

「そ、そんなああ。」

結局美香に対して悲しい事実を伝えることとなったが、今までの秋と全てが同じようにはいかないのがお昼に露見した。

「じゃあ、今日は学食なのね?」

「ああ、俺も料理の仕方は覚えてないらしい。昔の俺は料理なんて自炊するくらいしかしたことが無いからな。お弁当を作ったことはないんだよ。」

「久しぶりに秋と学食ね。良いんじゃない?記憶が戻るまでだったら問題ないでしょ。優花たちも一緒に行けば、不幸だって滅多なことでは起こらないんだし、行きましようよ。」

「いや、でも優花たちはお弁当持ってきてるんだろ?俺に突き合わせるのも悪いじゃん。」

「お弁当を学食で食べても問題ないわよ。ここの学食は席の数だけなら多いしね。」

T高は珍しく学食が存在している。田舎の学校ならではの広い敷地

面積を生かしたただけなのだろうが、高校に学食まで存在するのは珍しい。他の学校のように購買に人があふれるなどといったことはここでは無いのだ。実際学食が目当てでこの学校を受けるといっても少なくはないので、T高の名物と言ってもいいだろう。

隣のクラスに行つて竜を誘つと、秋たちは学食に入つて行つた。中はかなりの人が入つており、すこし寄り道をした秋たちはかなり出遅れた方だ。しかし、秋は当然のようにして中にはいると、窓際の席に進んでいき、そこにいた女の子たちに声をかける。

「ねね。悪いんだけど、七人分だけあけてくれないかな？ここに座りたいんだ。」

「え？か、蟹津さん？どうぞどうぞ。座ってください。」
秋の手なれた様子に啞然とする一同だったが、竜はあまり驚かなかつた。

「どういうこと？なんで普通に座れちゃうの？」

「そりゃ、秋だからやる。ってか、秋がもし男の子で同じ性格だった時のことを考えてみろや。思いを寄せる女の子に気づかへんと、いつもお世話になつとるなんてことありそうやと思わへんか？たぶん、男の時にああして毎回学食の隅を譲ってもらつてたんやろうな。」

「うわあ。天然のプレイボーイだったわけだ。それで、昔そうしてたのと同じようにしてちゃっかり席を譲ってもらつたってわけか？」

「おそろくな。男の時にどんなメンバーで来てたのかは解らないけど、俺と司の分も合わせて三つくらいやつたらいつもあけてくれつつたんやないかな。」

そう言つて竜は秋の隣へと座る。秋と竜が座つてしまったのに別の場所に行く理由もなく、みんなで窓際の席に行くと、それぞれ思いの場所へと座る。隣を見事に奪われてしまった和美は秋の向い側に、その隣に明実・優花・敦、反対側は竜の隣に直弘といった風に席についていく。

「じゃあ、俺と竜と直弘は注文に行つてくるよ。」

そう言つて秋たちは立ちあがつてしまふ。直弘も彼女ゾツコンラブなのを知らない人から見たいら、見た目的にはかなり良い部類にはいるので、イケメンが集まり、さらに優花たちも毛色は違えど美女と呼んでも遜色ないメンバーが集まつており、その一角はどうしても学生たちの視線を集めてしまつていた。秋たちがいない間微妙に気まずい雰囲気のまま、その視線に耐えていたが、秋たちが帰つてくると、余計に視線が増え、いたたまれないような空気を発する。

「これは、学食に来るのはあんまり良くないわね。」

「そうだな。ここの学食つていつもこんなだよな。もうちよつと落ち着いて食いたいよな。」

待たされた四人から一番の原因はあんたでしょといった視線をもらうも、秋はあまり気にしていない様子だ。高校時代の和也の記憶でいたならばこれほどの視線に耐えることは難しかったかもしれないが、和也はもう大人に近い年齢になつた時に転生している。それだけ経験を積み、年月を重ねることによつて良く言えば慣れてしまい、悪く言えば凶太くなつてしまつているのだ。

「なんか、秋のこと心配してたけど、これなら大丈夫そうね。少なくとも何年か後にはこれくらい凶太くなつてることでしょ？」

「そうか？ やつぱり男の子と女の子ではちやうと思つて？ 確か和也は大学までいつてたんやんな？」

「そのつもりだつたんだけど、違つんだろ？ 俺にもそのあたりはよくわからんからな。」

「まあ、記憶が無くなる前の秋と考へてた推論がかなり正しかつたことこの証明になつたかもしれないな。」

「ん？ どんな推論をたてたん？」

「教えたらんわ。教へんでも、自分で思いだしたらええやないか。」
「生意気なあ。こいつう！」

秋は隣でカレーを食べている竜の首をつかむと、後ろからがつちりとホールドをかけた。大きな胸が邪魔をして上手く出来なかつたみたいだが、その分竜には違つて意味でのダメージを与えていた。

「だあ。秋は今女の体しとるんやって、何回言わすねん。ちょっとは自重しろよ。」

「わりいわりい。しっかし、あんまり変わらへんと思っても、違うところがあるんだな。」

「当然やる。しばらく記憶は戻らへんみたいやし、その体になれるんやな。」

「やっぱり、そうなのかな？私・・・戻らないのかな・・・」

そう言つて秋がうつむいてしまったので、周りは慌てだす。どうにかしてフオローを入れようと必死になるが、顔をあげてくれない。そんな時、隣に座っていた竜が、笑いだす。

「周りのやつはだませても、俺にはきかへんよ。全く、からかうにしても場所を考えろよな。」

「あはは。バレタか。中学くらいまでは竜もだませたんだけどな。まあ、司はこれでだませたことほとんどなかつたけどな。」

「そうやな。あいつはもつと狡猾な手でくるからな。」

「はははは。」

二人して笑いだしたことに、周りはまた驚かされる。このところ心臓に悪い状況が続き、普段おつとりとしているものの、逆にこういつたことに耐性のない明実などはぐつたりとしまっている。

「ツン先生が男の子っぽくなってちよつと心配してたけど、竜くんとの関係は問題なさそうね。むしろ、今の方が自然に見えるわ。」

「ん？竜との関係ってこんなもんやろ？一緒に馬鹿なこととして、そんでも許しあえる。俺らは心友だからな。」

「あはは。そういうことか。秋は男でも女でも結局かわらへんのかな。」

そう言つて笑いあう二人に、なんだかほつとしてしまう面々だった。直弘などは竜から彼女に関する愚痴を色々と聞いていたために、こうして自然に笑いあっている姿を見て、自分も彼女と会いたい気持ちになつており、他のメンバーは今まで女の子と男の子という立場のせいでぎくしゃくしていた部分が完全に取り払われていることに

なんだか暖かい気持ちになる。

「ねえ、秋い。あ〜ん。」

パク！

つと、思ったら、一人だけその様子に危機感を感じている人物がいた。和美は自分のお弁当の中から、唐揚げを一つ持つと、秋の前に出した。普段の秋なら絶対に恥ずかしくてしないだろうが、ひよつとしたら今なら食べるかもという賭けだったのだが、見事に成功した。

「んま。サンキュ。」

秋は当然のようにそれを食べ、そして竜との会話に戻る。和美のたくらみは一応成功したのだが、成功した後の報酬が足りなかった。

「ねえ、男の子クーちゃんってこんな軽い性格だったのかな？」

「たぶん違うと思うわよ。秋と違っていろんな女の子と付き合ってきたみたいだから、これも慣れちゃってるんだと思う。」

「そつか。でもさっきの授業の時、更衣室につれて行った時は恥ずかしかがってたわよね？」

「それもそうね。ということは、大学時代に付き合っていた恵美さんって人がどんな人が調査しないとイケないわね。きっとそこがポイントよ。」

「そんなのどうやって調べるのよ。」

「う〜ん。本当は頼みたくないけど、森くんにお願いしてみようか？」

「そうね。それが一番早そうね。」

秋の目の前で和美と明実が不穏な空気を出しているが、秋も竜も互いの話で一杯だ。秋は実は耳の端で拾ってあったのだが、竜はそれどころではないようだ。秋は男の子の感覚でスキンシップをするのが、体が女の子なので、竜からしたらタジタジなのである。しかし、記憶の食い違っている部分と同じ部分をきちんと把握しながら会話をしているあたりは流石だろう。

チャプター78（後書き）

本当はちゃんとしたあとがきがあったのですが活動報告でも書いた通り現在ネット環境に不自由しておりますので読者の皆様に日頃のお礼とお詫びを書かせていただきます。

いつも読んでくださっております。読者の皆様に本当に感謝しております。

しかし、AKIは社会人になり、自分だけのインターネットのできる環境が整っておらず、更新を控えさせていただいております。誠に申し訳ありません。

しかし、更新をあきらめたわけではありませんので、きっと完結までがんばります。

筆末ではありますが、ここまでお付き合い下さいまして本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443h/>

再転の姫君

2011年6月13日14時32分発行